

あらおいおぎわらの
市原市新生荻原野遺跡

1 9 9 8

株式会社 東 京 ド ー ム
財団法人 市原市文化財センター

序 文

房総半島の地は、気候風土に恵まれ、太古の昔より人々の生活拠点として活発に利用されてきました。その結果、数多くの遺跡が存在しており、半島の西中央部に位置する市原市も例外ではなく、首都圏に有りながらも、自然が豊かで、開発されない遺跡が数多く残っています。

世の中は、心の豊かさと余暇を求める時代となり、社会教育、生涯学習充実に目が向けられています。このような時代に、文化財の担う役割は非常に大きいと言えます。また、埋蔵文化財の調査研究は、太古のロマンを求めるだけでなく、過去を振り返ることにより、現在に生きる我々を知り、更に希望ある未来への礎になるはずです。人々の生活に有効な開発も場合によっては遺跡が消滅することになります。このような場合の措置として、緊急な発掘調査を実施して遺跡の詳細な記録を残し、無くなってしまう遺跡を歴史資料として後世に残す手段をとる必要があります。

今回の調査も、レクリエーション施設建設に伴う事前の緊急調査です。調査の結果、旧石器時代から近世に至る多種多様な遺構や遺物が検出されました。特に、縄文時代の住居跡などと奈良平安時代の墳墓群は注目されます。

本報告書は、これらの調査結果をまとめたもので、学術資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護や啓発に少しでも役立つことが出来れば幸いです。

最後に、千葉県教育委員会生涯学習部文化課、市原市教育委員会生涯学習部ふるさと文化課、株式会社東京ドーム及び関係諸機関等のご指導、ご協力に対しまして深く感謝の意を表します。

平成 10 年 3 月

財団法人 市原市文化財センター
理 事 長 白 鳥 一 夫

例 言

1. 本書は、千葉県市原市新生字東荻原野6,071地先他に所在する新生荻原野遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社東京ドーム（平成2年まで株式会社後樂園スタジアム）による後樂園市原レクリエーションワールド建設工事に先行して記録保存を目的に実施された。
3. 確認調査と本調査は、株式会社東京ドームの委託により、千葉県教育委員会と市原市教育委員会の指導のもとに、財団法人市原市文化財センターが実施した。調査対象面積は、161,600㎡であり、このうち10%にあたる16,160㎡について確認調査を実施し、その結果に基づく本調査面積は71,600㎡であった。これらの発掘調査と整理作業は、次のとおり行った。（カッコ内は、当センター調査コード記号）

確認調査	A区69,800㎡のうち6,980㎡、昭和63年12月1日～平成元年8月31日（セ91）	担当者 近藤 敏
	B区31,200㎡のうち3,120㎡（セ92）、C区60,600㎡のうち6,060㎡（セ93）	平成元年4月1日～平成元年8月31日 担当者 半田 堅三
本調査	A区37,000㎡、平成元年4月1日～平成2年3月31日（セ91）	担当者 近藤 敏
	C区 13,000㎡、平成元年9月1日～平成2年3月31日（セ93）	担当者 半田 堅三
	A区 4,518㎡、平成5年11月16日～平成6年3月29日（セ176 a・b）	担当者 田中 茂良
	A区 1,332㎡（セ176 a・b）、B区8,890㎡（セ177 a・b）、C区8,560㎡ （セ178 a・b・c）平成6年4月1日～平成6年8月31日	担当者 小出 紳夫、田中 清美
整理作業	平成2年4月1日～平成3年3月30日	担当者 半田 堅三、近藤 敏
	平成6年9月1日～平成10年3月31日	担当者 牧野 光隆（平成9年度）、忍澤 成視（平成9年度）、田中 清美

4. 本書の原稿執筆、編集は、次の分担で行った。

石器の実測の一部と遺物の写真図版については牧野、A1-5、6号土坑出土の貝類の分析については忍澤、その他について及び編集は、田中がそれぞれ担当した。

また、本書作成にあたっては、各現場担当者並びに当センター職員の方々、パリノサーベイ株式会社には、多大なご助言、ご協力をいただいた。特に石器類は、近藤敏氏、忍澤成視氏、縄文土器は、牧野光隆氏、蜂屋孝之氏にご教示をいただいている。

5. 調査した記録類（図面・写真）と出土遺物は、市原市埋蔵文化財調査センターで保管している。

財団法人 市原市文化財センター組織表

昭和63年度

役 員

理 事 長	市原市教育委員会教育長	星野 一郎
副理事長	市原市教育委員会社会教育部長	大野 義規
常務理事	専 任	須田 昇三
理 事	早稲田大学名誉教授	滝口 宏
理 事	和洋女子大学教授	寺村 光晴
理 事	姉崎神社宮司	海上 信久
理 事	市原市企画部長	根本 正夫
理 事	市原市総務部長	宮崎 芳雄
理 事	市原市都市部長	地引 希壹
理 事	市原市財務部財政課長	安藤 隆一
監 事	市原市会計課長	元吉 末喜
監 事	市原市教育委員会教育総務部総務課長	河野 徳三

職 員

庶務課	長	田丸 萬富
主 事	補	大鐘 光江
事 務 員	(嘱託)	秋田 晴美
事 務 員	(嘱託)	石渡あゆみ
調査課		
課	長	石田 広美
主	幹	加藤 正信
主任調査研究員		宮本 敬一
主任調査研究員		田中 清美
調 査 研 究 員		大村 直
調 査 研 究 員		浅利 幸一
調 査 研 究 員		近藤 敏
調 査 研 究 員		高橋 康男
調 査 研 究 員		田所 真
調 査 研 究 員		木對 和紀
調査研究員(嘱託)		田中 新史
調査研究員(嘱託)		半田 堅三
事 務 員(嘱託)		高浦 貞子
事 務 員(嘱託)		田中 裕子

平成元年度

役 員

理 事 長	市原市教育委員会教育長	星野 一郎
副理事長	市原市教育委員会社会教育部長	大野 義規
常務理事	専 任	須田 昇三
理 事	早稲田大学名誉教授	滝口 宏
理 事	和洋女子大学教授	寺村 光晴
理 事	姉崎神社宮司	海上 信久
理 事	市原市企画部長	根本 正夫
理 事	市原市総務部長	宮崎 芳雄
理 事	市原市都市部長	地引 希壹
理 事	市原市財務部財政課長	安藤 隆一
監 事	市原市会計課長	佐久間 章
監 事	市原市教育委員会教育総務部総務課長	小宮 仁

職 員

庶務課		
課	長	田丸 萬富
主	事	大鐘 光江
事 務 員	(嘱託)	秋田 晴美
	(H1. 9.30まで)	
事 務 員	(嘱託)	石渡あゆみ
調査課		
課	長	矢戸 三男
係	長	宮本 敬一
主任調査研究員		田中 清美
主任調査研究員		浅利 幸一
調 査 研 究 員		大村 直
調 査 研 究 員		近藤 敏
調 査 研 究 員		高橋 康男
調 査 研 究 員		木對 和紀
調 査 研 究 員		忍澤 成視
調 査 研 究 員		田中 茂良
調査研究員(嘱託)		田中 新史
調査研究員(嘱託)		半田 堅三
事 務 員(嘱託)		高浦 貞子

平成5年度

役 員

理 事 長	市原市教育委員会教育長	植草 久善
副理事長	市原市教育委員会社会教育部長	田中 信雄
常務理事	専 任	鈴木 太郎
理 事	國学院大学教授	加藤 晋平
理 事	和洋女子大学教授	寺村 光晴
理 事	郷土史家	木村 千春
理 事	市原市企画部長	佐野 年男
理 事	市原市総務部長	落合 泰
理 事	市原市財務部長	加瀬 睦郎
理 事	市原市都市計画部長	田中 俊夫
監 事	市原市出納室長	中村 知之
監 事	市原市教育委員会教育総務部総務課長	深澤 和良

職 員

庶務課		
課 長	田丸 萬富	
主 事	大鐘 光江	
主 事	阿部 茂之	
調査課		
課 長	米田耕之助	
主任調査研究員	田中 清美	
調 査 研 究 員	大村 直	
調 査 研 究 員	高橋 康男	
調 査 研 究 員	木對 和紀	
調 査 研 究 員	忍澤 成視	
調 査 研 究 員	田中 茂良	
調 査 研 究 員	小川 浩一	
調 査 研 究 員	櫻井 敦史	
調査研究員（嘱託）	半田 堅三	
主 事	高浦 貞子	

平成6年度

役 員

理 事 長	専 任	佐野 年男
副理事長	市原市教育委員会生涯学習部長	山口 唯一
常務理事	専 任	鈴木 太郎
理 事	國学院大学教授	加藤 晋平
理 事	和洋女子大学教授	寺村 光晴
理 事	郷土史家	木村 千春
理 事	市原市教育委員会教育長	植草 久善
	(H 6. 7. 14逝去まで)	大野 皎
	(H 6. 9. 19より)	
理 事	市原市企画部長	石井 作二
理 事	市原市総務部長	加瀬 睦郎
理 事	市原市都市計画部長	田中 俊夫
監 事	市原市出納室長	斎藤 初男
監 事	市原市教育委員会教育総務部総務課長	田邊 義夫

職 員

庶務課		
課 長	古宮 祐助	
主 事	大鐘 光江	
主 事	阿部 茂之	
調査課		
課 長	米田耕之助	
係 長	田中 清美	
主任調査研究員	大村 直	
主任調査研究員	小出 紳夫	
主任調査研究員	田所 真	
調 査 研 究 員	忍澤 成視	
調 査 研 究 員	小川 浩一	
調 査 研 究 員	櫻井 敦史	
調査研究員（嘱託）	半田 堅三	
主 事	高浦 貞子	

平成7年度

役 員

理 事 長	専 任	佐野 年男
副理事長	市原市教育委員会生涯学習部長	山口 唯一
常務理事	専 任	常澄 明
理 事	市原市教育委員会教育長	大野 皎
理 事	國学院大学教授	加藤 晋平
理 事	和洋女子大学名誉教授	寺村 光晴
理 事	郷土史家	木村 千春
理 事	市原市企画部長	三橋 威基
		(H 7. 6. 15より)
理 事	市原市総務部長	加瀬 睦郎
		(H 7. 6. 14まで)
		田中 信雄
		(H 7. 6. 15より)
理 事	市原市都市計画部長	田中 俊夫
監 事	市原市出納室長	斎藤 初男
監 事	市原市教育委員会教育総務部総務課長	田邊 義夫

職 員

庶務課		
課 長	宮崎 澄夫	
主 事	大鐘 光江	
主 事	阿部 茂之	
調査課		
課 長	米田耕之助	
係 長	田中 清美	
主任調査研究員	大村 直	
主任調査研究員	小出 紳夫	
主任調査研究員	近藤 敏	
主任調査研究員	田所 真	
調 査 研 究 員	忍澤 成視	
調 査 研 究 員	小川 浩一	
調 査 研 究 員	櫻井 敦史	
調査研究員(嘱託)	半田 堅三	
主 事	高浦 貞子	
事 務 員(嘱託)	辻 葉子	
事 務 員(嘱託)	常澄 智子	

平成8年度

役 員

理 事 長	専 任	白鳥 一夫
副理事長	市原市教育委員会生涯学習部長	相川 市隆
常務理事	専 任	大谷 豊
理 事	市原市教育委員会教育長	大野 皎
理 事	國学院大学教授	加藤 晋平
理 事	和洋女子大学名誉教授	寺村 光晴
理 事	郷土史家	木村 千春
理 事	市原市企画部長	大町 裕之
		(H 8. 6. 1より)
理 事	市原市総務部長	田中 信雄
理 事	市原市都市計画部長	深澤 和良
監 事	市原市出納室長	斎藤 初男
監 事	市原市教育委員会教育総務部総務課長	石川 善隆
		(H 8. 12. 15逝去まで)

職 員

庶務課		
課 長	宮崎 澄夫	
主 事	高浦 貞子	
主 事	阿部 茂之	
調査課		
課 長	宮本 敬一	
係 長	田中 清美	
副 主 査	小出 紳夫	
副 主 査	近藤 敏	
副 主 査	高橋 康男	
副 主 査	田所 真	
主任調査研究員	大村 直	
調 査 研 究 員	忍澤 成視	
調 査 研 究 員	小川 浩一	
調 査 研 究 員	櫻井 敦史	
調 査 研 究 員	北見 一弘	
調査研究員(嘱託)	半田 堅三	
主 事	大鐘 光江	
事 務 員(嘱託)	辻 葉子	
事 務 員(嘱託)	常澄 智子	

平成9年度

役 員

理 事 長	専 任	白鳥 一夫
副理事長	市原市教育委員会生涯学習部長	鳥海 清宏
常務理事	専 任	山口 節
理 事	市原市教育委員会教育長	大野 皎
理 事	國学院大学教授	加藤 晋平
理 事	和洋女子大学名誉教授	寺村 光晴
理 事	郷土史家	木村 千春
理 事	市原市企画部長	鶴澤 綱夫
理 事	市原市総務部長	田中 信雄
理 事	市原市都市計画部長	大町 裕之
監 事	市原市出納室長	高山 美則
監 事	市原市教育委員会教育総務部総務課長	鈴木 利昭

職 員

庶務課			
課 長	宮崎 澄夫		
主 事	高浦 貞子		
主 事	阿部 茂之		
事 務 員（嘱託）	常澄 智子		
調査一課			
課 長	栗田 則久		
副 主 幹	蜂屋 孝之		
主 査	田中 清美		
係 長	小出 紳夫		
副 主 査	近藤 敏		
副 主 査	高橋 康男		
副 主 査	田所 真		
調 査 研 究 員	小川 浩一		
調 査 研 究 員	北見 一弘		
調 査 研 究 員	鶴岡 英一		
調 査 研 究 員	小橋 健司		
調 査 研 究 員	牧野 光隆		
主 事	大鐘 光江		
事 務 員（嘱託）	辻 葉子		
調査二課			
課 長	宮本 敬一		
副 主 査	大村 直		
主任調査研究員	忍澤 成視		
調査研究員（嘱託）	半田 堅三		

凡 例

1. 挿図での上方向及び調査グリッドの北方向は、国家座標北を示す。
2. 遺構断面等の基準高度は、海拔数値である。
3. 遺構と遺物の挿図縮尺は、遺構コンターが1／300、竪穴住居跡と土坑等が1／60、方形周溝状遺構（方形区画墓）が1／60～1／150、土器と石器等が原寸～1／3を基本とし、状況に応じて縮尺を変えて掲載した。
4. 遺構挿図内の破線は推定復元線、竪穴住居跡の床面内の一点鎖線は、硬質面の範囲である。平面図と土層図内の「K」は攪乱層、土層説明については、現地調査者の註記を主にそのまま掲載した。
遺物挿図内の破線は推定復元線、中心線の一点鎖線は、遺物を反転させたもの、破線は、保存状況が良い部分から全体を復元したものを表わしている。また、土器の口縁部と底部の横線は、回転具やロクロを使用したと考えられる場合、定規を用いている。
5. 石器・石製品実測図中の記号の意味は、次のとおりである。

刃 部 |←▽→| 研磨痕 |←□→| 摩耗痕 |←●→| 摩耗強 |←●●→|
敲打痕 |←○→| 敲打強 |←○○→| 凹み状の摩耗 |←▼→| 敲打面 
遺構実測図のトーンは次のことを示す。

 断面  硬質面及び貝

本文目次

序 文

例 言

財団法人市原市文化財センター組織表

凡 例

I. 序 説	1
1 遺跡の立地と環境	1
2 調査に到る経緯と調査方法	5
II. 遺構と遺物	12
1. A 2、3 区	12
2. A 4 区	20
3. B 1 区	40
4. B 2 区	49
5. B 3 区	54
6. C 2 区	63
7. C 3 区	65
8. C 1 区	69
9. A 1 区	105
III. ま と め	228

挿 図 目 次

第1図	遺跡等の位置	2
第2図	グリッドシステム図	5
第3図	グリッド配置図	6
第4図	確認調査状況図（トレンチ設定図）	7
第5図	本調査地区周辺地形図	8
第6図	本調査地区全体図	11
第7図	A 2、3 区全体図	12
第8図	A 3－1 号住居跡実測図	13
第9図	A 3－1 号方形区画墓実測図	14
第10図	A 3－1～4 号土坑実測図	15
第11図	A 3－5～12号	16
第12図	A 2－1 号土坑実測図	16
第13図	A 3－13～17号	17
第14図	A 2区外塚状遺構実測図	18
第15図	A 3区出土遺物実測図	19
第16図	A 3区グリッド出土遺物実測図	19
第17図	A 4区全体図	20
第18図	A 4－1、2 号炉穴群実測図	21
第19図	A 4－3～5 号	22
第20図	A 4－1～4 号土坑実測図	23
第21図	A 4－5～8 号	24
第22図	A 4－9～11号	25
第23図	A 4－12～15号	26
第24図	A 4区遺物集中地点実測図	27
第25図	A 4区土坑等出土遺物実測図 (1)	28
第26図	A 4区	(2) 29
第27図	A 4区	(3) 30
第28図	A 4区	(4) 31
第29図	A 4区	(5) 32
第30図	A 4－1 号方形区画墓実測図	33
第31図	A 4区グリッド出土遺物実測図 (1)	34
第32図	〃	(2) 35
第33図	〃	(3) 36
第34図	〃	(4) 37
第35図	〃	(5) 38
第36図	〃	(6) 39
第37図	B 1区トレンチ出土遺物	40
第38図	B 1区全体図	41
第39図	B 1－1～9 号炉穴実測図	42
第40図	B 1－1～7 号土坑	〃 43
第41図	B 1－1 号住居跡・炉穴・土坑実測図	44
第42図	B 1区炉穴・土坑実測図	46
第43図	B 1区出土遺物実測図	47
第44図	B 1区グリッド出土遺物実測図 (1)	47
第45図	〃	(2) 48
第46図	B 1－1 号住居跡出土遺物実測図	48
第47図	B 2区全体図	49
第48図	B 2区出土遺物実測図	50
第49図	B 2－1 号道路状遺構実測図	51
第50図	B 2－2 号溝状遺構実測図	52
第51図	B 2－3 号道路状遺構実測図	53
第52図	B 3区全体図	55
第53図	B 3－1～5 号土坑実測図	56
第54図	B 3－6～9 号	〃 57
第55図	B 3区出土遺物実測図	57
第56図	B 3－1 号方形区画墓実測図	58
第57図	B 3－2 号	〃 59
第58図	B 3－3 号方形区画墓及び主体部実測図	60
第59図	B 3－4 号方形区画墓実測図	61
第60図	C 2区全体図	62
第61図	C 2－1、2 号土坑実測図	63

第62図	C 2区溝状遺構実測図	64
第63図	C 2区出土遺物実測図	64
第64図	C 3区全体図	65
第65図	C 3－1 号前方後円墳実測図	66
第66図	〃	土層断面図 67
第67図	C 1区全体図	69
第68図	C 1－1 号遺構トレンチ設定図	70
第69図	〃	旧石器出土状況実測図 71
第70図	〃	〃 実測図 (1) 72
第71図	〃	〃 〃 (2) 73
第72図	〃	〃 接合図 73
第73図	C 1－1～4 号炉穴群実測図	74
第74図	C 1－5、6 号	〃 75
第75図	C 1－7～10号	〃 76
第76図	C 1－11～13号	〃 77
		及び土層セクション実測図 77
第77図	C 1区遺構出土遺物実測図 (1)	78
第78図	〃	(2) 79
第79図	〃	(3) 80
第80図	C 1－1 号住居跡実測図	81
第81図	〃	出土遺物実測図 82
第82図	C 1－2 号住居跡実測図	83
第83図	C 1－3～5 号住居跡実測図	85
第84図	C 1－6、7 号	〃 86
第85図	C 1－8 号住居跡実測図	88
第86図	C 1－8 号出土遺物実測図	88
第87図	C 1－9～11号住居跡実測図	89
第88図	C 1区住居跡等出土遺物実測図 (4)	90
第89図(1)	C 1－5 号溝状遺構実測図	91
第89図(2)	C 1－5、6 号溝状遺構位置関係図	91
第90図	C 1－1～4 号溝状遺構実測図	91
第91図	C 1－7 号	〃 92
第92図	C 1－1、2 号土坑実測図	92
第93図	C 1－3～8 及び13～19号土坑実測図	93
第94図	C 1－4～9 号	〃 94
第95図	C 1－10～12号	〃 95
第96図	C 1－1 号方形区画墓実測図	95
第97図	C 1－2 号	〃 96
第98図	C 1－3、4 号	〃 97
第99図	C 1－5、6 号	〃 98
第100図	C 1－8、9 号溝状遺構実測図	99
第101図	C 1区グリッド出土遺物実測図 (1)	100
第102図	〃	(2) 101
第103図	〃	(3) 102
第104図	〃	(4) 103
第105図	〃	(5) 104
第106図	A 1区全体図	105
第107図	A 1－1 号炉穴群実測図	107
第108図	A 1－2～6 号炉穴群実測図	108
第109図	A 1－7～10	〃 109
第110図	A 1－11～13号炉穴群実測図	110
第111図	A 1－14号炉穴群出土遺物実測図	110
第112図	A 1－14～17号	〃 111
第113図	A 1－2 号炉穴群出土遺物実測図 (1)	112
第114図	A 1－2 号	〃 (2) 113
第115図	A 1－3・4 号	〃 114
第116図	A 1－4 号	〃 115
第117図	A 1－4、5 号炉穴群出土遺物実測図	116
第118図	A 1－5、6 号	〃 117
第119図	A 1－6～8 号炉穴群出土遺物実測図	118

第120図	A 1 - 6、8、10、11号炉穴群 出土遺物実測図	119
第121図	A 1 - 11、12、13	120
第122図	A 1 - 13、15、18、19号 炉穴群出土遺物実測図	121
第123図	A 1 - 18～21号炉穴群実測図	122
第124図	A 1 - 19号炉穴群出土遺物実測図	122
第125図	A 1 - 1 ～ 3 号住居跡実測図	123
第126図	A 1 - 4 号	124
第127図	A 1 - 5 号	125
第128図	A 1 - 6、7 号	126
第129図	A 1 - 8 ～ 10 号	127
第130図	A 1 - 11 ～ 13 号	128
第131図	A 1 - 14 ～ 16 号	129
第132図	A 1 - 17 号	130
第133図	A 1 - 18 ～ 20 号	131
第134図	A 1 - 1 号集石遺構実測図	132
第135図	A 1 - 1 ～ 6 号土坑実測図	135
第136図	A 1 - 1 号埋甕遺構	136
第137図	A 1 - 7 ・ 8 号土坑	136
第138図	A 1 - 9 ～ 12 号土坑実測図	137
第139図	A 1 - 13 ～ 18 号	138
第140図	A 1 - 19 ～ 24 号	139
第141図	A 1 - 25 ～ 30 号	140
第142図	A 1 - 31 ～ 35 号	141
第143図	A 1 - 36 ～ 42 号	142
第144図	A 1 - 43 ～ 46 号	143
第145図	A 1 - 47 ～ 52 号	144
第146図	A 1 - 53 ～ 60 号	145
第147図	A 1 - 61 ～ 66 号	146
第148図	A 1 - 67 ～ 71 号	147
第149図	A 1 - 72 ～ 76 号	148
第150図	A 1 - 77 ～ 81 号	149
第151図	A 1 - 82 ～ 86 号	150
第152図	A 1 - 87 ～ 90 号	151
第153図	A 1 - 5、6 号	152
第154図	貝層サンプル中内容物の比較図	152
第155図	貝種組成	156
第156図	ハマグリ の殻高分布	156
第157図	A 1 - 1 号住居跡、A 1 - 6 号遺物 集中地点出土遺物実測図	157
第158図	A 1 - 5 号	157
第159図	A 1 区土坑等出土遺物実測図 (1)	158
第160図	" (2)	159
第161図	" (3)	160
第162図	" (4)	161
第163図	" (5)	162
第164図	" (6)	163
第165図	" (7)	164
第166図	" (8)	165
第167図	" (9)	166
第168図	A 1 - 14 号住居跡出土遺物実測図	166
第169図	A 1 区土坑等出土遺物実測図 (10)	167
第170図	A 1 - 1 号方形区画墓実測図	168
第171図	A 1 - 2 号	169
第172図	A 1 - 3 号	170
第173図	A 1 - 3 号方形区画墓主体部実測図	170
第174図	A 1 - 4 号方形区画墓実測図	171
第175図	A 1 - 4 号方形区画墓主体部実測図	171
第176図	A 1 - 5、6 号方形区画墓実測図	172
第177図	A 1 - 7 号	173
第178図	A 1 - 8 号方形区画墓及び主体部実測図	174
第179図	A 1 - 8 号方形区画墓の内側周溝及び 須恵器長頸壺出土状況図	176

第180図	A 1 - 9 号方形区画墓実測図	177
第181図	A 1 - 10 号方形区画墓主体部実測図	177
第182図	A 1 - 10、11 号方形区画墓実測図	178
第183図	A 1 - 12 号方形区画墓及び主体部実測図	179
第184図	A 1 - 13 号方形区画墓及び主体部実測図	180
第185図	A 1 - 13 号方形区画墓主体部 掘り方実測図	181
第186図	A 1 - 14 号方形区画墓実測図	181
第187図	A 1 - 15 号方形区画墓実測図	183
第188図	A 1 - 16、17 号方形区画墓実測図	184
第189図	A 1 区方形区画墓出土遺物実測図	185
第190図	A 1 - 1 号掘立柱建物跡実測図	186
第191図	A 1 - 1 号掘立柱建物跡出土遺物実測図	186
第192図	A 1 - 2 号掘立柱建物跡実測図 (1)	187
第193図	A 1 - 2 号 (2)	188
第194図	A 1 - 1、2 号溝状遺構実測図	189
第195図	A 1 - 1 号溝状遺構土層セクション実測図	191
第196図	A 4 - 1 号、A 1 - 3、10、11 号 溝状遺構実測図	193
第197図	A 4 - 1 号溝状遺構土層セクション実測図	195
第198図	A 1 区、A 4 区溝状遺構全体図	195
第199図	A 1 - 3、11 号溝状遺構実測図	197
第200図	A 1 区、A 4 区溝状遺構出土遺物実測図	199
第201図	A 1 - 1 号塚状遺構 (一本松塚) 出土遺物実測図 (1)	199
第202図	" (一本松塚) 現況地形測量図	200
第203図	" (一本松塚) 盛土下土坑実測図 (その 1 ・ その 2)	200
第204図	" (一本松塚) 土層断面セクション図	201
第205図	" (一本松塚) 出土遺物実測図 (2)	202
第206図	" (3)	203
第207図	" (4)	204
第208図	" (5)	205
第209図	A 1 - 2 号塚状遺構実測図	206
第210図	A 1 区グリッド出土遺物実測図 (1)	207
第211図	" (2)	208
第212図	" (3)	209
第213図	" (4) 及び土層セクション図	209
第214図	" (5)	213
第215図	" (6)	214
第216図	" (7)	215
第217図	A 1 区 (8)	216
第218図	A 1 区その他の出土遺物実測図 (1)	217
第219図	" (2)	218
第220図	" (3)	219
第221図	" (4)	220
第222図	" (5)	221
第223図	" (6)	222
第224図	" (7)	223
第225図	時期別土器片分布状況図 (1)	224
第226図	時期別土器片分布状況図 (2)	225
第227図	焼礫、自然石、黒曜石分布状況図	226
第228図	A 1 区時期別 (4 時期) 遺構の分布状況図	229
第229図	周辺の主な古墳群と城郭跡	232
第230図	A 区検出の方形区画墓変遷予想図	235
第231図	C 1 区古墳時代後期の遺構配置図	235
第232図	荻原野遺跡奈良、平安時代遺構	238
第233図	" の溝状遺構 (道路を含む)	239

表 目 次

第1表	新旧遺構名称対照表 (1)	9
第2表	“ (2)	10
第3表	A 2、3 区土坑一覧表	15
第4表	A 4 区土坑一覧表	22
第5表	B 1 区土坑一覧表	46
第6表	B 3 区 “	54
第7表	C 1 区 “	104
第8表	A 1 区住居跡一覧表	130
第9表	A 1 区土坑一覧表 (1)	133
第10表	“ (2)	134
第11表	貝層サンプル内容物組成	152
第12表	軟体動物検出数一覧	152
第13表	荻原野遺跡出土石器表 (1)	210
第14表	“ (2)	211
第15表	“ (3)	212
第16表	荻原野遺跡検出炉穴群一覧表	229
第17表	“ 陥穴一覧表	229
第18表	“ 方形区画墓一覧表	236
第19表	“ 溝状遺構一覧表	240

写真図版目次

- 図版1 遺跡遠景、A1区より東側の谷を望む、
A1区より北西方向を望む、A1区より
北東側方面を望む、調査前の状況
- 図版2 確認調査の状況、近景
- 図版3 A2区の状況、A2区北側の塚、A3
区近景
A3-1号住居跡、A3-1号方形区
画墓
A3-1、3~5、10土坑
- 図版4 A3-6、8、11、14、15土坑、A4
区北側の状況
A4-1~3号炉穴群
- 図版5 A4-10、13土坑、A4-1号方形区
画墓、B1区近景
B1-2、5、9~12号土坑
- 図版6 B1-5号土坑、B1-1号住居跡
B2-1、2号道路状遺構
- 図版7 B3区a、b、c、d近景
B3-1、4~6号土坑
- 図版8 B3-5、7~9号土坑、B3-1~
3号方形区画墓
- 図版9 B3-3、4号方形区画墓、C2-1、
2号土坑
C2区北側の状況、C2-1、2、4
号溝状遺構
- 図版10 C3-1号古墳
- 図版11 C3-1号古墳、C1-1、2号溝状
遺構付近の状況
C1-5、6号住居跡、C1-5号土
坑
- 図版12 C1-4号住居跡、C1-8、9号溝
状遺構
C1-9、12号土坑、C1-4号方形
区画墓
- 図版13 A1-2~4、6、7、9、10号炉穴
群
- 図版14 A1-9、12~16、20、21号炉穴群
A1-1~3号住居跡
- 図版15 A1-4~9、20号住居跡
- 図版16 A1-10、13~15、17号住居跡、A1-
52号土坑
- 図版17 A1-16、18、19号住居跡、A1-1
号集石遺構
- 図版18 A1-5、6号土坑
- 図版19 A1-7~12、14、15号土坑
- 図版20 A1-18、20~22、24、25、27、29、
44号土坑
- 図版21 A1-33~40号土坑
- 図版22 A1-41~47号土坑、A1-119、120
号土坑
- 図版23 A1-50、51、54~57、59、62~65、
68、69、71号土坑
- 図版24 A1-66、72~75、79、82、84号土坑
- 図版25 A1-85、87~90号土坑、A1-1~
4号方形区画墓
- 図版26 A1-4~8号方形区画墓
- 図版27 A1-9~15、17号方形区画墓
- 図版28 A1-16号方形区画墓、A1-1~3
号溝状遺構
- 図版29 A4-1号溝状遺構、A1-1、2号
掘立柱建物跡
- 図版30 A1-1、2号塚状遺構、A1-2、
8、9号溝状遺構
〈以上遺構等以下遺物〉
- 図版31 A3区、A4区
- 図版32 A4区
- 図版33 A4区
- 図版34 A4区
- 図版35 B3区、B1区、B2区
- 図版36 B3区、C2区、C1区
- 図版37 C1区
- 図版38 C1区
- 図版39 C1区
- 図版40 C1区、A1区
- 図版41 A1区
- 図版42 A1区
- 図版43 A1区
- 図版44 A1区
- 図版45 A1区
- 図版46 A1区
- 図版47 A1区
- 図版48 A1区、A4区
- 図版49 A1-1号塚状遺構
- 図版50 A1-1号塚状遺構
- 図版51 A1-1号塚状遺構
- 図版52 A1区
- 図版53 A1区
- 図版54 A1区
- 図版55 A1区
- 図版56 A1区
- 図版57 A1-5・6号土坑

I 序 説

1 遺跡の立地と環境

新生荻原野遺跡は、養老川下流域左岸台地上に立地する。北流してきた養老川が北西方向に流れを変え、下流域を構成する沖積地が大きく広がり始める付近を望む南側台地上でもある。台地の周辺には小谷が幾重にも入り込み、複雑な地形を呈している。特に東側と西側は、高坂方面からの小河川と引田川のそれぞれの開折谷が存在している。遺跡の所在する台地は、このような小谷に刻まれ、尾根によって結ばれた数ヶ所の平坦部で構成されている。台地の標高は、約70～80mで、小谷との比高は、約30mを測る。標準土層は、腐植土層（Ⅱ a b c 層）からローム層（Ⅲ層以下）にいたる市内に一般的にみられる層位をもつ。また、斜面部では、Ⅱ層の新期テフラ層が厚く堆積している。

周辺には、多くの遺跡が存在する。養老川対岸北約5kmには、西広貝塚、祇園原貝塚、神門古墳群、稲荷台古墳群、上総国分僧寺跡、上総国分尼寺跡などに代表される上総国分寺台遺跡群が位置し、同じく対岸の東側から南東側にかけても、山倉天王貝塚^(註1)、武士遺跡^(註2)、福増古墳群^(註3)、武士古墳群^(註4)、土宇遺跡^(註5)、上原浅間台横穴群^(註6)、奉免上原台遺跡^(註7)など、旧石器時代から平安時代にいたる各種の遺跡がみられる。また、養老川の沖積低地上には、南東約2kmに、7世紀半ば頃の創建といわれる二日市場廃寺跡^(註8)、北約3kmには、海上郡衙推定地としての小折遺跡等^(註9)、北西約2.5kmには、上総国分寺跡と同範の瓦を出土する今富廃寺跡^(註10)などの古代の遺跡が存在する。当遺跡の立地する養老川左岸台地上には、南西約2.5kmに縄文時代草創期の細隆起線文土器を出土する南原遺跡^(註11)、西約2kmには、中期～晩期の馬蹄形を呈する諸久蔵貝塚^(註12)、南南西約2kmには、地点貝塚の堀込貝塚、南約2.5kmには、中期～後期で養老川流域では最奥部に位置する上高根貝塚、北北西約1.5kmには地点貝塚の分目貝塚、南東約1kmには、後期の瓜ヶ岱貝塚がみられる。また、西約1.2kmには、縄文時代早期末の条痕文系土器群を出土し炉穴46群121個所が調査された今富大道遺跡^(註13)、さらに南西約600mには、後期の集落跡を確認した山見塚遺跡^(註14)がある。弥生時代では、北東約600mの台地上に住居跡100軒以上等を検出した釜神遺跡がある。古墳群では、北西約3.5kmに径45～60mの円墳と推定される海保大塚古墳^(註15)、同じく約2.5kmに全長約110mの前方後円墳である今富塚山古墳^(註16)、東側一帯の台地縁辺部には、安須古墳群^(註17)、南約500mに中高根古墳群^(註18)など、奈良平安時代では、西約3kmに9世紀後半から10世紀初頭の住居跡7軒と7世紀末～9世紀頃のいわゆる方形区画墓（方形周溝状遺構）を検出した片又木遺跡^(註19)、確認調査であるが方形区画墓11基を検出した山見塚遺跡^(註20)、南南西約800mには方墳2基、方形区画墓28基、火葬墓4基などを検出した外迎山遺跡^(註21)、南約2.5kmにも方形区画墓3基を検出した南名山遺跡^(註22)も存在する。さらに南南西3km～3.5kmには、瓦塔や墨書土器を出土し、基壇も2基検出した荻ノ原遺跡^(註23)や奈良～平安時代の寺院跡とみられる川原井廃寺跡^(註24)が調査されている。北西約1kmの引田の蓮蔵院には、平安時代後期の荒彫一木造の聖観音像が安置されている。また南約1kmの風戸の日光寺には、像高3.36mの寄木造の聖観音像が知られている。^(註25)中世では、いくつかの城郭跡がみられ、北約1.2kmには障子堀や地下式坑を検出した分目城跡^(註26)、北西約600mには万台城跡、同じく約2.5kmには、海保城



第1図 遺跡等の位置

(千葉・姉崎 1 : 50,000)

跡、南東約600mには、高坂砦^(註27)、南約2.5kmには上高根城跡^(註28)などが存在する。

以上のように当遺跡の周辺には、多種多様な歴史的環境があり、このような中に位置する荻原野遺跡は、各時代にそれらと関連する生活等の舞台として使用されていたことは、疑うべきもない。

註

1. 市原市内の貝塚については、42地点が周知されている。山倉天王貝塚は、後期で馬蹄形を呈している。
忍澤成視「市原市能満上小貝塚」1995. (財)市原市文化財センター。P 2. 市原市内貝塚一覧
2. 旧石器ブロックⅢ層～Ⅷ層、縄文中期から後期の集落、弥生中期から後期集落、再葬墓、方形周溝墓、方形周溝状遺構などが検出されている。
加納実、田村隆「市原市武士遺跡1」1997. (財)千葉県文化財センターなど
3. 10基の円墳が確認されている。1～3号墳は調査済。
中村恵次他「福増古墳群」『市原市周辺地域の調査』1967. 市原市教育委員会
田所真「千葉県市原市一池ノ谷遺跡・福増遺跡」1985. (財)市原市文化財センター。P 77～。
4. 前方後円墳2基、方墳1基等を含む13基が確認されている。
小出紳夫他「千葉県市原市埋蔵文化財分布地図－北部編－」1988. 市原市教育委員会など
また、福増山ノ神遺跡では、弥生から古墳時代の住居跡及び奈良から平安時代の地下式改葬墓と方形周溝状遺構など。
浅利幸一「福増山ノ神遺跡発掘調査報告書」1989. (財)市原市文化財センター
5. 弥生から古墳時代の集落が主体。柿沼修平他「土宇遺跡」1979. 日本考古学研究所
6. 未調査。少なくとも3基が確認されている。
小出紳夫他「千葉県市原市埋蔵文化財分布地図－南部編－」1987. 市原市教育委員会など
7. 縄文早期炉穴群、前期集落、古墳時代終末期方墳、方形周溝状遺構群など
忍澤成視、田中清美「奉免上原台遺跡」1992. (財)市原市文化財センター
8. 白鳳・奈良時代の寺院跡。大和紀寺系軒瓦出土。
郷堀英司他「市原市二日市場廃寺確認調査報告」1984. 千葉県教育委員会など。
9. 今泉潔他「市原市西野遺跡・白山遺跡・村上遺跡発掘調査報告書」1989. (財)千葉県文化財センター
高梨俊夫「市原市西野遺跡第1次発掘調査報告書」1996. 千葉県教育委員会など
10. 白鳳・奈良時代寺院跡。福岡元「今富地区遺跡発掘調査報告書」1982
11. 大塚達朗他「市原市南原遺跡第1次調査抄報」『伊知波良1』1979. P 1～P 7
田村隆他「市原市南原遺跡第2次調査抄報」『伊知波良4』1980. P 1～P 19
12. 註1の文献を参照
13. 米田耕之助「今富大道遺跡」1988. (財)市原市文化財センター
14. 木對和紀「外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡」1987. (財)市原市文化財センター P 151～216
15. 杉山晋作他「海保大塚古墳の測量調査」『関東地方における終末期古墳の研究』1990. 国立歴史民俗博物館。
単なる三山塚の可能性もあるが立地からは古墳を再利用していることも考えられる。
16. 主体部は、木炭藪の可能性もある。永沼律朗「今富塚山古墳確認調査報告書」1991. (財)千葉県文化財センター
17. 26基を確認している。1、2号墳は調査済。木對和紀「市原市安須古墳群」1993. (財)市原市文化財センター
永沼律朗他「千葉県重要古墳群測量調査報告書－市原市安須・武士古墳群ほか－」1997. 千葉県教育委員会
18. 金比羅台古墳群とも言われる。前方後円墳1基を含む13基が確認されている。一部残存のみ。
註4の文献参照。
田中新史「煙滅しつつある中高根古墳群を悼む」『伊知波良2』1979. P 29～31
また、1基の円墳（残存）と9基の方墳で構成される山見塚古墳群も南東側に近接して位置する。
19. 寺島博「千葉県市原市一片又木遺跡」1984. (財)市原市文化財センター
20. 註14の文献を参照。
21. 同上 P 9～P 121
22. 半田堅三「市原市中高根南山遺跡」1995. (財)市原市文化財センター
23. 寺門義範他「千葉県荻ノ原遺跡発掘調査報告書」1978. 日本考古学研究所
24. 光江章「袖ヶ浦町東郷台遺跡（川原井廃寺）」1986. (財)君津郡市文化財センター
25. 「いちはらの文化財」1994. 市原市教育委員会 P 6～P 7
26. 櫻井敦史「4. 分目要害遺跡」『市原市文化財センター年報 平成5年度』1997. (財)市原市文化財センター、P 11～P 29
など
27. 「千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房国地域－」1996. 千葉県教育委員会など
28. 鈴木英啓「上高根の城塞」『私の考古学日記』1994. (財)市原市文化財センター研究紀要Ⅱ、P 430～P 437

第1図「遺跡等の位置」の番号説明

- | | | |
|-----------------|-------------|-------------|
| 1 新生萩原野遺跡 | 19 蟻木城跡 | 37 二日市場廃寺跡 |
| 2 御座目浅間神社古墳 | 20 小野山城跡 | 38 外迎山遺跡 |
| 3 上総国分尼寺跡 | 21 新堀叶台遺跡 | 39 堀込貝塚 |
| 4 “ 僧寺跡 | 22 引田蓮蔵院 | 40 土宇砦跡 |
| 5 天神台遺跡 | 23 分目貝塚 | 41 土宇下原遺跡 |
| 諏訪台古墳群 | 24 万台城跡 | 42 中高根南原遺跡 |
| 6 西広貝塚 | 25 浅井小向釜神遺跡 | 43 中高根南名山遺跡 |
| 7 山倉天王貝塚 | 26 安須古墳群 | 44 上高根城跡 |
| 8 福増池ノ谷遺跡 | 27 諸久蔵貝塚 | 45 上高根貝塚 |
| 9 福増古墳群 | “ 館跡 | 46 川原井廃寺跡 |
| 10 西野遺跡 | 28 片又木遺跡 | 47 萩ノ原遺跡 |
| 11 小折遺跡 | 29 今富大道遺跡 | 48 土宇遺跡 |
| 12 今富廃寺跡 | 30 唐沢遺跡 | 大城台古墳群 |
| 13 畑木砦跡 | 31 中伊沢遺跡 | 49 上原浅間台横穴群 |
| 14 海保大塚古墳 | 32 高坂砦跡 | 50 根本砦跡 |
| 15 海保城跡 | 33 瓜ヶ岱貝塚 | 51 奉免白山城跡 |
| 16 今富塚山古墳 | 34 山見塚遺跡 | 52 奉免上原台遺跡 |
| 17 神代城跡 | 35 中高根古墳群 | |
| 18 分目城跡（分目要害城跡） | 36 松崎古墳群 | |



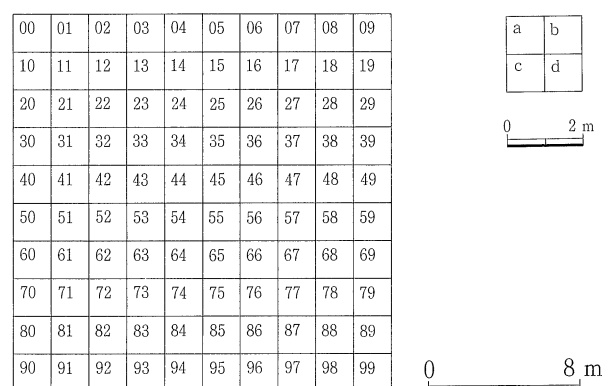
A区付近航空写真 上部は養老川の沖積地
(南西側より北東方向を望む。)

2 調査に到る経緯と調査方法

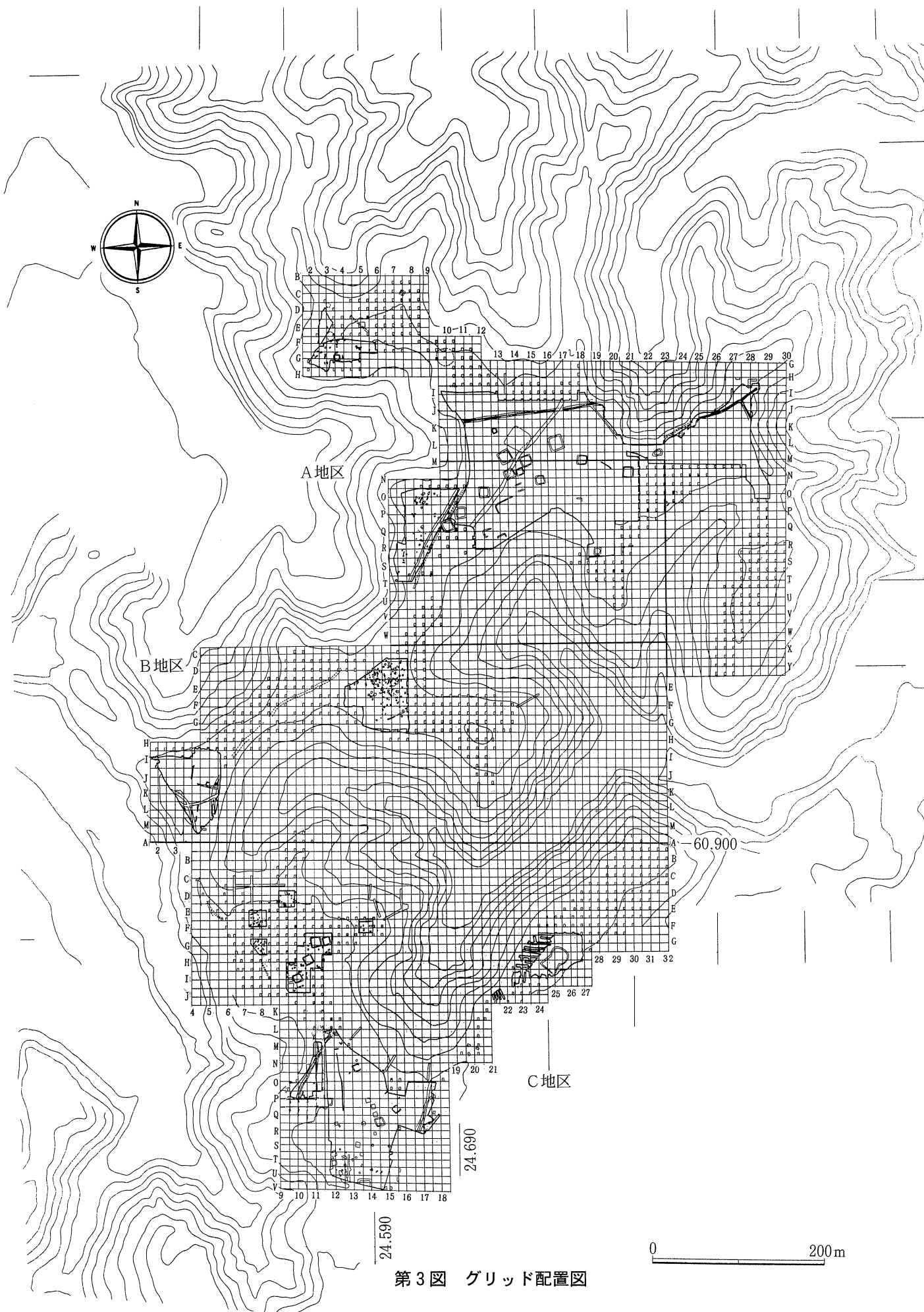
昭和63年7月8日付けで株式会社後樂園スタジアムより「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会が千葉県教育委員会教育長と市原市教育委員会教育長宛にあり、それを受けて、現地踏査等を実施した結果、遺跡の所在が確認され、昭和63年10月24日付けで千葉県教育委員会教育長より161,600㎡の回答があった。その後3者により取り扱いについて協議がなされ、全域の確認調査を実施することになった^(註1)。調査は、財団法人市原市文化財センターに委託し、昭和63年12月1日より開始した。現地は、昭和40年代まで畑地として主に利用されていたが、最近では畑地はわずかで山林と荒地が多く、特に荒地では火災が絶えなかった。調査は、これら山林と荒地の伐採と調査用道路の整備にかなりの日数を費やした。調査にあたり、遺跡全域に20mを基本とする方眼座標を設定した(第3図)。設定した方眼座標は、さらに1m単位まで細分した(第2図)。基準座標は、座標北(国家座標)を用いているが、調査の便宜上記号で分けした(第3図)。記号は緯度をA～Y、経度を2～32とし、さらに、20m四方を2m間隔で00～99まで100単位に分け、2m四方をa～d(または、ア～エ)の4分割に細別した。当遺跡は、複雑な地形を呈しており、特に尾根によって結ばれたいくつかの台地平坦面が主な遺跡として存在するため、調査では概念的に北からA～Cの3地区に大きく分けた(本書では、現地調査と同様に「A区」などと呼称する)。また本書では、地形的な境目や調査順により各地区を「A1区、A2区」などに細分して掲載した(第5図)。確認調査は、161,600㎡の10%、16,160㎡について実施した。トレンチは、この基準に添って東西2m×南北4mの大きさを10～20m間隔で配置した。また、地形の状況に応じてトレンチの大きさを変えている。その結果、A区では45,700㎡、B区では8,100㎡、C区では17,800㎡が本調査の対象となった。これに伴い再び協議した結果、本調査を継続する形で実施することになり、平成元年4月1日から順次開始した。確認調査と本調査とも地形図は、株式会社竹内土木作成の1/2,000を主に使用した。実測図については、塚等の地形図は1/100、遺構は1/20～1/40、遺物出土状況や炉跡などは1/5～1/10の縮尺を基本として記録した。写真類については、ブローニー版(6級、6×7版)と35ミリ版のスライドと白黒フィルムを基本に使用した。当遺跡の調査については、本書が出版されるまで当センターの文献によりその概要が以下に紹介されている。

1. 近藤敏「5. 新生荻原野遺跡(A区)」『第5回市原市文化財センター遺跡発表会要旨平成元年度』1990
2. 近藤敏「24. 新生荻原野遺跡(A区・一本松塚)」『市原市文化財センター年報 昭和63年度』1994
3. 近藤敏「6. 新生荻原野遺跡A区・一本松塚」『市原市文化財センター年報 平成元年度』1994
4. 半田堅三「7. 新生荻原野遺跡B・C区(確認調査)」「8. 新生荻原野遺跡C区(本調査)」以下2と同じ。
5. 小出紳夫「12. 新生荻原野遺跡A区」『市原市文化財センター年報 平成5年度』1997
6. 田中清美「11. 新生荻原野遺跡A・B・C区」『市原市文化財センター年報 平成6年度』1997

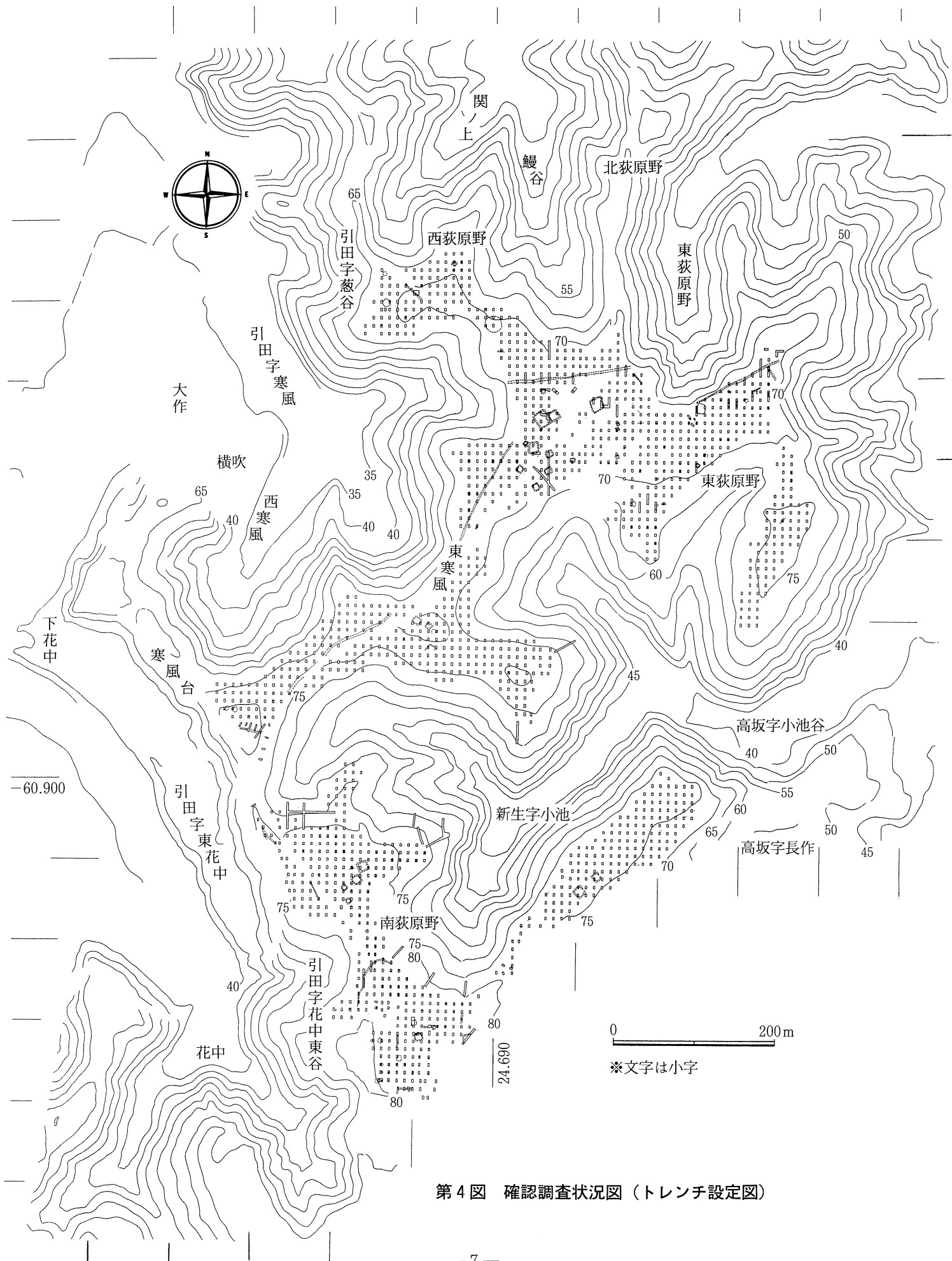
註1. 詳細は、本書の例言3を参照されたい。



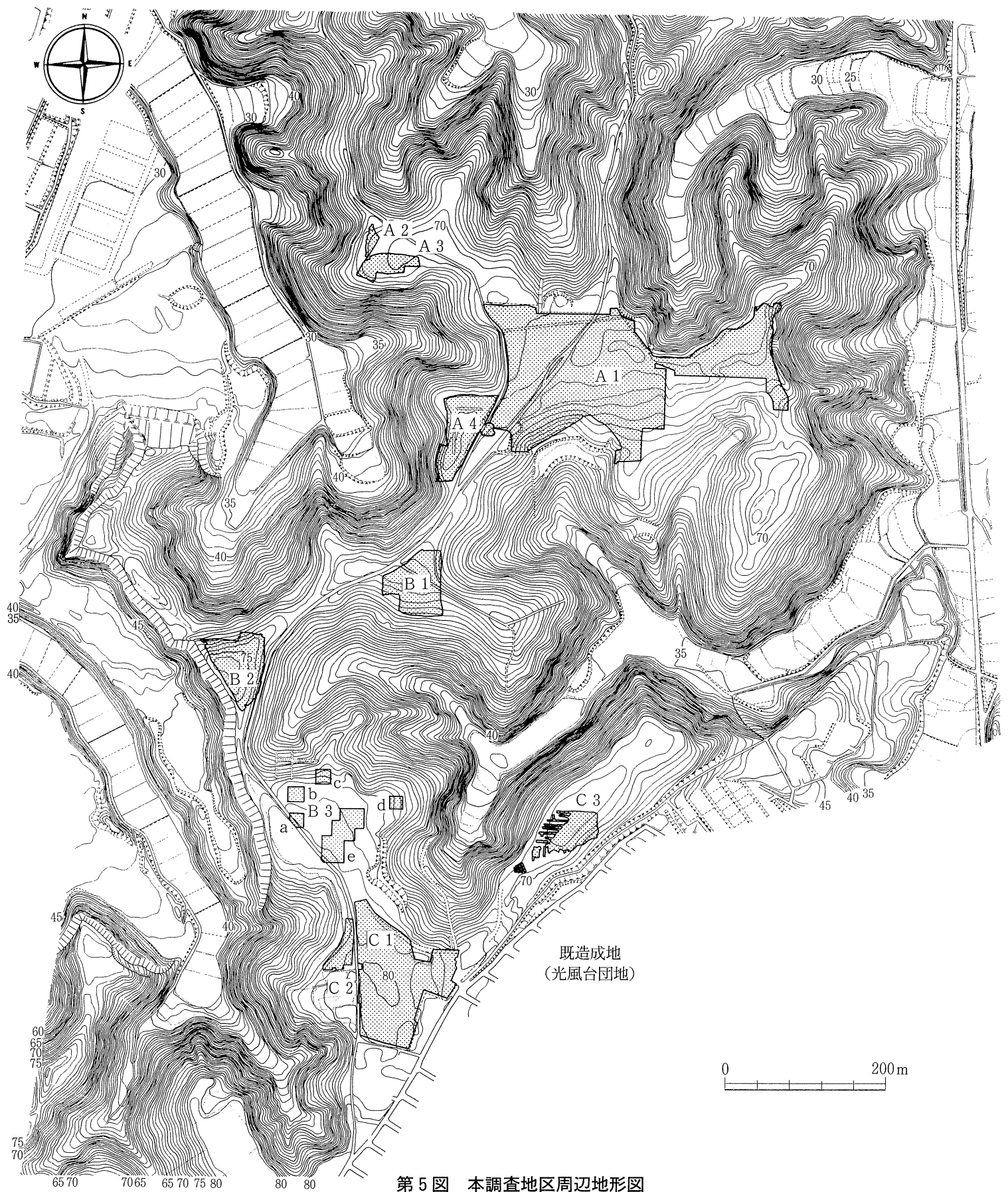
第2図 グリッドシステム図



第3図 グリッド配置図



第4図 確認調査状況図 (トレンチ設定図)



第 5 図 本調査地区周辺地形図

第1表 新旧遺構名称対照表(1) (新は本書使用名、旧は現地調査時点使用名)

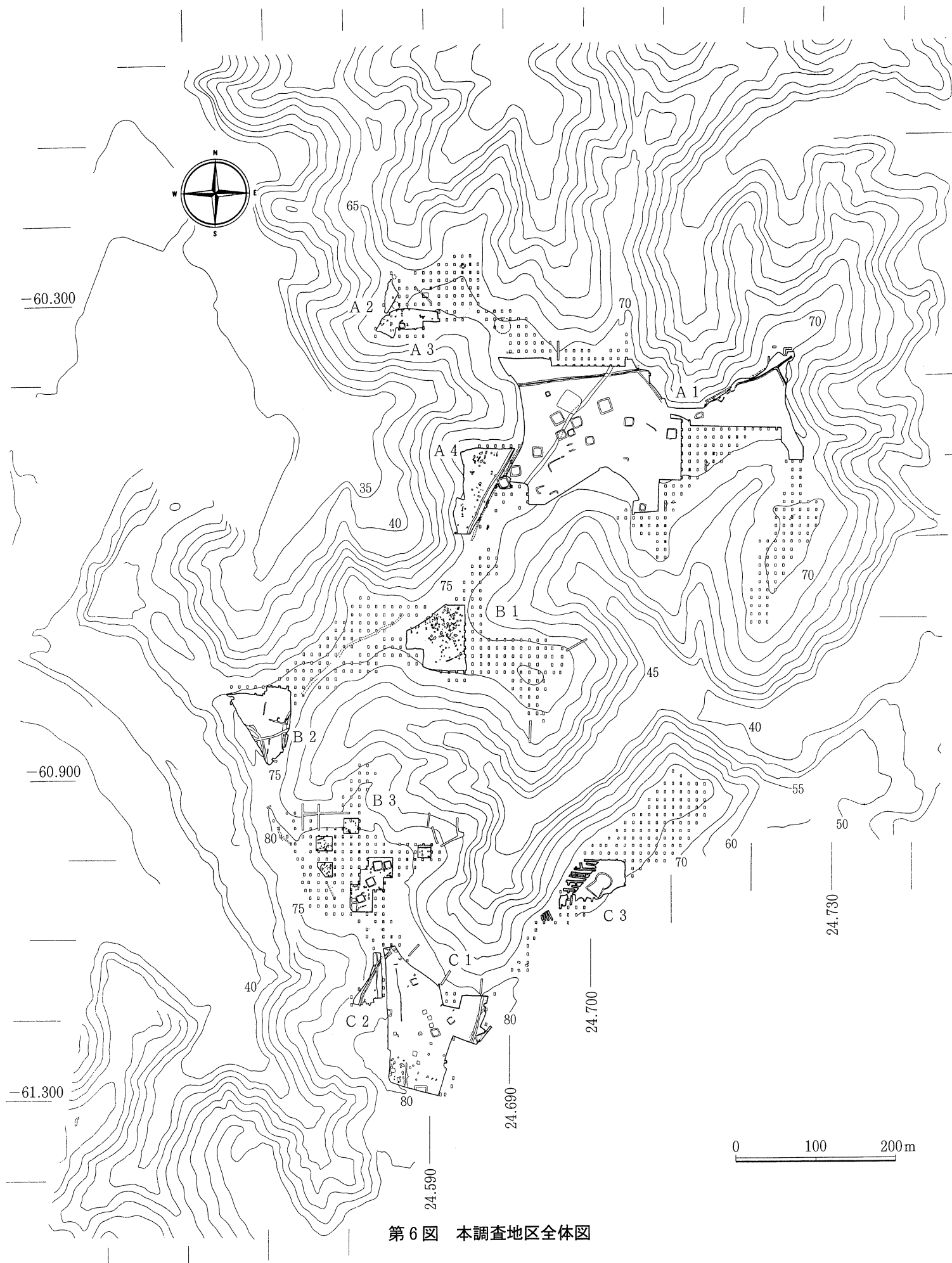
地区名	新	旧	地区名	新	旧	地区名	新	旧
A 2区	A 2-1土	—	B 1区	B 1-1住	S K 21	C 1区	C 1-5住	(1)
A 3区	A 3-1住	S I 01		B 1-1土	S K 01		C 1-6住	(2)
	A 3-1方	S X 02		B 1-2土	S K 02		C 1-7住	004
	A 3-1土	S K 06		B 1-3土	S K 06		C 1-8住	003 (3)
	A 3-2土	S K 02		B 1-4土	S K 07		C 1-9住	(8)
	A 3-3土	S K 03		B 1-5土	S K 08		C 1-10住	(10)
	A 3-4土	S K 04		B 1-6土	S K 10		C 1-11住	(11)
	A 3-5土	S K 13		B 1-7土	S K 11		C 1-1溝	41
	A 3-6土	S K 15		B 1-8土	S K 18		C 1-2溝	42
	A 3-7土	S K 17		B 1-9土	S K 30		C 1-3溝	39
	A 3-8土	S K 16		B 1-10土	S K 20		C 1-4溝	40
	A 3-9土	S K 18		B 1-11土	S K 32		C 1-5溝	56
	A 3-10土	S K 19		B 1-12土	S K 33		C 1-6溝	57
	A 3-11土	S K 21		B 1-13土	S K 29		C 1-7溝	002
	A 3-12土	S K 20	B 2区	B 2-1道	S D 4		C 1-8溝	64
	A 3-13土	S K 23		B 2-2溝	S D 2		C 1-9溝	65
	A 3-14土	S K 26		B 2-3道	S D 3		C 1-1方	(53)
	A 3-15土	S K 22	B 3区	B 3-1土	S K 01		C 1-2方	(59)
	A 3-16土	S K 25		B 3-2土	S K 03		C 1-3方	(66)
	A 3-17土	S K 24		B 3-3土	S K 04		C 1-4方	(67)
A 4区	A 4-1炉	S K 08		B 3-4土	S K 05		C 1-5方	(001)
	A 4-2炉	S K 03		B 3-5土	S K 06		C 1-6方	(68)
	A 4-3炉	S K 06		B 3-6土	S K 07		C 1-1土	(58)
	A 4-4炉	S K 09		B 3-7土	S K 08		C 1-2土	22
	A 4-5炉	—		B 3-8土	S K 09		C 1-3土	58
	A 4-1土	S K 14		B 3-9土	S K 02		C 1-4土	16
	A 4-2土	S K 12		B 3-1方	S X 01		C 1-5土	50
	A 4-3土	S K 13		B 3-2方	S X 02		C 1-6土	51
	A 4-4土	S K 23		B 3-3方	S X 03		C 1-7土	61
	A 4-5土	(S K 14)		B 3-4方	S K 04		C 1-8土	62
	A 4-6土	S K 7	C 2区	C 2-1土	S K 01		C 1-9土	63
	A 4-7土	S K 11		C 2-2土	S K 02		C 1-10土	54
	A 4-8土	S K 15		C 2-1溝	S D 3		C 1-11土	55
	A 4-9土	S K 10		C 2-2溝	S D 4		C 1-12土	13
	A 4-10土	S K 17		C 2-3溝	S D 1		C 1-13土	14
	A 4-11土	S K 21		C 2-4溝	S D 2		C 1-14土	15
	A 4-12土	S K 22	C 3区	C 3-1前	S X 1		C 1-15土	17
	A 4-13土	S K 24	C 1区	C 1-1遺	P G		C 1-16土	18
	A 4-14土	S K 26		C 1-1炉	1		C 1-17土	19
	A 4-15土	S K 05		C 1-2炉	8		C 1-18土	20
	A 4-1集	S X 02		C 1-3炉	(3)		C 1-19土	21
	A 4-1方	180、S X 01		C 1-4炉	(6)	A 1区	A 1-1遺	176
	A 4-1溝	16		C 1-5炉	7		A 1-2遺	177
B 1区	B 1-1炉	S K 09		C 1-6炉	5		A 1-1集	42
	B 1-2炉	S K 13		C 1-7炉	11		A 1-2集	41
	B 1-3炉	S K 03		C 1-8炉	10		A 1-3集	92
	B 1-4炉	S K 04		C 1-9炉	2		A 1-4集	17
	B 1-5炉	S K 05		C 1-10炉	4		A 1-5集	35
	B 1-6炉	S K 16		C 1-11炉	52		A 1-6集	34
	B 1-7炉	S K 23		C 1-12炉	60		A 1-1凹	19
	B 1-8炉	S K 24		C 1-13炉	12		A 1-1炉	64
	B 1-9炉	S K 12		C 1-1住	9		A 1-2炉	38
	B 1-10炉	S K 14		C 1-2住	6		A 1-3炉	43
	B 1-11炉	S K 15		C 1-3住	(5)		A 1-4炉	44
	B 1-12炉	S K 17		C 1-4住	(7)		A 1-5炉	45

※ 土=土坑、住=住居跡、方=方形区画墓、炉=炉穴群、集=遺物集中地点、溝=溝状遺構、道=道路状遺構、前=前方後円墳、遺=遺構、凹=窪地遺構、石=集石遺構

第2表 新旧遺構名称对照表(2)

地区名	新	旧	地区名	新	旧	地区名	新	旧
A 1 区	A 1-6 炉	53	A 1 区	A 1-19 土	59	A 1 区	A 1-74 土	157
	A 1-7 炉	55		A 1-20 土	59		A 1-75 土	160
	A 1-8 炉	56		A 1-21 土	74		A 1-76 土	161
	A 1-9 炉	57		A 1-22 土	73		A 1-77 土	162
	A 1-10 炉	61		A 1-23 土	77		A 1-78 土	163
	A 1-11 炉	68		A 1-24 土	78		A 1-79 土	164
	A 1-12 炉	80		A 1-25 土	79		A 1-80 土	166
	A 1-13 炉	81		A 1-26 土	85		A 1-81 土	165
	A 1-14 炉	82		A 1-27 土	86		A 1-82 土	167
	A 1-15 炉	83		A 1-28 土	88		A 1-83 土	168
	A 1-16 炉	89		A 1-29 土	87		A 1-84 土	170
	A 1-17 炉	91		A 1-30 土	96		A 1-85 土	171
	A 1-18 炉	93、94、95		A 1-31 土	101		A 1-86 土	173
	A 1-19 炉	18		A 1-32 土	(101)		A 1-87 土	111
	A 1-20 炉	152		A 1-33 土	100		A 1-88 土	172
	A 1-21 炉	153		A 1-34 土	102		A 1-89 土	174
	A 1-1 住	7、8		A 1-35 土	103		A 1-90 土	175
	A 1-2 住	66		A 1-36 土	104		A 1-1 方	14
	A 1-3 住	75		A 1-37 土	105		A 1-2 方	31
	A 1-4 住	46		A 1-38 土	106		A 1-3 方	25
	A 1-5 住	58		A 1-39 土	107		A 1-4 方	22
	A 1-6 住	49		A 1-40 土	108		A 1-5 方	13
	A 1-7 住	76		A 1-41 土	109		A 1-6 方	150
	A 1-8 住	136		A 1-42 土	110		A 1-7 方	21
	A 1-9 住	98		A 1-43 土	112		A 1-8 方	20
	A 1-10 住	97		A 1-44 土	113		A 1-9 方	27
	A 1-11 住	72		A 1-45 土	114		A 1-10 方	90
	A 1-12 住	115		A 1-46 土	117		A 1-11 方	24
	A 1-13 住	116		A 1-47 土	118		A 1-12 方	23
	A 1-14 住	124		A 1-48 土	119		A 1-13 方	29、145
	A 1-15 住	125		A 1-49 土	120		A 1-14 方	30
	A 1-16 住	121		A 1-50 土	122		A 1-15 方	28
	A 1-17 住	135		A 1-51 土	123		A 1-16 方	11
	A 1-18 住	133		A 1-52 土	126		A 1-17 方	12
	A 1-19 住	137		A 1-53 土	128		A 1-1 掘	26
	A 1-20 住	99		A 1-54 土	139		A 1-2 掘	6
	A 1-1 石	40		A 1-55 土	140		A 1-1 溝	10
	A 1-1 土	3		A 1-56 土	141		A 1-2 溝	15
	A 1-2 土	4		A 1-57 土	142		A 1-3 溝	2
	A 1-3 土	5		A 1-58 土	145		A 1-4 溝	2
	A 1-4 土	8		A 1-59 土	138		A 1-5 溝	13
	A 1-5 土	36		A 1-60 土	134		A 1-6 溝	32
	A 1-6 土	37		A 1-61 土	150		A 1-7 溝	33
	A 1-7 土	47		A 1-62 土	143		A 1-8 溝	132
	A 1-8 土	48		A 1-63 土	144		A 1-9 溝	132
	A 1-9 土	50		A 1-64 土	146		A 1-10 溝	16
	A 1-10 土	51		A 1-65 土	147		A 1-11 溝	9
	A 1-11 土	52		A 1-66 土	156		A 1-1 塚	一本松塚, 1
	A 1-12 土	60		A 1-67 土	148		A 1-2 塚	18
	A 1-13 土	62		A 1-68 土	148		A 1-1 埋	39
	A 1-14 土	63		A 1-69 土	149			
	A 1-15 土	67		A 1-70 土	151			
	A 1-16 土	71		A 1-71 土	155			
	A 1-17 土	69		A 1-72 土	158			
	A 1-18 土	70		A 1-73 土	159			

※ 炉=炉穴群、住=住居跡、石=集石遺構、土=土坑、方=方形区画墓、掘=掘立柱建物跡、溝=溝状遺構、塚=塚状遺構、埋=埋藏



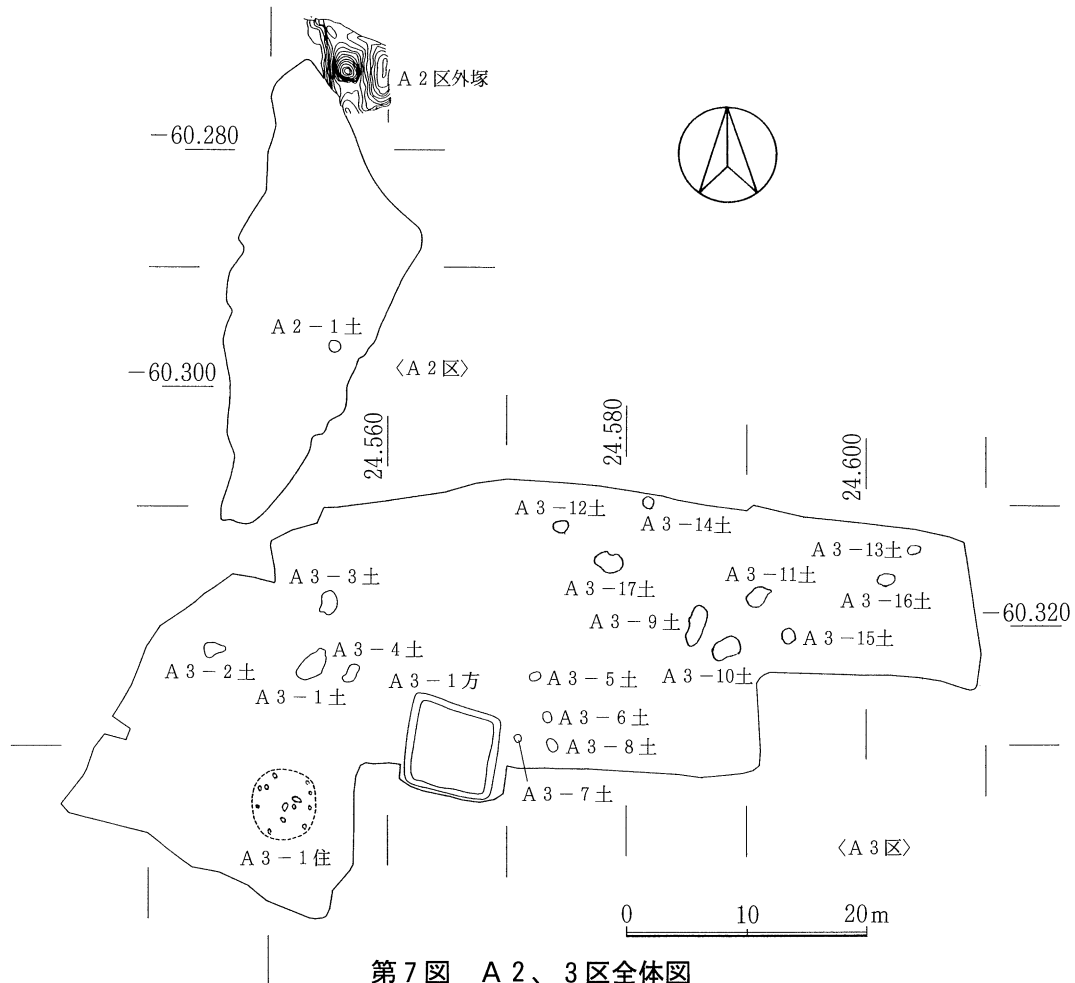
第6図 本調査地区全体図

Ⅱ 遺構と遺物

本書では、各地区別（第6図）に次の順序により分けて説明する。

A 2、3区、A 4区、B 1区、B 2区、B 3区、C 2区、C 3区、C 1区、A 1区

1 A 2、3区（第7図）



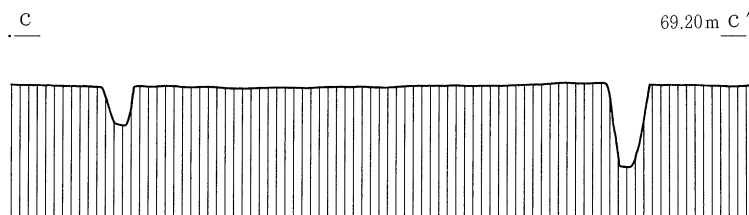
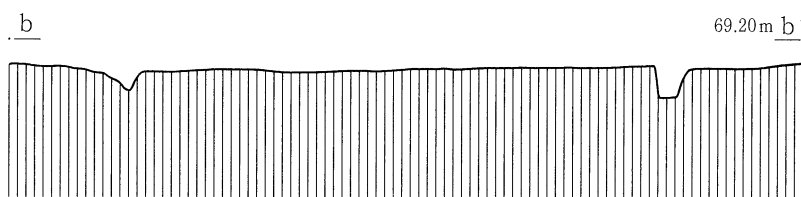
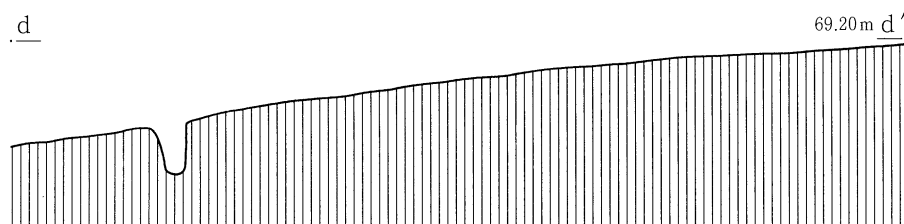
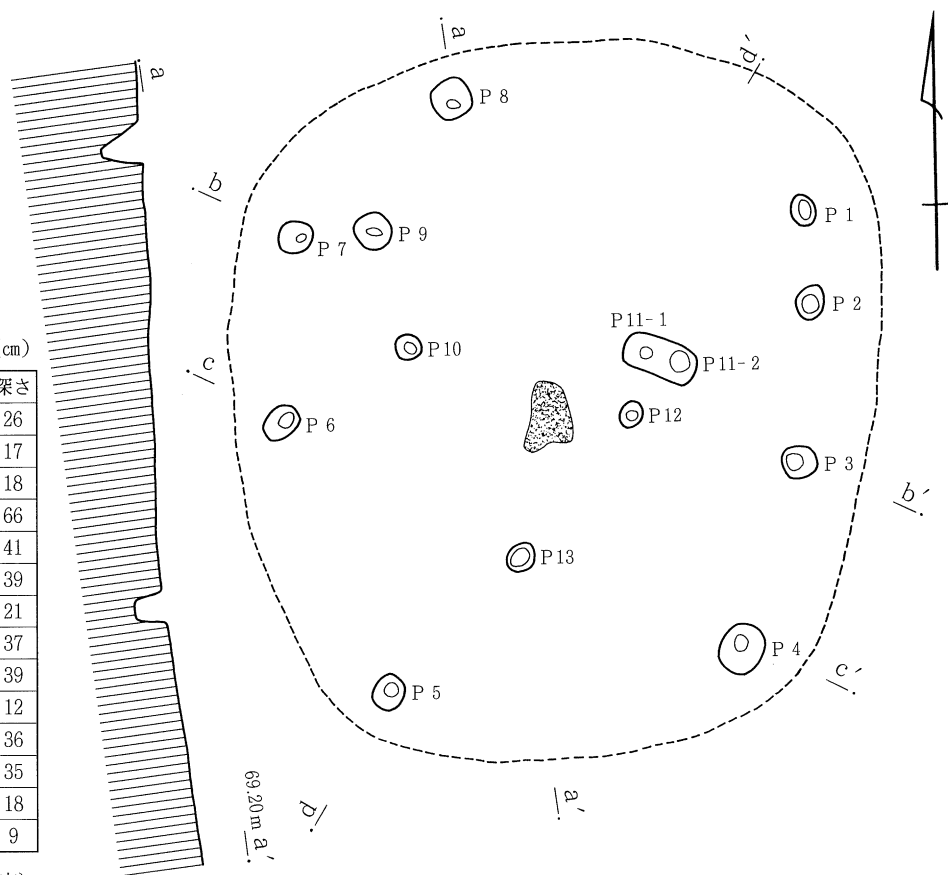
当地区は、荻原野遺跡の最も北西側に位置し、A 1区と南東側で接続している。西側は、引田川の大きな開折谷が存在し、北側からも小谷が入り込んでいる。また北西側へは尾根伝いに分目地区集落に下る道がある。A 2、3区のある台地は、さらに北東側へ平坦部が広く延びており、今回調査した地区は、A 2区が当台地の西側斜面上端部、A 3区が南側平坦部である。

検出した遺構は、A 2区から土坑1基、A 3区から、縄文時代中期後半の竪穴住居跡1軒、奈良～平安時代の方形区画墓1基、土坑17基である。A 3区の竪穴住居跡（A 3-1号竪穴住居跡 第8図）は、当地区の南西側に1軒だけ存在し、既に竪穴の壁が失われ、炉とピットだけの検出であった。南側斜面に近く床面は南に傾斜している。竪穴は円形と推定され、規模は長径5.68m、短径5.20mを測

A 3 - 1 号住居跡
ピット計測表 (cm)

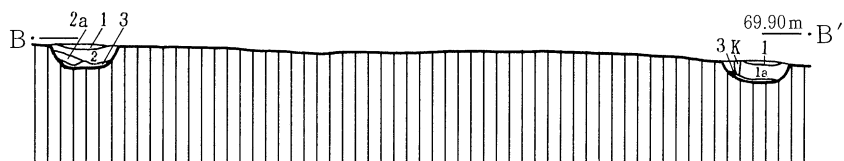
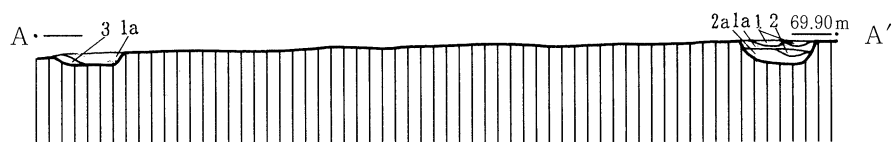
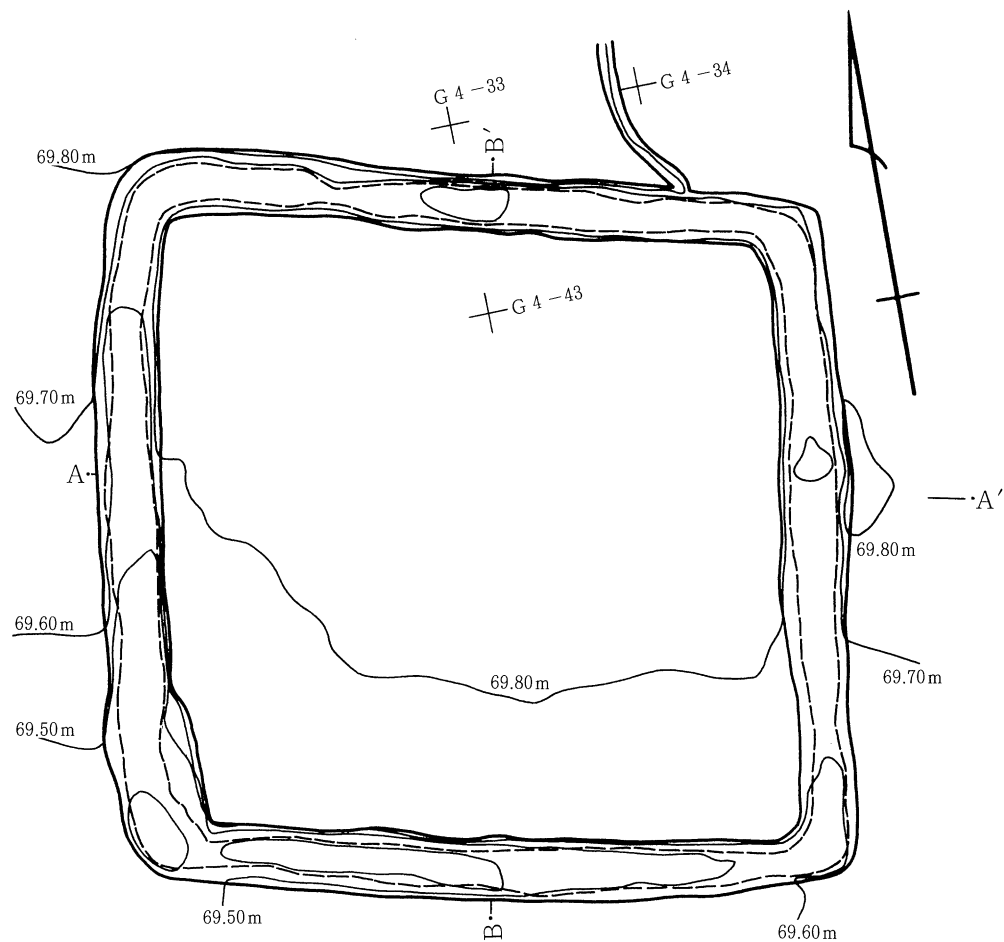
ピット名	上端	下端	深さ
P 1	26×20	17×5	26
P 2	28×23	16×15	17
P 3	29×28	16×14	18
P 4	41×34	14×11	66
P 5	27×25	12×10	41
P 6	31×23	16×10	39
P 7	28×26	9×7	21
P 8	32×31	11×8	37
P 9	31×30	13×7	39
P 10	13×10	10×9	12
P 11-1	(30)×27	10×10	36
P 11-2	(30)×30	17×15	35
P 12	22×18	10×8	18
P 13	27×22	18×13	9

(カッコは推定)



0 2 m

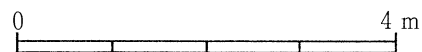
第 8 図 A 3 - 1 号住居跡実測図



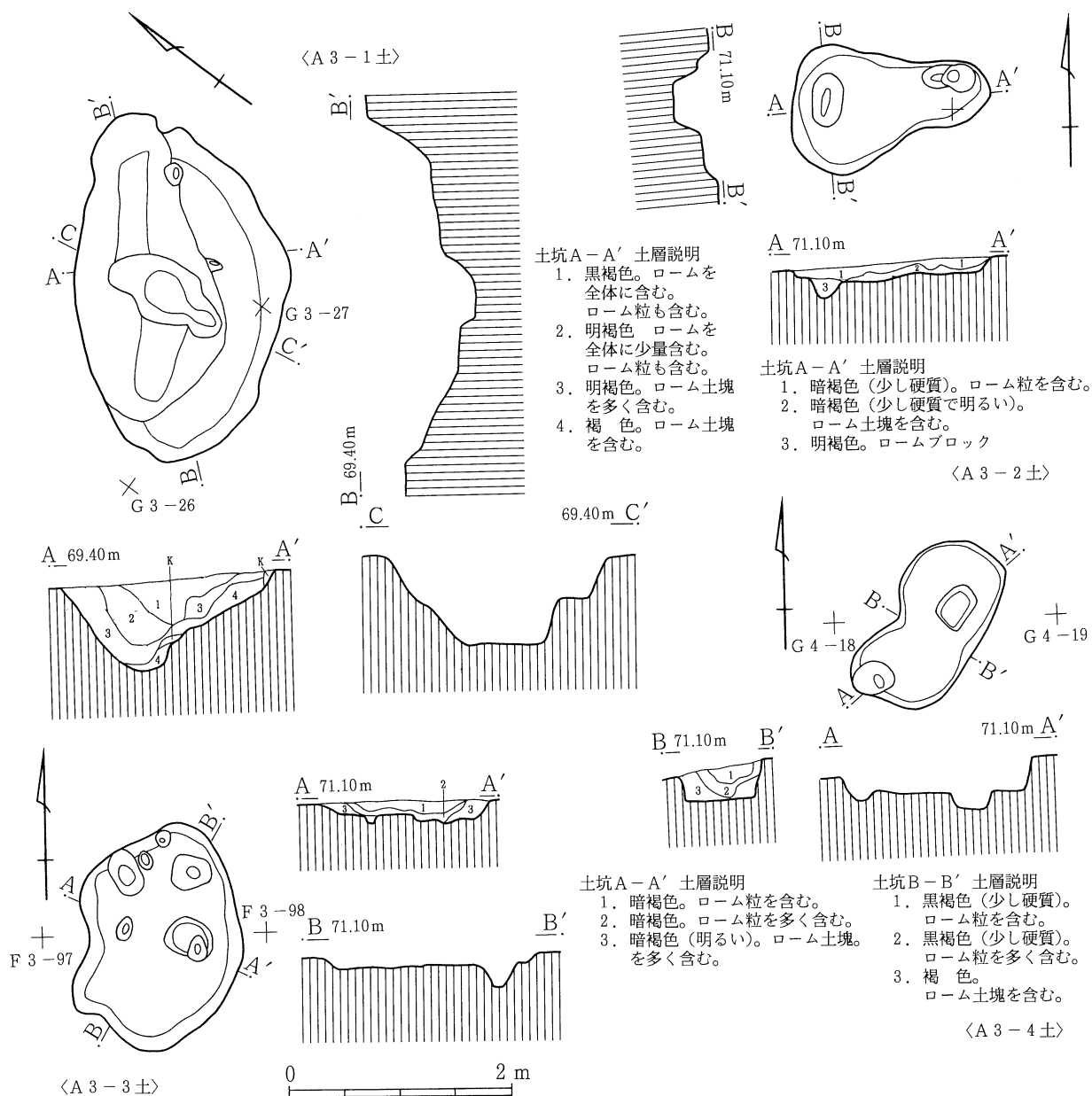
土層説明

1. 褐色。テフラとローム粒を含む。
- 1a. 褐色 (少し暗い)。テフラとローム粒を少量含む。
2. 暗褐色 (少し硬質)。ローム粒を含む。
- 2a. 2よりローム粒を多量に含む。
3. 黄褐色。2a層を少量含む。

※Kは攪乱



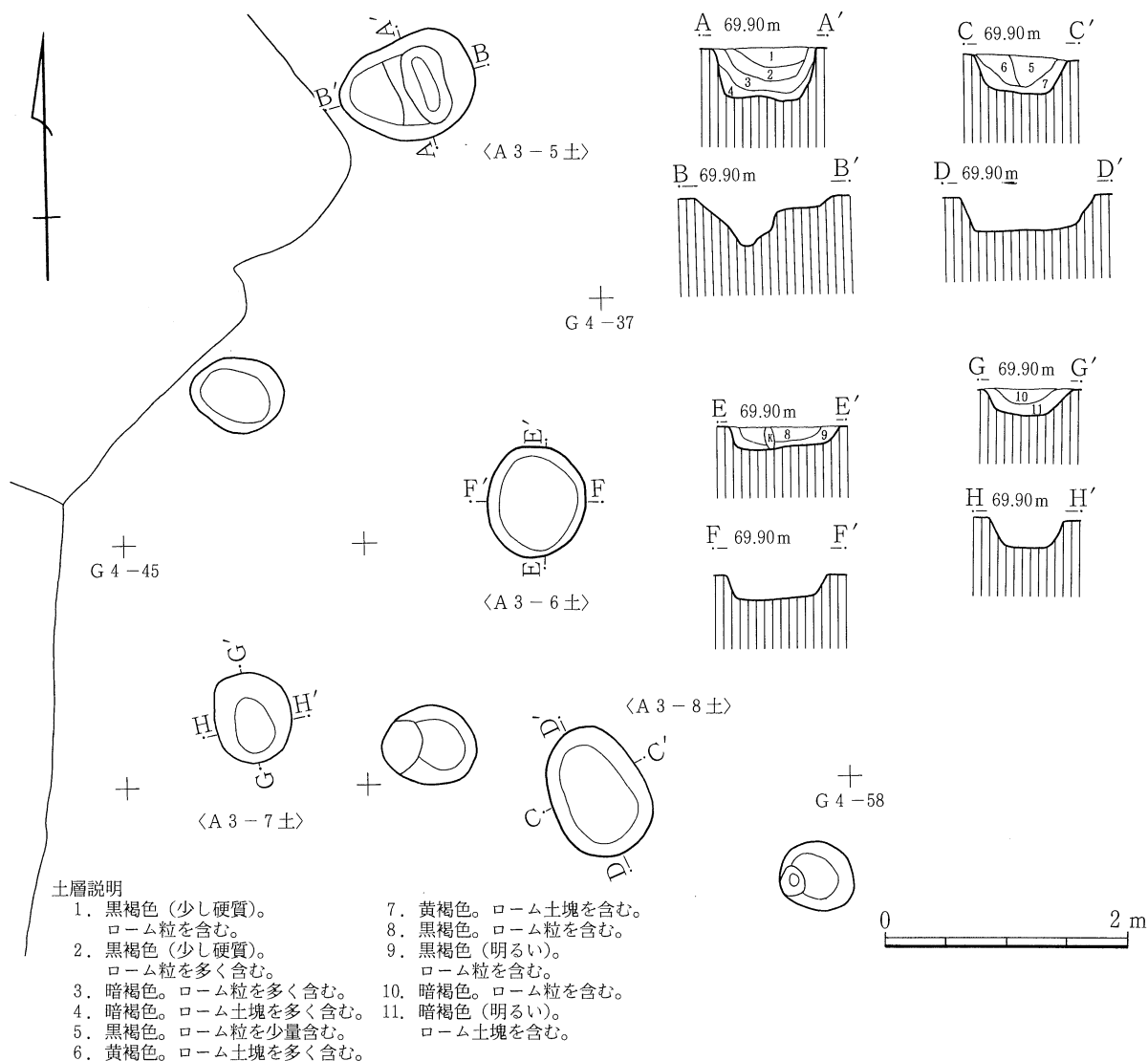
第9図 A3-1号方形区画墓実測図



第10図 A3-1～4号土坑実測図

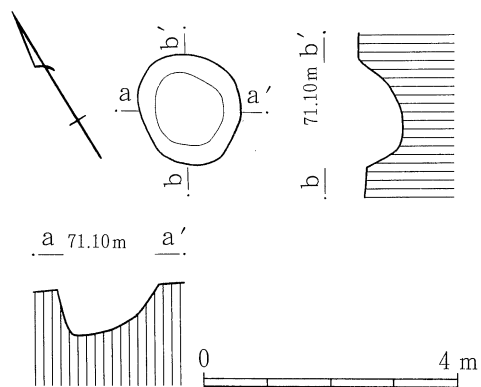
第3表 A2、3区土坑一覧表

番号	土坑番号	挿図番号	旧土坑番号	規模 (cm)			主軸方向	性格	その他
				上端	下端	深さ			
1	A3-1土	第10図	SK06	315×195	—	77	N-49° E		東側の立ち上がり2段、中央部にビット有り。
2	A3-2土	"	SK02	180×120	164×98	15	E-2° -N		ビット2本有り。
3	A3-3土	"	SK03	195×158	183×132	17	N-23° -E		ビット6本有り。
4	A3-4土	"	SK04	167×89	148×80	32	N-32° -E		中央部と南西側にビット有り。
5	A3-5土	第11図	SK13	113×87	82×65	12	E-11° -N		中央部に細長いビット有り。
6	A3-6土	"	SK15	93×80	80×64	20	N-2° -W		
7	A3-7土	"	SK17	73×63	46×30	24	E-11° -W		
8	A3-8土	"	SK16	108×78	84×52	28	N-25° -W		
9	A3-9土	"	SK18	354×141	—	38	N-17° -E		底部が2段の立ち上がりをもつ。
10	A3-10土	"	SK19	241×170	167×121	37	N-51° -E		中央底部に小ビット1本有り。
11	A3-11土	"	SK21	217×163	174×139	19	N-55° -E		端部にビット3本有り。
12	A3-12土	"	SK20	134×98	—	43	E-6° -N		
13	A3-13土	第13図	SK23	112×67	84×34	19	E-18° -N		底部が2段の立ち上がり。
14	A3-14土	"	SK26	103×93	86×83	18	N-35° -W		底部は平坦。
15	A3-15土	"	SK22	97×79	47×35	45	N-13° -W		
16	A3-16土	"	SK25	145×105	—	43	E-5° -N		
17	A3-17土	"	SK24	235×168	—	43	E-11° -S		
18	A2-1土	第12図	—	92×79	16×54	36	N-1° -E		A-2区



第11図 A 3 - 5 ~ 12号土坑実測図

る。ピットは14本存在する。炉はほぼ中央に存在し、深鉢の口縁部が埋設されていた。出土遺物はこの土器だけで（第15図1～4）、沈線で区画された磨消縄文をもち加曽利EⅡ式と考えられる。方形区画墓（A 3 - 1号方形区画墓、第9図）は、南側縁辺部に位置し、規模は、長軸7.98m、短軸7.66m、周溝幅43～98cm、最大深さ25cm、主軸方向はN-10° - Eである。出土遺物はない。18基ある土坑（第10～13図、第3表）は、A 2、3区とも性格は不明である。出土遺物は、A 3 - 1号土坑より口縁部片（第15図5）、A 3 - 9号土坑より底部片（第15図6）が検出されているが他の土坑からは認められていない。口縁部片は横位の平行沈線を配し三戸式とみられる。底部片は平底で厚手であり、中期頃の所産と考えている。この他にグリッドで取り上げた主な遺物を掲載した（第16図）。1～4は、早期前半の撚糸文系で、1は夏島式、2が井草Ⅱ式、3、4は、稲荷台式とみられる。5～10は、早期中葉の沈線文系で、5は三戸式、6～10は田戸



第12図 A 2 - 1号土坑実測図

土層説明 A 3-9号土坑 (A-A')

1. 黒褐色 (少し硬質で粘性もある)。ローム粒を含む。
2. 茶褐色。黒褐色土とブロック状を呈する。
3. 黒褐色。ローム粒を多く含む。
4. 茶褐色。ローム粒を含む。
5. ローム土塊

A 3-11号土坑 (A-A')

1. 黒褐色。ローム粒を含む。
2. 暗褐色。ローム粒を多く含む。

A 3-13号土坑 (A-A')

1. 黒褐色。ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色。ローム土塊を多く含む。

A 3-15号土坑 (A-A')

1. 黒褐色。テフラを含む。
2. 黒褐色 (暗い)。ローム粒を含む。
3. 黒褐色。軟質のローム土塊を多く含む。
4. 褐色。ローム土塊をブロック状に含む。

A 3-17号土坑 (A-A')

1. 黒褐色。軟質ローム土塊を含む。
2. 暗褐色。ローム粒3mmを含む。
3. 褐色。ローム粒を含む。

A 3-12号土坑 (C-C')

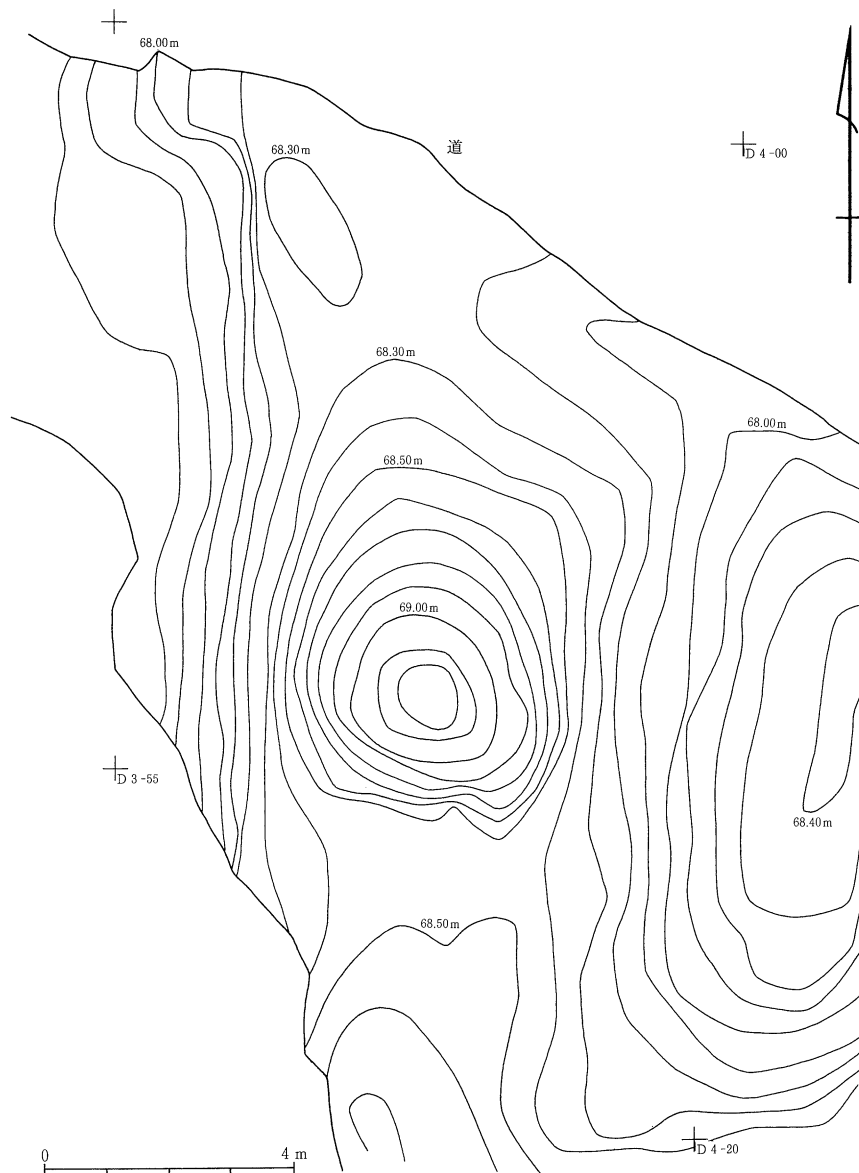
1. 黒褐色 (暗い)。ローム粒を多く含む。
2. 茶褐色 (暗い)。ローム粒を含む。
3. 茶褐色。黒褐色土塊を多く含む。
4. 暗褐色。ローム土塊を多く含む。
5. 褐色。

A 3-10号土坑 (A-A')

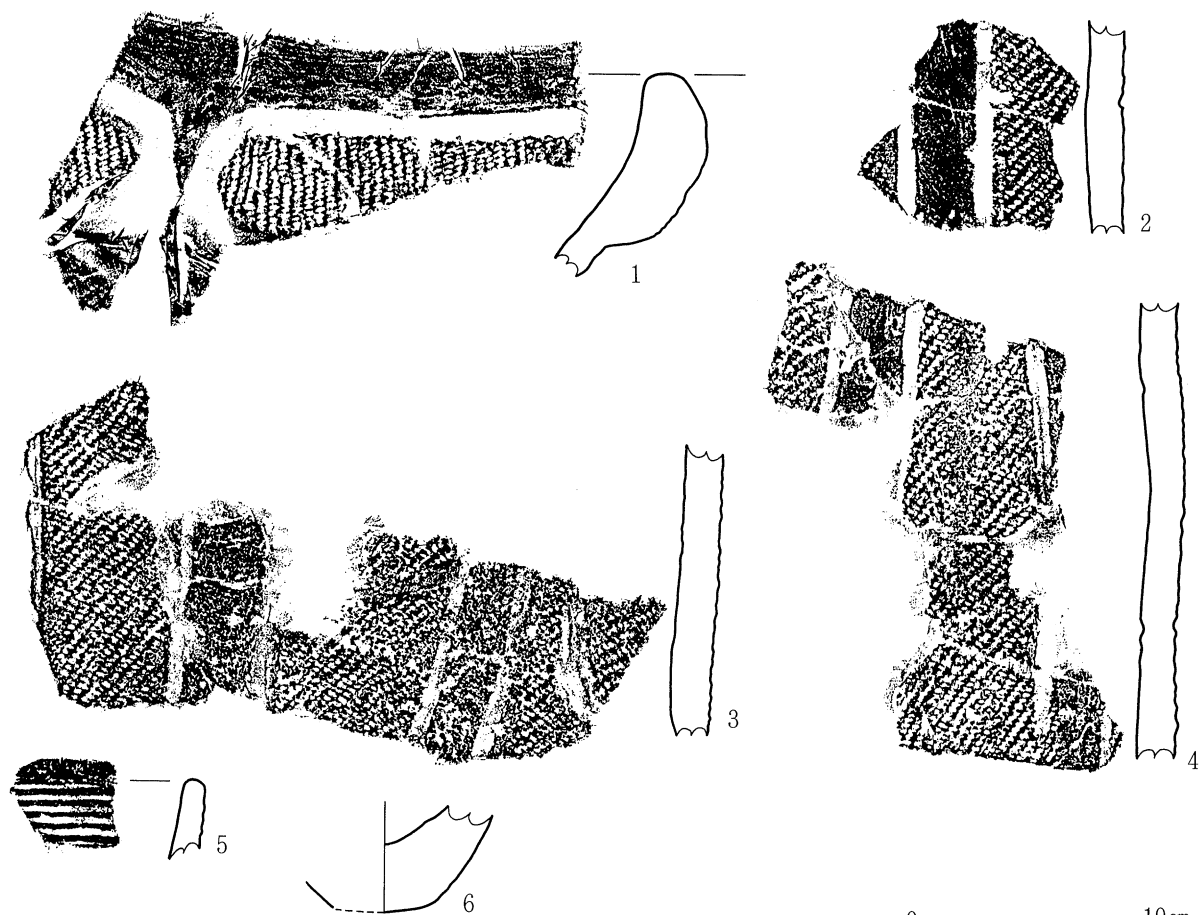
1. 黒褐色。ローム粒を多く含む。
2. 黒褐色。ローム粒 (1より大きい) を多く含む。
3. 暗褐色。ローム土塊を含む。
4. 軟質のロームブロック。
5. 黒褐色。ローム粒を多く含む。1より明るい。

A 3-16号土坑 (A-A')

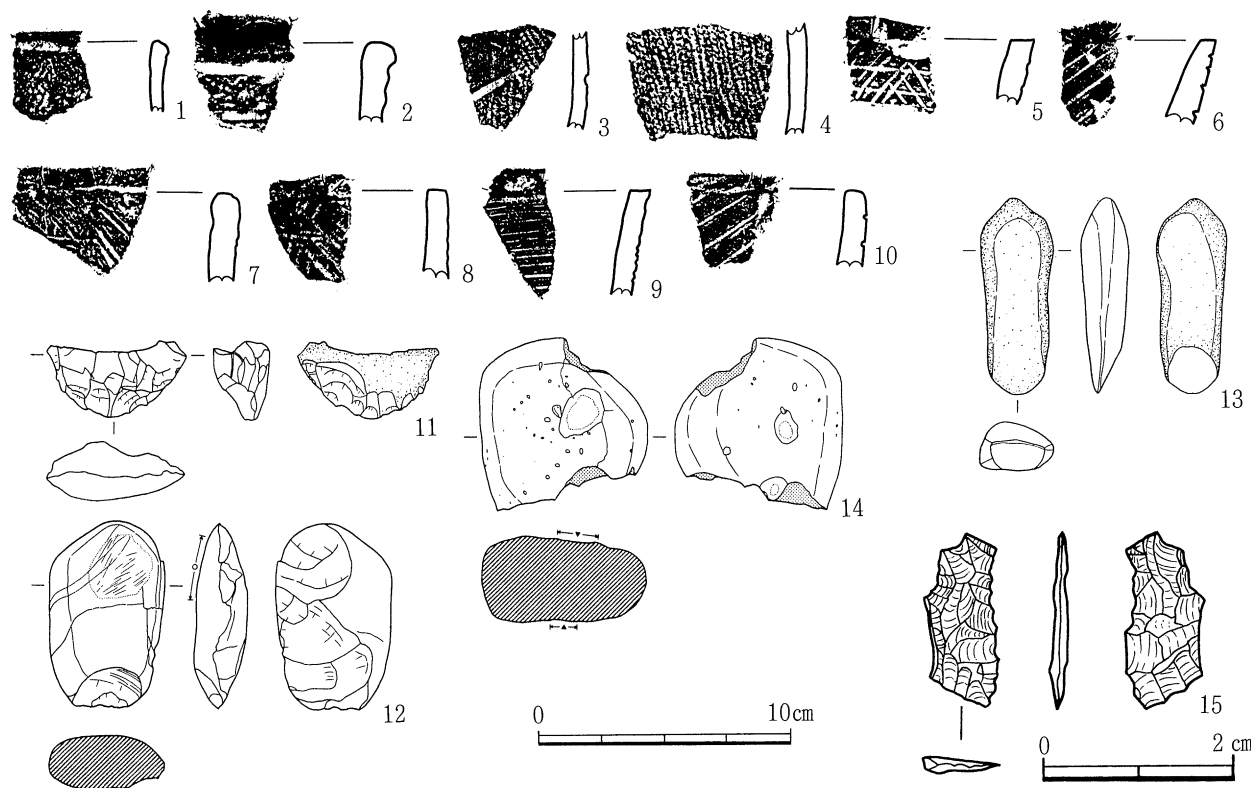
1. 黒褐色。ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色。ローム粒を含む。
3. 褐色。ローム土塊をブロック状に含む。



第14図 A 2 区外塚状遺構実測図



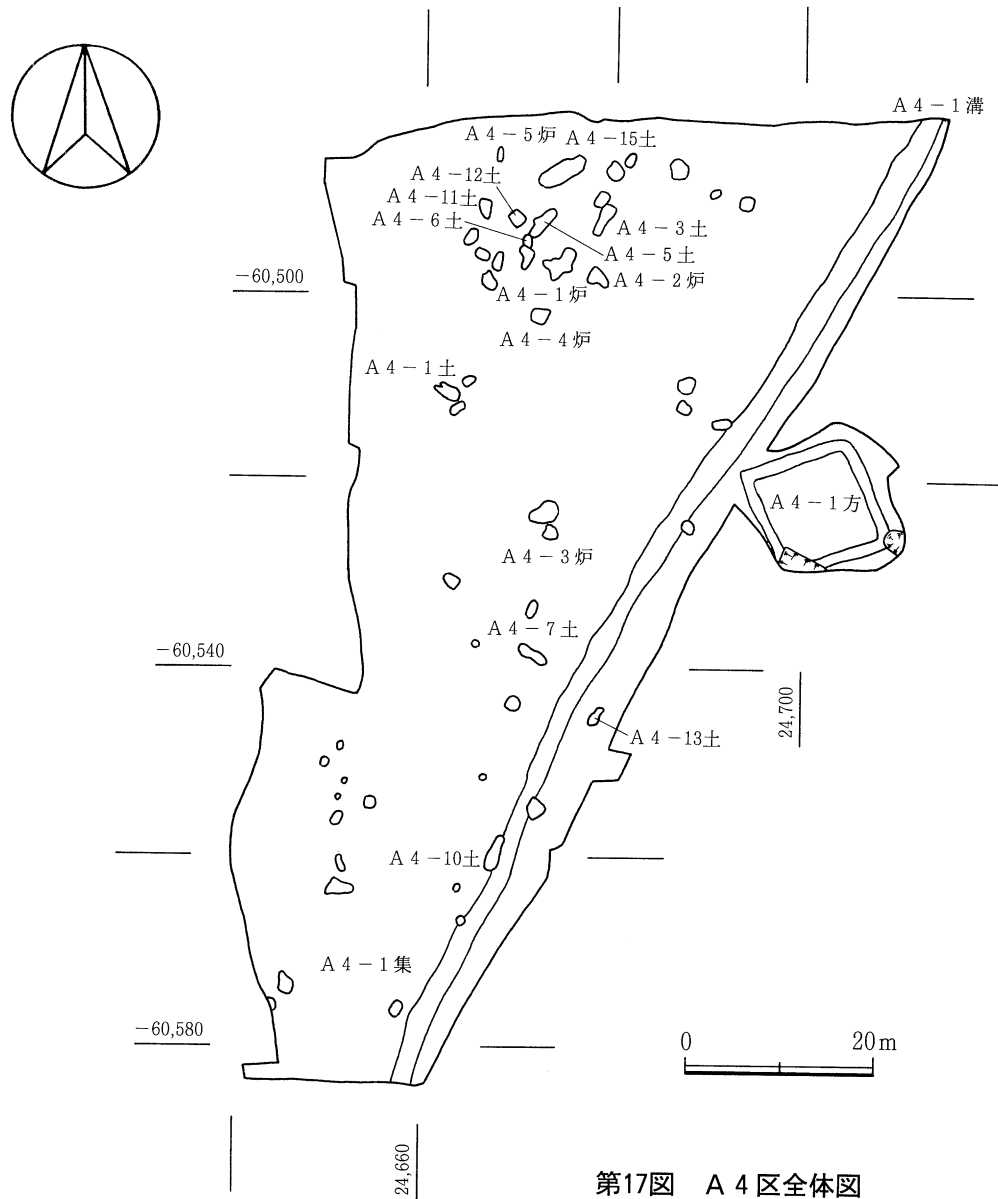
第15図 A 3区出土遺物実測図



第16図 A 3区グリッド出土遺物実測図

下層式と考えられる。11～15は石器類で、11は、打製石斧の刃部付近の破片で、12、13も石斧で、12は打製、上部は敲き石としても使用され、13は、刃部が研磨により作られている。14は凹石で両面に磨耗による凹みがつく。15は黒曜石製の剥片である。なお石器の重さなどについては、第13～15表を参照。

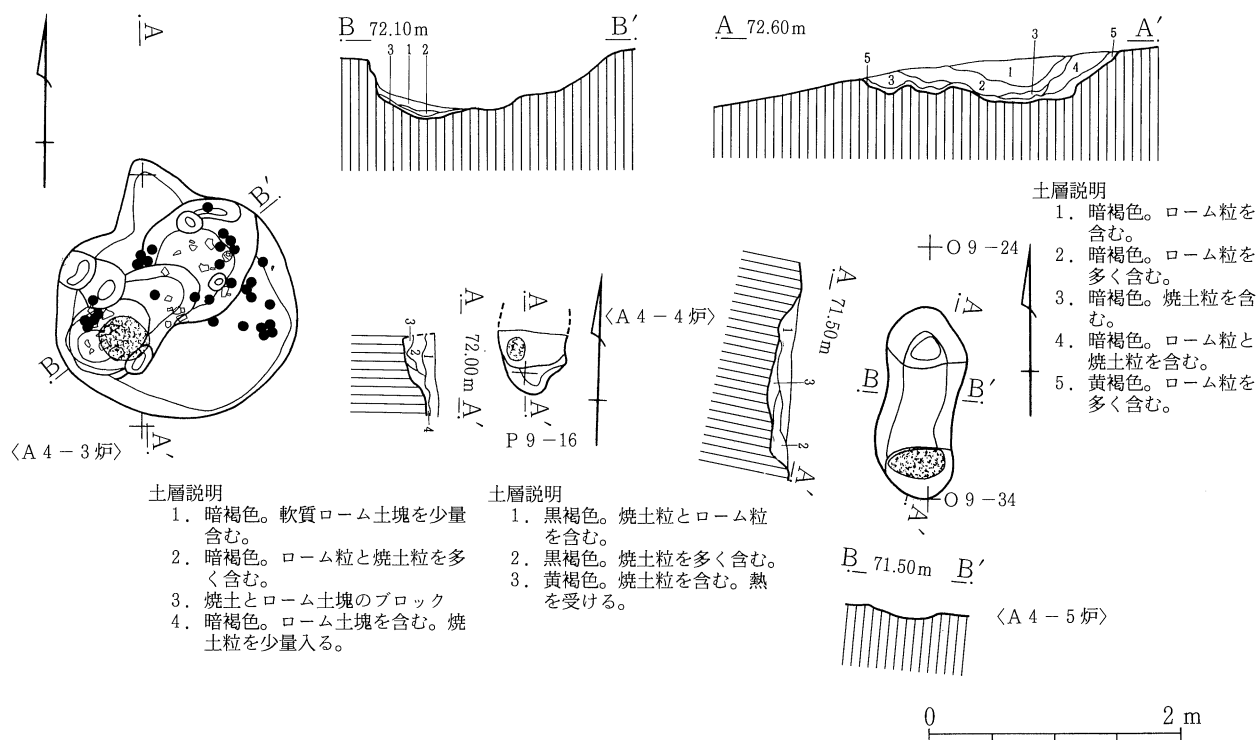
また、A 2 区の北東側に近接して小さな塚が存在する。本調査範囲ではないが参考に地形図だけ掲載した。塚は方形と考えられ、規模は長軸 7 m、短軸 5 m、高さ 90cm を測る。この塚の東側にも高まりがあるがこれは自然地形である。この塚は、A 2 区の北側に存在する尾根上の道の端にあり、引田地区と新生地区の境界付近に位置し、いわゆる「境界塚」としての性格が推測される。(第14図)



第17図 A 4 区全体図

2 A 4 区 (第17図)

当地区は、遺跡の北西側で引田川開折谷の最奥部にあたる。また A 1 区の西端隣接部でもある。検出した遺構は、縄文時代早期後半の炉穴群 5 群、土坑 15 基、土器集中地点 1 ヶ所、方形区画墓 1 基で



第19図 A 4 - 3 ~ 5 号炉穴実測図

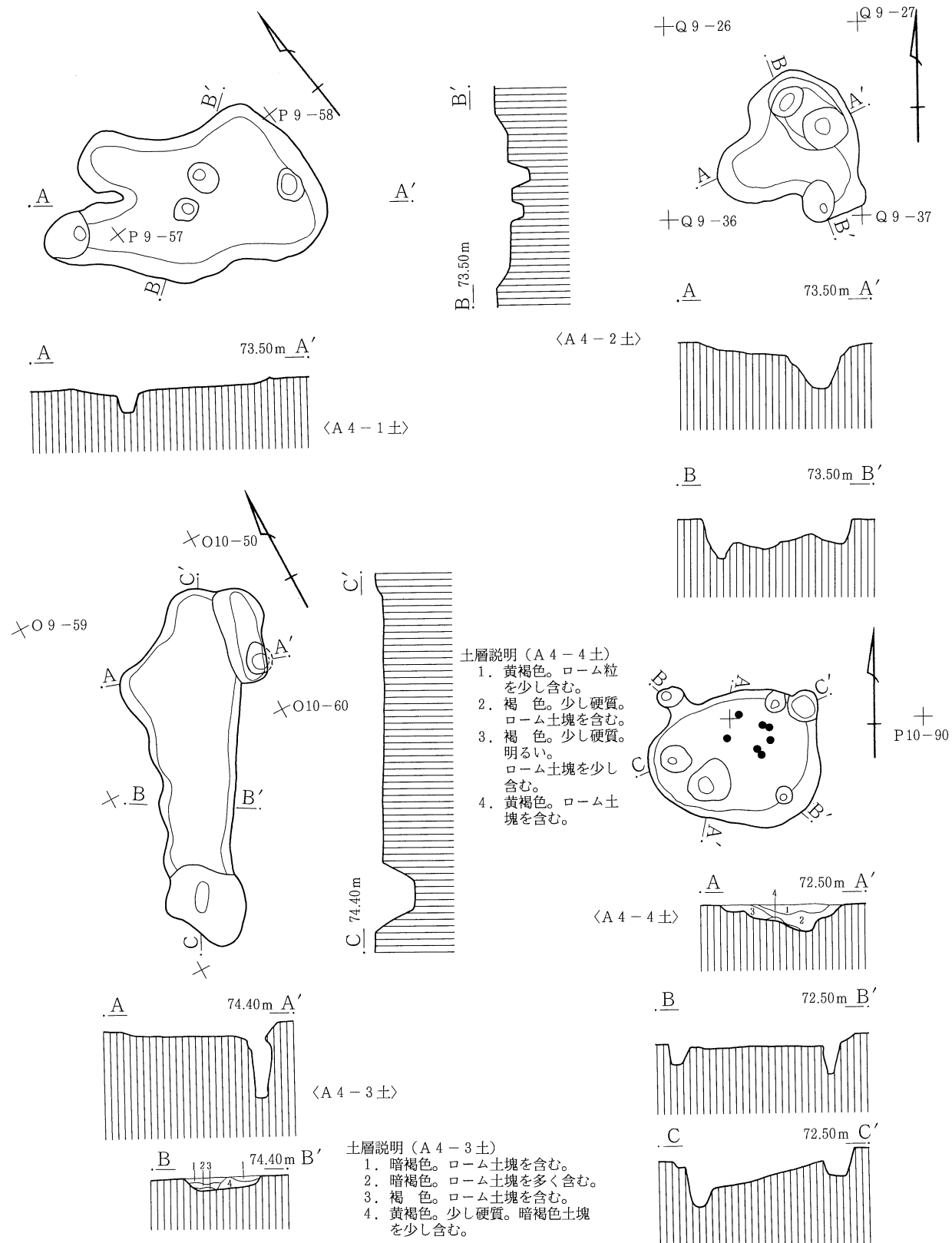
第 4 表 A 4 区土坑一覧表

() 推定値

番号	土 坑 番 号	挿 図 番 号	旧土坑番 号	規 模 (cm)			主 軸 方 向	性 格	そ の 他
				上 端	下 端	深 さ			
1	A 4 - 1	第20図	S K 14	295×173	234×120	17	E - 30° - S		底部にビット 4 本有り。
2	A 4 - 2	"	S K 12	160×154		31	N - 24° - W		" " 3 本 "
3	A 4 - 3	"	S K 13	368×127	277×109	10	N - 31° - E		ビットは 2 ケ所。
4	A 4 - 4	"	S K 23	189×141	163×115	31	E - 1° - S		
5	A 4 - 5	第21図	S K 14	(130)×-	53×-	93	N - 28° - E	陥穴?	底部中央部に浅いビット 1 本有り。
6	A 4 - 6	"	S K 7	133×83	117×67	89	N - 33° - W	陥穴	" " 。
7	A 4 - 7	"	S K 11	204×98	163×20	63	N - 21° - E	"	
8	A 4 - 8	"	S K 15	121×85	82×58	59	N - 21° - E	"	
9	A 4 - 9	第22図	S K 10	-×103	-×70	24	N - 25° - W		
10	A 4 - 10	"	S K 17	373×140	91×43	60	N - 20° - W		立ち上がりが 2 段。
11	A 4 - 11	"	S K 21	140×135	136×60	35	N - 23° - W		
12	A 4 - 12	第23図	S K 22	179×131	159×92	20	W - 4° - S		
13	A 4 - 13	"	S K 24	250×118	215×47	85	N - 32° - E	陥穴	
14	A 4 - 14	"	S K 26	233×211	170×-	75	N - 29° - W		
15	A 4 - 15	"	S K 05	569×201		95	E - 29° - N		

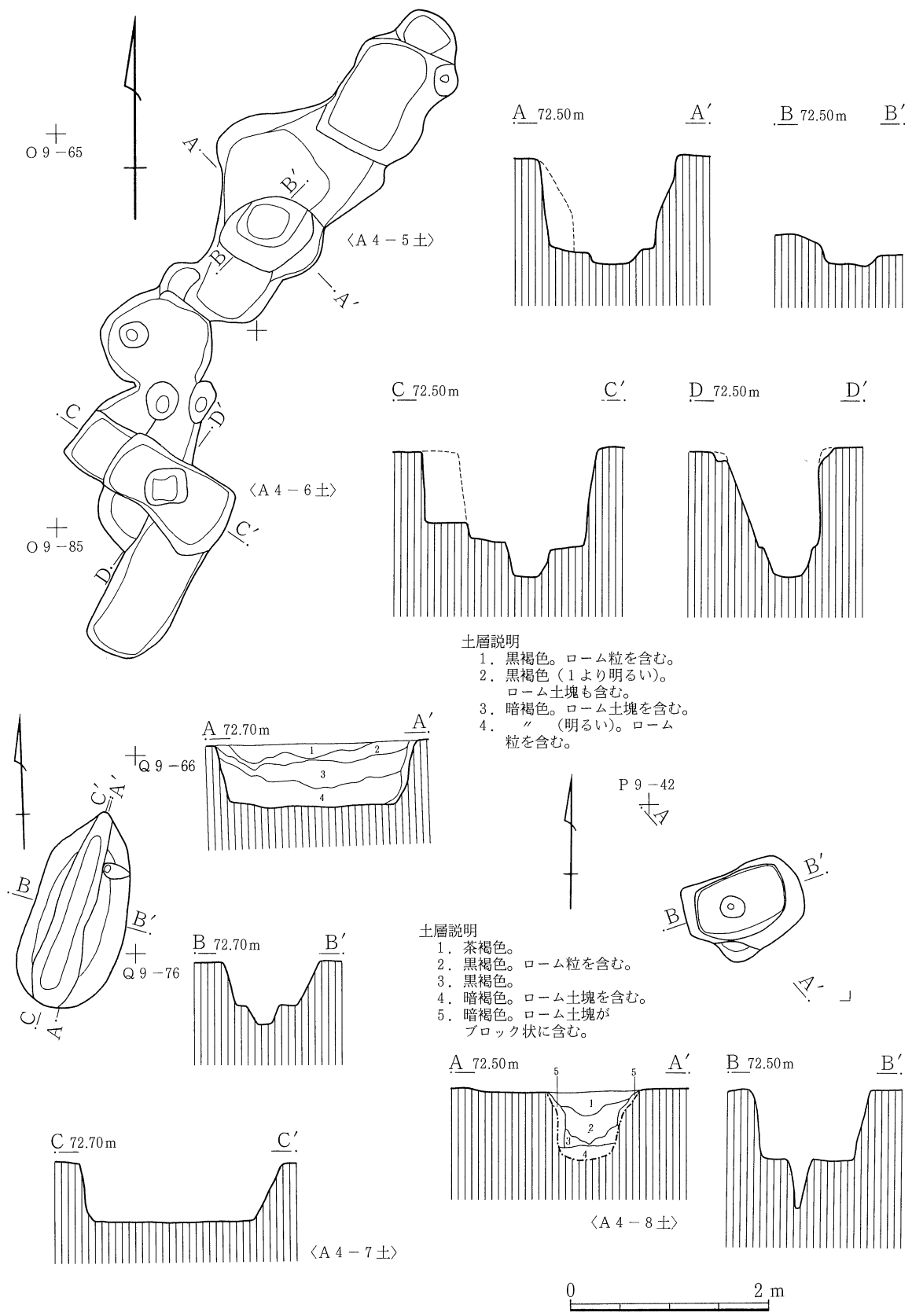
ある。

炉穴群は、当地区の北側に集中し、小谷を南から望む位置である。A 4 - 1 号炉穴群 (第18図) は 4 基以上が重複した形体で焼土は 7 ケ所認められる。出土遺物は (第26図16~21、第27図1~7) 貝殻条痕文を主体に口唇部に刻目状の沈線と口縁部に微隆起線文状の文様で三角形をつくっており、野島式と考えられる。A 4 - 2 号 (第18図) は、2 基以上が重なった形で焼土は 3 ケ所認められる。出土遺物は (第27図8~17、第28図1~6)、貝殻条痕文で胴部の屈曲がなく口縁部文様も簡略化され、茅山上層式とみられる。また、打製石斧が 1 点出土している (第27図17)。A 4 - 3 号 (第19図) は 1 基とみられるが土坑と重複している可能性がある。出土遺物は (第25図1~23、第26図1~6、11) 茅山上層式とみられる。A 4 - 4、5 号も単独の炉穴であるが、4 は土坑に切られている。出土遺物は 1 片ずつで、A 4 - 4 (第26図7) が茅山式期、A 4 - 5 (第26図8) が三戸式と考えられる。土坑は (第 4 表、第20~23図)、A 4 - 5 ~ 8、13号が陥穴とみられる。他の性格は不明である。出土

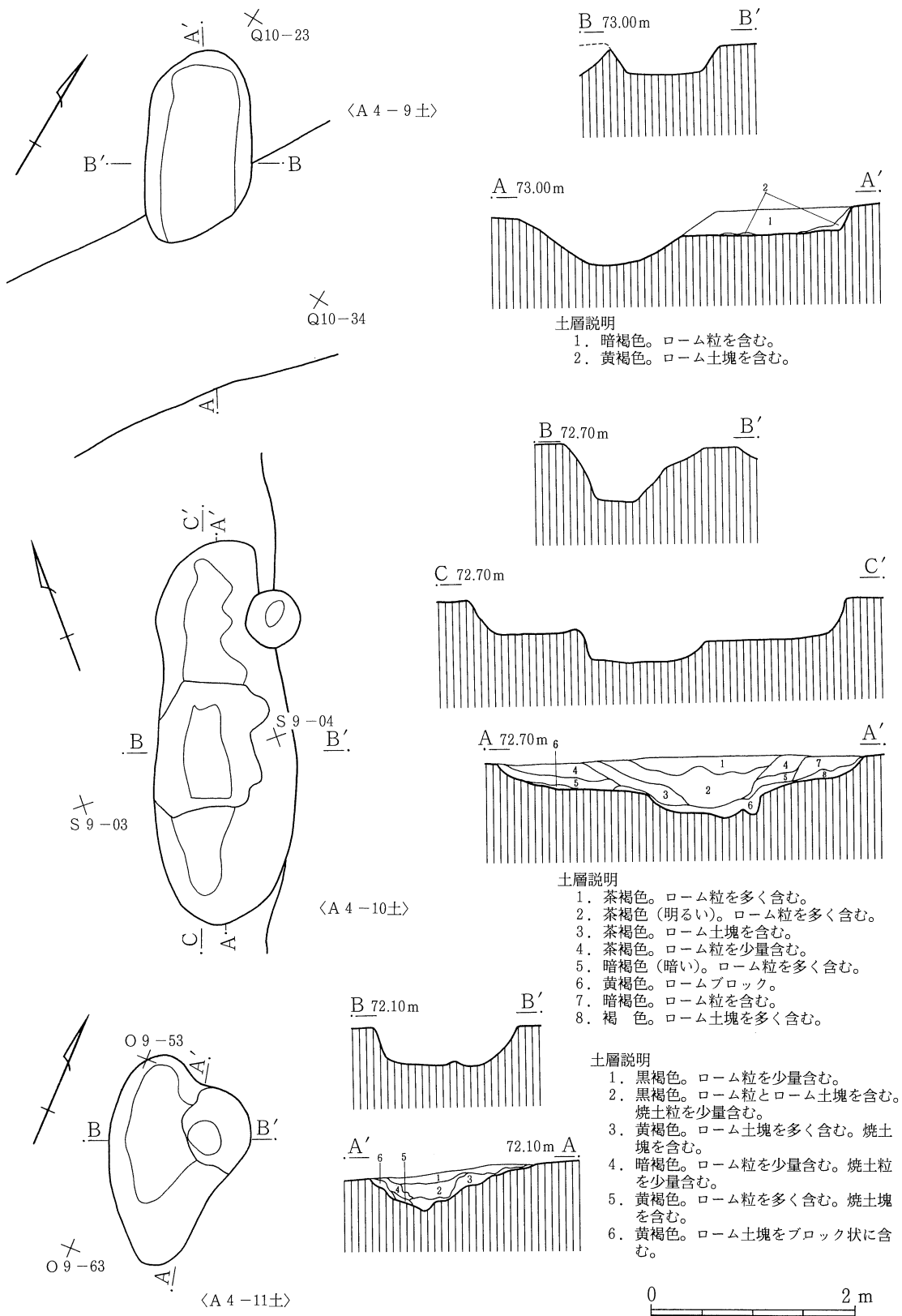


第20図 A4-1~4号土坑実測図

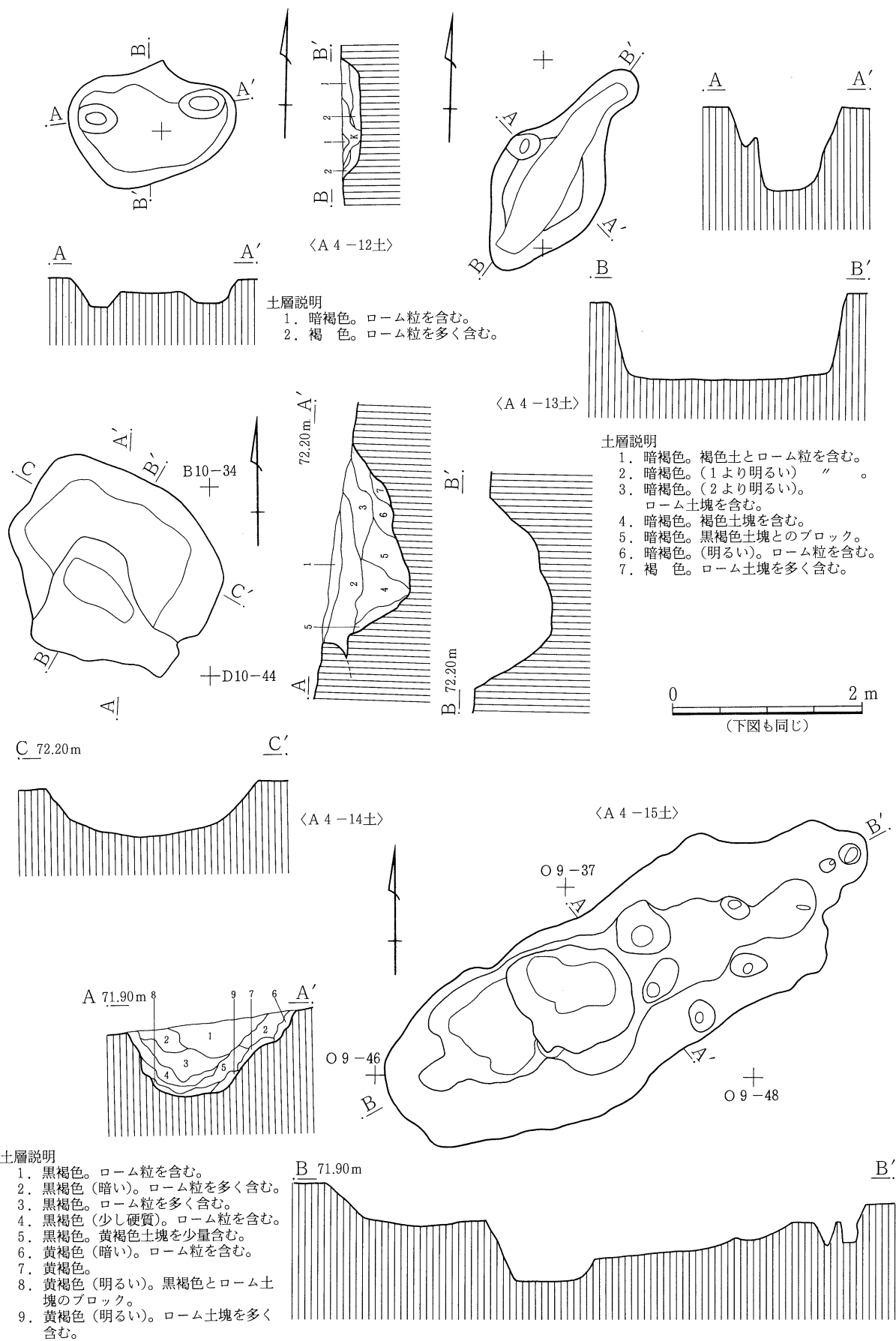
0 2 m

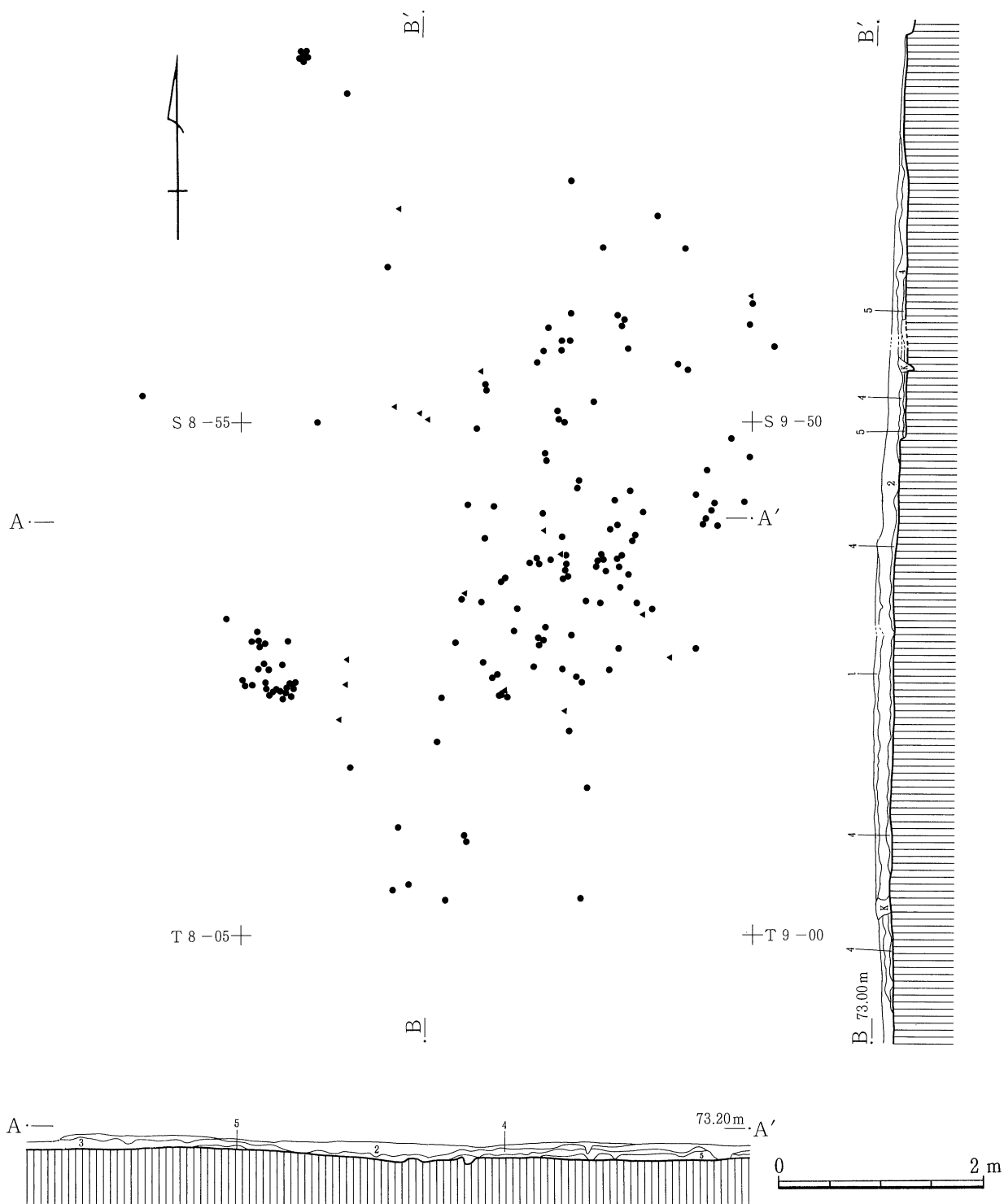


第21図 A4-5～8号土坑実測図



第22図 A4-9~11号土坑実測図

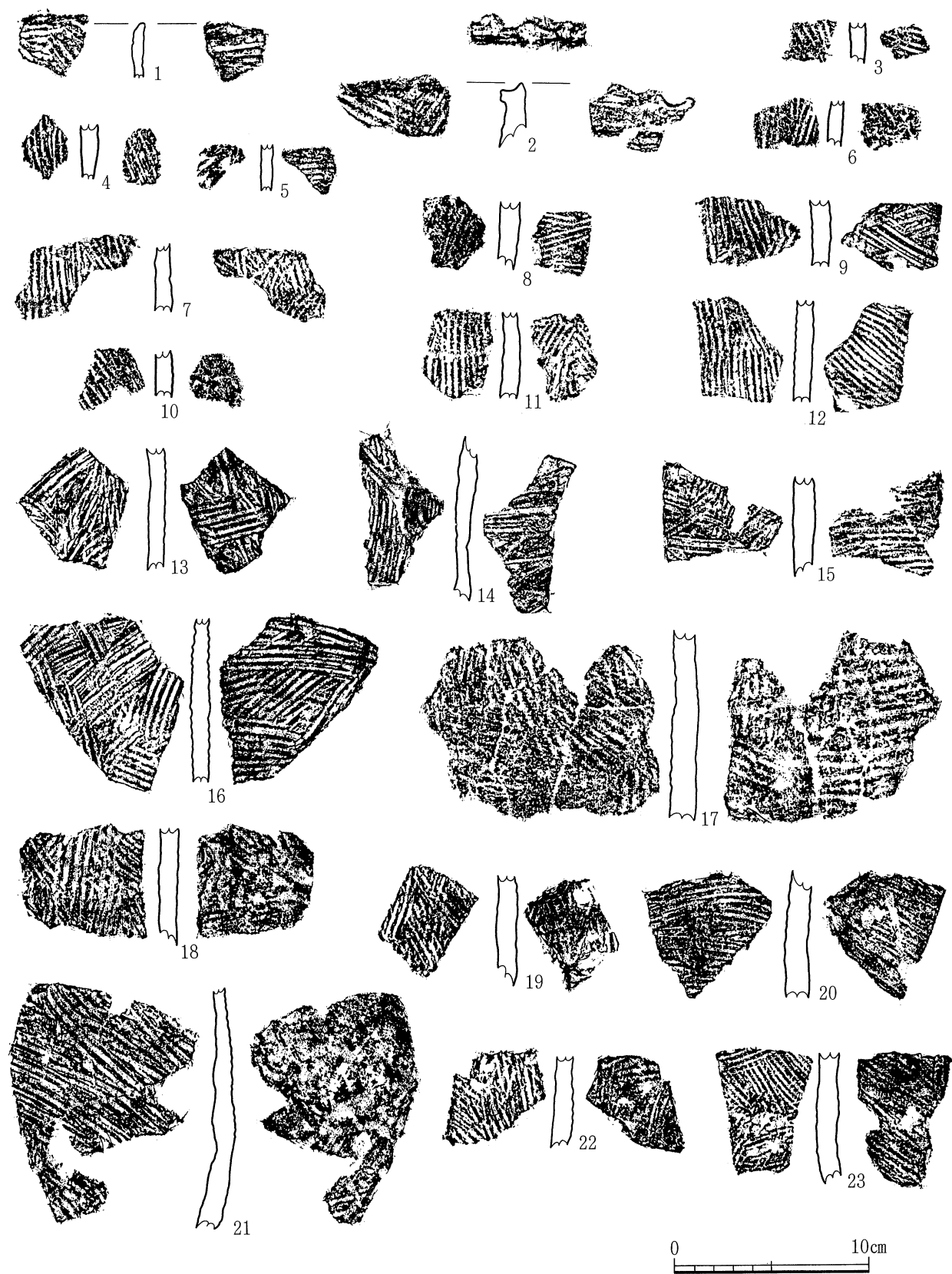




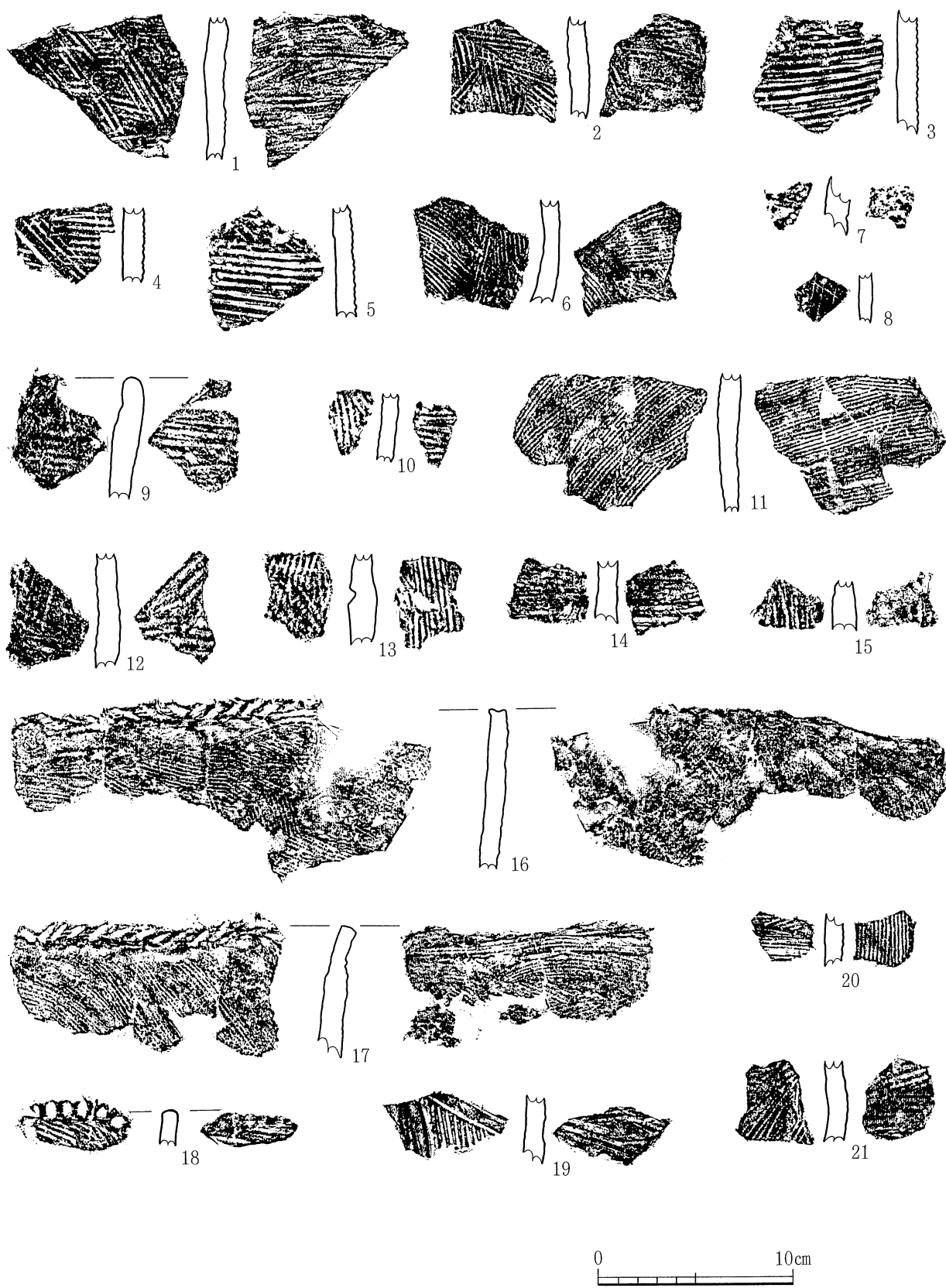
土層説明

1. 明褐色。新期テフラとローム粒を含む。
2. "。1 に似るがローム粒を多く含む。
3. 暗褐色。標準Ⅱ層。
4. "。"。ややソフトロームを多く含む。
5. 褐色。ローム漸移層。

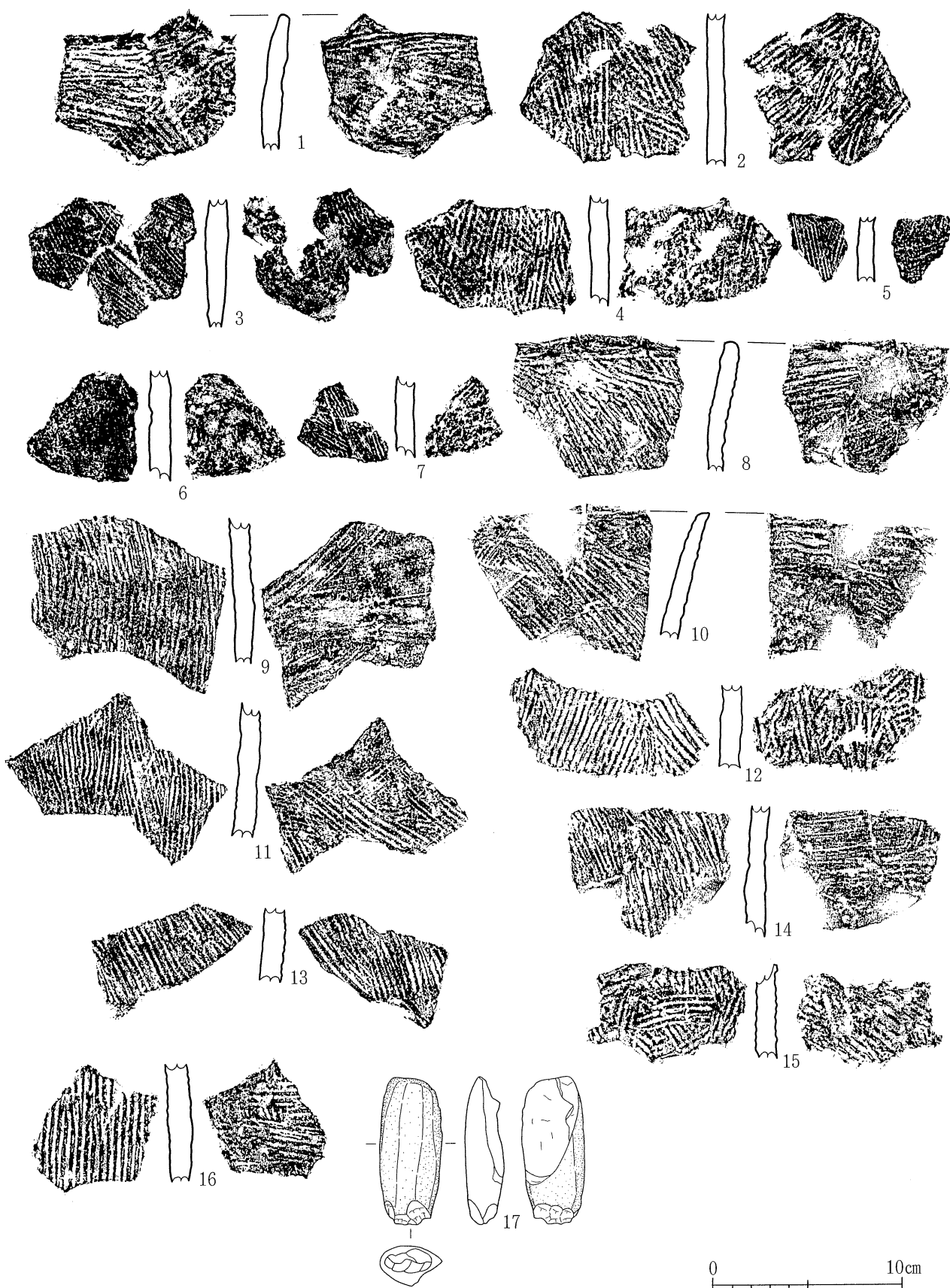
第24図 A 4 区遺物集中地点実測図 (A 4 - 1 号)



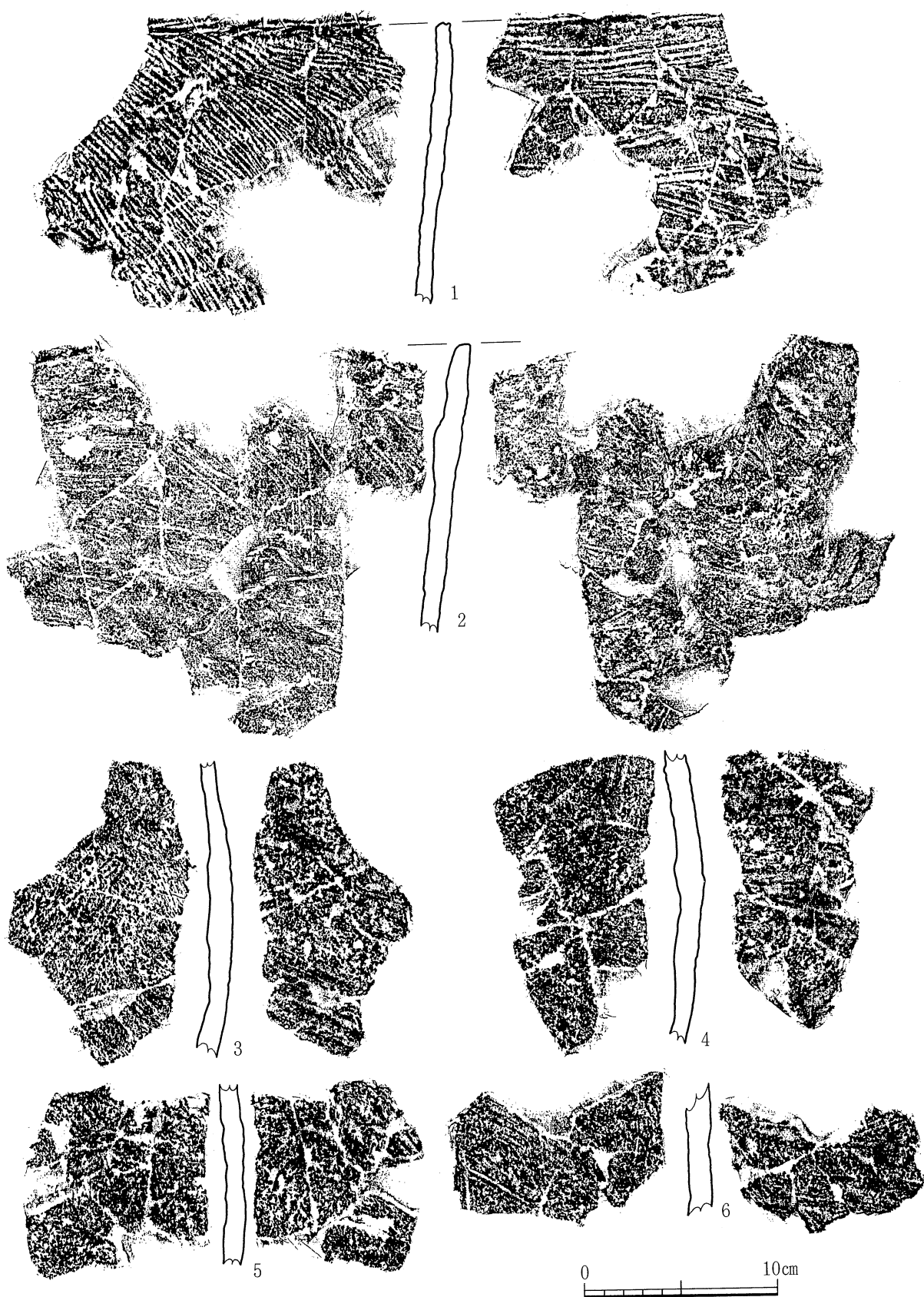
第25图 A 4 区土坑等出土遺物実測図(1)



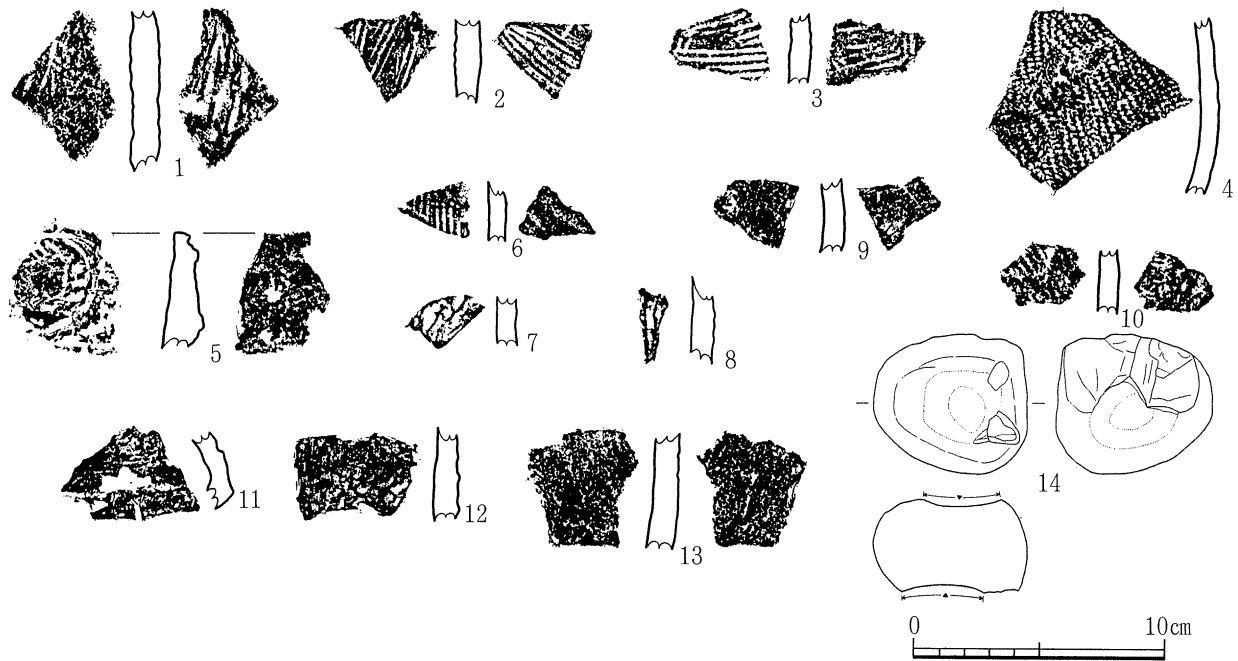
第26图 A 4 区土坑等出土遺物実測図(2)



第27图 A 4区土坑等出土遺物実測図(3)



第28图 A 4区土坑等出土遺物実測図(4)



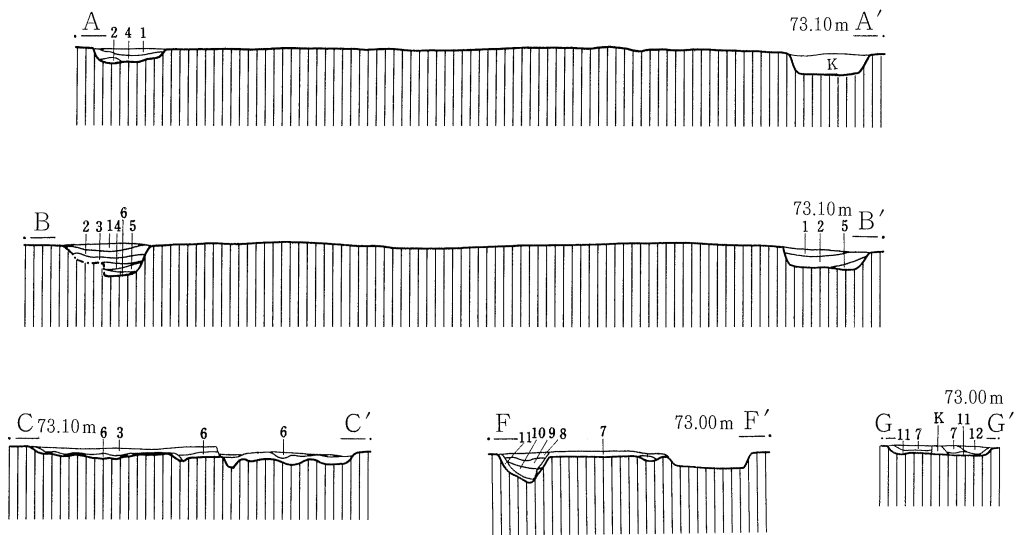
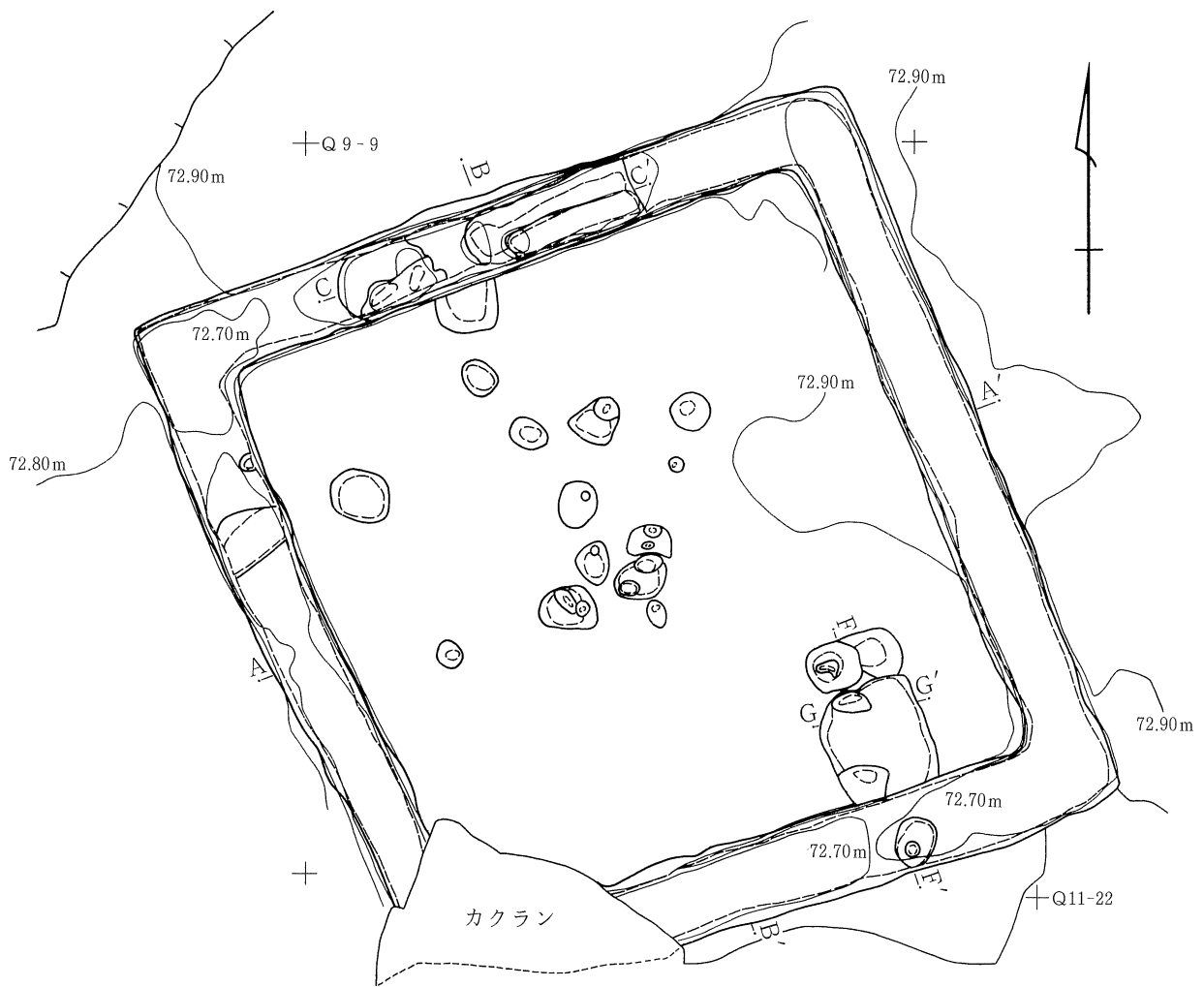
第29図 A 4 区土坑等出土遺物実測図(5)

遺物は、A 4 - 15号土坑より茅山上層式の土器片（第26図9、10、12～15）、A 4 - 2号より条痕文系土器片（第29図1～3）、A 4 - 3号より（第29図4）斜縄文を施した胴下半部片で諸磯a式と考えられる。A 4 - 5号は（第29図5、6、9）口縁部に細い隆起文で曲線を描いている破片などがあり茅山上層式ともみられる。A 4 - 8号（第29図10）も1片であるが茅山式の範疇とみられる。第29図7、8、11、12はA 4 - 4号出土で、条痕文を施文している。第29図13はA 4 - 14号で茅山上層式か。また14は凹石で両面とも磨耗している。土器集中地点（第24図）は、S 8 - 69付近を中心に南北14m、東西12mの範囲に土器片が存在し、土層では、2層明褐色土層内に含まれる。この明褐色土層は厚さ30cmを計り、この層を取り去るとやや凹んだ状況を呈するが、明確な立ち上がりやピット、炉などは検出できなかった。出土遺物は第32図19～34、第33図18、23～33、第35図1～8、11、15、18～21、第34図1～9、11、16、20で櫛歯状工具による波状文や平行沈線を口縁部文様帯に用い、胴下半部は斜縄文を施し諸磯a式と考えられる。A 4 - 1号方形区画墓はA 1区に多数存在する方形区画墓群のひとつで最も南西に位置する。南西隅は攪乱で切られており、A 4 - 1号溝より東側へ約1.2m離れている。規模は長軸12.70m、短軸12.30m、周溝幅60～140cm、最大深さ約45cmで、主軸方位はN - 22° - Wを示す。出土遺物、主体部とも検出されていない。

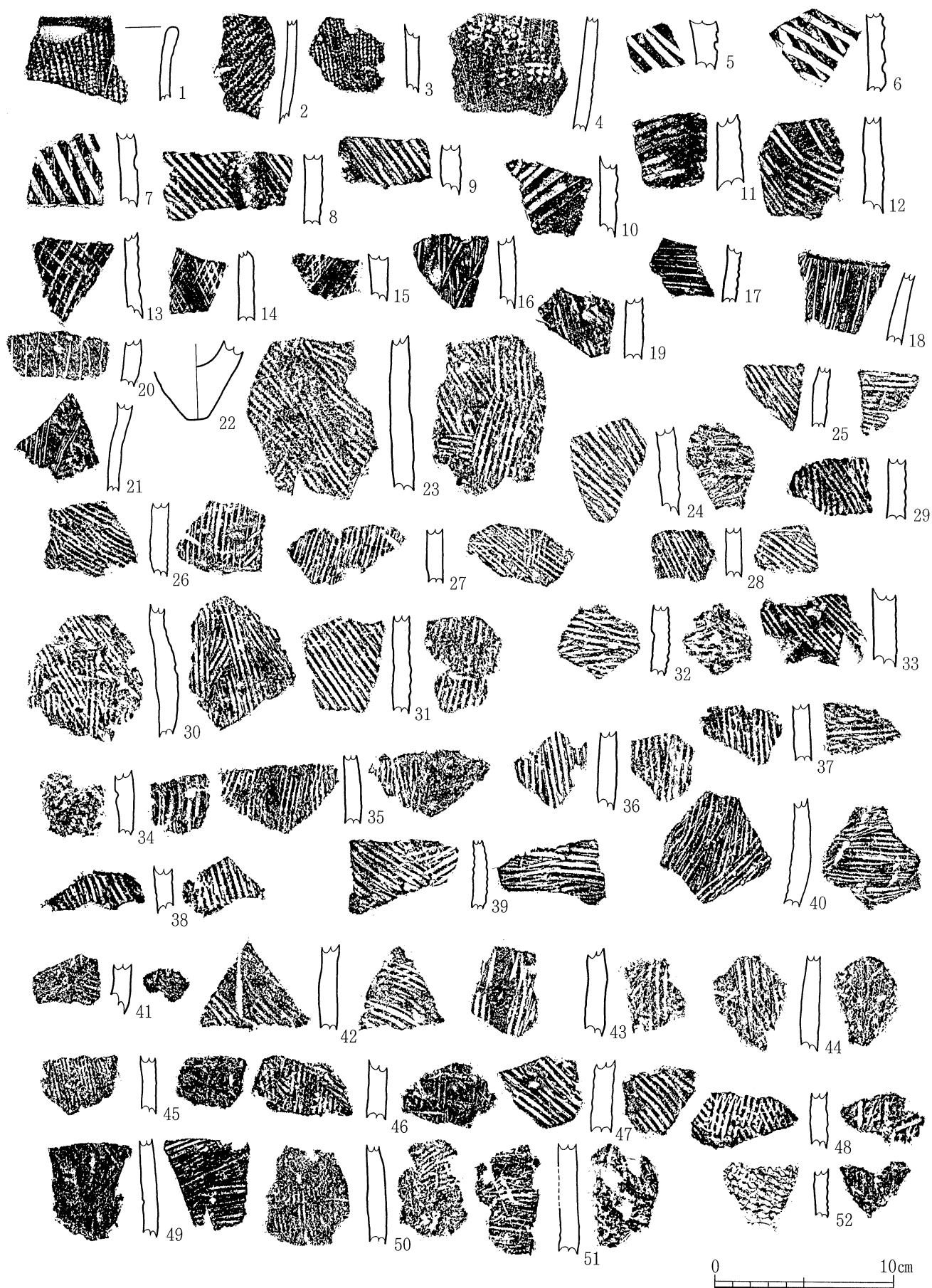
グリッド出土遺物は、第31図1～4は縄文時代早期前半の撚糸文系土器群で、1は夏島式、2と3は大丸式、4が井草式とみている。5～22は早期中葉の三戸～田戸上層式の沈線文系土器群である。23～51と第32図3、6～18、第32図34は繊維を含み条痕文系が多いが、第31図52と第35図10及び第33図1～

A 4 - 1号方形区画墓土層セクション説明

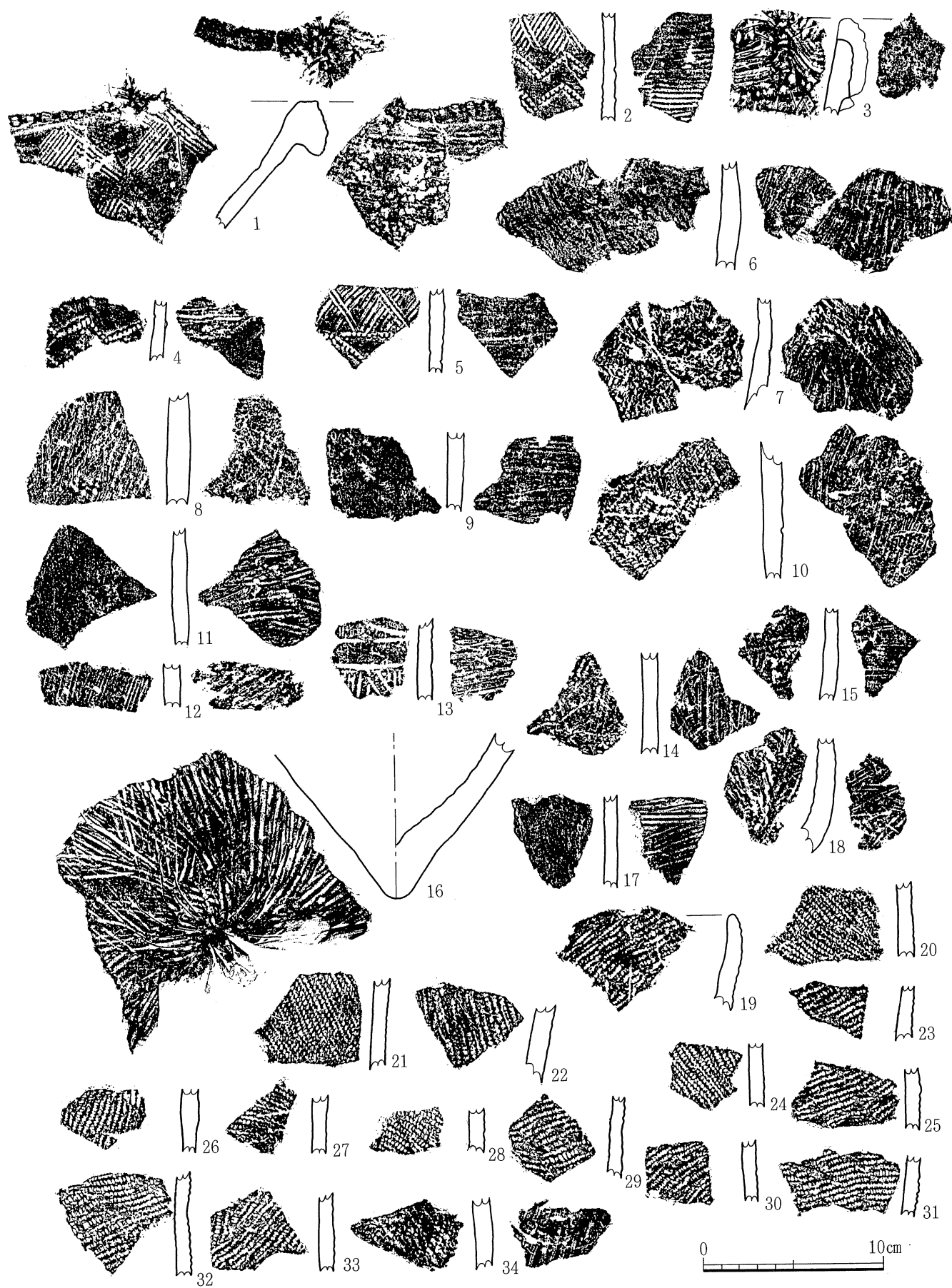
1. 茶褐色。少し硬質。ローム粒と炭粒を少量含む。
2. "。少し硬質。ローム粒を多く含む。
3. "。"。ローム土塊を含む。
4. "。明るい。少し軟質。ローム土塊を少量含む。
5. "。"。"。"を多く含む。
6. "。"。軟質。"を多く含む。
7. 暗褐色。ローム粒を少量含む。
8. 茶褐色。ローム粒と焼土粒を含む。
9. 黒褐色。少し硬質。ローム粒を含む。
10. "。"。ローム土塊を少量含む。
11. "。少し軟質。ローム土塊を多く含む。
12. 暗褐色。ローム土塊を少量含む。



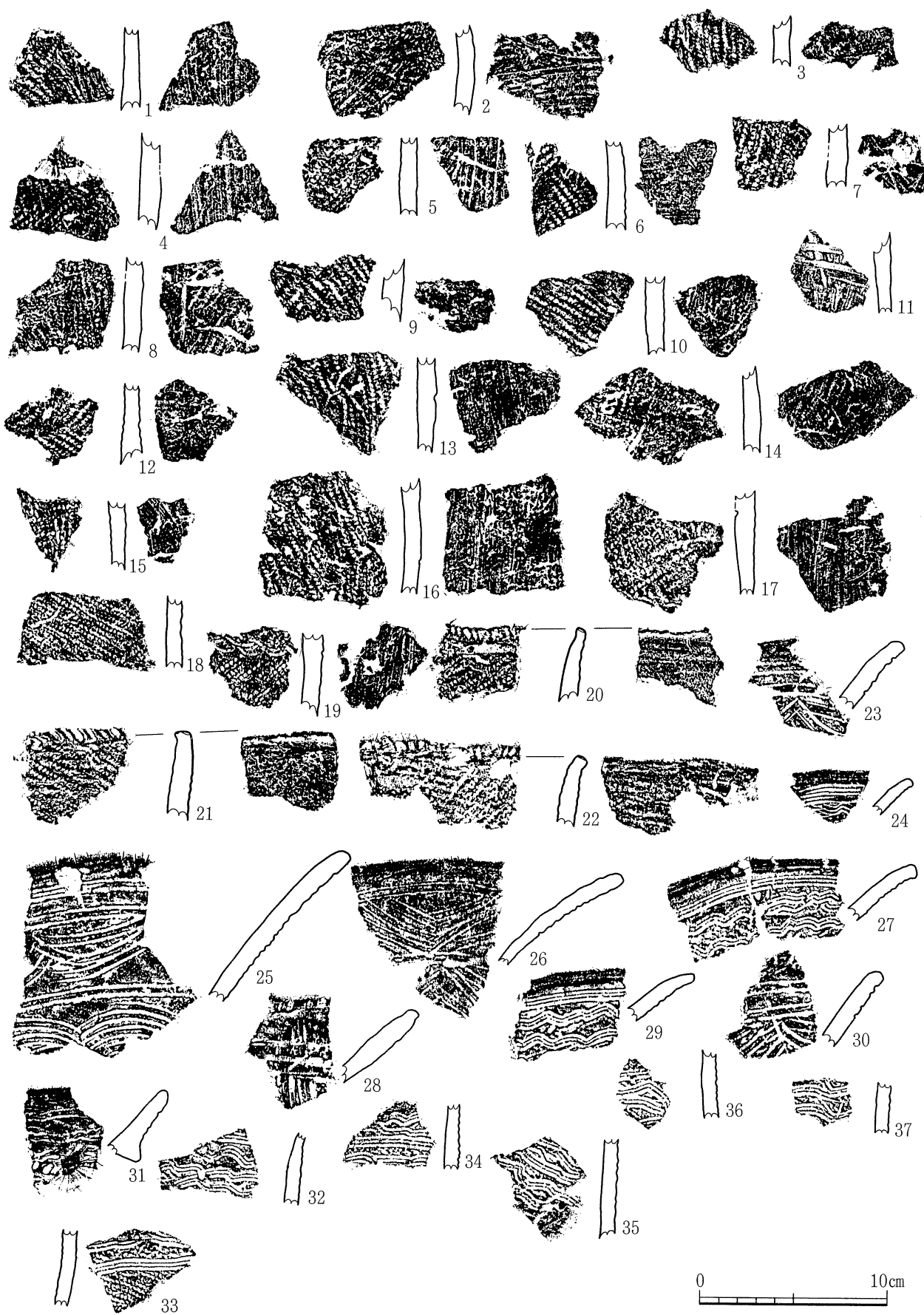
第30図 A4-1号方形区画墓実測図



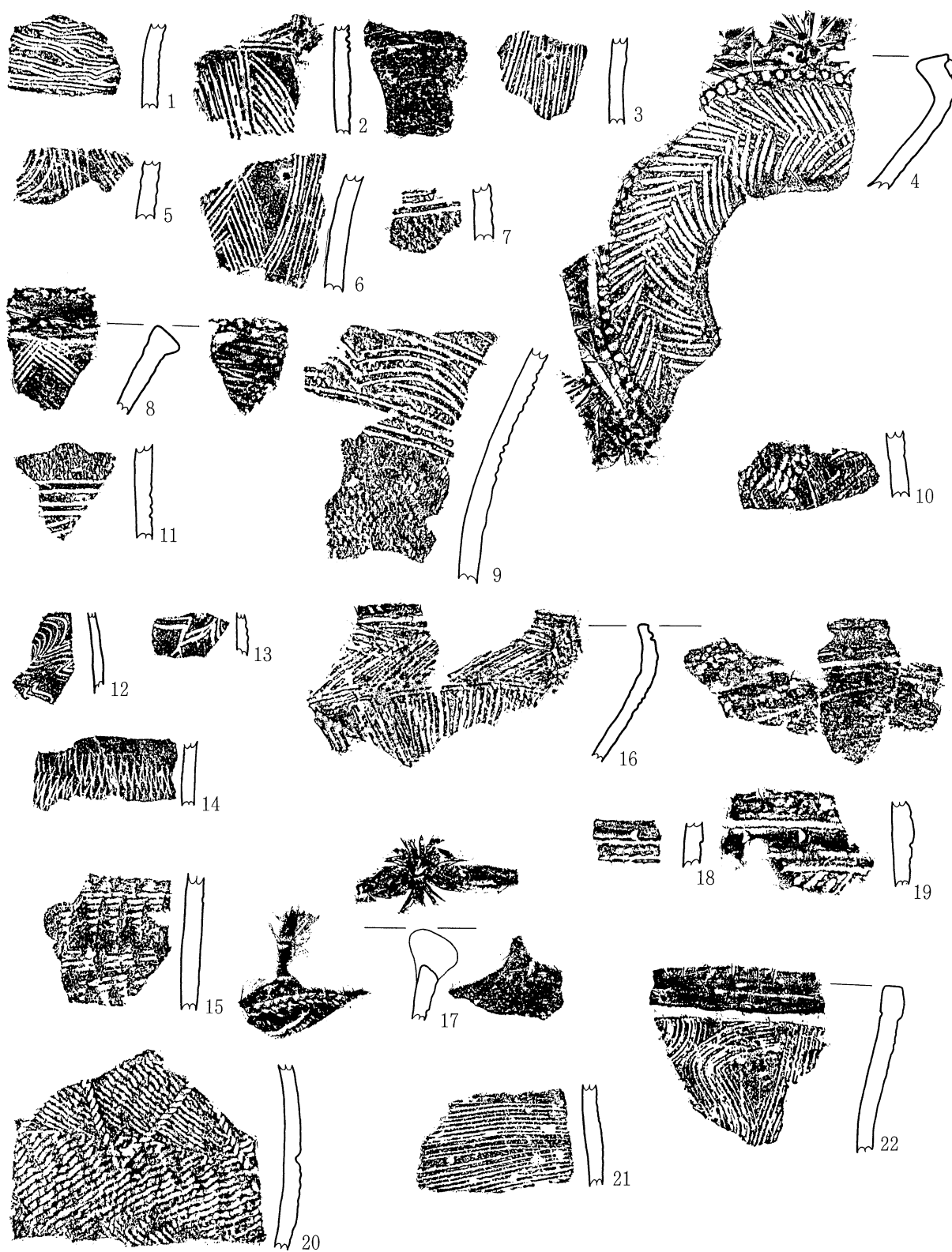
第31図 A 4区グリッド出土遺物実測図(1)



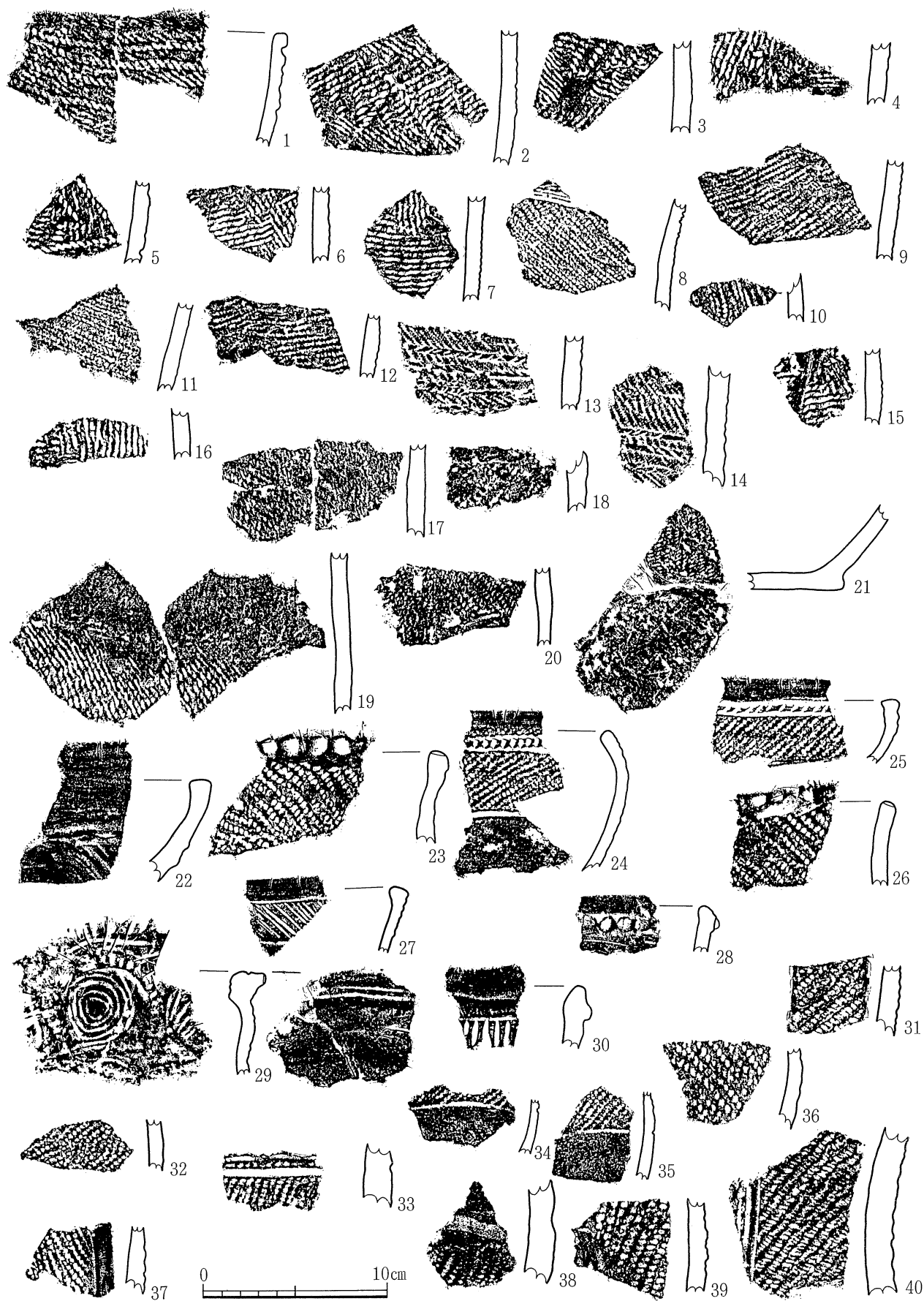
第32図 A 4区グリッド出土遺物実測図(2)



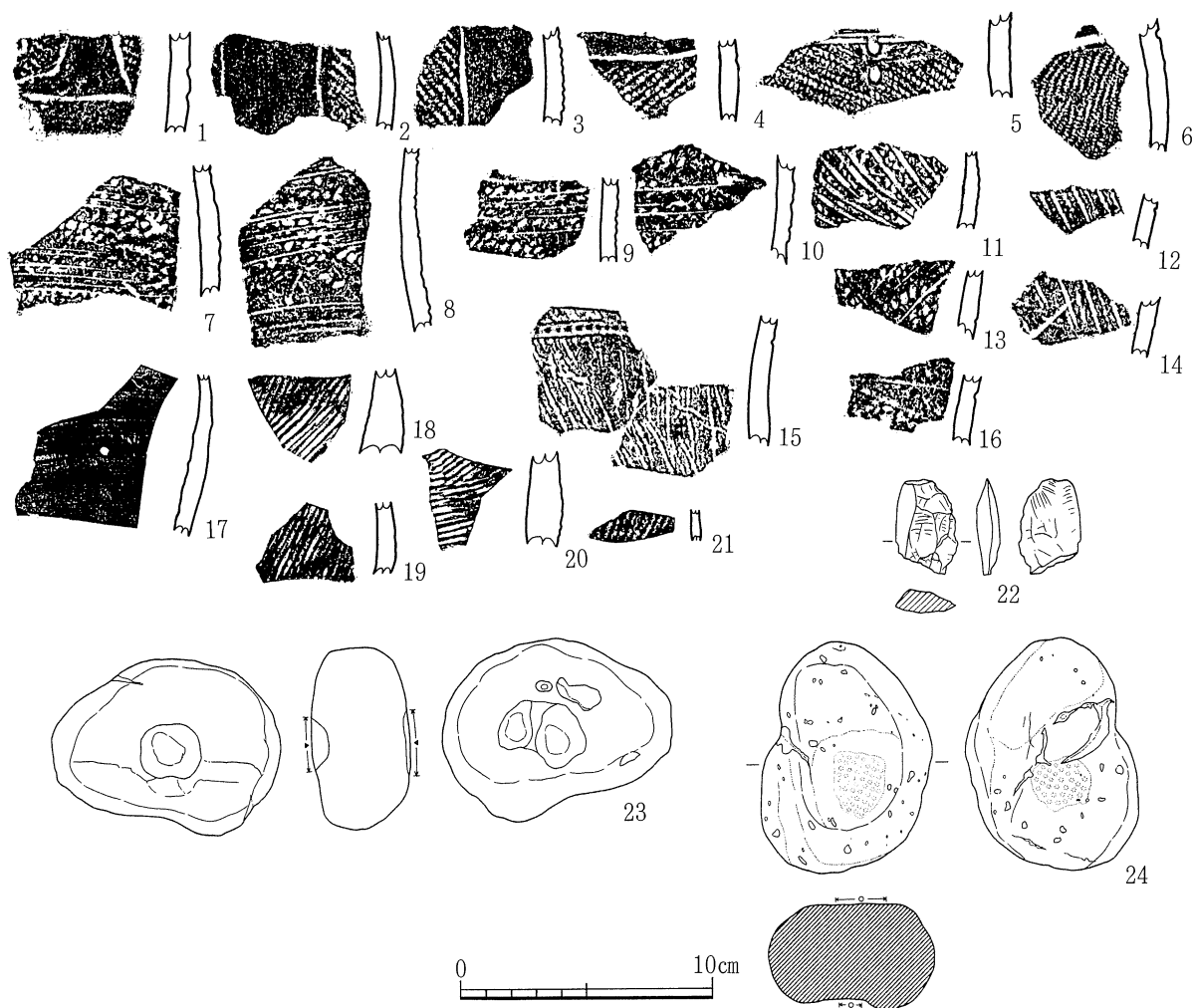
第33図 A 4区グリッド出土遺物実測図(3)



第34図 A 4 区グリッド出土遺物実測図(4)



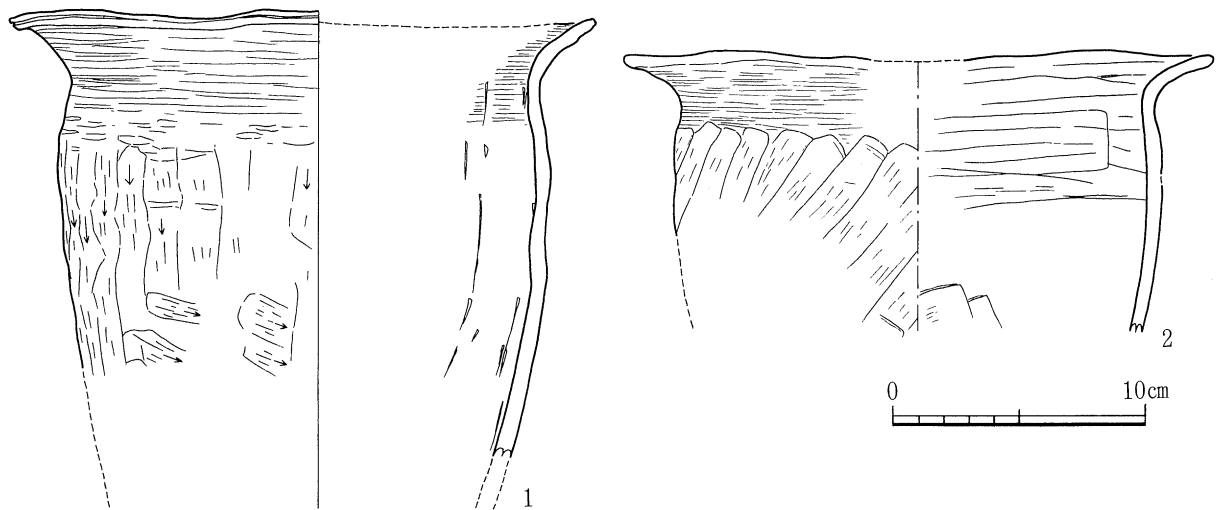
第35図 A 4 区グリッド出土遺物実測図(5)



第36図 A 4 区グリッド出土遺物実測図(6)

17は表面に斜縄文を配している。また第32図13は沈線で幾何学文を描き鶴ヶ島台式と考えられる。第32図1及び第34図8は口唇部に刺突文、口縁部は櫛状工具により山形状の文様を施す。第32図2、4、5は口縁部に近い破片とみられ、貝殻腹縁文が山形に2段認められる。打越式とみられる。第33図19は、荒い単節の斜縄文の間に横位のS字状結節文を配する。20～22は口唇部に刻目状の沈線、口縁部に斜縄文を施す。いずれも前期前半の土器群と思われる。第33図23～33と第34図1、7～11は櫛歯状工具による波状文や幾何学文が施される土器群で前期後半の諸磯a・b式に相当する。第33図33と第34図7、9、11は胴下半部に斜縄文がみられる。第34図2、3、5、6は櫛歯状工具が幅広く施文され前期前半の範疇と考えている。第34図4、12～15は口縁部には刺突文や沈線を羽状に配する(4、16)、波状貝殻文(2枚貝の復縁を連続して押捺する)を有し浮島式(12～14)、21、22は細かく幅広い櫛歯状工具による施文で、いずれも前期後半であろう。第35図20、21は胴下半部と底部片である。両者とも斜行する縄文をもち、諸磯a式の深鉢片と考えられる。27、30は口縁部に横位と縦及び斜め方向の沈線文を施しており中期初頭の所産とみられる。23～26、28、31～40及び第36図1～6は、斜縄文を沈線及び磨消しており、中期後半加曽利E式の範疇である。23～26は口縁部片で、23、26は口唇部に指頭状の押圧がなされ、24、25は上下の横位の沈線で斜縄文を区画し、上部の沈線は2本の中にヘラ状工具で刻目を入れている。32はやや厚手であるが同様の文様構成である。31～33、37～39は

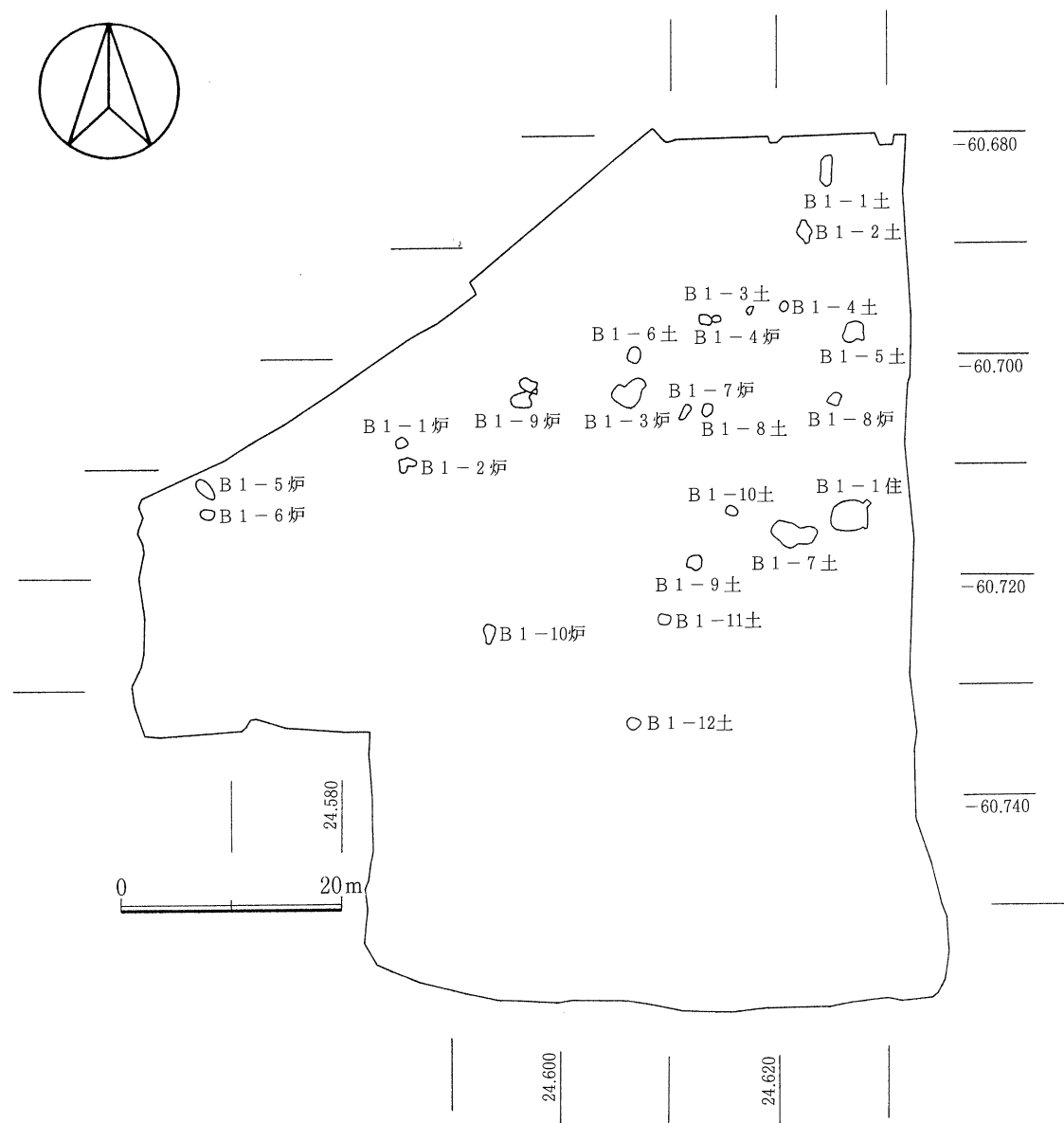
厚手の深鉢片と思われ、その他については浅鉢片であろうか。ほとんどがⅡ式と考えられる。第36図1はⅢ式とみられ、5は円形浮文を貼り付けている。7～16は縄文地に数条の沈線が描かれている。後期初頭堀之内式と思われる。17～21は須恵器片で、17は長頸壺の体部片か、18～21は甕の胴部片とみられる。外面に平行線のタタキ目が残っている。22～24は石器類で、22はスクレーパーとみられ、側面に刃部をつけている。23は凹石で両面に磨耗による凹みをもつ。24は敲石でやや広めの石の両面中央部に敲打痕が認められる。



第37図 B 1 区トレンチ出土遺物

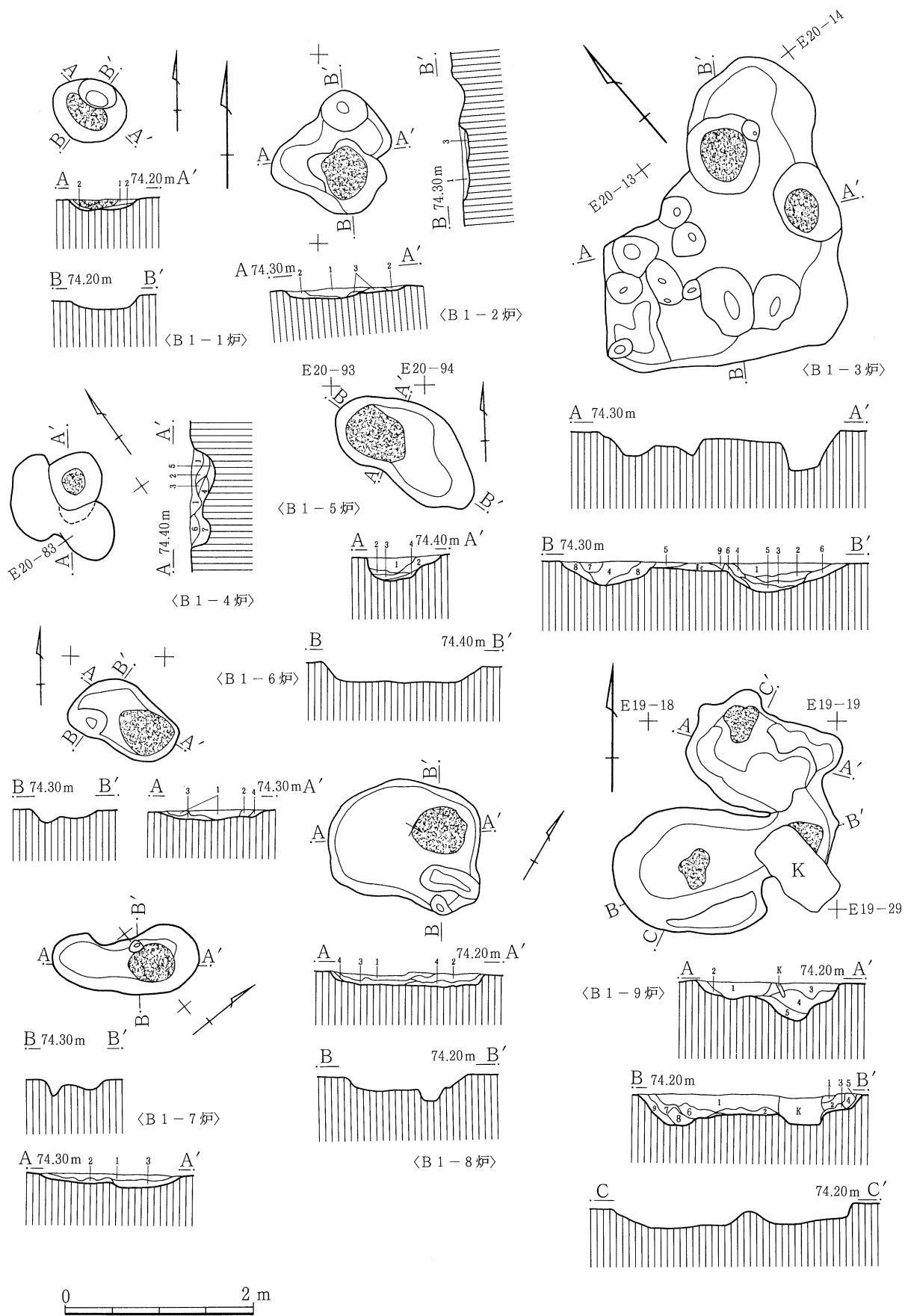
3 B 1 区 (第38図)

当区は、A 4 区の南側に尾根を通じて隣接する。遺跡は北西側と南東側より谷が入り込みほぼ東西方向の長方形を呈する台地上である。特に南東側から入り込む谷は北と南に分かれ、東側の台地は舌状を呈している。今回の調査区は長方形の台地のほぼ中央付近である。調査区の南側は小谷に向って傾斜している。検出した遺構は縄文時代早期後半の炉穴群11群と土坑13基及び中期末の竪穴住居跡1軒である。炉穴群は調査地区の全体に分布し、ほとんどが単独の炉穴である。第39図B 1－3号が2基、B 1－9号が2～3基の重複と考えられる。出土遺物はB 1－9号から繊維土器片が1点（第43図27）、B 1－10号より条痕文系土器片5点（第43図30～34）のみである。土坑は第40・41図B 1－2号、B 1－5号、B 1－9、10、11、12号が陥穴である。すべて方形か長円形でB 1－12号は底部にピットをもつ。他については性格は不明である。出土遺物はB 1－5号より土器片2点（第43図1、2）斜めの撚糸文が一部に残っている。B 1－7号より4点（第43図4～7）で4は口唇部に絡条体を回転押捺した撚糸文と口縁部に縦位の縄文を有し大丸Ⅱ式とみられる。5、6は縦位の縄文、7は縦位の沈線文があり三戸式とみられ、この土器片が一番新しく上限を示す。B 1－8号は第43図10の1点だけで縦位の荒い縄文から井草式と考えられる。B 1－12号は（第43図28）1点で縦位の撚糸文が施され稻荷台式とみられる。B 1－1号竪穴住居跡は（第41図）調査区の東側中央に位置する。南

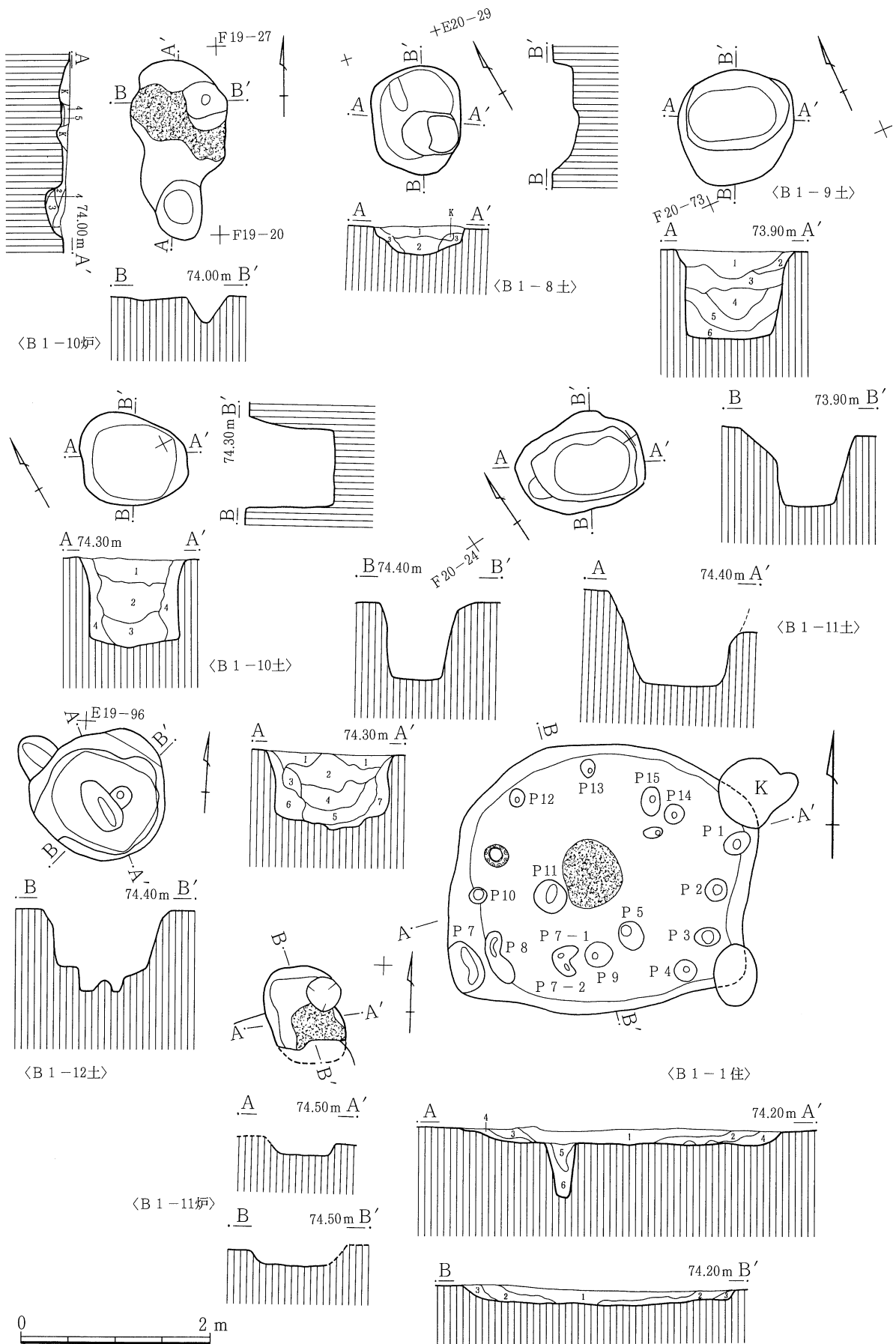


第38図 B1区全体図

へ約10m程で谷へ傾斜し始める地点である。平面形体は丸みをもった長方形で、規模は長軸3.10m、短軸2.86m、最大深さ20cmで、主軸方位は長軸方向とするとほぼ東西方向である。ピットは16本検出し、炉は中央に大きく存在する。床面はあまり踏み固められていない。出土遺物は第43図11～24と第46図1である。第43図16は縄文早期前半の大丸式と考えられるが他については、中期末の加曽利EⅣ式の範疇とみられる。特に第46図1は深鉢で口縁部片のみであるが西側床面に立った状態で出土した。グリッド及びその他の出土遺物は第43図9は井草Ⅰ式とみられる。第44図1～11は撚糸文系、12～17は、条痕文系とみられる。第43図35は、凹石で両面が磨耗による凹みがあり、片面には敲き痕も残る。第37図1と2は土師器甕の破片でG23区付近のトレンチより出土し、遺構には伴わない。



第39图 B1-1~9号炉穴实测图



第41图 B1-1号住居迹・炉穴・土坑实测图

B 1－1号住居跡

ビット計測表 (cm)

ビット名	上端	下端	深さ
P 1	31×23	11×9	36
P 2	23×23	11×11	19
P 3	27×20	13×13	34
P 4	25×23	6×6	7
P 5	31×27	12×12	45
P 6	30×27	7×7	36
P 7－1	29×10	7×5	10
P 7－2	20×16	9×4	8
P 8	58×13	20×4	6
P 9	55×35	41×9	17
P 10	19×18	12×11	7
P 11	35×33	21×11	80
P 12	16×10	6×5	6
P 13	21×16	5×5	8
P 14	31×11	8×7	9
P 15	23×21	7×6	10
P 16	21×13	7×6	7

B 1－1号住居跡

1. 暗褐色。ローム粒 2 mm以下を多量含む。
2. 黒褐色（少し硬質）。ローム粒 2 mm以下を含む。
3. 黒褐色（少し軟質）。
4. 褐色。ローム土塊 3 cm以下をブロック状に含む。
5. 黒褐色（軟）。ローム粒 2 mm以下を含む。
6. 暗褐色。ローム粒 3 mm以下を多量に含む。

B 1－7号炉穴

1. 暗褐色。ローム粒と焼土粒を含む。
2. 暗褐色。ローム粒を多く含む。焼土粒を含む。
3. 赤褐色。焼土粒を多量に含む。ローム土を多く含む。
4. 黄褐色。ロームブロックを多く含む。

B 1－6号炉穴

1. 暗褐色。ローム粒を多く含む。焼土粒を含む。
2. 黄褐色。ローム土を多量に含む。
3. 暗褐色。焼土粒を多量に、ローム粒を多く含む。

B 1－5号炉穴

1. 暗褐色。ローム粒を多く含む。焼土粒を含む。
2. 暗褐色。ローム土とローム粒を多く含む。
3. 赤褐色。ローム土と焼土粒と焼土ブロックを多く含む。
4. 黄褐色。ローム土とロームブロックを多量に含む。

B 1－10号炉穴

1. 黒褐色。ローム粒 1 mm以下を含む。
2. 褐色。ローム土塊 1 cmを含む。
3. 黒褐色。ローム粒 3 mm以下を含む。
4. 黒褐色。ローム粒 1 mm以下と焼土粒 2 mm以下を含む。
5. 暗褐色。焼土粒を多量に含む。

B 1－5号土坑

1. 暗褐色。ローム土とローム粒を多く含む。
2. 暗褐色。ローム土とローム粒を含む。
3. 暗褐色。2～3 mmのローム粒を含む。
4. 暗黄褐色。ロームブロックを多く含む。

B 1－9号土坑

1. 暗褐色。ローム土とロームブロックを多く含む。
2. 黄褐色。ローム土を多量に含む。
3. 暗褐色。ローム土を含む。
4. 暗褐色。ローム土とロームブロックを含む。
5. 暗褐色。ローム粒を多く含む。
6. 暗褐色。ローム粒を 7 割以上含む。

B 1－2号炉穴

1. 黒褐色。ローム粒 1 mm以下を少量、焼土粒を極少量含む。
2. 褐色。ローム土塊を多く含む。
3. 暗褐色。焼土粒を多く含む。

B 1－4号炉穴

1. 暗褐色。ローム粒と焼土粒を含む。
2. 赤褐色。焼土ブロックと焼土粒を多く含む。
3. 暗褐色。焼土粒を含む。
4. 赤褐色。焼土ブロックを多く含む。
5. 赤褐色。焼土ブロックを多量に含む。
6. 暗褐色。ローム粒を含む。
7. 黄褐色。ローム土を多量に含む。

B 1－13号土坑

1. 暗褐色。ローム土とローム粒を含む。
2. 黄褐色。ローム土を多量に含む。
3. 暗褐色。ローム粒を多く含む。
4. 暗褐色。ローム土とローム粒を多く含む。
5. 黄褐色。ローム土を多く含む。

B 1－12号土坑

1. 暗褐色。ローム粒 2 mm以下を少量含む。
軟質のローム土塊 2 cm以下を含む。
2. 黒褐色。ローム粒 5 mm以下を含む。
3. 暗褐色。ローム粒 3 mm以下を多量に含む。
4. 黒褐色（少し軟質）。ローム粒 5 mm以下を含む。
5. 黒褐色（軟質）。ローム粒 5 mm以下を多量に含む。
6. 褐色。ローム土塊を不規則に含む。
7. 褐色。ローム土塊 1～2 cmを多量に含む。

B 1－8号土坑

1. 黒褐色。ローム粒 1 mm以下を多く含む。
2. 黒褐色。 “ 1 mm以下を含む。
3. 褐色。ローム土塊を多く含む。

B 1－1号炉穴

1. 暗赤褐色。焼土粒、灰、灰粒を少量含む。
2. 焼土。

B 1－9号炉穴群

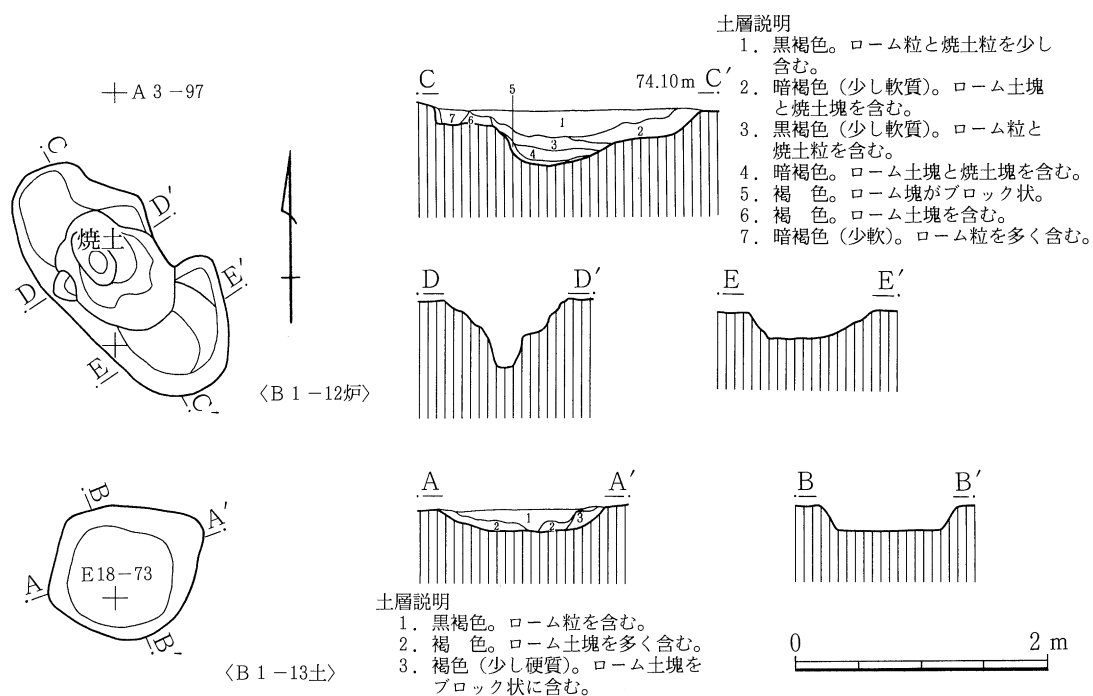
1. 暗褐色。ローム粒を含む。
2. 暗褐色。焼土粒とローム粒を含む。
3. 暗褐色。焼土粒とローム粒を多く含む。
4. 暗褐色。ローム土を多く含む。
5. 赤褐色。焼土ブロックを多量に含む。
6. 黄褐色。ローム土を多く含む。
7. 暗褐色。ローム粒を多く含む。
8. 黄褐色。ローム土を多量に含む。

B 1－8号炉穴

1. 黒褐色（少し硬い）。焼土粒 3 mm以下を多く含む。
2. 暗褐色（少し硬質）。焼土粒とローム粒 1 mm以下を含む。
3. 褐色。ローム土塊 5 mm以下を多く含む。
4. 暗褐色。ローム粒と焼土粒を極少量含む。

B 1－3号炉穴群

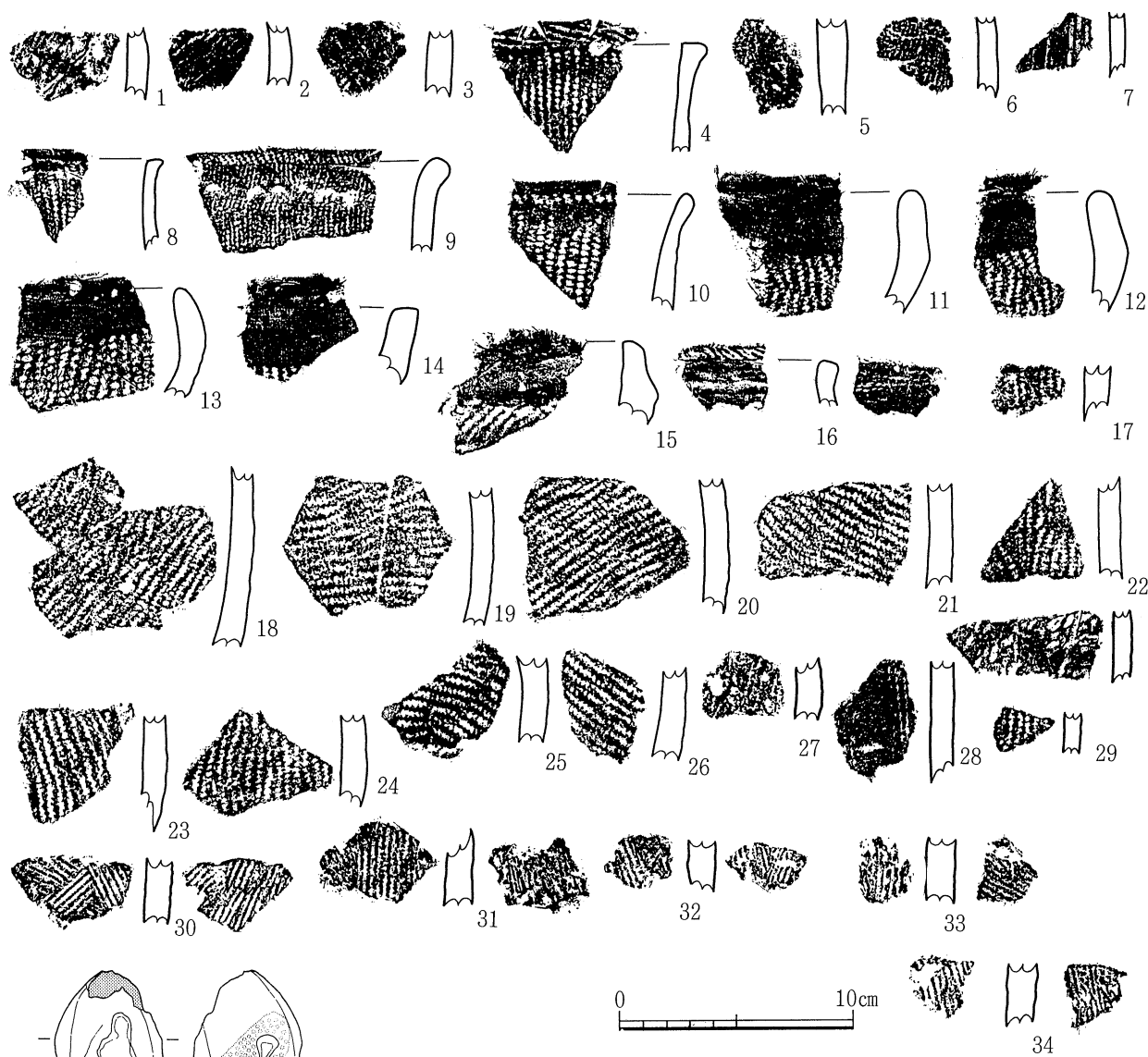
1. 黒褐色。ローム粒と焼土粒（2 mm以下）を少し含む。
2. 黒褐色。ローム土塊（1 cm以下）焼土粒（1 mm以下）を極少量含む。
3. 暗褐色。焼土塊を含む。
4. 黒褐色。ローム粒（1 mm以下）を極少量含む。
5. 褐色。ローム土塊（2 cm以下）を多く含む。
6. 黒褐色。ローム粒と焼土粒を多く含む。
7. 暗褐色（硬質）。ローム土塊を含む。
8. 褐色（少し軟質）ローム土塊を含む。
9. 褐色。ローム土塊を少量含む。



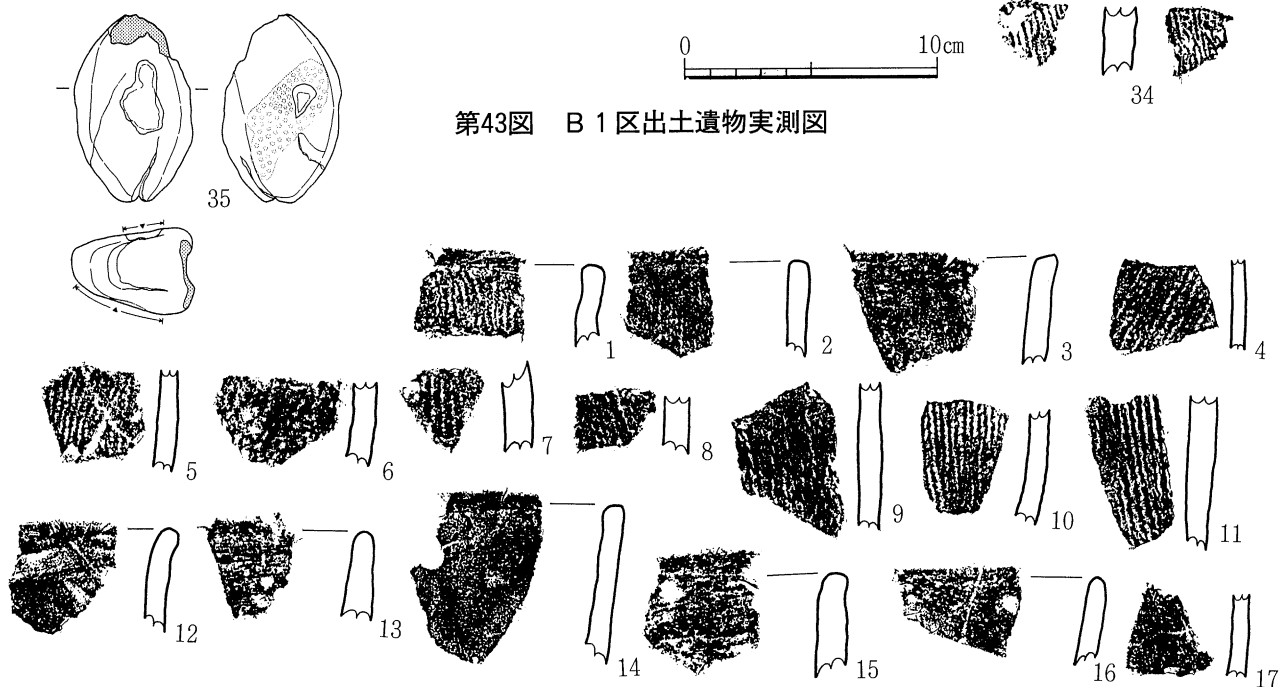
第42図 B 1 区炉穴・土坑実測図

第 5 表 B 1 区土坑一覧表

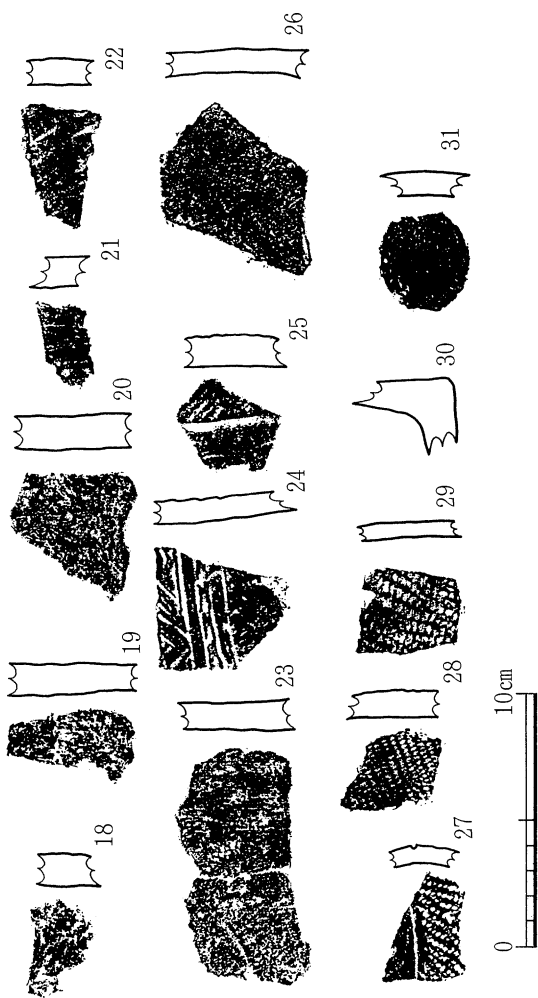
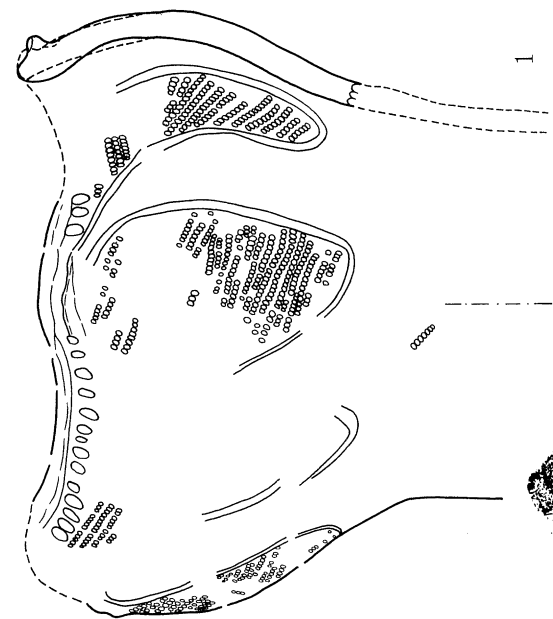
番号	土 坑 番 号	挿 図 番 号	旧土坑 番 号	規 模 (cm)			主 軸 方 向	性 格	そ の 他
				上 端	下 端	深 さ			
1	B 1 - 1	第39図	S K 01	293×113	144×60	33	N - 5° - E		
2	B 1 - 2	"	S K 02	145×108	81×63	105	W - 22° - N	陥穴	南側と北側の土坑は、新しい時期とみられる。
3	B 1 - 3	"	S K 06	113×67	—	17	N - 45° - E		
4	B 1 - 4	"	S K 07	93×75	60×43	19	E - 40° - N		
5	B 1 - 5	"	S K 08	214×198	99×89	97	N - 31° - W	陥穴	
6	B 1 - 6	"	S K 10	149×109	133×90	21	N - 7° - E		
7	B 1 - 7	"	S K 11	465×134	—×91	12	N - 42° - E		ビットが多い。
8	B 1 - 8	第40図	S K 18	117×94	96×77	30	N - 26° - E		
9	B 1 - 9	"	S K 30	123×122	94×54	95	E - 20° - S	陥穴	
10	B 1 - 10	"	S K 20	119×98	89×79	93	E - 39° - S	"	
11	B 1 - 11	"	S K 32	136×103	80×53	97	E - 24° - S	"	
12	B 1 - 12	第41図	S K 33	175×141	107×90	72	E - 23° - S	"	底部中央に小ビット有り。
13	B 1 - 13	"	S K 29	111×107	83×78	19	E - 13° - S		



第43図 B 1 区出土遺物実測図



第44図 B 1 区グリッド出土遺物実測図(1)



第45図 B1区グリッド出土遺物実測図(2)



第46図 B1-1号住居跡出土遺物実測図

4 B 2 区 (第47図)

B 2 区は、遺跡の中央、最も西側に位置し、北西方向から延びてくる2つの開折谷に挟まれた部分で、南東方向からも小谷が入り込んでいる。当地区は南側がB 3区と北西側は台地端部に存在する万台城跡へとそれぞれ尾根によって行くことが出来る地点でもある。

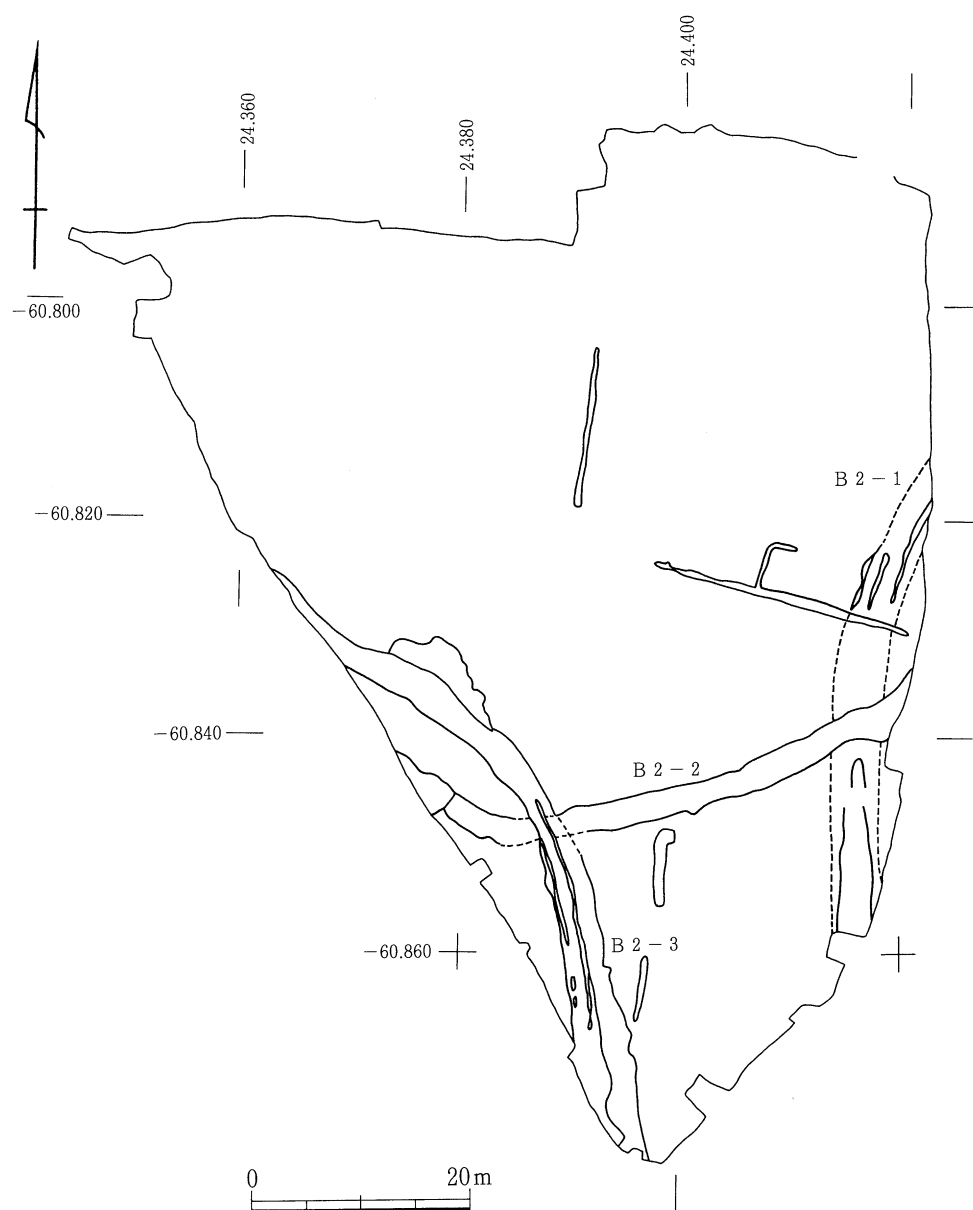
検出した遺構は、古代の道路跡1条、中世と推測される溝1条、近世以降の道路跡1条である。全体図(第47図)に存在するその他の溝や土坑は新しい所産である。

B 2-1号道路跡は、(第49図)調査区の東側で検出され、現在の林道の西側脇に存在した。幅は0.9~2.2mで約21mの長さを調査した。硬質面が認められ、北側では輪立ちを2条検出した。土層観察より少なくとも主に3時期使用されていたとみられ、しだいに西側(高い方)に移動していたことが伺える。また検出した中央付近は、B 2-2号溝に切られている。出土遺物は、南側付近より1番古い時期の硬質面上付近から土師器甕を2点検出している(第48図2、3)。2は口縁部片で胴部よりやや内傾ぎみに立ち上がってきて小さく直線的に開く。胴上部外面は縦方向のヘラケズリ、口縁部は両面とも横ナデで、胴部内面はヘラナデツケの後布状ブキがなされる。色調は両面とも暗茶褐色、焼成は普通、胎土は1mm以下の小礫を少量含む。口縁部のみ1/3くらいの残存である。3は底部付近の破片で、2と同一個体の可能性が大きい。胴部外面は横方向のヘラケズリ、内面はヘラナデツケの後ユビによるナデ、色調は両面とも暗褐色で一部は淡褐色と淡茶褐色。焼成は少し不良で、胎土は2と同じ。底部付近1/3くらいの残存である。

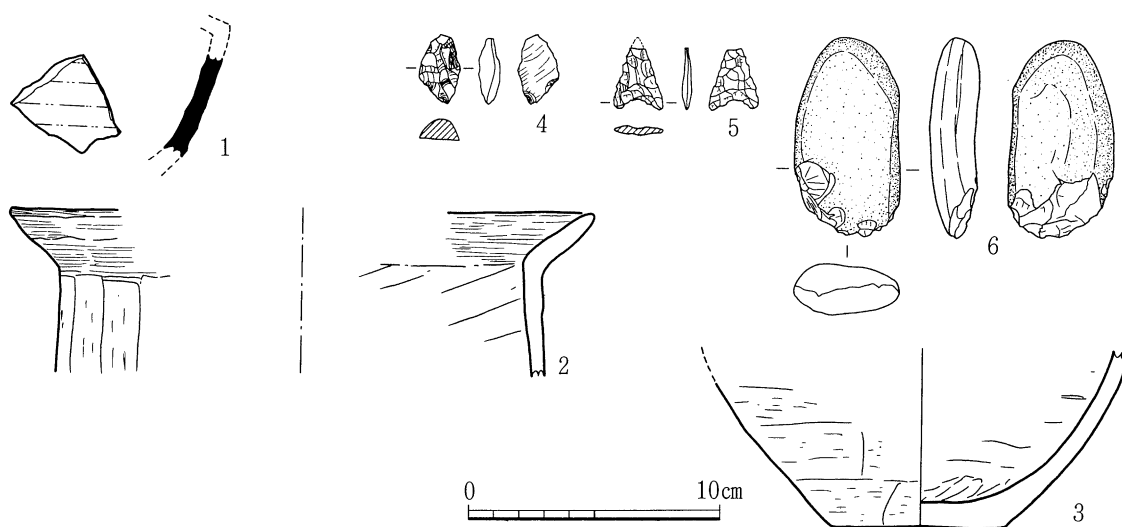
B 2-1号溝状遺構は(第50図)、調査区を東西に弧状を描いて横切っている。土層観察より各遺構との切り合い関係が認められ、B 2-1号道路跡を切り、B 2-2号道路跡に切られている。幅は0.9~1.6mであるが東端では小谷に降りてゆくためか大きく広がり4.1mを測る。深さは最大で52cmである。また西側の未調査地区との境には一段低い土坑状の落ち込みにより切られており、土層セクションにはその底部に宝永期の火山灰が堆積していた。出土遺物は(第48図1)須恵器長頸壺の体部片があるが、遺構には伴わないと思われる。溝の覆土の観察からは中世頃の所産と把握している。

B 2-3号道路跡(第51図)は、調査区の西側を弧状に描いて存在する。幅は1.1~3.0mで深さは最大で12cmを測る。道路面に輪立ちや硬質面が認められる。道路直上より金鍬片等が出土し近世以降の所産と考えている。

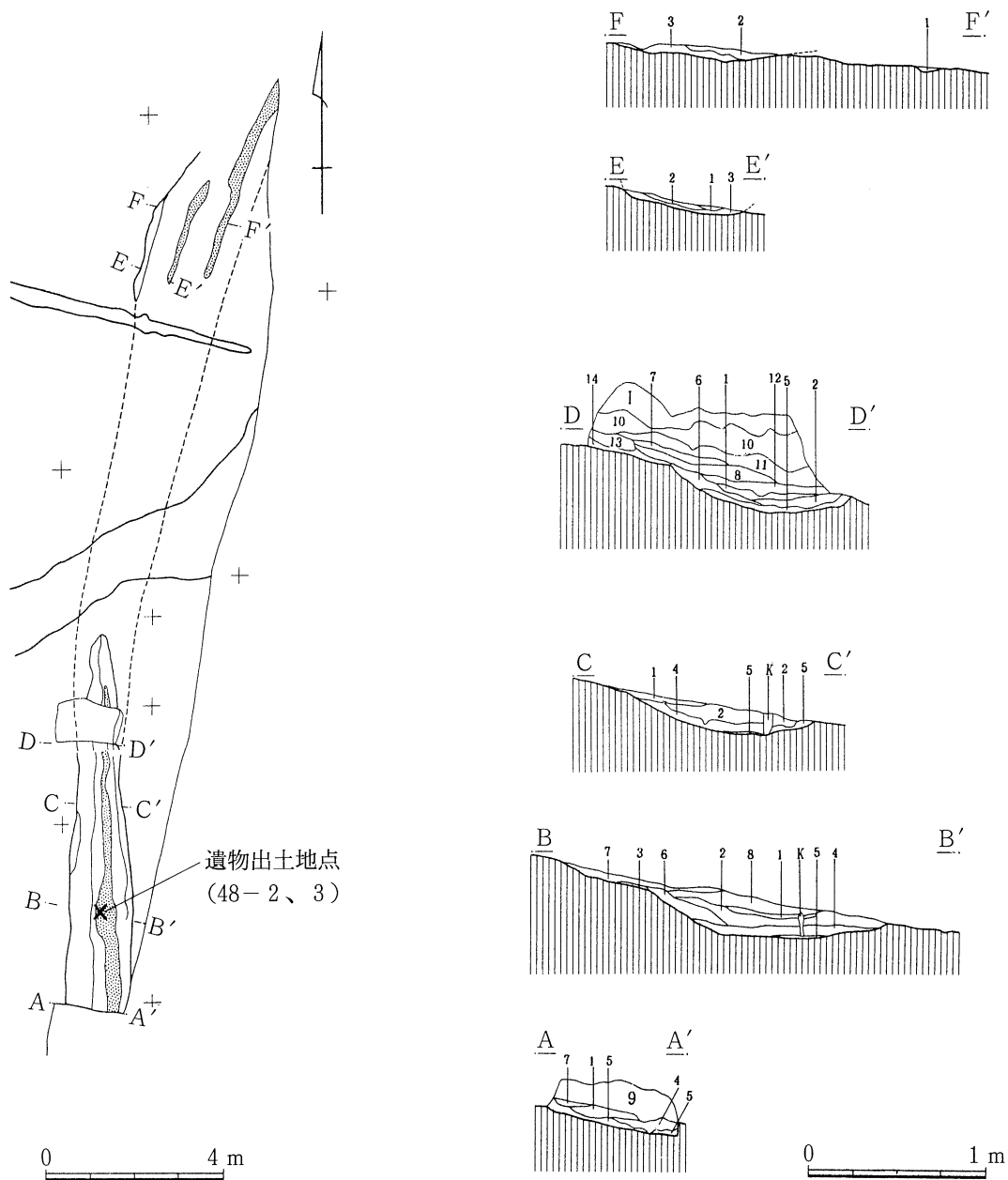
この他の出土遺物は(第48図4~6)4が黒曜石製の剥片、5が石鏃、6は石斧である。



第47図 B 2 区全体図



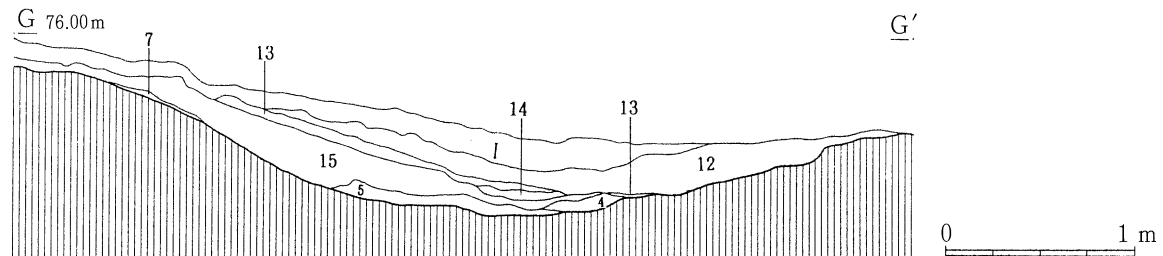
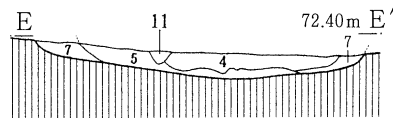
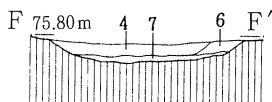
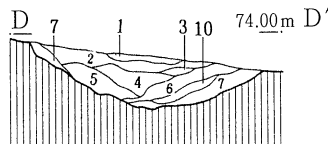
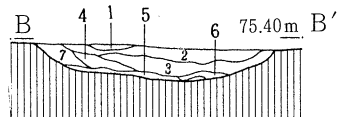
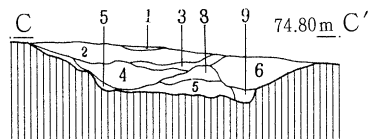
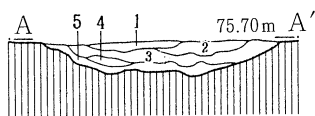
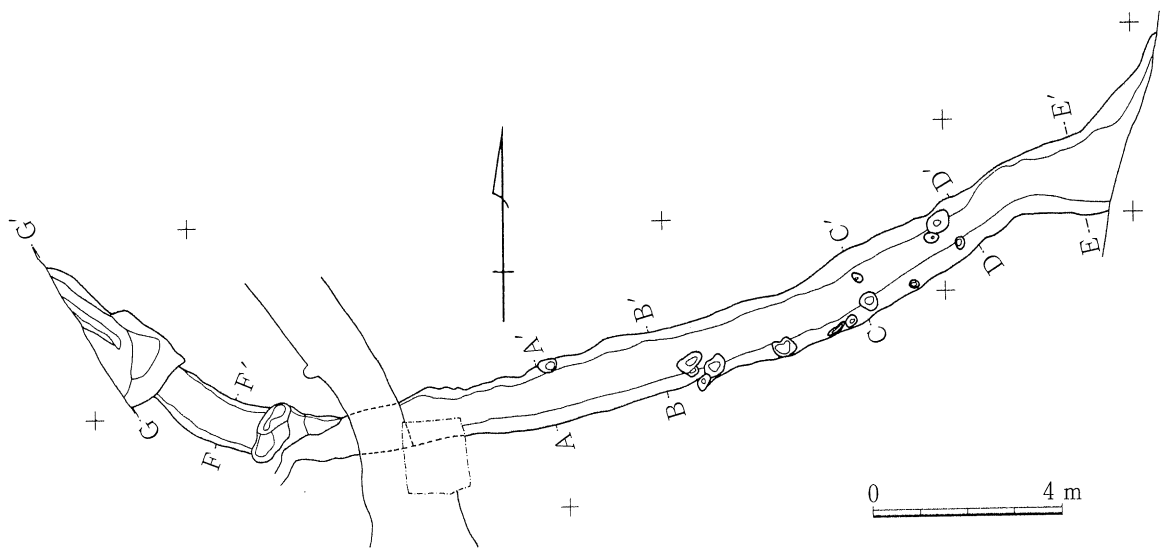
第48図 B 2 区出土遺物実測図



土層説明

- | | |
|---|-------------------------------|
| 1. 黒褐色 (硬質)。ローム粒を含む。 | 9. 暗褐色 (少し軟質) (少し砂粒)。ローム粒を含む。 |
| 2. " (少し硬質)。"。 | 10. " " "。ローム土塊を含む。 |
| 3. 暗黄褐色。ローム土塊と黒色土のブロック。 | 11. " (硬質)。ローム粒を多く含む。 |
| 4. " (硬質)。ローム粒を多く含む。 | 12. 黒褐色 (硬質)。ローム粒を少量含む。 |
| 5. " (")。" を含む。 | 13. 暗褐色 (軟質)。"。 |
| 6. 暗褐色 (硬質)。ローム土塊を多く含む。 | 14. " (少し硬質)。ローム土塊を含む。 |
| 7. 黒褐色 (")。ローム土塊を含む。黒色土が
ブロック状に入る。 | I = 表土 |
| 8. " (") (少し明るい)。ローム土塊を含む。 | |

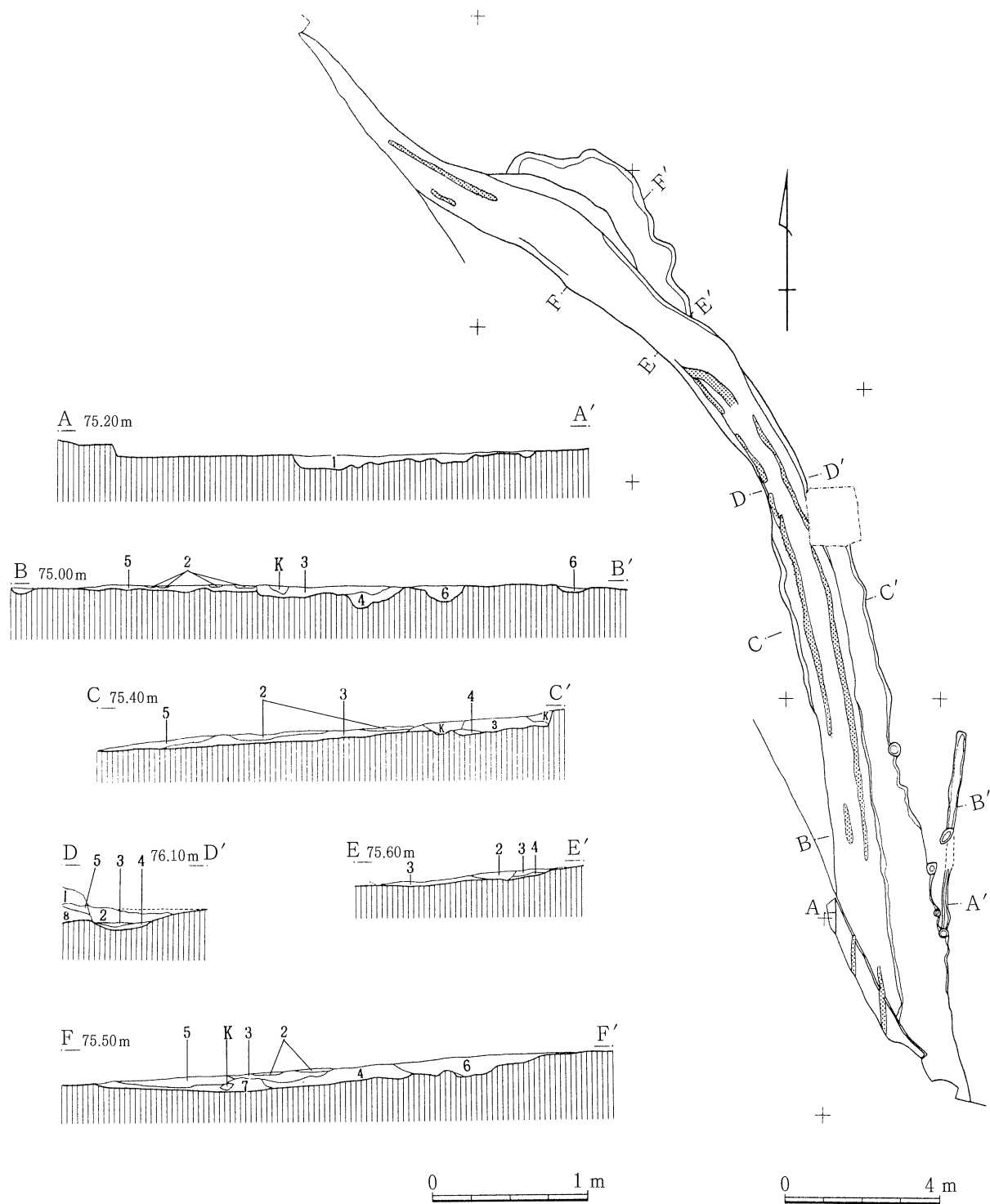
第49図 B2-1号道路状遺構実測図



土層説明

- | | | |
|----------------------------|------------------------------|------|
| 1. 暗褐色（硬質）。硬化面。 | 9. 暗褐色（軟質）。ローム土塊を含む。 | I 表土 |
| 2. 暗褐色。ローム粒を含む。 | 10. 黄褐色（少し硬質）。ローム土塊を多く含む。 | |
| 3. 暗褐色。ローム粒を多量に含む。 | 11. 黒褐色。ローム粒を含む。 | |
| 4. 暗褐色。ローム土塊と黒色土がブロック状に入る。 | 12. 暗褐色（軟質）ローム粒を多く含む。 | |
| 5. 暗褐色（明るい）。ローム土塊を多量に含む。 | 13. 宝永火山灰。 | |
| 6. 暗褐色（明るい）。ローム粒を多く含む。 | 14. 暗褐色（軟質）。ローム土塊を含む。 | |
| 7. 暗褐色（明るい）。ローム土塊を含む。 | 15. 暗褐色（少し暗い）（軟質）。ローム粒を多く含む。 | |
| 8. 暗褐色（硬質）。ローム土塊を多く含む。 | | |

第50図 B2-2号溝状遺構実測図



土層説明

- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| 1. 暗褐色（少し軟質）。ローム土塊を多く含む。 | 5. 暗黄褐色（硬質）。ローム土塊を多く含む。 |
| 2. "。硬化面。 | 6. 暗褐色（軟質）。 |
| 3. "。ローム土塊を含む。 | 7. "（硬質）。ローム土塊を多く含む。炭粒を若干含む。 |
| 4. 黄褐色。ローム土塊を多く含む。 | 8. 暗褐色。ローム土塊を多く含む。 |

第51図 B2-3号道路状遺構実測図

5 B 3 区 (第52図)

当区は遺跡の南西側に位置し、C 1 区が南側で隣接する。西側は南北方向に東側は東西方向から小谷が入り込んでいる。調査区は5ヶ所あり、そのうち検出した遺構は縄文時代と考えられる土坑9基、奈良平安時代の方形区画墓4基である。北側の4ヶ所の調査区では、北東側の調査区に新しい溝がある他、新しい耕作用の土坑（イモ穴）が多く、古い遺構と考えられるものは検出されていない。土坑のうち（第6表、第53、54図）B 3-4と5は陥穴である。他は長円形が多くB 3-9は2段を示し深い方形の土坑をもつ。出土遺物は皆無である。

B 3-1号方形区画墓（第56図）は調査地区の南側にあり、平面形体は台形にちかく少し歪んでいる。規模は長軸7.33m、短軸6.14m、周溝幅33~49cm、最大の深さ20cmを測る。主軸方向はE-26°-Nを示す。周溝内にややピットが目立つ。西側周溝の中央部に長円形の土坑が周溝を切って存在する。規模は長径2.29m、短径0.97m、深さ88cmで、主軸方向はN-45°-Eを示す。主体部の可能性も伺える土坑である。出土遺物は（第55図1~3）3点で1は灰釉陶器の底部片と考えられ高台が付く、外面には釉が付着している。2と3は須恵器瓶の体部片と口縁部片とみられる。

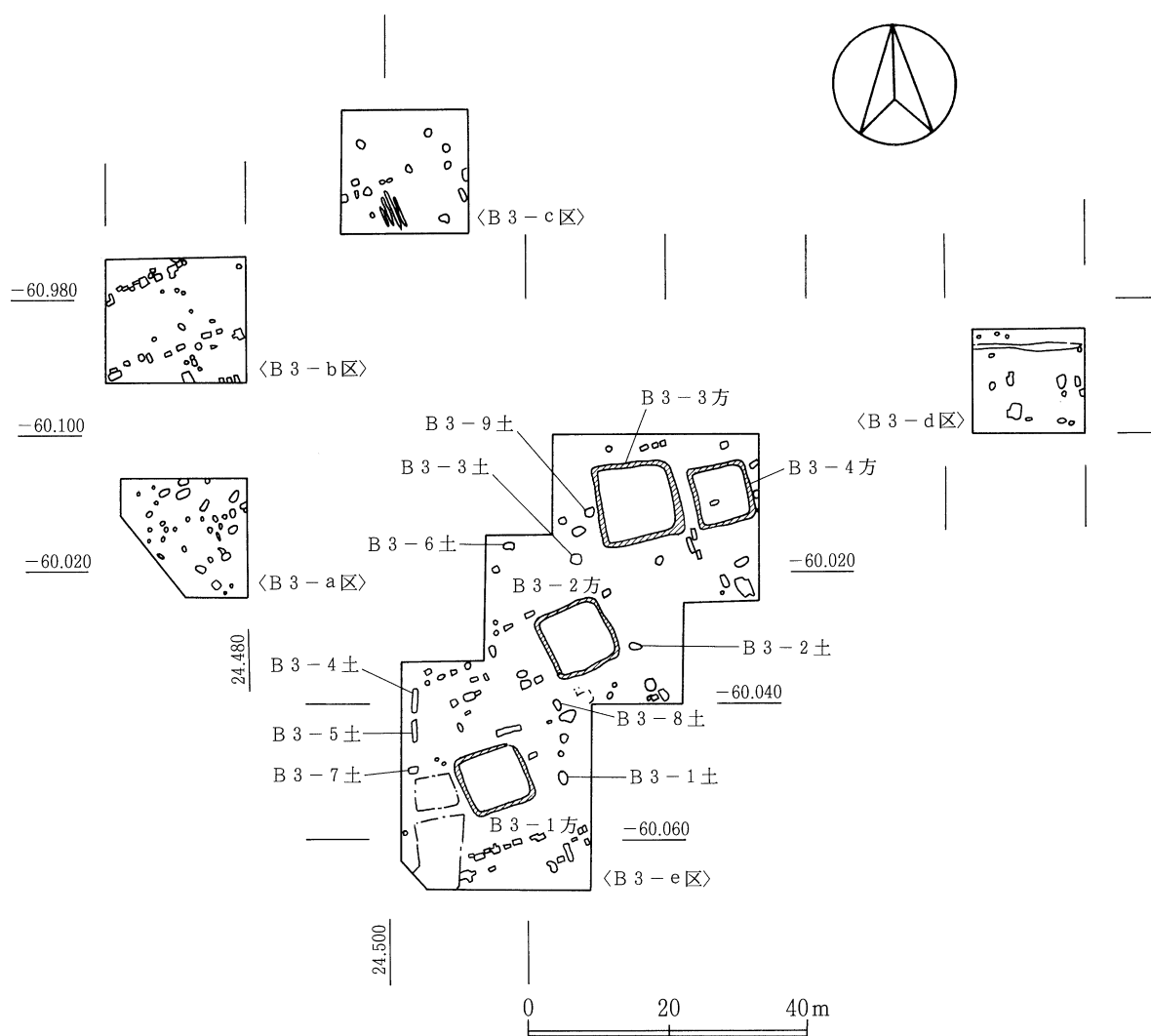
第6表 B 3 区土坑一覧表

番号	土坑番号	挿図番号	旧土坑番号	規模 (cm)			主軸方向	性格	その他
				上端	下端	深さ			
1	B 3-1	第53図	S K 01	53×45	39×29	33	S-38°-N		長円形
2	B 3-2	"	S K 03	57×43	42×28	31	S-33°-N		"
3	B 3-3	"	S K 04	50×31	42×23	9	E-40°-N		" 底部にピット1本。
4	B 3-4	"	S K 05	233×148	198×26	113	N-6°-E	陥穴	長円形
5	B 3-5	"	S K 06	217×98	181×21	90	N-3°-E	"	"
6	B 3-6	第54図	S K 07	124×101	85×64	86	N-9°-E		"
7	B 3-7	"	S K 08	153×100	106×56	60	W-38°-N		"
8	B 3-8	"	S K 09	138×101	100×61	69	W-23°-N		
9	B 3-9	"	S K 02	171×127	92×49	103	W-11°-N		立ち上がりが2段。

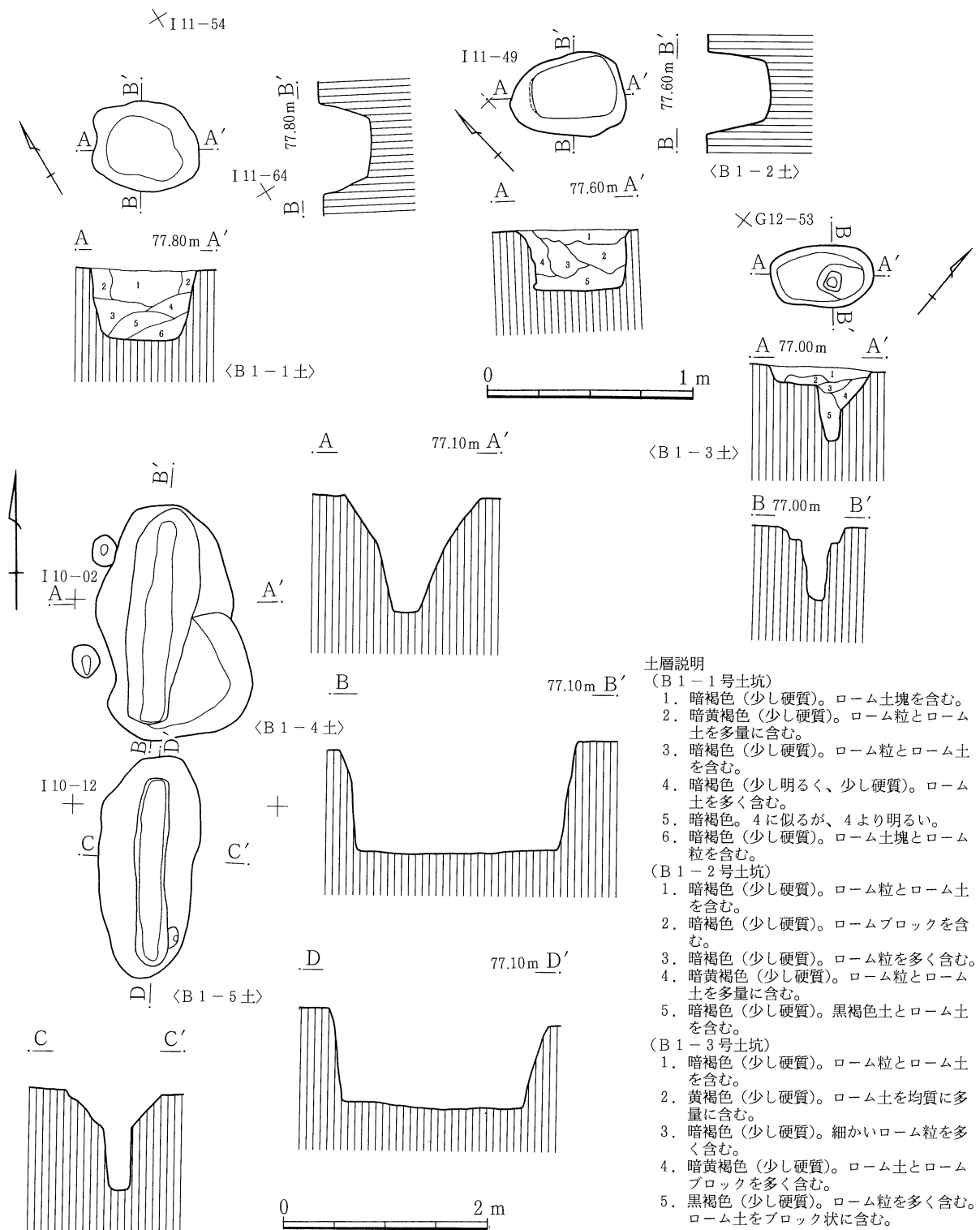
B 3-2号方形区画墓は（第57図）B 3-1号より北東に約12m離れて位置する。攪乱が多いが規模は長軸9.40m、短軸9.00m、周溝幅0.18~1.50m、最大の深さは22cmで主軸方向はN-26°-Wを示す。出土遺物はない。

B 3-3号方形区画墓（第58図）は、当地区で最も規模が大きくB 3-2号より北東に約7m離れて所在する。規模は長軸12.42m、短軸12.26m、周溝幅0.98~1.3m、最大の深さ70cmで、主軸方向はN-11°-Wを示す。中央やや東側に2基の方形土坑が重複して存在する。南西側の土坑が新しいとみられ、内部に方形の櫃状の落ち込みを確認した。北東側の土坑では確認できなかった。いずれもローム土塊を充鎮している。規模は南東側が長軸203cm、短軸147cm、内部が長軸102cm、短軸91cm、深さは40cm、主軸方位はN-29°-Wを示す。出土遺物は（第55図4）周溝内より須恵器壺の底部片1点である。外面にヘラケズリがある。

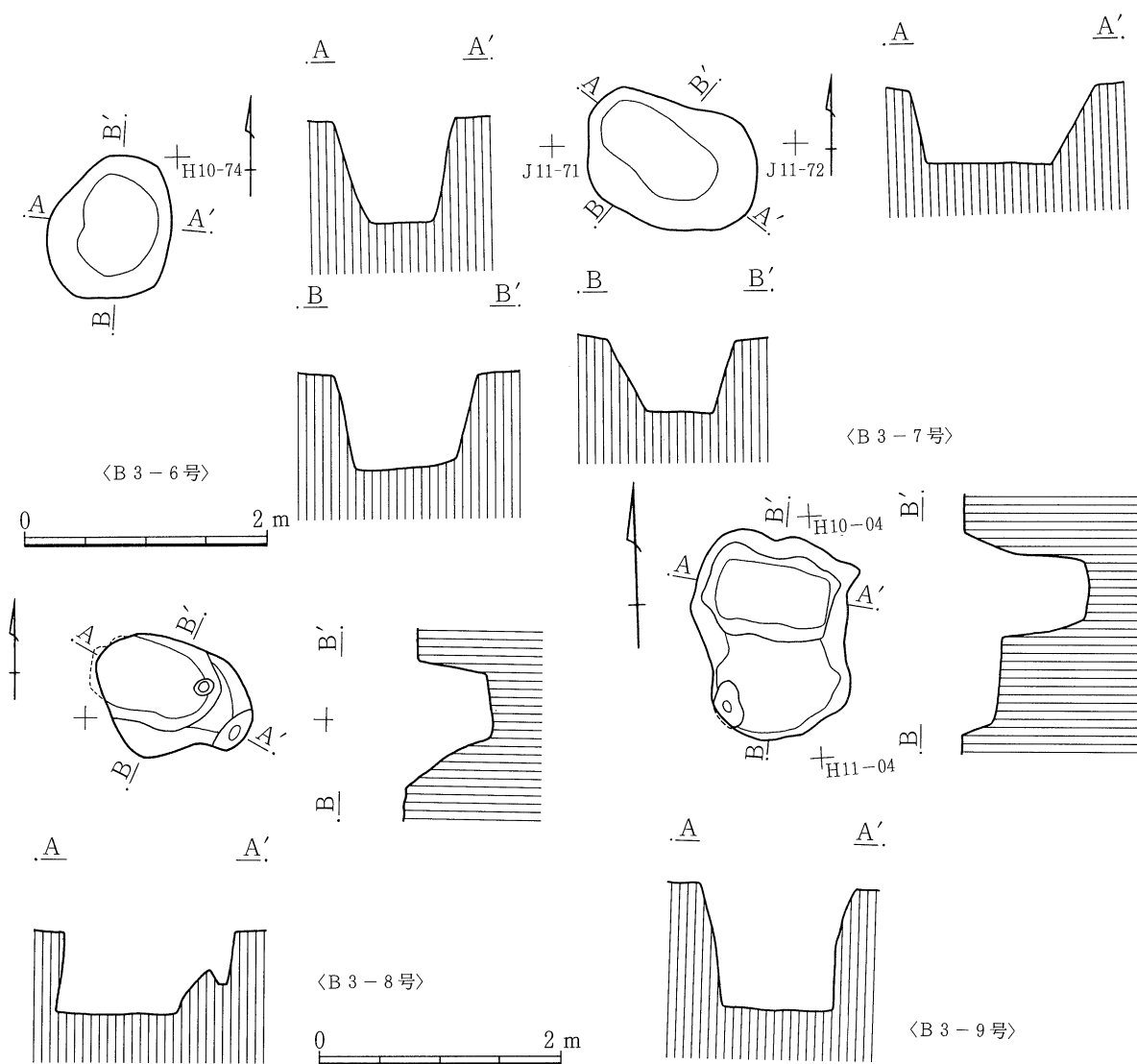
B 3-4号方形区画墓（第59図）はB 3-3号の東側約2mに隣接する。南東側の隅が切れている。規模は長軸7.62m、短軸7.43m、周溝幅59~108cm、最大深さ30cmで、主軸方位はE-14°-Nを示す。出土遺物は（第55図5）、須恵器長頸壺の体下半部片が1点ある。



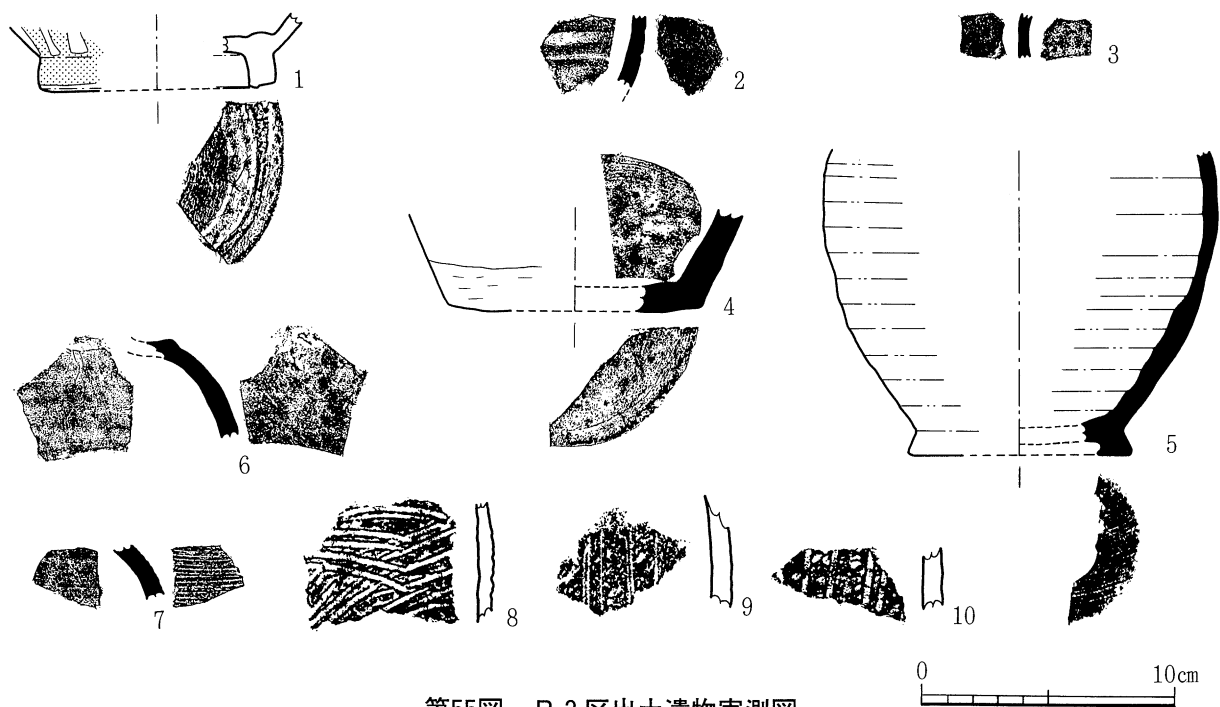
第52図 B3区全体図



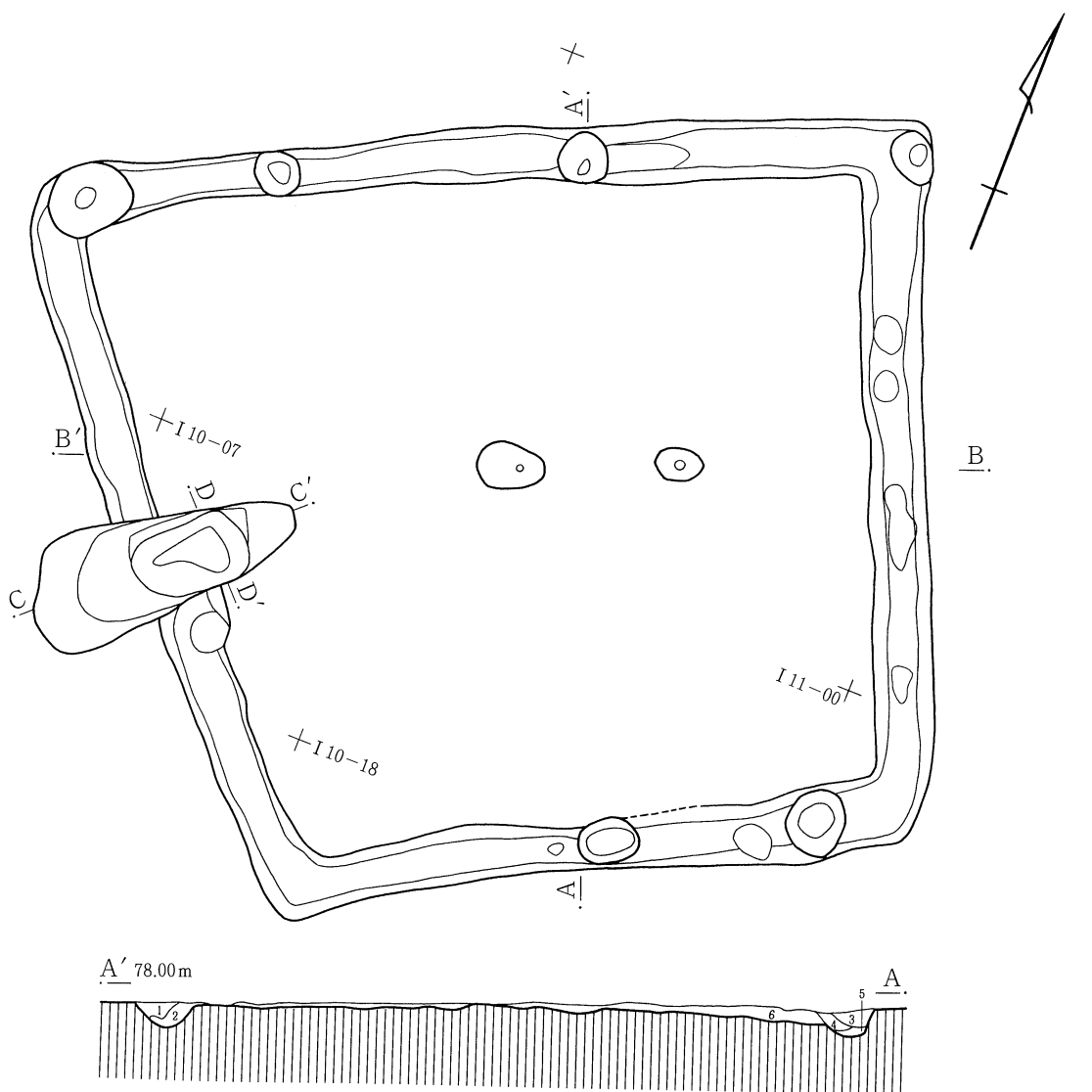
第53図 B 3-1~5 号土坑実測図



第54图 B3-6~9号土坑实测图

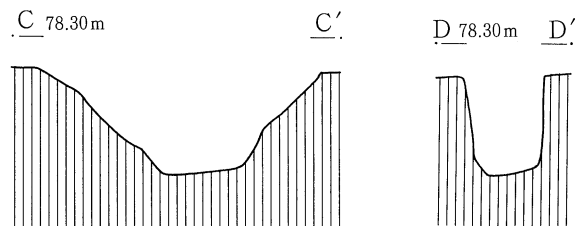


第55图 B3区出土遗物实测图



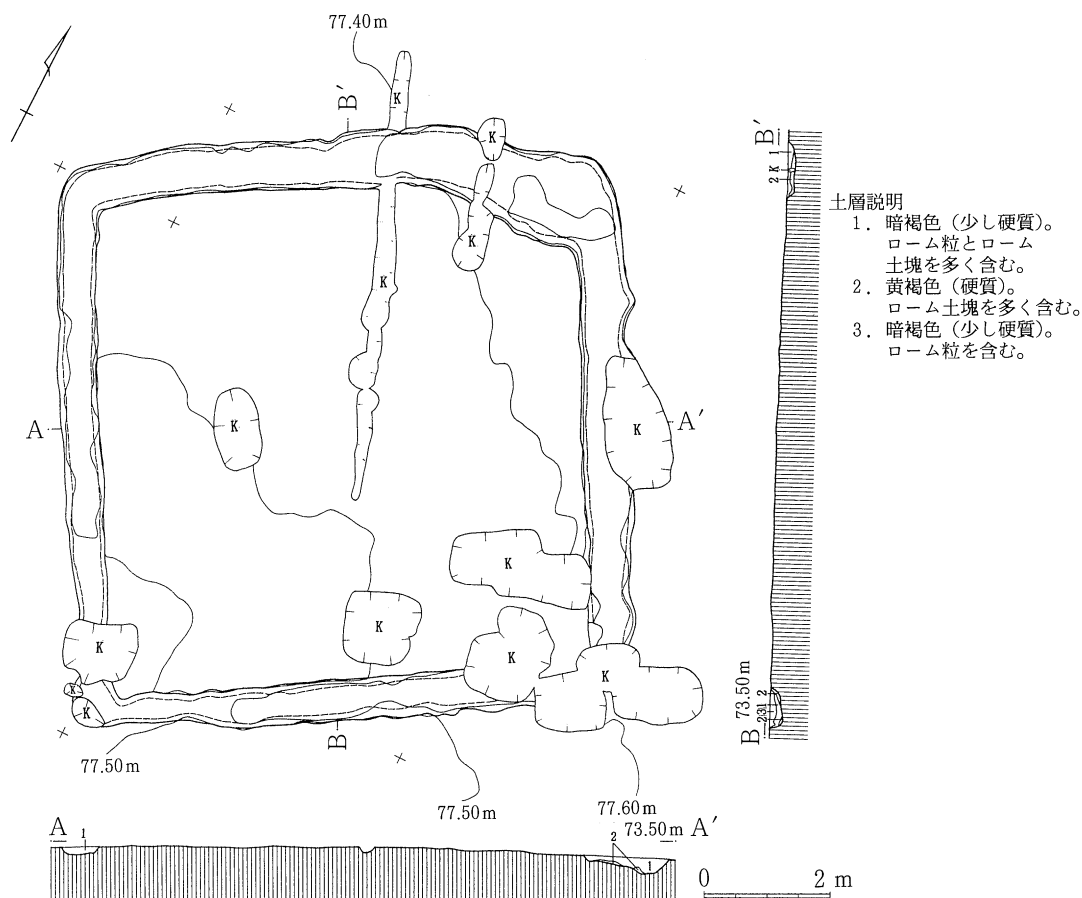
土層説明

1. 暗褐色。ローム土を含む。
2. 暗褐色。ローム土を均一に含む。
3. 暗褐色。ローム粒を多く含む。
4. 暗褐色（少し明るい）。" "。
5. 暗褐色（少し軟質）。ローム土と黒色土の混合。
6. 暗褐色。" "。
7. 暗黄褐色。ローム土とローム粒を含む。
8. 暗褐色。ローム土塊とローム粒を含む。
9. 褐色（軟質）。ローム土塊が多く入る。
10. 暗褐色。（攪乱の可能性もある）。



0 2 m

第56図 B 3 - 1 号方形区画墓実測図



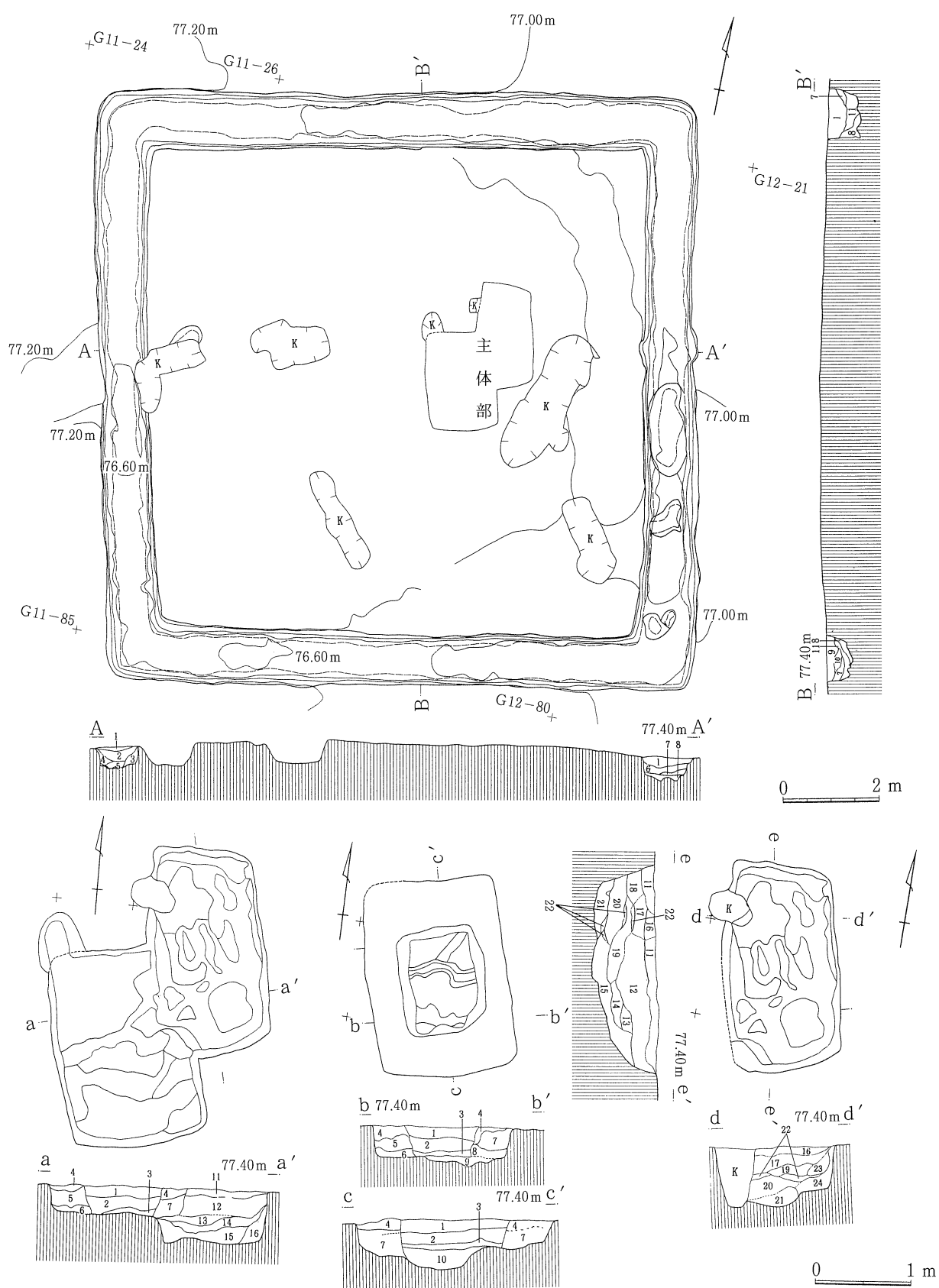
第57図 B3-2号方形区画墓実測図

土層説明 (B3-3号方)

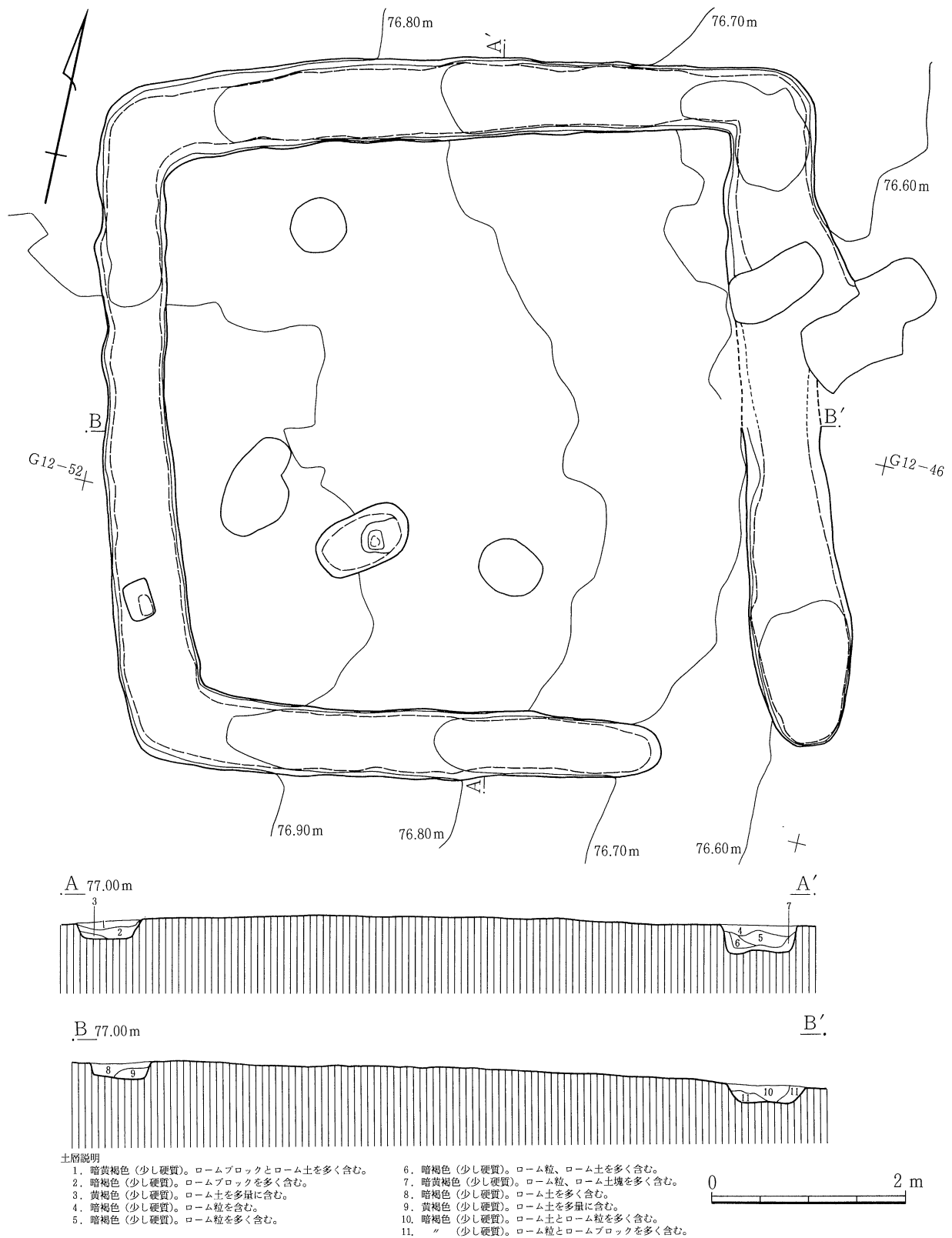
1. 暗褐色 (少し硬質)。ローム粒を多く含む。
2. 黒褐色 (少し硬質)。ローム粒を含む。
3. 暗黄褐色 (少し硬質)。ローム土塊を多く含む。
4. 暗黄褐色 (少し硬質)。ローム粒を多く含む。
5. 黒褐色 (少し硬質)。ローム粒とローム土塊を含む。
6. 暗褐色 (少し硬質)。ローム土塊を多く含む。
7. 暗褐色 (少し硬質)。ローム粒とローム土塊を多く含む。
8. 褐色 (少し硬質)。ローム粒とローム土塊を多く含む。
9. 暗褐色 (少し硬質)。ローム粒と焼土粒を含む。
10. 暗褐色 (少し硬質、少し暗い)。ローム粒を含む。
11. 暗褐色 (少し硬質、明るい)。ローム粒とローム土塊を多く含む。

(B3-3号方、主体部)

1. 暗褐色。ローム土塊を含む。
2. 褐色 (少し硬質)。ローム土塊を多く含む。
3. 黒褐色 (少し硬質)。ローム粒を多く含む。
4. 褐色 (硬質)。ローム土塊をブロック状に含む。
5. 黒褐色 (少し硬質)。ローム土塊を少量含む。
6. 暗褐色 (少し硬質)。ローム土塊を含む。
7. 4に似るが、わずかにローム土塊が少ない。
8. 黒褐色 (硬質)。ローム土塊を含む。
9. 褐色 (硬質)。ローム土塊を多く含む。
10. 黒褐色。ローム土塊を多く含む。
11. 暗褐色 (少し明るく、硬質)。ローム土塊を含む。
12. 暗褐色。ローム土塊を含む。
13. 暗褐色 (少し軟質)。ローム粒を含む。
14. 黒褐色 (少し軟質)。ローム土塊を含む。
15. 暗褐色 (少し暗く、少し軟質)。ローム土塊を含む。
16. 暗褐色 (少し硬質)。ローム土塊を含む。
17. 暗褐色 (軟質)。ローム土塊を含む。
18. 暗褐色 (硬質)。ローム土塊を含む。
19. 14に似るが、わずかにローム土塊が多い。
20. 褐色 (少し暗く、硬質)。ローム土塊を多く含む。
21. 15に似るが、やや明るく、ローム土塊が少ない。
22. 褐色 (硬質)。ローム土塊がブロック状を成す。
23. 19に似るが、明るく、ローム土塊が少ない。
24. 22に似るが、22より硬質でロームブロック化。



第58図 B 3 - 3 号方形区画墓及び主体部実測図



第59図 B 3 - 4 号方形区画墓実測図

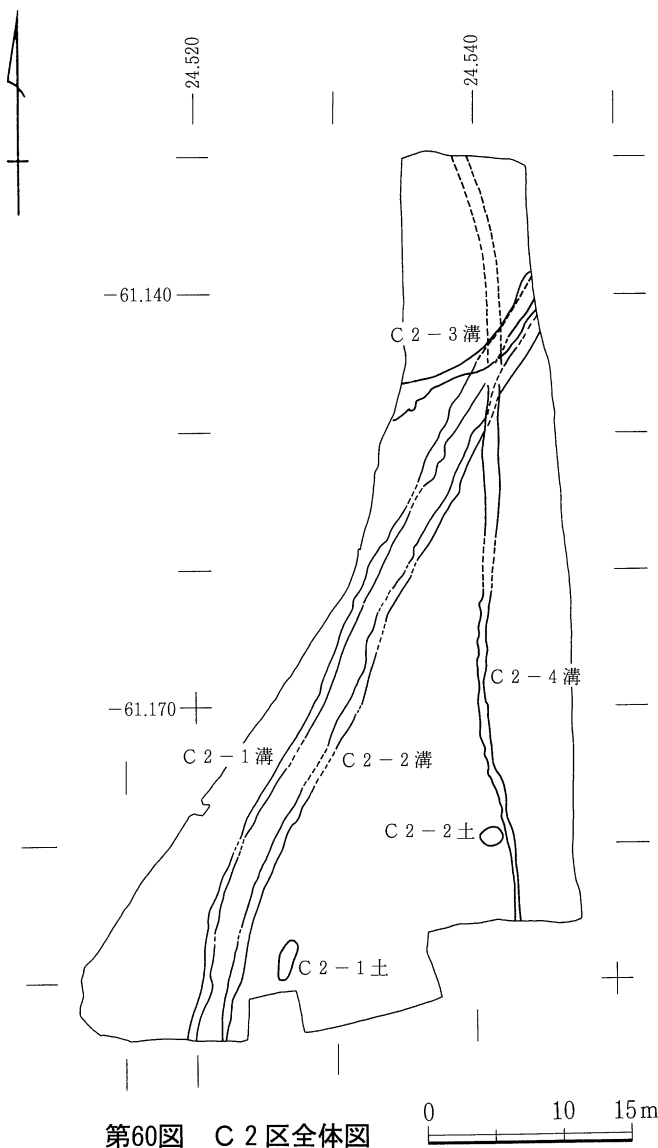
以下B3区出土遺物の内容を記す。B3-1号方形区画墓出土の灰釉陶器片（第55図1）は、底部付近全体の約1/5の残存で底径は推定で9.3cmである。色調は両面とも暗灰色で灰釉の部分は明褐色と黒色である。焼成は普通、胎土は緻密で極少量1mm前後の小礫を含む。2の須恵器瓶の体部片は色調が外面黒灰色、内面暗灰色で、焼成はやや不良、胎土は緻密である。3の口縁部片（口頸部）は色調が両面とも暗灰色で焼成は普通、胎土は緻密である。2と3は同一個体の可能性がある。B3-3号方形区画墓出土の須恵器壺の底部片（第55図4）は、底部全体の1/4程度の残存で、底部径は推定で10.1cmを計る。色調は外面が暗灰色、内面は淡灰褐色で、焼成は良好。胎土は1mmくらいの小礫を多く含んでいる。内面はユビによるナデ痕が残っている。B3-4号方形区画墓出土の須恵器長頸壺片（第55図5）は、体下半部（底部を含む）約1/4程度の残存である。底部は高台をもち、体部はやや細長い球状に張っている。底部径は推定で8.8cmを計る。色調は外面が黒褐色と暗鶯色、内面が灰色を呈する。焼成は良好、胎土は1mm前後の小礫を含んでいる。わずかに体部外面に自然釉がかかる。

その他の出土遺物として、（第55図）6はI11-00付近より表採された須恵器長頸壺の体上部から頸

部にかけての破片で外面には自然釉がかかる。体部は球状を呈していたと思われ、弧を描いて内傾している。頸部付近の破片上端には口縁部との接合のためと思われる粘土の盛り上がりが残っている。色調は外面が淡灰色一部黒灰色、内面が黒灰色で、焼成は普通、胎土は緻密である。I11-00グリッドはB3-2号方形区画墓が位置するがこれに伴っていた可能性もある。7も須恵器片で外面のカキ目から瓶の破片と推定される。J11-00付近より表採された。色調は両面とも黒灰色、焼成は普通、胎土は緻密である。表採したグリッドはB3-1号方形区画墓に近く、この遺構に伴う可能性もある。

8～10は縄文式土器片である。すべてグリッドから一括して取り上げている。

8は深鉢片で沈線を幾何学的に描いている。前期後半の諸磯b式とみられる。9と10は縄文を地文にその上から縦方向の沈線を描いており、後期前半の堀ノ内I式の範疇と考えられる。当地区内に所在する土坑の時期を考える資料となるかもしれない。



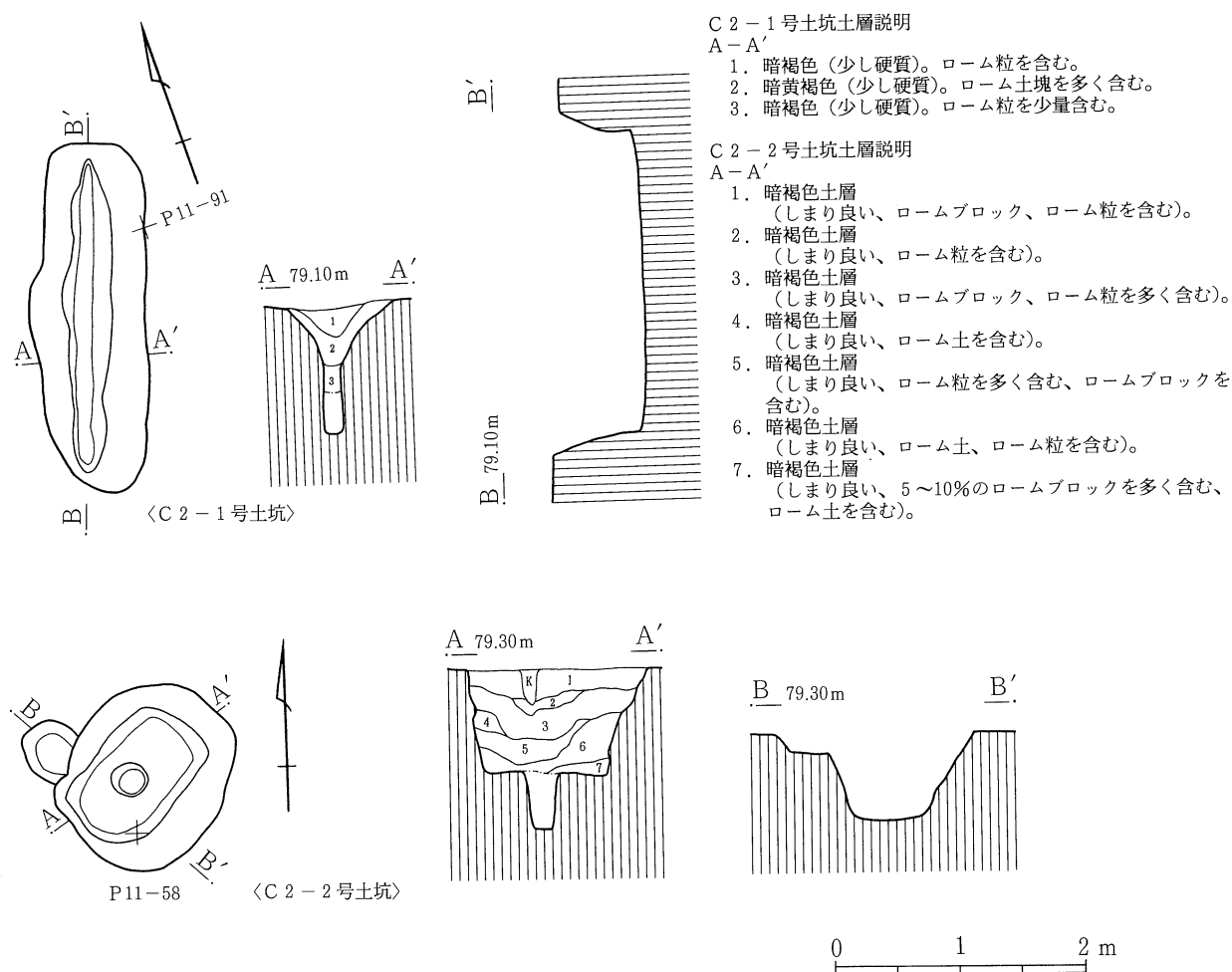
第60図 C2区全体図

6 C 2 区 (第60図)

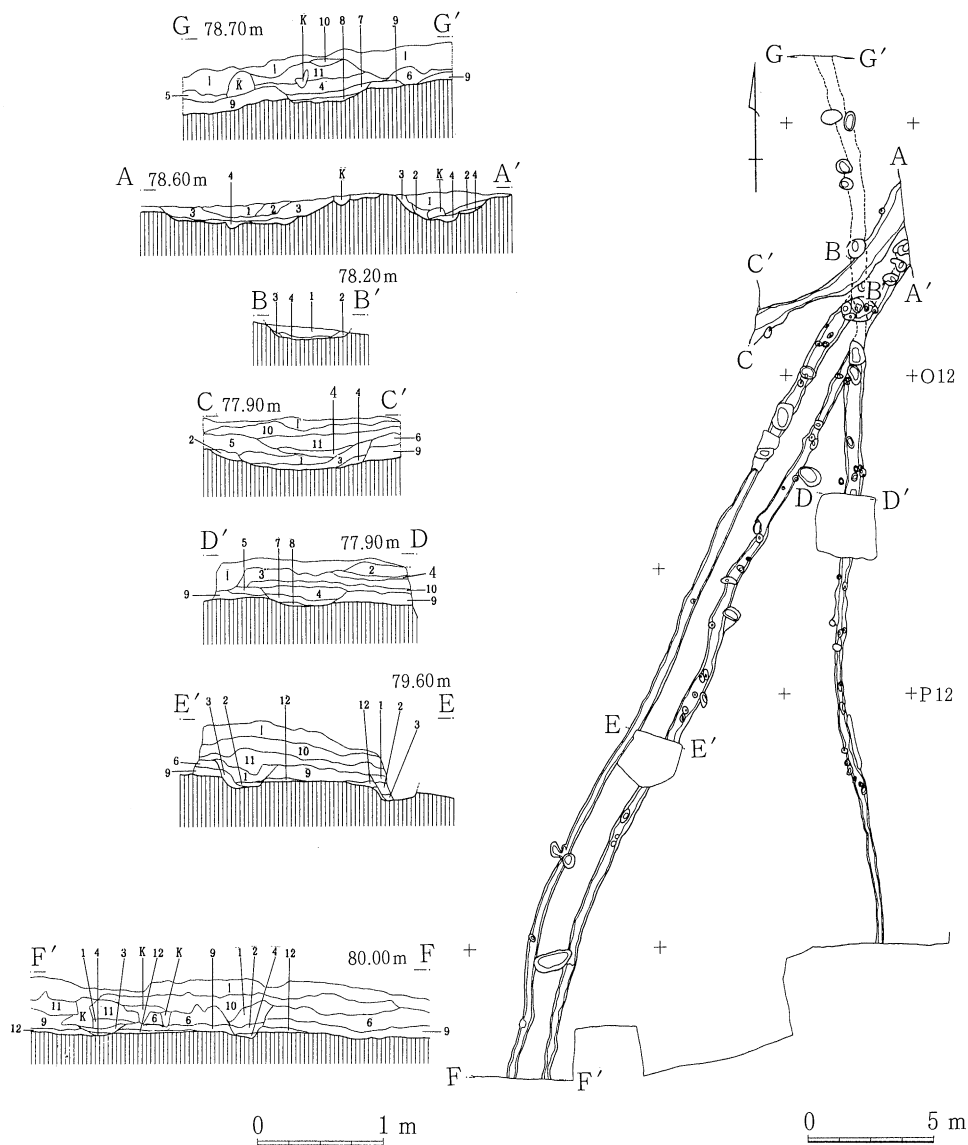
当区は遺跡の南側に所在し、B 3 区の南側、C 1 区の西側隣接地に位置する。西に存在する引田川の最奥部を望む南東側台地上でもある。検出した遺構は縄文時代の所産とみられる土坑 2 基と溝状遺構 4 条である。

C 2 - 1 号土坑 (第61図) は陥穴で長円形を示し、上端の長径は2.76m、短径0.93m、下端の長径2.37m、短径0.15m、深さ73cmで、主軸方位はN-20° - Eである。上部は削平されたと考えられる。出土遺物はない。C 2 - 2 号土坑 (第61図) も陥穴で長方形を示し、上端の長軸1.47m、短軸1.27m、下端の長軸0.99m、短軸0.57m、深さ85cmで、主軸方位はN-46° - Eであり、底部中央にピットをもつ。遺物は茅山式の土器片 1 点 (第63図 1)。C 2 - 1, 2 号溝状遺構は (第62図) 南西から北東方向に 2 本の溝が1.2~1.5mの間隔で平行に走っている。溝幅25~75cm、深さは26cmを測る。この溝はC 1 区からの同様の溝に接続する。(8、C 1 区参照)

C 2 - 3, 4 号溝 (第62図) は新しい溝で硬質面などが認められ、道として機能していたと思われる。その他の遺物としては、第63図 2 が三戸式、3 が石鏃片である。



第61図 C 2 - 1、2 号土坑実測図

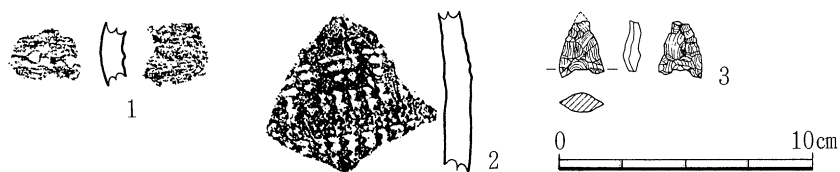


土層説明

I 表土

1. 黒褐色 (少し硬質)。ロームを全体に混入。ローム粒を含む。
2. 暗褐色 (少し硬質)。1 よりロームが多い。
3. 暗黄褐色 (少し硬質)。ローム粒を多量に含む。
4. 黄褐色 (少し硬質)。2 よりロームが多い。
5. 暗褐色 (少し硬質)。2 よりロームが少なく暗い。
6. II a
7. 暗褐色 (少し硬質)。ロームを全体に混入。ローム粒を少量含む。
8. 暗褐色 (硬質)。ロームと黒褐色土がブロック状に入る。
9. II b
10. 暗褐色 (少し硬質)。ロームを全体に含む。
11. 暗褐色 (少し硬質)。黒褐色土をブロック状に含む。
12. II c

第62図 C 2 区溝状遺構実測図



第63図 C 2 区出土遺物実測図

7. C 3 区 (第64図)

当区は遺跡の南東側に所在し、遺跡の東側に存在する高坂方面から北側に開折する谷の一支谷を北側に望む位置である。C 1 区は南西側に約150m離れて所在している。また南側は現在光風台団地となっており本来は幾つかの小谷が入るものの基本的には台地が続いていたと考えられる。

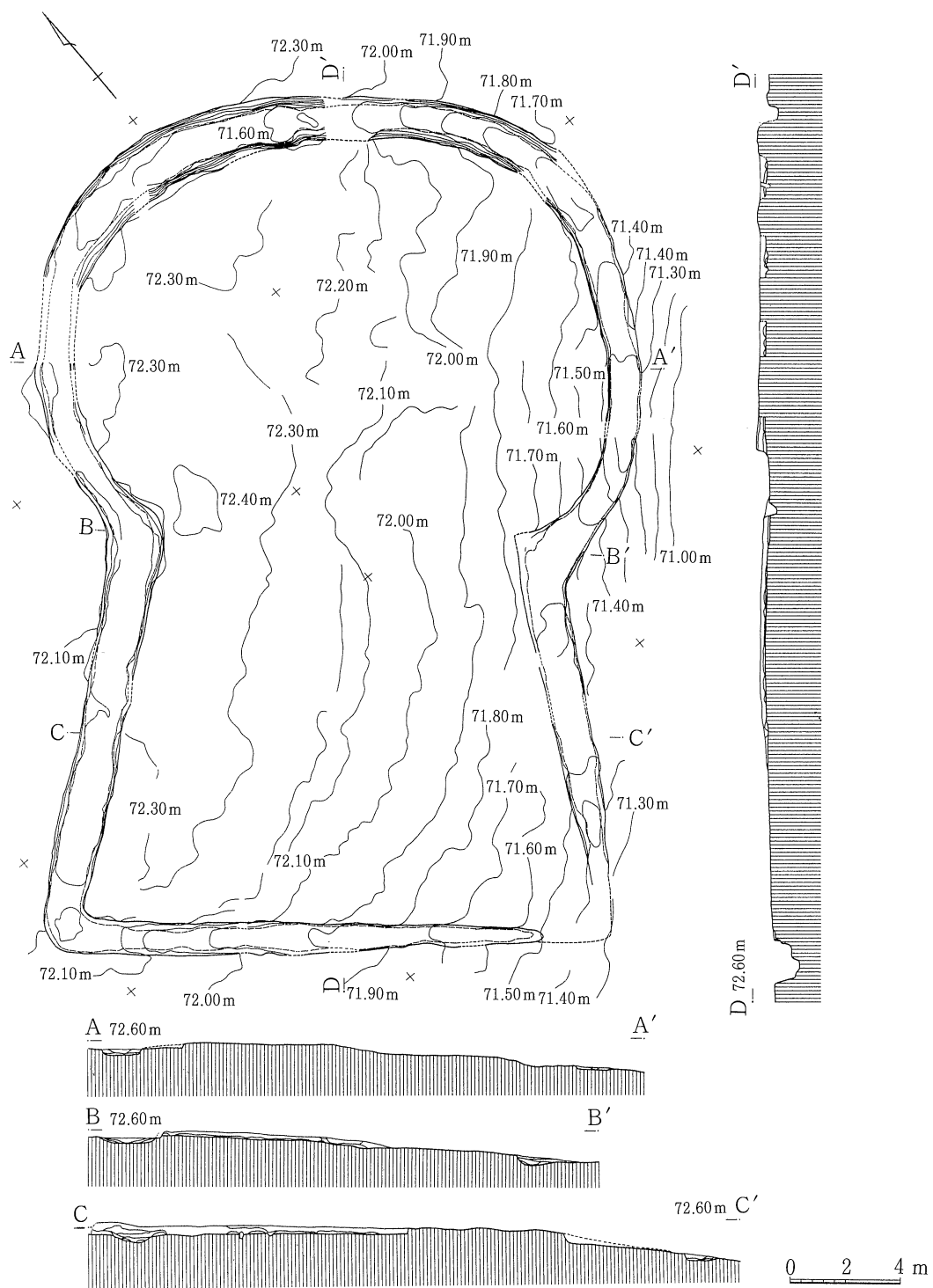
検出した遺構は前方後円墳1基である(第64・65図)。古墳は台地の中央部に立地し、北西側に小谷を望む位置である。台地の標高は約75mで小谷との比高は約30mを測る。南側の団地内などには円墳等の古墳群が周知されており中高根古墳群(前方後円墳1基を含む13基で構成)と呼ばれる。本墳もその中の1基に加えることが出来る。中高根古墳群中では最も北側で台地の奥部にあたる。

古墳は検出状況が悪く、墳丘はまったく残存せず表土を除去するとソフトローム面(Ⅲ層)が露出する状態であった。また東側は小さな谷に向かって傾斜しており、前方端部の南東側隅部分の周溝が途切れていた。さらに各所に耕作用のイモ穴による攪乱土坑が存在した。古墳内の樹木は、事業者との協議でできる限り残して調査した。

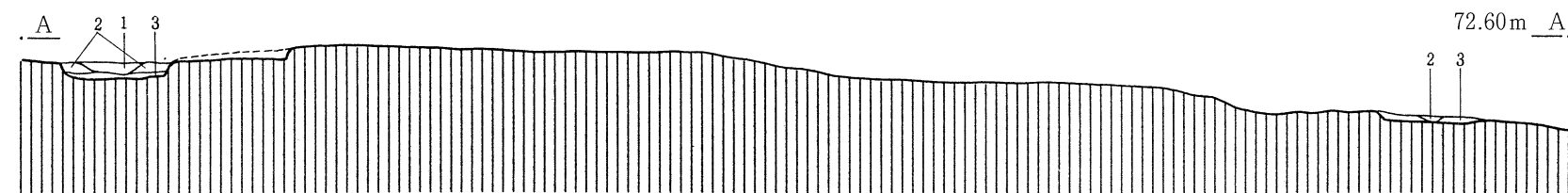
規模は長軸周溝外30.88m、長軸周溝内28.16m、後円部直径周溝外21.76m、周溝内19.28m、くびれ部の幅周溝外16.64m、周溝内12.96m、前方端部幅周溝外20.48m、周溝内18.48m、周溝の最大幅は後円部北側と西側くびれ部で2.08m、周溝の深さは最大で70cmを測る。主軸方向はN-41°-Eを示す。

周溝からみた墳形は前方部が幅広く後円部はやや左右の径が広い扁平な球体をもつ。主体部は検出されなかった。出土遺物は無い。周溝内の覆土は少しの残存であるが自然堆積で特に墳丘土の流れ込みは確認できなかった。周溝内土坑も検出されていない。古墳の時期については出土遺物がなく断定できる資料がない。また墳形から想定するのも危険であるが、一応6世紀後半頃と推定しておきたい。



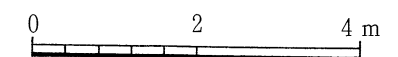
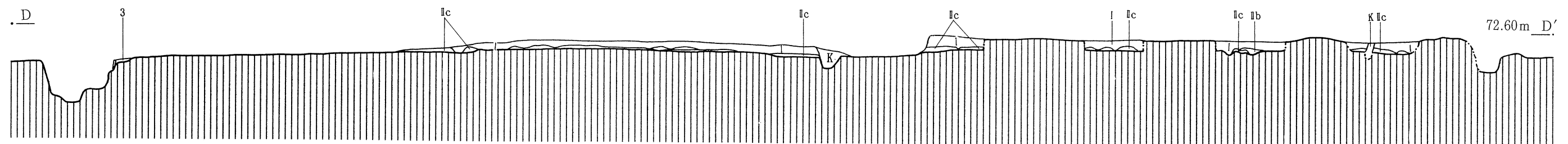
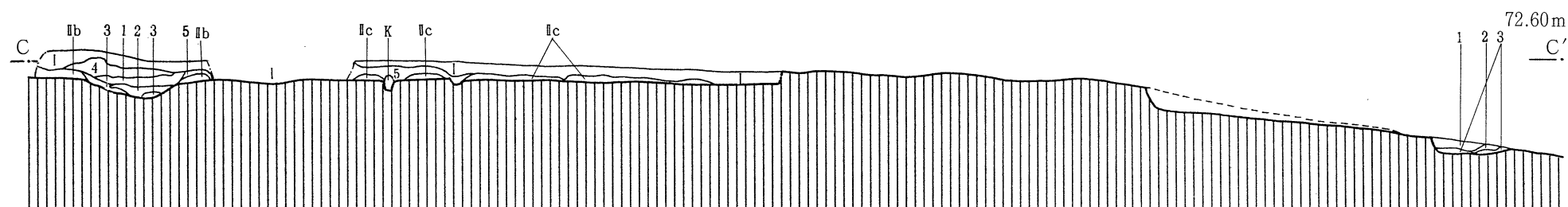
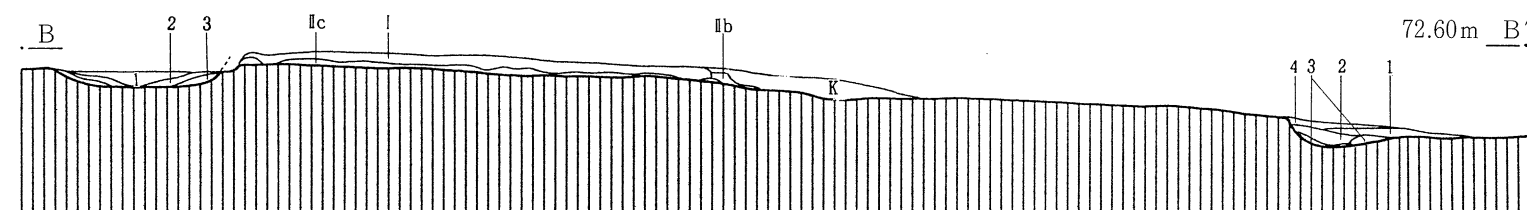


第65図 C3-1号前方後円墳実測図



土層説明

- I 表土
- II b ... 暗褐色（明るい）（少し硬質）。ローム粒多く含む。
- II c ... ソフトローム
- 1 黒褐色。ローム粒を多く含む。
- 2 暗褐色。ローム粒を少量含む。
- 3 暗褐色（明るい）。ローム土塊を含む。
- 4 黒褐色。ローム粒を含む。
- 5 暗褐色。少し硬質。ローム土塊を多く含む。
- K 攪乱。

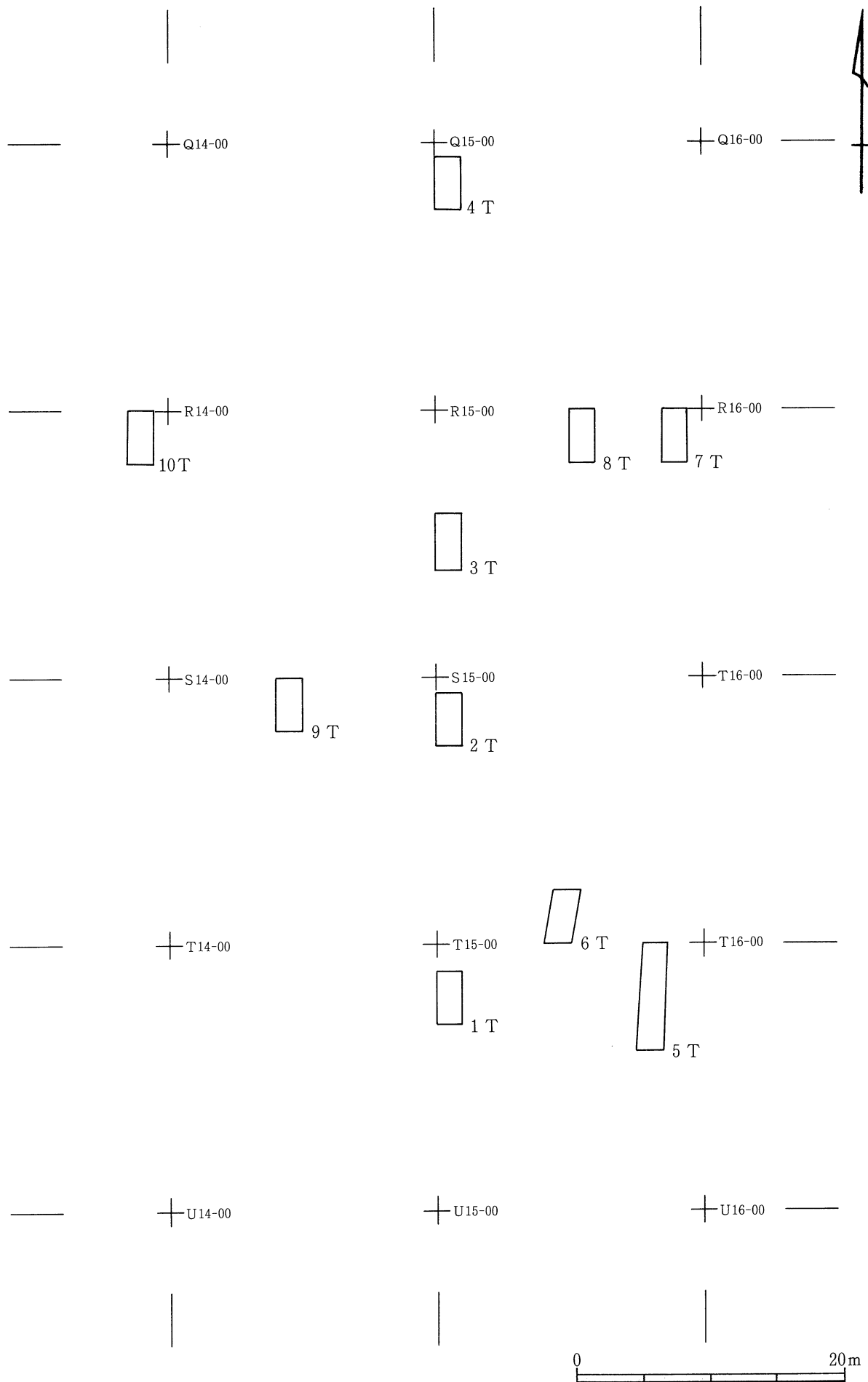


第66図 C 3 - 1 号前方後円墳土層断面図

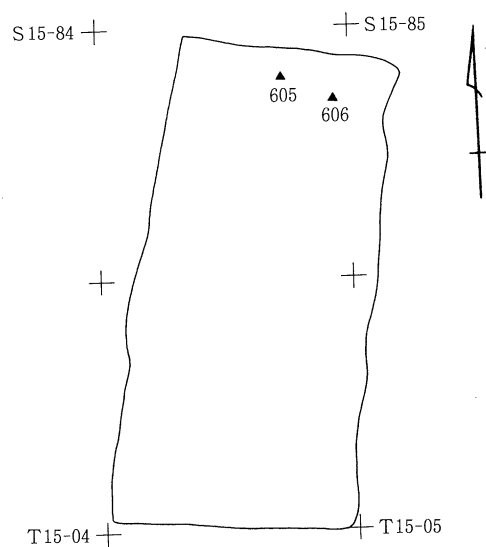
100



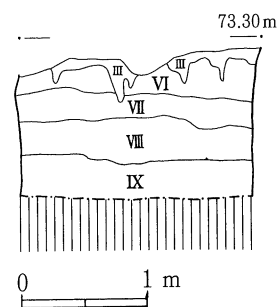
第67図 C 1 区全体図



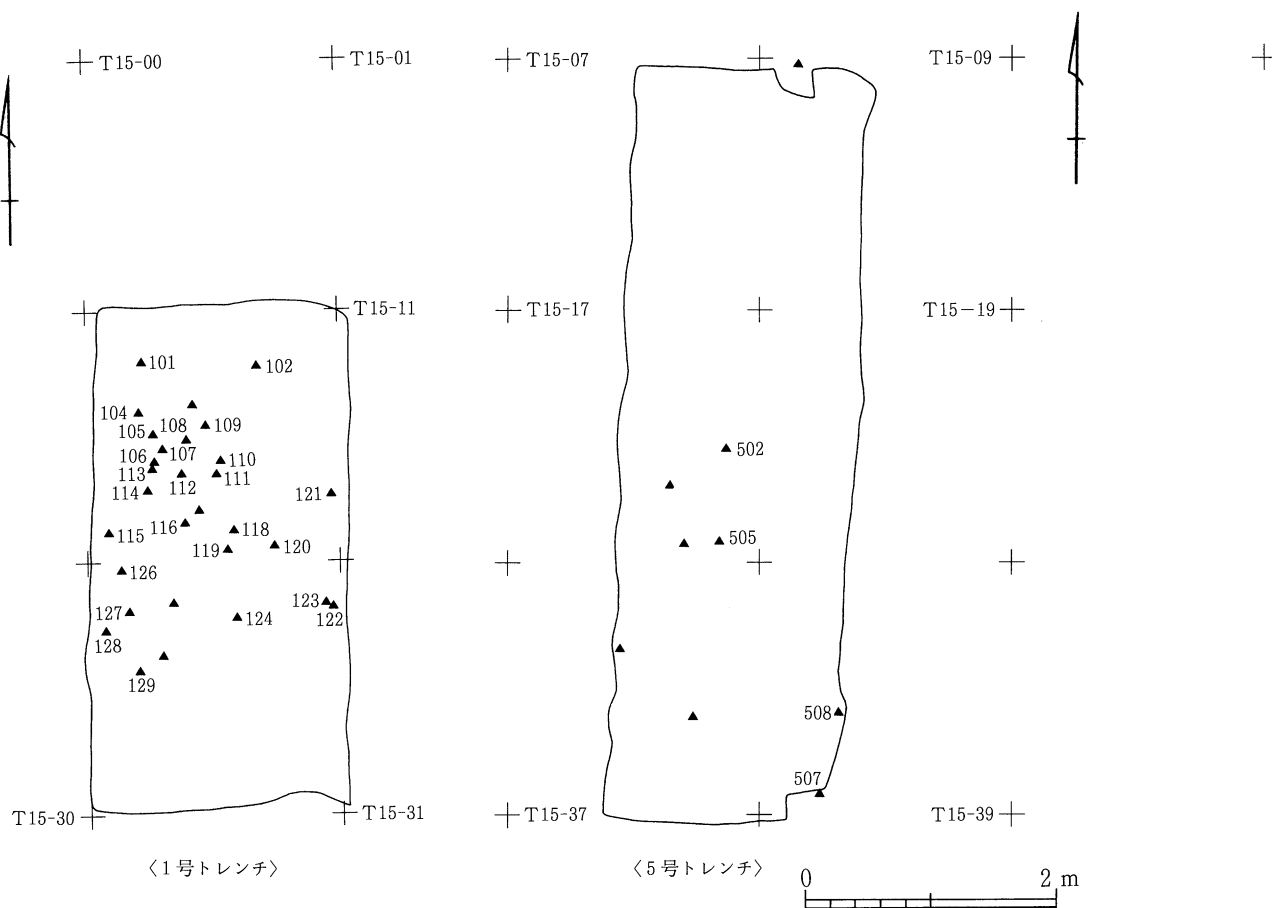
第68図 C 1 - 1 号遺構トレンチ設定図



〈6号トレンチ〉



1号トレンチ北壁土層セクション実測図



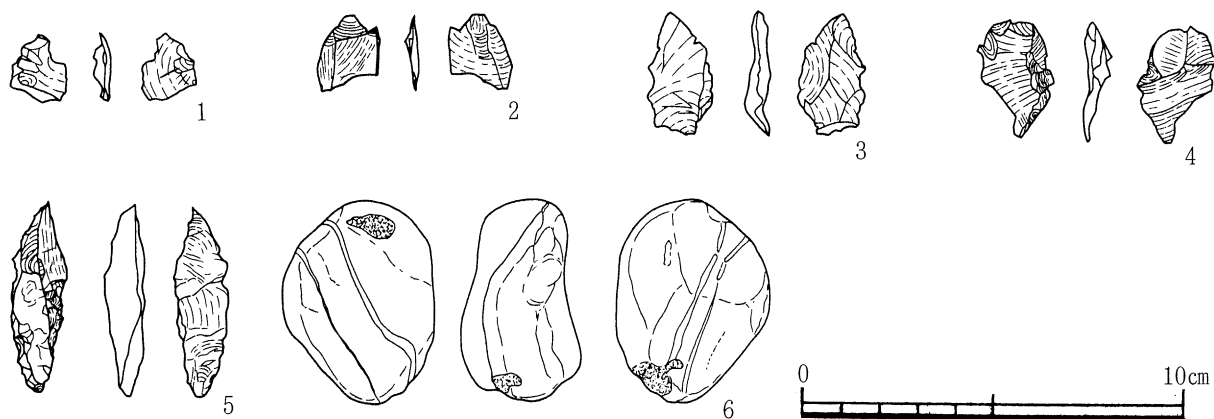
〈1号トレンチ〉

〈5号トレンチ〉

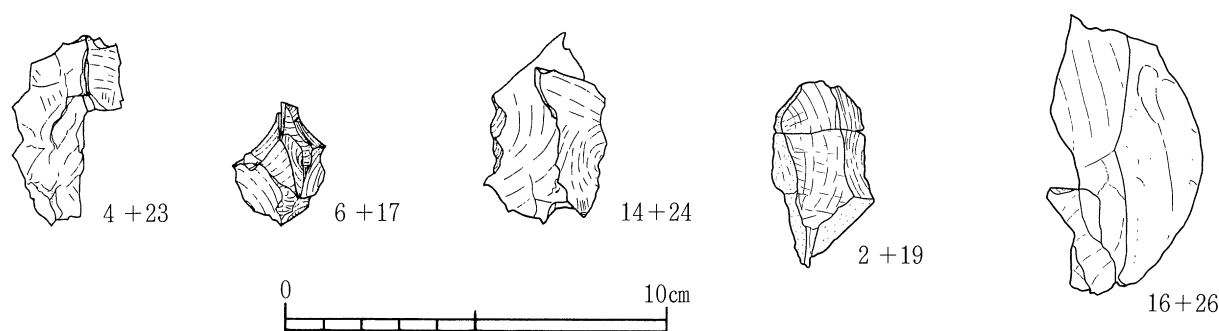
第69図 C 1 - 1号遺構旧石器出土状況実測図



第70图 C 1 - 1号遺構旧石器实测图(1)



第71図 C 1 - 1 号遺構旧石器実測図(2)

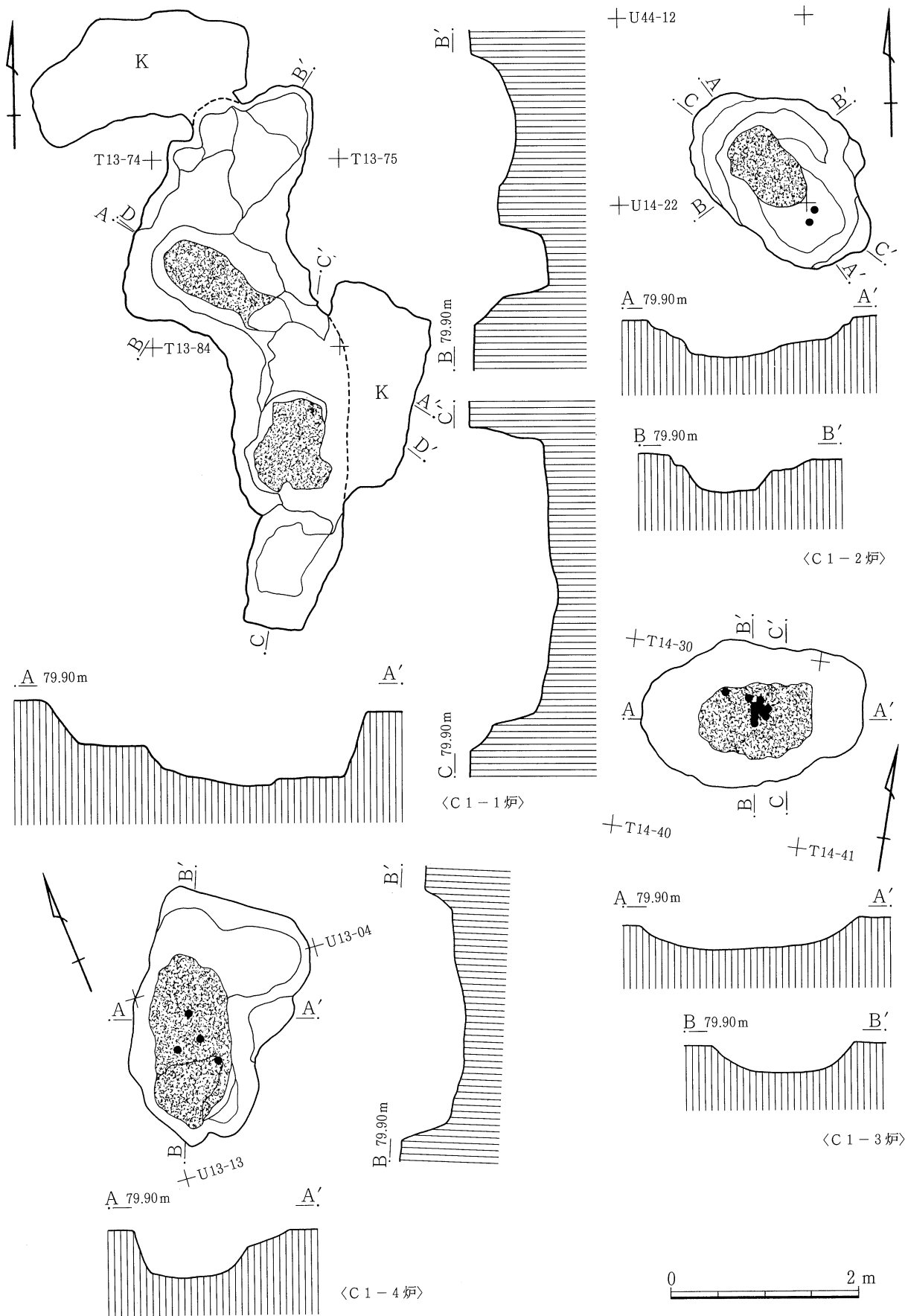


第72図 C 1 - 1 号遺構旧石器接合図

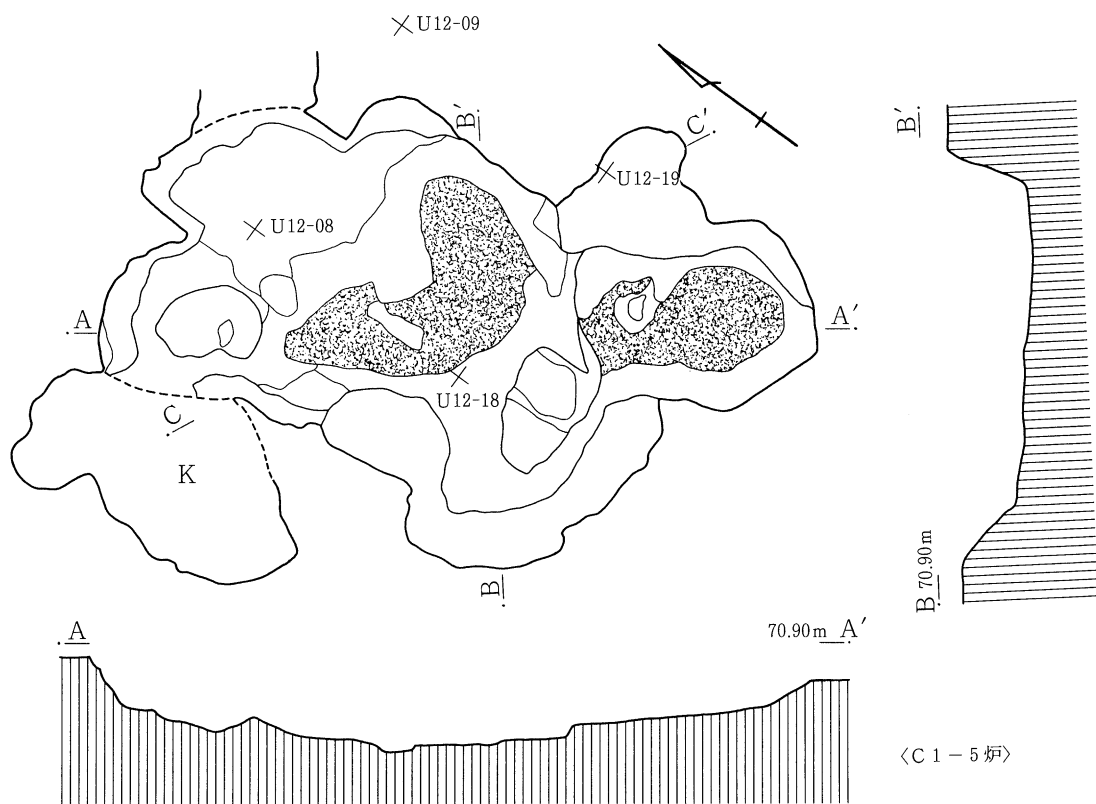
当区は遺跡の最も南に位置し、西側は引田川開折谷の一支谷の最奥部、北東側は高坂方面から開折する谷の最奥部にあたる。台地は比較的広く菱形を呈し、西縁部はC 2 区が存在し、北西側と北東側は尾根を隔ててB 3 区とC 3 区が各々近接する。標高は約80mで遺跡の中で最も高所である。

検出した遺構は、旧石器時代の地点分布（ユニット）1ヶ所、縄文時代早期後半の炉穴群13群、縄文時代の陥穴12基、中期の竪穴住居跡1軒、古墳時代後期の竪穴住居跡10軒、奈良平安時代の方形区画墓6基、土坑7基、溝と道路跡9条である。

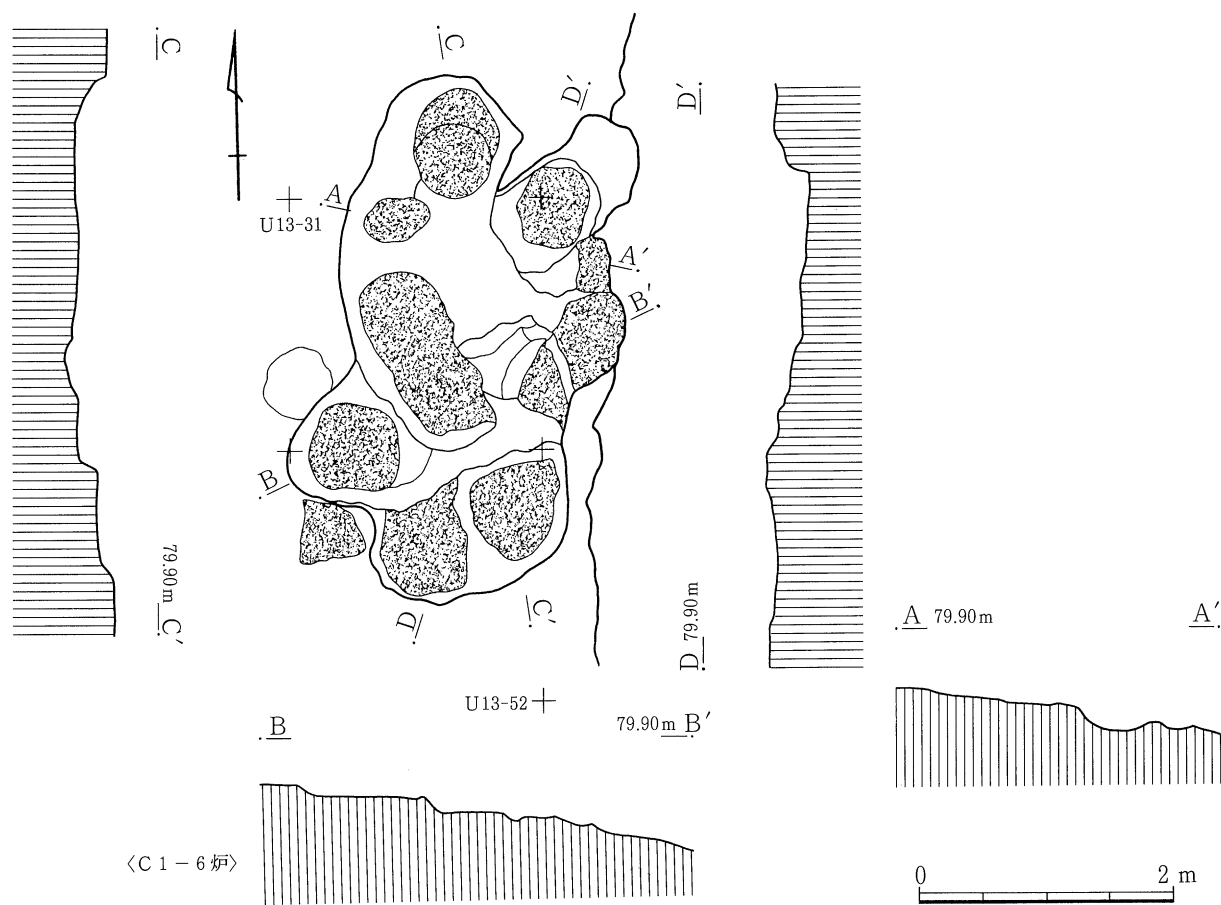
C 1 - 1 号遺構は（第68図）調査地区の南東側に所在しT15-05付近プレートレンチの1、5、6より検出した。出土層位はVI層上面で特に1 トレンチからの出土が多い。遺物は32点で残核状のフレイクや石屑チップが多く、石器は尖頭器など数点である（第13表参照）。また第72図のように第70図の石器が各々接合している。石材は、フリントが多い（第13表参照）。炉穴群は調査区の南東側に集中して所在する（第67、73～76図）。そのうち単独は6基（C 1 - 2、3、4、9、10、12）で他は複数の重複である。特にC 1 - 6 号炉穴群は焼土が11ヶ所有り、C 1 - 1 とC 1 - 5 は土坑と切り合っているのか複雑な形体を呈する。出土遺物はC 1 - 4 号が第77図13、C 1 - 6 号が第77図6 及び第79



第73図 C1-1~4号炉穴群実測図



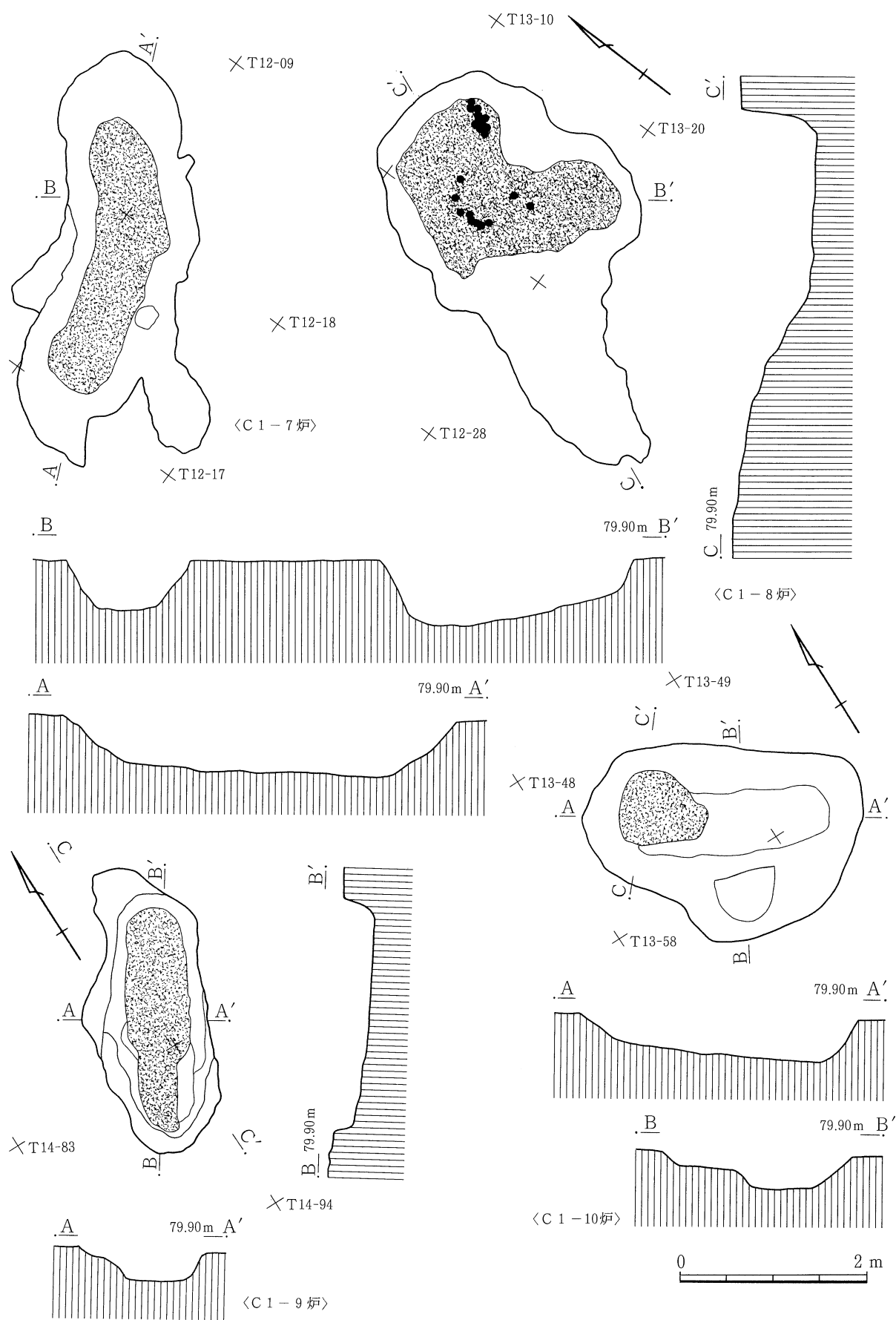
〈C 1 - 5 炉〉



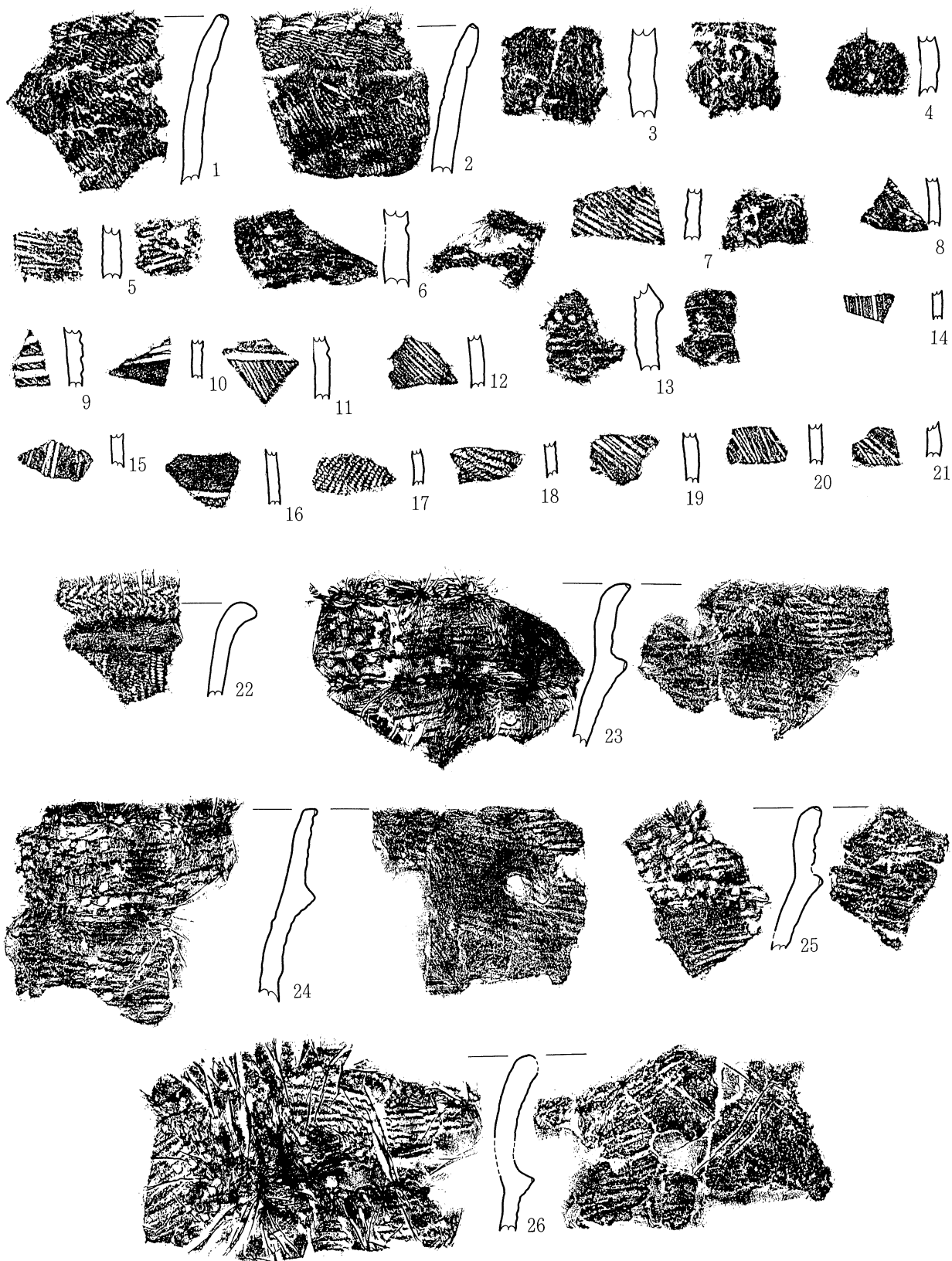
〈C 1 - 6 炉〉

0 2 m

第74图 C 1 - 5、6号炉穴群实测图

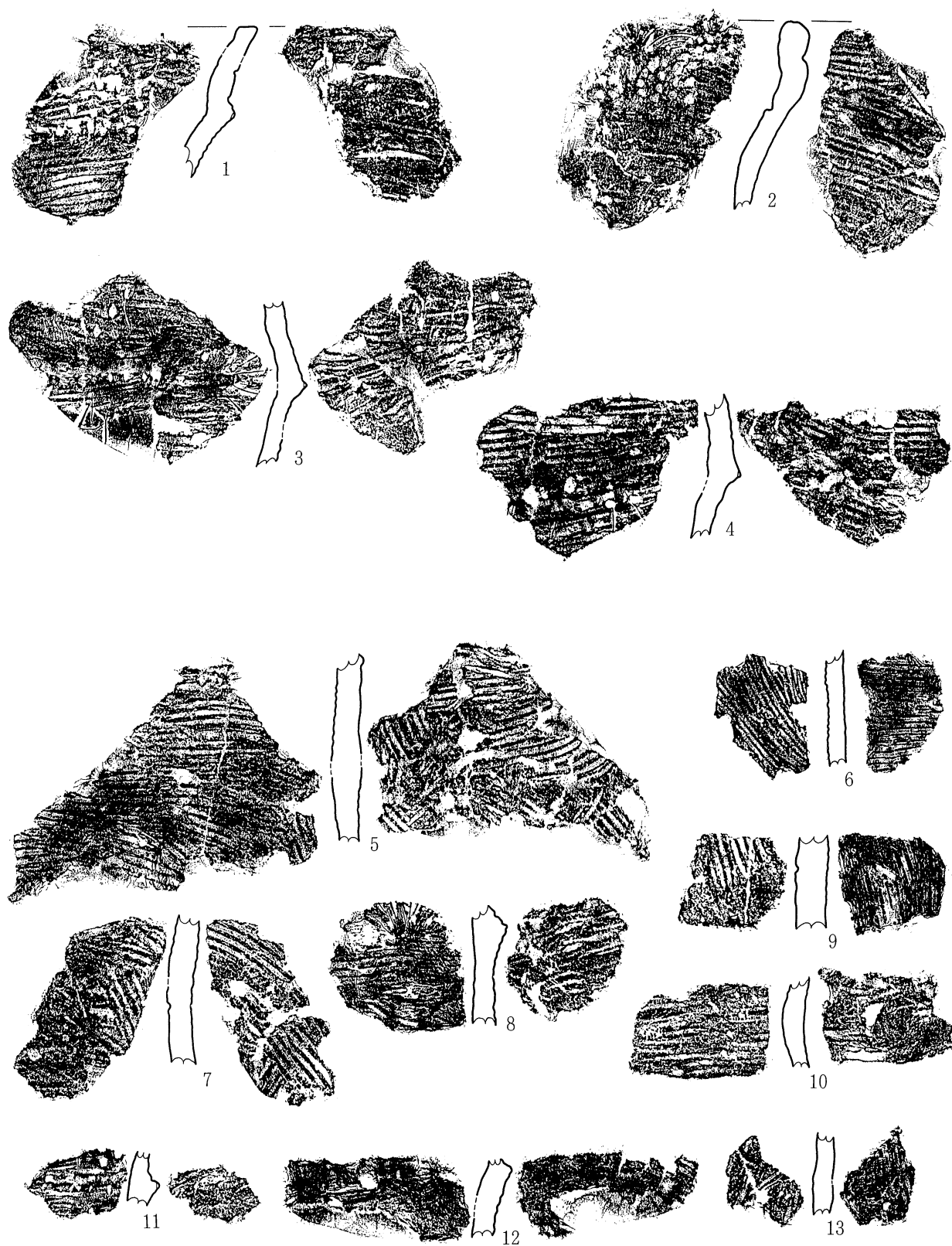


第75图 C1-7~10号炉穴群实测图

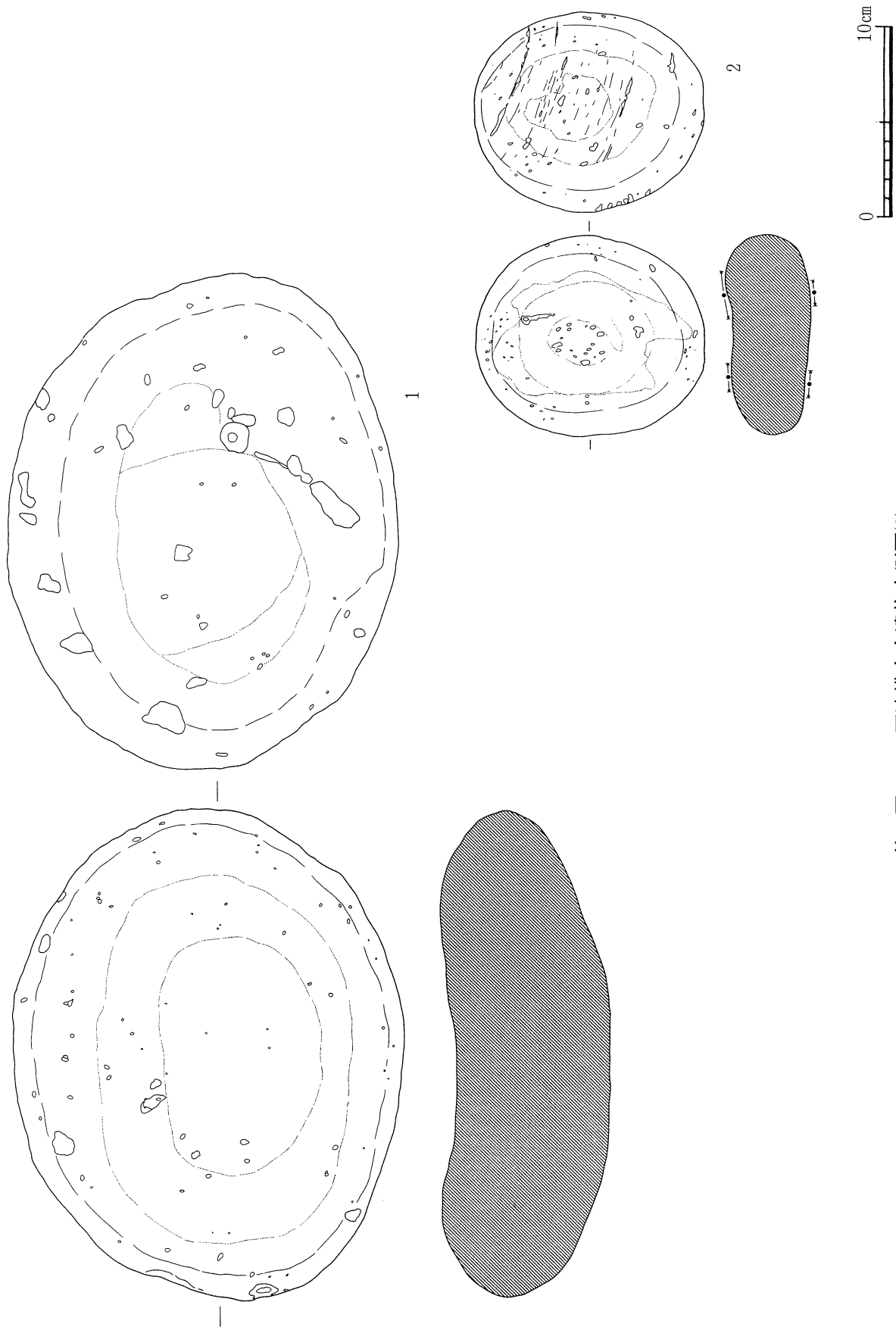


第77图 C 1 区遺構出土遺物実測図(1)

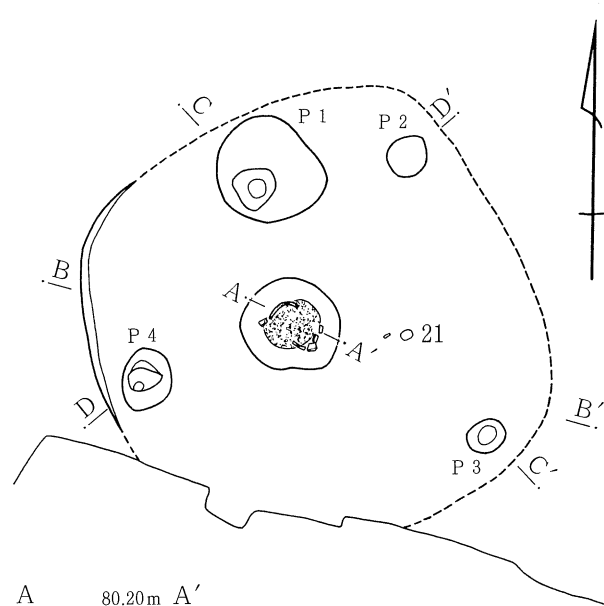
0 10cm



第78図 C 1区遺構出土遺物実測図(2)



第79図 C 1 区遺構出土遺物実測図(3)



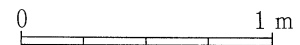
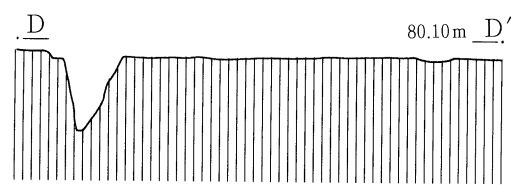
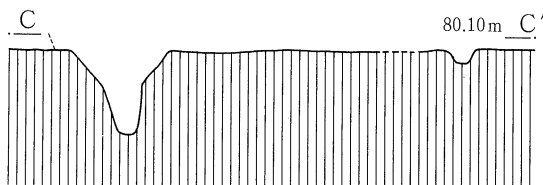
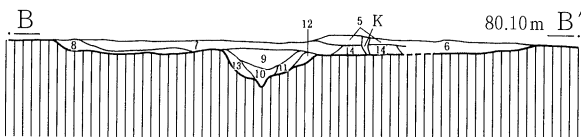
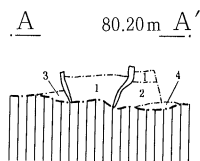
土層説明

1. 黒褐色。ローム土塊が少量含まれる。
2. 暗黄褐色土と黒褐色土の混合。
3. 黒褐色。
4. 暗茶褐色。
5. 黒褐色。
6. 暗褐色。
7. 暗褐色。
8. 暗褐色。ローム土が混入する。
9. 暗褐色。焼土粒を少量含む。
10. 暗褐色。焼土粒をわずかに含む。
11. 暗褐色。ローム粒を含む。
12. 暗褐色。ローム土塊を少量含む。
13. 暗褐色土とローム土がブロック状に入る。

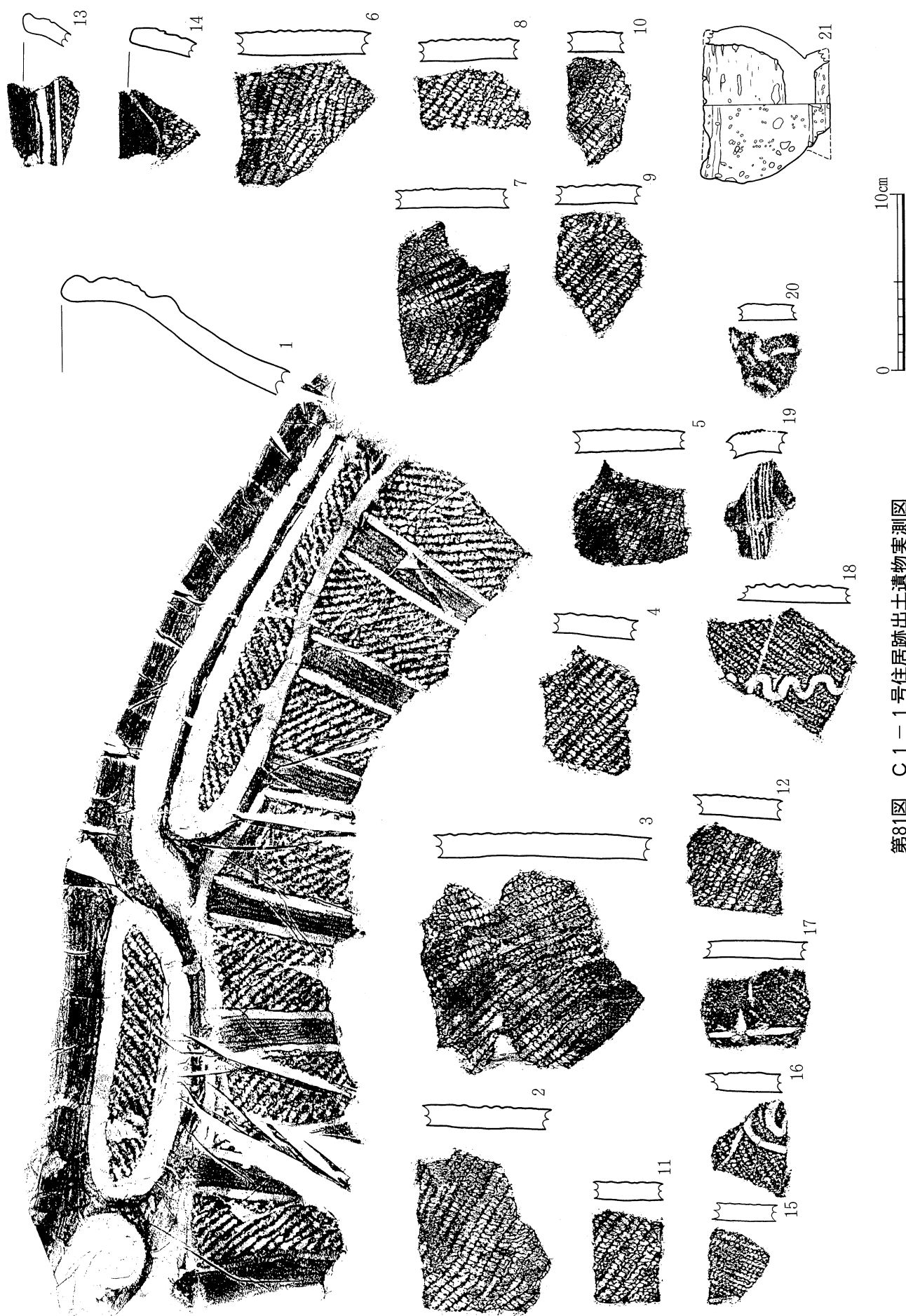
C 1 - 1 号住居跡

ピット計測表 (cm)

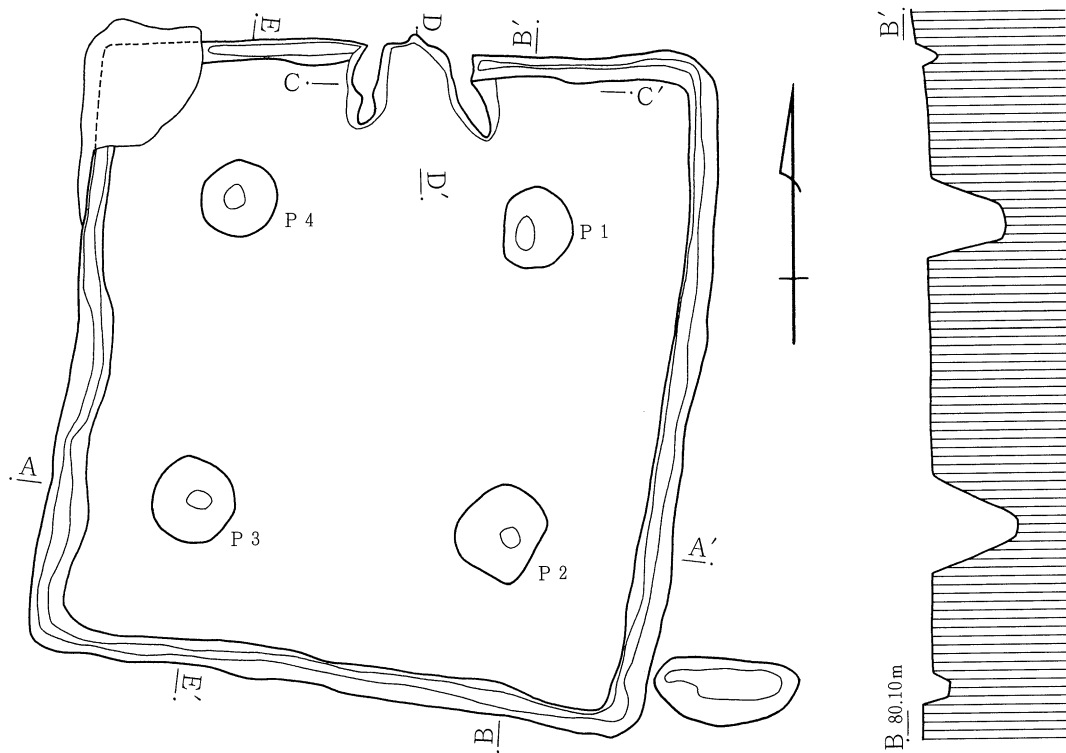
ピット名	上端	下端	深さ
P 1	85×77	15×14	65
P 2	35×31	—	5
P 3	31×25	17×13	12
P 4	50×40	8×7	60



第80図 C 1 - 1 号住居跡実測図



第81图 C 1 - 1 号住居跡出土遺物実測図



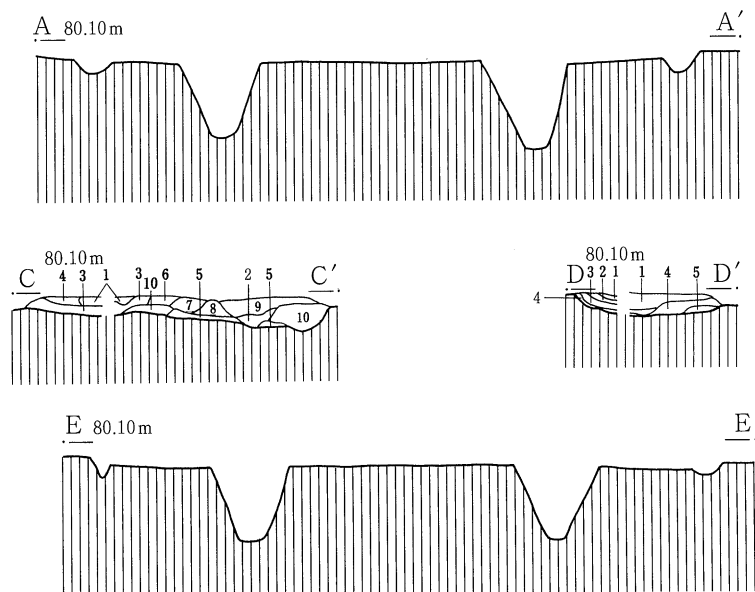
C 1 - 2 号住居跡

ピット計測表 (cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P 1	67×55	27×15	62
P 2	79×73	17×15	68
P 3	69×67	19×15	59
P 4	61×61	20×17	59

カマド土層説明

1. 暗褐色。焼土粒をわずかに含む。
2. " " " " を含む (1 に似る)。
3. 黒褐色。
4. 暗褐色。
5. 暗黄褐色。
6. 暗褐色。山砂を含む。
7. " " " " 山砂と焼土粒を含む。
8. " " " " 焼土粒とローム粒を含む。
9. 暗赤褐色。焼土を多く含む。
10. 暗黄褐色。暗褐色土を含む。



第82図 C 1 - 2 号住居跡実測図

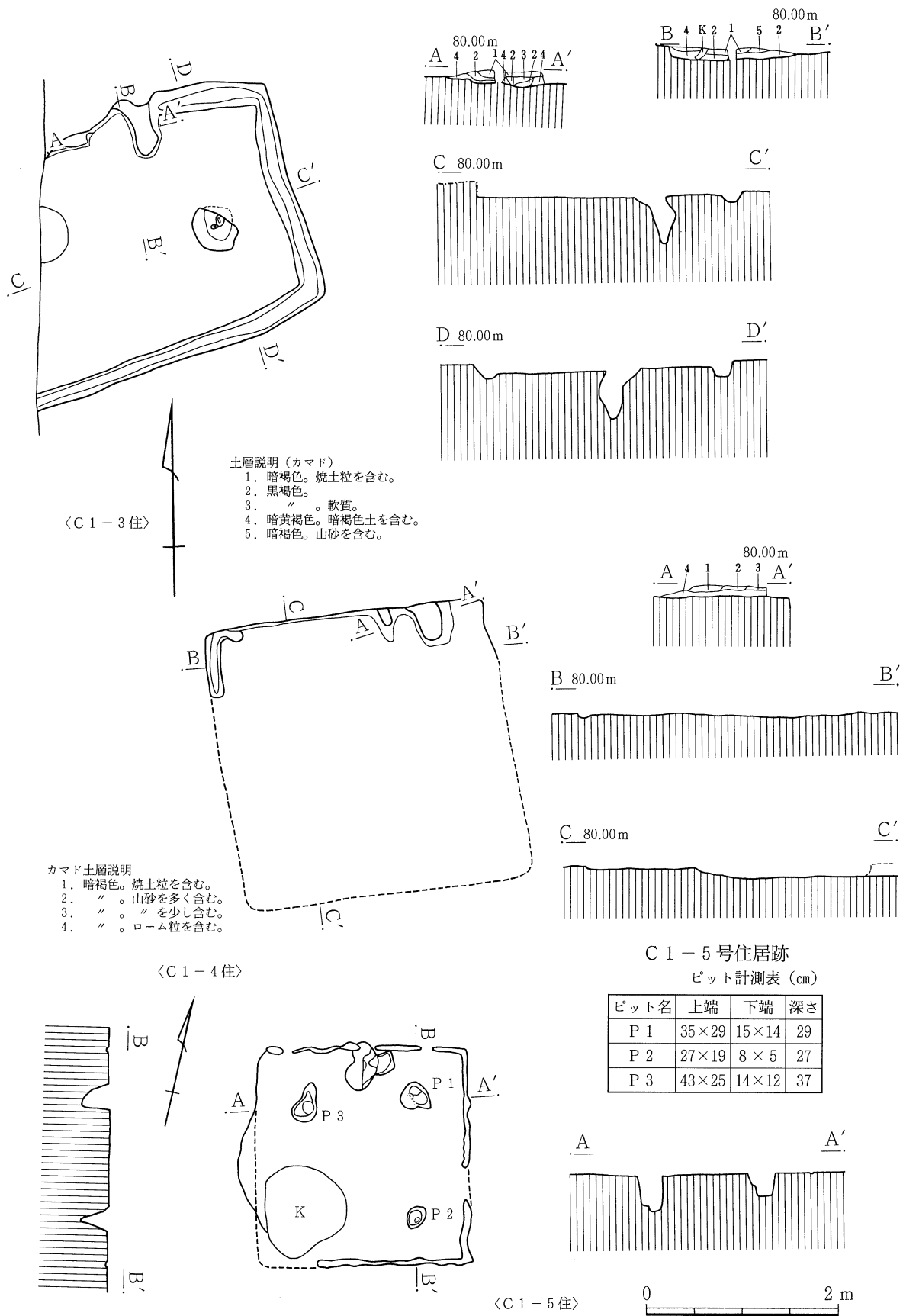
図1（石皿）、2 磨石、C1-10号が第77図3～5、7、C1-11号が第78図1～13及び第77図23～26である。いずれも貝殻条痕文系である。頸部に屈曲をもち、口縁部には刺突文がみられる破片が多く茅山下層式の範疇と考えている。遺物実測図（第77、78図）中の他の土器片は各炉穴から出土したのであるが、いずれも先行する時期で、流れ込みの状況で検出し直接遺構に伴わないがここでは掲載した。

C1-1号竪穴住居跡は（第80図）C1区で唯一の縄文時代の竪穴住居跡である。位置は調査地区のほぼ中央、地形的にも遺跡の立地する台地のほぼ中央地点である。

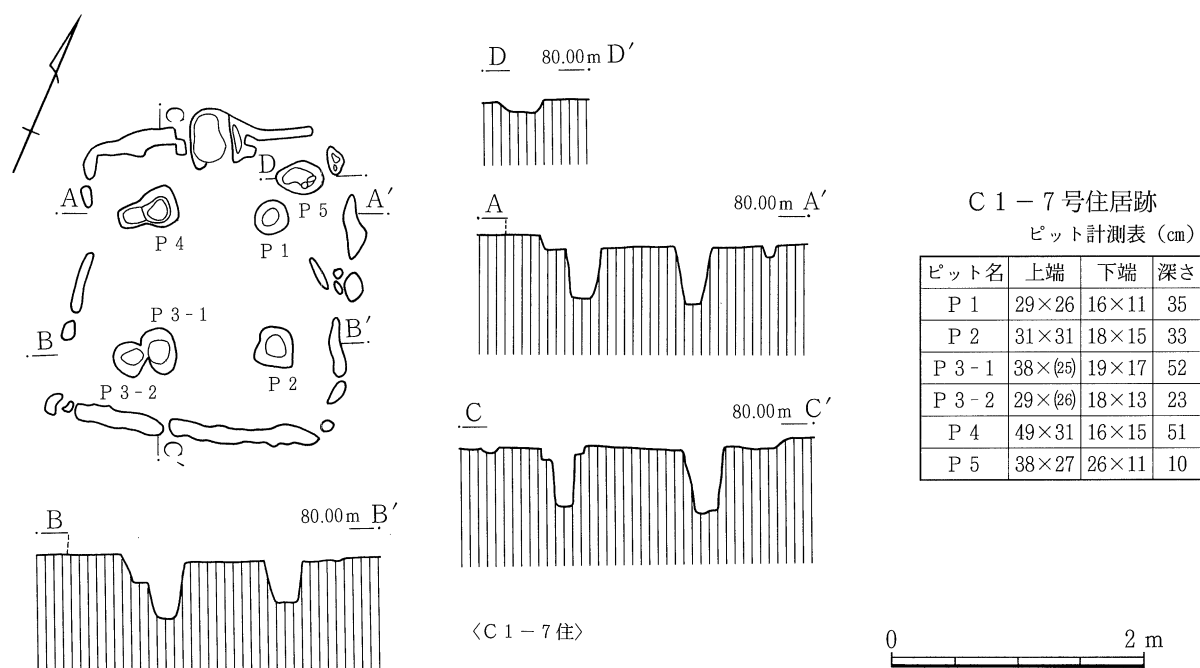
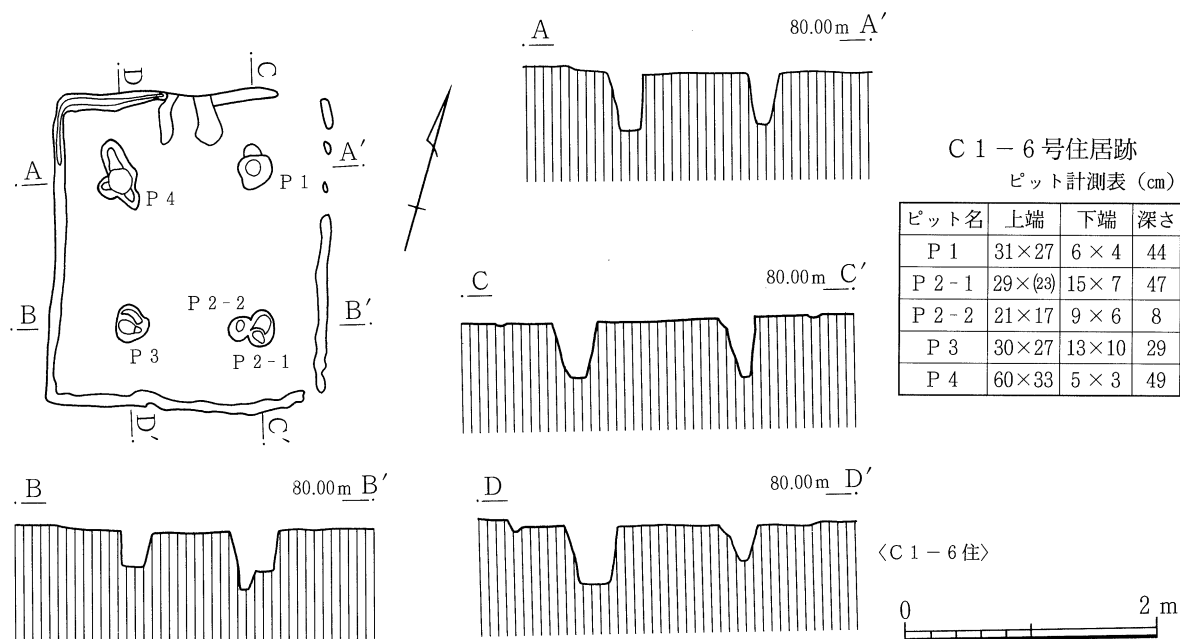
検出状況は不良で壁の立ち上がりは北西側でわずかに確認されたのみである。プランは炉とピットの位置によって推定し、方形隅円と考えている。また南西側はイモ穴によって切られている。

規模は長軸3.55m、短軸推定3.44m、壁の立ち上がりは最大で10cm残存する。主軸方向はN-25°-Wを示す。床面は不安定であり踏み固められた面も明確でないが、ほぼ中央に炉跡、壁近くに4本のピットを検出している。炉はほぼ円形の土器囲い炉で深鉢の口縁部が埋設されていた。ピットはP1とP4が深くしっかりしているがP2とP3は浅く規模も小さい。

出土遺物は（第81図）1～12が炉からの出土で、口縁部は楕円形区画の沈線で囲まれた斜縄文で、胴部は磨消懸垂文が施される。13は口縁部片で並行する沈線中期末葉の加曽利EIV式とみられる。14、16、17、20は胴部片で沈線による渦巻文や波状文を施文する。いずれも後期中葉堀ノ内I式である。21は軽石を削り出して作った壺形の容器で台が付き、炉の北側から出土した。器高7.3cm、最大径8.8cm、重さ49gである。



第83図 C1-3～5号住居跡実測図



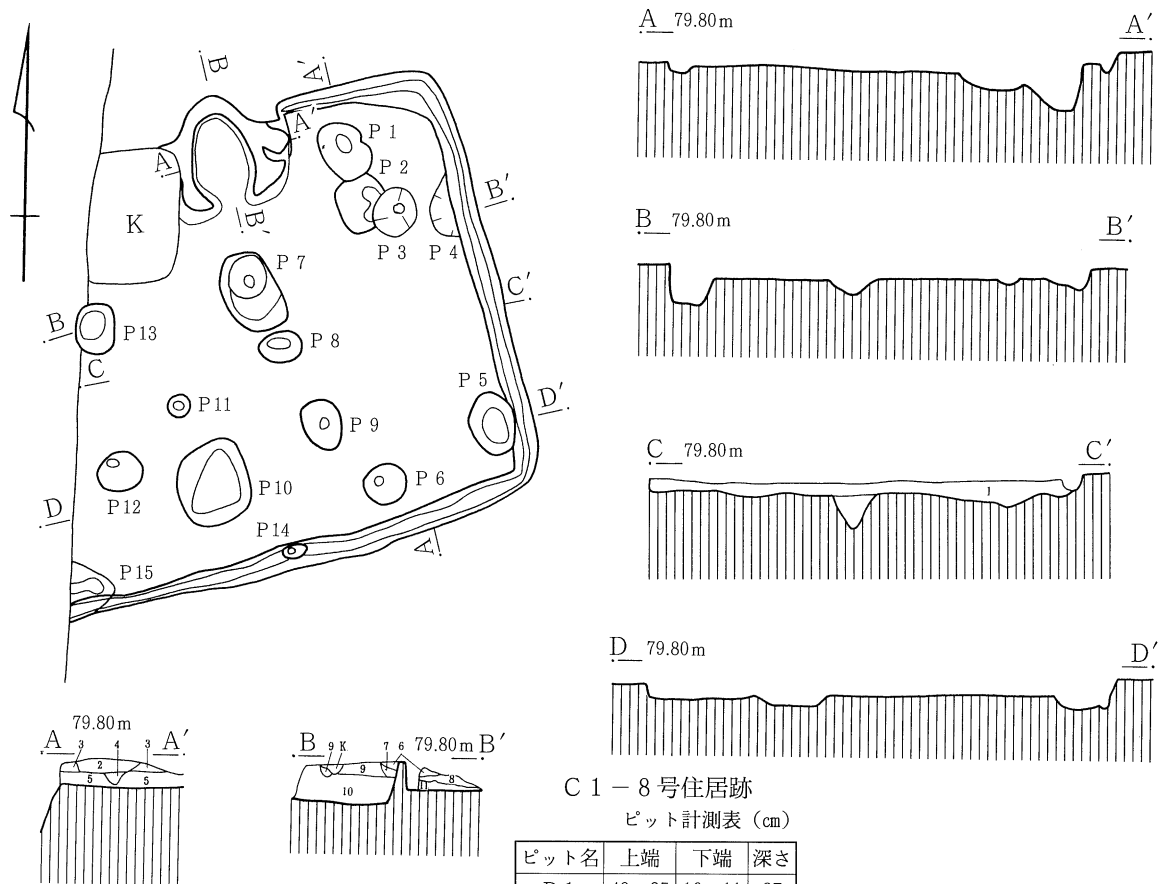
第84図 C 1 - 6、7 号住居跡実測図

古墳時代後期の10軒の竪穴住居跡は（第67、82～87図）調査地区の中央から南東側に集中する。特にC 1 - 1～7号溝状遺構（第67、231図）との関連性を伺うことが出来、ここでは竪穴住居跡とこれらの溝を一括して説明する。

竪穴住居跡は調査地区中央西端付近にあるC 1 - 9号を中心に直径約70mで円を描く様に9基が重複せずに存在する。やや竪穴間の距離が近すぎる住居もあるがいずれにしても各々が近い時期の所産であろう。また溝状遺構はC 1 - 6と7号が調査地区の西側に南北方向に存在し、竪穴住居跡が描く円の内側約50mの範囲は途切れている。この溝は底部に硬質面が認められ道路として使われていたと

思われる。さらにC1-5号溝状遺構はC1-6号溝状遺構が北側で途切れた地点から約4m離れて東西方向（直角方向）に存在する。C1-6、7号が道路とすれば、C1-5号はこの道路を遮る役割を荷っている様に思える。C1-1～4号溝は調査地区の北西隅に2条ずつ並行し、東西に弧を描いて存在する。C1-1、2号とC1-3、4号の間は約3m離れており、出入り可能な部分と考えられる。そしてこの位置はC1-6号の方向と一致することからC1-6号の道路からC1-5号の溝を隔ててC1-1～4号の間を通して外側に出る導線が推定できる。また、C1-6号とC1-7号の間の空間は、竪穴住居跡群との位置などの関連性から広場的な要素が考えられる。C1-1～4号溝状遺構はC2区でもふれたがC2-1、2号溝（第60、62図）に接続し、恰もC1-5～7号溝状遺構と竪穴住居跡群を囲む形態が想定できる。それらを踏まえて各遺構を説明する。

C1-2号竪穴住居跡は（第82図）調査地区の南側中央付近にある。竪穴住居跡群の中心に位置すると考えられるC1-9号より南東へ約30mの位置である。竪穴は上部をほとんど削平され壁の立ち上がりはほとんどない。ほぼ正方形で、規模は長軸5.40m、短軸5.00m、主軸方向はN-8°-Eを示す。主柱穴は4本でカマドが北側壁の中央部に存在する。出土遺物は（第88図6）土師器甕の口縁部片が1点で、口径16.6cmを計り、色調は両面暗褐色一部淡褐色、焼成は普通で胎土に1mmの小礫と金雲母粒を極少量含む。成整形は口縁部が両面横ナデ、胴上部外面が縦方向のヘラケズリ、内面がヘラナデツケの後ユビナデがなされる。C1-3号は（第83図）調査区の南西隅北側で西側の1部は未調査である。平面形体は長方形とみられ、規模は長軸推定3.40m、短軸2.80m壁の立ち上がりは最大で12cmで主軸方向はN-14°-Wを示す。ピットは1本、カマドは北側壁中央やや東寄りに設置される。C1-4号（第83図）も南東隅でC1-2号より南東へ約3m離れている。検出状況が不良で北側一部プランのみ調査出来た。平面形体は方形と推定され、規模は東西方向が2.95m、竪穴の深さは8cm、主軸方向はN-8°-Wを示す。カマドが北側壁の東寄りに存在する。C1-5号は（第83図）調査地区の中央に位置しC1-5～7号が南北に近接して存在する。3軒とも保存状況は悪く、床面付近の検出である。当遺構はそれらの最も北側でC1-9号より北東約40m離れて存在する。平面形体は方形で、規模は長軸2.30m、短軸推定2.25mで主軸方向はN-13°-Wを示す。主柱穴は4本と推定できる。カマドは北側壁中央にある。C1-6号は（第84図）C1-5号の南東約5mに位置し、平面形体は方形、規模は長軸2.55m、短軸2.20mで主軸方向はN-14°-Wを示す。主柱穴は4本で建立替えの可能性がある。カマドは北側中央に設置される。C1-7号（第84図）はC1-6号の南東約4mに位置し、平面形体は方形、規模は長軸2.63m、短軸2.25mで主軸方向はN-20°-Wを示す。主柱穴は4本でC1-6と同様建立替えが考えられる。カマドは北側壁中央に設置される。C1-8号は（第85図）調査地区の南東端で西側は未調査地区に入る。C1-4号より南西に約1m離れて存在する。平面形体は長方形とみられる。規模は長軸推定4.20m、短軸3.65mで壁の立ち上がりは17cm残存する。主軸方向はN-16°-Wを示す。ピットは15本検出されているが機能は不明である。カマドは北側壁中央部に設置され西側は攪乱が入る。出土遺物は（第88図1～5）土師器甕2点、壺1点、フィゴの羽口2点である。1は土師器甕の口縁部片で色調は外面暗褐色、内面暗茶褐色、焼成はやや不良、胎土には3mm程度の小礫を含む。成整形は両面の口縁部横ナデ、胴部外面は縦方向のヘラケズリの後ナデで消している。口径は推定で19.5cmを計る。2は甕胴下半部から底部片でやや直線的に開く立ち上りを示す。色調は外面黒褐色、内面淡茶褐色一部暗茶褐色、焼成はわずかに不良、胎



土層説明

1. 暗褐色。テフラを含む。
2. 暗褐色土と焼土がブロック状に入る。
3. 灰茶褐色土。山砂粘土と暗褐色の混合。
4. 黒褐色。焼土粒を多量に含む。
5. 黒褐色。
6. 暗褐色。焼土粒を含む。
7. 焼土。暗褐色土を含む。
8. 黒褐色。焼土粒を含む。
9. 暗褐色。山砂をわずかに含む。
10. 黒褐色。焼土粒をわずかに含む（炉穴覆土）。
11. 暗褐色土。ソフトロームとの混合。

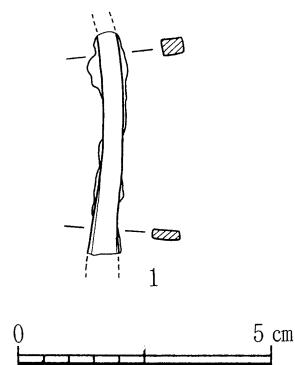
0 1 m

第85図 C 1 - 8 号住居跡実測図

C 1 - 8 号住居跡

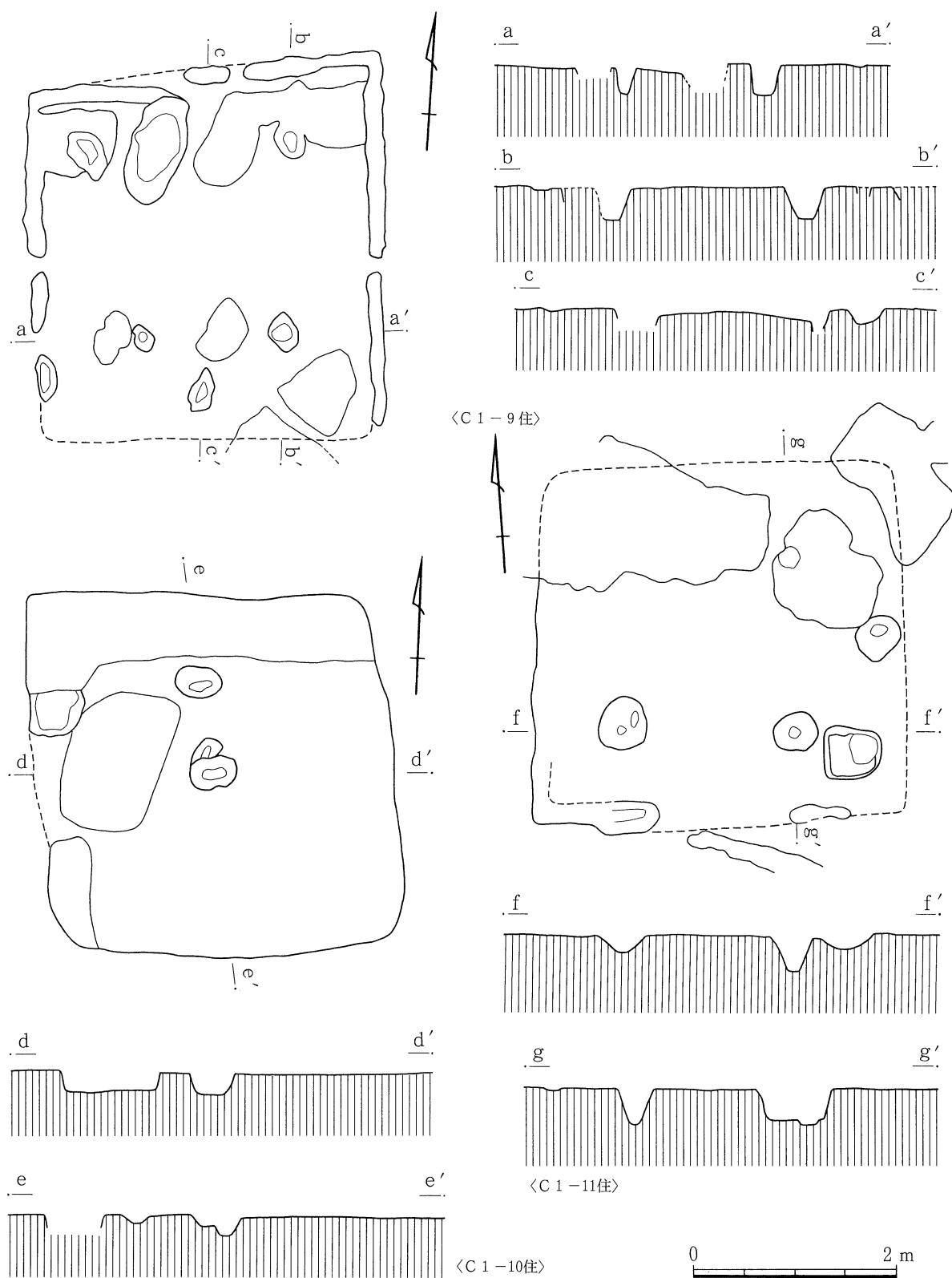
ビット計測表 (cm)

ビット名	上端	下端	深さ
P 1	49×35	16×11	37
P 2	47×41	28×-	14
P 3	39×35	-	66
P 4	51×19	-	6
P 5	51×37	30×19	11
P 6	35×31	8×7	64
P 7	66×43	11×9	13
P 8	33×24	19×8	27
P 9	41×31	9×7	43
P 10	72×63	55×36	9
P 11	19×19	9×7	26
P 12	36×31	9×6	19
P 13	40×31	23×19	21
P 14	20×11	5×4	26
P 15	48×35	25×12	34

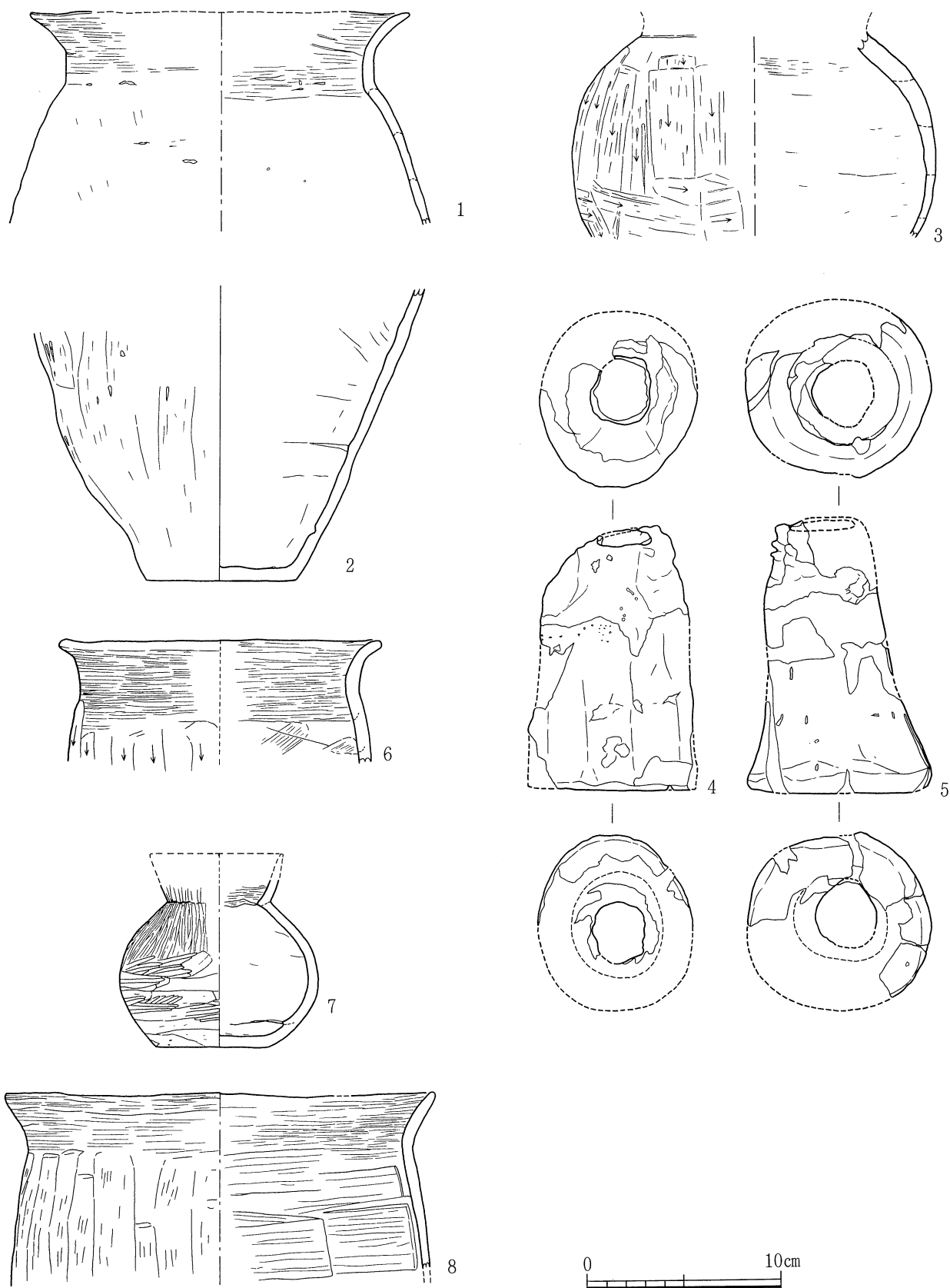


第86図 C 1 - 8 号住居跡出土
遺物実測図

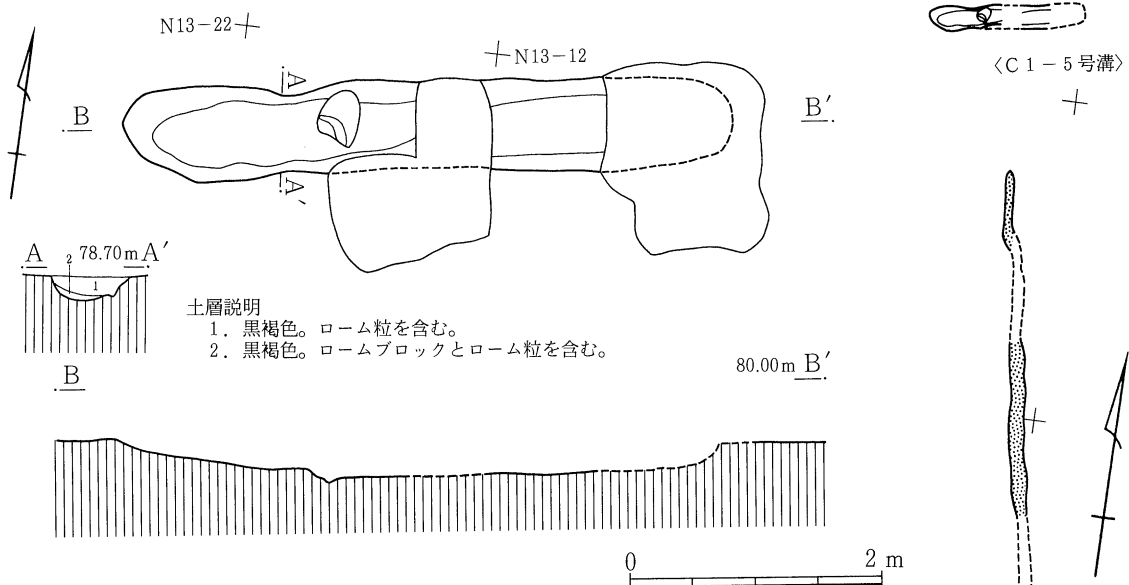
土には 4 mm 程度の小礫を含む。成整形は外面胴下半部が縦方向のヘラケズリ（擦過痕が多い）、内面はヘラ横ナデの後一部を布状ブキ、底径は 7.7 cm を計る。3 は壺胴上部片で球状を呈する。色調は外面黒色一部淡燈褐色、内面淡褐色、焼成は不良で胎土には小礫 1 ~ 2 mm を少量含む。胴部最大径は 18.9 cm を計る。4 と 5 はフィゴの羽口で、4 は高さ 13.7 cm、直径 8.7 cm、口径 2.1 ~ 3.3 cm、5 は高さ推定 13.3 cm、直径 9.5 cm、口径 3.1 ~ 3.5 cm を計る。それぞれ一方が細くなる形体で一部欠損している。胎土は 2 ~ 3 mm の小礫を多く含む。この他に製鉄関連の遺構遺物は鉄滓が C 1 - 2 号住より 714 g、C 1 - 7 号住より 30 g、C 1 - 8 号住より 46 g 出土し、また周辺のグリッドから合計 1.096 g 検出している。C 1 - 9 号は（第 87 図）調査地区の西端にあり堅穴住居跡群の中央に位置する堅穴である。検出状況



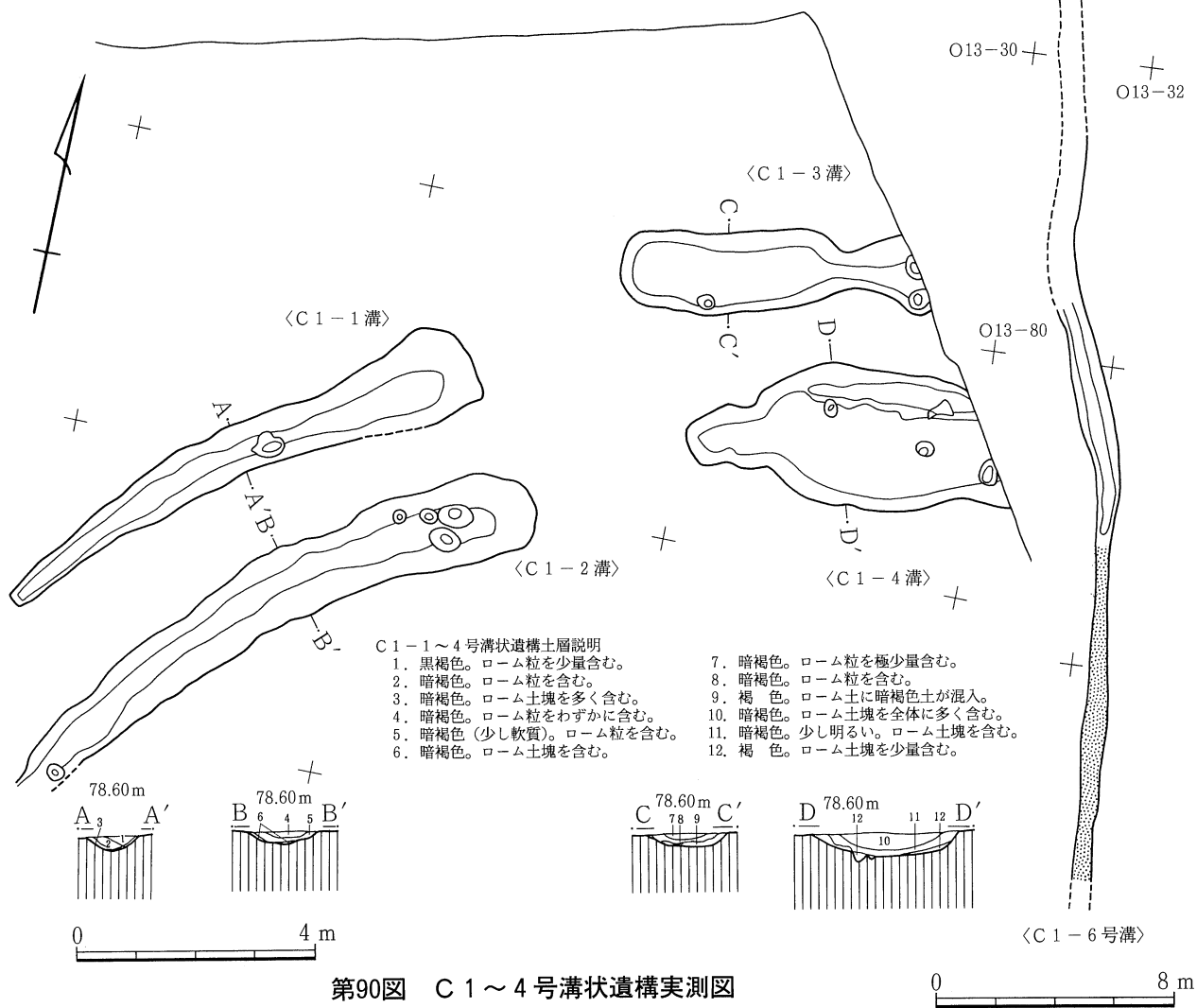
第87图 C 1 - 9 ~ 11号住居跡実測图



第88图 C 1 区住居跡等出土遺物実測図(4)

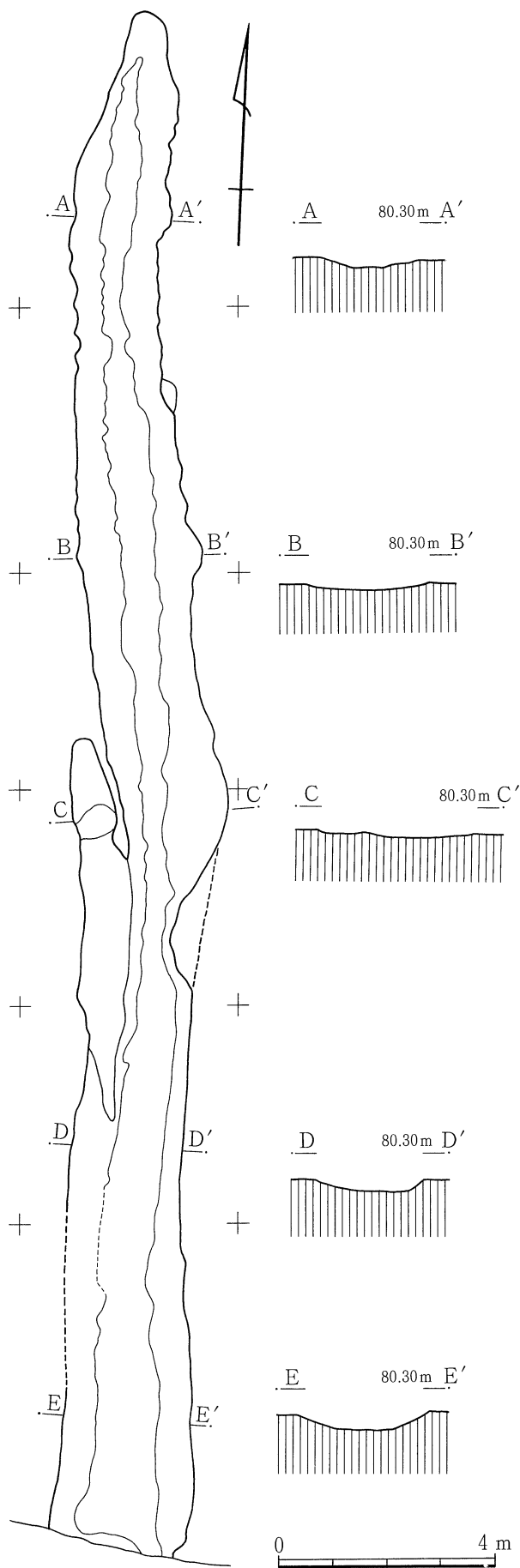


第89図(1) C1-5号溝状遺構実測図

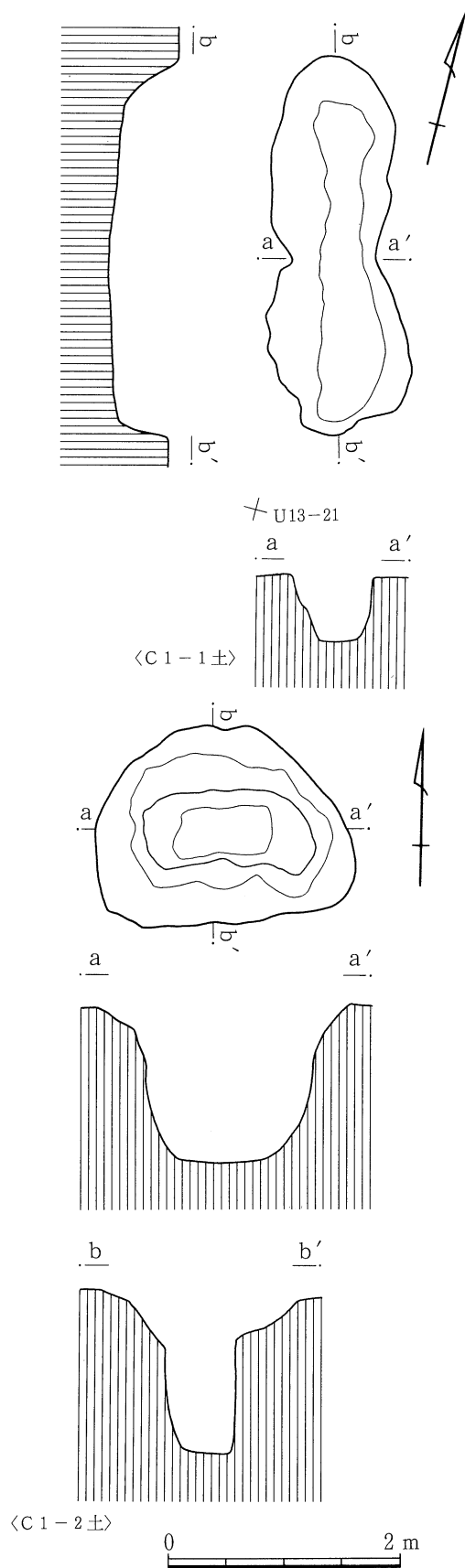


第90図 C1～4号溝状遺構実測図

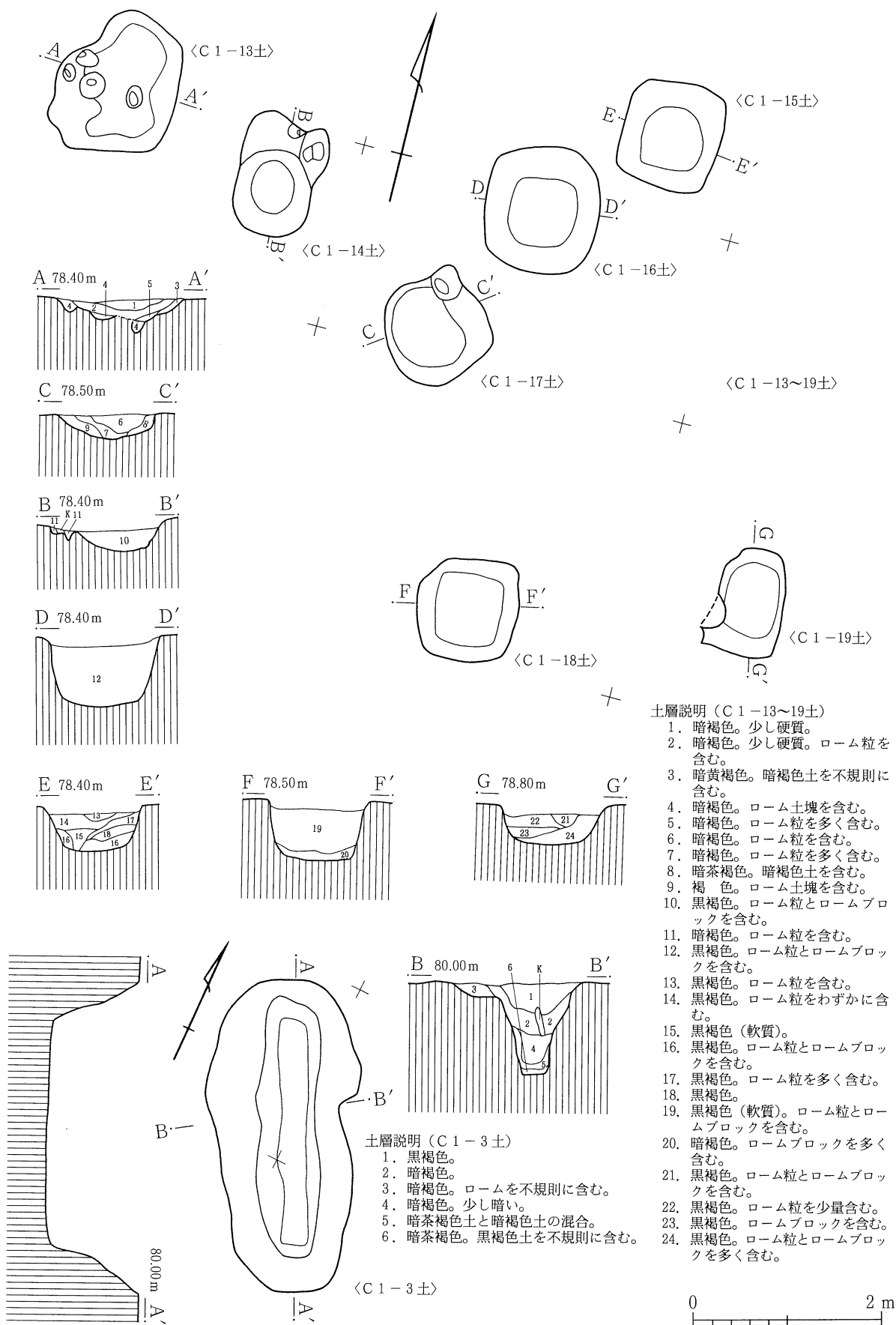
第89図(2) C1-5、6号溝状遺構位置関係図



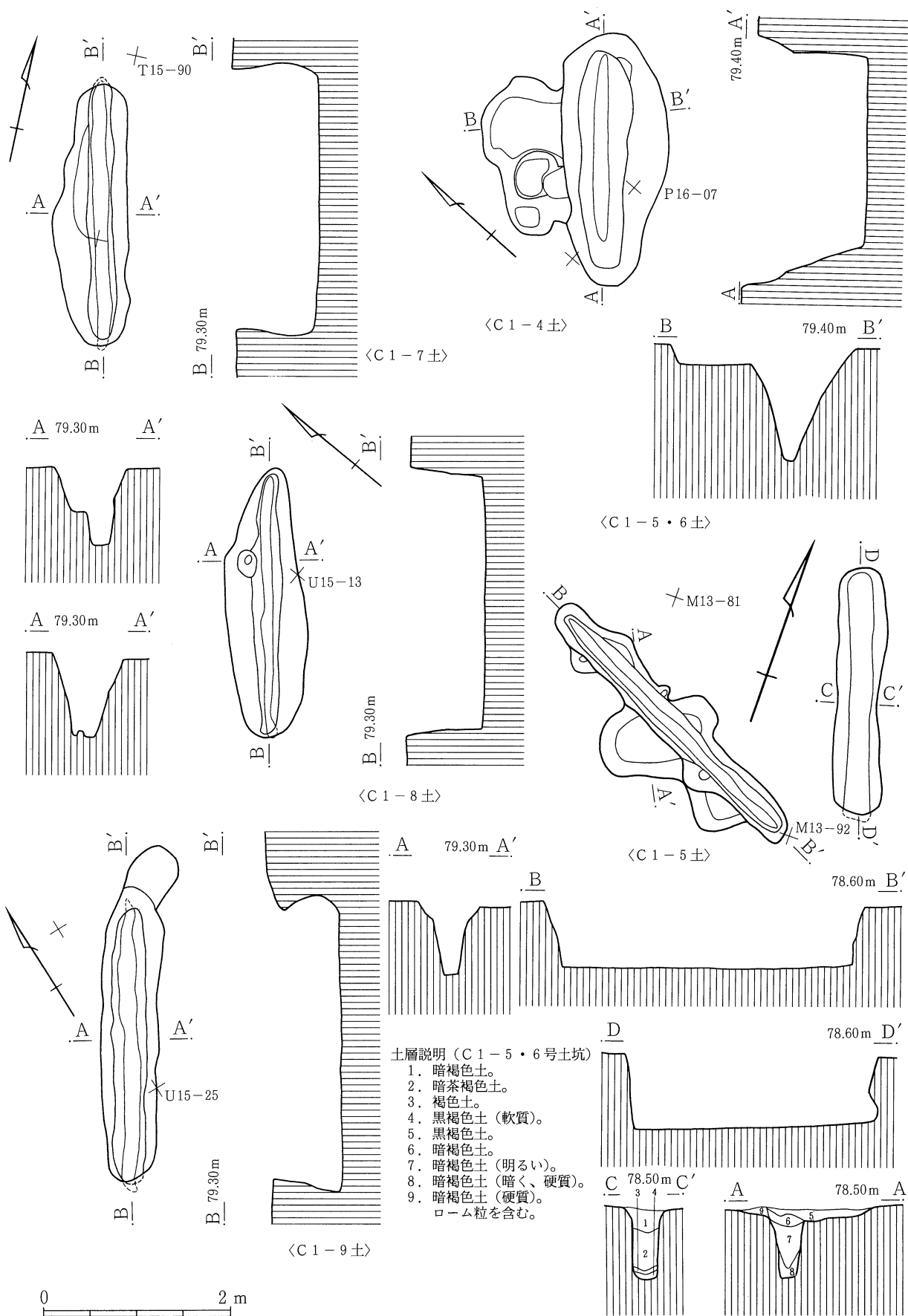
第91图 C 1 - 7 号溝状遺構実測図



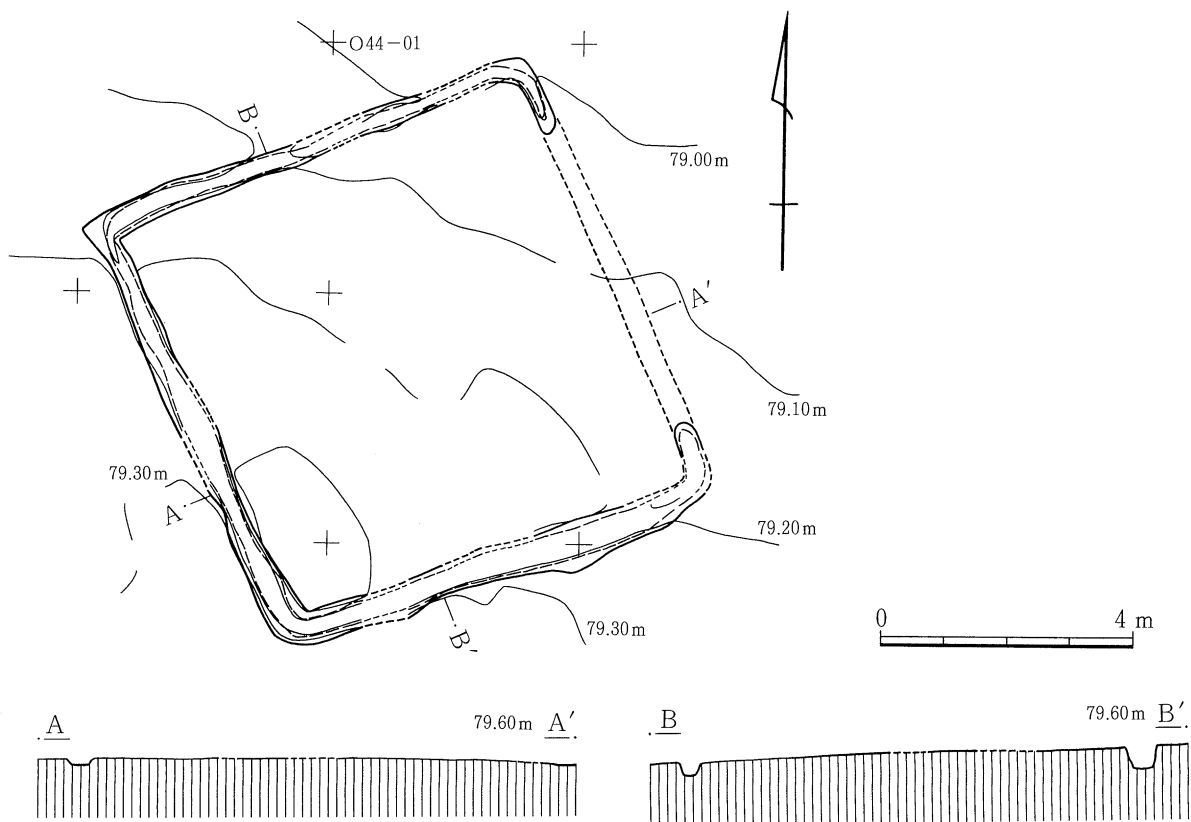
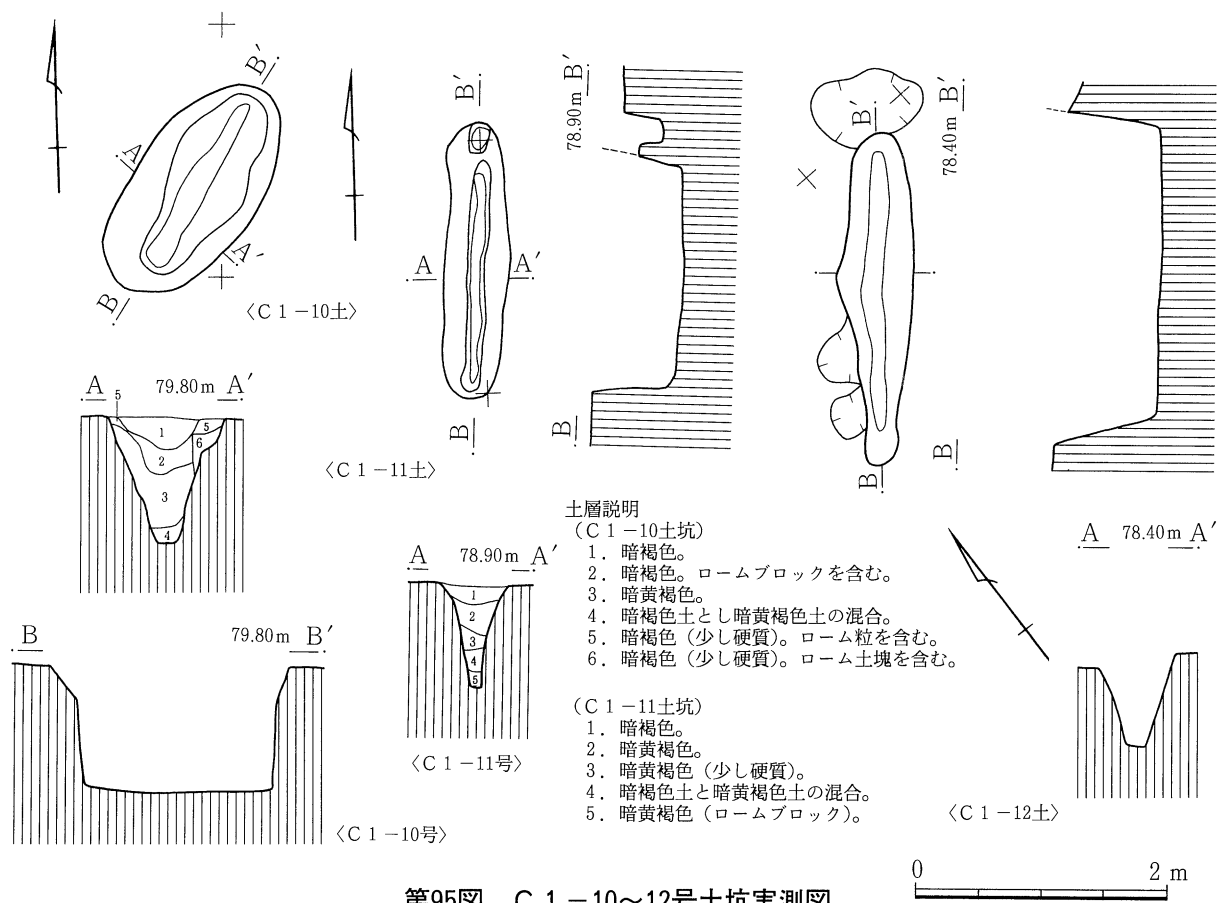
第92图 C 1 - 1、2 号土坑实测图



第93図 C1-3号及びC1-13~19号土坑実測図



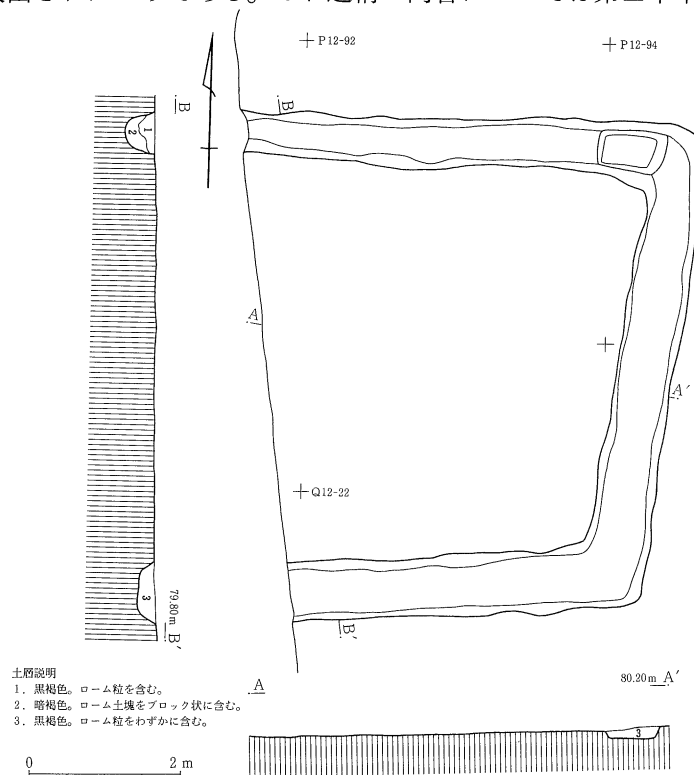
第94図 C1-4～9号土坑実測図



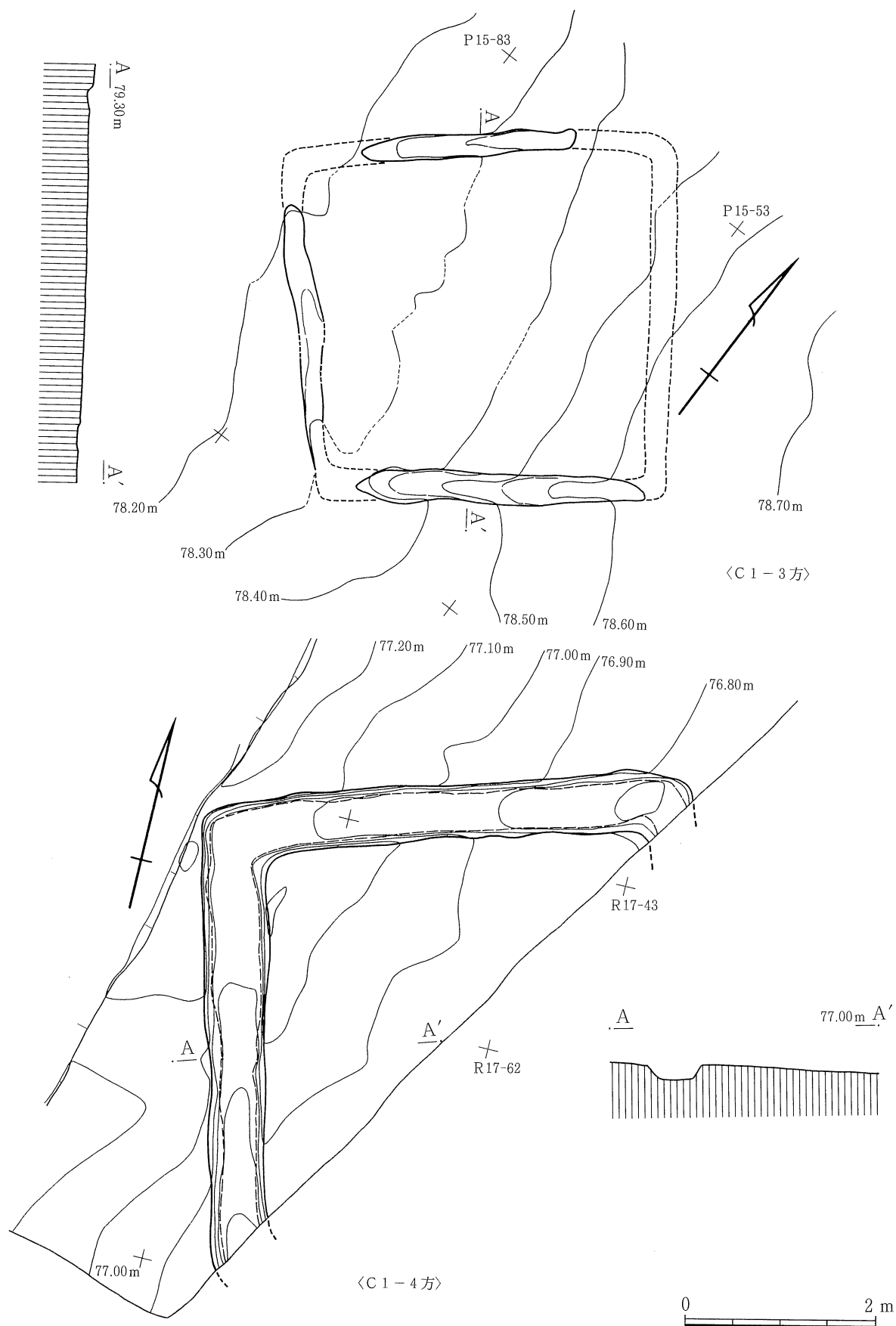
は不良で床面付近のみの検出、出土遺物も無い。平面形体は方形で長軸推定3.85m、短軸3.58mで主軸方向はN-6°-Wを示す。主柱穴は4本と考えられ、南側には出入口用ピットも存在する。カマドは北側床面中央に設置されていたが保存状況は大変不良である。C1-10号(第87図)は調査地区の中央やや南東寄りに位置し、C1-9号より東約42m、C1-2号より北東約13mの間隔がある。保存状況は不良でわずかに床面らしき面とピット3本の検出である。形体は方形で長軸3.65m、短軸3.50mで主軸方向はN-5°-Wを示す。カマドも不明。C1-11号は(第87図)南東側に位置し、C1-2号より約6m南東に離れている。検出状況は不良で床面付近のみで攪乱土坑でも多く切られている。形体は方形とみられ、規模は長軸推定9.30m、短軸推定9.10mで主軸方向はN-4°-Eを示す。ピットは5本でうち3本は主柱穴とみられる。カマドは不明。

溝の規模はC1-1と2及び3と4が幅1.0~1.8mの間をもって並行し、溝幅は0.45~1.2m、深さは最大で22cmを計る。C1-4号より土師器甕の口縁部片が1点出土している(第88図8)。口径22.2cm、焼成良好。C1-5号は長円形で長さ4.85m、幅0.72m、深さ28cmを計る。主軸方向はE-9°-Nを示す。C1-6号は長さ23m程有り、部分的に硬質面も確認したが欠損している部分もある。幅は最大で58cmである。C1-7号は長さ28.40m検出し幅は最大で2.58mを測る。これらは前述のとおりに集落に関連する施設であろう。C1-8、9号は(第67、100図)調査区の東端にあり、2本の溝が切り合っている。C1-8号が新しく3時期の硬化面が存在し南北方向に延びている(C1-9号は東に折れる)。北側は谷部に降りてゆく方向である。幅は最大でC1-8号が3.1m深さ0.6m、C1-9号が2.8m深さ0.9mをもつ。土坑は陥穴が多く(第7表、第67図)、それ以外は北西隅に集中する。C1-19号からは埴形土器が出土した(第88図7)。口縁部を欠損するが底部付近以外はヘラミガキである。

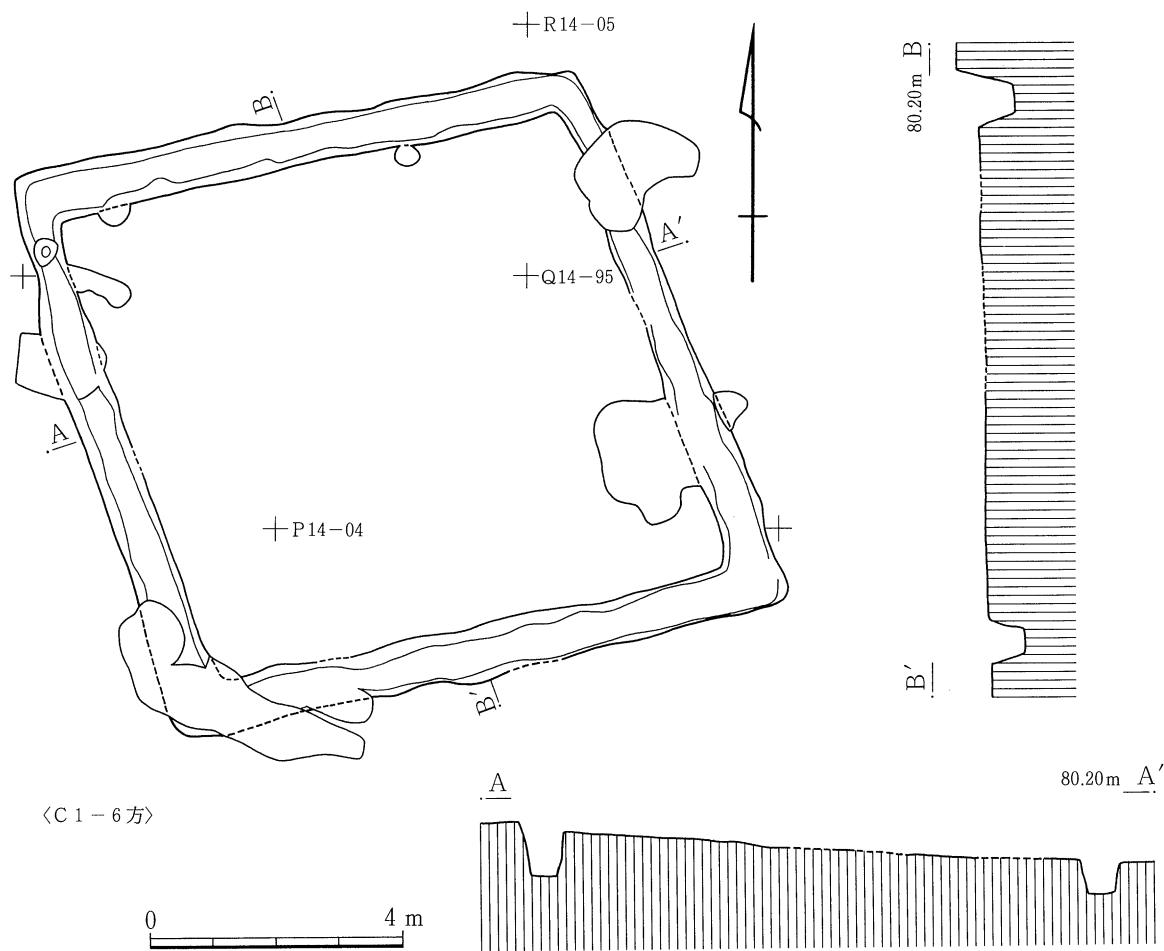
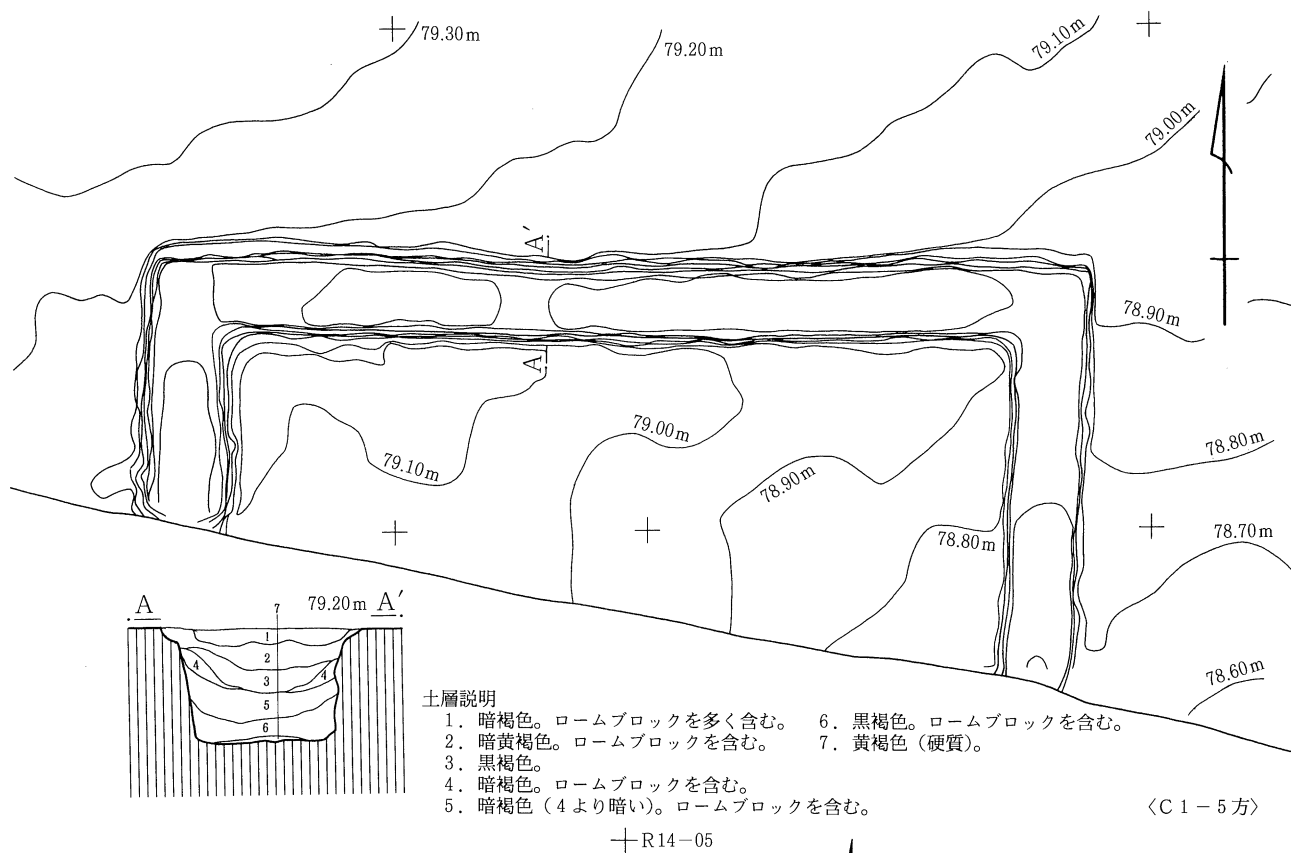
方形区画基はC1-5号が最大で15.22mの長さをもつ(第99図)。出土遺物はC1-5号で須恵器長頸壺の口縁部が検出されたのみである。なお遺構の内容については第Ⅲ章中第18表を参照されたい。



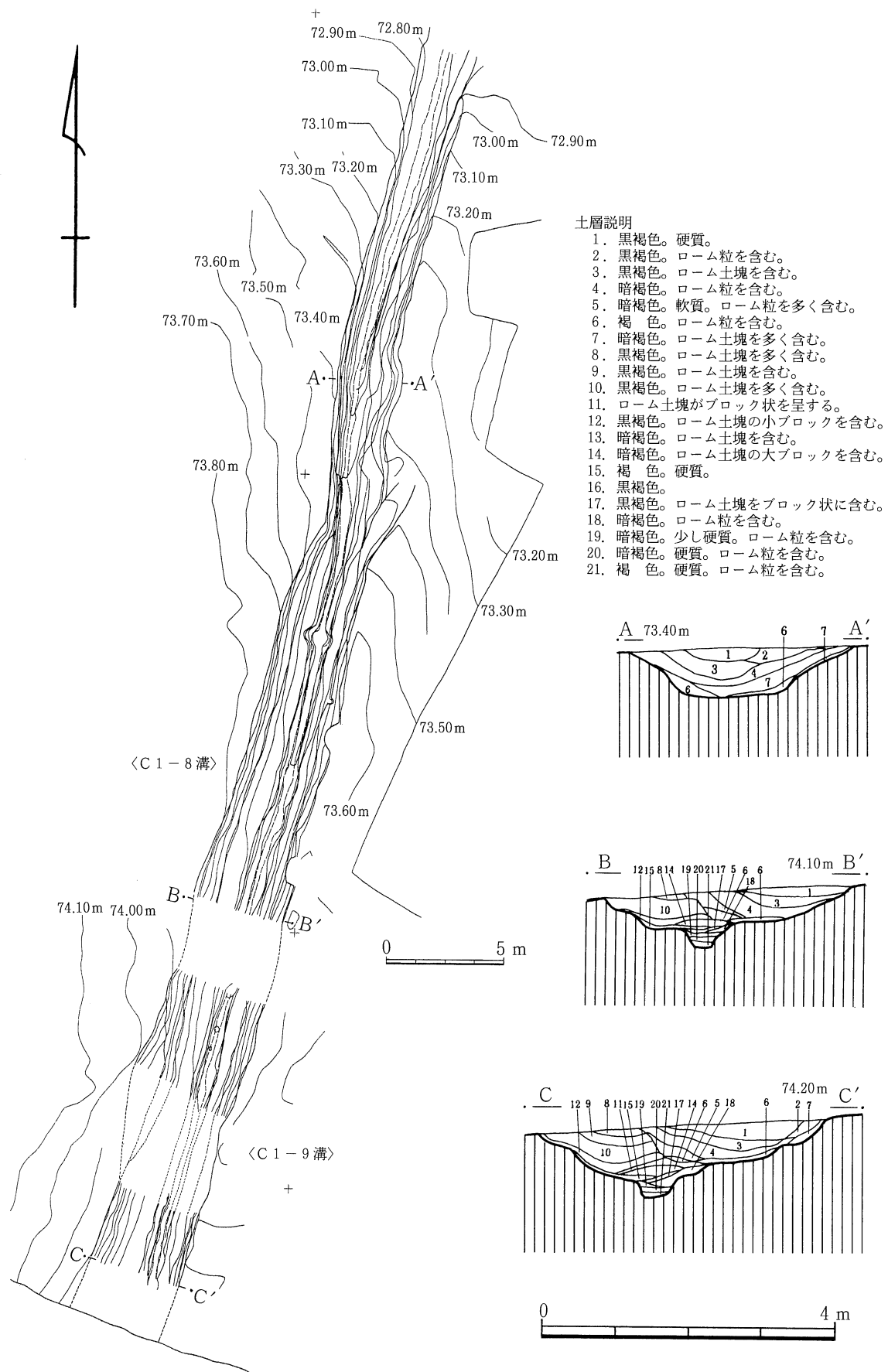
第97図 C1-2号方形区画墓実測図

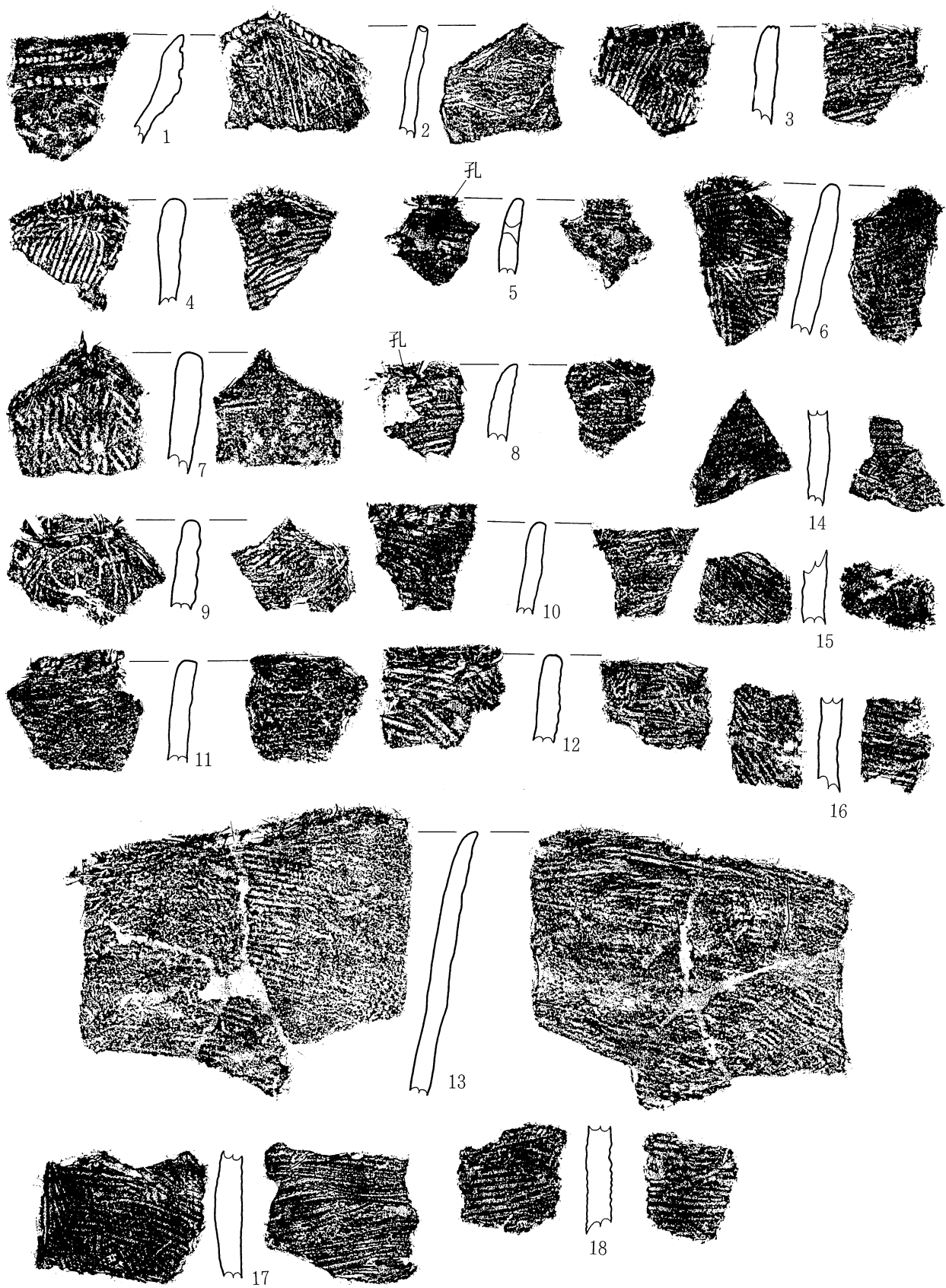


第98图 C 1-3、4号方形区画墓实测图

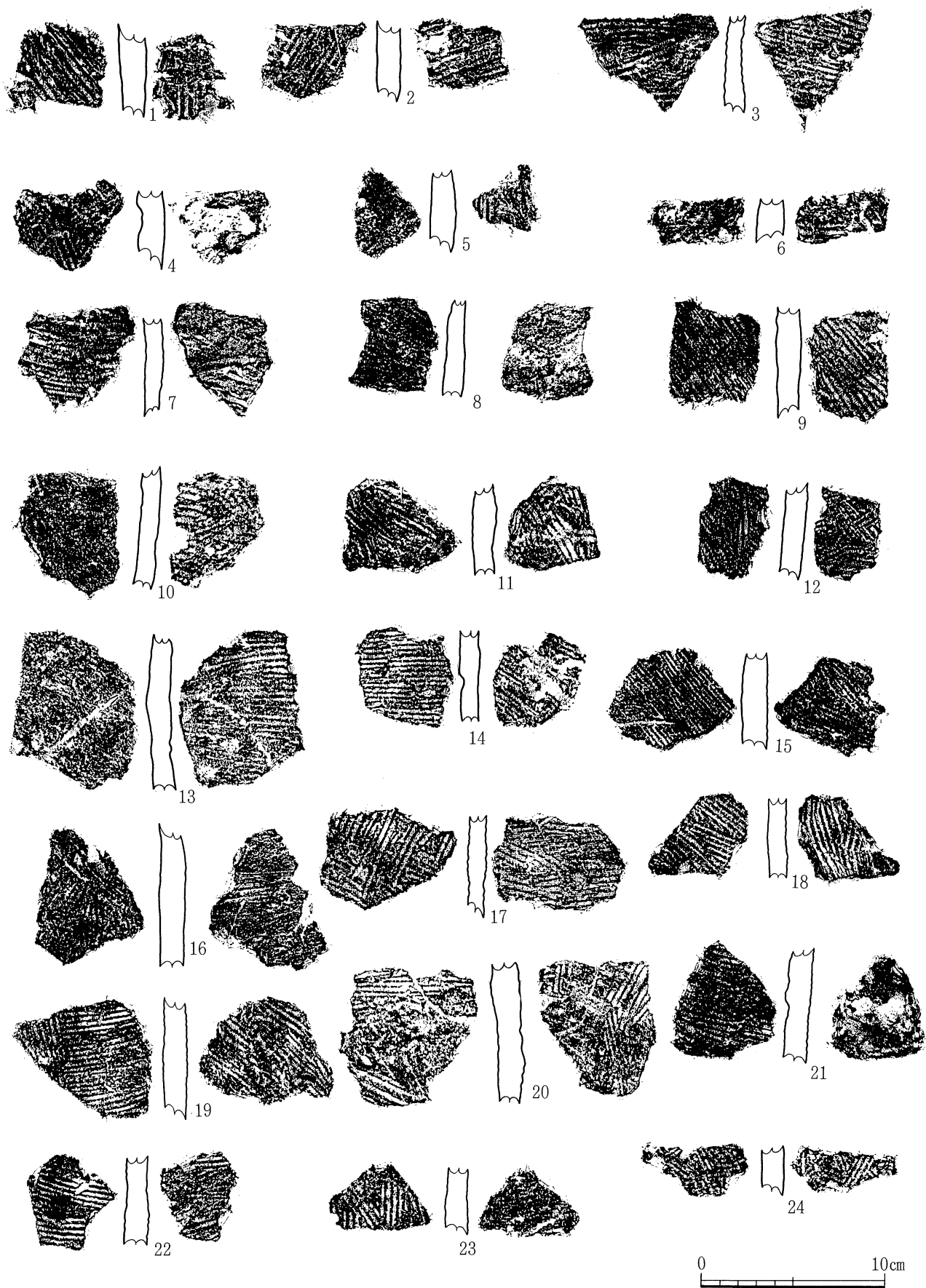


第99図 C 1 - 5、6号方形区画墓実測図

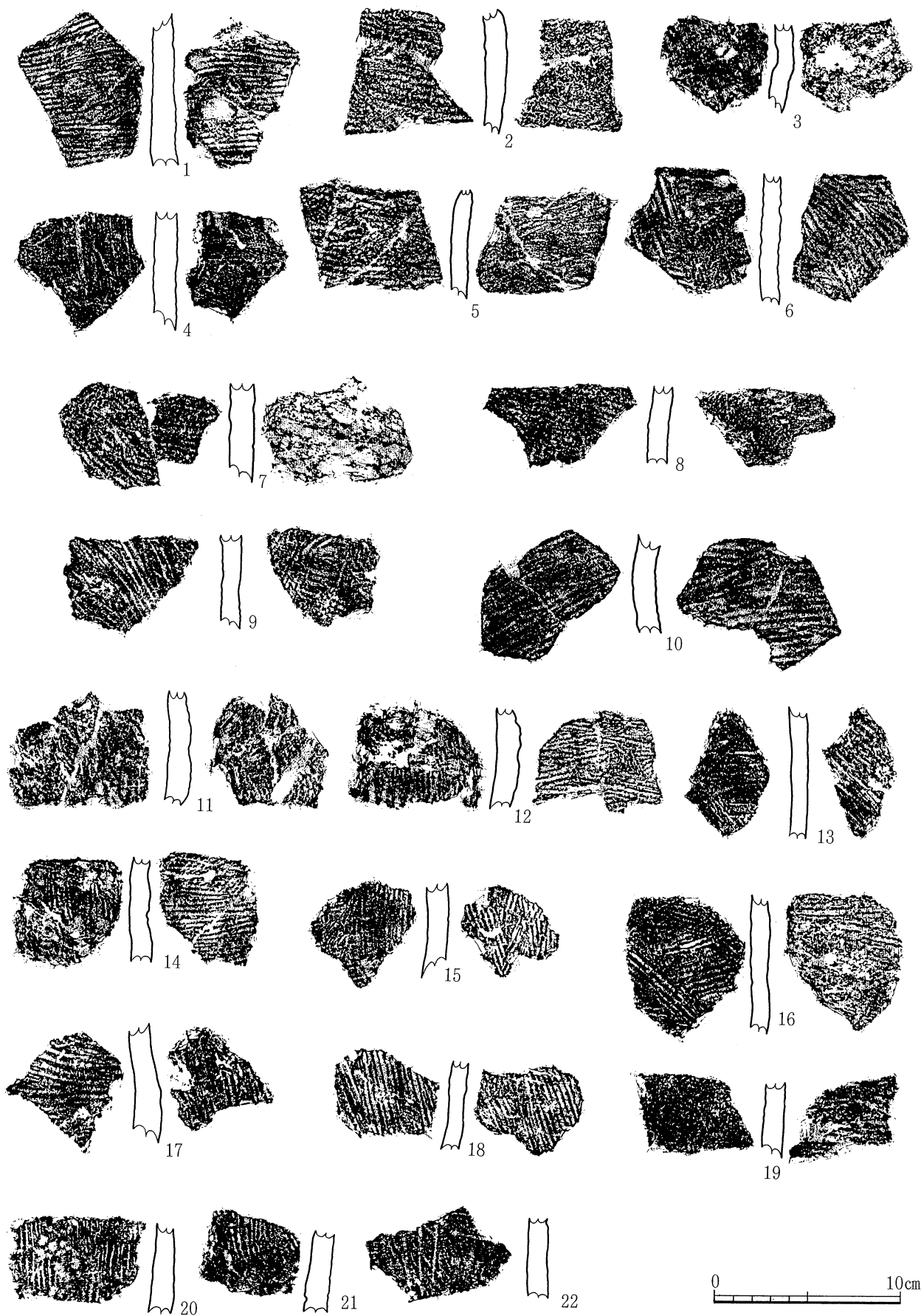




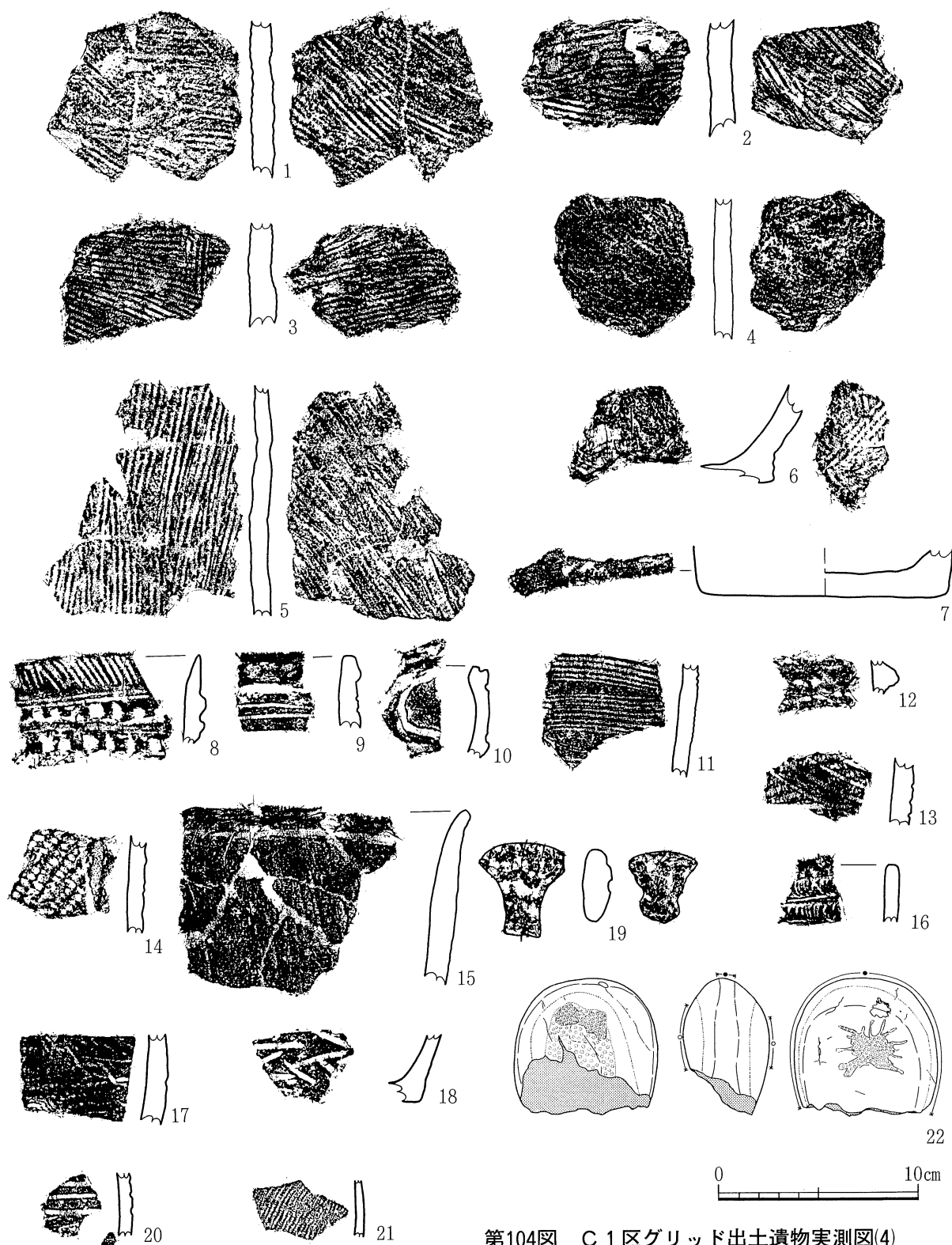
第101図 C 1区グリッド出土遺物実測図(1)



第102図 C 1 区グリッド出土遺物実測図(2)

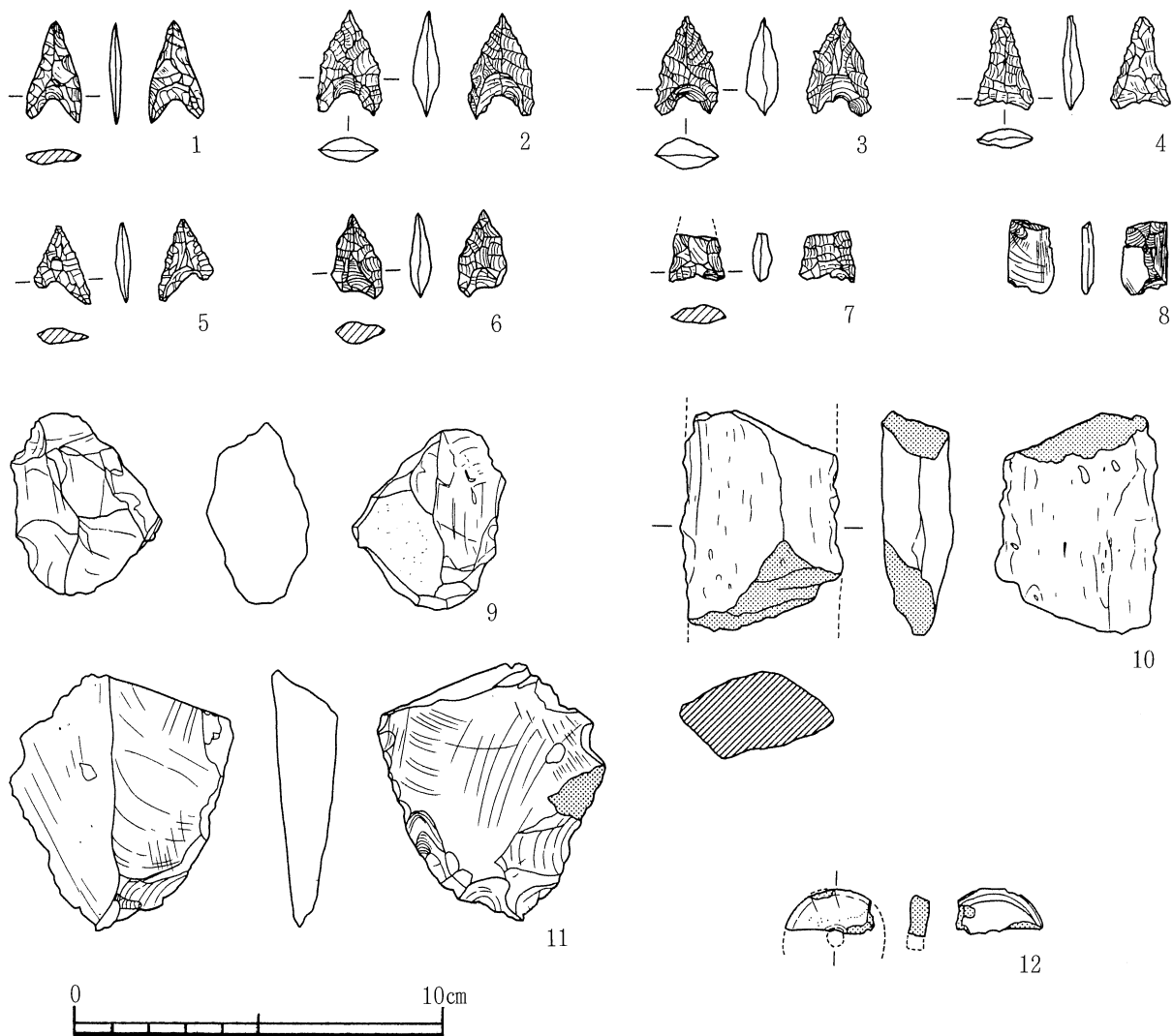


第103図 C 1区グリッド出土遺物実測図(3)



第104図 C 1区グリッド出土遺物実測図(4)

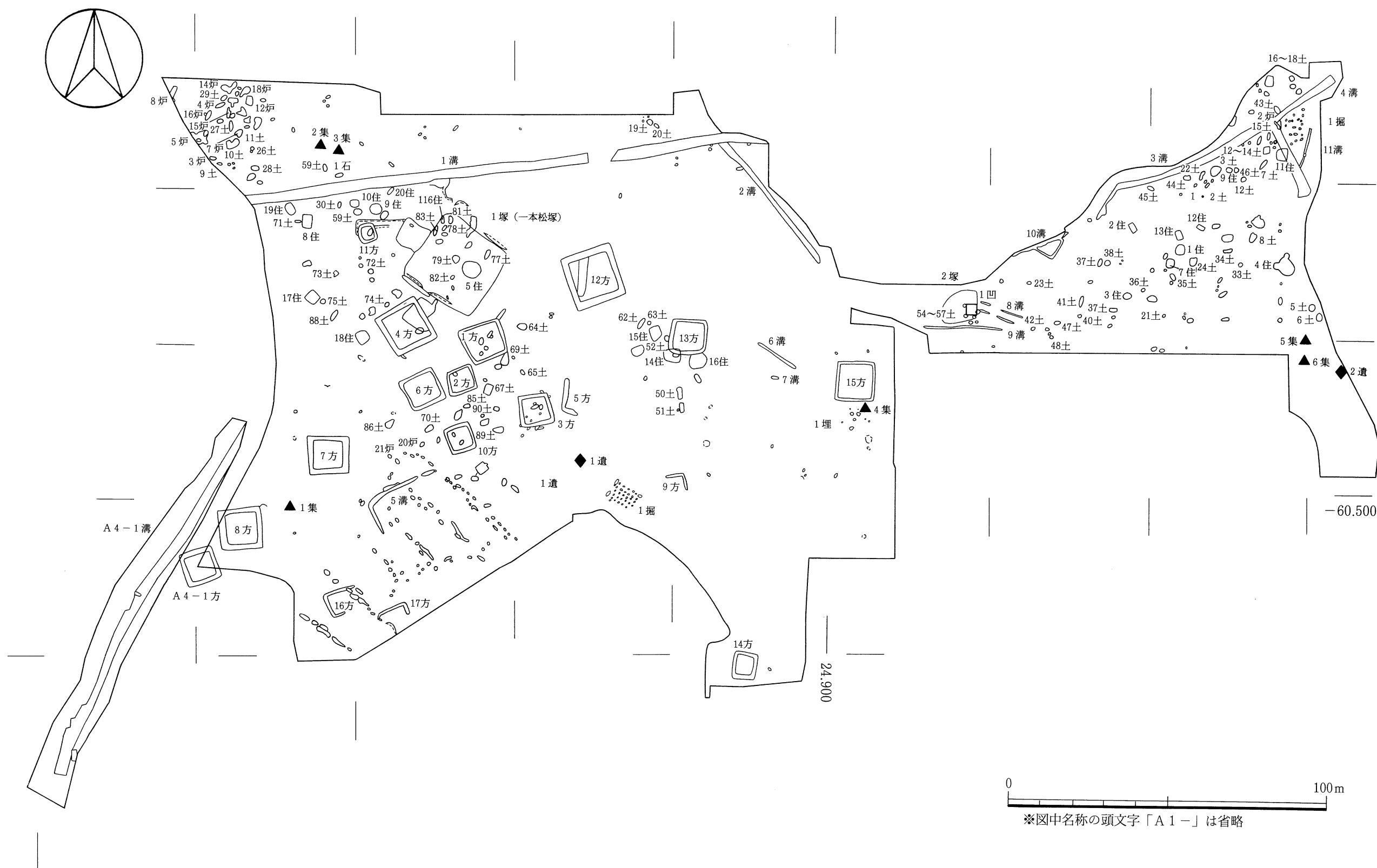
グリッド出土遺物は(第101～105図)、茅山式が(第101～103図、第104図1～7)、第104図8～13、16が諸磯bなど縄文時代前期後半、第104図14、15が加曽利E式、第104図21は弥生時代後期の土器片とみられる。第104図22は敲き石である。第105図1～7は石鏃、8は剥片、9～11は石核片、10は石斧片の可能性がある。第104図19は不明土製品、第105図12は炭化物で中央部が穿孔される(重さ1.6g)。



第105図 C1区グリッド出土遺物実測図(5)

第7表 C1区土坑一覧表

番号	土坑番号	挿図番号	旧土坑番号	規模 (cm)			主軸方向	性格	その他
				上端	下端	深さ			
1	C1-1	第92図	(58)	331×121	279×29	59	N-13° -W	陥穴	不整長円形
2	C1-2	"		230×178	87×38	143	W-4° -S	"	底部は長方形
3	C1-3	第93図	58	333×163	243×26	100	N-25° -W	"	長円形 下端がオーバーハングする。
4	C1-4	第94図	16	279×81	285×18	94	N-13° -W	"	"
5	C1-5	"	50	268×115	199×15	133	N-48° -E	"	" 西側の土坑は新しいものか。
6	C1-6	"	51	290×85	280×10	88	E-40° -N	"	" 一部土坑と切り合う。
7	C1-7	"	61	343×40	318×8	78	W-27° -N	"	"
8	C1-8	"	62	267×43	260×21	80	N-29° -W	"	" C1-7と近接する。
9	C1-9	"	63	313×62	312×14	79	N-32° -E	"	" 下端がオーバーハングする。
10	C1-10	第95図	54	192×100	148×20	97	N-31° -E	"	"
11	C1-11	"	55	219×52	113×8	83	N-3° -E	"	"
12	C1-12	"		265×61	219×17	82	N-38° -E	"	"
13	C1-13	第93図		163×128	128×73	18	ほぼ南北		ビット有り。
14	C1-14	"		133×61	57×45	31	N-11° -W		
15	C1-15	"		115×104	68×66	46	ほぼ南北		方 形
16	C1-16	"		136×121	73×70	72	"		"
17	C1-17	"		113×109	92×66	25	N-41° -W		
18	C1-18	"		108×107	77×71	62	N-7° -W		方 形
19	C1-19	"		116×70	77×57	44	N-4° -W		長方形



第106図 A 1 区全体図

9. A 1 区 (第106図)

当区は遺跡の北側に位置し、東は高坂方面からの開析谷、西は引田川の開析谷に挟まれ、北側からも養老川の沖積地に注ぐ小谷により刻まれて複雑な地形を呈している。標高は72~73mで小谷との比高は30~40mを測る。A 1 区は当遺跡でも最も広い台地上に立地する。また北西側にはA 2、3区、南西側にはB 1区があり尾根によって結ばれている。さらにA 4区は西側に接続している。

検出した遺構は旧石器時代の地点分布2ヶ所、縄文時代早期後半の炉穴群21群、早期前半から中期末葉の竪穴状遺構（竪穴式住居も含む）20基（軒）と土坑90基、中期から後期の土器集中地点6ヶ所、早期の集石遺構1ヶ所、中期後半の埋甕1基、古墳時代末期から奈良・平安時代の古墳及び方形区画墓17基、奈良・平安時代の掘立柱建物跡3棟以上（2ヶ所）、奈良・平安時代から中世頃と思われる溝状遺構11条・中世~近世にかけての塚3ヶ所、窪地遺構1ヶ所である。

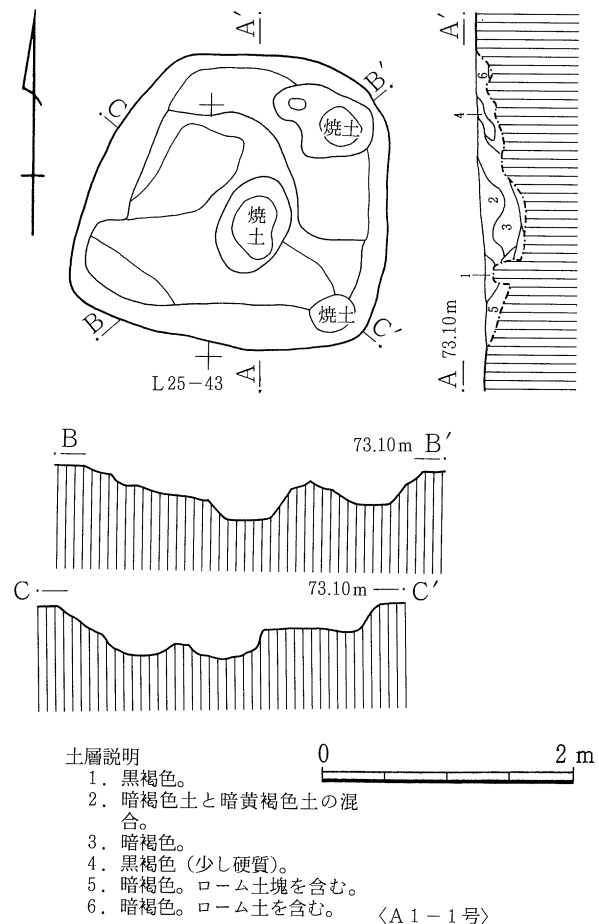
旧石器時代の地点分布は、確認調査時にO17とO29区において調査された。O17は南側の谷を望む地点、O29は東側の同様の地点である。出土層位はVI層のA T層より上位面である。出土遺物は{ (第213図1~9) (第15表133~141) } 残核状のフレイク及び石屑チップ等で流紋岩が多い。

土器集中地点についてはそれらの位置と主な出土遺物を掲載するにとどめた。調査地区の北西隅2地点、南西側1地点、A 1-15号方形区画墓の南側1地点、東側台地縁辺部2地点である。出土遺物は縄文中期から後期である。(A 1-6号第157図2~5、A 1-5号第158図、A 1-4号第161図1~9、A 1-1号第160図21、A 1-2号第160図8~20、A 1-3号第164図1~3、第163図40~44)。

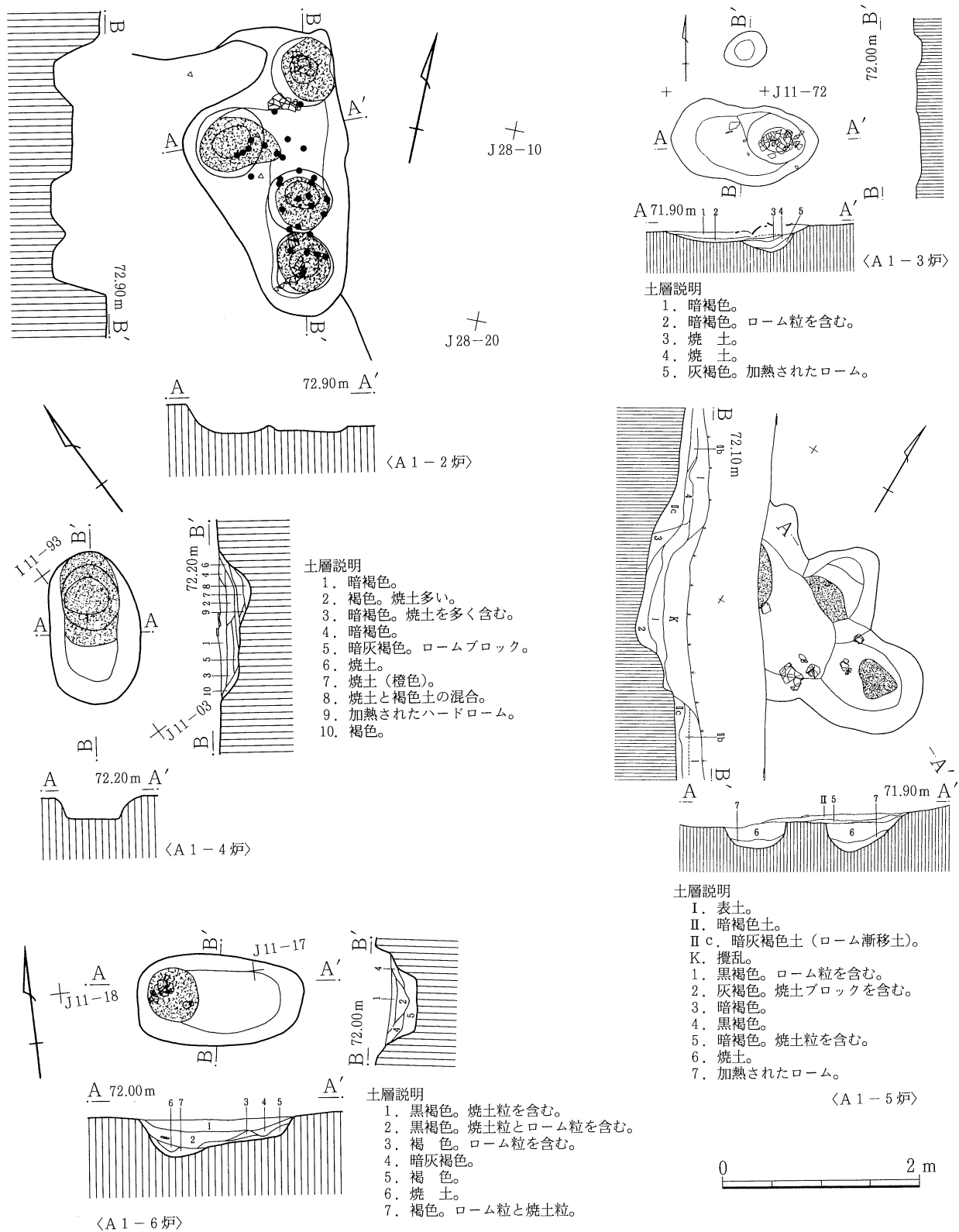
窪地遺構はN22付近に存在する。(地点のみ記載第106図) 平面形体が長方形で(12m×7m)全体に窪んでいる。最深部で50cmを測る。底部はやや硬質で出土遺物は特に無い。土層などから中世以降の所産と考えている。

炉穴群は調査地区の北西隅と北東側のA 1-3号溝が屈曲する付近の2ヶ所に集中して存在する。単独が10基あり、多く重複するものはA 1-18号が焼土6ヶ所で最も多く他は数基の重複とみられる。A 1-17、20、21のように円形の土坑に焼土が入っている例もある。

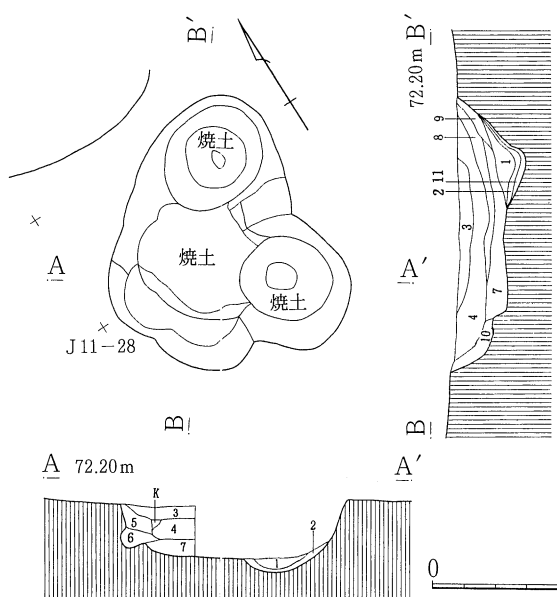
出土遺物は第113、114図がA 1-2号出土、第115図1~7がA 1-3号、第115図8~12、第116図、第117図1~11がA 1-4号、第117図12、第118図1~7がA 1-5号、第118図8~11、第119図1~8、第120図4~8がA 1-6号、第119図9~17がA 1-7号、第119図18~21、第120図



第107図 A 1-1号炉穴群実測図



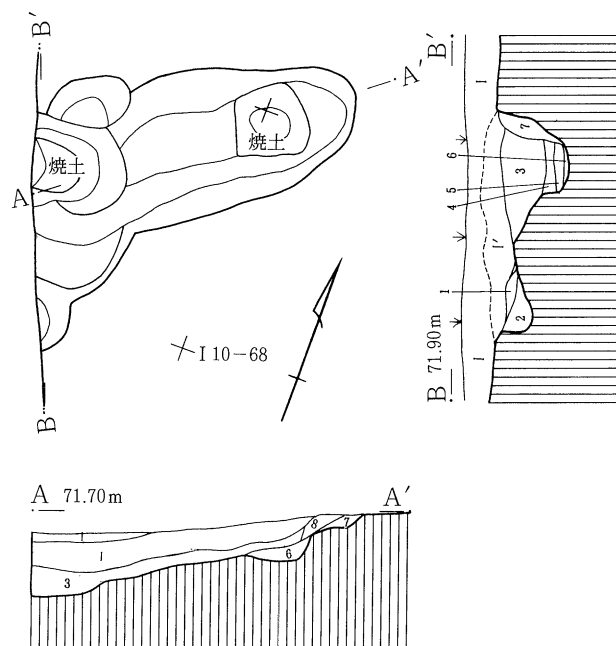
第108図 A1-2～6号炉穴群実測図



土層説明

1. 焼土。
2. 焼土化したローム土。
3. 黒褐色。ローム粒を少量含む。
4. 暗褐色。焼土粒を少量含む。
5. 暗褐色土と暗黄褐色土の混合。
6. 暗褐色。
7. 暗褐色土。ローム粒が多く入る。
8. 暗褐色。焼土粒を含む。
9. 褐色。焼土粒を多く含む。
10. 褐色。
11. ハードローム。

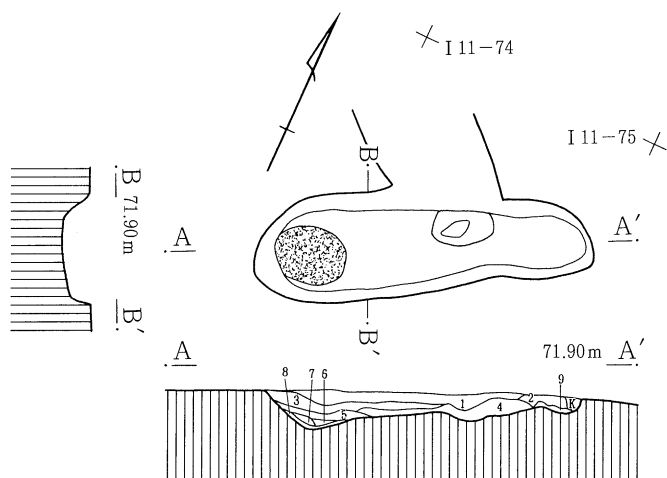
〈A 1-7 炉〉



土層説明

1. 黒褐色。
- 1' 黒褐色。少し軟質。
2. 暗褐色。
3. 黒褐色（少し硬質）。ローム粒を含む。
4. 黒褐色。焼土粒とローム粒を含む。
5. 黒褐色。焼土粒を含む。
6. 焼土。
7. 暗褐色。ソフトロームを含む。
8. 暗褐色。ローム粒を少量含む。

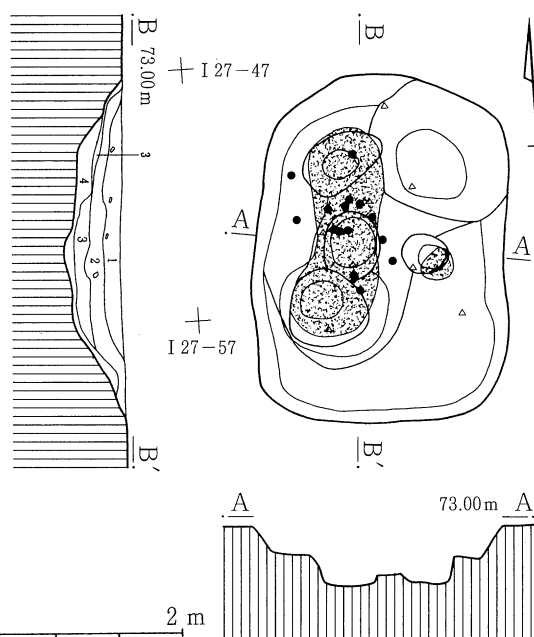
〈A 1-8 炉〉



土層説明

1. 黒褐色。
2. 焼土。
3. 暗褐色。わずかに焼土粒を含む。
4. 暗黄褐色土と暗褐色土。
5. 暗褐色。焼土粒を多く含む。
6. 暗褐色。焼土との混合。
7. ローム土が焼土化。
8. ローム土が焼土化（7より弱い）。
9. 褐色。ローム土塊を含む。

〈A 1-9 炉〉

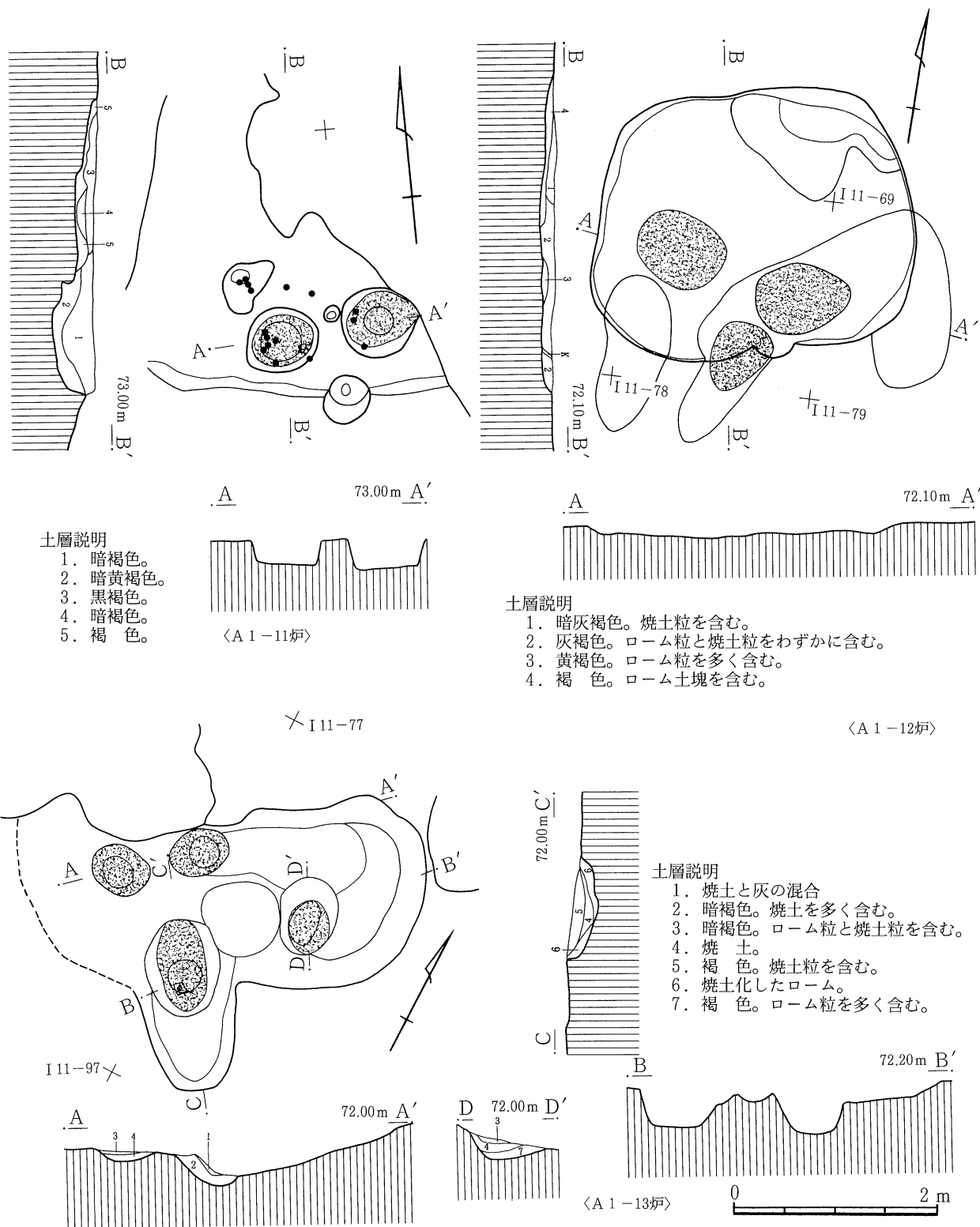


土層説明

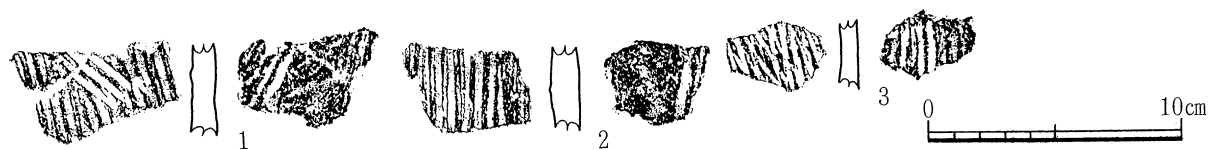
1. 黒褐色。ローム粒と焼土粒を含む。
2. 暗褐色。焼土粒を含む。
3. 暗褐色。焼土粒を多く含む。
4. 黒褐色。焼土との混合土。

〈A 1-10 炉〉

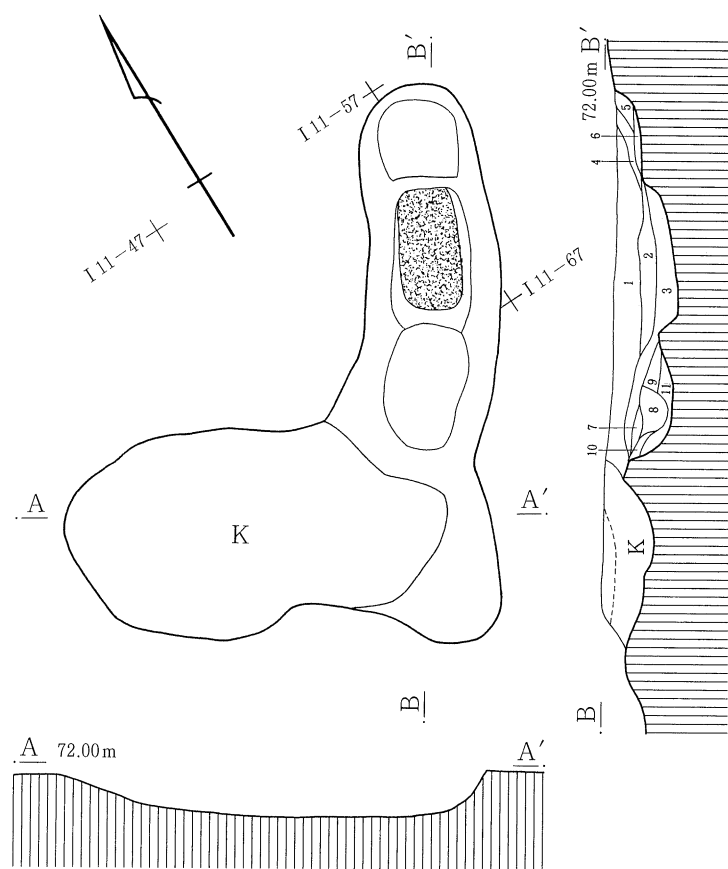
第109図 A 1-7~10号炉穴群実測図



第110図 A 1-11~13号炉穴群実測図



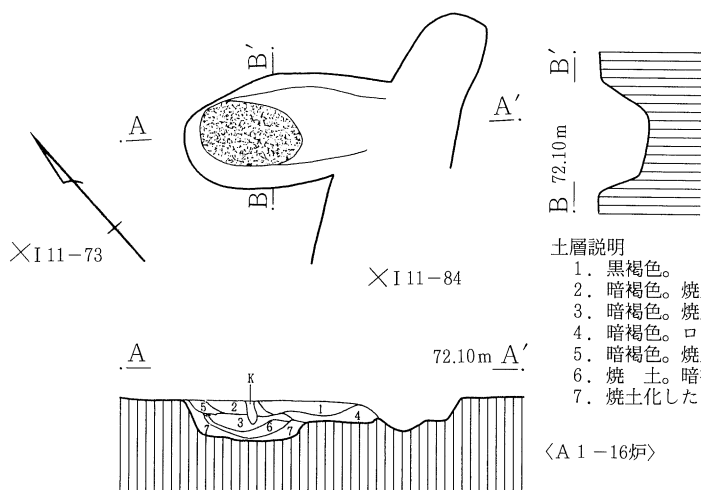
第111図 A 1-14号炉穴群出土遺物実測図



土層説明

1. 暗褐色。ローム粒と焼土粒を多く含む。
2. 暗褐色。ローム粒と焼土粒を1より多く含む。
3. 暗灰褐色。ローム粒と焼土粒を含む。
4. 暗褐色。ローム粒を含む。
5. 褐色。ローム土塊を含む。5より明るい。
6. 褐色。ローム土塊を含む。5より明るい。
7. 暗褐色。焼土粒を多く含む。
8. 焼土。
9. 暗褐色。焼土粒を含む。
10. 暗褐色。
11. 焼土化した褐色土。

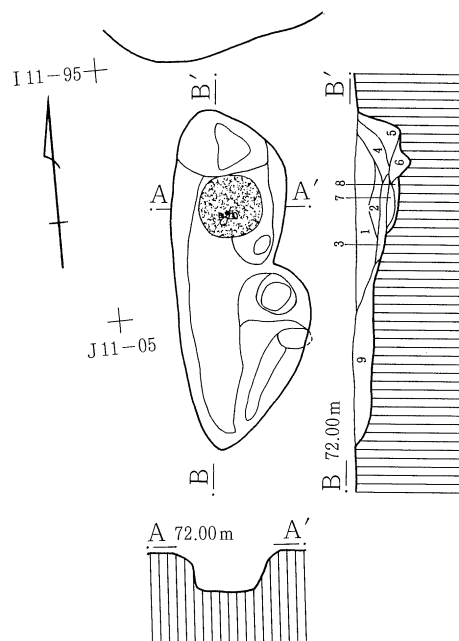
〈A 1-14炉〉



土層説明

1. 黒褐色。
2. 暗褐色。焼土粒を含む。
3. 暗褐色。焼土粒を多く含む。
4. 暗褐色。ローム粒を含む。
5. 暗褐色。焼土粒とローム粒を含む。
6. 焼土。暗褐色土を含む。
7. 焼土化したローム。

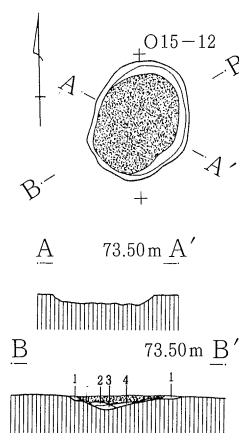
〈A 1-16炉〉



土層説明

1. 暗褐色。焼土粒をわずかに含む。
2. 暗褐色。焼土粒を含む。
3. 暗赤褐色。焼土と暗褐色土。
4. 暗褐色。明るい。
5. 暗褐色。暗い。ローム粒が多い。
6. ソフトロームと暗褐色土。
7. 暗赤褐色。焼土。
8. 焼土化したローム。
9. 暗褐色。ソフトロームをまだらに含む。

〈A 1-15炉〉

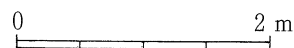


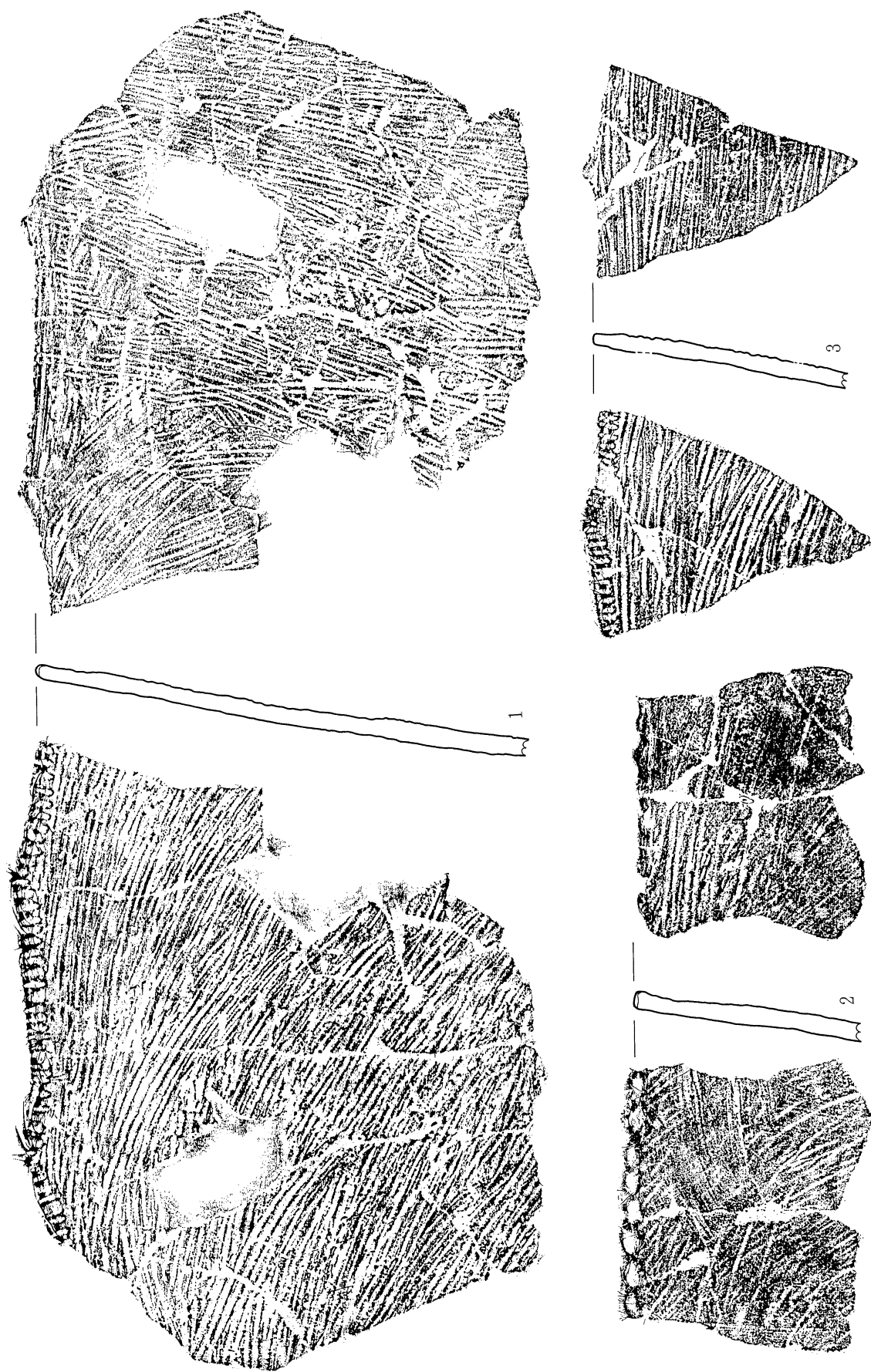
土層説明

1. 暗黄褐色。
2. 暗褐色。焼土粒を含む。
3. 暗褐色土とローム粒と焼土。
4. 暗褐色土と暗黄褐色土。

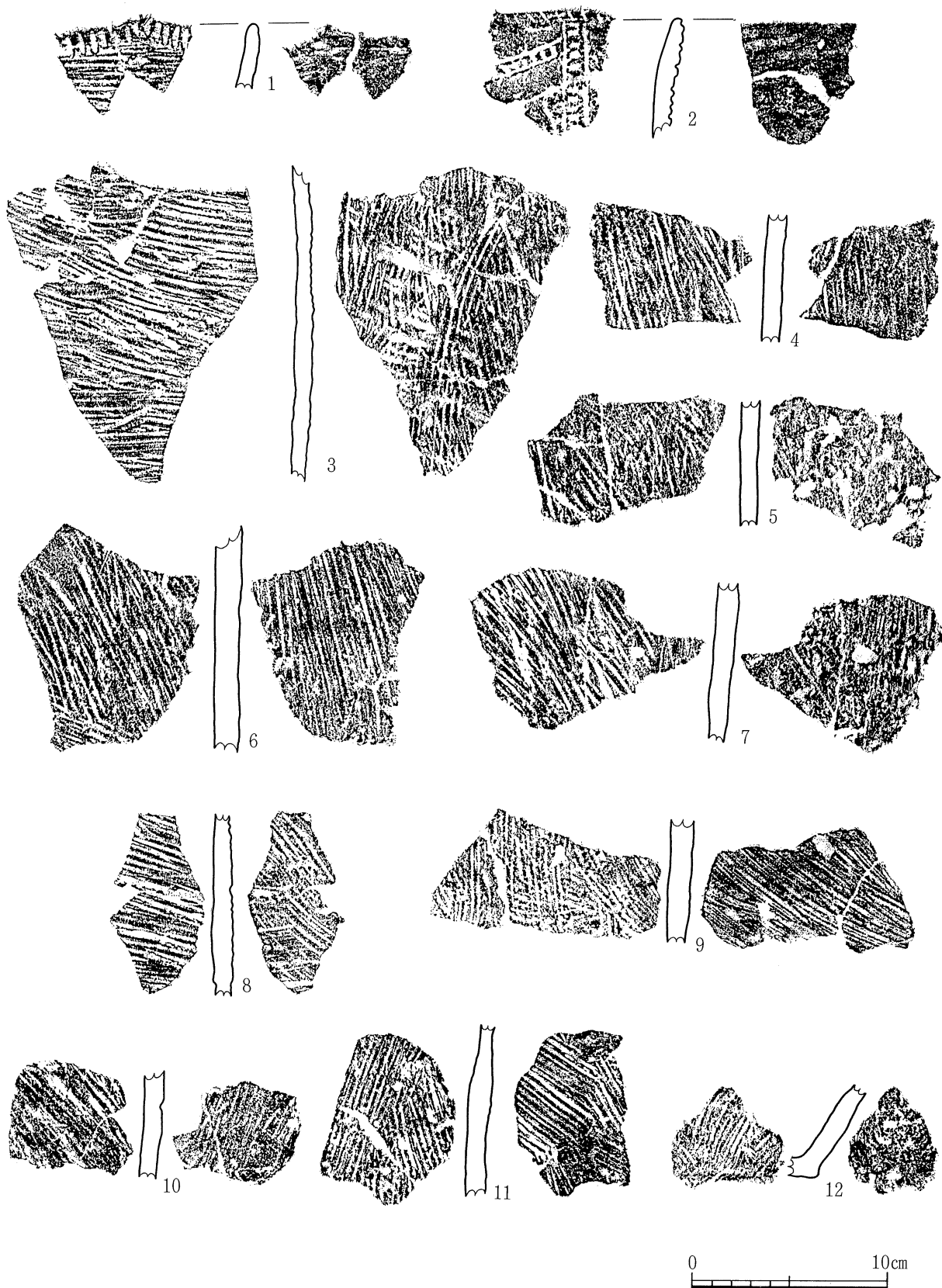
〈A 1-17炉〉

第112図 A 1-14~17号炉穴群実測図





第113图 A 1—2号炉穴群出土遗物实测图(1)



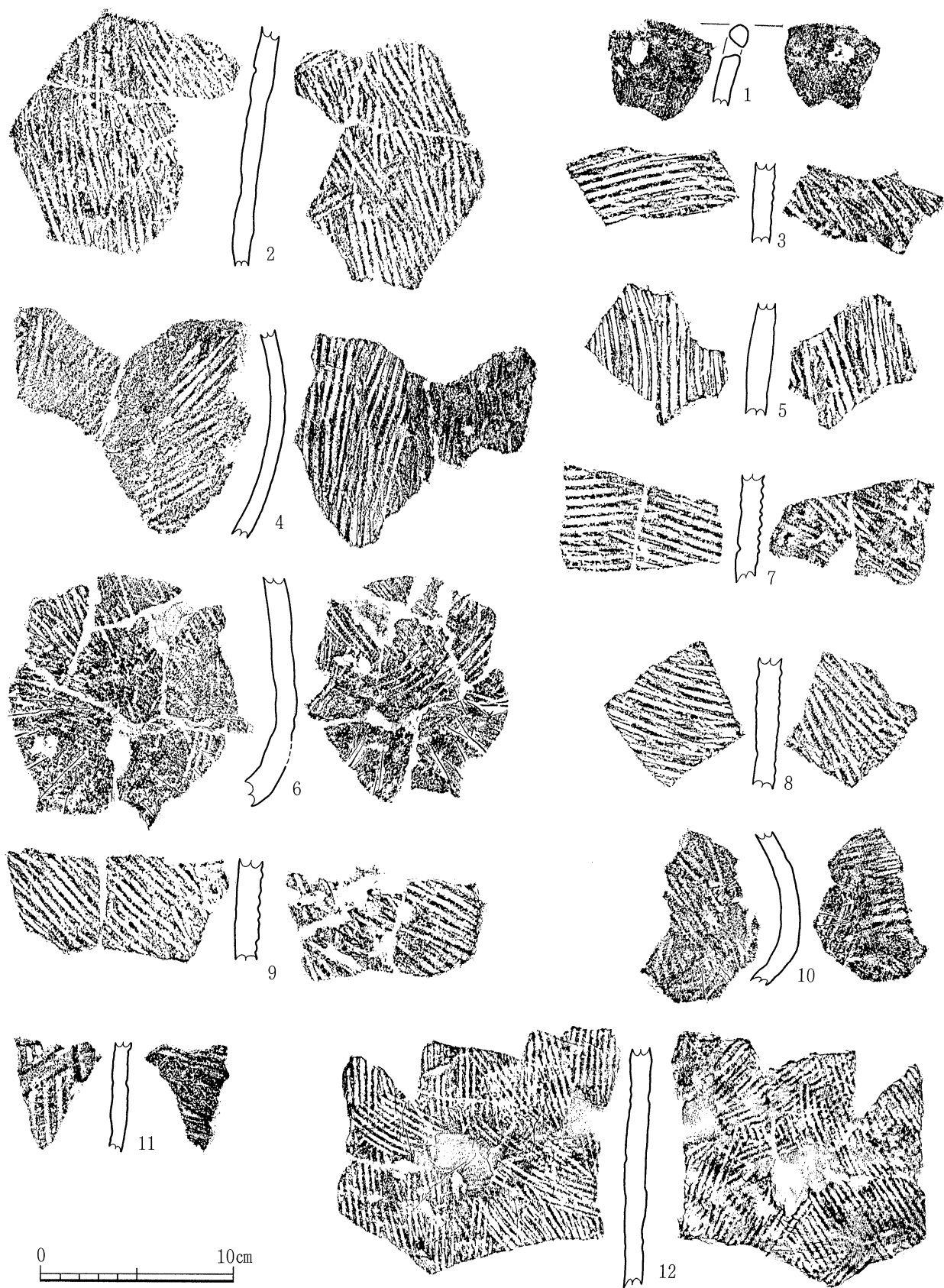
第114图 A 1 - 2号炉穴群出土遺物実測図(2)



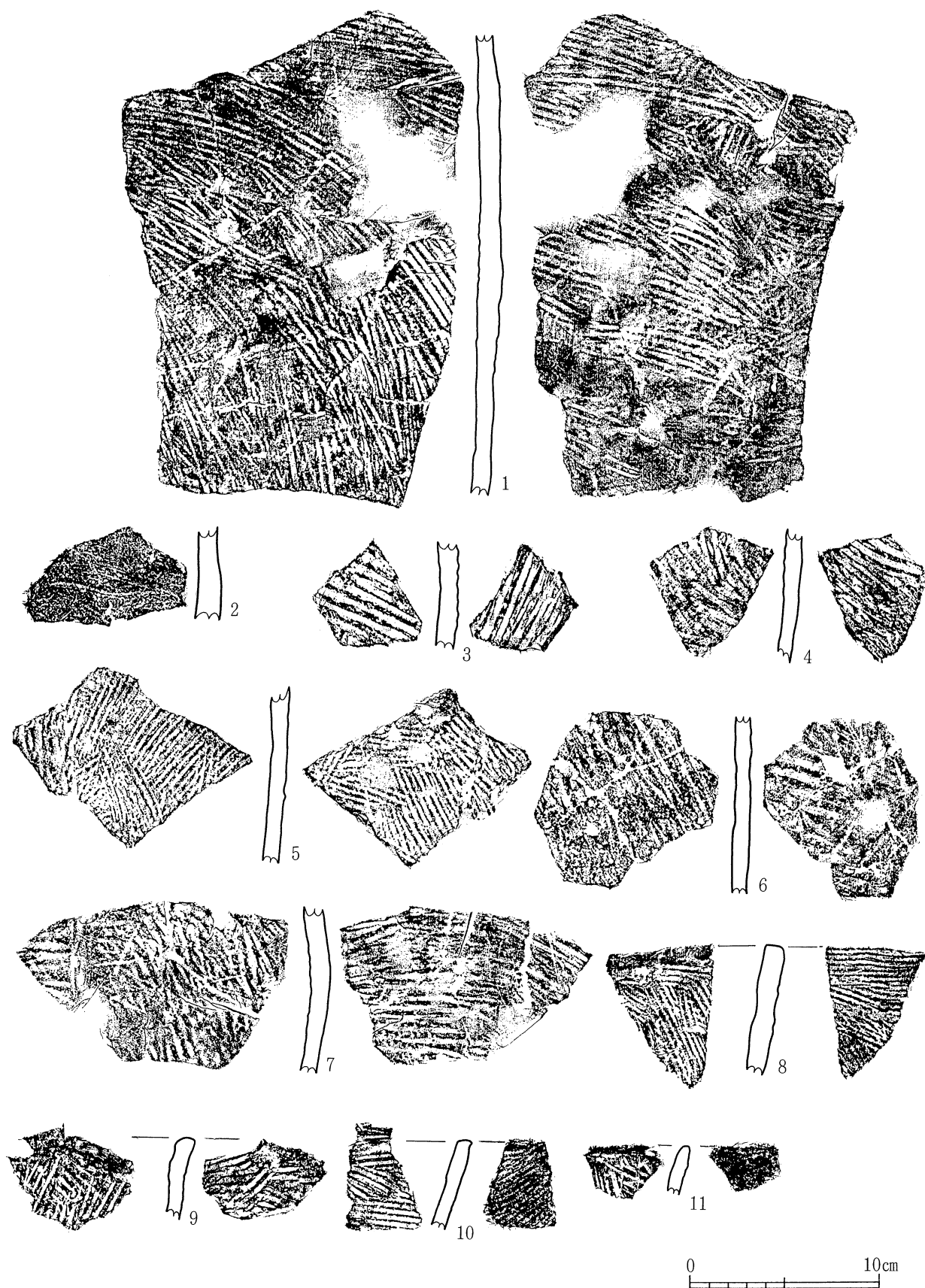
第115图 A 1—3、4号炉穴群出土遺物実測図（1～7. A 1—3号、8～12. A 1—4号）



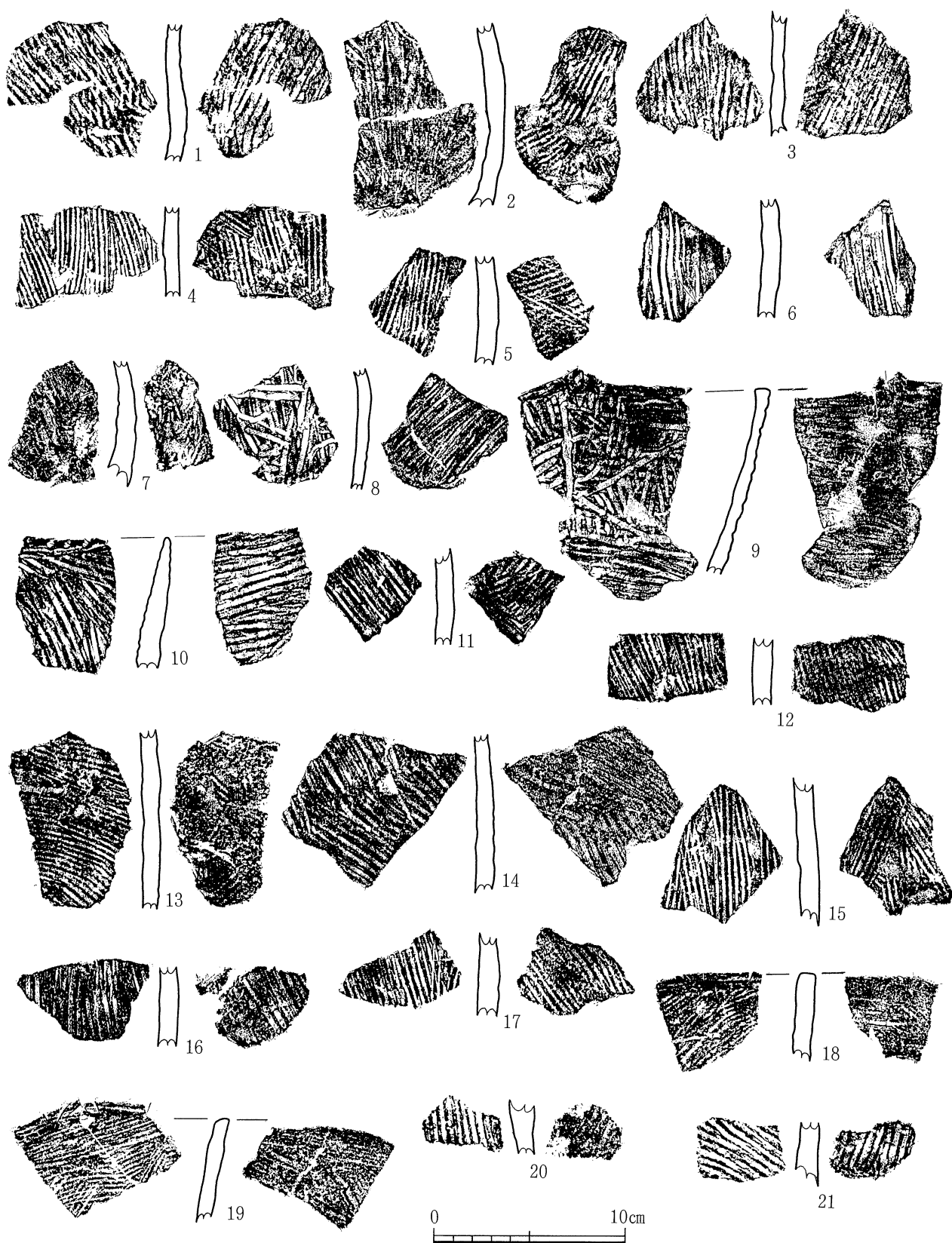
第116图 A1-4号炉穴群出土遗物实测图



第117图 A 1—4、5号炉穴群出土遺物実測図（1~11. A 1—4号、12. A 1—5号）

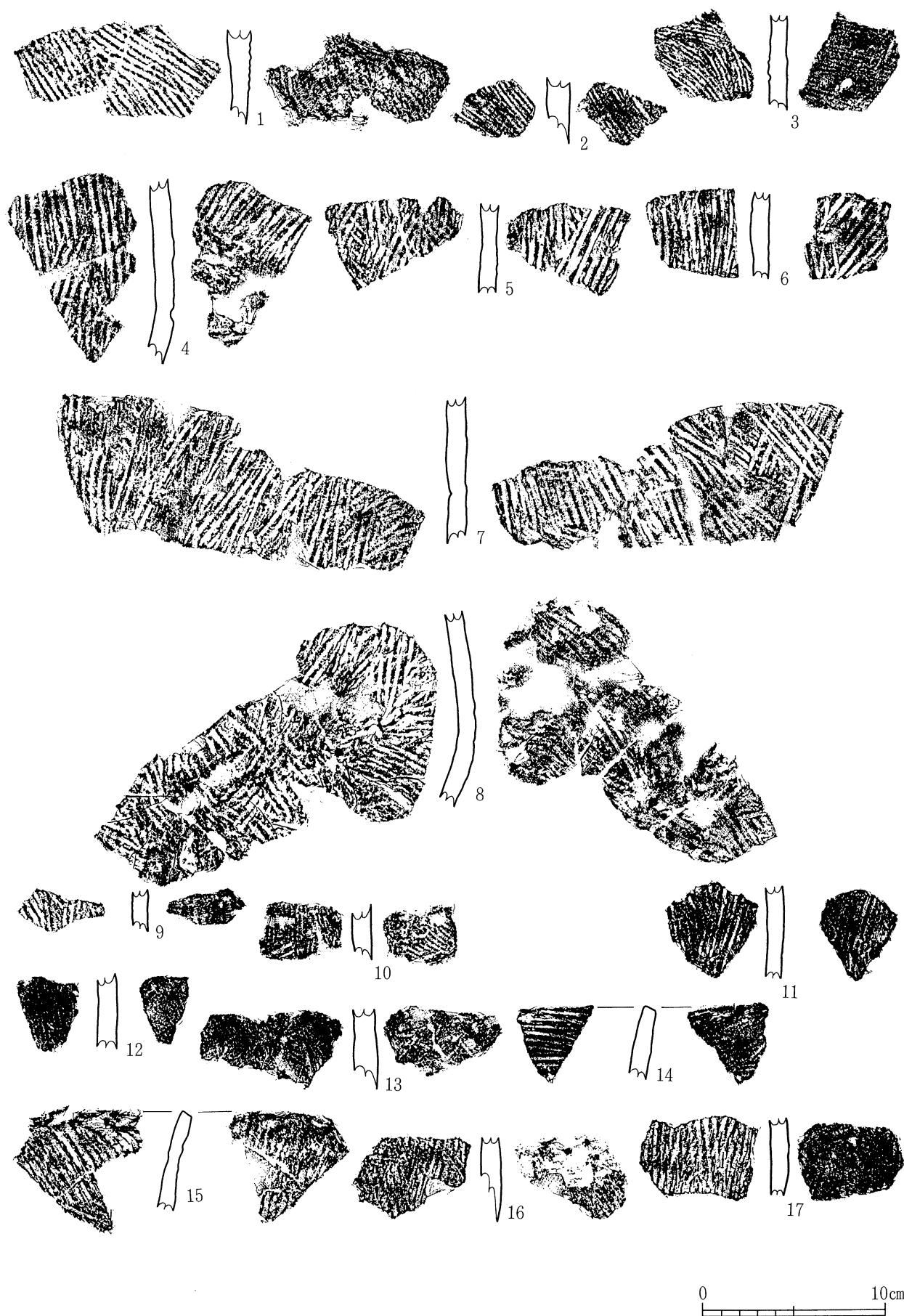


第118图 A 1—5、6号炉穴群出土遗物实测图 (1~7. A 1—5号、8~11. A 1—6号)



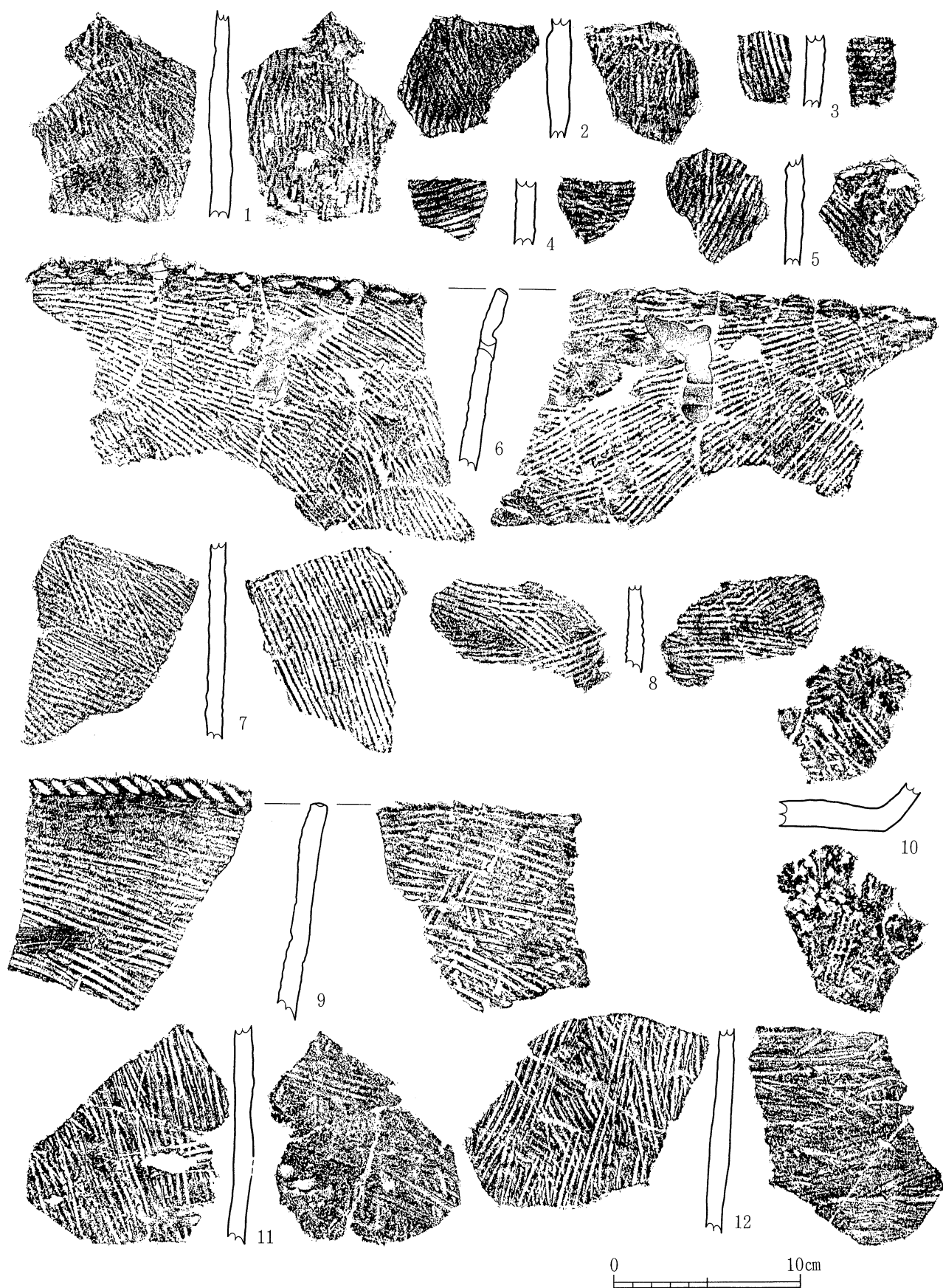
第119図 A 1 - 6 ~ 8号炉穴群出土遺物実測図

(1~8. A 1 - 6号、8~17. A 1 - 7号、18~21. A 1 - 8号 ※8はA 1 - 6号とA 1 - 7号出土の2片が結合)



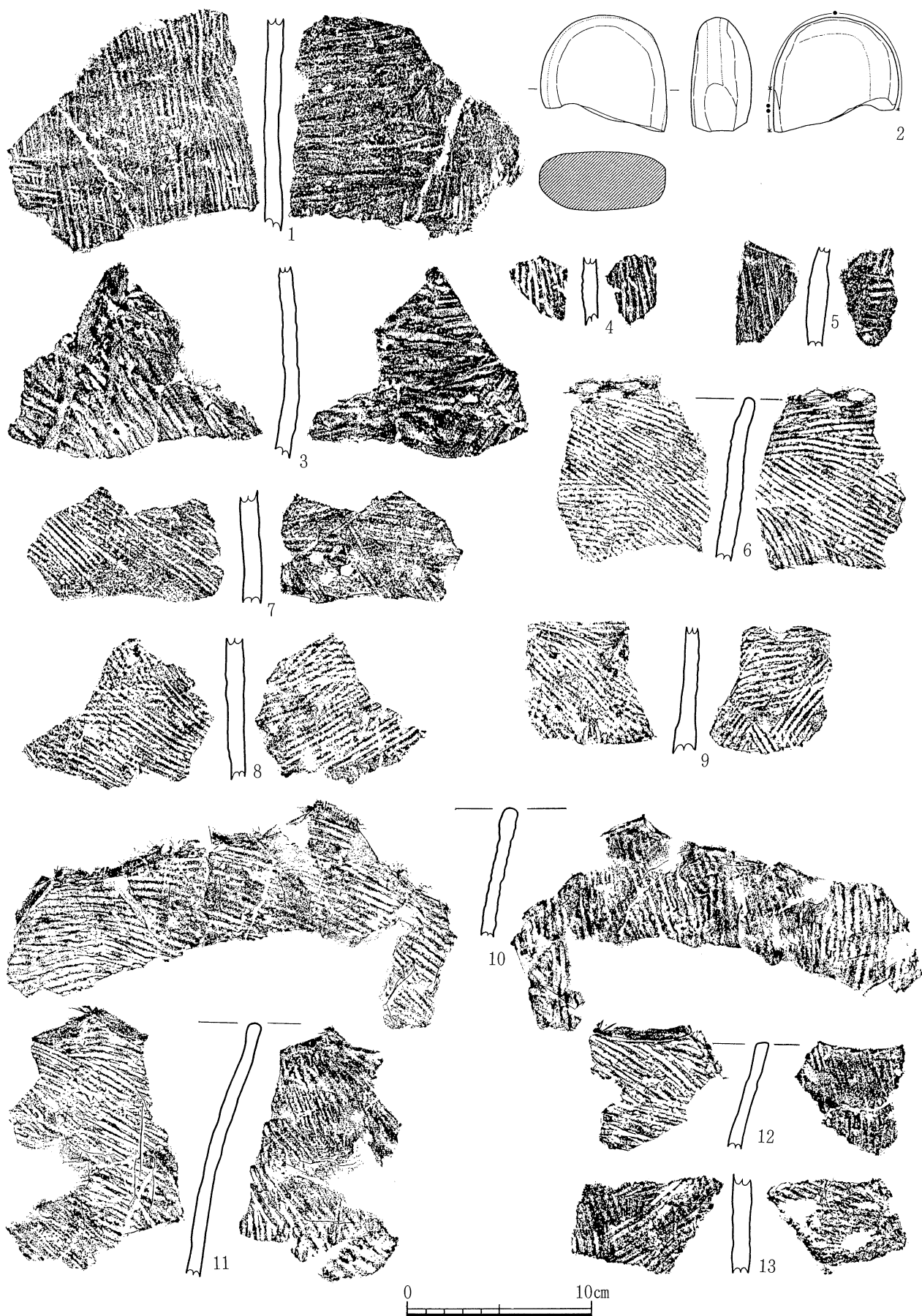
第120图 A 1—6、8、10、11号炉穴群出土遗物实测图

(1~3. A 1—8号、4~8. A 1—6号、9~14. A 1—10号、15~17. A 1—11号)



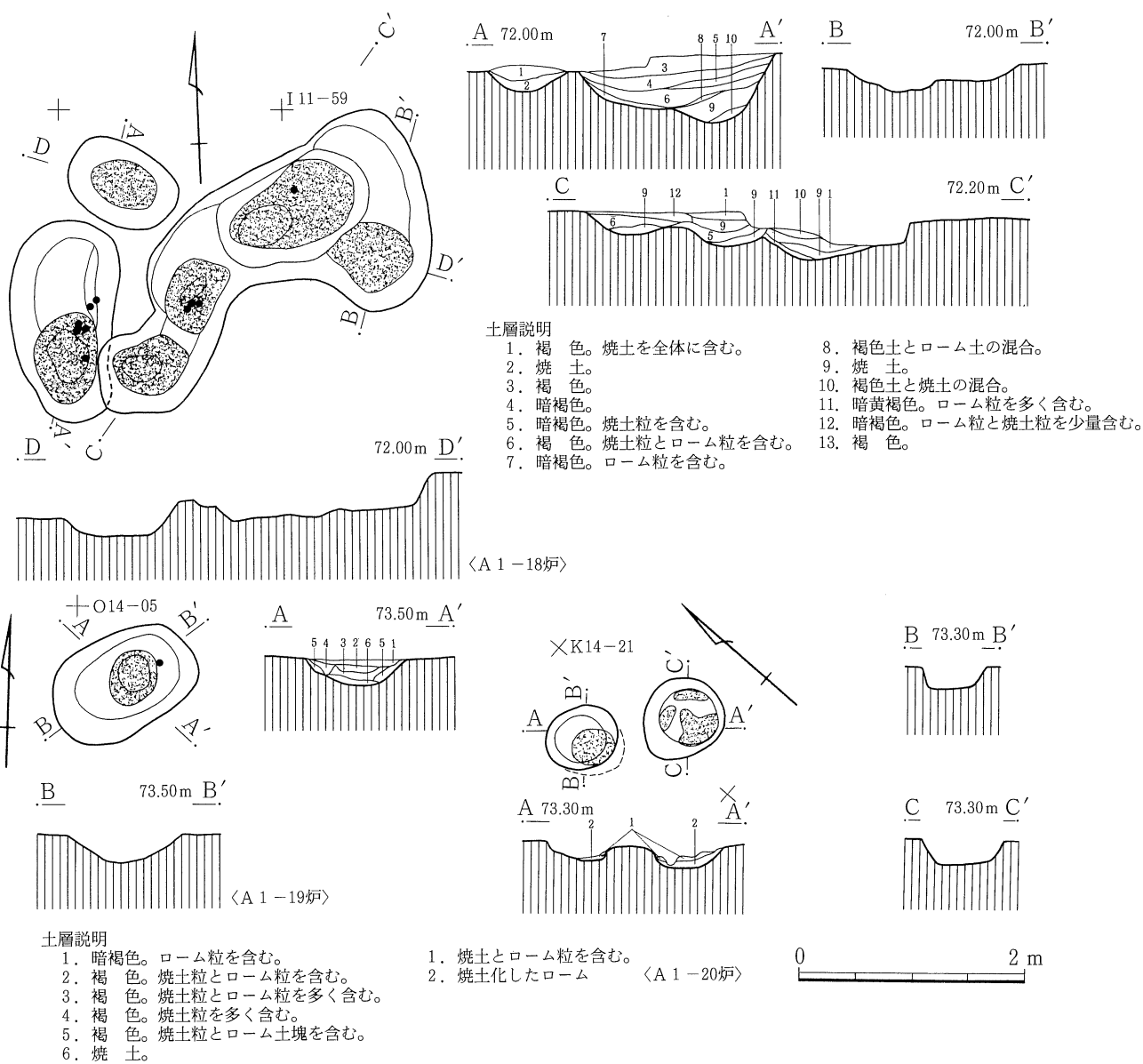
第121図 A 1-11、12、13号炉穴群出土遺物実測図

(1~5. A 1-11号、6~8. A 1-12号、9~12. A 1-13号 ※6はA 1-19号炉穴出土と結合)



第122图 A 1—13、15、18、19号炉穴群出土遗物实测图

(1·2. A 1—13号、3~5. A 1—15号、6~9. A 1—18号、10~13. A 1—19号)

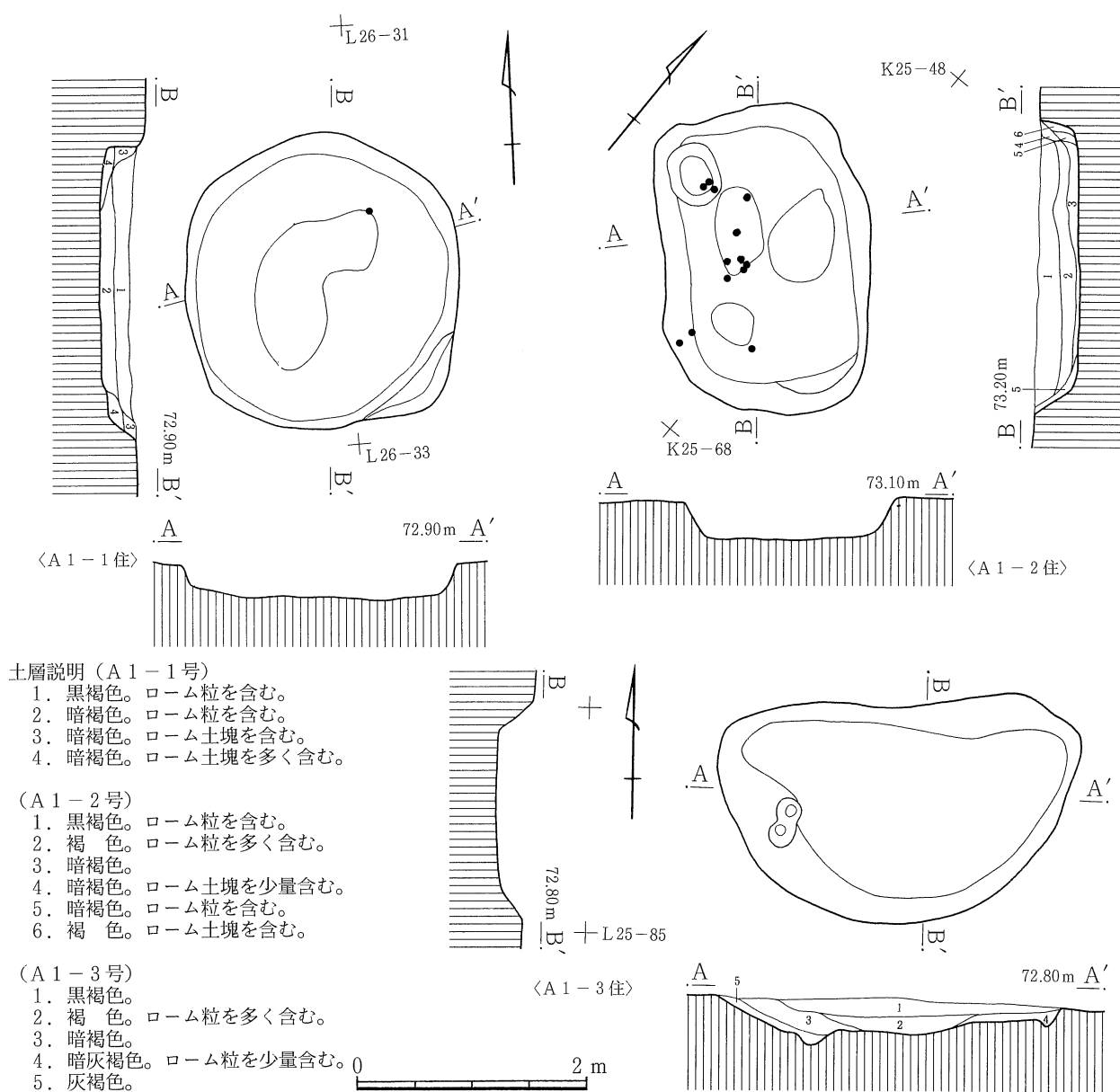


第123図 A 1 - 18~21号炉穴群実測図

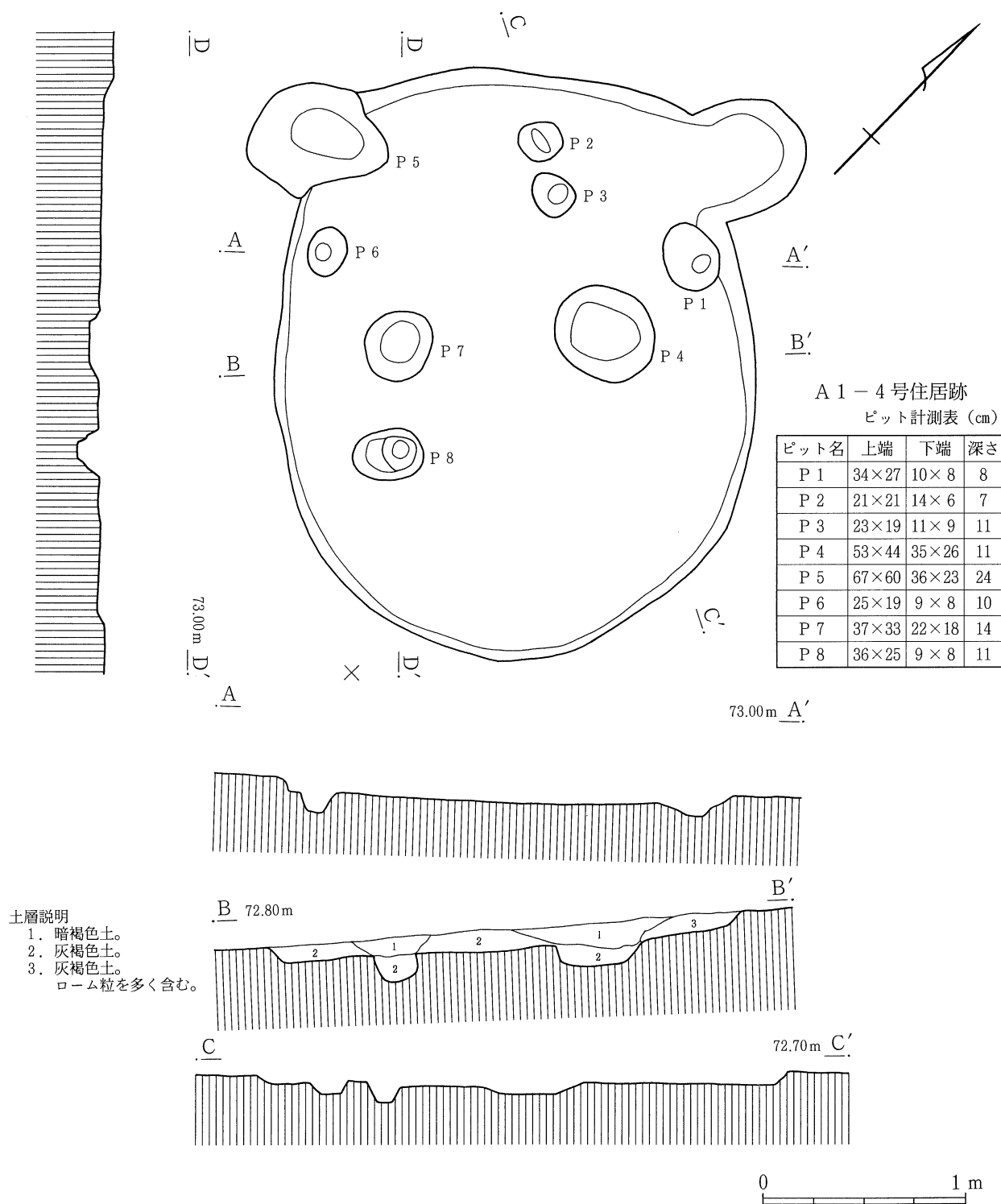


第124図 A 1 - 19号炉穴群出土遺物実測図

1～3がA1-8号、第120図9-14がA1-10号、第120図15-17、第121図1～5がA1-11号、第121図6～8がA1-12号、第121図9～12、第122図1～2がA1-13号、第122図3～5がA1-15号、第122図6～9がA1-18号、第122図10～13、第124図1、2がA1-19号の出土である。いずれも早期後半の貝殻条痕文系の土器群で口唇部に刻目や押圧のなされる例（第113図、第114図1、第121図6、9）、口縁部に沈線と刺突文の組み合わせる例（第114図2）、微隆起線文とへら描き沈線の組み合わせ（第117図11）、口縁部に沈線を幾何学的に組み合わせる例（第119図8、9）、口縁部に穿孔のある例（第117図1）などがみられる。またA1-13号からは磨石が1点（第122図2）出土している。



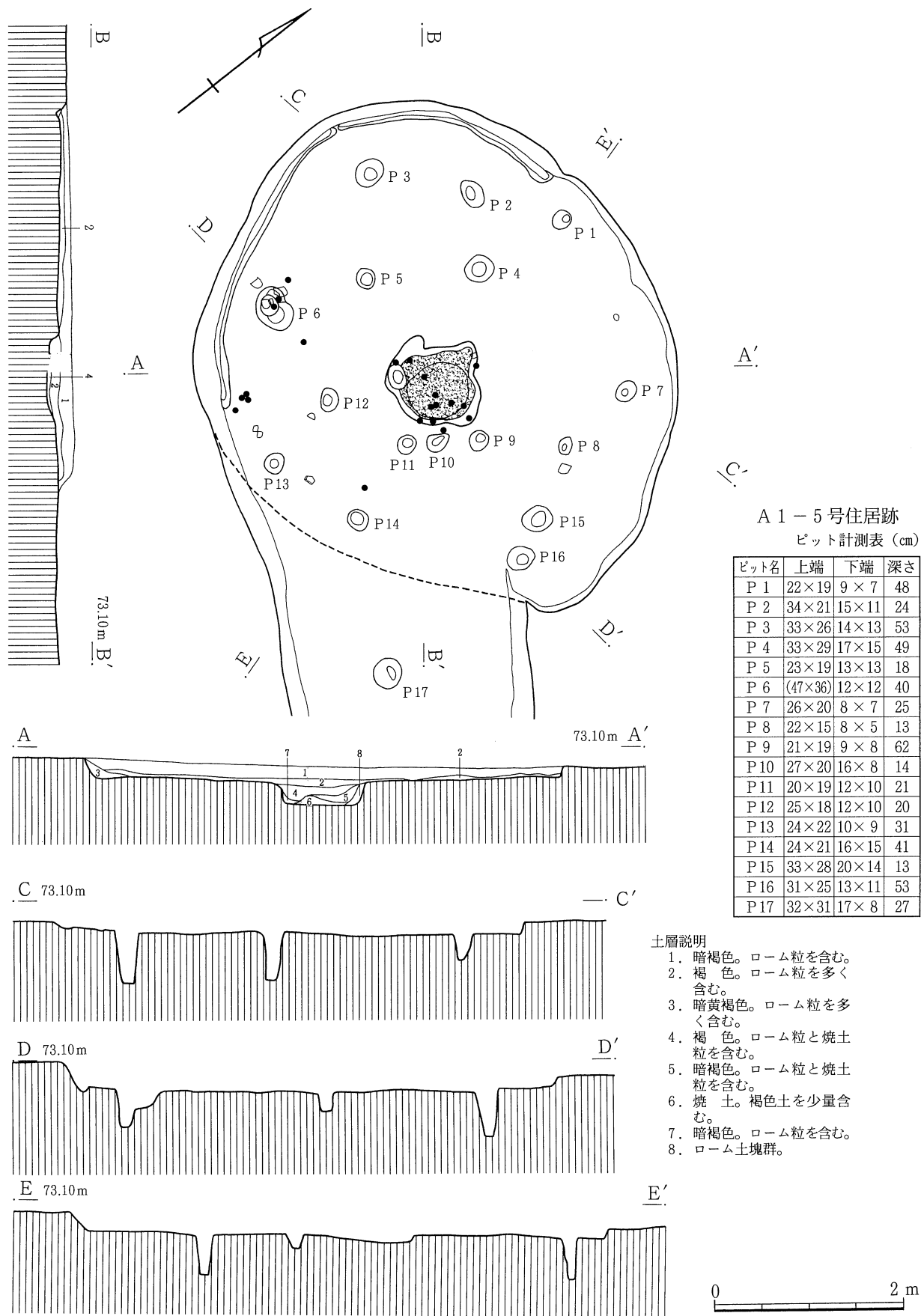
竪穴状遺構（竪穴住居跡）は早期前半の撚糸文系土器群を伴う例は調査地区の北西側、早期中葉の沈線文系土器群を伴う例は北東側、中期後半の土器群を伴う例は中央部付近に集中している。各遺構



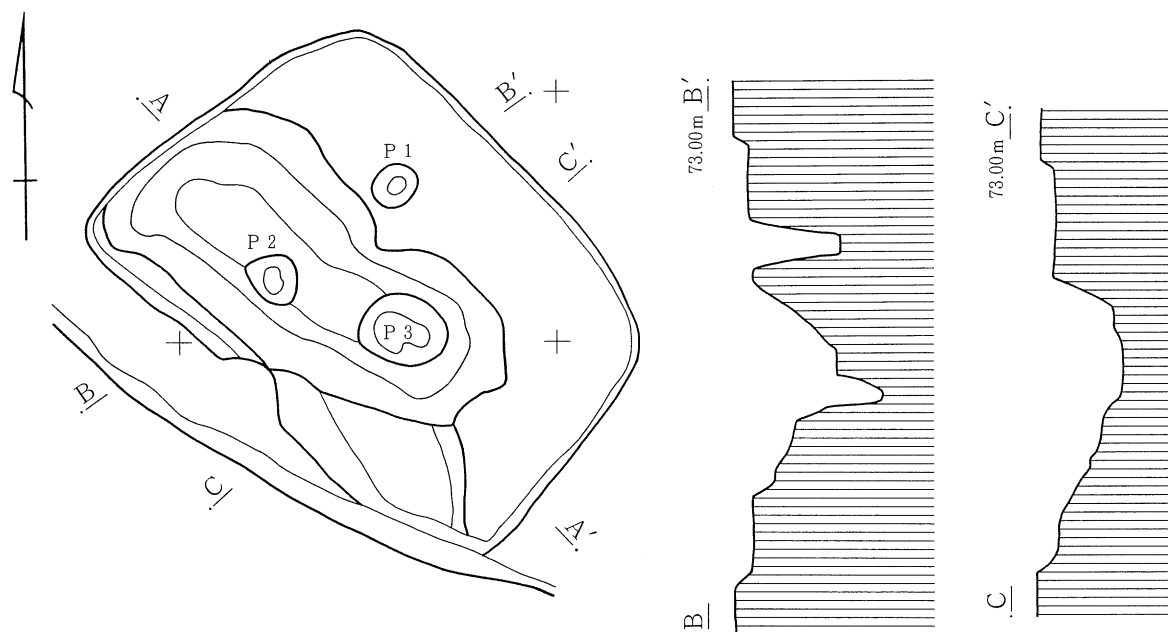
第126図 A 1 - 4 号住居跡実測図

については第8表のとおりであるが、A 1 - 4 号とA 1 - 5 号は長径が5 m以上ある。炉跡をもつ竪穴はA 1 - 5 号、A 1 - 14 号の2軒である。出土遺物により確実に時期の分かる竪穴は、A 1 - 6 号（稲荷台式）、A 1 - 7 号（井草式）、A 1 - 9 号（稲荷台式）、A 1 - 2 号（田戸上層式）、A 1 - 4 号（三戸式）、A 1 - 3 号（加曽利E式）、A 1 - 5 号（加曽利EⅢ式）、A 1 - 14 号（加曽利EⅣ式）、A 1 - 15 号（加曽利EⅢ式）、A 1 - 16 号（加曽利EⅢ式）である。

次に各竪穴の出土遺物を掲げる。A 1 - 1 号が第157図1、A 1 - 2 号が第163図8～20、45、A 1 -



第127図 A 1 - 5 号住居跡実測図



A 1 - 6 号住居跡

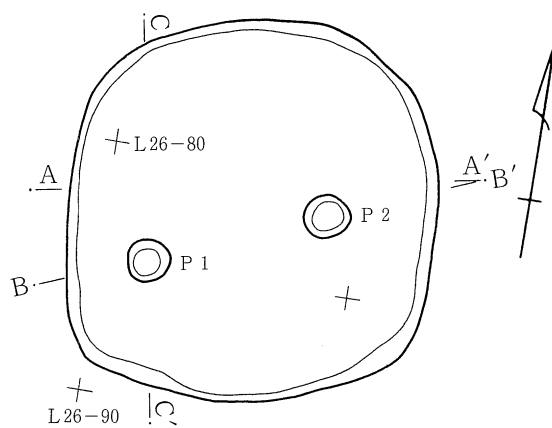
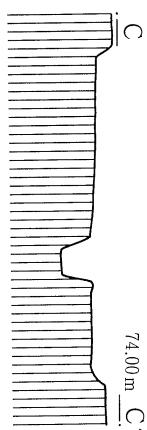
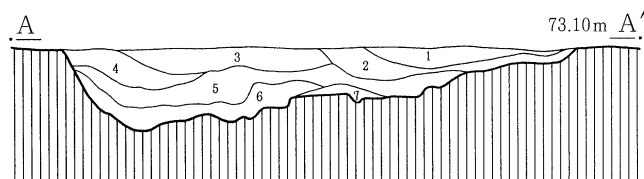
ピット計測表 (cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P 1	37×32	16×12	73
P 2	41×40	22×15	45
P 3	69×55	45×39	17

土層説明

(A 1 - 6 住)

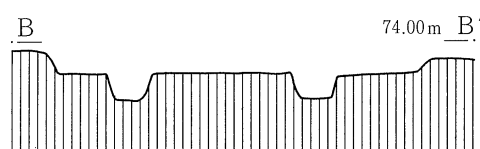
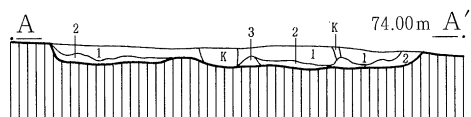
1. 暗褐色。
2. 暗黄褐色。
3. 暗黄褐色。
4. 暗褐色。
5. 褐色。ソフトローム混入。
6. 黄褐色。
7. 黄褐色。



A 1 - 7 号住居跡

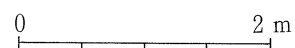
ピット計測表 (cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P 1	35×33	21×20	25
P 2	37×33	25×22	20

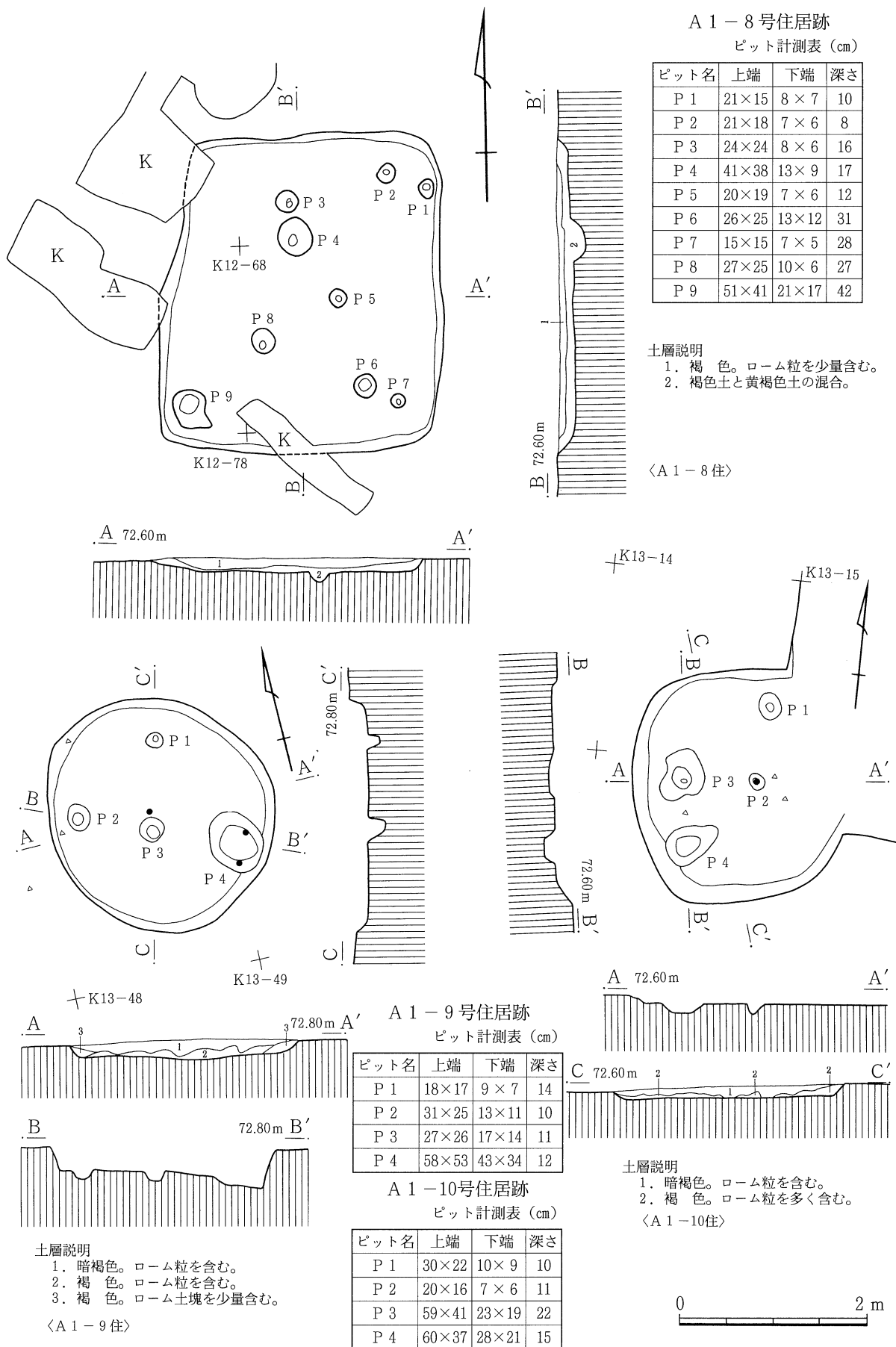


(A 1 - 7 住)

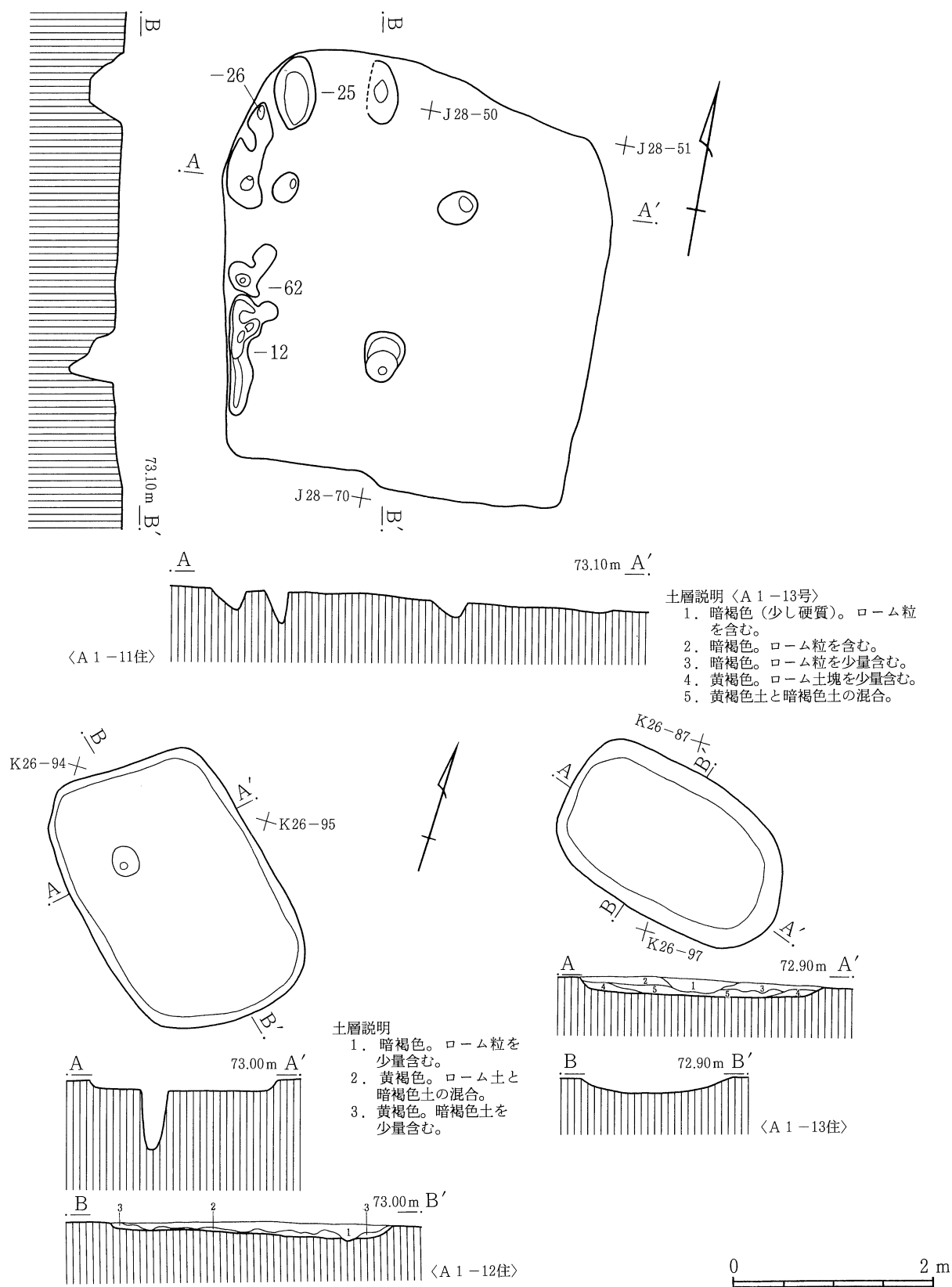
1. 暗褐色。ローム粒を含む。
2. 褐色。ローム粒を多く含む。
3. ロームブロック。



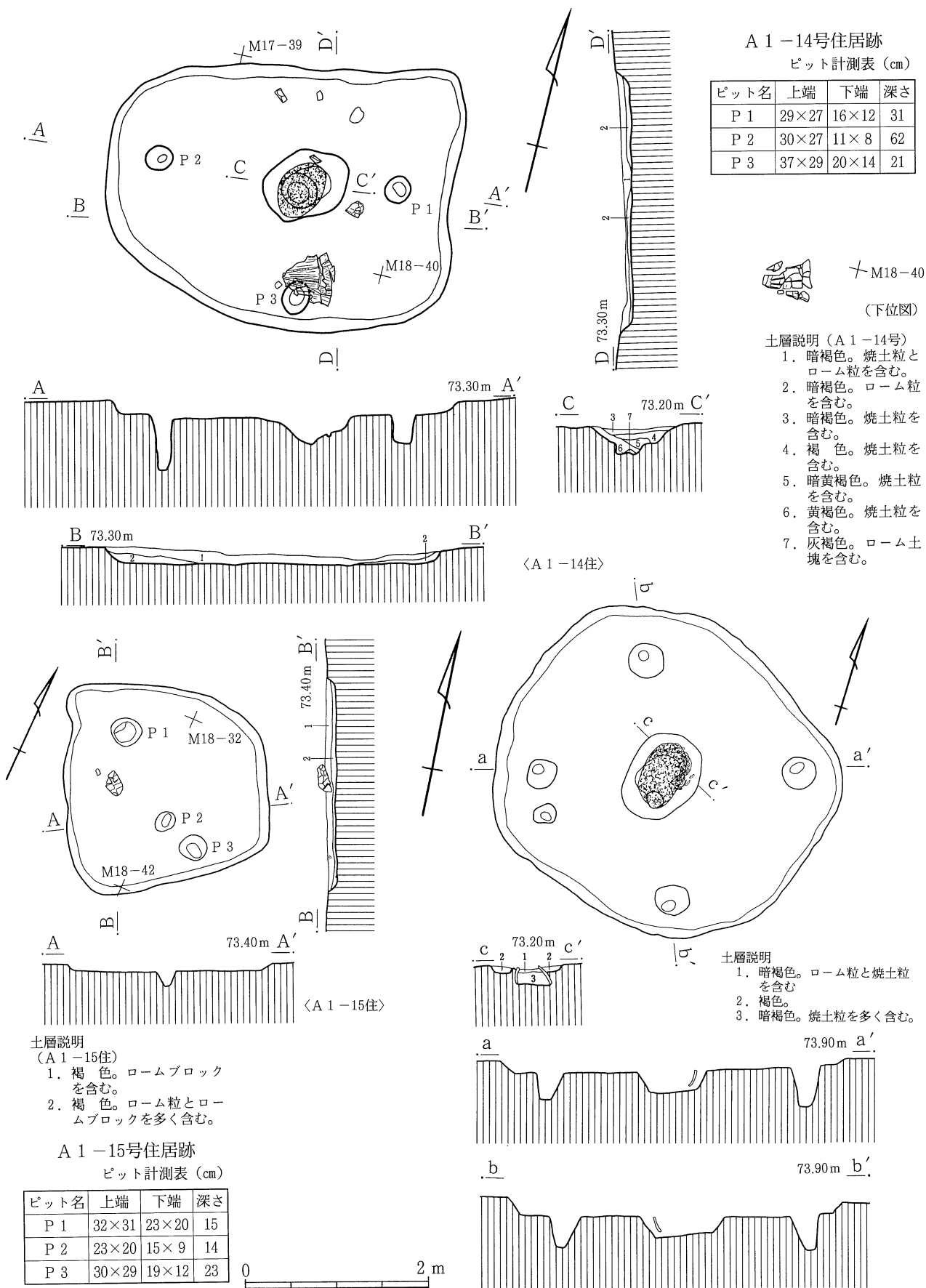
第128図 A 1 - 6、7 号住居跡実測図

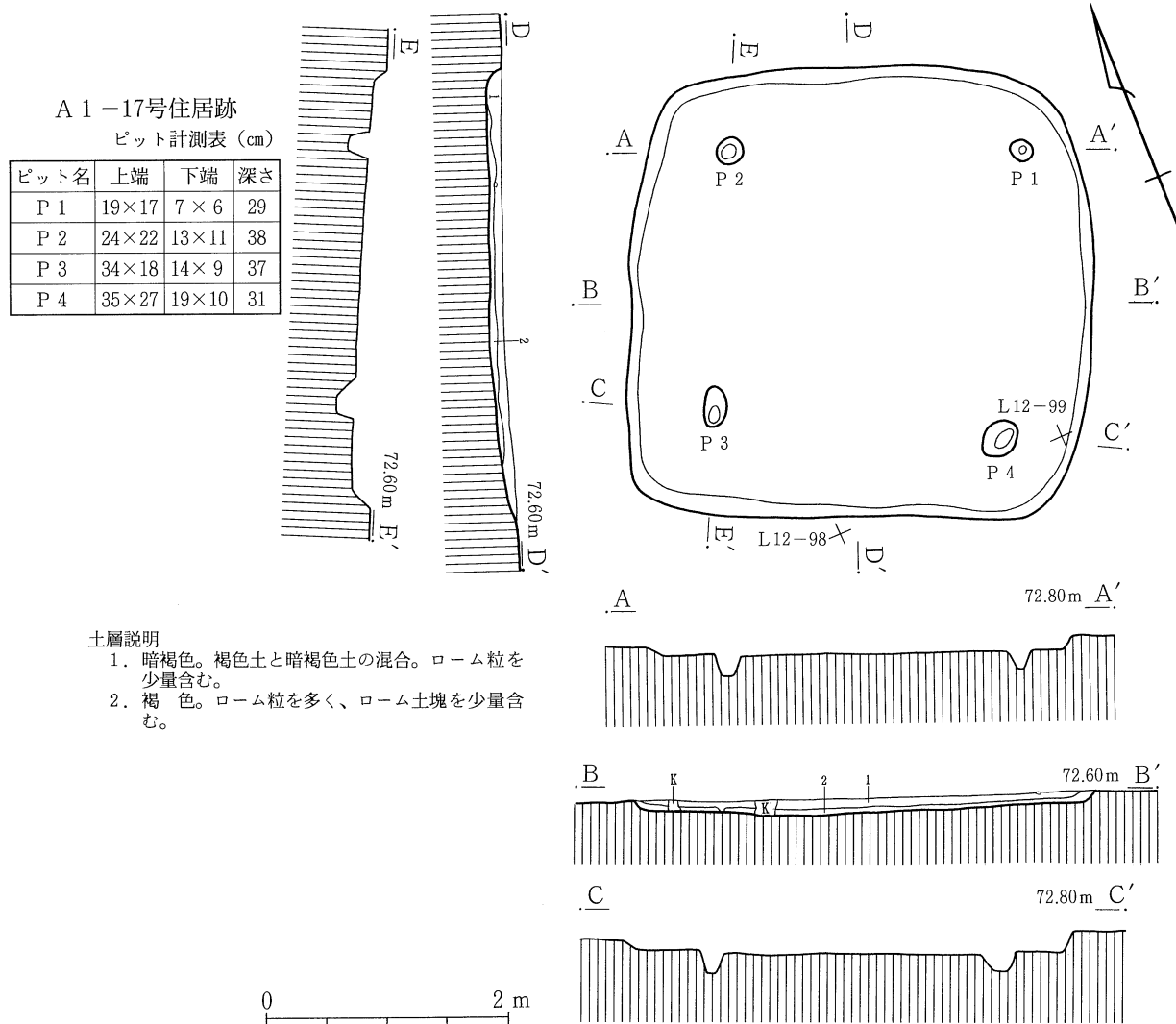


第129図 A 1 - 8 ~ 10 号住居跡実測図



第130図 A1-11~13号住居跡実測図

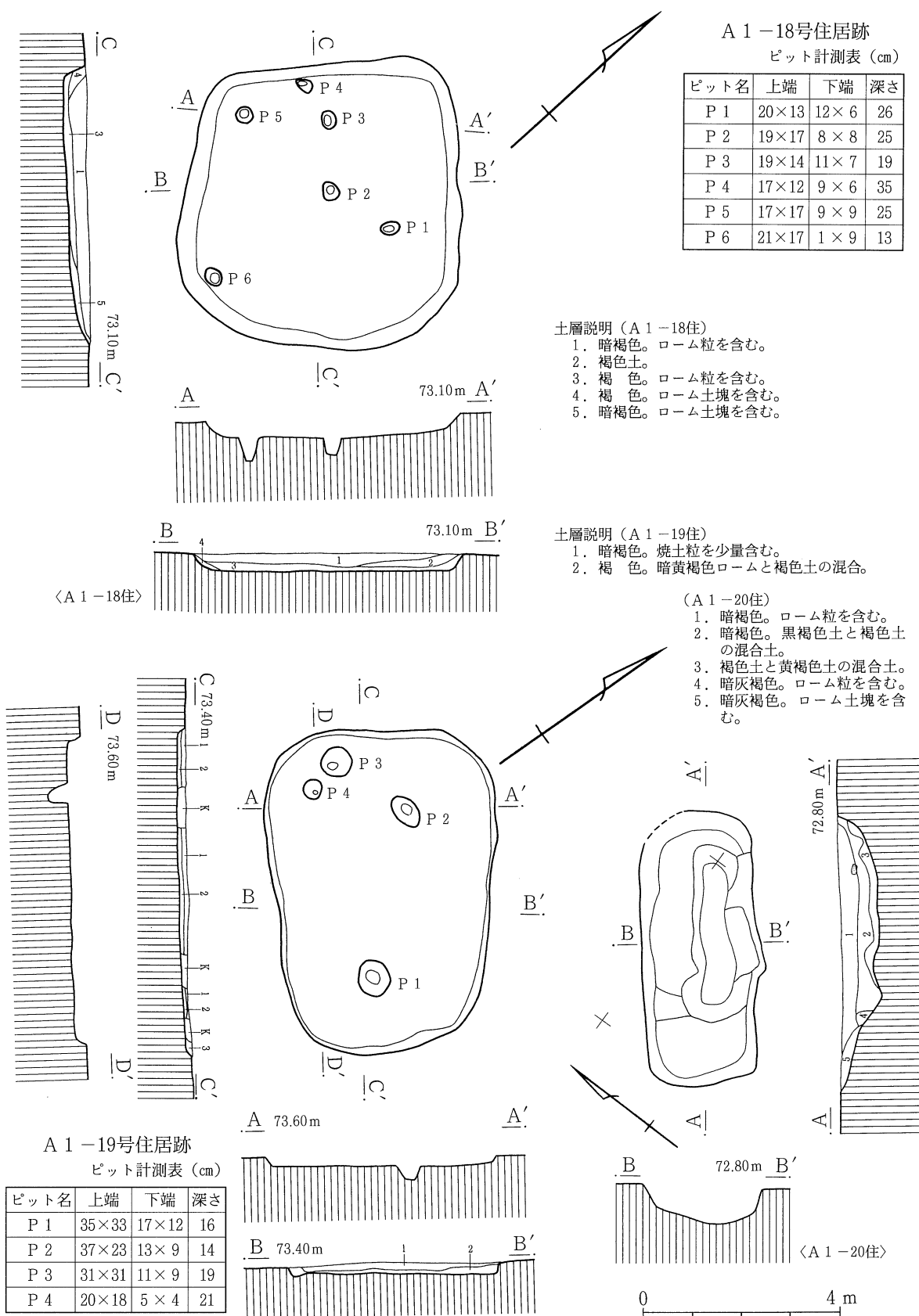




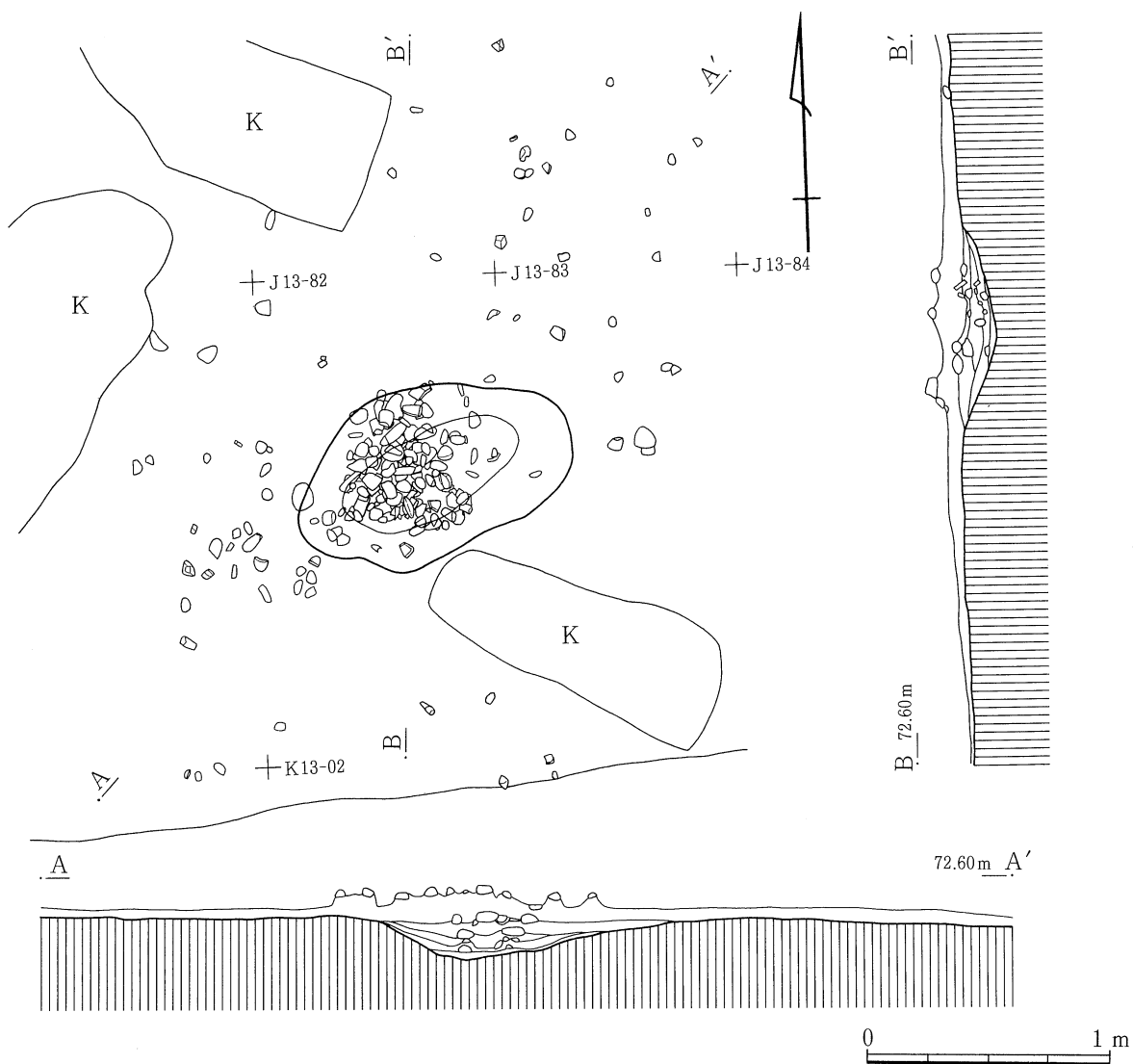
第132図 A 1-17号住居跡実測図

第 8 表 A 1 区住居跡一覧表

番号	土 坑 番 号	挿 図 番 号	旧土坑 番 号	規 模 (cm)			主 軸 方 向	性 格	そ の 他
				上 端	下 端	深 さ			
1	A 1-1	第125図	7	264×243	236×223	35	—	住居	平面形体が円形、踏み床有り。
2	A 1-2	"	66	275×185	227×185	37	N-45°-W	"	小型の方形、焼土有り。
3	A 1-3	"	75	324×189	289×151	32	E-2°-N	"	"
4	A 1-4	第126図	46	583×473	567×453	20	N-47°-W	"	ピット 8 本有り。
5	A 1-5	第127図	58	552×(467)	525×(450)	27	—	"	不整円形、炉跡有り、ピット 17 本。
6	A 1-6	第128図	49	403×281	388×260	15	N-47°-W	"	西側の土坑を切っている。
7	A 1-7	"	76	307×293	293×283	14	N-4°-W	"	胴張り隅円正方形、ピット 2 本。
8	A 1-8	第129図	136	(345)×301	(337)×281	18	N-4°-E	"	長方形、ピット 9 本。
9	A 1-9	"	98	258×231	225×216	18	—	"	円形 ピット 4 本。
10	A 1-10	"	97	244×(233)	219×(206)	16	—	"	円形 ピット 4 本。
11	A 1-11	第130図	72	417×398	—	7	ほぼ真北	"	カマボコ形
12	A 1-12	"	116	285×194	271×177	17	N-46°-W	"	長方形、ピット 1 本。
13	A 1-13	"	115	246×155	216×118	15	E-15°-S	"	"
14	A 1-14	第131図	124	377×286	355×268	14	W-3°-S	"	台形、炉跡有り、深鉢出土。
15	A 1-15	"	125	223×215	215×205	13	E-25°-N	"	" ピット 3 本。
16	A 1-16	"	121	360×330	343×312	18	E-21°-S	"	長円形、ピット 1 本。
17	A 1-17	第132図	135	385×375	368×359	17	N-23°-E	"	方形、ピット 4 本。
18	A 1-18	第133図	133	295×280	273×242	24	N-43°-W	"	"、ピット 6 本。
19	A 1-19	"	137	328×234	310×220	14	W-33°-N	"	長方形" 4 本。
20	A 1-20	"	99	281×126	254×107	39	E-38°-N	"	" 少し凸凹がある。



第133図 A 1-18~20号住居跡実測図



第134図 A 1 - 1 号集石遺構実測図

3号が第163図30、A 1 - 4号が第161図10、A 1 - 5号が第162図2～17、A 1 - 6号が第161図14、A 1 - 7号が第163図31、A 1 - 9号が第164図6、A 1 - 11号が第163図26、A 1 - 14号が第165図2～6、第168図1、第169図9、A 1 - 15号が第159図2、第165図1、第167図2～5、A 1 - 16号が第164図20～22、第166図、A 1 - 20号が第164図7である。土器以外の遺物は、A 1 - 5号より軽石製の浮子（第162図17、第14表65）、A 1 - 2号より磨石（第163図45、第14表67）、A 1 - 14号より土器錘（第165図6）で長さ6.4cm、幅4.5cm、厚さ2.3cmを計る。また第169図9は土製のソロバン玉で平面が正六角形を呈し、径2.3cm、厚さ1.9cm中央の穿孔の径は4mmを計る。

また、A 1 - 20号より（第169図4、第14表71）敲石、A 1 - 16号より（第169図6、第14表73）打製石斧が各々出土している。

A 1 - 1号集石遺構（第134図）は調査地区の北西側A 1 - 1号溝状遺構の北側に位置し、A 1 - 59号土坑の南東側に隣接する。グリッドではJ13-82付近である。形態は中央に長円形の土坑をもち、その内部及び周辺1～2m四方に礫が散乱する。礫は土坑覆土内では上部から下位まで存在し、地山

第9表 A1区土坑一覧表(1)

() は推定値

番号	土坑番号	挿図番号	旧土坑番号	規模 (cm)			主軸方向	性格	その他
				上端	下端	深さ			
1	A1-1	第135図	3	88×61	75×50	40	N-39°-E		長方形
2	A1-2	"	4	83×80	59×43	32	—		円形、A1-1号に隣接する。
3	A1-3	"	5	136×69	118×63	41	W-14°-N		長方形
4	A1-4	"	8	202×171	167×127	54	—		不整形円形、底部に凸凹有り。
5	A1-5	"	36	85×83	73×71	28	—		円形、貝を含む。第153図も参照。
6	A1-6	"	37	96×84	83×73	25	—		円形、"。
7	A1-7	第137図	47	273×83	297×31	121	N-39°-E	陥穴	底部両端がオーバーハングする。
8	A1-8	"	48	199×151	—	52	—		ハート形、2基の土坑の重複の可能性有り。
9	A1-9	第138図	50	184×137	104×74	19	E-13°-S		不整形円形
10	A1-10	"	51	285×128	—	42	N-48°-E		
11	A1-11	"	52	267×225	224×102	39	N-9°-E		
12	A1-12	"	60	222×222	172×122	41	—		不整形円形
13	A1-13	第139図	62	225×93	227×38	160	N-17°-E	陥穴	立ち上がりの中程がオーバーハングする。
14	A1-14	"	63	101×91	79×73	17	—		円形、小礫を多く含む。
15	A1-15	"	67	373×91	197×16	167	N-21°-E	陥穴	長円形
16	A1-16	"	71	109×97	80×53	19	—		不整形円形、覆土に焼土を含む。
17	A1-17	"	69	127×120	97×96	17	—		"
18	A1-18	"	70	154×144	127×104	15	—	炉穴?	" 焼土有り。
19	A1-19	第140図	59	145×110	80×78	52	W-31°-N	陥穴	底部中央にビット有り、方形。
20	A1-20	"	59	127×75	—	15	W-24°-N		
21	A1-21	"	74	123×89	112×78	22	E-33°-N	基坑?	方形、骨粉を含む。
22	A1-22	"	73	249×143	226×73	20	N-48°-E		ビット1本有り。
23	A1-23	"	77	110×91	65×49	22	E-27°-N		円形
24	A1-24	"	78	196×158	—	32	N-33°-W		
25	A1-25	第141図	79	168×108	113×49	135	N-38°-E	陥穴	底部は長方形。
26	A1-26	"	85	158×107	—	29	—		
27	A1-27	"	86	153×127	104×93	42	—		円形
28	A1-28	"	88	151×94	122×—	21	W-9°-N		底部に凹凸有り。
29	A1-29	"	87	231×146	189×111	43	E-24°-N		"。
30	A1-30	"	96	204×131	115×61	21	N-45°-E		
31	A1-31	第142図	101	295×206	—	34	N-31°-E		
32	A1-32	"	(101)	260×135	227×107	23	N-39°-E		
33	A1-33	"	100	158×111	79×47	38	—		長円形
34	A1-34	"	102	271×111	—	40	E-15°-N		
35	A1-35	"	103	169×129	142×101	27	N-25°-W		長方形
36	A1-36	第143図	104	150×96	122×63	28	N-35°-E		長円形
37	A1-37	"	105	160×78	140×33	15	W-7°-N		
38	A1-38	"	106	123×97	71×42	18	—		不整形円形
39	A1-39	"	107	139×105	108×68	21	N-39°-E		
40	A1-40	"	108	113×85	77×57	24	W-35°-N		
41	A1-41	"	109	209×104	168×44	24	N-43°-E		
42	A1-42	"	110	143×105	122×85	16	N-22°-E		集石有り。
43	A1-43	第144図	112	289×117	223×41	173	N-26°-W	陥穴	長円形
44	A1-44	"	113	175×111	—	35	E-15°-S		
45	A1-45	"	114	305×189	267×158	32	W-16°-N		底部凹凸有り、長円形。
46	A1-46	"	117	165×160	147×117	15	E-10°-N		
47	A1-47	第145図	118	214×131	130×61	43	N-35°-W		
48	A1-48	"	119	135×115	75×61	33	—		不整形円形
49	A1-49	"	120	103×84	75×60	18	—		" A1-48号に隣接する。
50	A1-50	"	122	205×98	185×74	29	N-10°-E	墓坑	方形、骨粉有り。
51	A1-51	"	123	157×73	129×48	18	N-8°-E		"
52	A1-52	"	126	237×145	195×107	23	N-28°-W		底部にビット2本有り、長円形。
53	A1-53	第146図	128	107×105	77×73	12	—		不整形円形
54	A1-54	"	139	150×101	109×53	24	—		"、底部にビット2本有り。
55	A1-55	"	140	159×148	53×49	30	—		"、落ち込みが2段。
56	A1-56	"	141	143×104	130×69	20	W-17°-S		"、少し長円形。
57	A1-57	"	142	118×99	68×53	32	—		"
58	A1-58	"	130	84×69	—	59	—		底部に凹凸有り、不整形円形。
59	A1-59	"	138	160×134	114×79	24	ほぼ真北		不整形長円形、木炭と灰を含む。
60	A1-60	"	134	123×109	73×64	19	—		不整形円形
61	A1-61	第147図	(142)	174×140	93×82	41	—		"
62	A1-62	"	143	228×87	217×59	19	N-43°-E		長円形、底部に小ビット2本有り。
63	A1-63	"	144	127×95	109×67	23	E-12°-N		"
64	A1-64	"	146	235×137	188×105	25	E-3°-S		底部に小ビット3本有り。
65	A1-65	"	147	129×68	114×44	25	N-25°-W		
66	A1-66	"	156	146×104	121×67	14	E-23°-N		底部にビット1本有り。
67	A1-67	第148図	148	127×110	108×91	28	—		不整形円形

第10表 A1区土坑一覧表(2)

() は推定値

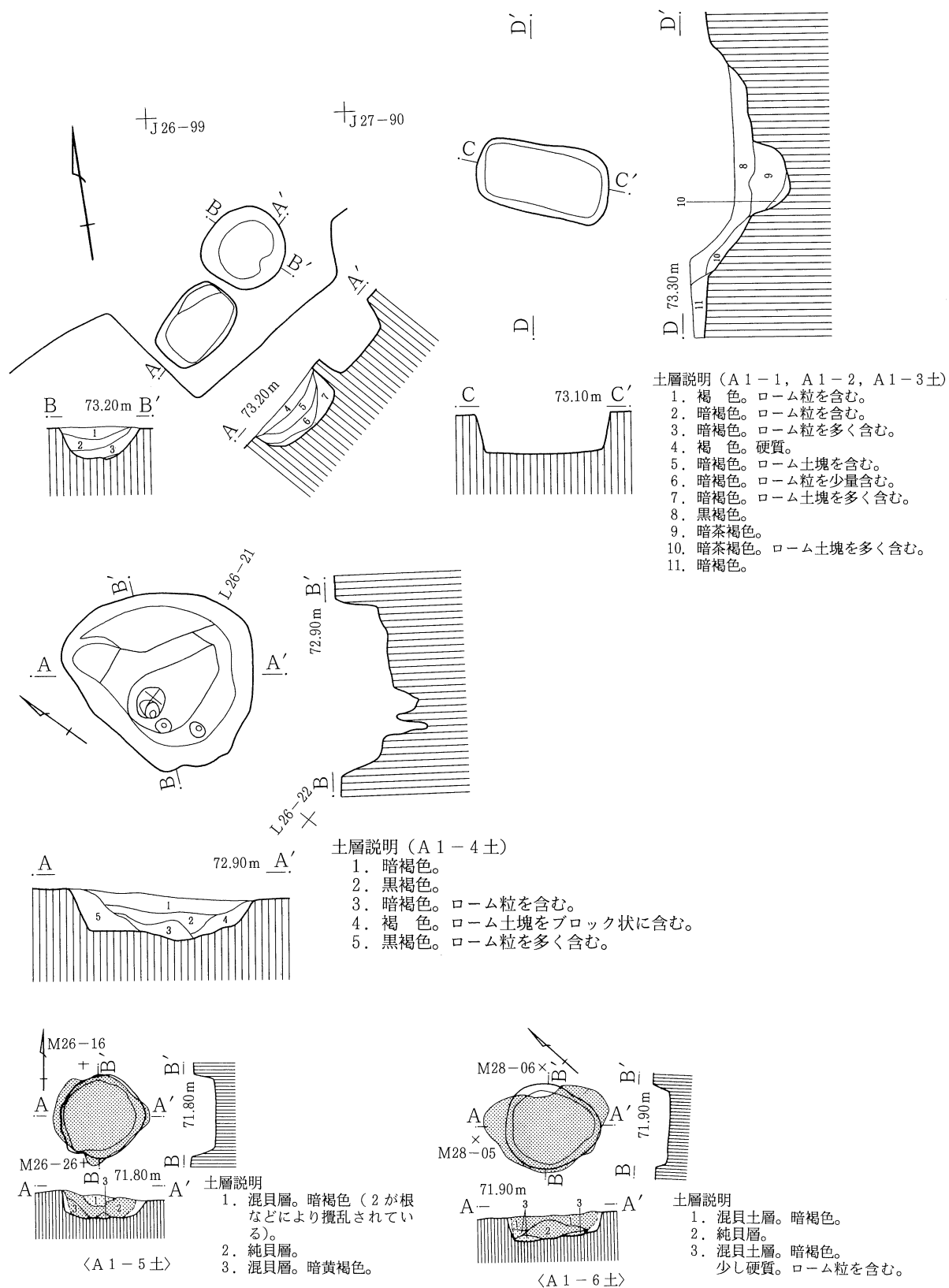
番号	土 坑 番 号	挿 図 番 号	旧土坑 番 号	規 模 (cm)			主 軸 方 向	性 格	そ の 他
				上 端	下 端	深 さ			
68	A 1-68	第148図	148	264×194	236×151	34	—		A 1-67と隣接。
69	A 1-69	"	149	373×166	321×127	41	N-10°-E		
70	A 1-70	"	151	249×145	197×104	27	N-38°-E		
71	A 1-71	"	155	207×98	161×65	27	W-28°-N		
72	A 1-72	第149図	158	162×126	132×107	33	—		
73	A 1-73	"	159	156×137	118×43	37	—		
74	A 1-74	"	157	150×135	111×92	29	—		不整円形
75	A 1-75	"	160	157×135	111×97	23	—		"
76	A 1-76	"	161	438×154	377×119	32	N-33°-E		不整長円形
77	A 1-77	第150図	162	338×143	285×83	24	N-37°-E		"
78	A 1-78	"	163	164×78	137×40	31	N-49°-E		"。炭を含む。
79	A 1-79	"	164	318×207	230×168	16	—		
80	A 1-80	"	166	193×117	156×88	28	ほぼ真北		不整長円形
81	A 1-81	"	165	166×90	141×67	(27)	N-12°-E		"、底部北側に攪乱が入る。
82	A 1-82	第151図	167	243×128	182×87	36	E-22°-N		"、
83	A 1-83	"	168	246×99	212×58	20	N-13°-E		"、
84	A 1-84	"	170	120×107	103×87	17	ほぼ東西		不整円形、底部にピット1本有り。
85	A 1-85	"	171	247×146	203×100	22	E-5°-N		不整長円形
86	A 1-86	"	173	330×217	292×—	21	N-37°-E		"
87	A 1-87	第152図	111	304×223	288×203	27	E-10°-N	住居?	竪穴状(台形)、ピット4本有り。
88	A 1-88	"	172	292×100	260×77	33	N-38°-E		長円形
89	A 1-89	"	174	296×197	260×145	33	N-37°-E		
90	A 1-90	"	175	118×103	67×63	80	—		円形

に密着して出土していない。またすべて焼礫である。土坑の規模は上端長径1.18m、短径0.71m、下端長径0.78m、短径0.34m、深さ17cmを測る。主軸方向はE-22°-Nを示す。周辺にはピット等他の落ち込みは検出されていない。出土遺物は、第160図3～7で3～4は撚糸文系の土器片、3は口縁部で縦位の撚糸文が施され、撚糸間は密で帯状であり他は無文となる。4も同様の胴部片、5はやや粗い縦位の撚糸文である。3、4は早期前半の稲荷台式、5は夏島式であろうか。6、7は敲石で(第14表63、64)両者とも欠損している。また両面と側面とも敲打部分が認められる。

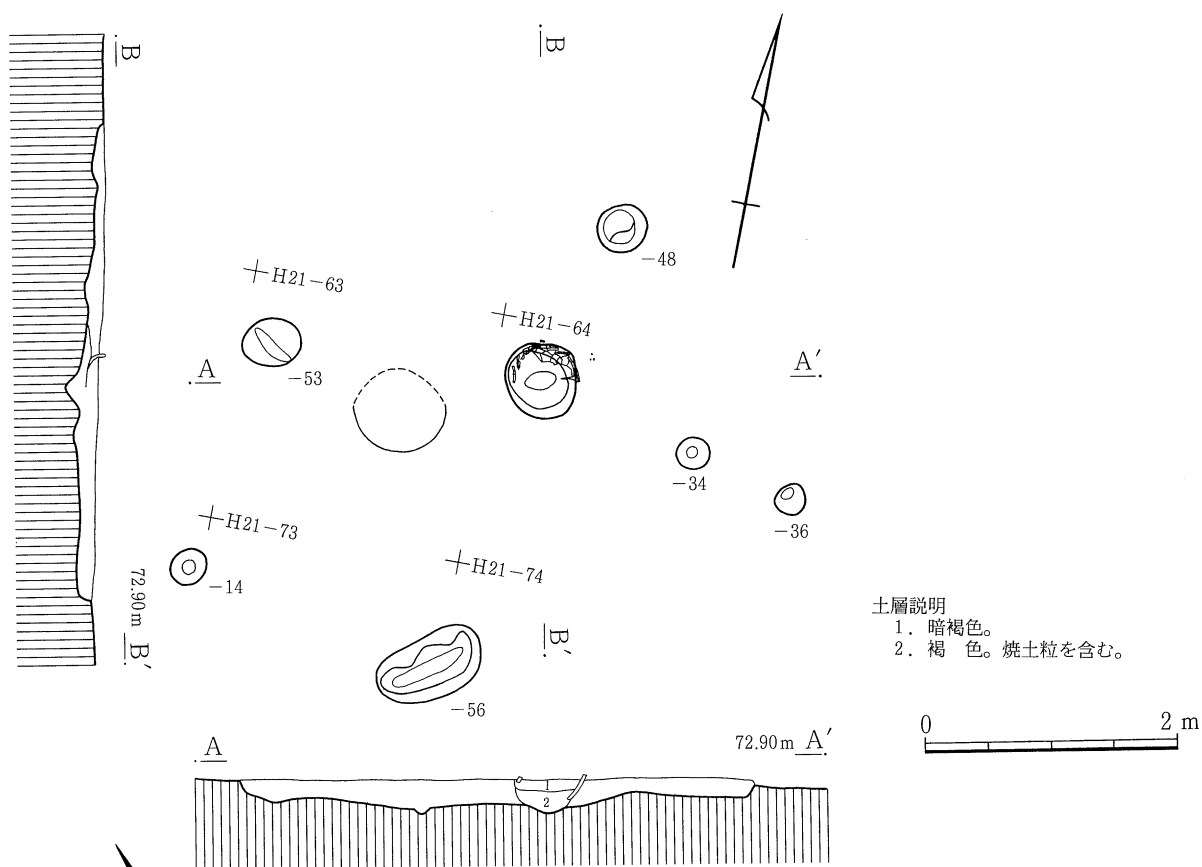
土坑は(第9、10表)調査地区内の中央から北西側と北東側に集中する。各地区とも炉穴や竪穴住居跡が密集する地域であり、それらとの関連性が注目される場所である。土坑のうち6基(A 1-7号、A 1-13号、A 1-15号、A 1-19号、A 1-25号、A 1-43号)が陥穴とみられ、A 1-21号とA 1-50号が骨粉を含み墓坑の可能性がある。また、A 1-18号は底部に焼土をもち炉穴群の可能性がある。さらにA 1-87号は平面形体が台形の竪穴状を呈し、竪穴住居跡の可能性もある。A 1-5号と6号は直径1m弱の円形で内部に貝層を含む(P152～156ページで詳細を忍澤氏が解説)。この土坑の所在する場所は調査区東端部で、東側の谷を望む縁辺部にあたる。

第136図はA 1-1号埋甕遺構である。調査地区の中央付近、A 1-15号方形区画墓の南隣りに位置する。埋甕は円形の土坑(ピット)に埋まっており、その周囲約2mにピットが6本存在するが関連性は不明である。焼土や床面と思われる部分も認められない。土坑の大きさは上端長径62cm、短径58cm、下端長径26cm、短径15cm、深さ13cmを計る。土層セクションでは周囲が竪穴状に落ち込んでいたが掘り上げるとあまり凹凸の差がみられなかった。出土遺物は第159図1の深鉢の胴下部とみられる破片と第160図1と2の浅鉢片である。いずれも中期後半加曽利E式の範疇とみられる。当遺構は住居跡の残欠と考えられる。

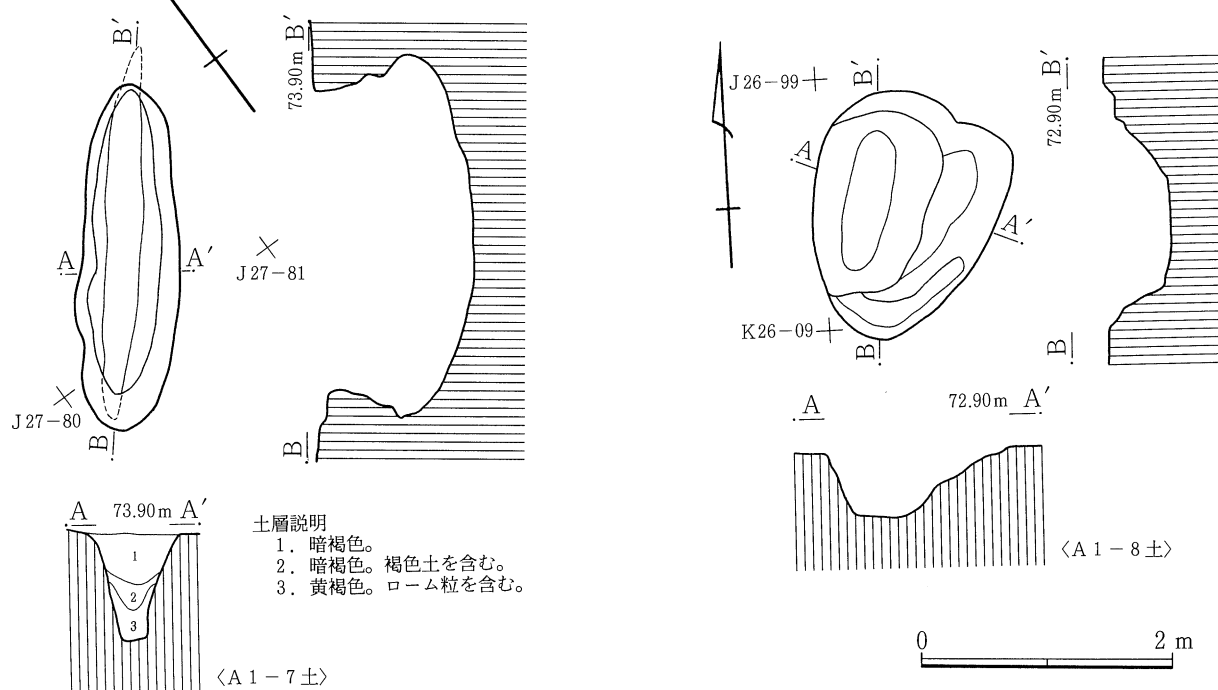
この他の土坑からの出土遺物は、A 1-6号より磨石(第165図7)、A 1-7号が第161図11、12で中期、A 1-8号が第161図13で田戸式、A 1-9号(第161図15)と10号(第161図16～24)、11号(第161図25～31、第162図1)、12号(第162図18)、13号(第162図19～21)、14号(第163図1～7)



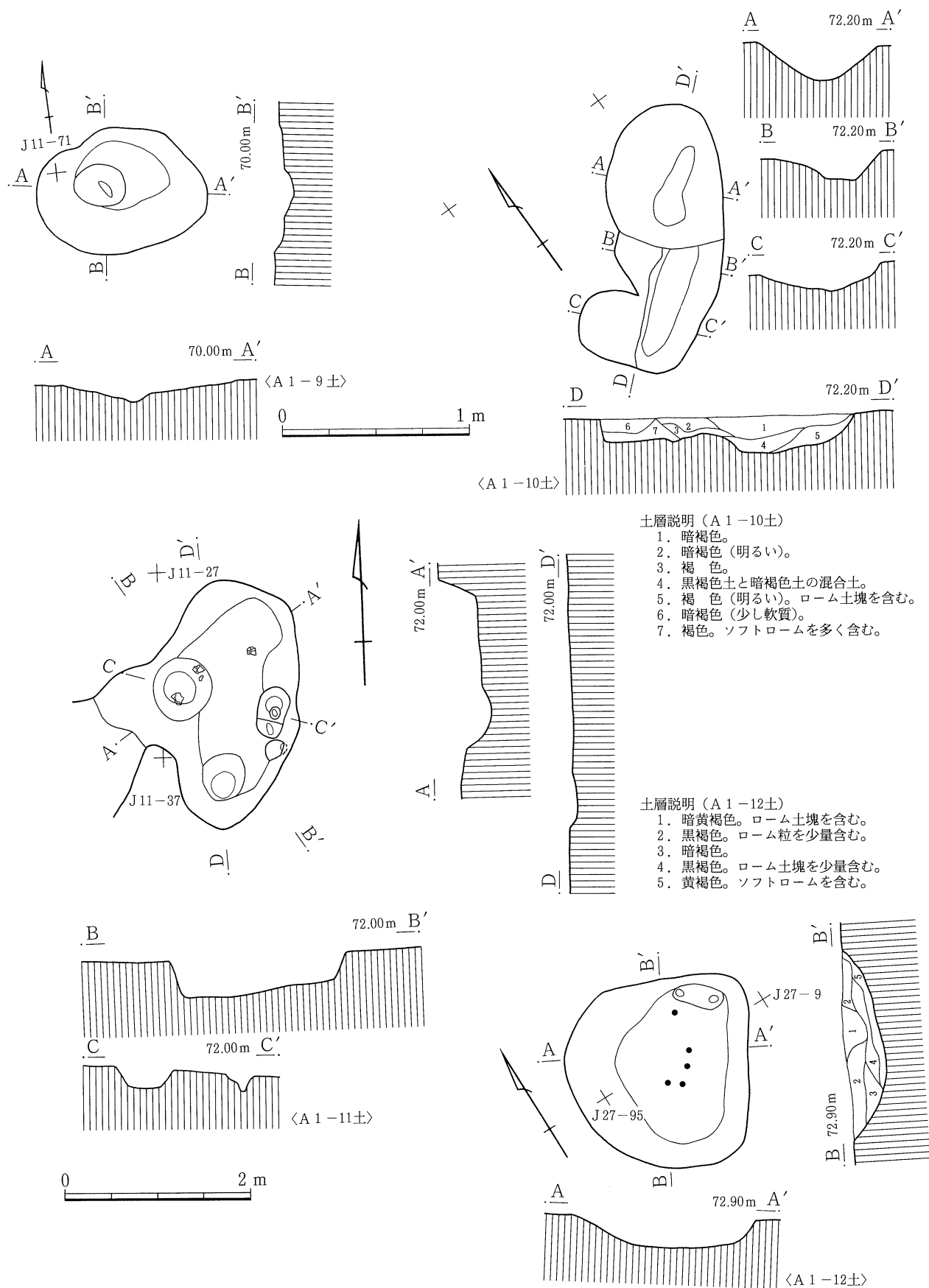
第135図 A 1-1~6号土坑実測図



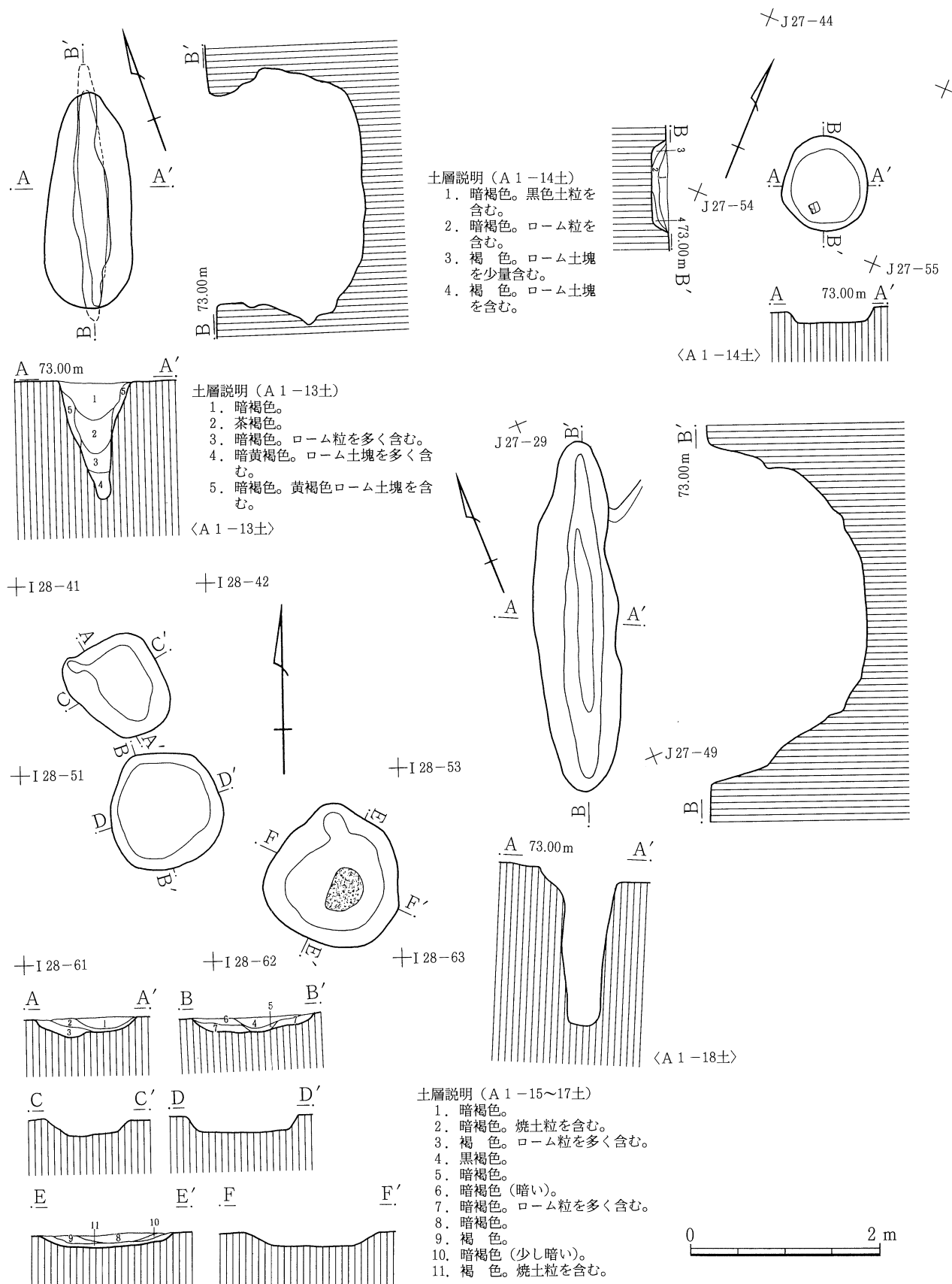
第136図 A 1 - 1号埋甕遺構実測図

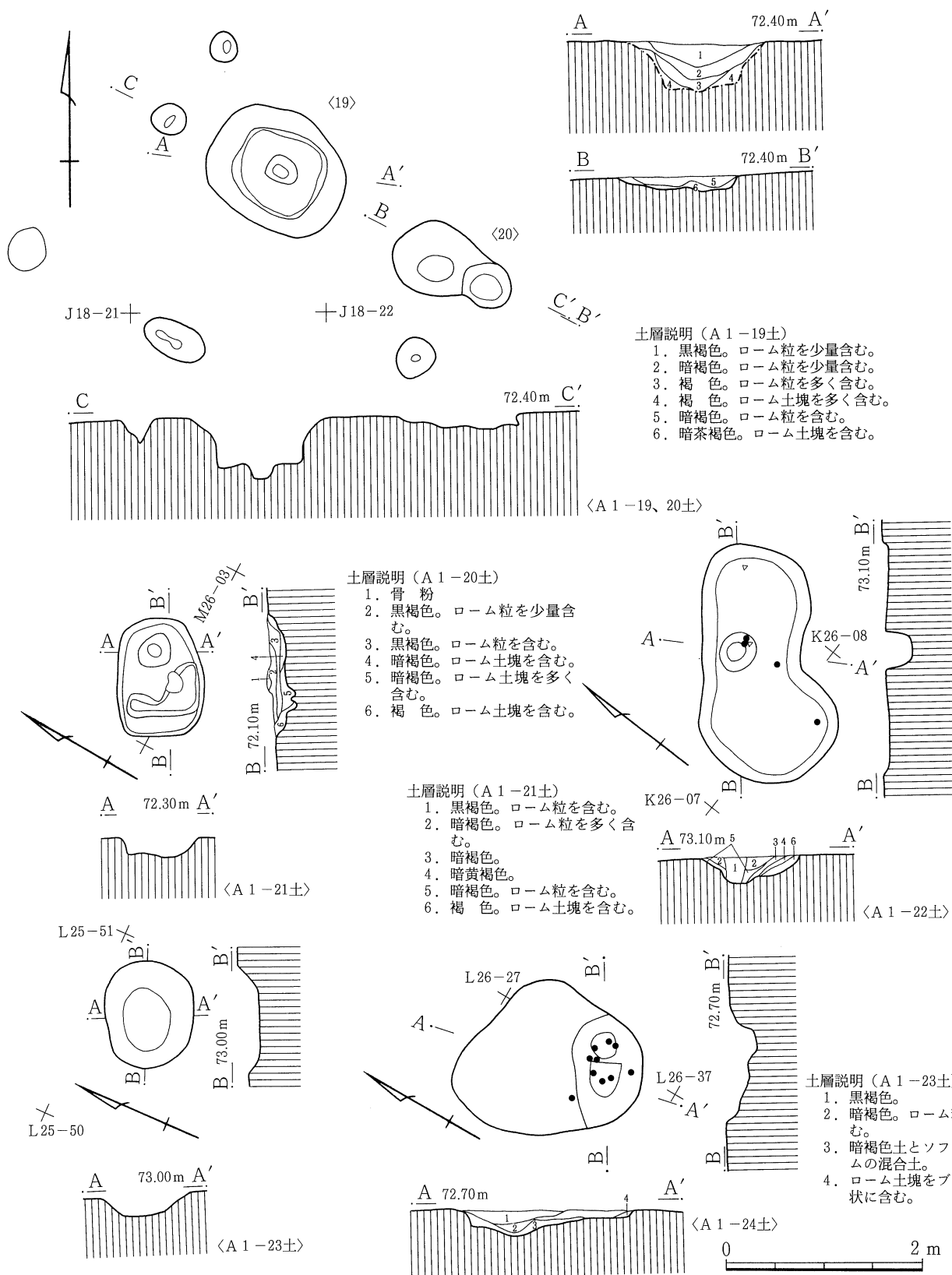


第137図 A 1 - 7、8号土坑実測図

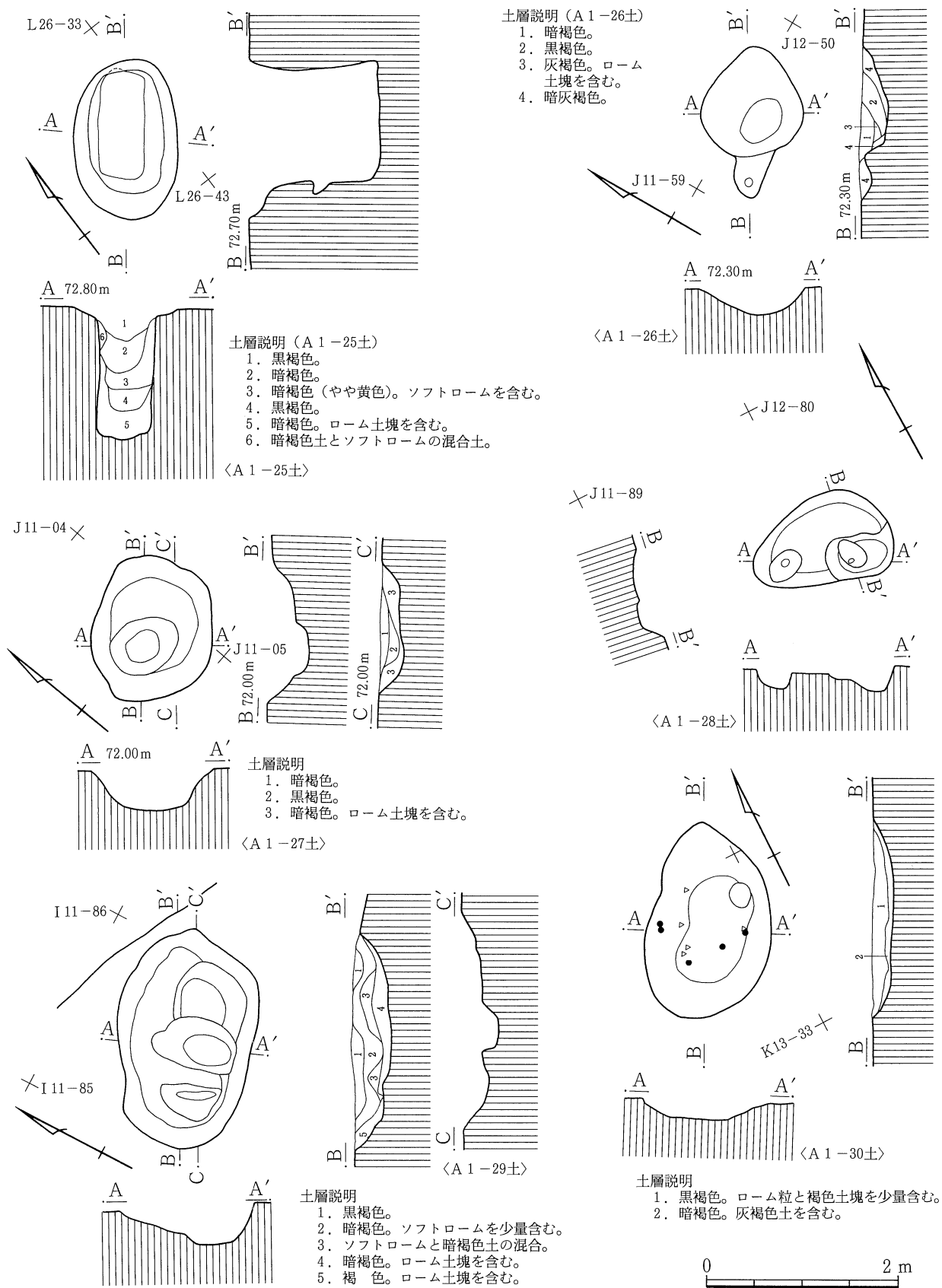


第138図 A1-9~12号土坑実測図

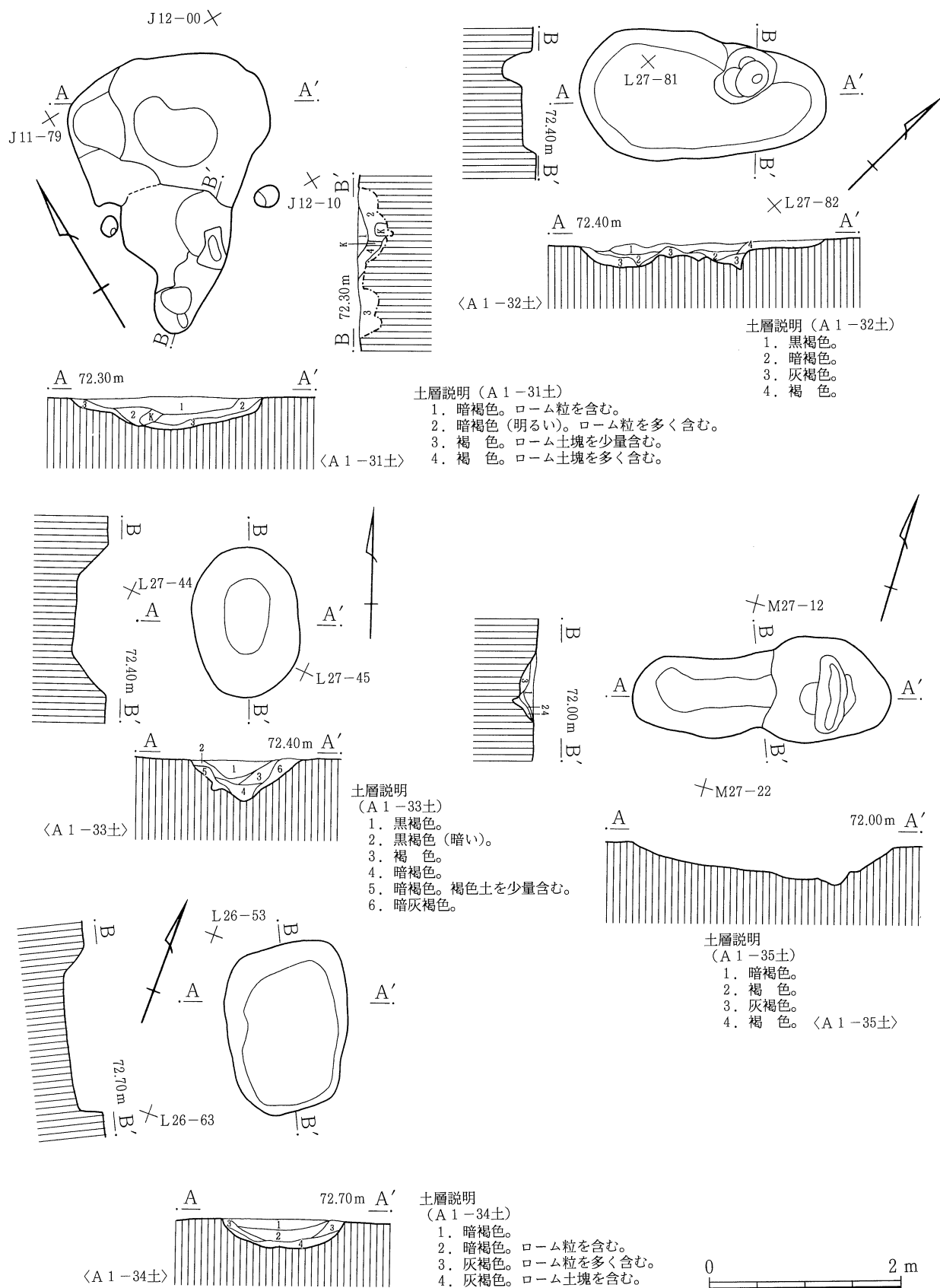




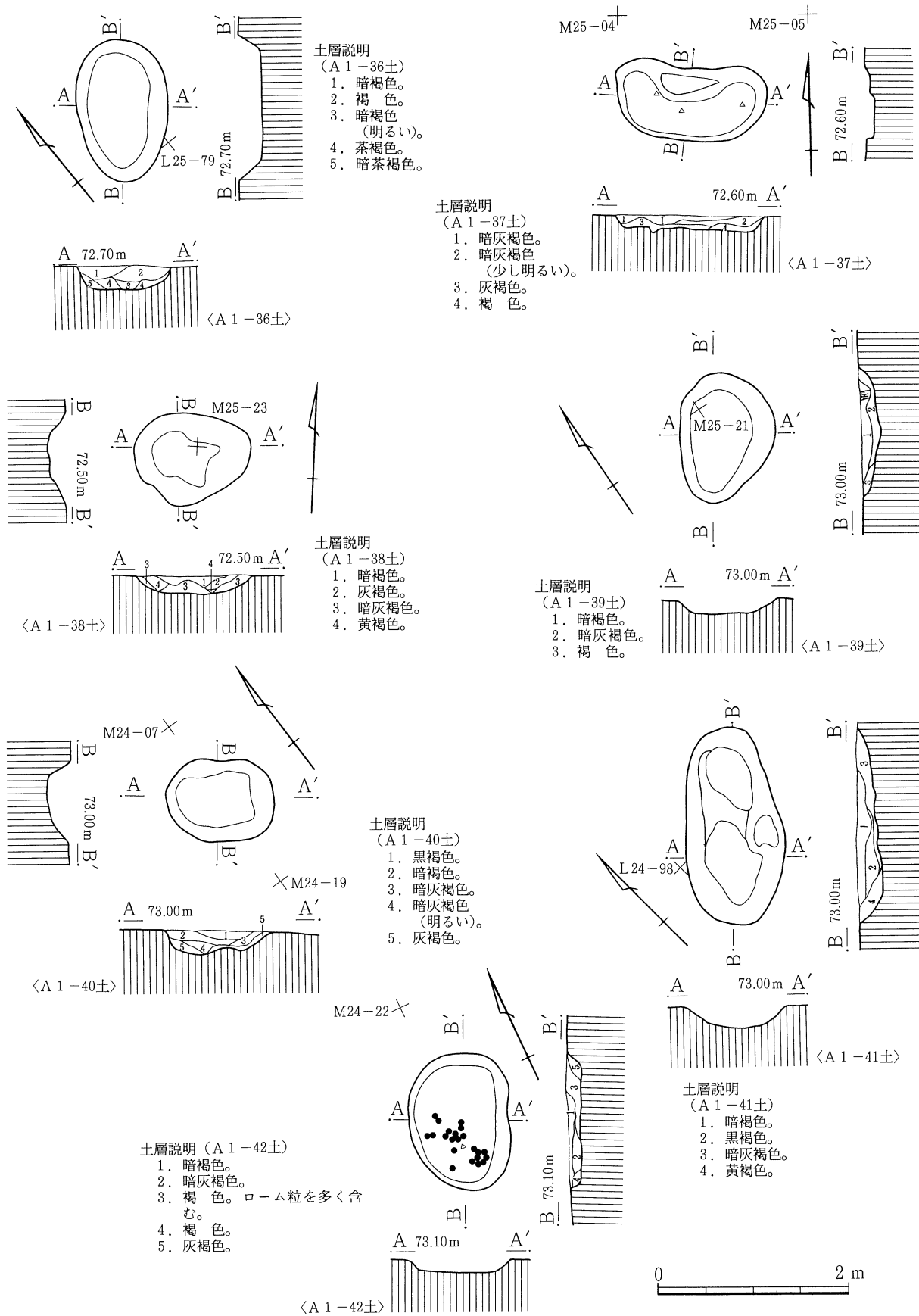
第140図 A 1-19~24号土坑実測図

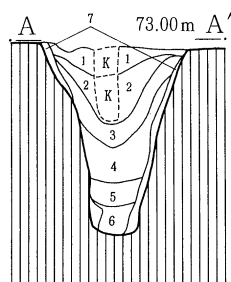
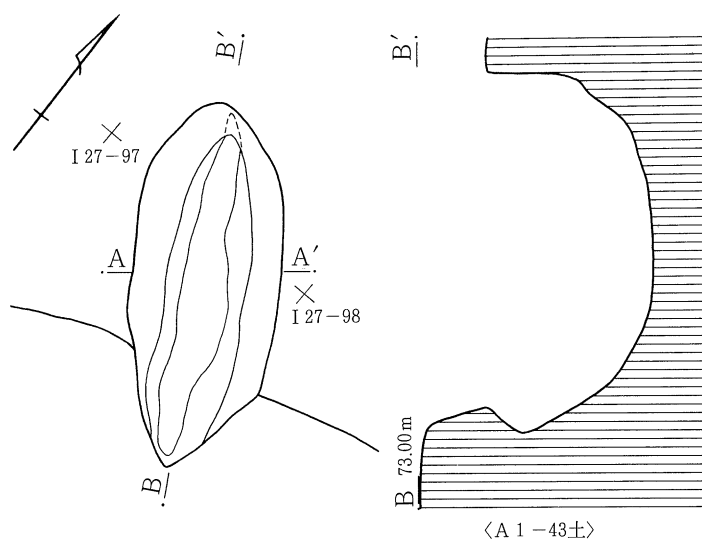


第141図 A 1-25~30号土坑実測図



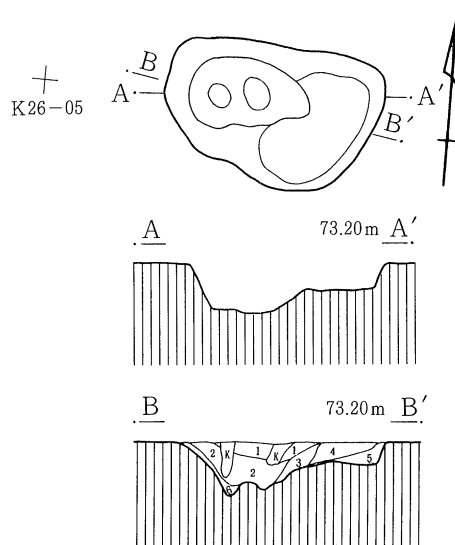
第142図 A1-31~35号土坑実測図





土層説明 (A 1-43土)

1. 黒褐色。
2. 茶褐色。
3. 灰褐色。ローム粒を多く含む。
4. 黄褐色。ローム土塊を含む。
5. 暗褐色。ローム土塊を多く含む。
6. ローム土塊をブロック状に含む。
7. 褐色。ローム土塊を含む。

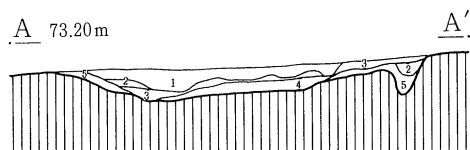
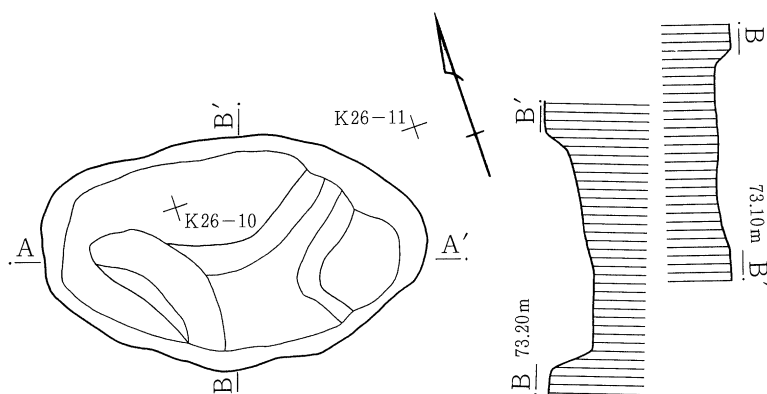


土層説明

(A 1-44土)

1. 暗褐色 (暗い)。
2. 褐色。
3. 暗褐色 (明るい)。
4. 暗褐色。
5. 灰褐色。
6. 黄褐色。ローム土塊を多く含む。

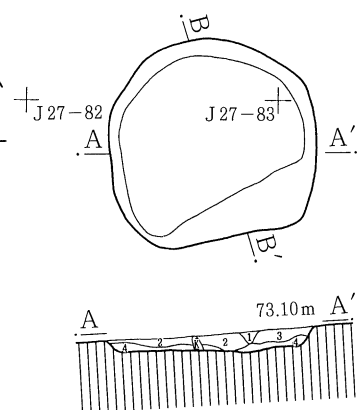
<A 1-44土>



土層説明 (A 1-45土)

1. 黒褐色。
2. 褐色。
3. 灰褐色。
4. 灰褐色土とローム土の混合土。
5. 褐色。ローム土塊を含む。

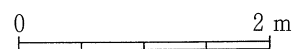
<A 1-45土>



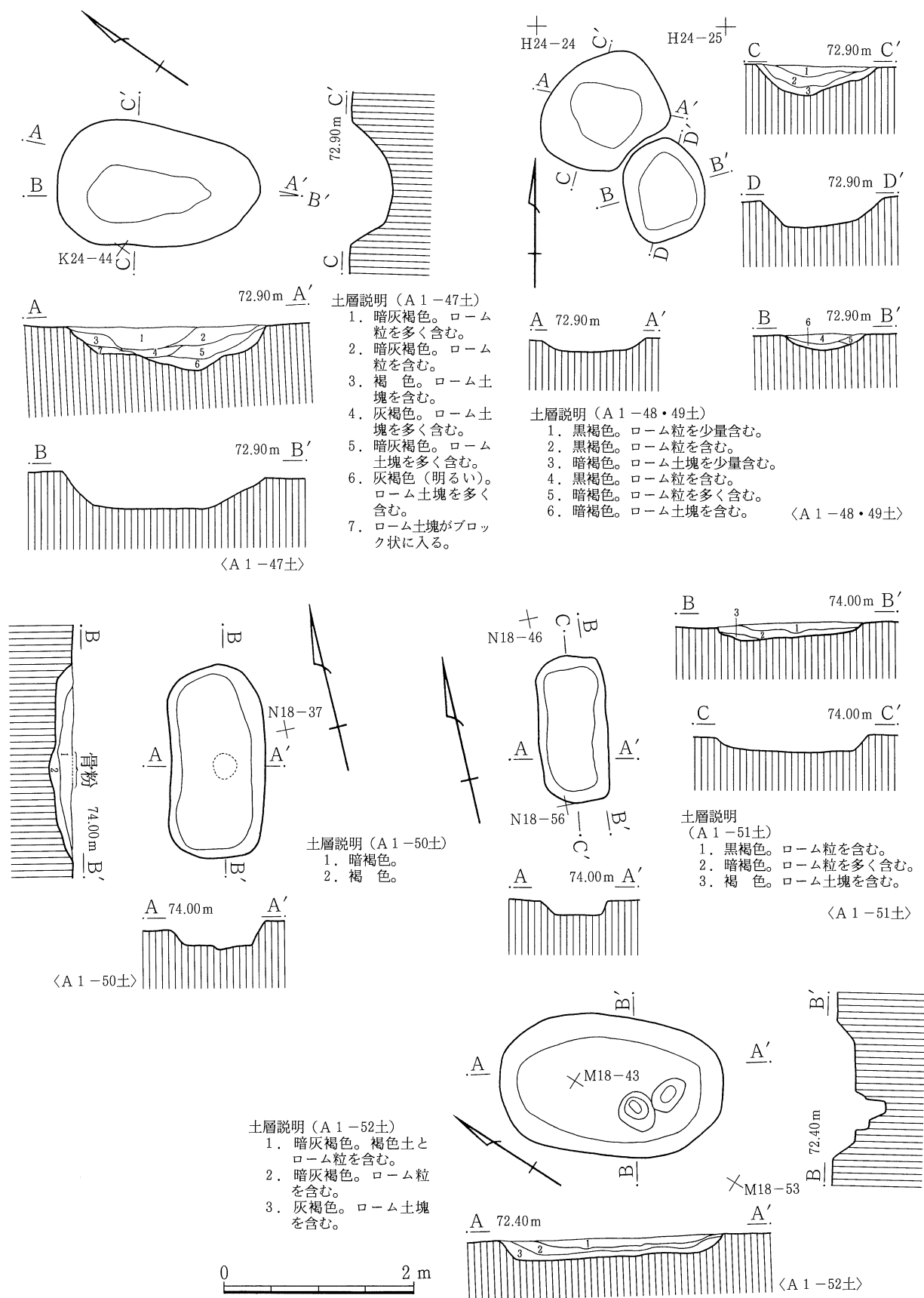
土層説明 (A 1-46土)

1. 黒褐色。
2. 暗褐色。
3. 灰褐色。
4. 褐色。

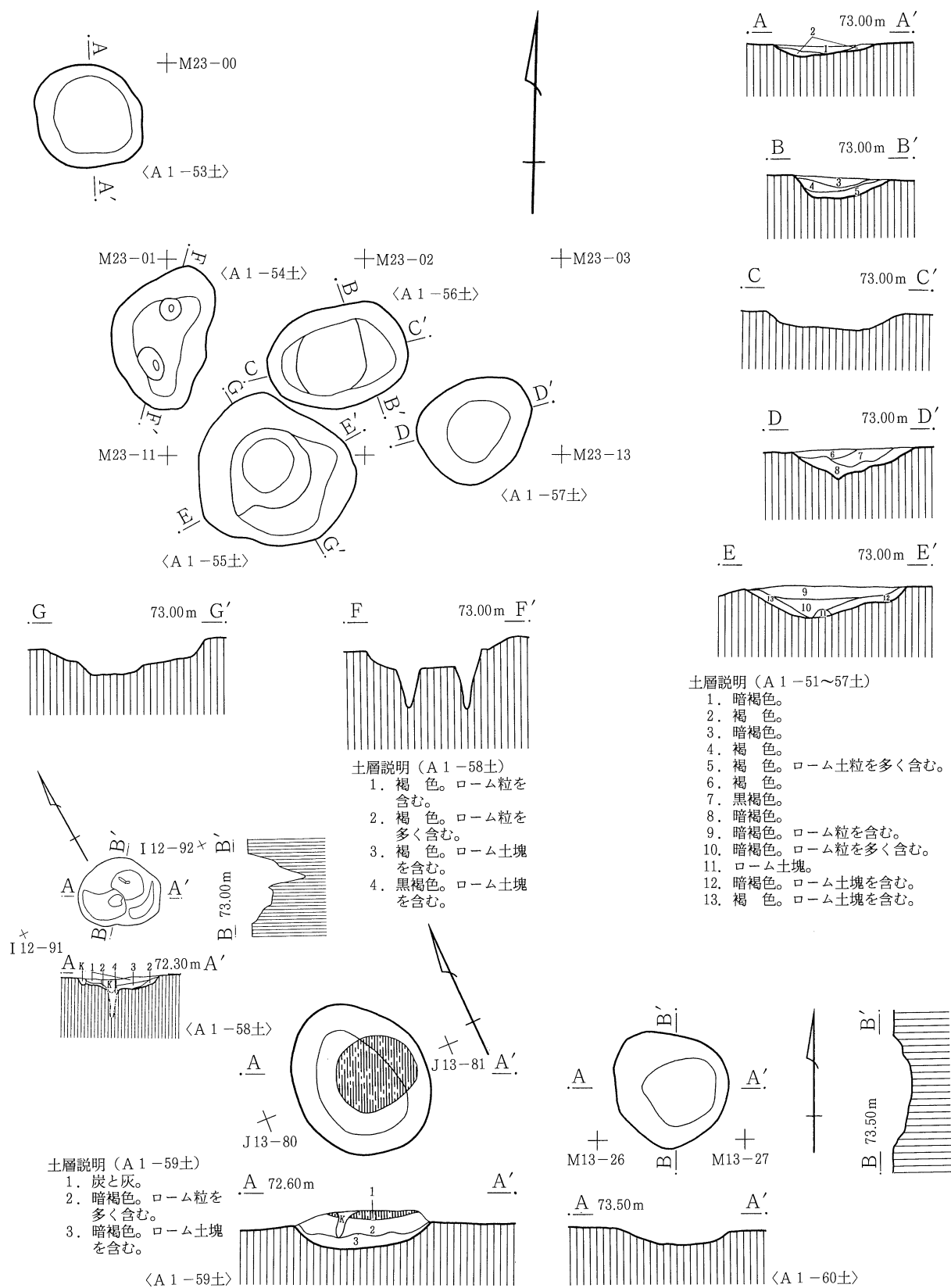
<A 1-46土>



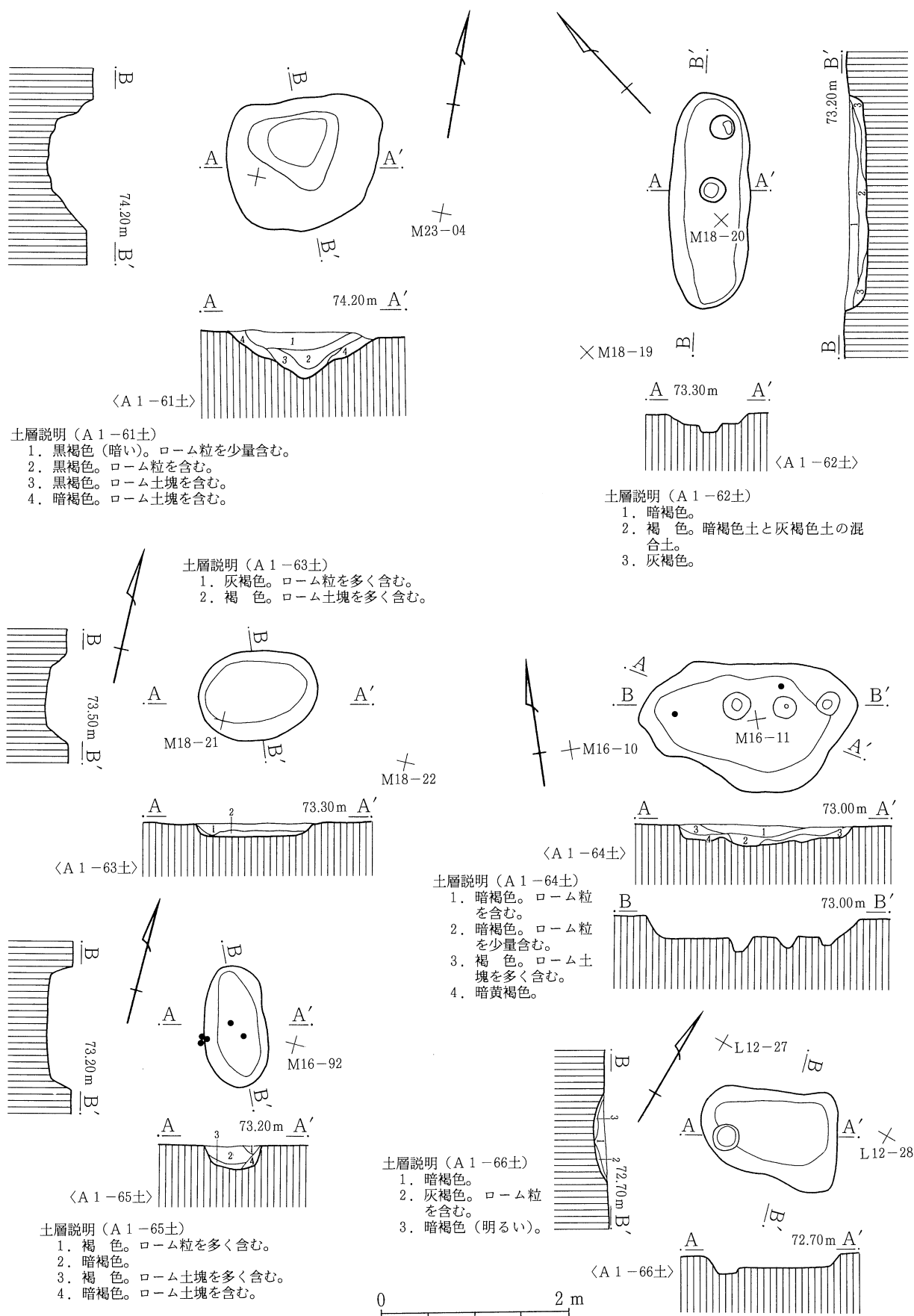
第144図 A 1-43~46号土坑実測図



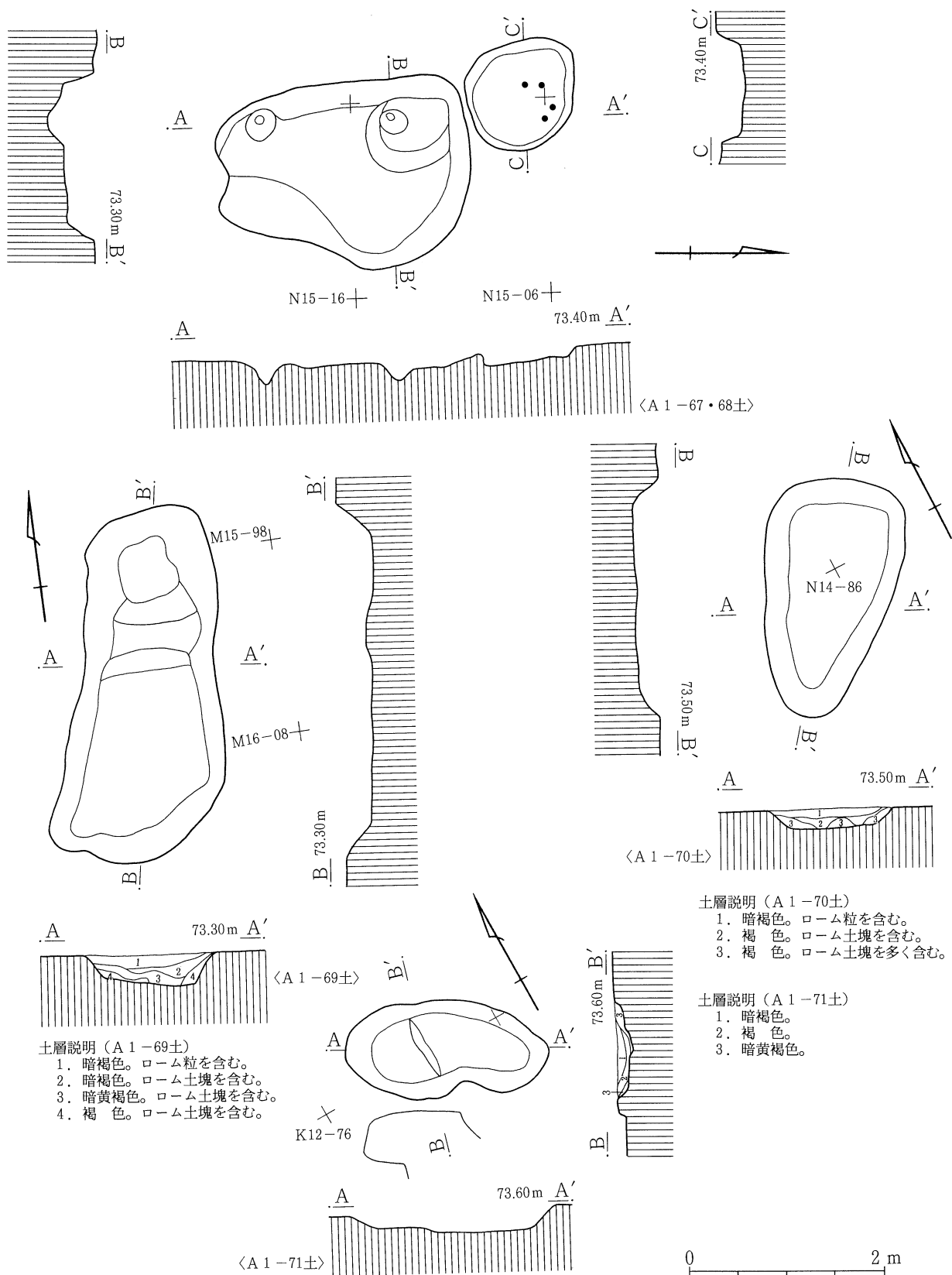
第145図 A 1-47~52号土坑実測図



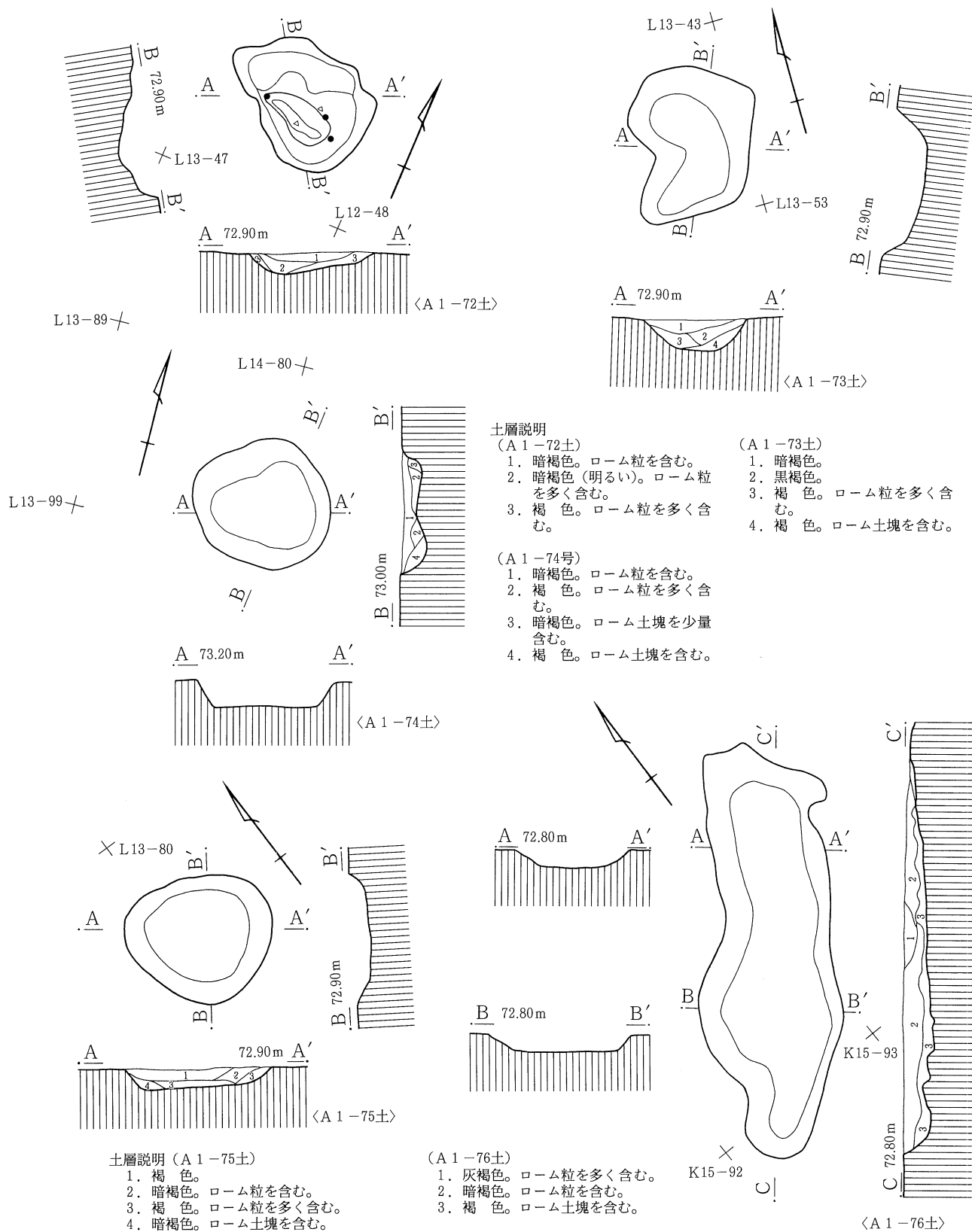
第146図 A1-53~60号土坑実測図



第147図 A 1-61~66号土坑実測図

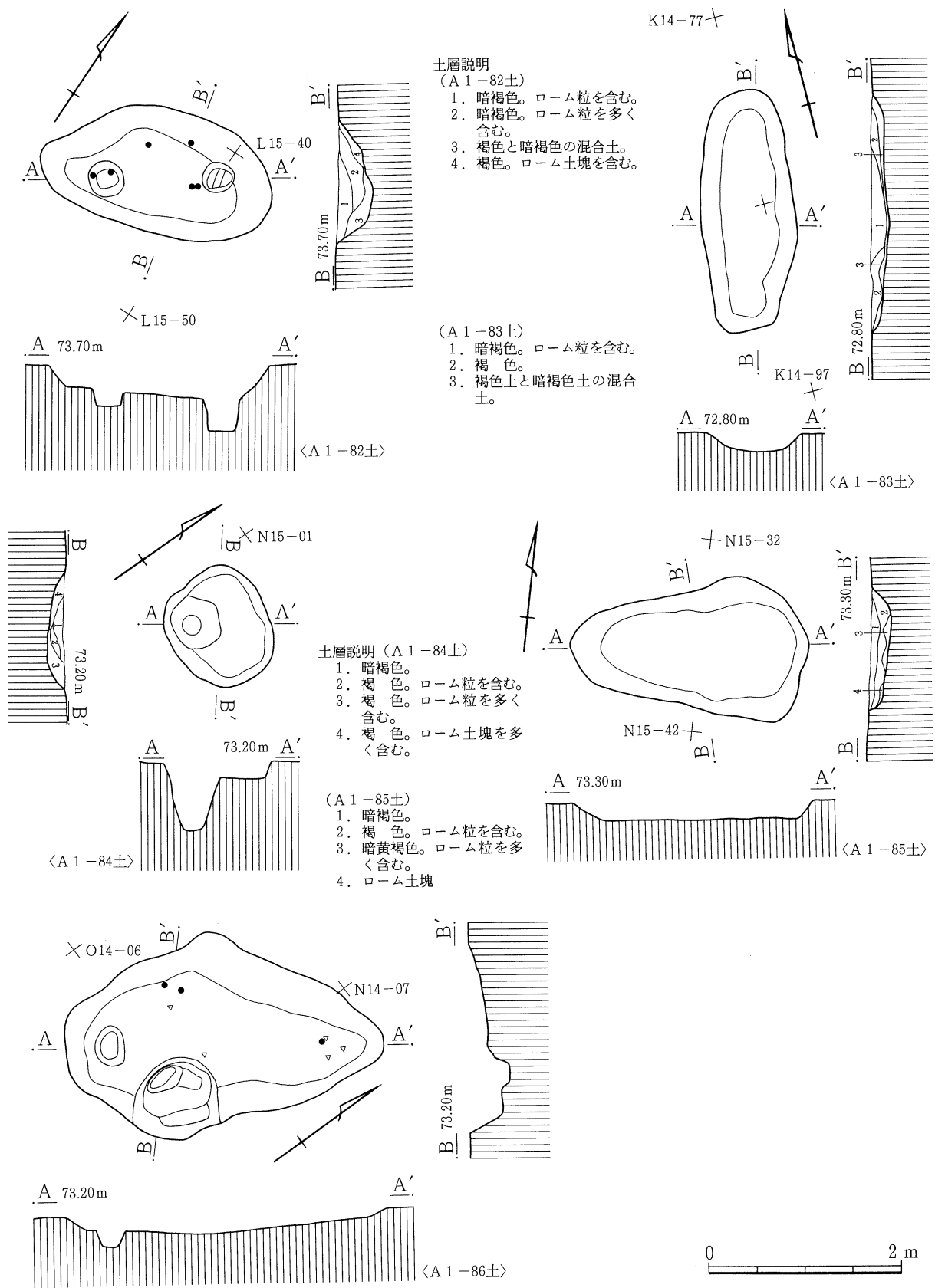


第148図 A1-67~71号土坑実測図

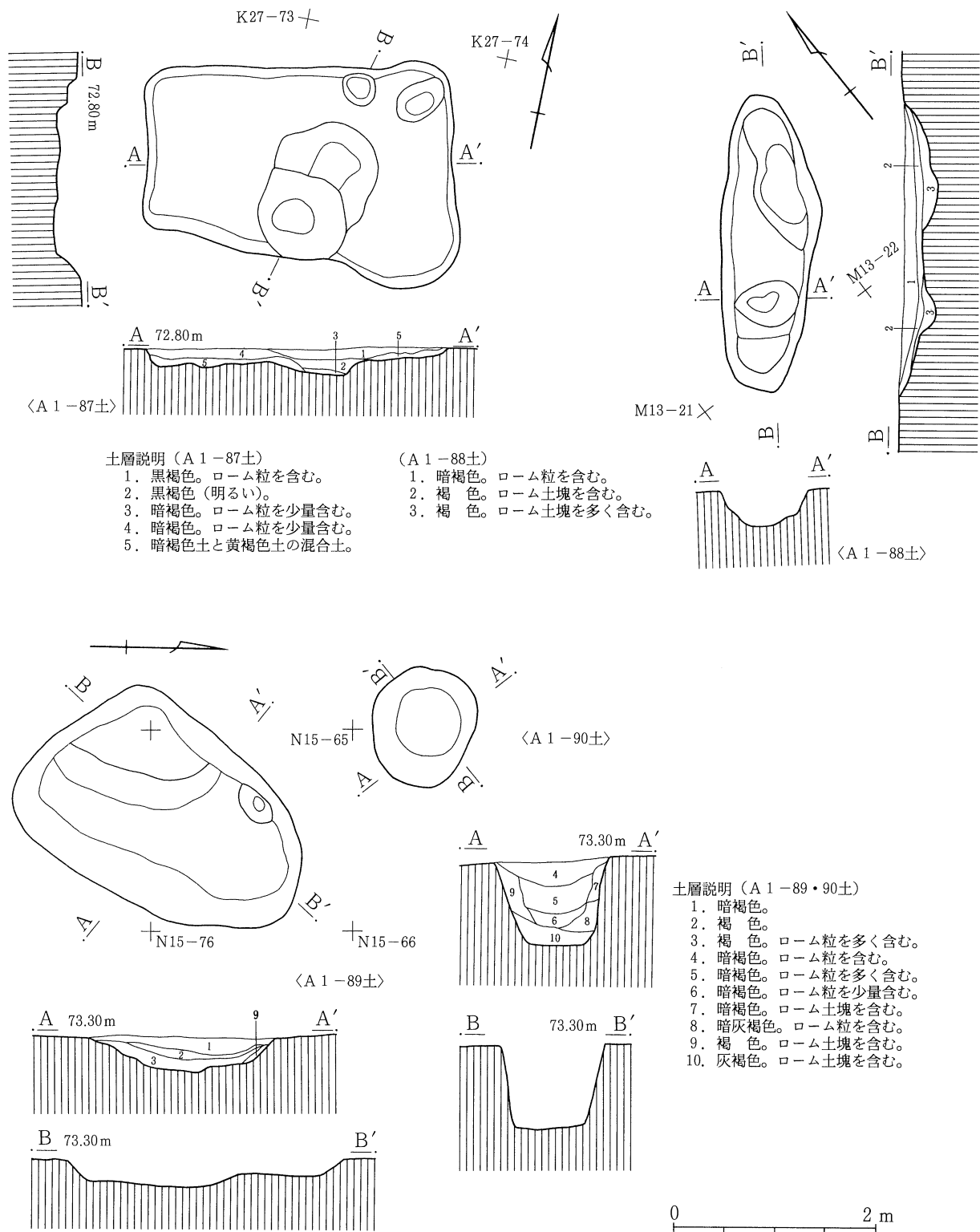


0 2 m

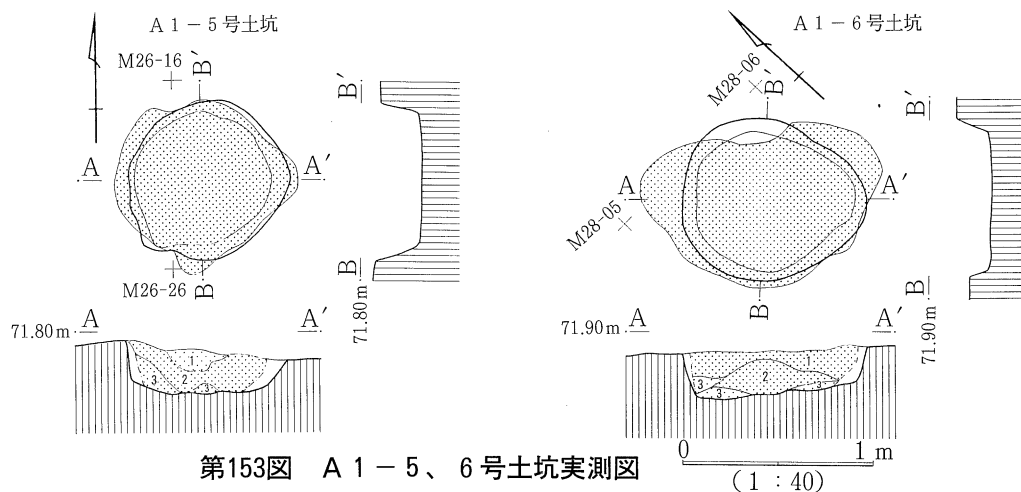
第149図 A 1-72~76号土坑実測図



第151図 A 1-82~86号土坑実測図



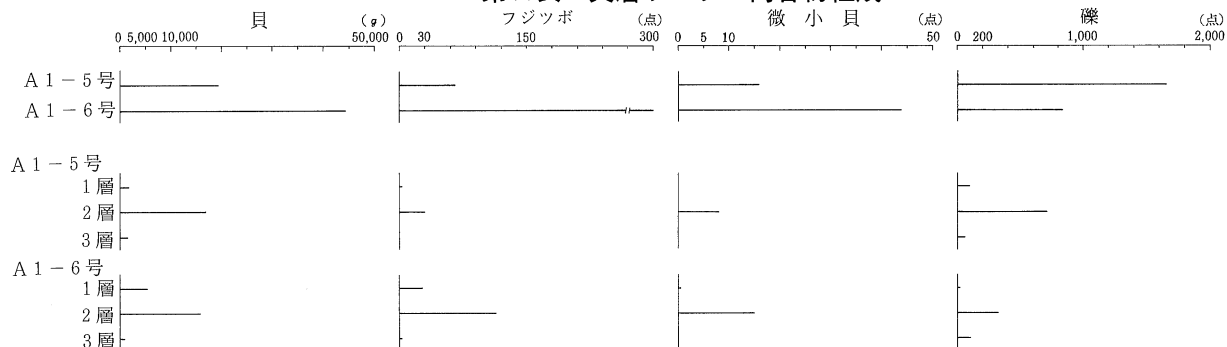
第152図 A 1-87~90号土坑実測図



第153図 A1-5、6号土坑実測図

遺構No.	層厚 (cm)	層位	総重量 (g)	フルイ水洗後残留物重量 (g)				土壌重量 (g)	泥 率 (%)	貝殻 率 (%)	貝 殻 (g)	カニ (点)	フジツボ 点 (g)	カシパン 類 点 (g)	微小 貝 (点)	炭化物 (g)	礫 点 (g)				フレーク・チップ点 (g)			
				10mm	4mm	1mm	計										10mm	4mm	1mm	計	10mm	4mm	1mm	計
A 1 - 5 号 土 坑		1層	4,100	1,300	750	330	2,380	1,720	41.9	22.0	2,342.3		5(0.3)	4(0.1)	1	0.1	7 (17.2)	80 (12.7)	14 (0.3)	101 (30.2)				
		2層	24,200	11,200	4,050	2,100	17,350	6,850	28.3	18.2	17,257.3	1	31(2.5)	13(0.9)	8	+	89 (49.5)	497 (106.4)	150 (4.3)	736 (180.2)				
		3層	4,400	200	600	950	1,750	2,650	60.2	71.5	1,761.4		1(0.1)				3 (1.8)	52 (13.7)	13 (0.5)	68 (16.0)				
		一括	27,800	9,150	3,700	2,780	15,630	12,170	43.7	29.0	15,172.1		29(1.9)	9(0.5)	7	0.1	84 (42.2)	386 (86.3)	288 (6.8)	758 (185.3)				
		計	60,500	21,850	9,100	6,160	37,110	23,390	174.1	140.7	19,599.6	1	66(4.8)	26(1.5)	16	0.2	183 (110.7)	1,015 (219.1)	465 (11.9)	1,663 (341.7)				
A 1 - 6 号 土 坑		1層	10,300	3,700	1,350	665	5,715	4,585	44.5	21.6	5,596	1	27(0.7)		3	0.1	2 (72.8)	13 (3.0)	20 (0.3)	35 (76.1)				
		2層	21,700	12,350	2,650	1,700	16,700	5,000	23.0	19.6	16,394.3	1	116(5.4)		15	+	99 (174.4)	182 (45.6)	39 (1.1)	320 (221.1)	4(2.7)	4(1.1)	1(+)	9(3.8)
		3層	4,300	150	600	550	1,300	3,000	69.7	74.4	1,228.8		5(+)		1		10 (6.4)	88 (20.2)	17 (0.4)	115 (27.0)		1(+)	4(+)	5(+)
		一括	34,200	12,900	5,650	2,900	21,450	12,750	37.2	26.7	21,314.5	1	182(4.5)	2(+)	25	0.1	53 (28.4)	243 (58.8)	81 (1.8)	377 (89.0)	1(1.5)	4(0.6)	3(+)	8(2.1)
		計	70,500	29,100	10,250	5,815	45,165	25,335	174.4	142.3	44,533.6	3	310(10.6)	2(+)	44	0.2	164 (282.0)	526 (127.6)	157 (3.6)	847 (413.2)	5(4.2)	9(1.7)	8(+)	22(5.9)

第11表 貝層サンプル内容物組成



第154図 貝層サンプル中内容物の比較図

種 類 遺構No. 層		腹 足 綱					斧 足 綱										微 小 貝				幼 貝			穿 孔 貝						
		イボキサゴ	スガイ	ウミニナ	ツメタガイ	アカニシ	アサリ	マガキ	アサリ	オホシジミ	カミガイ	ハマグリ	シシホガイ	マダガイ	オオノガイ	ツボミガイ	シヨウザン	シヨウガイ	オカチヨウ	不 明	アカニシ	アサリ	ハマグリ	シシホガイ	アサリ	ハマグリ	シシホガイ			
A 1 - 5 号 土 坑	1層	3,713		20		40	2	9	8			3	7	1	9	14		1								1(L)	1(R)			
	2層	29,154	3	218		306	9	7	79	71		1	28	46	3	2	22	30		4		1	3			14(R)	7(L)			
	3層	1,822		9		10			3			1	2													1(R)				
	一括	24,994	1	169		1	253	1	9	48	60		33	41		1	21	40		4		2	1	1	1(R-L)	1(L)	13(L)	6(L)		
	計	59,683	4	416		1	609	20	151		1	96	5	84		9	3	4	1	1	1	1				28	15			
A 1 - 6 号 土 坑	1層	7,878	1	66		71	18	4	96	75	1		38	41	103	117	57	64		1		2			2(R)	1(L)	2(R)	1(L)		
	2層	27,504	2	432		256	25	25	70	61	1		63	54	65	61	197	212		3	1	12		3		8(L)	11(R)	3(R)		
	3層	1,658		12		2			2	2			4	3	1		5	4								1(L)				
	一括	33,246	3	426	2	1	291	50	45	213	214	2	1	54	58	196	215	406	449			15	1		9		1(R)	10(R)	5(R)	2(L)
	計	70,286	6	936	2	1	620	93	382	4		166	398	730	3	29	1	2	12		2	1	1	1	20	18	5			

第12表 軟体動物検出数一覧

はいずれも条痕文系である。A 1-14号は石斧片が1点出土している（第163図7）。A 1-15号（第163図21）は稲荷台式、A 1-17号（第163図22～24）は条痕文系、A 1-18号（第163図25）は小片で縄文土器片と思われるが時期は不明。A 1-22号（第163図27～29）は興津式と浮島式、A 1-24号（第163図32～37）と25号（第163図38、39）、A 1-30号（第164図4、5）は三戸式、またA 1-30号は打製石斧（第169図2）が1点出土している。A 1-33号（第164図8）と35号（第164図9、10）は加曽利E式、A 1-37号（第164図11）は田戸上層、A 1-39号（第164図12）は早期前半とみられる尖底部が出土している。A 1-87号（第164図13～16）と43号（第164図17）、46号（第164図19）は稲荷台式、A 1-45号（第164図18）と50号（第167図1）は中期、A 1-53号（第167図6）は諸磯b式、A 1-79号（第167図7）は稲荷台式か、A 1-80号（第167図8）は口縁部片で前期後半の所産か。またA 1-82号（第167図9）と83号（第167図10）、84号（第167図11）は沈線文系、A 1-85号（第167図12）は加曽利E式とみられる。A 1-43号から石斧1点（第169図3）、A 1-46号から石斧と石鏃片と（第169図5、7）、A 1-70号より石鏃1点（第169図8）が各々出土している。

荻原野遺跡検出の貝層

貝層の所在と検出状況（第153図）

貝層は、荻原野遺跡A地区M-28区より隣接して検出された2基の土坑（A 1-5号・A 1-6号）の覆土中から発見された。貝層はいずれも、直径80～90cm程の円形プラン内に最大20cm程の厚さで堆積しており、土坑の壁際に若干の土の堆積が認めらるものの、貝層は遺構の基底面からほぼ遺構内部全体に充満しており、土坑廃絶直後に投棄されたものとみられる。

調査方法とサンプリング方法

貝層が検出された時点でこれを半裁し一括サンプリングし、残り半分について断面観察により堆積状況を把握したうえで層位ごとにサンプリングした。貝層の全てを遺跡よりセンターに持ち帰り、自然乾燥させ重量測定後、10・4・1mm3種類のフルイを使用して水洗し内容物の選別・分類・同程作業をおこなった。

貝層の内容物の特徴（第11表・第154図）

貝層は現場での断面観察の結果、A 1-5号・A 1-6号ともに3層に分離された。分層の基準は、貝層内の土壌の混入量と貝層内の貝の構成種の相違である。いずれの貝層も下から混貝土層（3層）・混土～純貝層（2層）・混土貝層（1層）の順で堆積し、中央に最も密度の高く量の多い貝層が位置している。

貝類以外の遺物としては、カニ・フジツボ・カシパンウニ・微小貝・炭化物・礫・フレーク・チップがある。カニは爪の部分の破片がA 1-5号より1点、A 1-6号より3点検出されているが、いずれも小破片であるため種名や食用に供せられたものかどうかの判断はできない。フジツボは、A 1-5号・A 1-6号ともに2層に多く検出されており、この層に比較的多くみられるマガキとの相関関係が指摘できる。マガキなどに付着して持ち込まれた可能性がある。カシパンウニの破片がA 1-5号より26点、A 1-6号より2点検出されている。貝類採取の際に混入したものとみられる。微小貝には陸産と海産のものとがみられるが、前者では、オカチョウジガイがA 1-5号より3点、A 1-

6号より2点と極めて少ない。貝層が形成された場所の環境がこれら陸産微小貝に適していなかったのであろう。後者では、ツボミガイ・カワザンショウガイがみられる。ツボミガイはA1-5号・A1-6号ともに2層に多く検出されており、この層に比較的多くみられるウミナとの相関関係が指摘できる。ウミナなどに付着して持ち込まれた可能性がある。海に近い葦原に生息するカワザンショウガイはA1-6号より1点検出されたにすぎない。炭化物はA1-5号・A1-6号ともに微量の検出にとどまる。礫としたのは10mm前後の偏平な小礫で、A1-5号・A1-6号ともにかなり多く検出されている。いずれも2層に多く検出されているが、産出先と存在理由は今のところ不明である。

貝類組成の特徴（第11表・第155図）

A1-5号・A1-6号ともに主体貝種はイボキサゴであり、各層とも全体の95%以上を占めている。イボキサゴに次いで多いのは、アラムシロガイ・ウミナなどの巻貝であるが、これらはイボキサゴ採取の際と一緒に捕獲されたものと思われる。二枚貝ではマガキ・アサリ・ハマグリ・シオフキガイ・マテガイなどがみられるが、その比率は上位3位までがA1-5号でアサリ・ハマグリ・マテガイなのに対し、A1-6号でマテガイ・シオフキガイ・アサリとなり相違が認められる。また層位的には、A1-5号では1・2層にのみマテガイがみられること、A1-6号では1・2層でマテガイ・シオフキガイの比率に逆転がみられるなどの特徴がある。

ハマグリ大きさ（第156図）

A1-6号のハマグリの高さを計測した。計測可能な個体が少なかったため、分布のばらつきが多くヒストグラムに明確なピークを見出すことが困難であるが、1層では2.0~3.5cm、2層では1.0~2.2cmといずれもかなり小さな個体が多い。

幼貝・穿孔貝（第12表）

殻長で10mmに満たない大きさの個体（幼貝）や他の貝による捕食のため貝殻に穴のあけられた個体（穿孔貝）がA1-5号・A1-6号ともにみられた。前者は食用するには小さすぎ、後者は採取段階で既に死貝であった訳であり食用するための貝類に混じって捕獲され貝塚に投棄されたものと見られる。

貝層の時期

貝層中からは、A1-6号土坑で石英斑岩製の被熱した摩石1点と砂岩系の石材のフレーク・チップが出土しているほかは土器など時期を決定できる人工遺物は出土していない。しかし貝種組成の特徴（イボキサゴなど小型巻貝主体でハマグリなどの二枚貝が少なく大きさが小さい）からは縄文中期から後期前葉位の時期を、さらに本遺構の周辺から検出された遺構や包含層出土の遺物の時期から考えて縄文中期の所産と推定したい。

出土軟体動物種名一覧

軟体動物門 Phylum MOLLUSCA

腹足綱 Class Gastropoda

原始腹足目 Order Archaeogastropoda

ユキノカサ科 Family Acmaeidae

ヒメコザライ（ツボミガイ） *Patelloida pygmaea(forma lampanicola)*

ニシキウズガイ科 Family Trochidae

イボキサゴ *Umbonium moniliferum*

リュウテンサザエ科 Family Turbinidae

スガイ *Lunella coronata coreensis*

中腹足目 Order Mesogastropoda

カワザンショウガイ科 Family Assimineidae

カワザンショウガイ *Assiminea lutea japonica*

ウミニナ科 Family Potamididae

ウミニナ *Batillaria multiformis*

タマガイ科 Family Naiticidae

ツメタガイ *Neverita didyma*

新腹足目 Order Neogastropoda

アキガイ科 Family Muricidae

アカニシ *Rapana thomasi*

ムシロガイ科 Family Nassariidae

アラムシロガイ *Hinia festiva*

柄眼目 Order Stylommatophora

オカクチキレガイ科 Family Subulinidae

オカチョウジガイ *Allopeas clavulinum kyotoense*

二枚貝綱 Class Bivalvia

翼形目 Order Pteriomorpha

イタボガキ科 Family Ostreidae

マガキ *Crassostrea gigas*

異歯目 Order Heterodonta

マルスダレガイ科 Family Veneridae

アサリ *Ruditapes philippinarum*

オキシジミ *Cyclina sinensis*

カガミガイ *Dosinorbis japonicus*

ハマグリ *Meretrix lusoria*

バカガイ科 Family Mactriidae

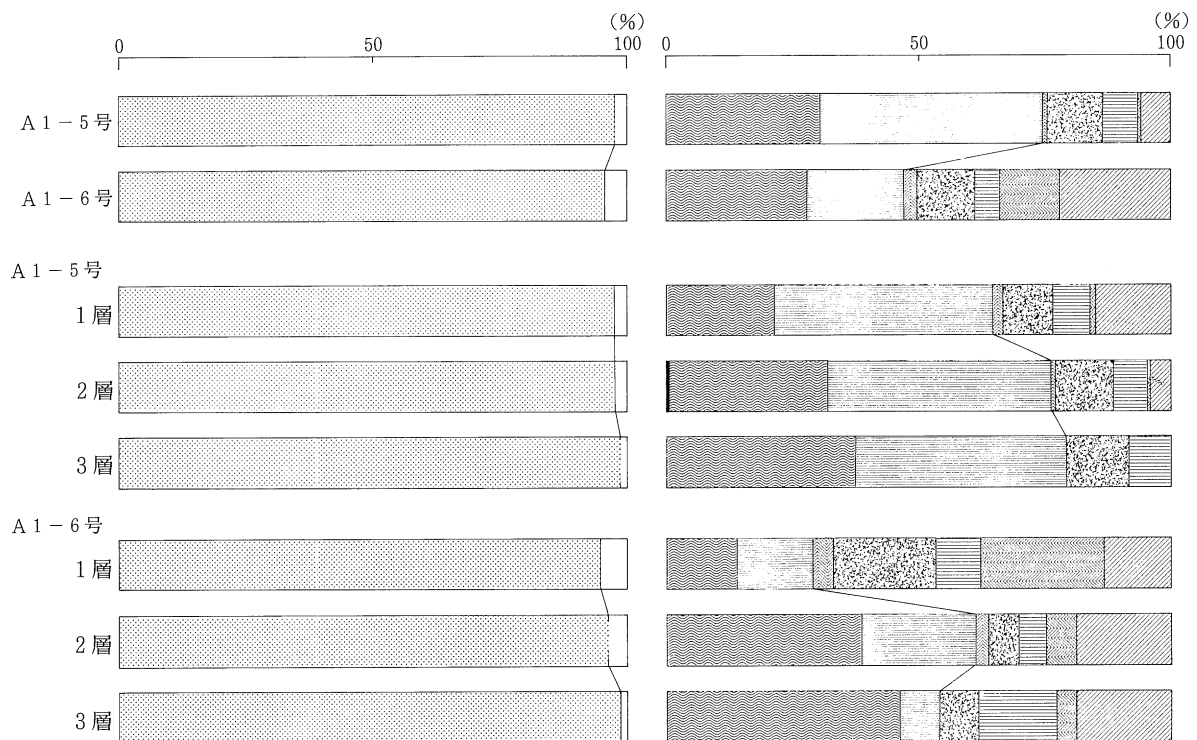
シオフキガイ *Macra veneriformis*

マテガイ科 Family Solenidae

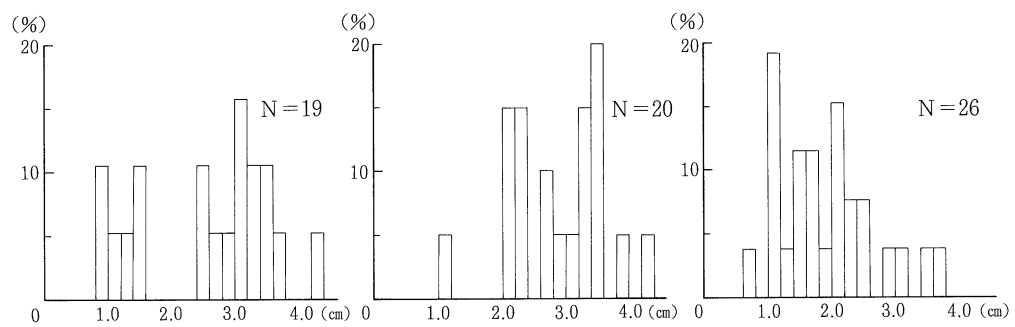
マテガイ *Solen strictus*

オオノガイ科 Family Myidae

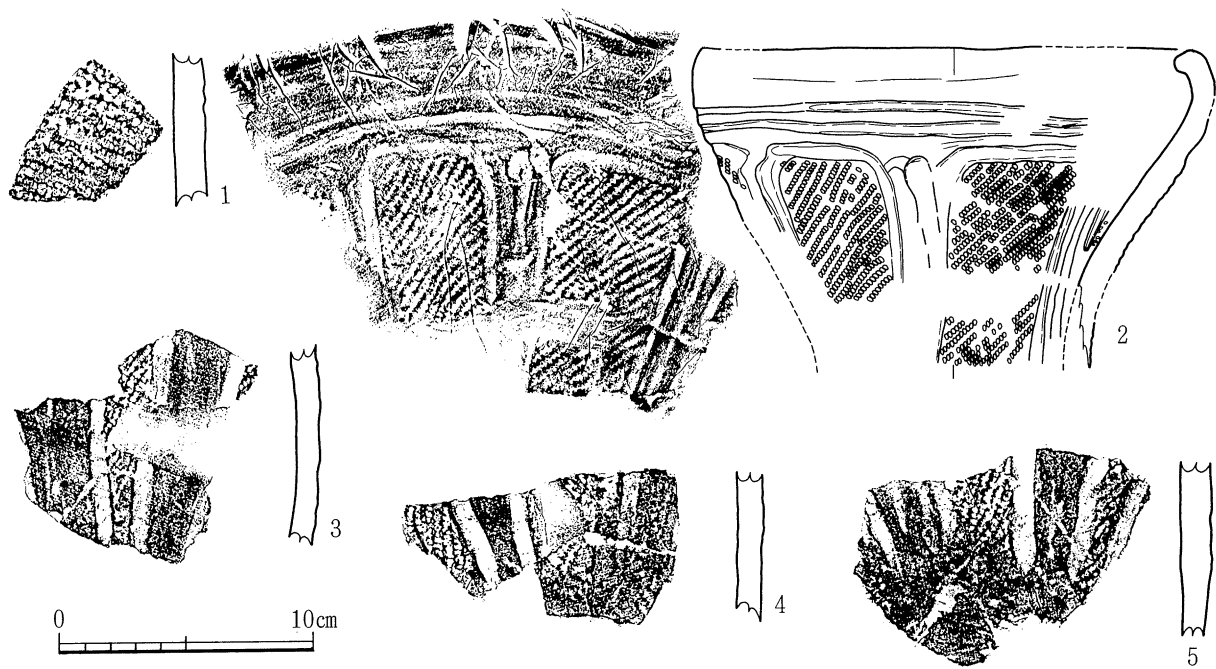
オオノガイ *Mya arenaria oonogai*



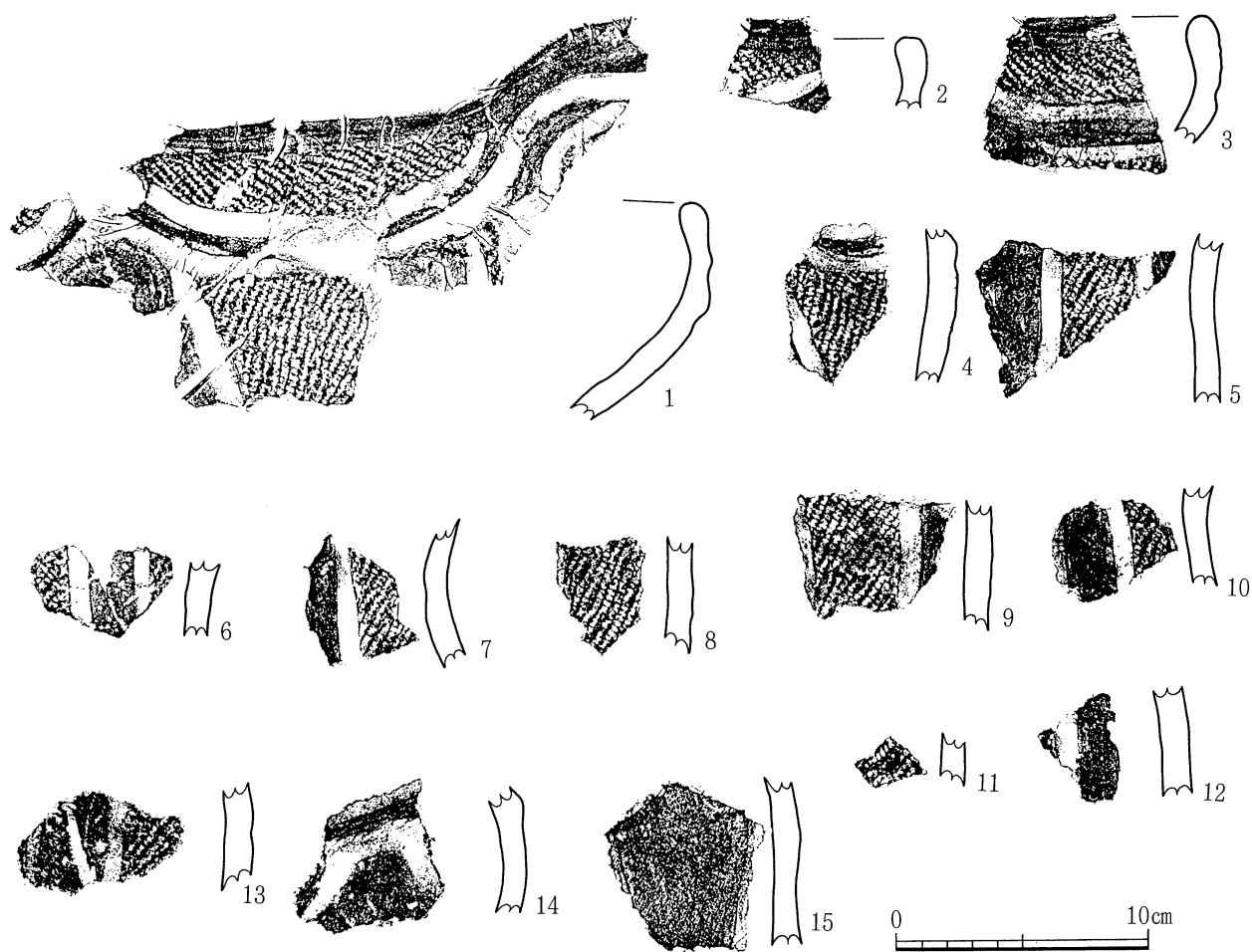
第155図 貝種組成



第156図 ハマグリの高分布



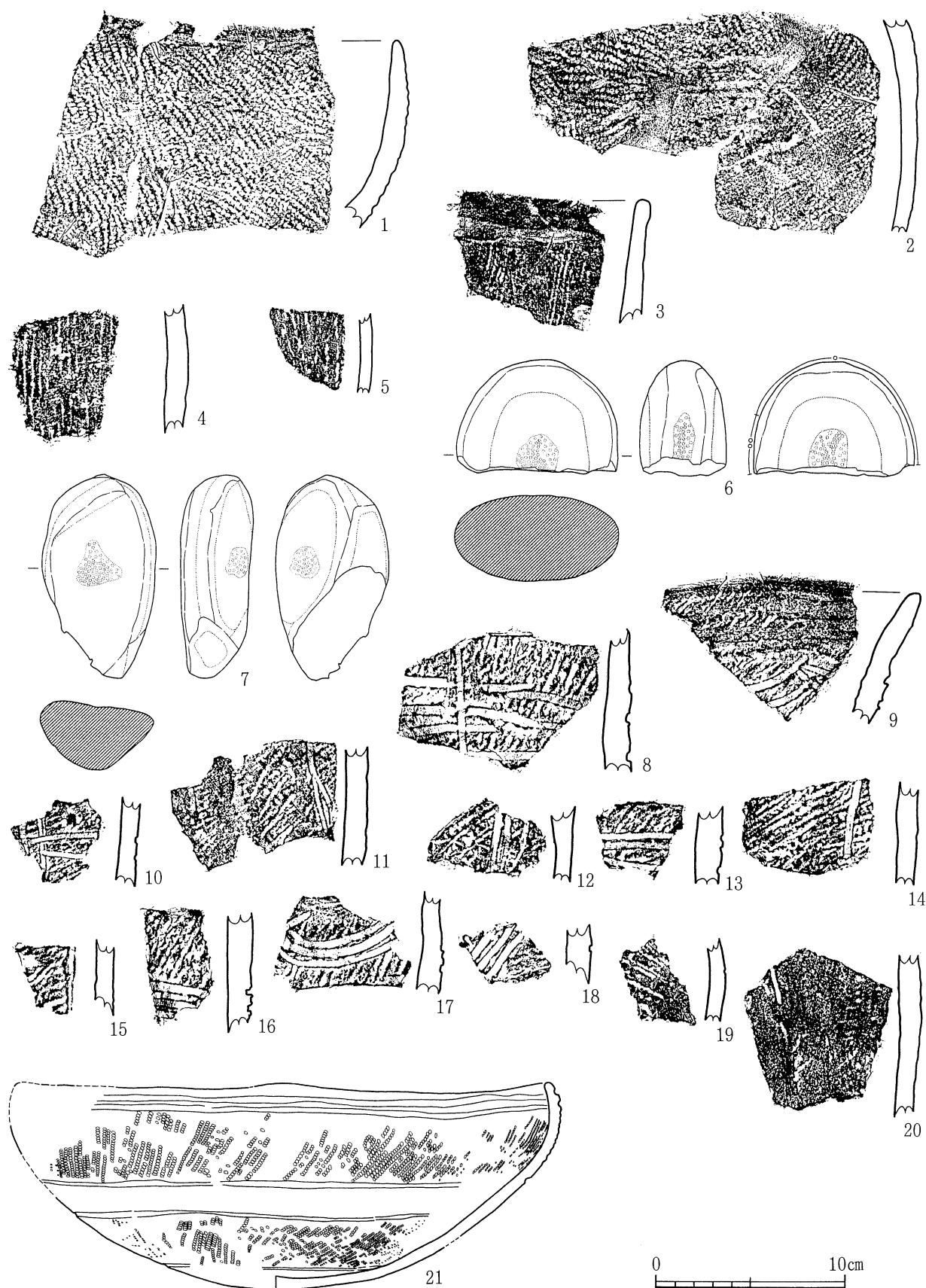
第157图 A 1 - 1号住居跡、A 1 - 6号遺物集中地点出土遺物実測図



第158图 A 1 - 5号遺物集中地点出土遺物実測図

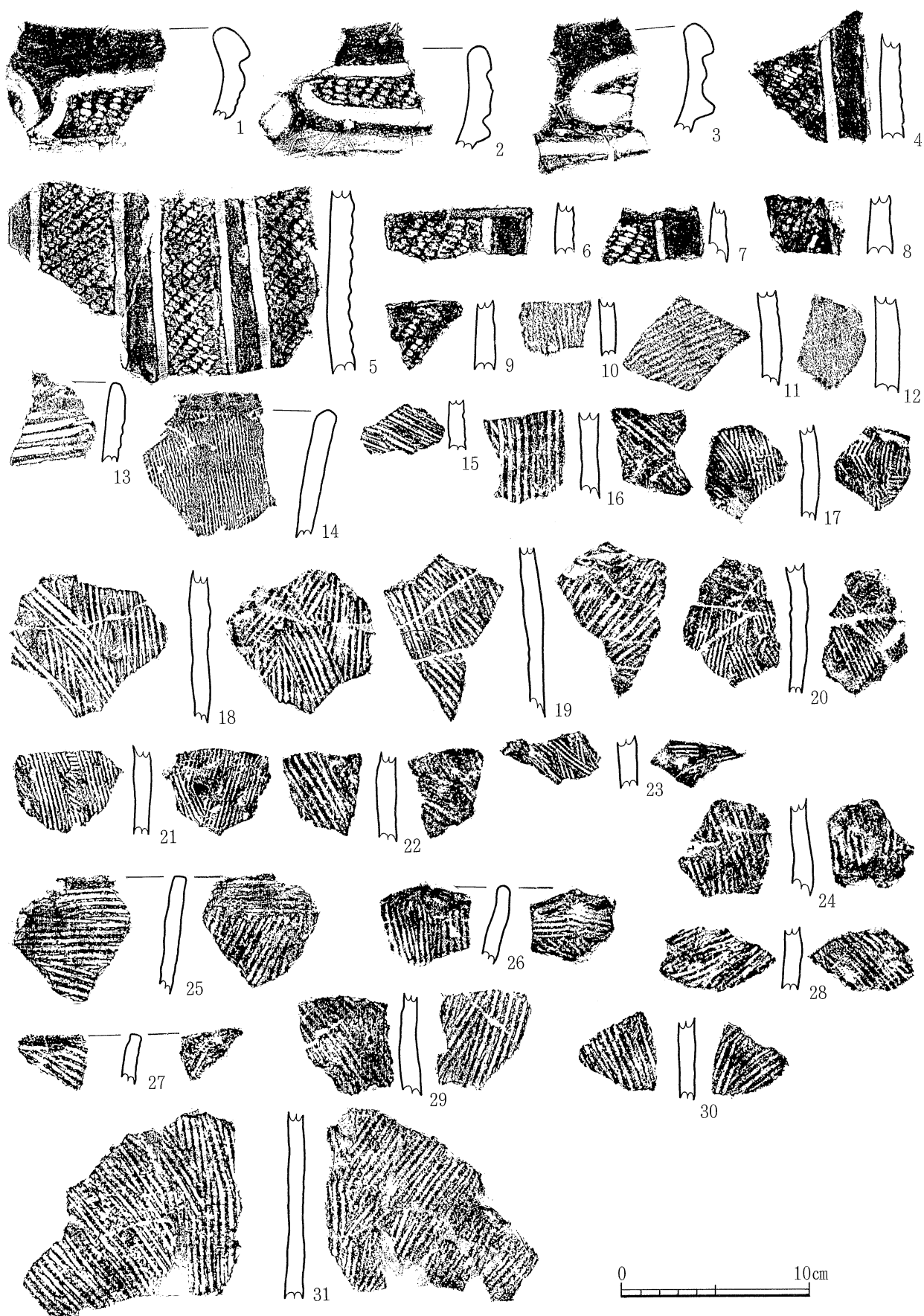


第159図 A 1 区土坑等出土遺物実測図(1) (1. A 1 - 1 号埋壺遺構、2. A 1 - 15 号住居跡)



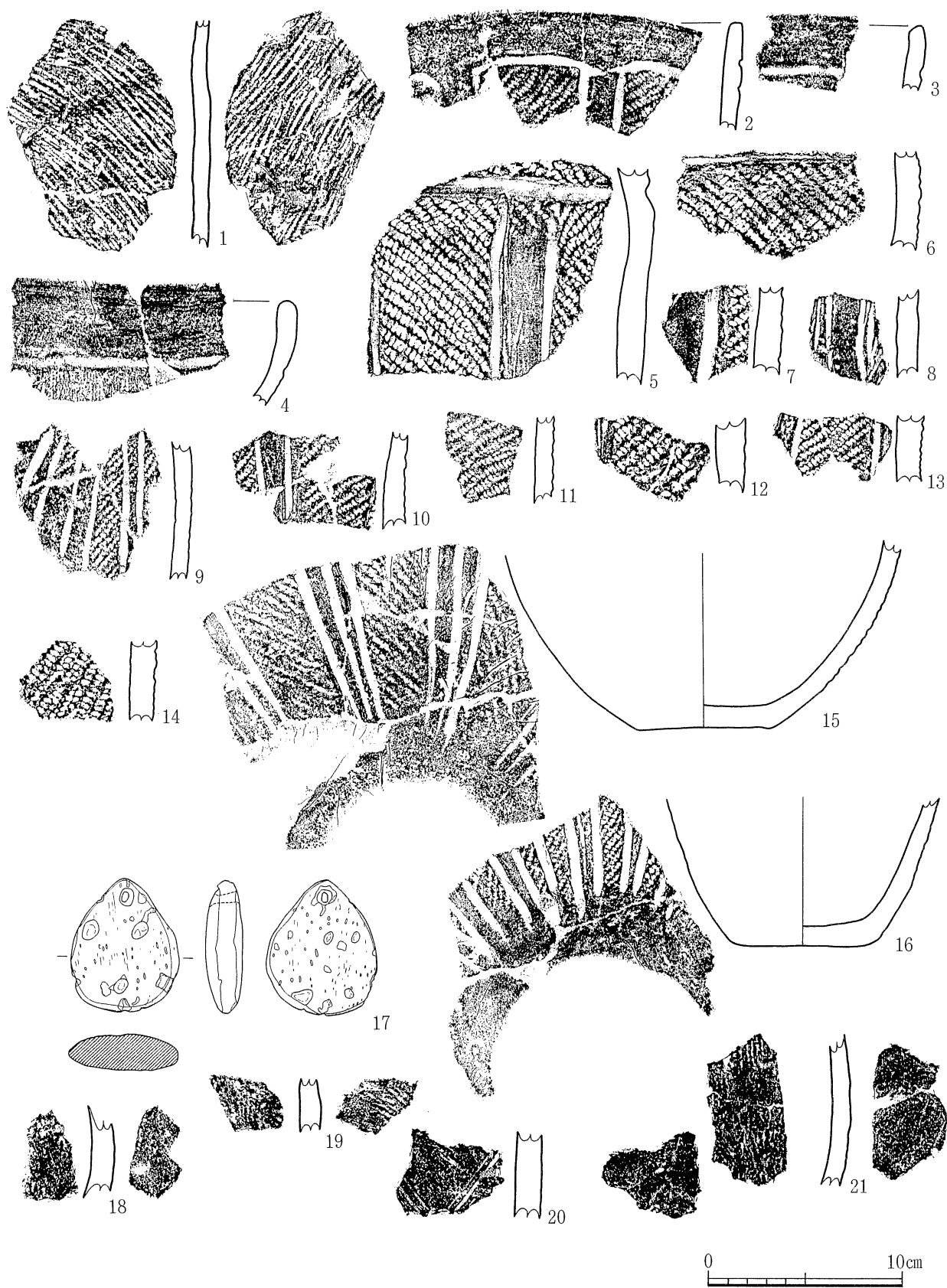
第160图 A 1区土坑等出土遺物実測図(2)

[1・2、A 1-1号埋塞遺構、3~7、A 1-1号集石遺構、
8~20、A 1-2遺物集中地点、21、A 1-1号遺物集中地点]



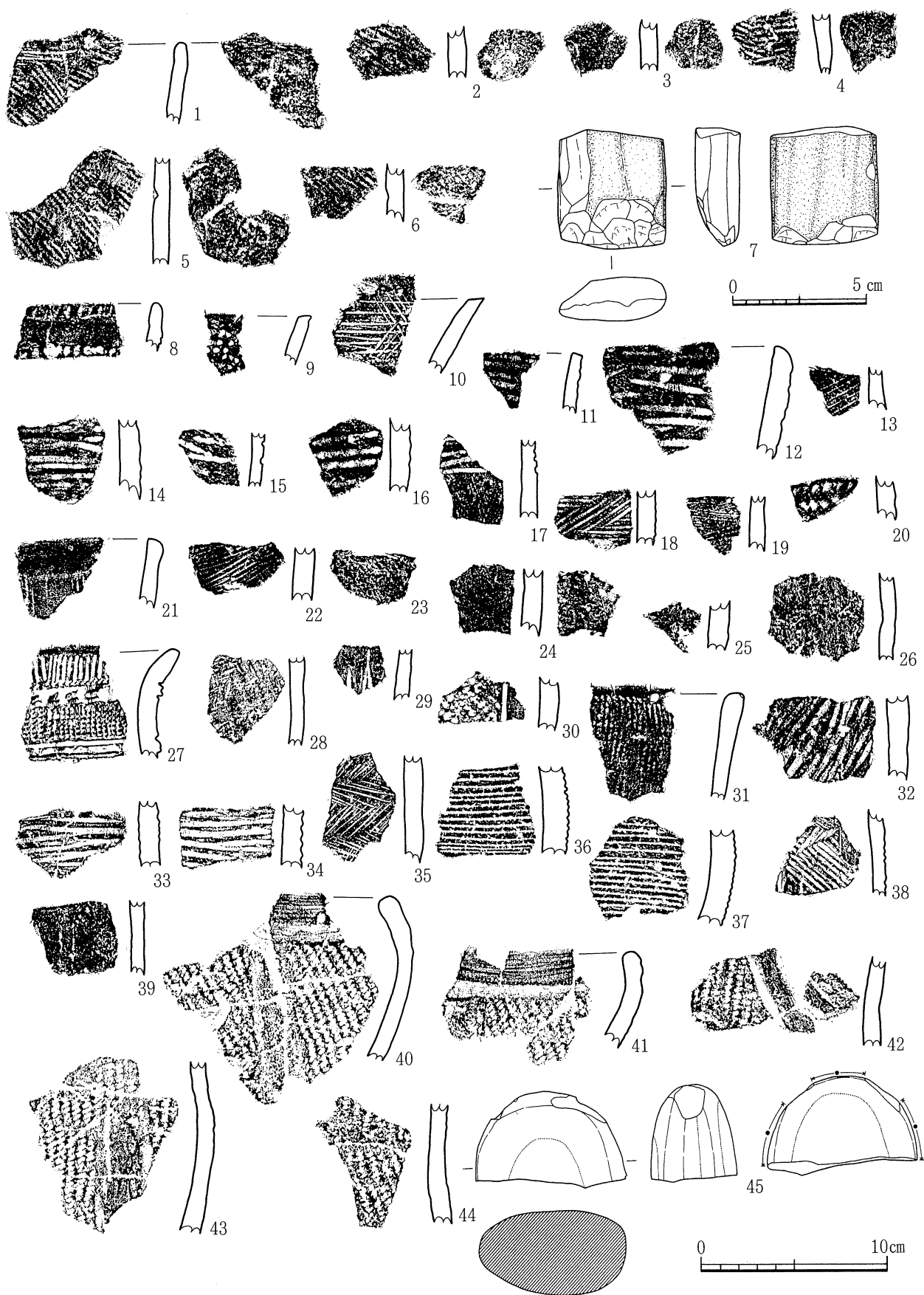
第161图 A 1 区土坑等出土遗物实测图(3)

1~9. A 1-4 遗物集中地点、10. A 1-4 号住居迹、11·12. A 1-7 号土坑、13. A 1-8 号土坑、14. A 1-6 号住居迹、
15. A 1-9 号土坑、16~24. A 1-10 号土坑、25~31. A 1-11 号土坑



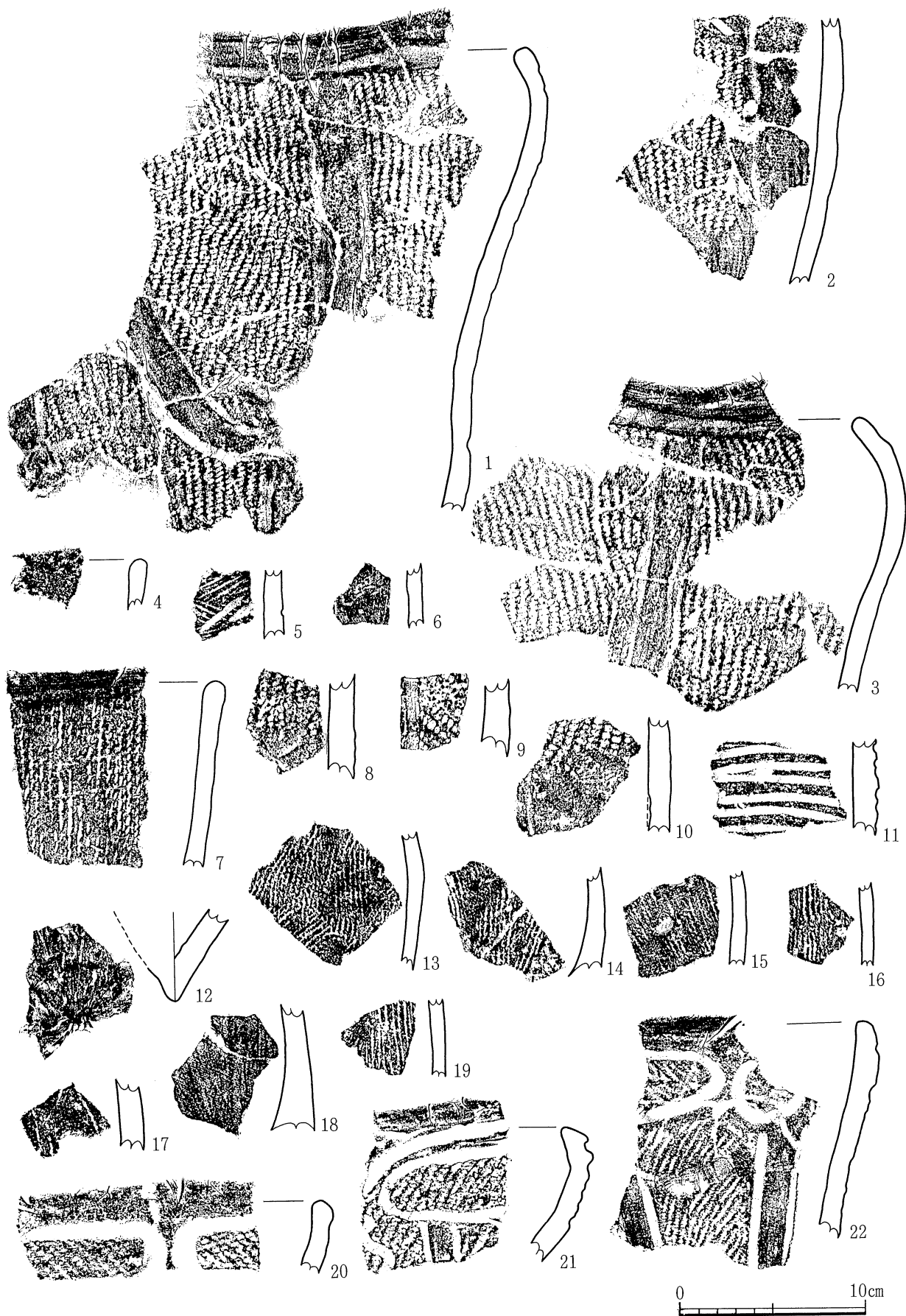
第162图 A 1 区土坑等出土遺物実測図(4)

(1. A 1 - 1 1 号土坑、2 ~ 17. A 1 - 5 号住居跡、18. A 1 - 12 号土坑、19、20・21. A 1 - 13 号土坑)



第163图 A 1 区土坑等出土遗物实测图(5)

1~7. A 1-14号土坑、8~20·45. A 1-2号住居迹、21. A 1-15号土坑、22~24. A 1-17号土坑、
 25. A 1-18号土坑、26. A 1-11号住居迹、27~29. A 1-22号土坑、30. A 1-3号住居迹、
 31. A 1-7号住居迹、32~37. A 1-24号土坑、38·39. A 1-25号土坑、40~44. A 1-3号遗物集中地点

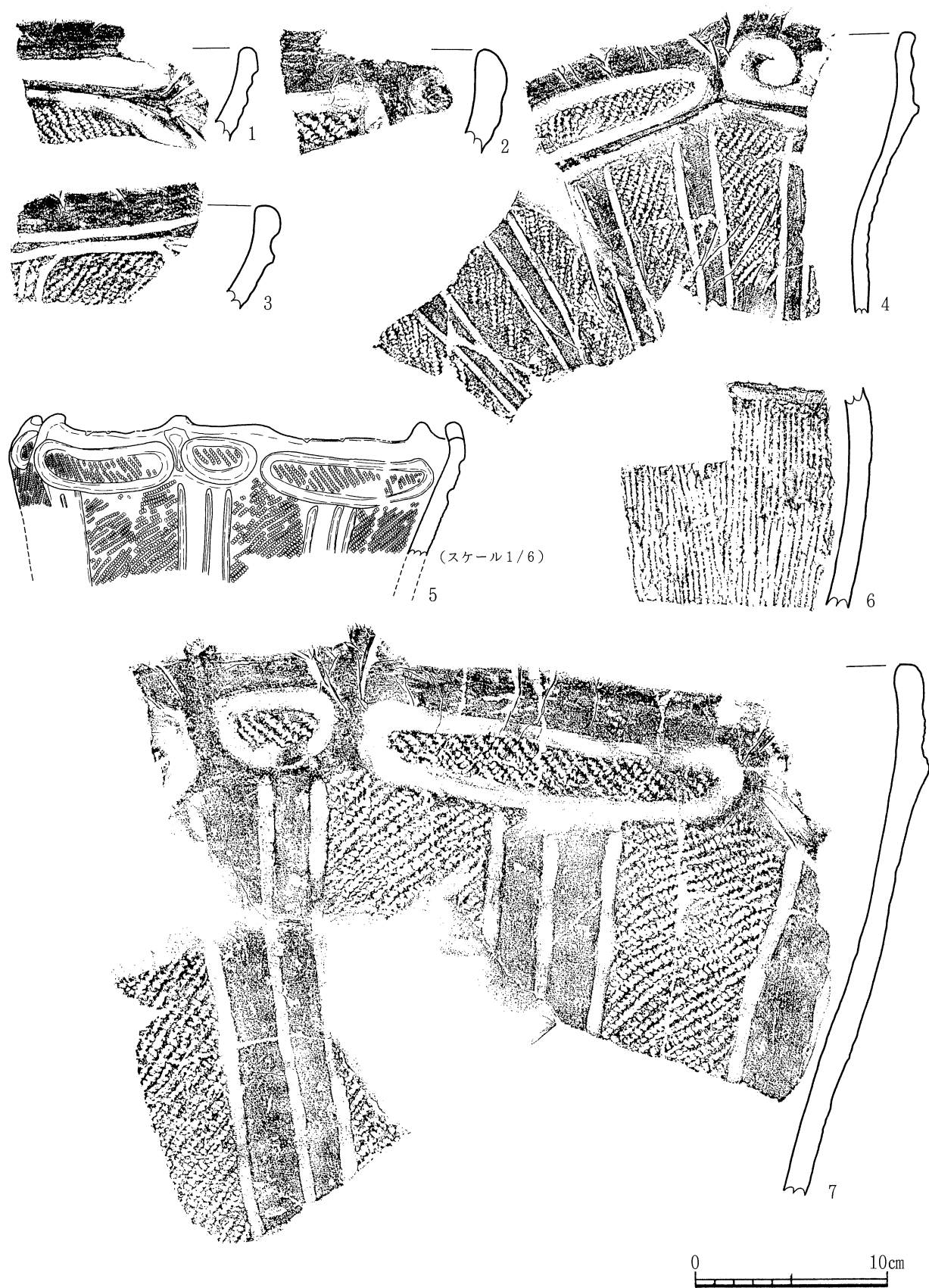


第164图 A 1区土坑等出土遗物实测图(6)

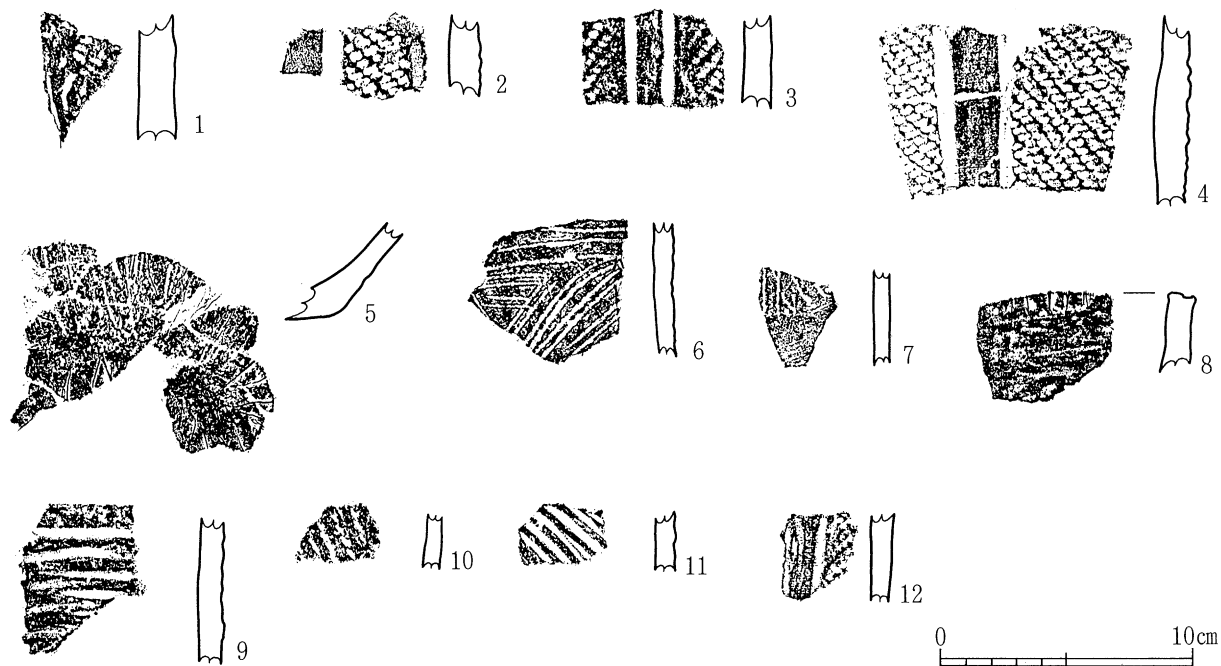
1~3. A 1-3号遗物集中地点、4·5. A 1-30号土坑、6. A 1-9号住居迹、7. A 1-20号住居迹、
 8. A 1-33号土坑、9·10. A 1-35号土坑、11. A 1-37号土坑、12. A 1-39号土坑、
 13~16. A 1-87号土坑、17. A 1-43号土坑、18. A 1-45号土坑、19. A 1-46号土坑、
 20~22. A 1-16号住居迹



第165图 A 1区土坑等出土遗物实测图(7) (1. A 1—15号住居跡、2~6. A 1—14号住居跡、7. A 1—6号土坑)

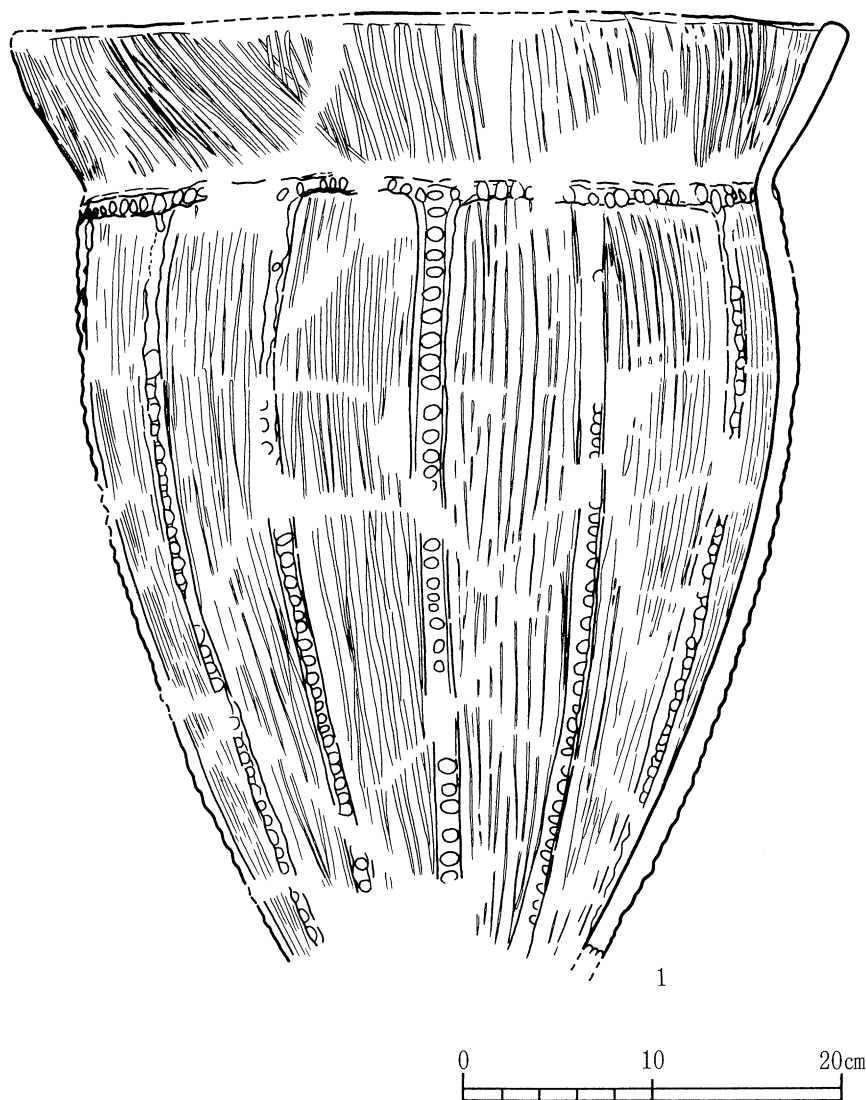


第166図 A 1 区土坑等出土遺物実測図(8) (A 1-16号住居跡)

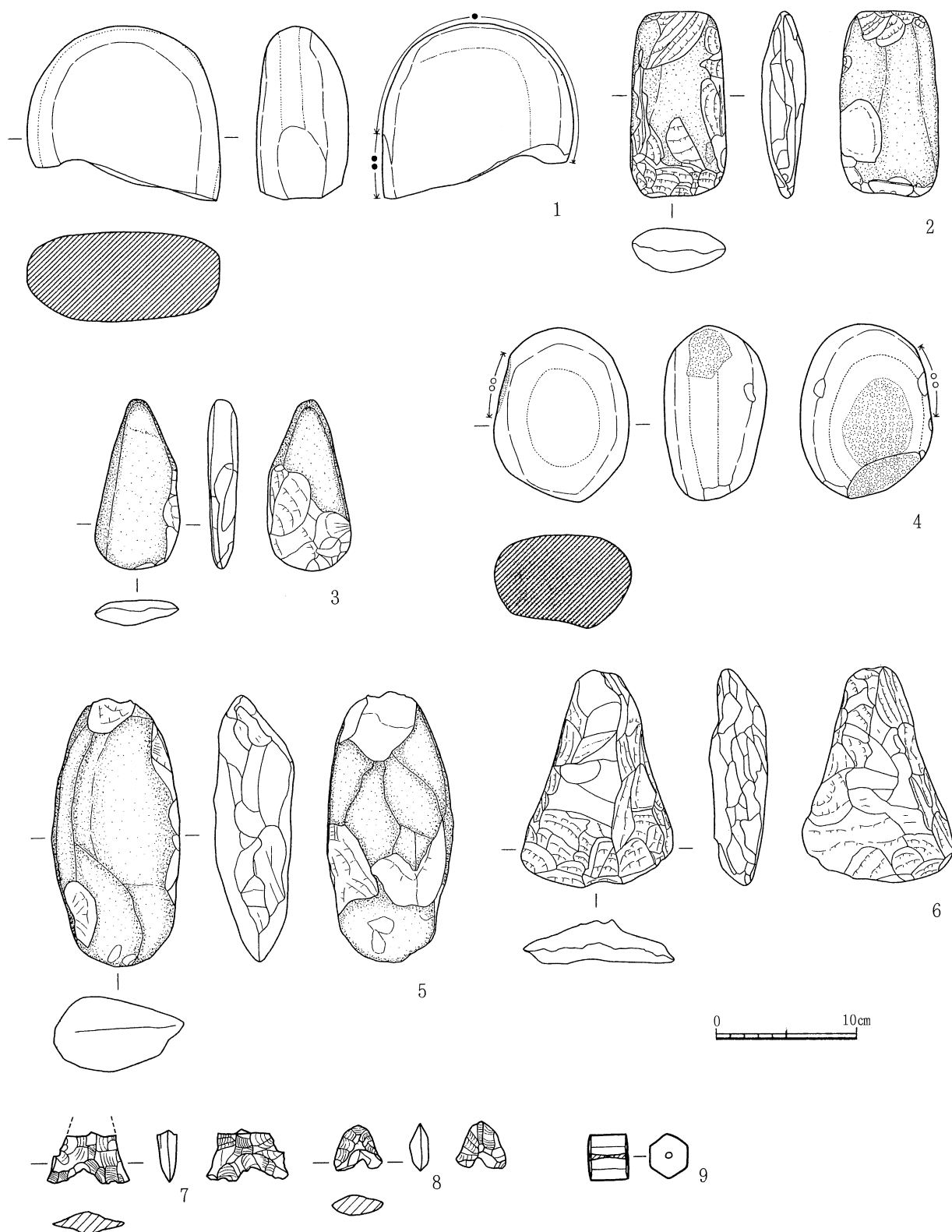


第167图 A 1 区土坑等出土遗物实测图(9)

- 〔 1. A 1—50号土坑、 2~5. A 1—15号住居迹、 6. A 1—53号土坑、 7. A 1—79号土坑、
8. A 1—80号土坑、 9. A 1—82号土坑、 10. A 1—83号土坑、 11. A 1—84号土坑、 12. A 1—85号土坑 〕

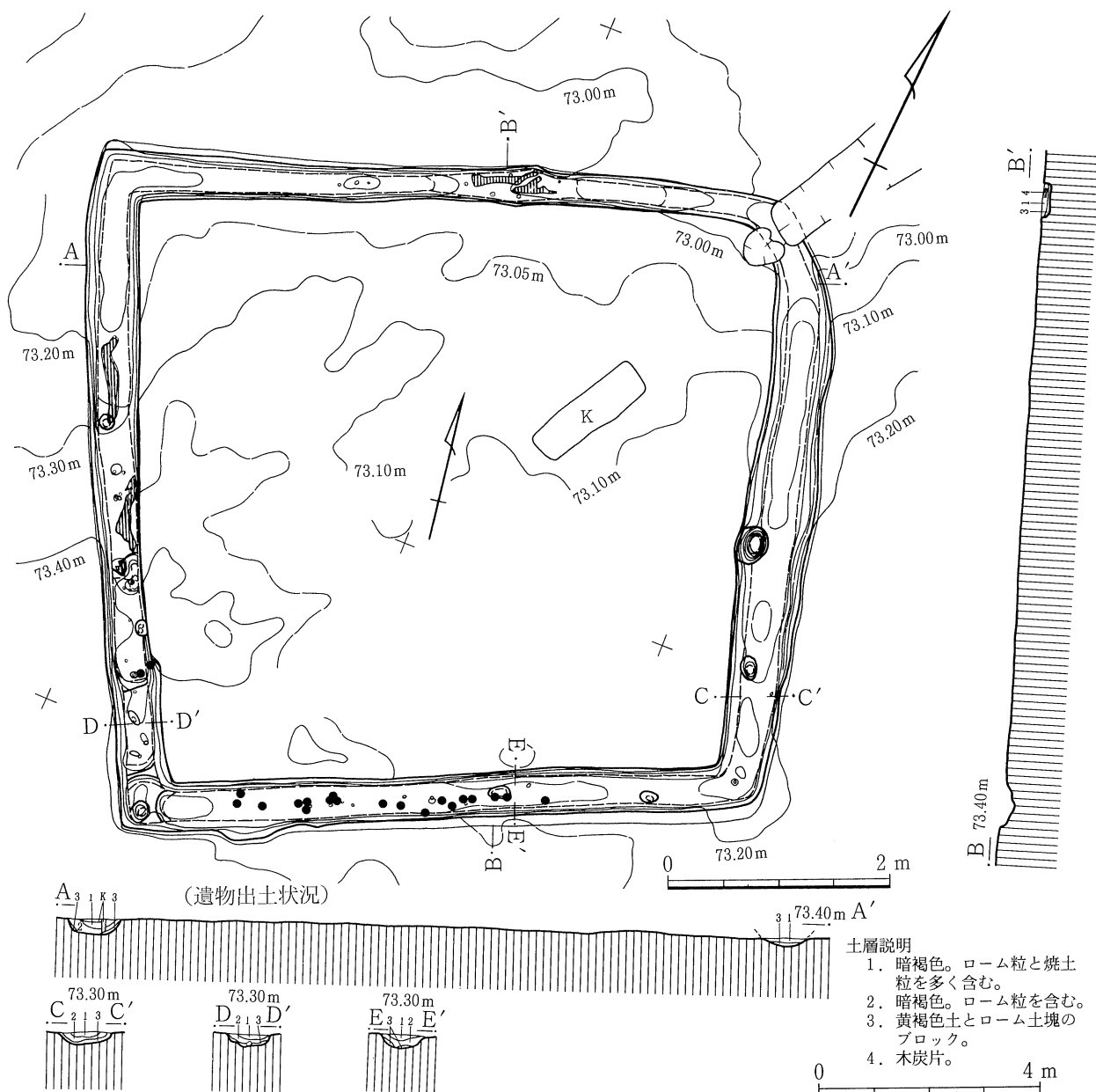


第168图 A 1—14号住居迹出土遗物实测图



第169图 A 1 区土坑等出土遺物実測図(10)

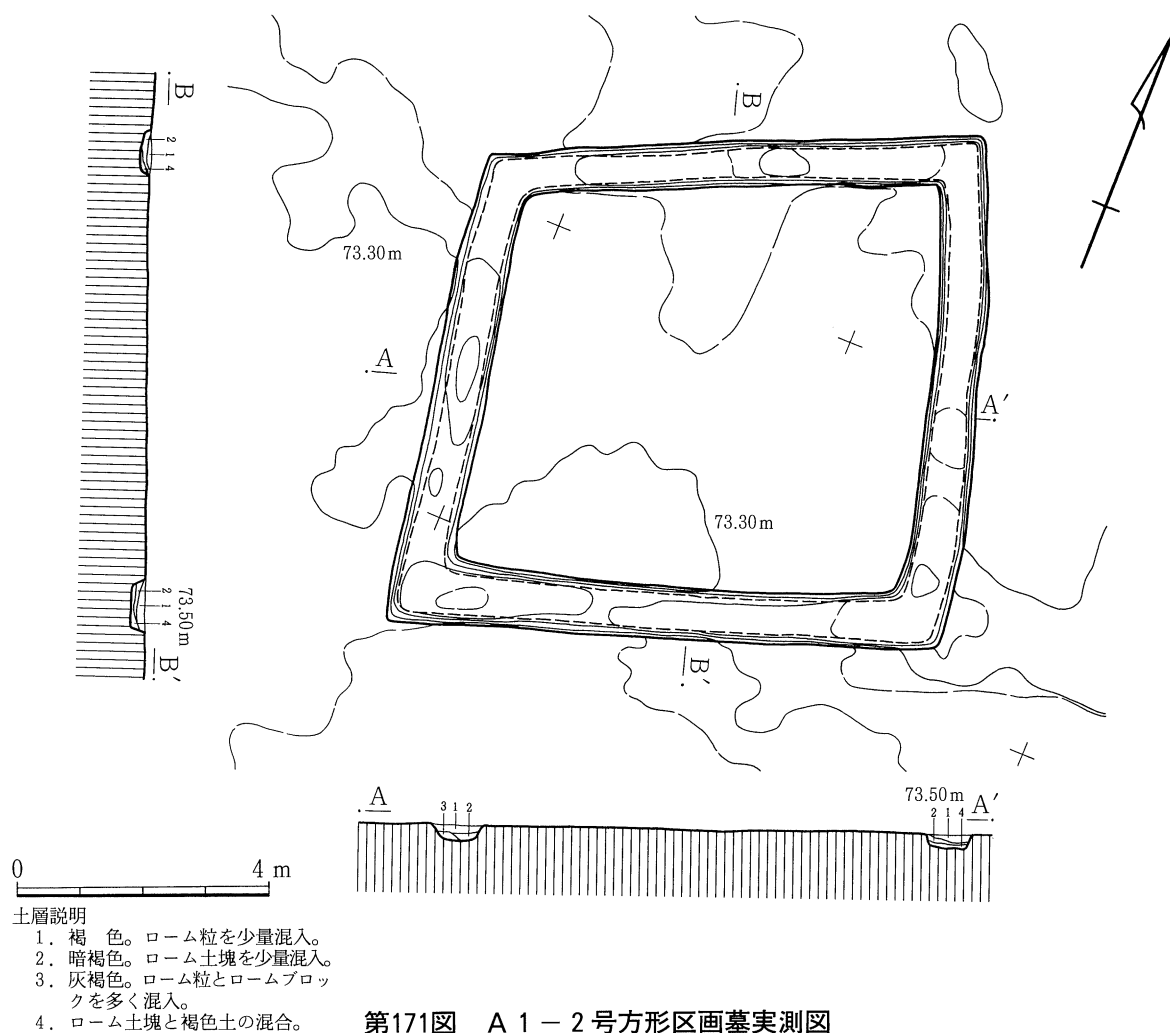
〔 1. A 1-13号炉穴群、 2. A 1-30号土坑跡、 3. A 1-43号土坑、 4. A 1-20号住居跡、
5、 7. A 1-46号土坑、 6. A 1-16号住居跡、 8. A 1-70号土坑、 9. A 1-14号住居跡 〕



第170図 A1-1号方形区画墓実測図

方形区画墓は調査地区の西側一帯で南から入り込む小谷を望む様な位置に18基（あと1基はA4区東側のA4-1号方形区画墓）が存在する。（第106図）

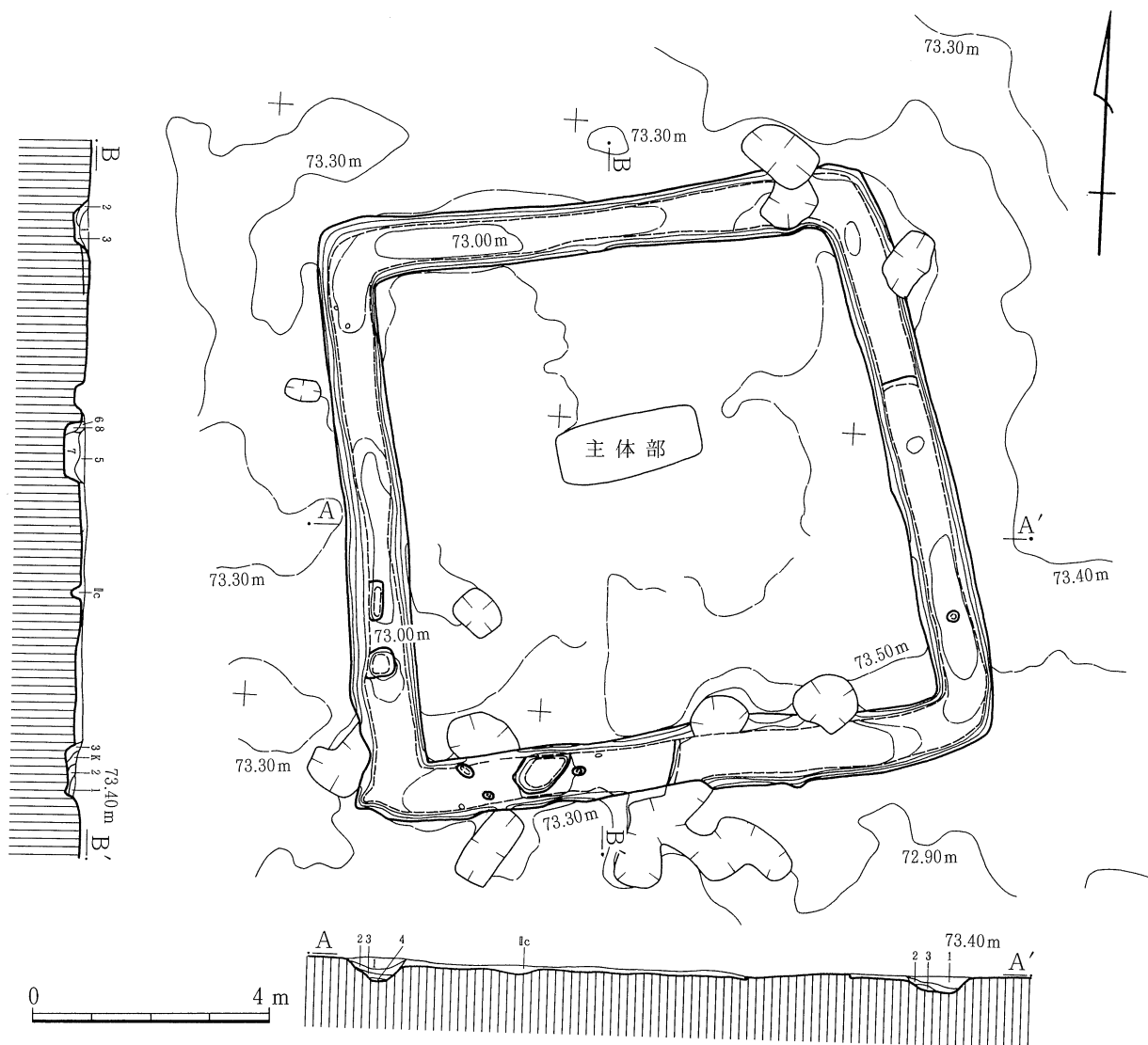
A1-1号方形区画墓は（第170図）調査区北側の西側中央部付近にあり、A1-2号方形区画墓が南西に約1m離れて所在する。周溝の区画する平面形体はやや東側溝が短い長方形で、規模は周溝上端間で外側長軸13.08m（内側11.00m）、外側短軸11.80m（内側10.35m）、主軸方向は短軸方向でN-21°-Wを示す。周溝の幅は50~138cm、深さは8~15cmで残存状況が悪い為比較的浅く断面は皿状である。下端の幅は15~65cm、覆土は自然堆積であるが上部1層に焼土粒を多く含む。また一部に木炭片もみられる。主体部は検出されない。出土遺物は第189図2と3の土師器鉢形土器と須恵器長頸壺である。いずれも周溝からで、鉢形土器は体部が球形で口縁部は内傾する。口径11.6cm、体



部最大径14.9cm、底径推定7.3cm、器高10.6cmを計る。口縁部両面横ナデ、体部外面は縦及び横方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラケズリの後ナデ。焼成は不良で摩耗が多い。胎土は緻密である。色調は両面とも暗褐色一部淡褐色である。須恵器長頸壺は、口縁部が欠損し、1/3程度の残存。体上部が内側に屈曲する形体で体部最大径は、16.9cm、底径9cmを計る。底部は高台が付くがややハの字状に開く。焼成は普通で胎土に2mm程の小礫を含む。色調は内外面とも灰色から灰褐色である。

A1-2号方形区画墓は（第171図）A1-1号の南西に近接しA1-6号が西約1m離れて所在する。平面形体は西側周溝がやや短かくやや歪んでいる。規模は当地区では小型で周溝上端間で外側長軸8.58m（内側6.90m）、外側短軸7.98m（内側6.38m）、主軸方向は短軸方向でN-12°-Wを示す。周溝の幅は上端70~110cm、下端40~63cm、深さは20~25cmで断面は浅い台形状である。覆土は自然堆積である。主体部は検出されていない。出土遺物も無い。

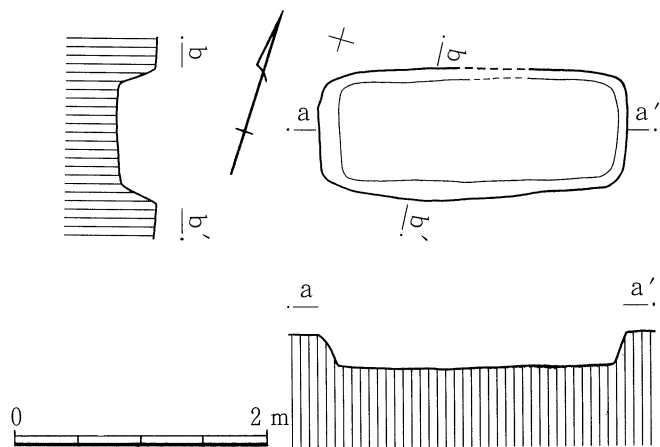
A1-3号方形区画墓は（第172、173図）A1-1号の南東約14m離れて所在し、形体は北側溝が短い歪んだ方形である。規模は周溝上端間で外側長軸10.80m（内側8.70m）、外側短軸10.30m（内側8.18m）、主軸方向は短軸方向でN-12°-Wを示す。周溝は幅上端83~116cm、下端40~75cm、深さ



第172図 A 1 - 3号方形区画墓実測図

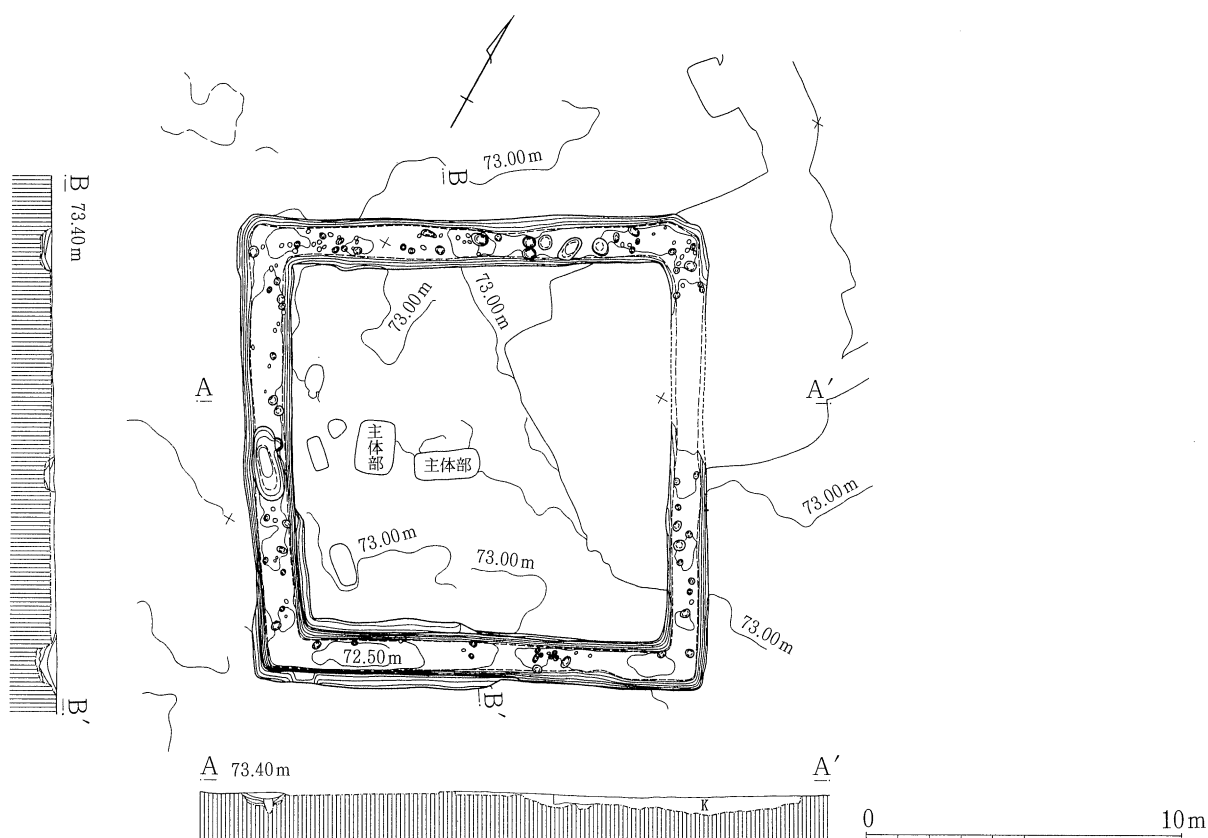
土層説明

1. 暗褐色。ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色。ローム粒を多く含む。
3. 褐色。ローム粒を多く含む。
4. 暗褐色。ローム土塊を含む。
5. 褐色。ローム粒を含む。
6. 黄褐色。ローム土を多く含む。
7. 暗褐色。ローム粒とロームブロックを混入。
8. 褐色。ローム土塊がブロック状に入る。

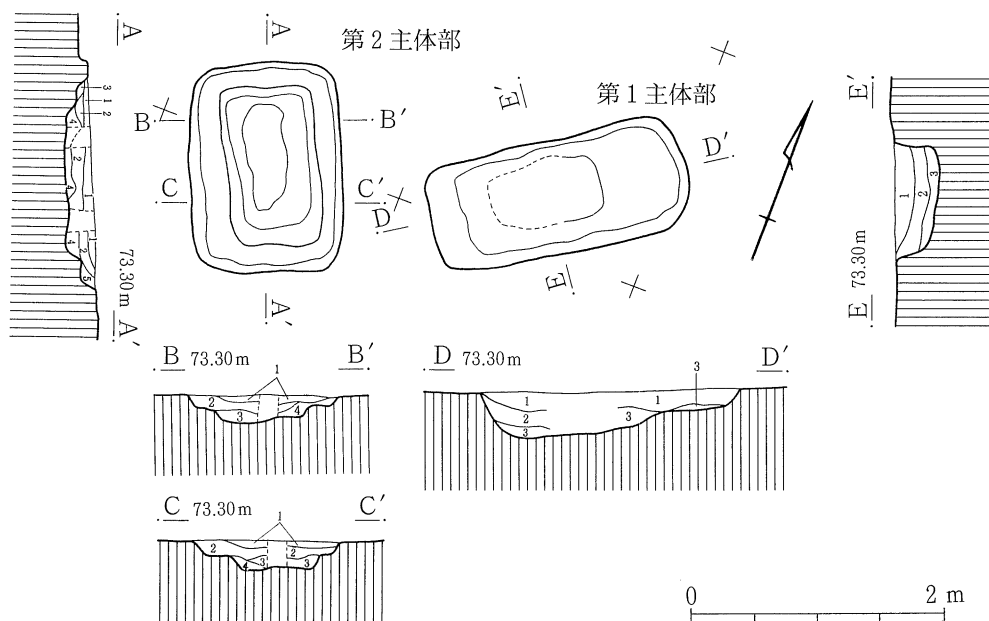


第173図 A 1 - 3号方形区画墓主体部実測図

20～38cmで覆土は自然堆積である。主体部は中央やや北側に所在し木棺直葬と思われる。平面形体は長方形で長さ2.46m、幅1.06m、深さ34cm、主軸方向は長軸を測りE-17°-Nを示す。出土遺物は



第174図 A 1 - 4 号方形区画墓実測図



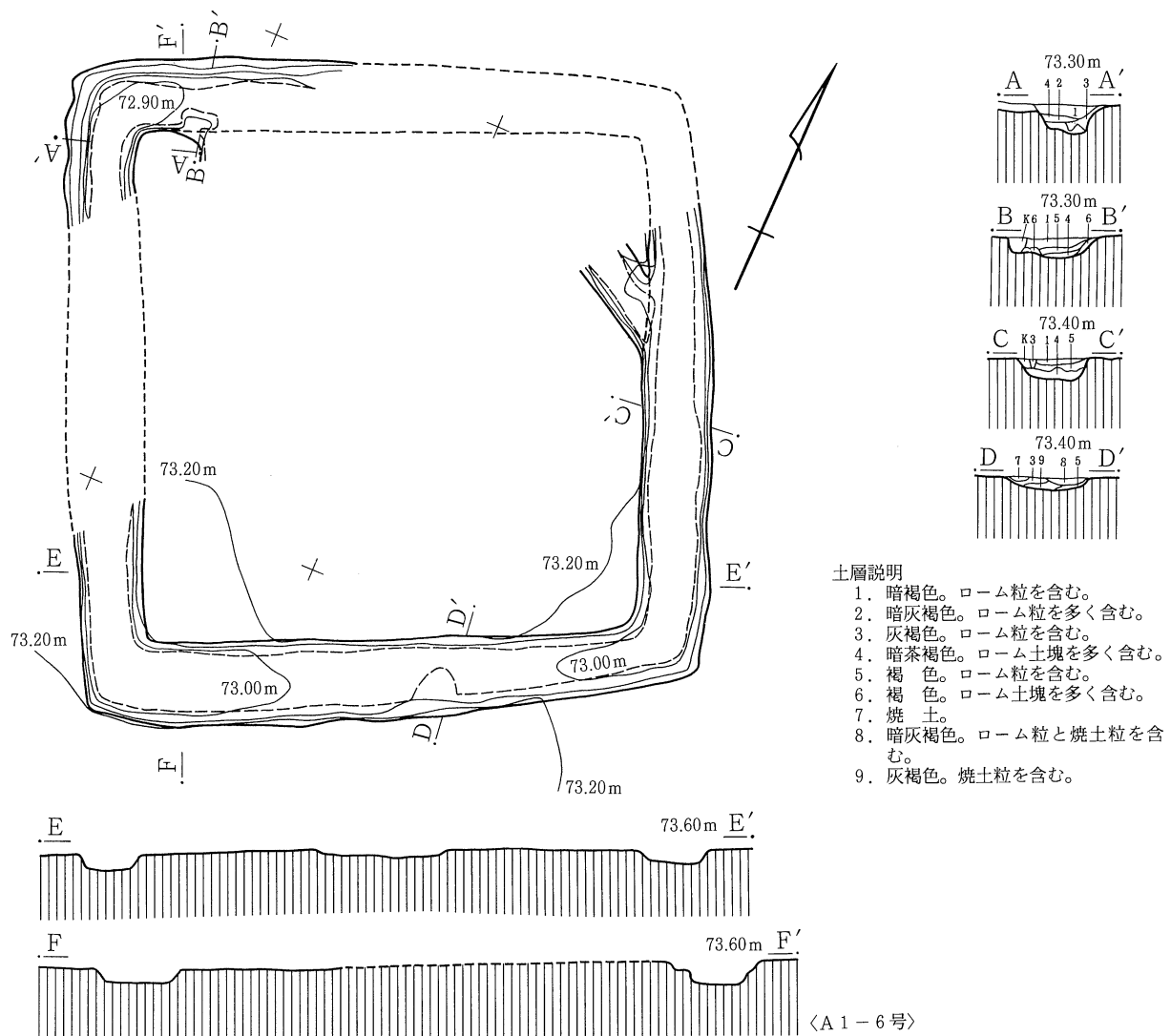
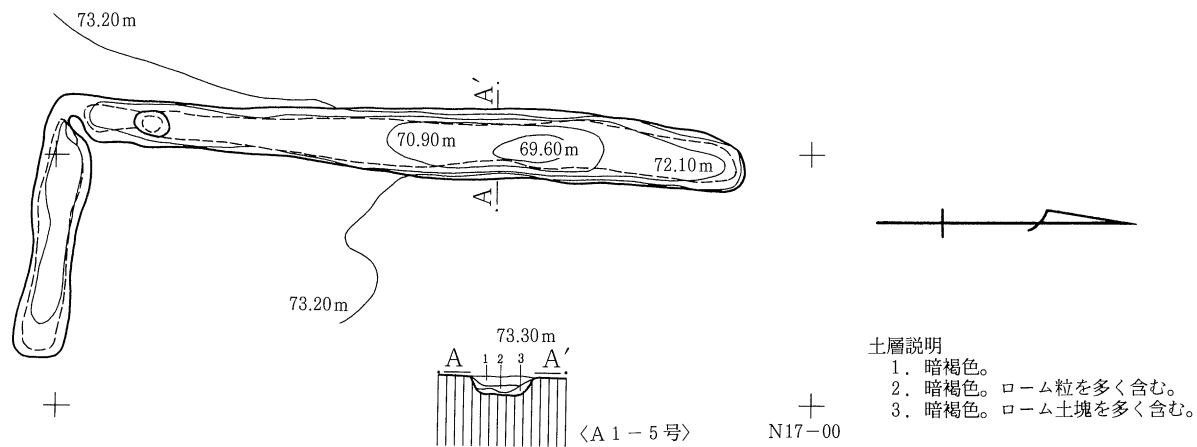
主体部土層説明 (西側)

1. 褐色。
2. 暗褐色。ローム土塊を含む。
3. 褐色。ローム土塊を多く含む。
4. 黄褐色。
5. 褐色。ローム土塊をブロック状に含む。

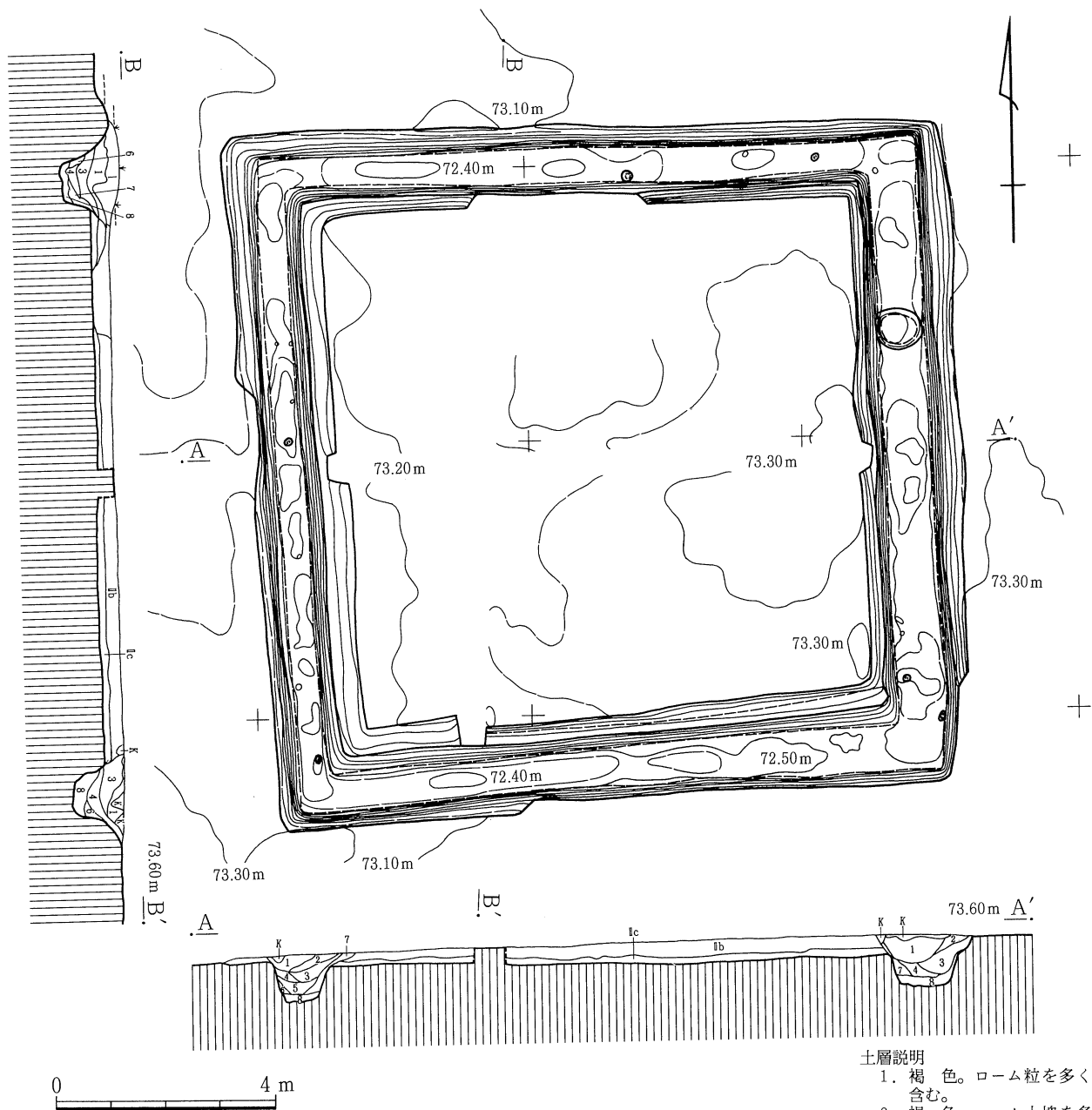
(東側)

1. 灰褐色。ローム土塊を含む。
2. 暗褐色。
3. 褐色。暗褐色土を含む。

第175図 A 1 - 4 号方形区画墓主体部実測図



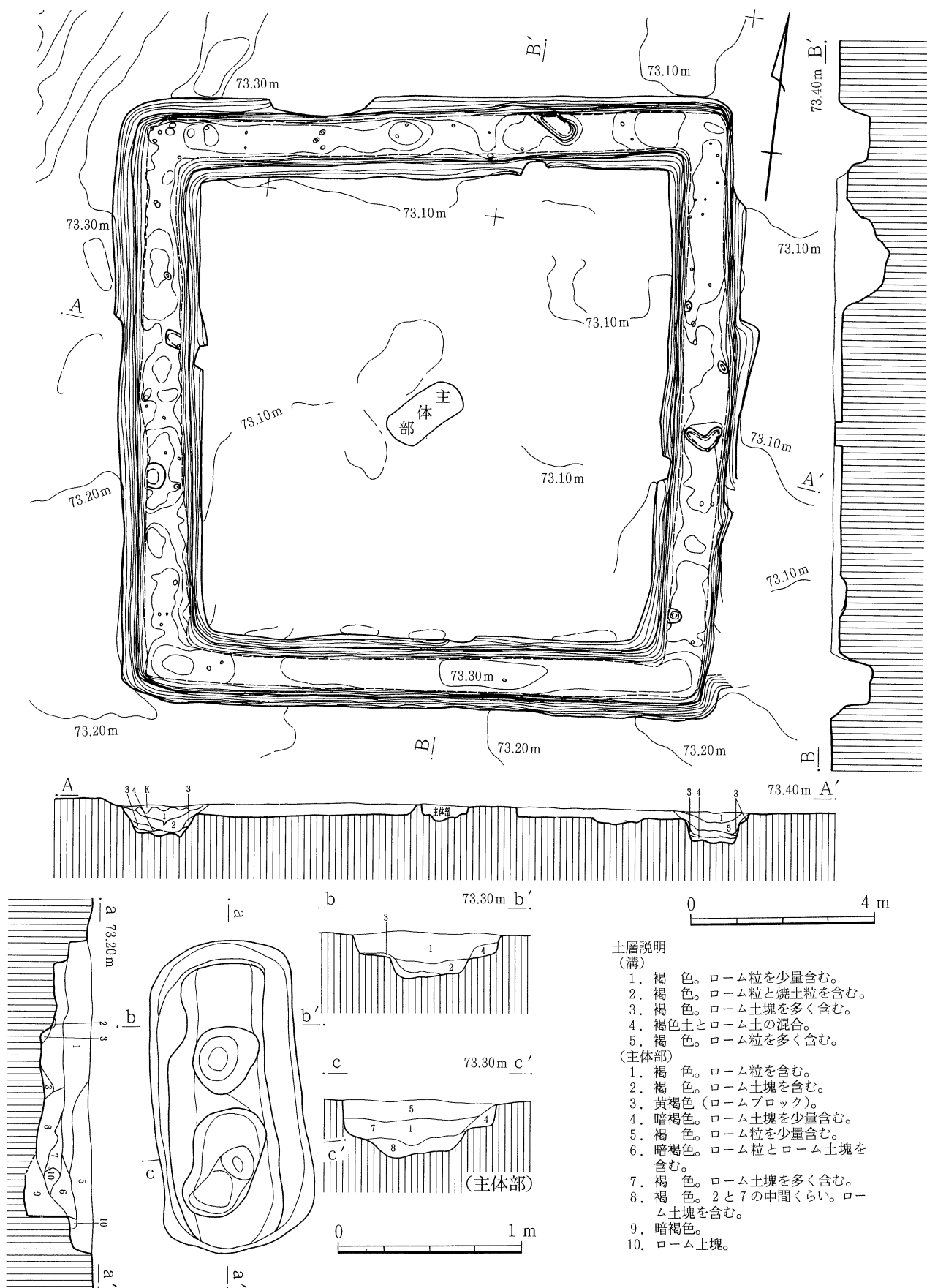
第176図 A 1 - 5、6 号方形区画実測図



第177図 A1-7号方形区画墓実測図

第189図11の須恵器長頸壺の口縁部片で口径が8.5cmを計り、焼成良好、胎土は緻密で両面とも灰色を呈する。

A1-4号方形区画墓は（第174, 175図）A1-1号より西に約6m離れて所在する。形体は方形で規模は周溝上端間で外側長軸14.9m（内側11.9m）、外側短軸14.5m（内側11.5m）、主軸方向は短軸でN-30°-Wを示す。周溝は幅が上端1.1~2.2m、下端0.7~1.1m、深さ35~70cm、覆土は自然



第178図 A 1 - 8号方形区画墓及び主体部実測図

堆積である。主体部は中央西側に2基検出した。東側を第1主体部、西側を第2主体部とすると第1主体部は中央部に近く平面形は長方形で大きさは長さ2.06m、幅0.92m、深さ36cm、主軸方向はE-33°-Nを示す。第2主体部は第1より西に約70cm離れており、形体は長方形であるが幅がある。大きさは長さ1.69m、幅1.20m、深さ13cm、主軸方向はN-24°-Wを示す。また内部に木棺痕が認められた。長さは1.14m、幅0.65m、深さ12cmを測る。出土遺物は認められていない。

A1-5号方形区画墓(第176図)は調査地区の南西側でA1-7号の南東約10mに所在する。北側と西側の周溝の一部を検出した。南側の小谷に傾斜する面に築かれているため自然削平された可能性がある。規模は北側溝の長さ約11m残存、西側溝の長さ4.30m残存、周溝の幅上端0.38~1.18m、深さは最深で30cmである。主軸方向はN-5°-Eを示す。主体部は検出されていない。出土遺物は周溝内より須恵器短頸壺の把手部片がある(第189図1)。色調は両面暗灰色、焼成は普通、胎土に白色粒を少量含む。

A1-6号方形区画墓は(第176図)A1-2号より西へ約1m、A1-4号より北へ7m各々離れて存在する。プランの北西側中央部は現道路のため未調査である。平面形体は方形で規模は周溝上端間の外側長軸推定10.80m(内側推定8.20m)、外側短軸推定10.80m(内側推定8.38m)、主軸方向はN-23°-Wを示す。周溝は幅上端0.98~1.48m、下端0.48~1.00m、深さ15~40cm。南側周溝の覆土に焼土粒が少しみられる。主体部は不明。出土遺物は検出されていない。

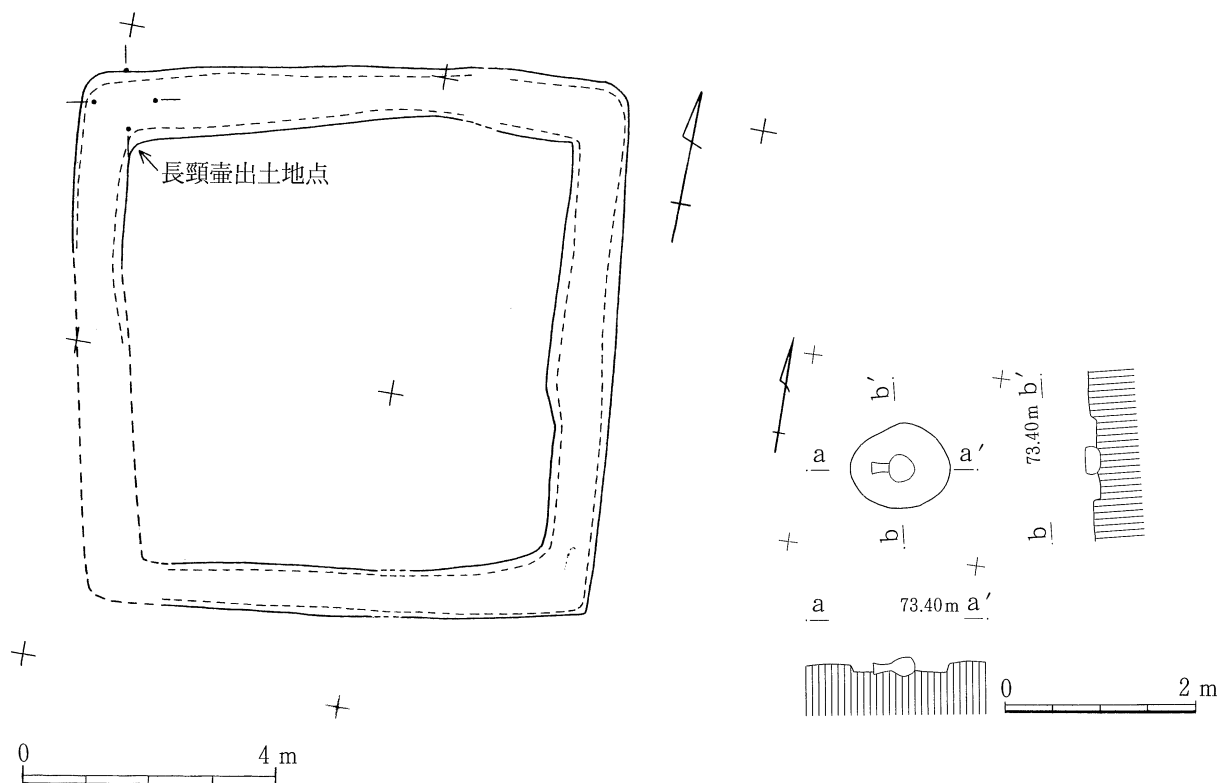
A1-7号方形区画墓は(第177図)調査地区の南西側でA1-5号の北西約10m、A1-6号より南西に約23m離れている。平面形体はやや東西が長い方形を呈する。規模は周溝上端間の外側長軸12.98m(内側9.23m)、外側短軸12.31m(内側8.95m)、主軸方向はN-2°-Wを示す。周溝の幅は上端1.25~1.98m、下端0.43~0.85m、深さ78~97cm。周溝は比較的深く断面形体は逆台形を呈する。覆土上部に盛土崩壊土らしき層1~3を含んでいる。主体部は不明。出土遺物は第189図7と8の須恵器壺と思われる底部片を検出した。7は1/3程度の破片で高台をもち底径は推定13.9cm、色調は外面暗灰色、内面灰褐色、焼成は良好、胎土は緻密である。8は1/6程度の破片でやや開きぎみの高台をもつ。底径は推定で12.6cm、色調は両面とも黒灰色で焼成は良好、胎土は緻密である。

A1-8号方形区画墓は(第178図)A1区では最も南西に位置し、A4-1号より北東へ約3m、A1-7号より南西に約19m離れて所在する。形体はわずかに東西が長い方形で、規模は周溝上端間の外側長軸13.60m(内側10.20m)、外側短軸13.28m(内側9.80m)、主軸方向はN-8°-Wを示す。周溝は断面逆台形で比較的しっかりしているが底部は凹凸が目立つ。幅は上端1.40~1.83m、下端0.65~0.85m、深さ56~92cm、覆土は自然堆積であるが覆土下位に焼土粒が混入する。主体部は中央にやや丸みを帯びた長方形の木棺直葬墓を検出した。大きさは長さ1.72m、幅1.63m、深さ26cm、主軸方向はE-38°-Nを示す。また内部に木棺痕が認められ、大きさは長さ1.40m、幅0.42m、深さ17cm、底部はやや凹凸がみられる。また、周溝内部(方台部)に二重周溝のようなひと回り小さい周溝が存在する(第179図)。外側の周溝から1.10~0.65mの間隔を置く。周溝上端間、外側長軸8.80m(内側7.00m)、短軸8.40m(内側6.80m)、主軸方向は外側の周溝と同じ。周溝の幅は上端60~110cm、下端40~90cm、深さ最大26cmを測る。また、ほぼ周溝内全体に踏み固めが認められる。さらに北西隅の周溝底部より須恵器長頸壺が東西方向に横になった形で出土している(第179図)。また、この二重の周溝が同時期なのか、新旧があるのかは不明である。出土遺物は第189図4~6で4は須恵器長頸

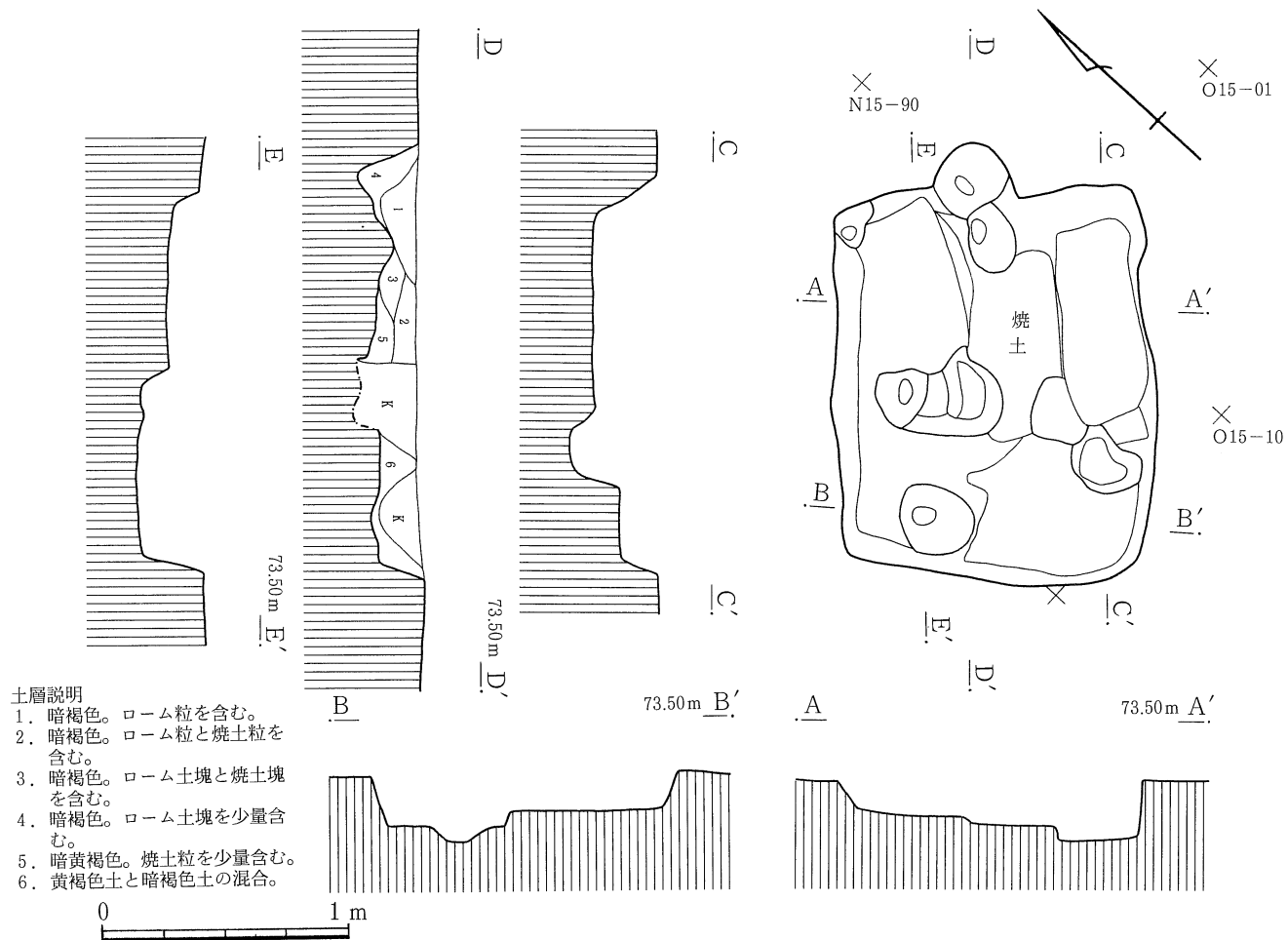
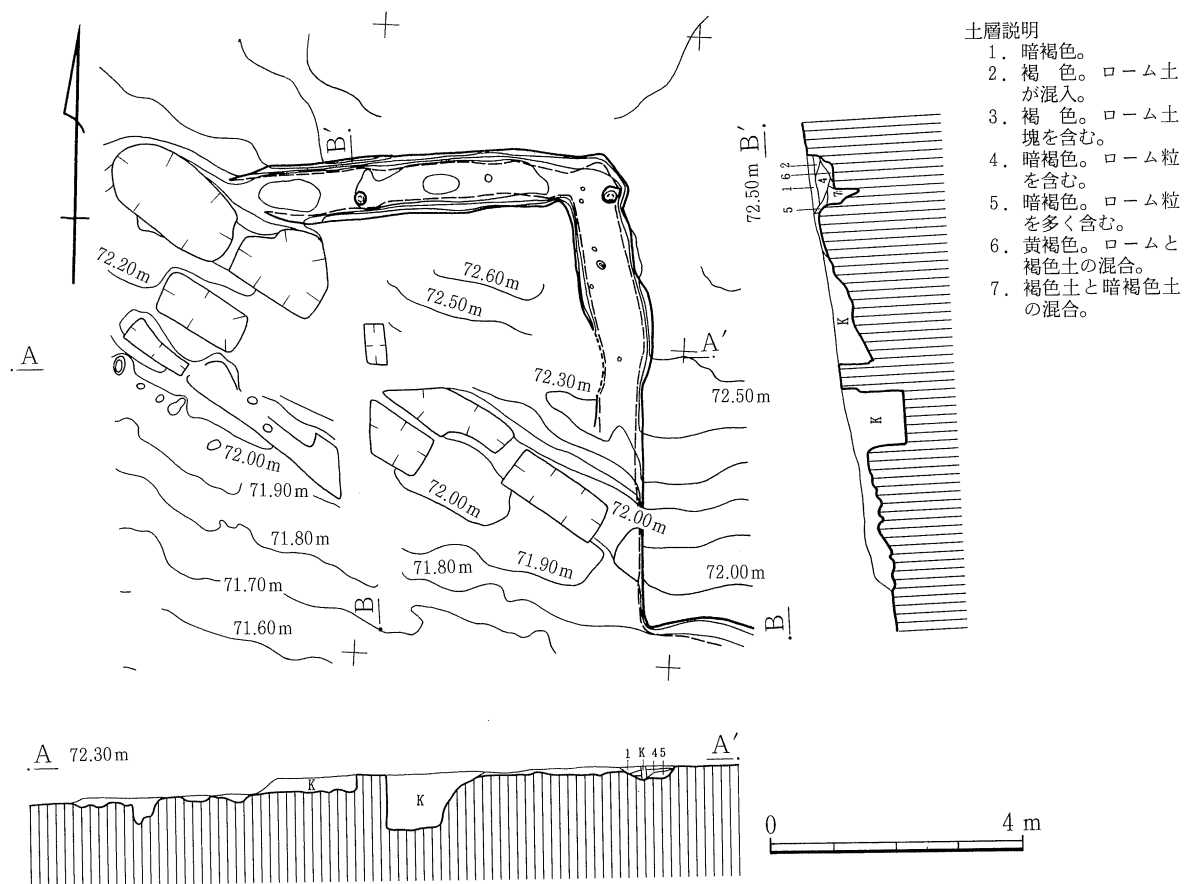
壺で体部と底部が1/3～1/4欠損する。底部は平底で体上部は屈曲する。口縁部は細く、開き方も少ない。口径6cm、体部最大径15.2cm、底径7.5cm、器高20.7cm。色調は外面黒灰色、内面灰褐色で焼成は不良、胎土は緻密である。5は口縁部片1/8程度の残存で外面に稜をもつ。推定口径9.9cm、色調は両面暗灰色、焼成は普通、胎土は緻密である。6は底部片で1/6程度の残存、底部には高台が付きやや中央部が高台より突出する形とみられる。推定口径8.4cm、色調は両面暗灰色、焼成は普通で胎土は緻密である。

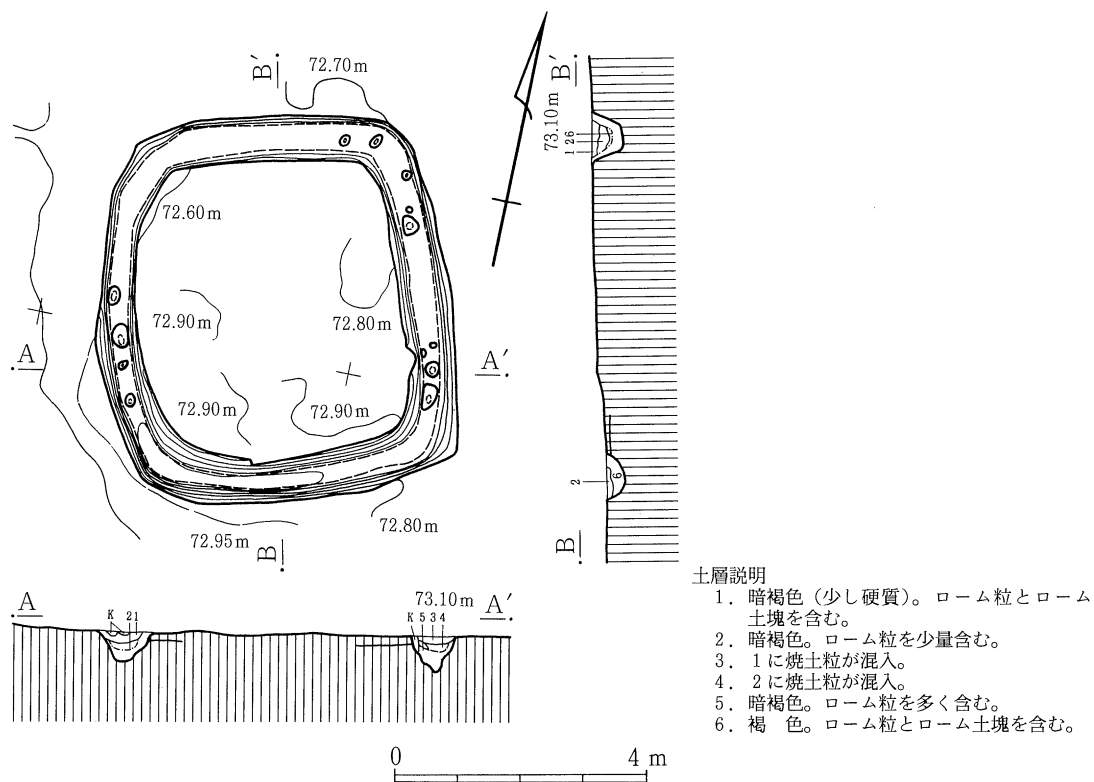
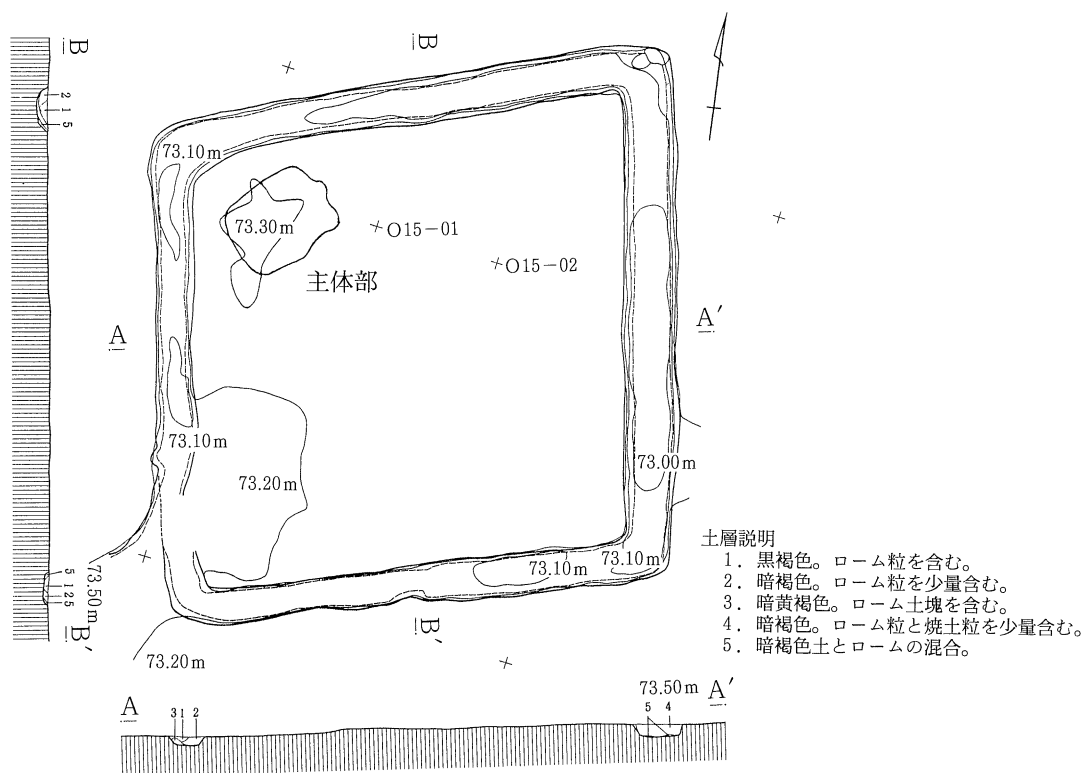
A1-9号方形区画墓は(第180図)調査地区の中央やや南西寄りでA1-1号掘立柱建物跡より東へ約10m離れている。南から入り込む小谷の傾斜地内で北東側付近(北側溝と東側溝の一部)を検出ただけである。また耕作によるイモ穴が多い。周溝は上端幅0.78～1.05m、下端幅0.58～0.70mで主軸方向はN-10°-Wを示し、深さは最深で40cmを計る。主体部は不明であるが周溝内より鉄釘が1点出土している(第189図15)。断面は方形で頭部は円形を呈し折り曲げて作り出している。下半部は欠損。

A1-10号方形区画墓は(第181、182図)調査地区の西側でA1-2号より南へ9m離れて所在する。平面形体はやや歪んだ方形である。規模は比較的小さく周溝上端間の外側長軸8.28m(内側6.85m)短軸8.28m(内側6.98m)、主軸方向はN-17°-Wを示す。周溝は浅く幅上端40～85cm、下端38～60cm、深さ5～20cmを測る。主体部は北西隅寄りに存在する(第181図)。平面形体は方形でやや南北が長い。新しいピットや攪乱が入り底部は凹凸がかなりみられる。また底部の一部に焼土が存在する。大きさは長さ1.78m、幅1.33m、深さ15cmである。木棺痕は不明。出土遺物は第188図17の袋状鉄斧がある。上部と下部を欠損する。長さは推定10.1cm、幅推定4.4cm、厚さ推定2.6cm重さ140gである。

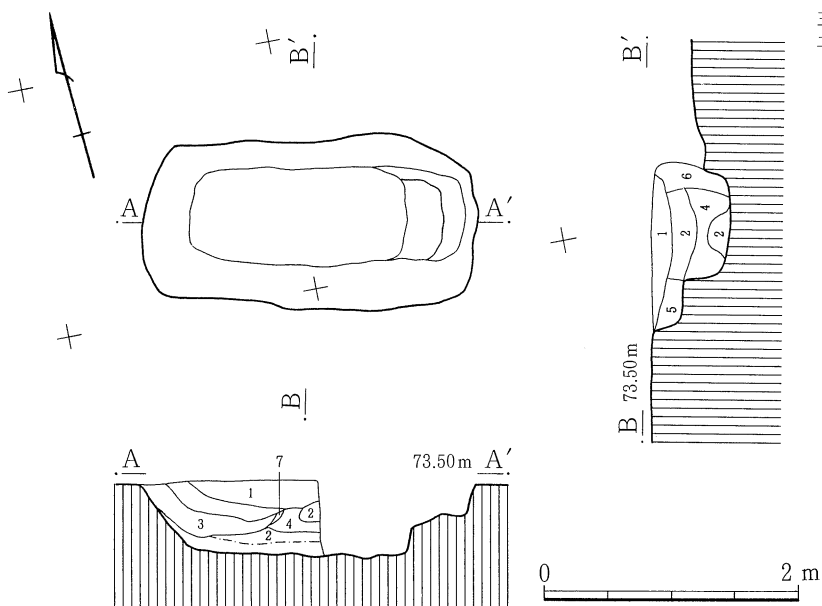
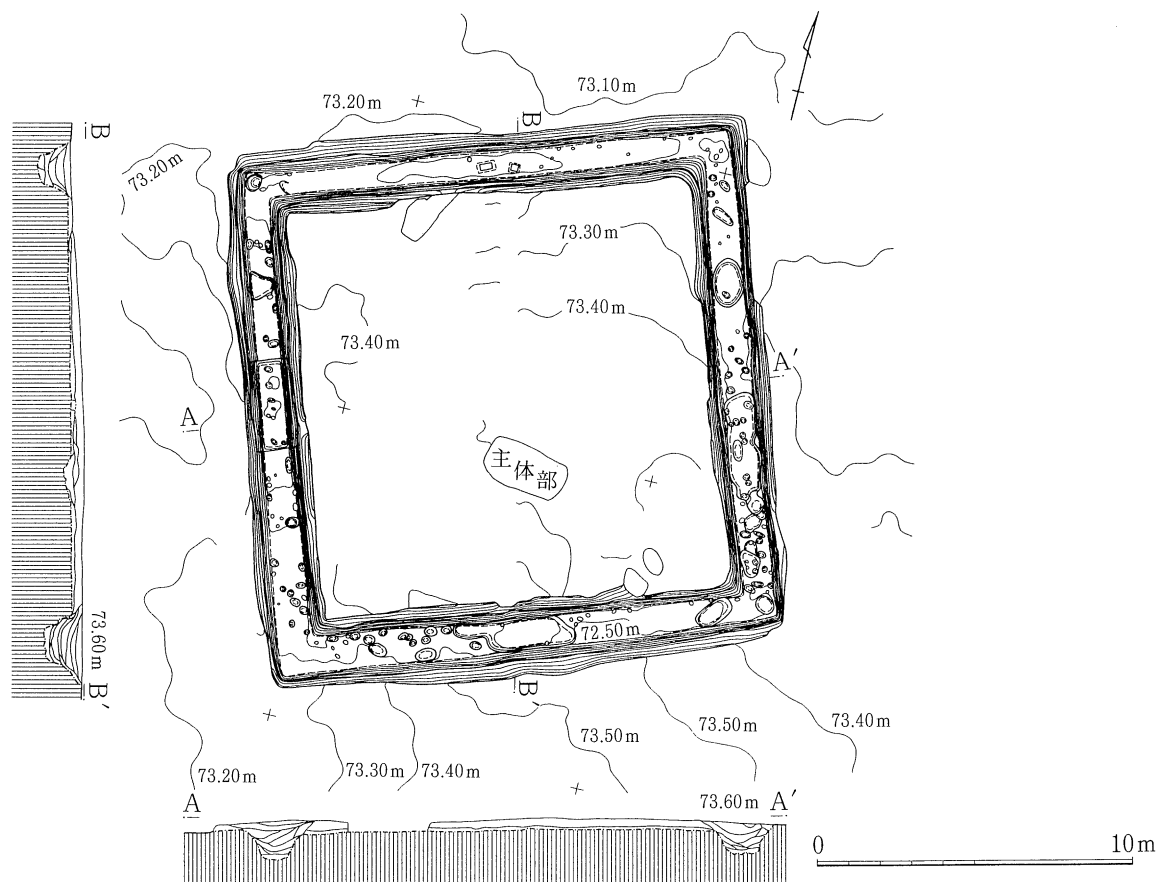


第179図 A1-8号方形区画墓の内側周溝及び須恵器長頸壺出土状況図



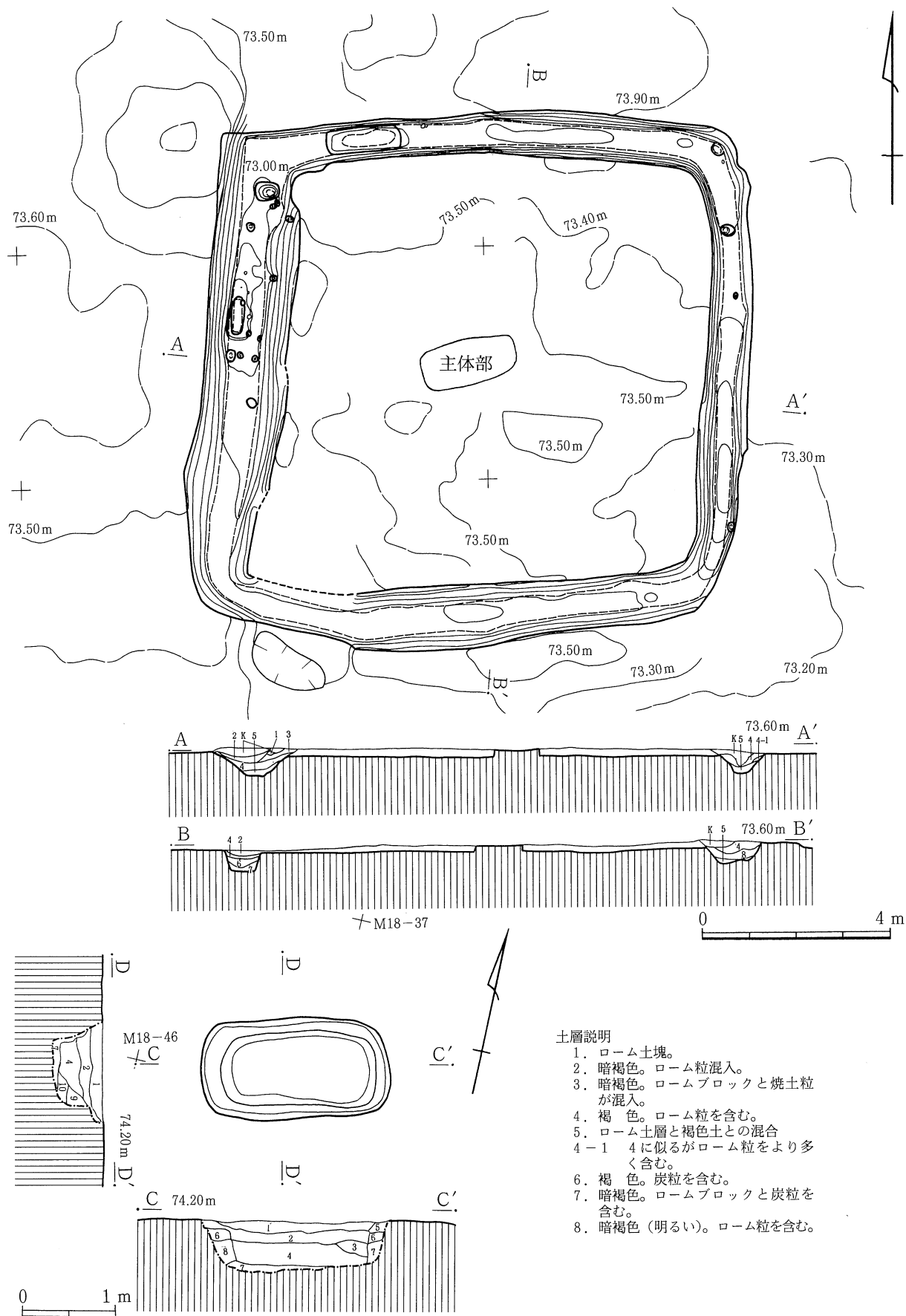


第182図 A 1-10、11号方形区画墓実測図

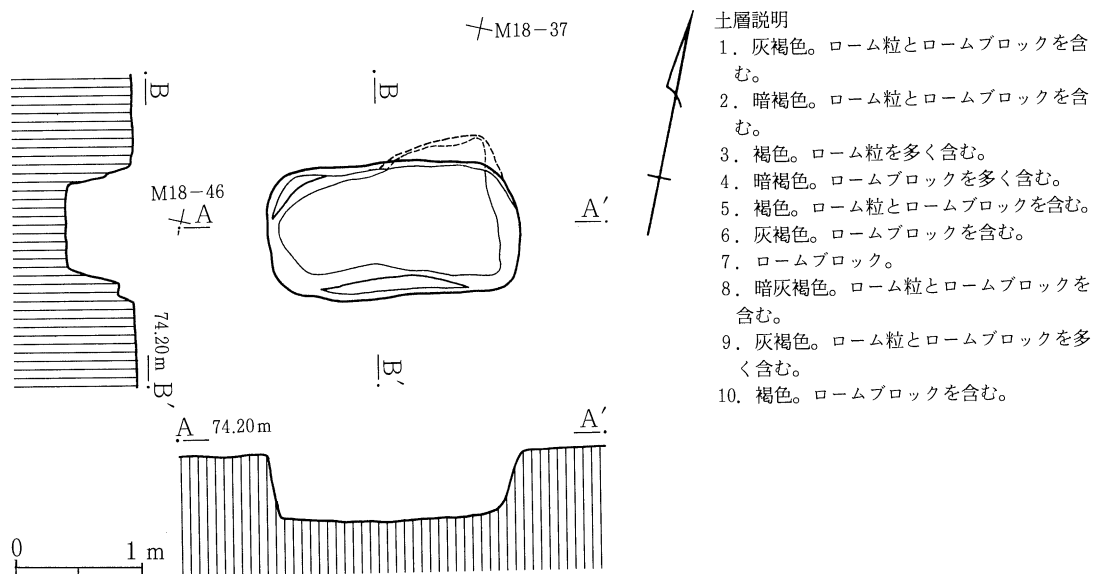


- 主体部
土層説明
1. 褐色。ローム土塊を多く含む。
 2. 暗褐色。
 3. 褐色。
 4. 褐色土と暗褐色土の混合土。
 5. 褐色。ローム土塊を含む。
 6. 暗褐色。ローム土塊を含む。
 7. ローム土塊。

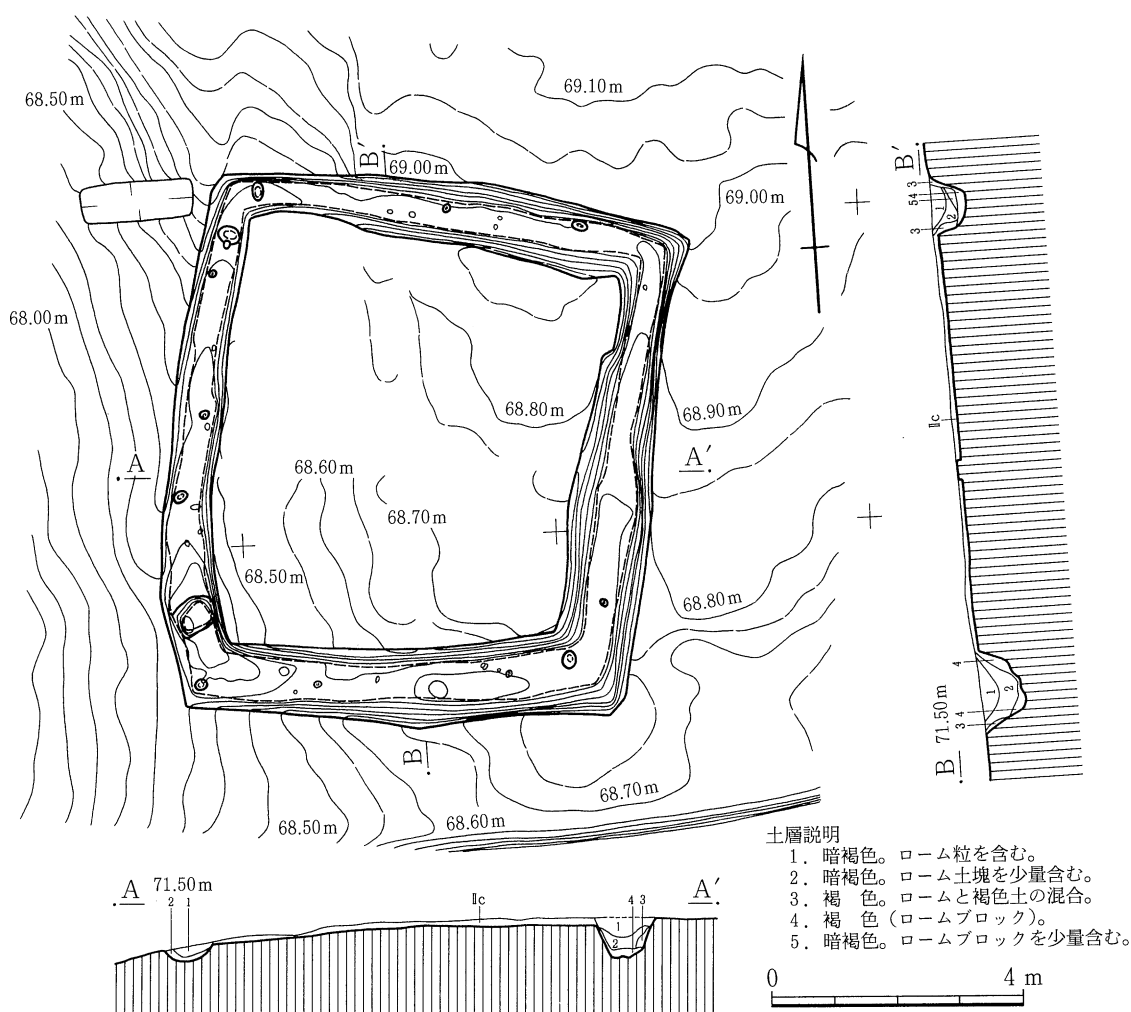
第183図 A 1-12号方形区画墓及び主体部実測図



第184図 A 1-13号方形区画墓及び主体部実測図



第185図 A 1-13号方形区画墓主体部掘り方実測図



第186図 A 1-14号方形区画墓実測図

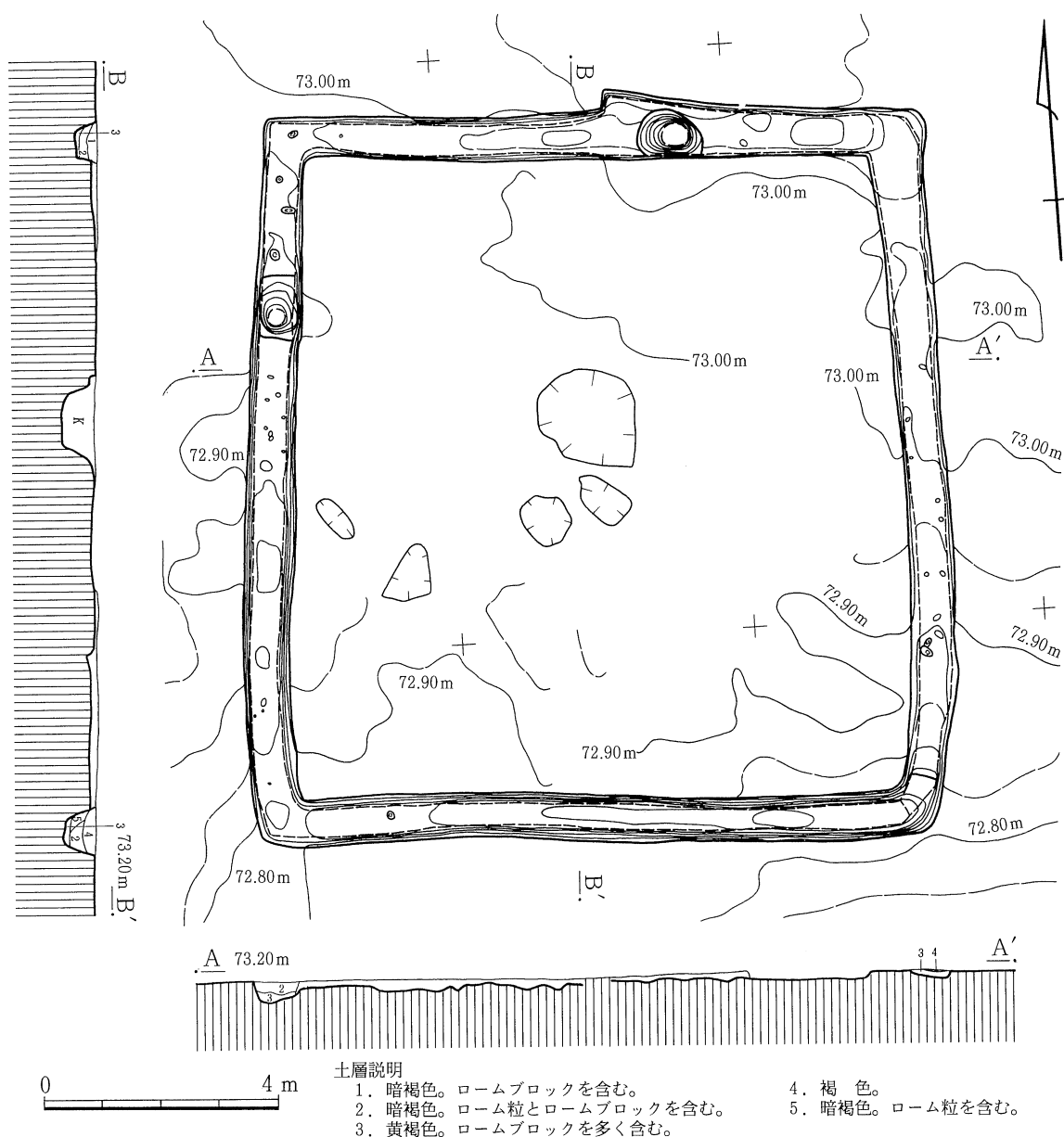
A 1-11号方形区画墓は（第182図）調査地区の最も北西に位置し、A 1-4号より北西へ約21m離れている。平面形体はやや丸みを帯びた方形で、規模は周溝外上端間の長軸6.15m（内側4.72m）、下端短軸5.60m（内側4.18m）、主軸方向はN-17°-Wを示す。周溝は上端幅58cm~84cm、下端幅10~45cm、深さ32~58cmである。主体部と出土遺物は検出できなかった。

A 1-12号方形区画墓は（第183図）A 1-1号より北東へ約24m離れて所在する。平面形体は方形で規模は最も大きく周溝上端間の外側長軸17.40m（内側13.00m）、短軸16.60m（内側12.80m）、主軸方向はN-19°-Wである。周溝は断面逆台形で上端幅1.80~2.40m、下端幅0.70~1.10m、深さ0.9~1.3mを測る。底部はピットなど凹凸が多い。覆土は自然堆積である。主体部は中央やや南寄りに検出した。長方形の土坑で、大きさは長さ2.67m、幅1.37m、深さ61cmを測る。覆土は褐色のローム土塊で裏込めしており、木棺痕が土層断面で一部に確認された。東側の立ち上がりは2段となる。出土遺物は須恵器の長頸壺の底部片と土師器杯の底部片、鉄釘2本、砥石1点である。須恵器長頸壺は（第189図10）底部1/4程度の残存で底部はやや幅広く底径12.3cmを計り、ハの字状に開く高台をもつ。また底部は高台の端部付近まで下に突出すると推定される。色調は両面とも暗灰色一部黒灰色、焼成は普通、胎土は緻密である。土師器杯は（第189図9）底部1/4程度の残存、底径は7.4cm、体部外面下端部は横方向のヘラケズリ、内面は指によるナデ、底部は回転させながらヘラによって削っている。鉄釘（第188図13）は下部が欠損し断面方形で頭部は折り曲げて平面が長方形となる。第188図14の鉄釘は上部を欠損し断面は方形で厚さは6mmである。13と14は同一個体の可能性がある。第188図16は砥石片である。

A 1-13号方形区画墓は（第184図）調査地区の中央やや西寄りに位置し、A 1-12号より南東へ約16m離れて所在する。平面形体は方形であるが東側溝がやや短かく南北の溝がわずかに張っており北西隅を除きやや丸みを帯びている。規模は周溝上端間の外側長軸11.64m（内側8.98m）、外側短軸11.50m（内側9.22m）で主軸方向はN-5°-Eを示す。周溝は断面逆台形であり上端幅0.79~1.82m、下端幅0.22~0.65m、深さ40cm前後である。覆土は自然堆積であるが一部に焼土粒や炭粒の混入がみられる。主体部は中央付近に位置し丸みを帯びた方形の土坑がある（第184、185図）。大きさは長さ2.00m、幅1.10m、深さ54cmで主軸方向はE-12°-Nを示す。内部に木棺痕が土層観察より認められ丸みを帯びた方形で大きさは長さ1.40m、幅0.70m、深さ47cmを計る。覆土は暗褐色土が主でローム粒を少量含んでいる。掘り方は少し北東側がオーバーハングしている。出土遺物は特に認められない。

A 1-14号方形区画墓は（第186図）調査地区中央南端に所在する。A 1-16、17号などとは南から入る小谷を挟んで西に向かい合う様な位置である。A 1-9号より南東へ約50m離れている。西側はすでに谷への傾斜がはじまっている地点でもある。平面形体は方形であるが東側溝が少し短かく、それ以外の溝はやや張っており少し丸みを帯びて歪んでいる。規模は周溝上端間の外側長軸8.72m（内側7.63m）、短軸6.57m（内側5.60m）で主軸方向はN-10°-Eを示す。周溝は断面逆台形であるが西側は地形的にやや削平されている。幅は上端0.59~1.37m、下端0.28~0.65m、深さ23~70cmを測る。覆土は自然堆積とみられ、ローム粒を含む暗褐色土が主体である。主体部と遺物は特に認められない。

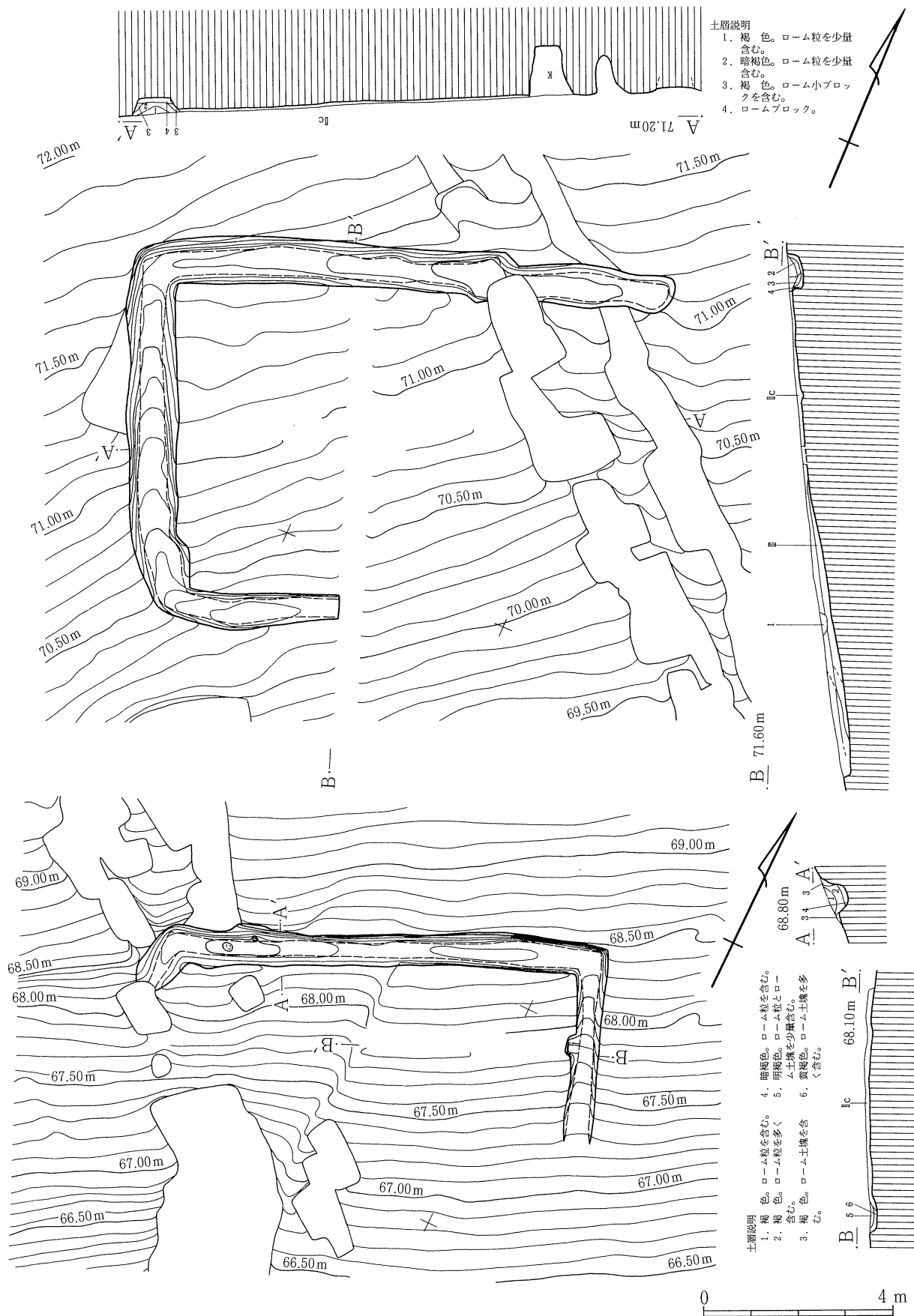
A 1-15号方形区画墓は（第187図）調査地区の中央部に位置し、当地区の中では最も東に存在す



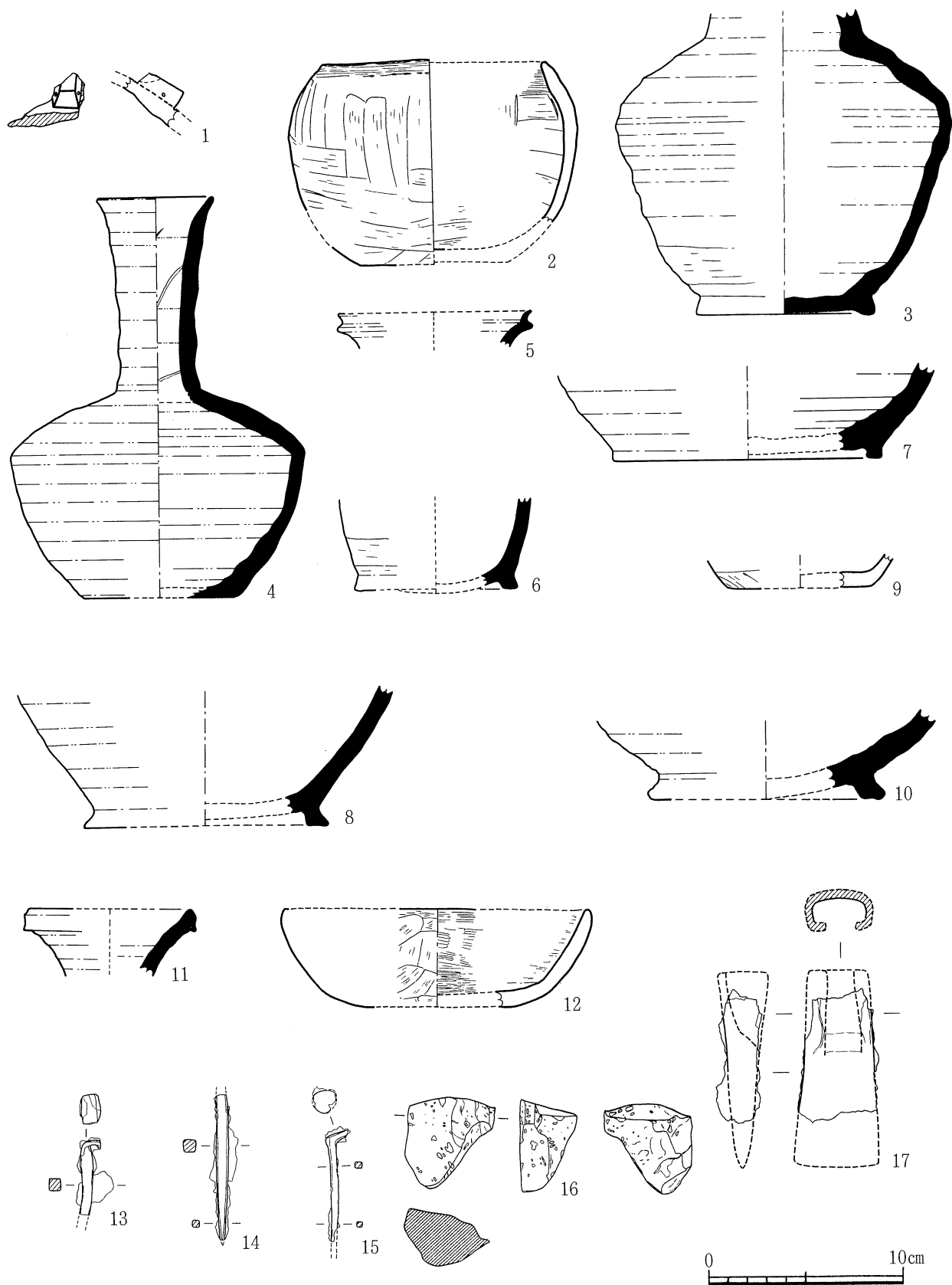
第187図 A 1 - 15号方形区画墓実測図

る。A 1 - 13号より東へ約40m離れている。平面形体は方形であるがやや北側溝が短かく台形状である。規模は周溝上端間の外側長軸12.48m（内側10.83m）、短軸12.02m（内側10.40m）で主軸方向はN - 4° - Eを示す。周溝は比較的狭く幅は上端0.70~0.98m、下端0.30~0.79m、深さ18~55cmを測る。覆土は自然堆積とみられ褐色土が主体である。主体部、遺物とも検出されていない。

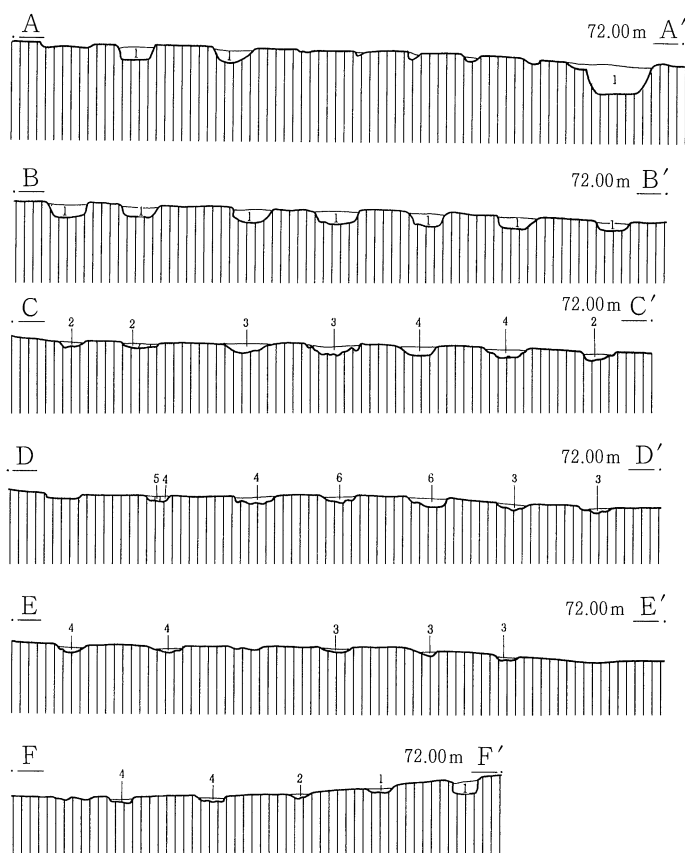
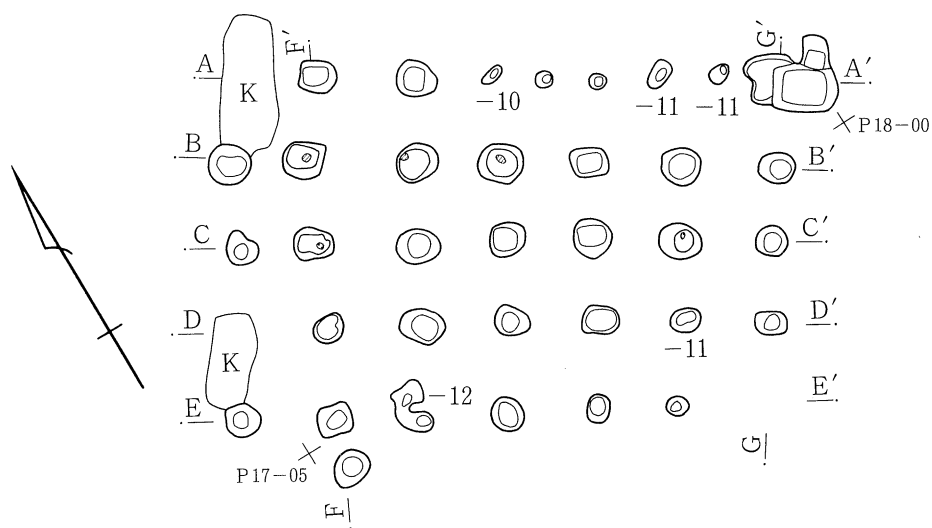
A 1 - 16号方形区画墓は（第188図）調査地区の南東側に位置し、南から入り込む小谷の斜面上に立地している。A 1 - 5号から南東に約18m、A 1 - 17号からは北西に約10m離れて所在する。斜面のため南東側は既に削平されている。平面形体は長方形で、規模は周溝上端間の外側長軸が12m以上、外側短軸が8.30m（内側6.50m）で主軸方向はN - 22° - Wを示す。周溝は西側溝と北側溝の大部分及び南側溝の一部を検出した。幅は西側溝最大で上端1.15m、下端0.70m、深さ37cmである。覆土は



第188図 A 1-16、17号方形区画墓実測図

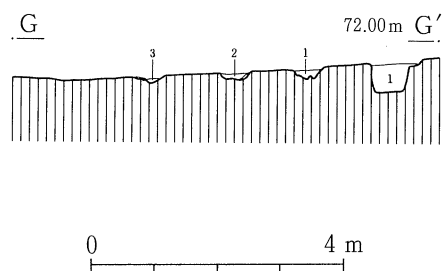


第189图 A 1区方形区画墓出土遺物実測図



土層説明

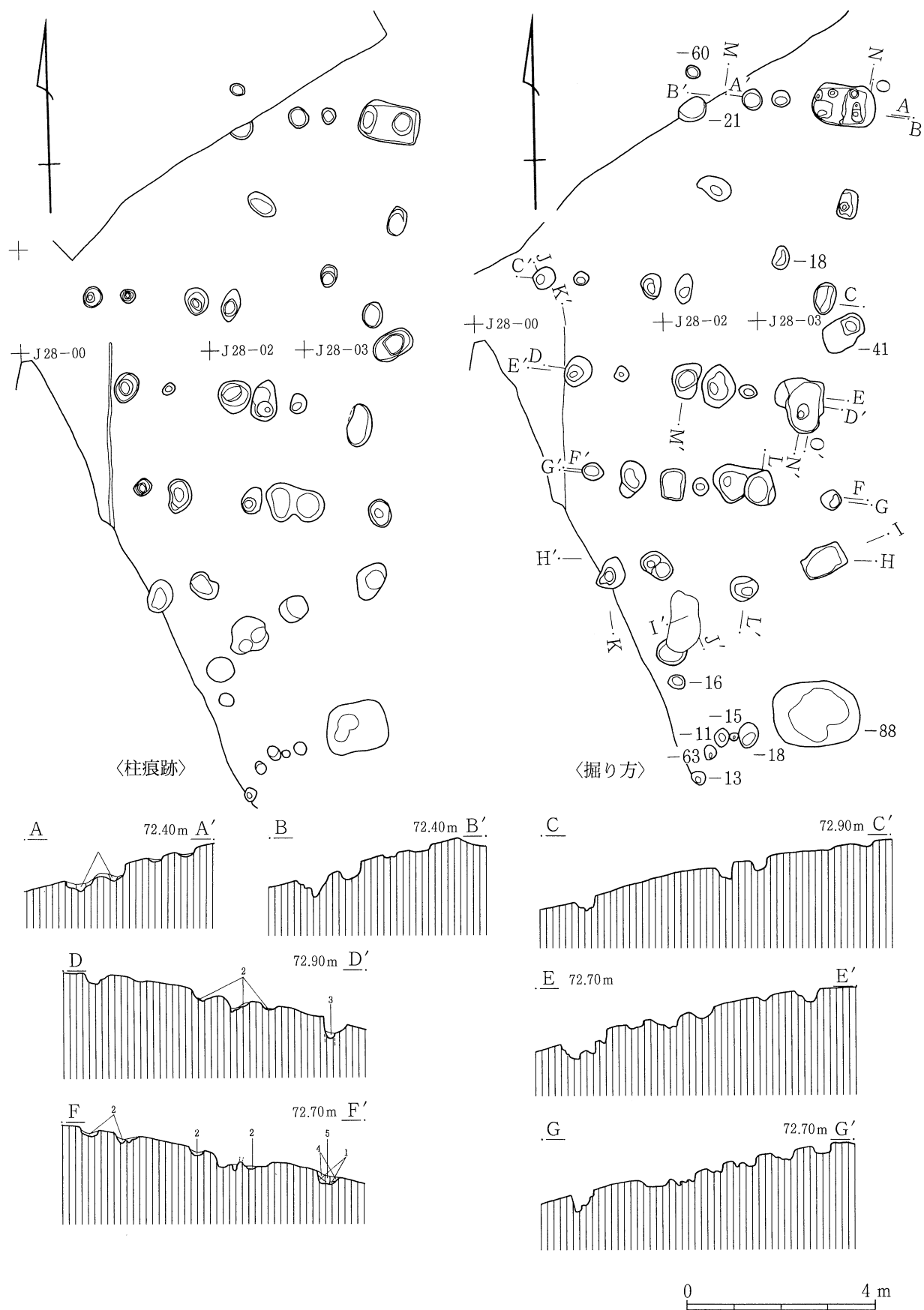
1. 灰褐色。ローム粒を含む。
2. 暗褐色。ローム粒を含む。
3. 暗灰褐色。ローム粒を含む。
4. 暗灰褐色。ローム土塊を含む。
5. 粘土。
6. 暗灰褐色。ローム土塊を多く含む。



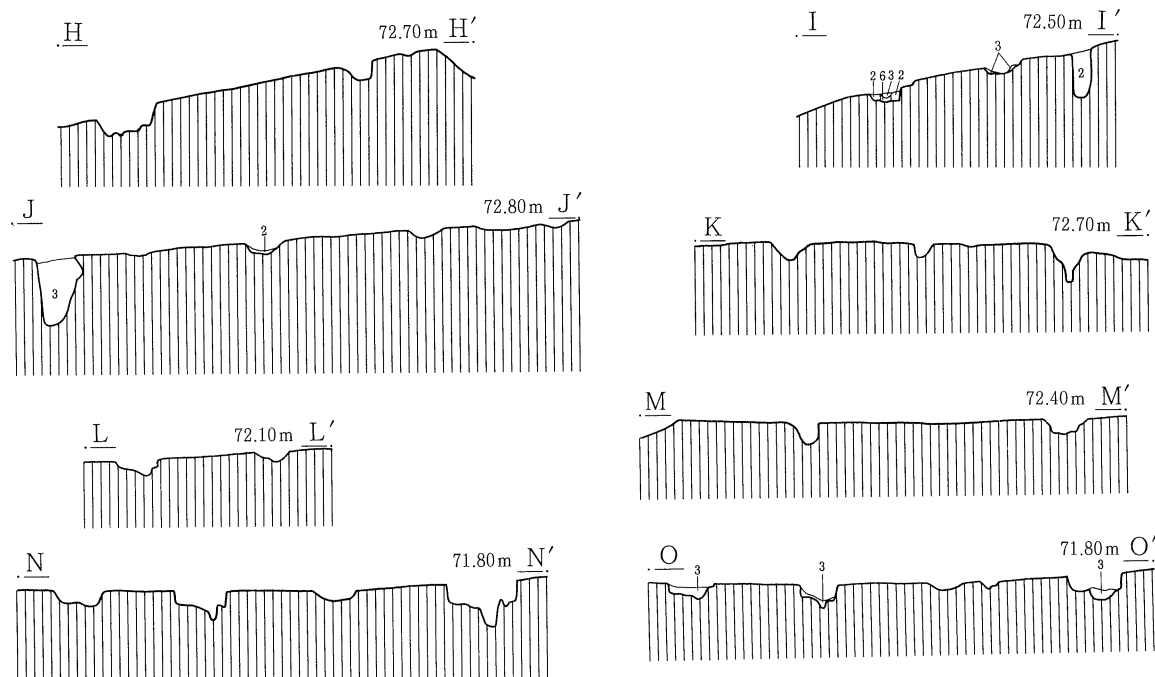
第190図 A 1-1号掘立柱建物跡実測図



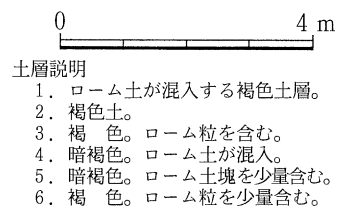
第191図 A 1-1号掘立柱建物跡出土遺物実測図



第192図 A 1 - 2 号掘立柱建物跡実測図(1)



第193図 A1-2号掘立柱建物跡実測図(2)



自然堆積で、主体部と出土遺物とも特に検出されていない。

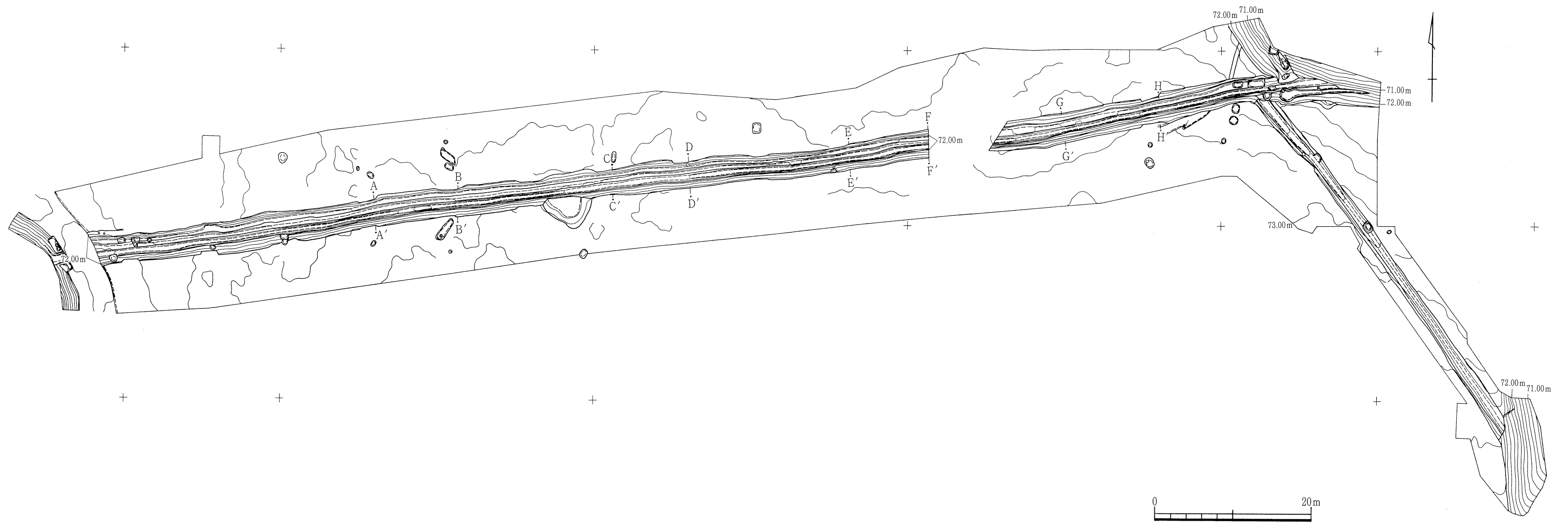
A1-17号方形区画墓は(第188図) A1-16号より南東約10m離れて所在し、最も南側で小谷に向う斜面上に立地する。形体は長方形の可能性はあるが斜面のため北側溝から東側溝の一部だけの検出である。規模は北側溝で上端長さ9.60m、下端9.24m、東側溝は上端長さ4.20m以上

で主軸方向はN-23°-Wを示す。周溝幅は上端最大0.82m、下端0.48m、深さ62cm、覆土は自然堆積であり、主体部と出土遺物は特に認められていない。

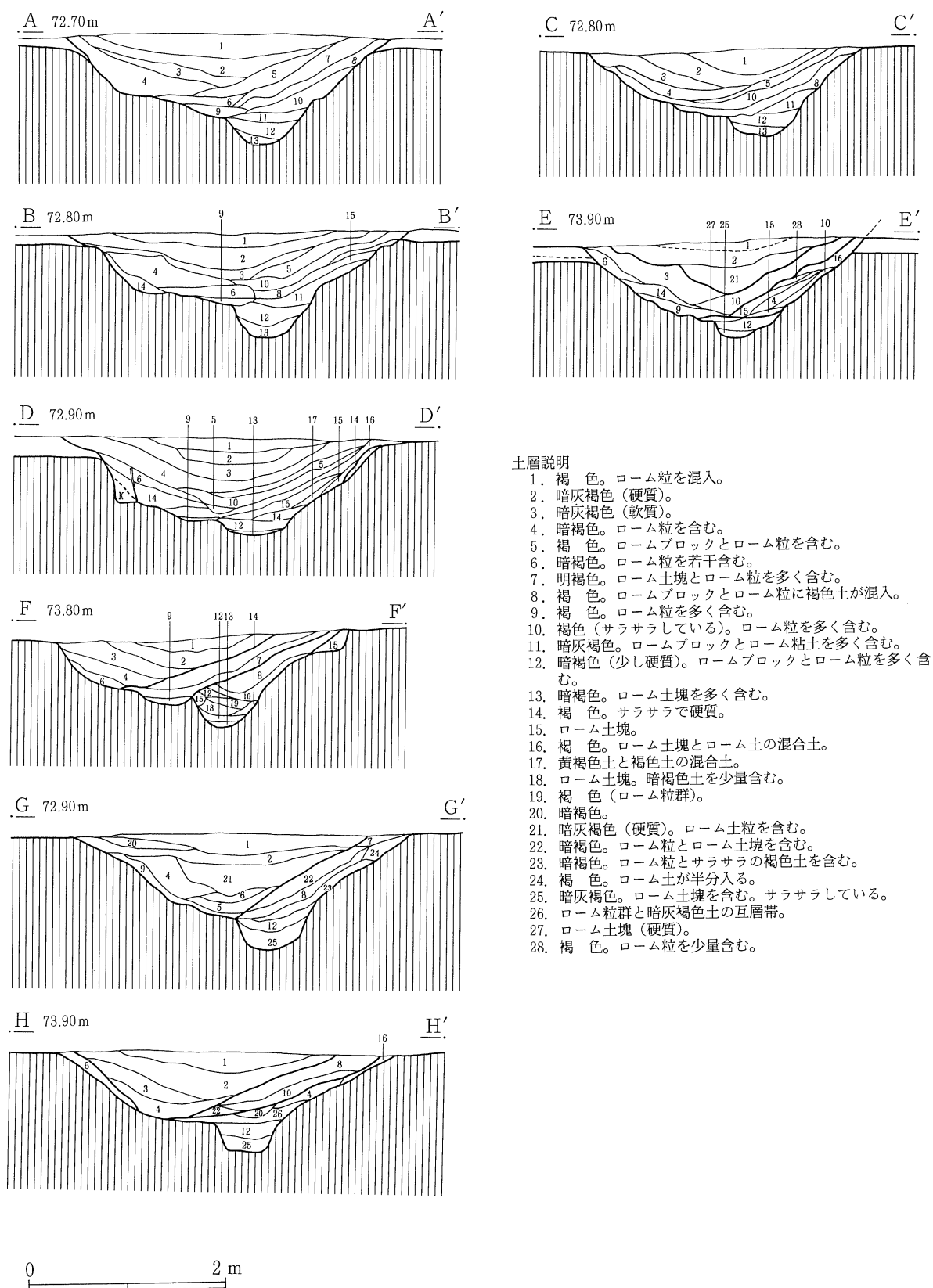
掘立柱建物跡は(第106図) 南西側で南から入り込む小谷を望む縁辺部に1棟分(A1-1号)と北東側の高坂方面からの開析谷を望む縁辺部に2棟分以上(A1-2号)の2ヶ所に存在する。

A1-1号掘立柱建物跡は(第190図) 4×6間の総柱で、長軸8.45m(柱穴中心間)、短軸5.42m(同)、主軸方向はN-31°-Eを示す。柱穴は掘り方の平面形体が小型の円形、円形、方形などがあり南東隅は検出されていない。大きさは最大で北東隅の上端が長軸1.04m、短軸0.78m、深さ45cmである。深さは10~20cmの残存が多く、また柱のあたり痕のあるものが5ヶ所認められている。南側と東側の1列が底の可能性も考えられる。出土遺物は第191図1が土師器杯の底部片で回転ヘラ削りがなされている。色調は両面淡燈褐色、焼成は少し不良で胎土に1mmくらいの小礫を含む。2は須恵器壺の胴上部片で丸みを帯びて内傾する形で外面には自然釉が付着する。色調は外面淡緑灰色、内面白灰色で焼成良好、胎土は緻密である。

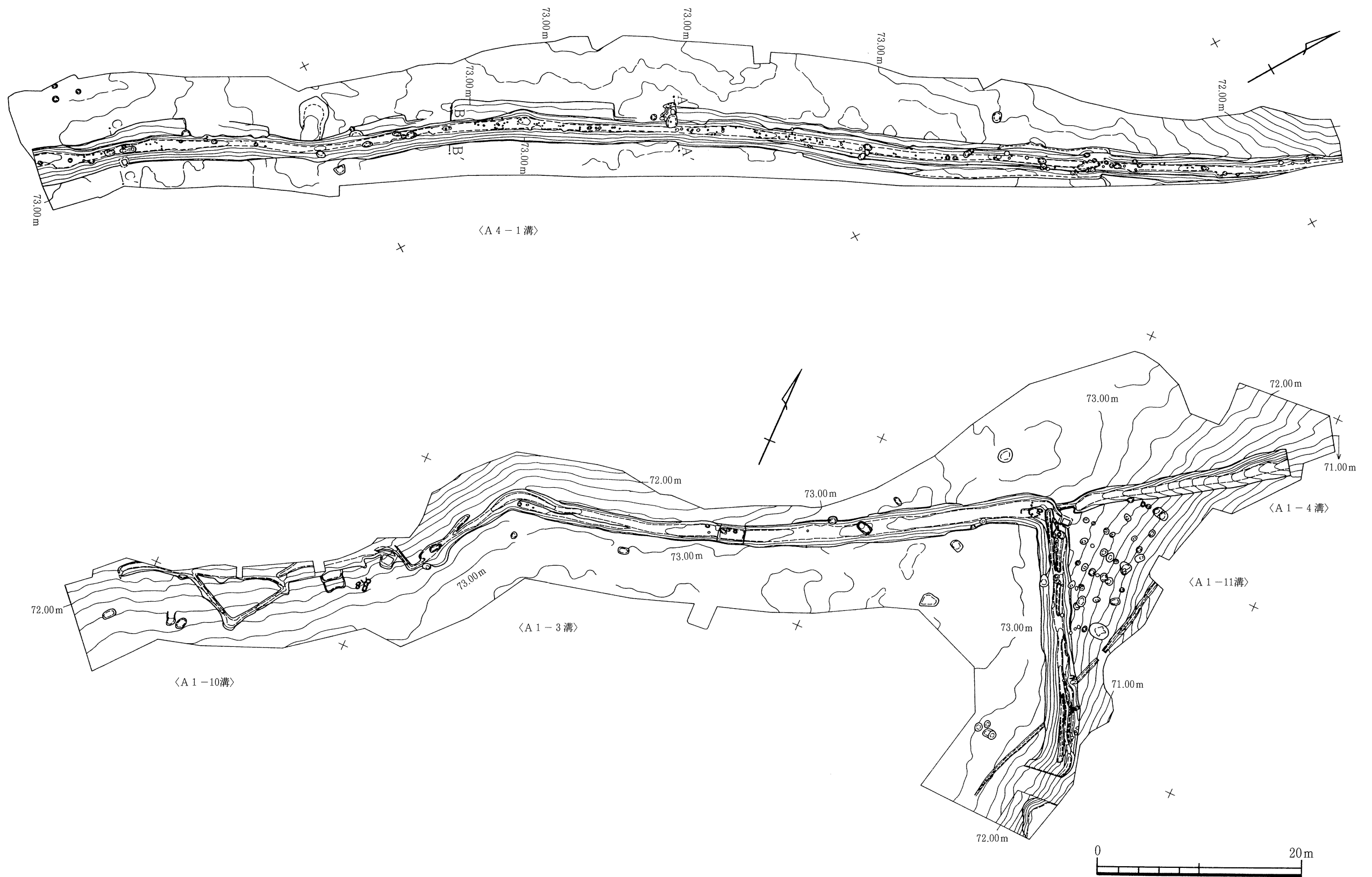
A1-2号掘立柱建物跡は(第192図) 39~40本のピットによって構成されている。A1-3、4号溝の間のほとんど斜面部に立地する。建物跡として確実に組み合わせる例は認められないが、いくつかのピットが直線で結ばれ等間隔であり柱痕跡も存在したため2×3間程度の規模が2棟以上存在した可能性がある。大きさは南東隅が長径が1.80m、短径1.38m、深さ88cmを測り最も大きい。出土遺物は検出されていない。



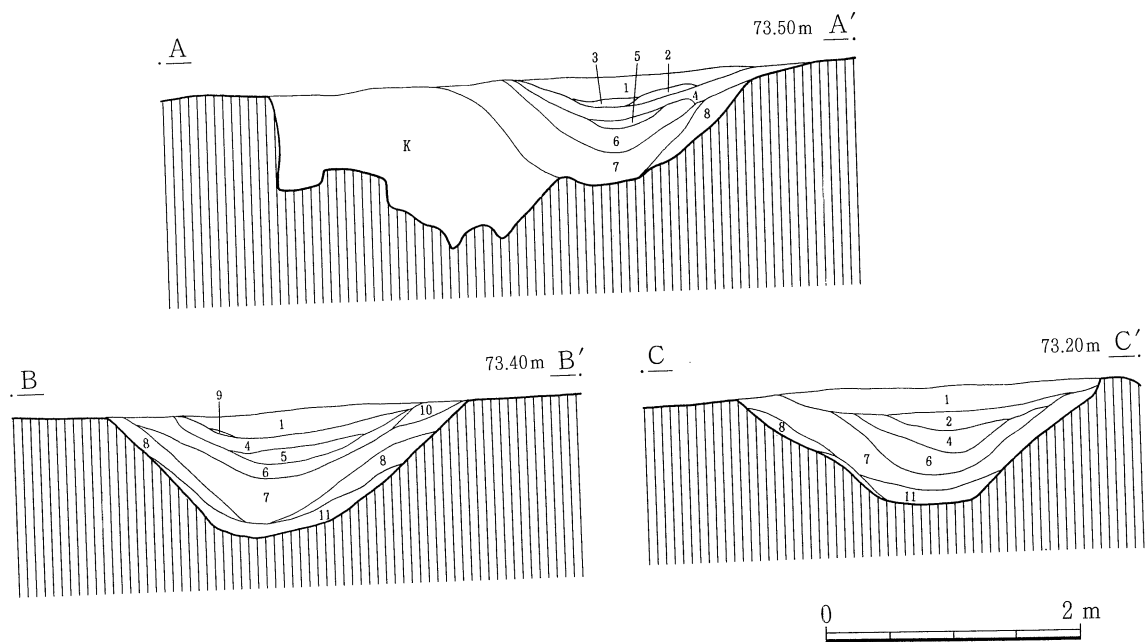
第194図 A 1－1、2号溝状遺構実測図



第195図 A 1 - 1号溝状遺構土層セクション実測図



第196図 A 4-1号、A 1-3、10、11号溝状遺構実測図

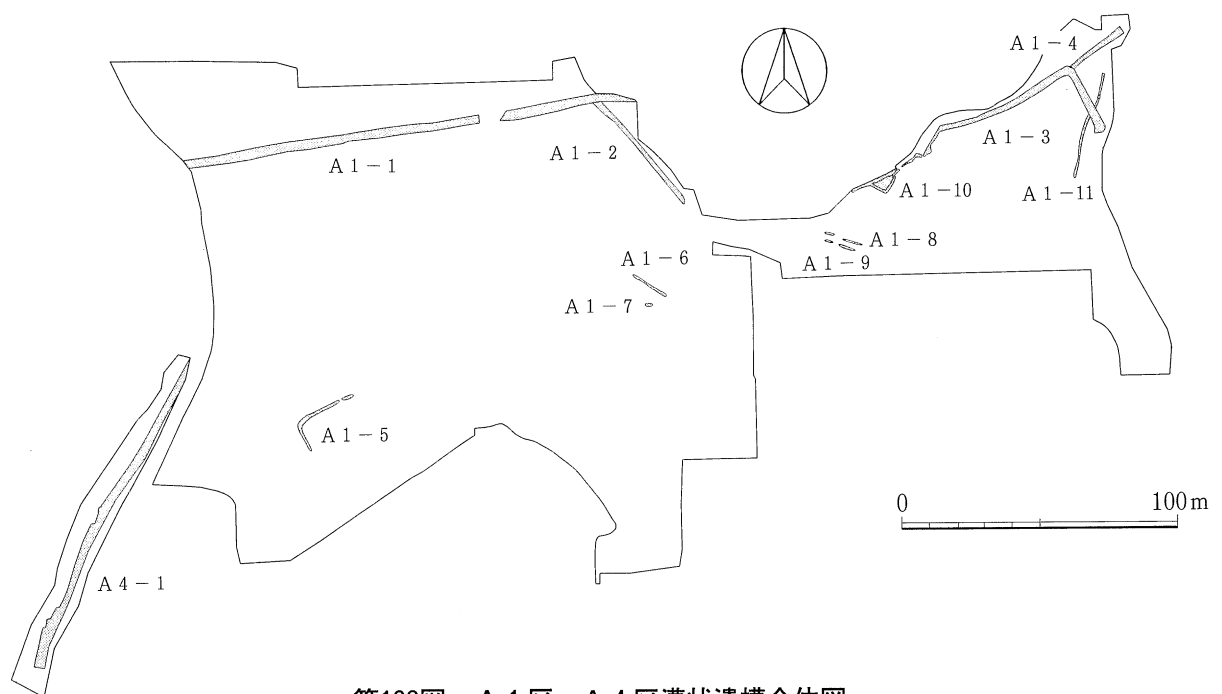


土層説明

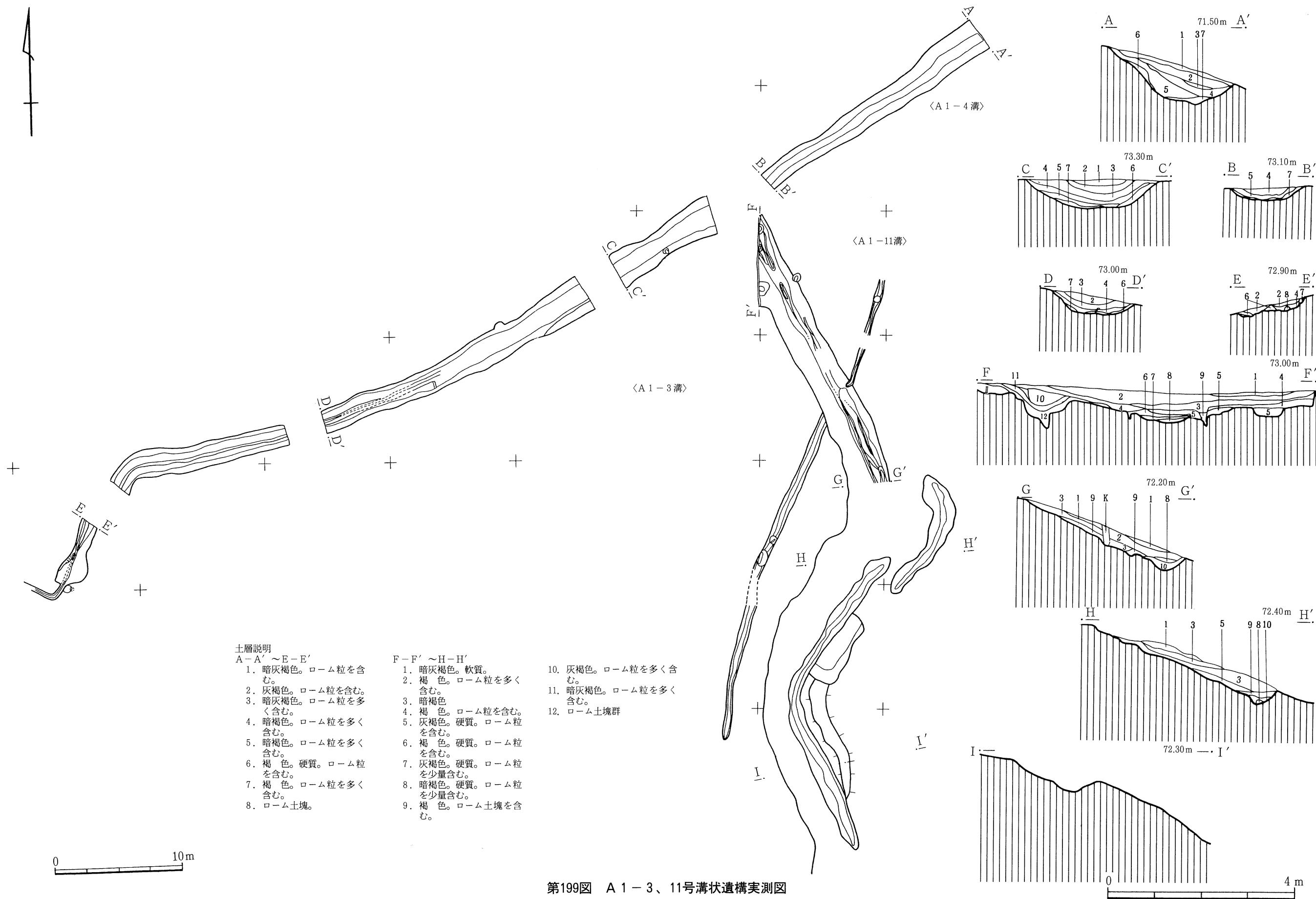
1. 明褐色。硬質。ローム土塊を含む。
2. 明褐色。硬質。ローム土塊を多く含む。
3. 明褐色。硬質。ローム土塊をブロック状に含む。
4. 明褐色。硬質。ローム粒を多く含む。
5. 暗褐色。硬質。ローム土塊を多く含む。

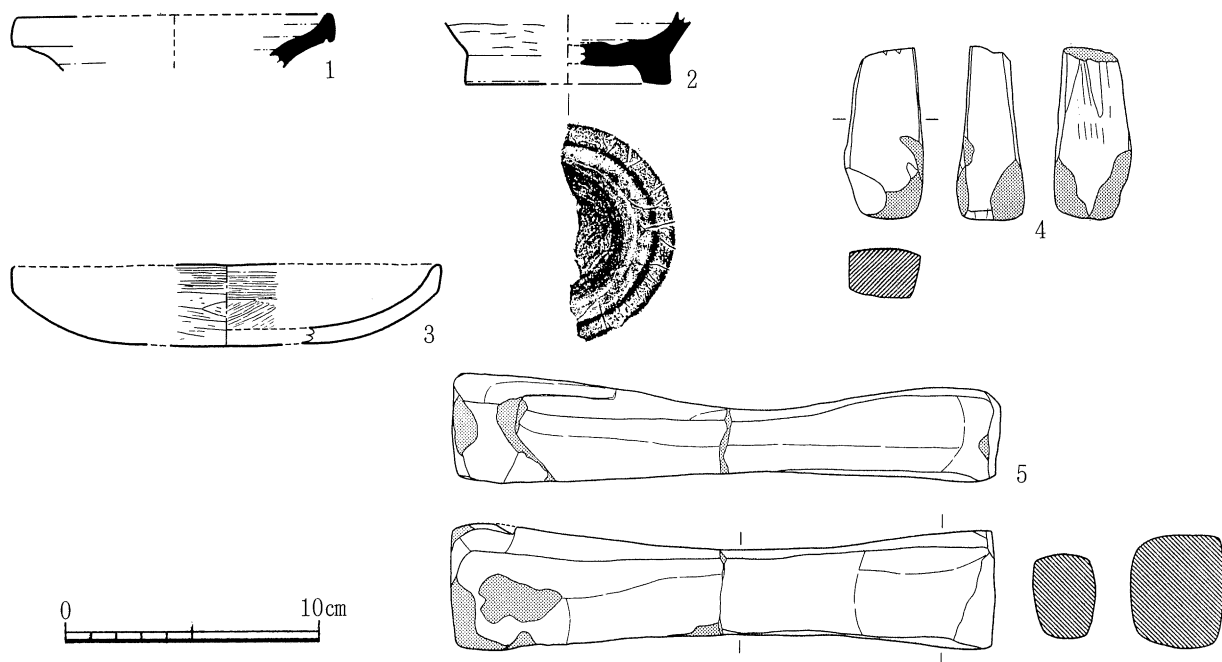
6. 暗褐色。ローム土塊を少量含む。
7. 暗褐色。ローム粒を多く含む。
8. 暗褐色。ローム土塊を含む。
9. 明褐色。ロームブロック。
10. 暗褐色。ローム粒を少量含む。
11. 褐色。ローム土塊を多く含む。

第197図 A 4 - 1 号溝状遺構土層セクション実測図



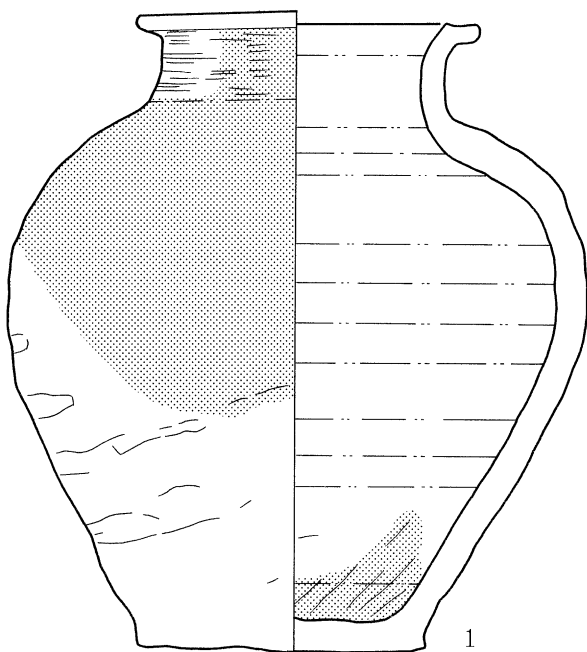
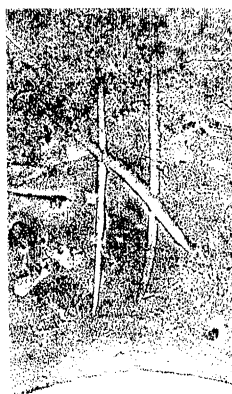
第198図 A 1 区、A 4 区溝状遺構全体図



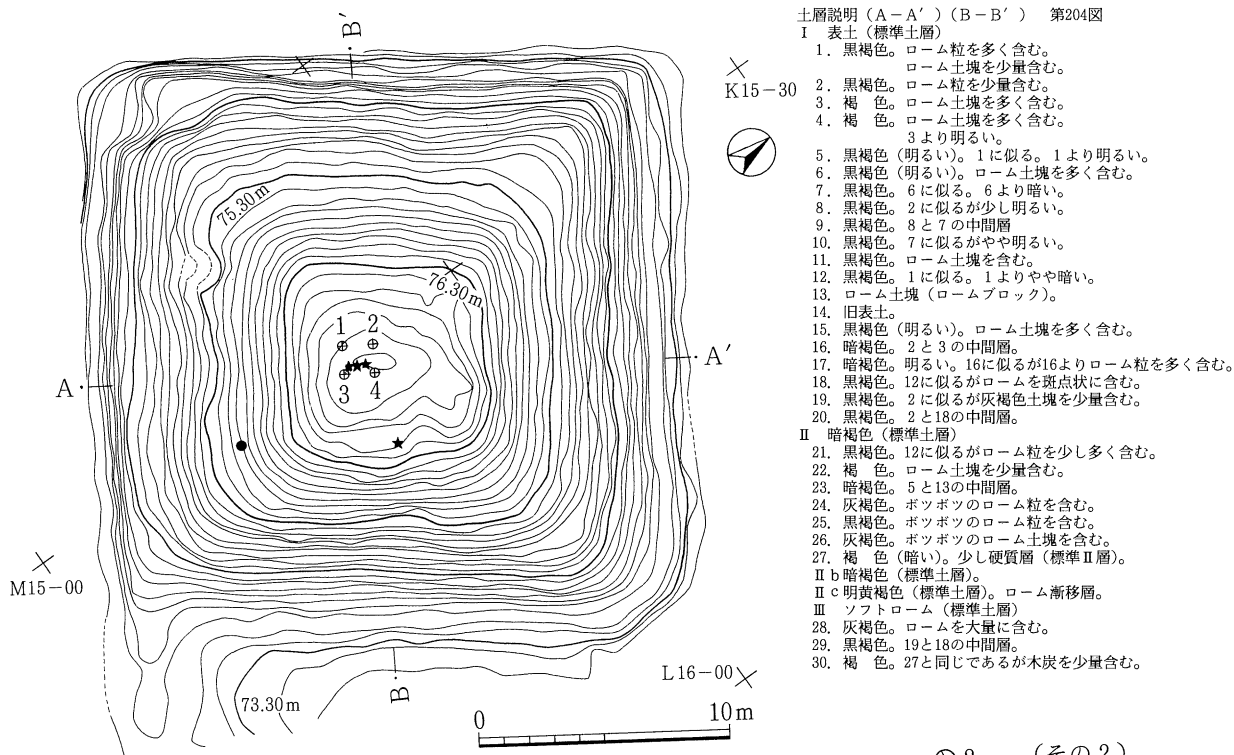


第200図 A 1 区、A 4 区溝状遺構出土遺構実測図

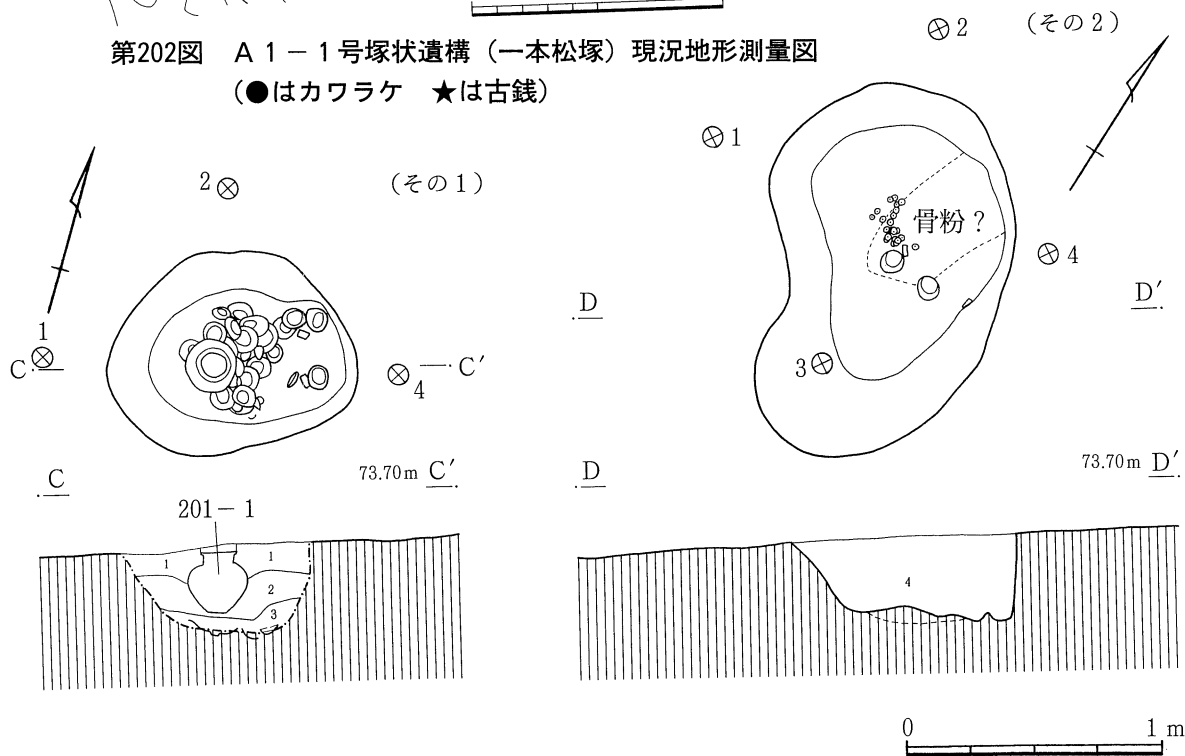
溝状遺構は12条存在する(第106、198図、第19表、ここではA 4-1号も取扱う)。そのうちA 1-5~11は中世以降の所産と考えられる。またA 1-1~4号とA 4-1号は古代の所産とみられる。A 1-1号は調査地区の北西側を東西に走り約140mを検出した。西側の続きは未調査であるが東側は谷に降って消滅する。幅は2.7m~3.8m、深さ0.9~1.10を測る。土層観察から少なくとも3時期の掘り返しが認められる。A 1-2号溝はA 1-1号の東側から南東に向って延び斜面部で途切れる。長さは約50mで幅は1.40~2.20m、深さは最大で70cmである。A 1-3号は調査地区の北東側で東西方面に存在し斜面部に突き当たると南東に曲がり斜面部で消える。長さは85m、幅は最大3.40m、深さ最大62cmを測る。A 1-4号はA 1-3号から続いて北東に延び長さ23m検出し斜面部に降りてゆく。最大幅は2.60m、深さ最大78cmを測る。A 4-1号はA 4地区の東端を南北に走り129m調査した。幅は1.70~3.80m、深さ0.8~1.10mを測る。土層から3時期の掘りかえしが考えられる。A 4-1号はその形態からA 1-1号と北西部で接続すると考えられる。



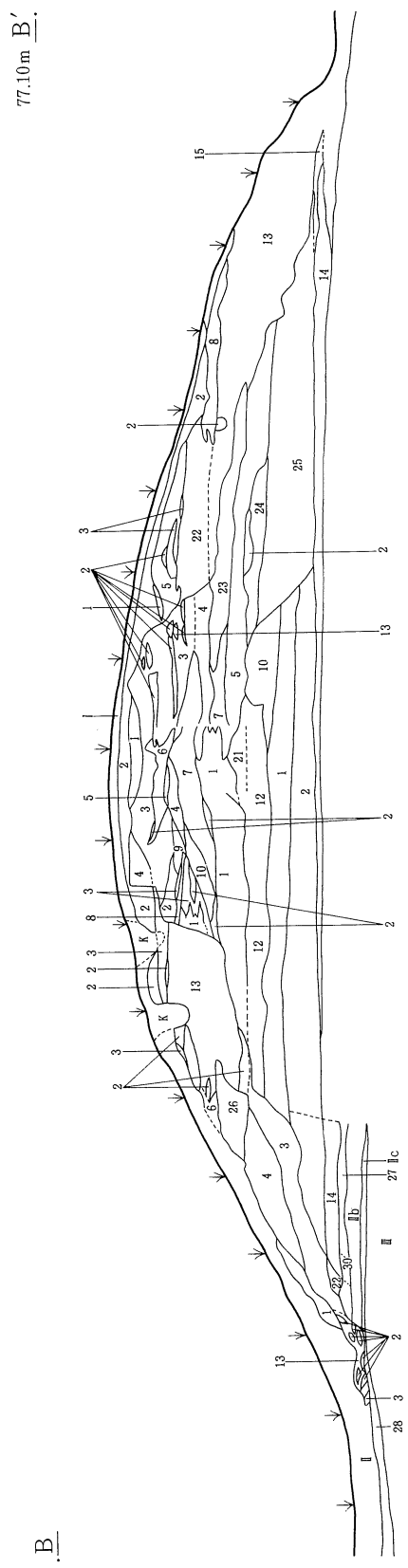
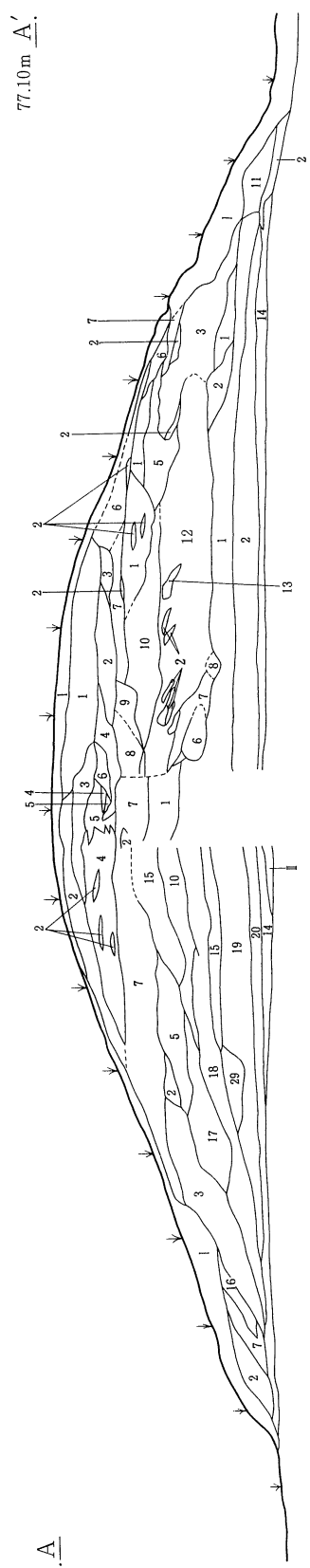
第201図 A 1-1号塚状遺構(一本松塚)出土遺物実測図(1)



第202図 A1-1号塚状遺構 (一本松塚) 現況地形測量図
(●はカワラケ ★は古銭)



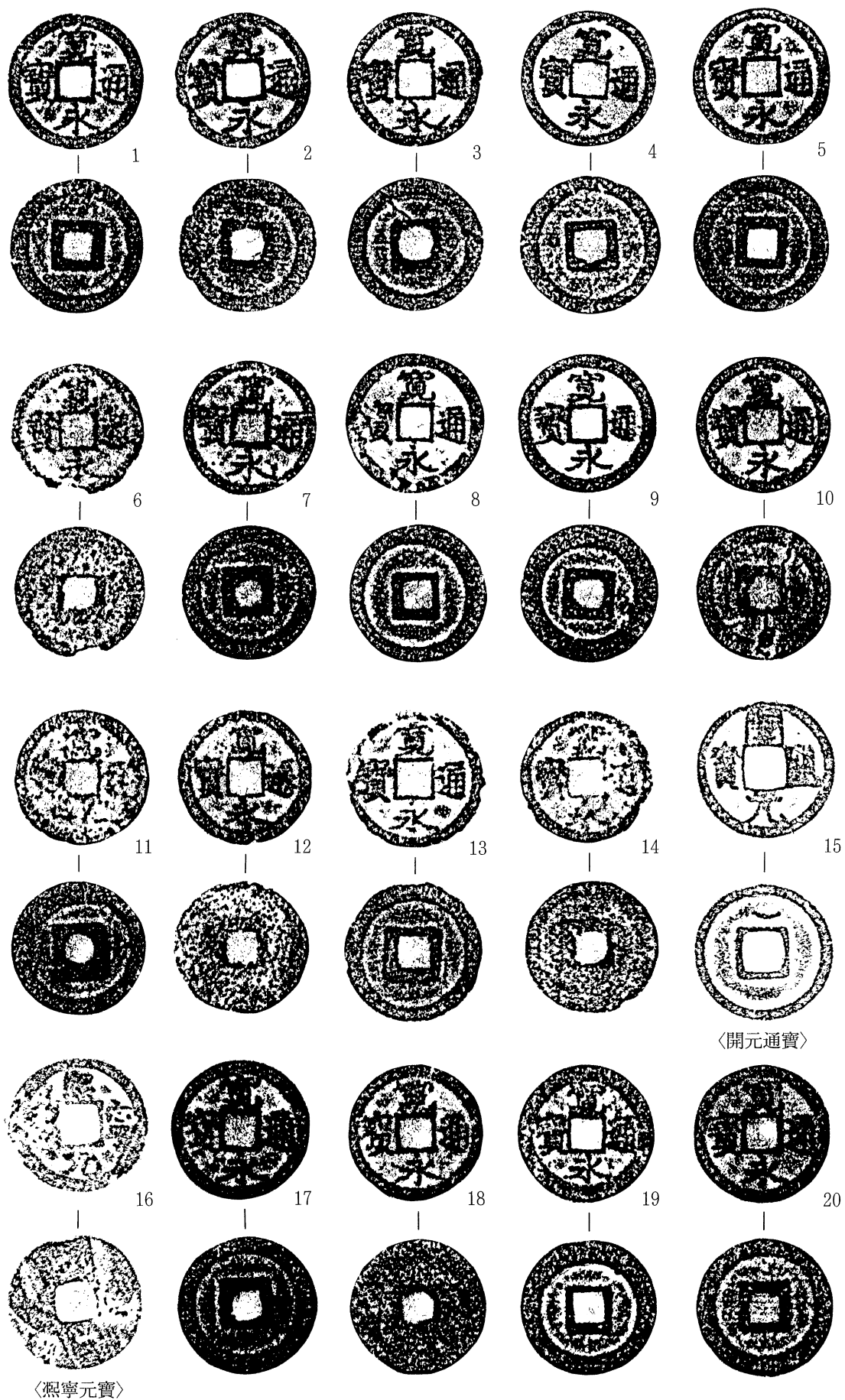
第203図 A1-1号塚状遺構 (一本松塚) 盛土下土坑実測図 (その1、その2)



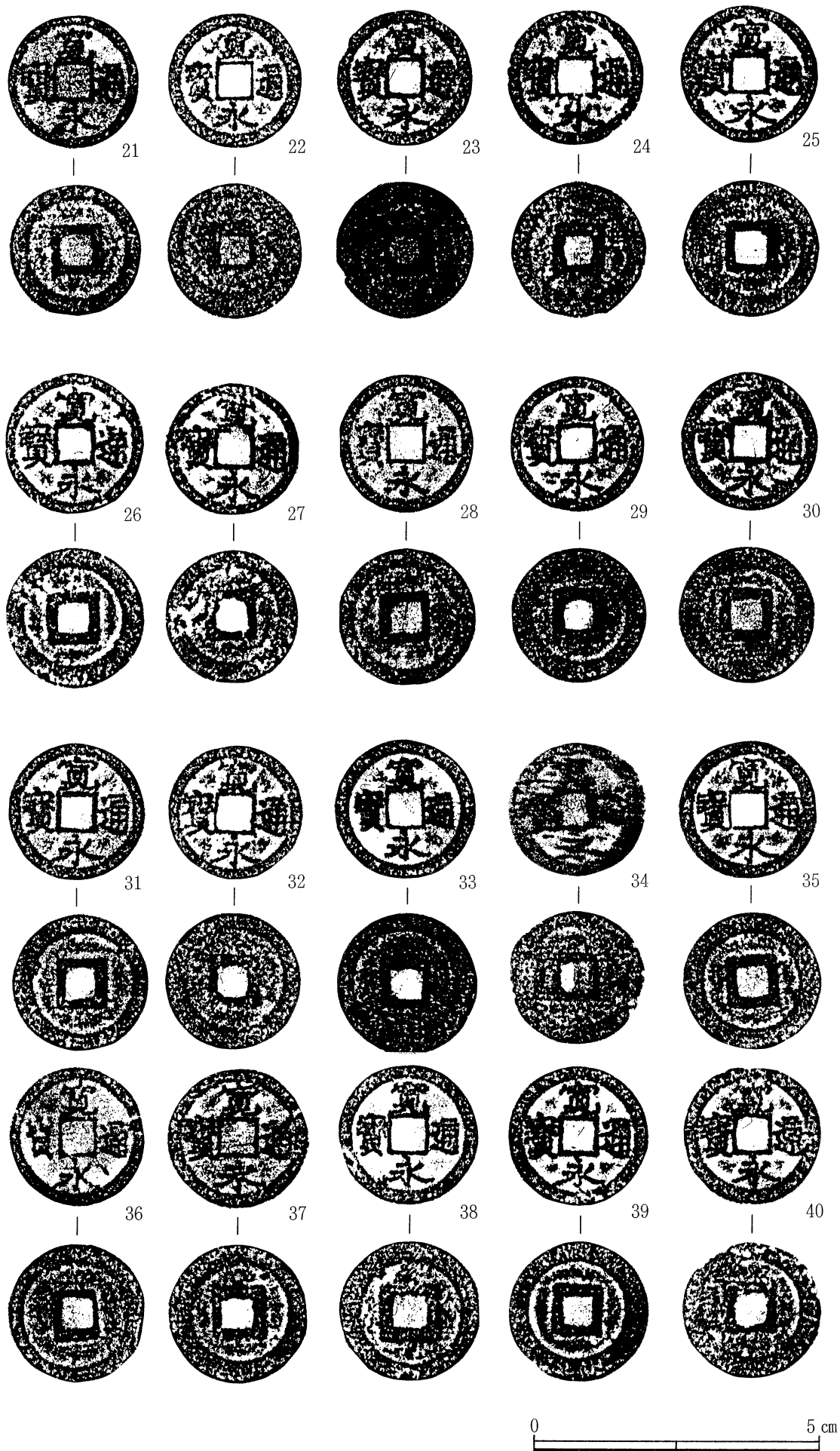
第204図 A1-1号塚状遺構(一本松塚)土層断面セクション図



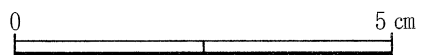
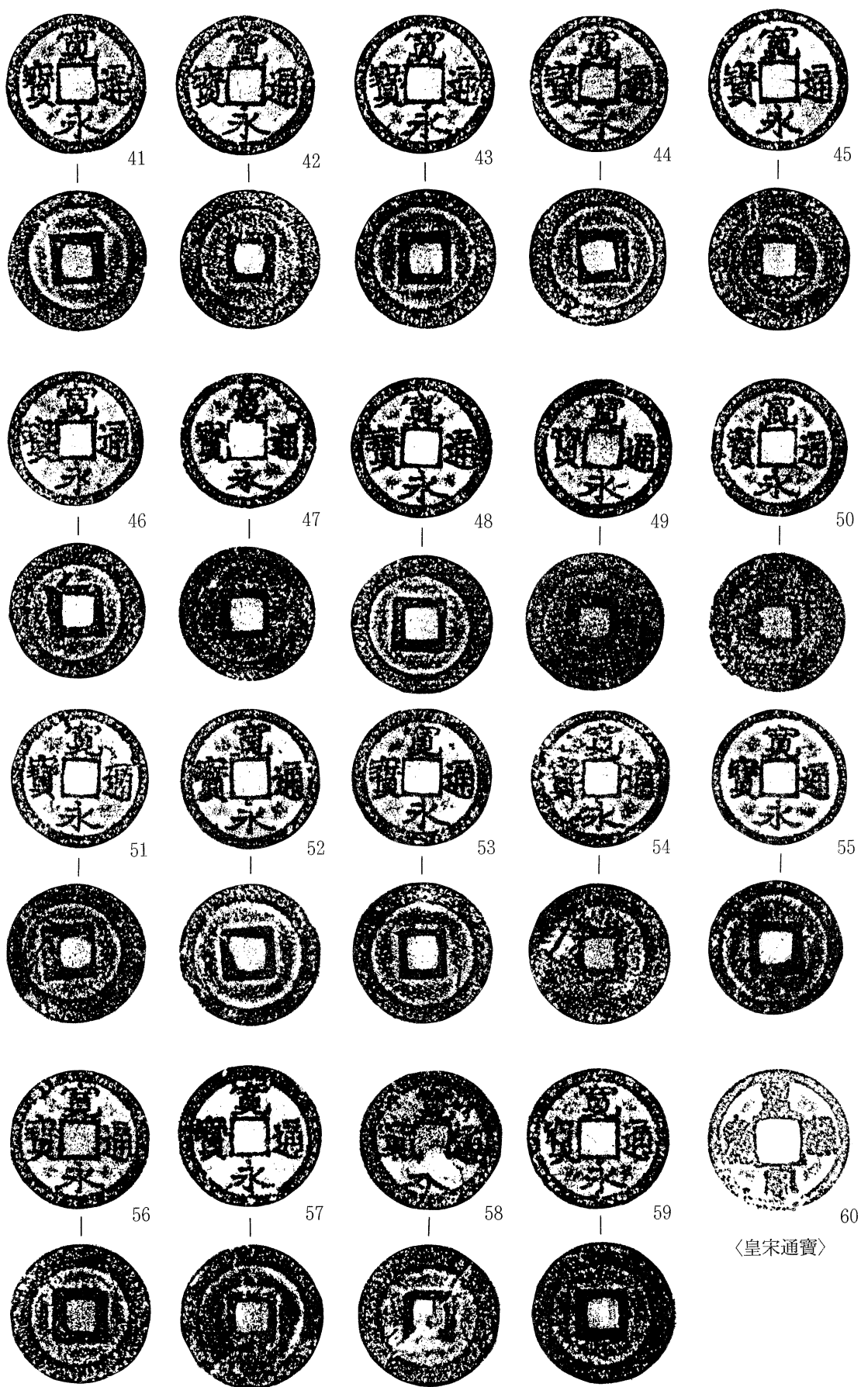
第205图 A 1 - 1号塚状遺構（一本松塚）出土遺物実測図(2)



第206図 A 1 - 1 号塚状遺構（一本松塚）出土遺物実測図(3)



第207图 A 1 - 1号塚状遺構（一本松塚）出土遺物実測図(4)



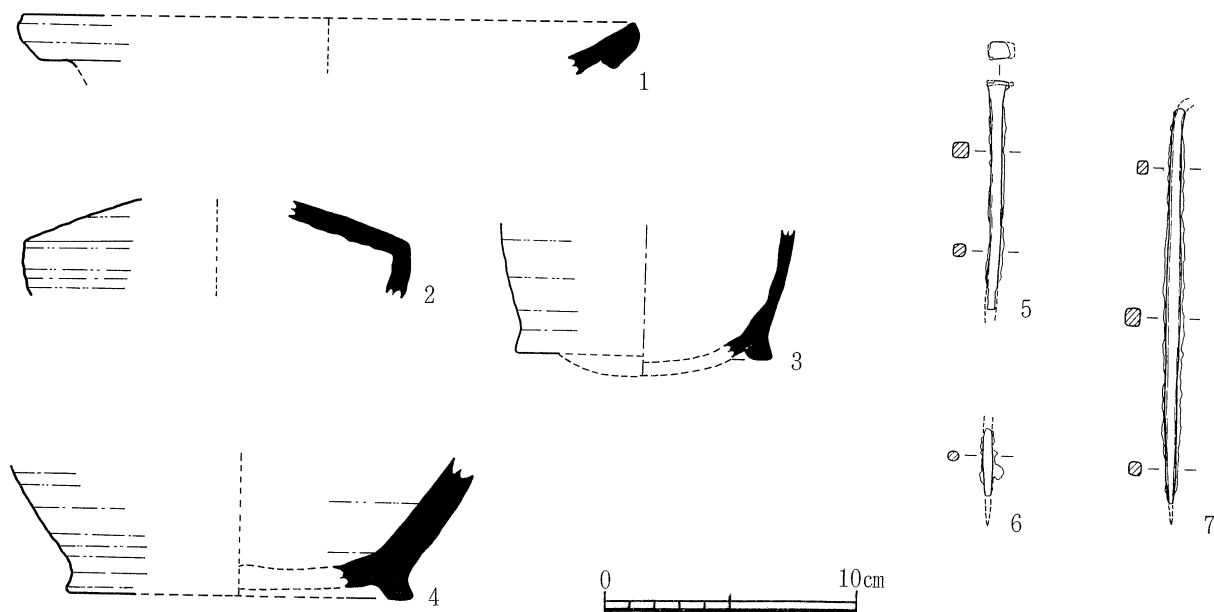
第208図 A 1 - 1号塚状遺構（一本松塚）出土遺物実測図(5)

出土遺物は第200図1の須恵器長頸壺口縁部片（A1-1号出土）、2は須恵器長頸壺底部片（A1-1号出土）、3は土師器杯で両面赤彩、内面にヘラミガキ（A1-1号出土）、4と5は砥石でA4-1号出土である。

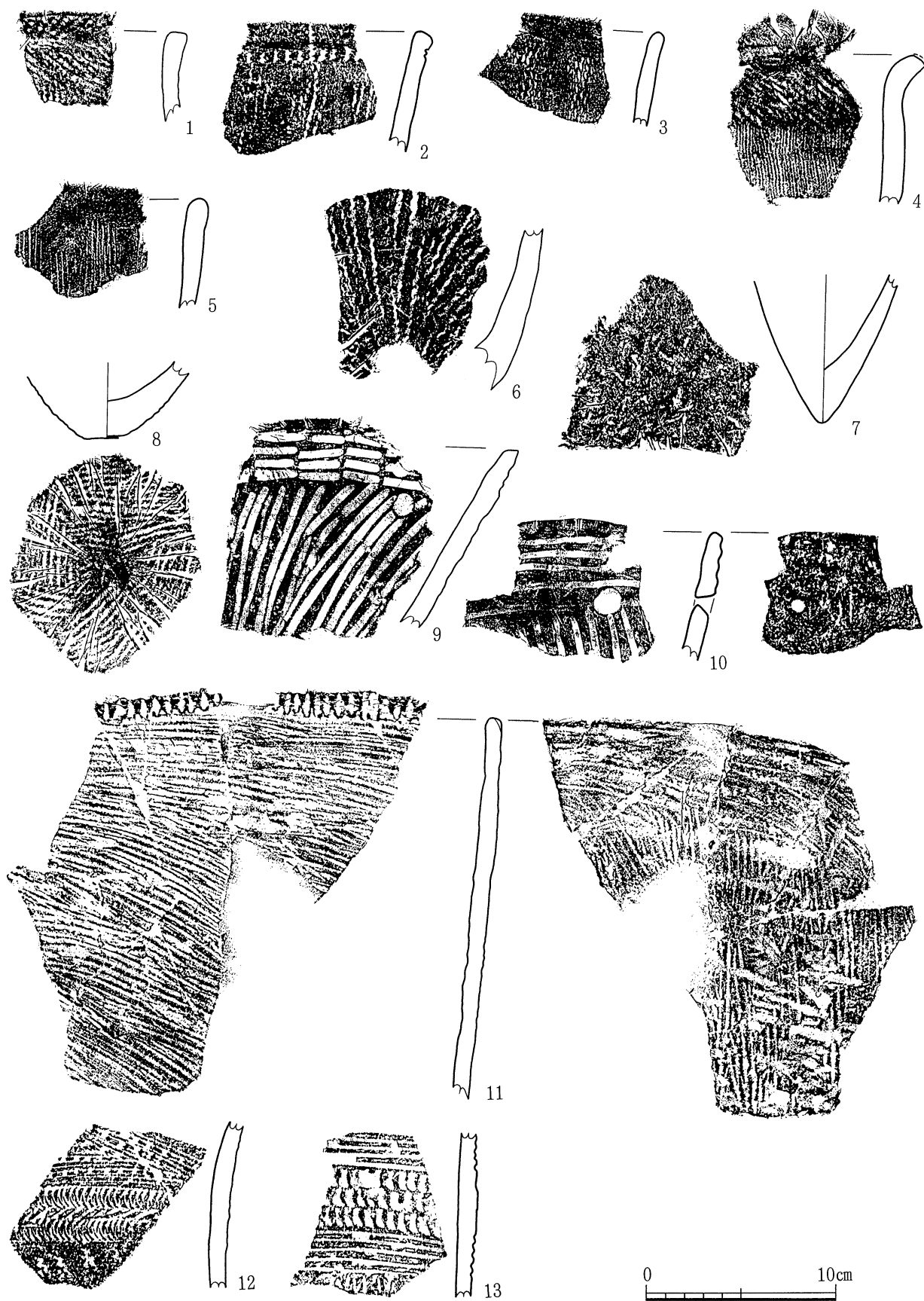
三山塚（1本松塚）（第106、202図）は調査地区の北西側中央付近に位置する。形体は三段方形で規模は長軸24.0m、短軸23.5m、高さ3.6mを測る。盛土は周辺を掘削してローム土と黒褐色土を主体に水平に積み上げている（一部斜面部は斜めに補強する）。盛土下のほぼ中央部に長円形の土坑が存在し（第203図）中に常滑壺1個が埋納され、その下部にはカワラケ50枚が置かれていた。常滑壺の中には古寛永通寶が6枚組になって紙ヒモや植物の繊維で綴られ751枚が納められていた（この他に開元通寶、皇宋通寶、熙寧通寶など12枚がある）。この他に盛土内より12枚の寛永通寶とカワラケ1枚が出土している。常滑壺は完形で（第201図）口径13.6cm、胴部最大径22.9cm、底部径11.4cm、器高25.4cmで色調は暗茶色、釉部分は淡灰褐色、焼成普通、胎土に1～2mmの小礫を極少量含む。また胴下部に窯印がヘラで刻まれている。カワラケは（第205図）1が口径6.2cm、2が7.0cmでやや小さめであるが他は口径9cm前後、50は最も大きく口径11.7cmを計る。

A1-2号塚状遺構は（第209図）調査区北側の中央やや北東側にあり、北側傾斜面縁辺部に立地する。東側にはA1-8、9号溝が走っている。平面形体は三角形の様な形体で規模は長軸20m、短軸12.5m、高さ1.3mを測る。盛土は褐色土と暗褐色土の2層によって構築されている。

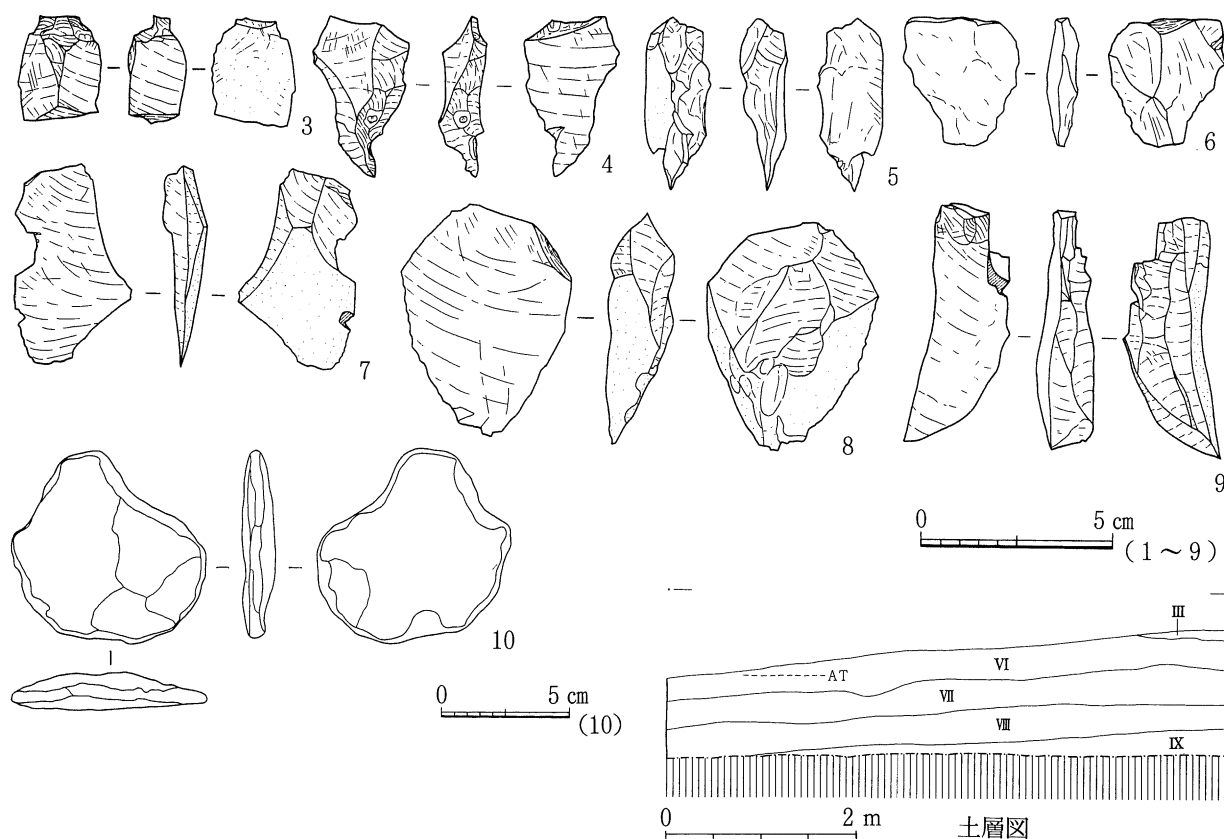
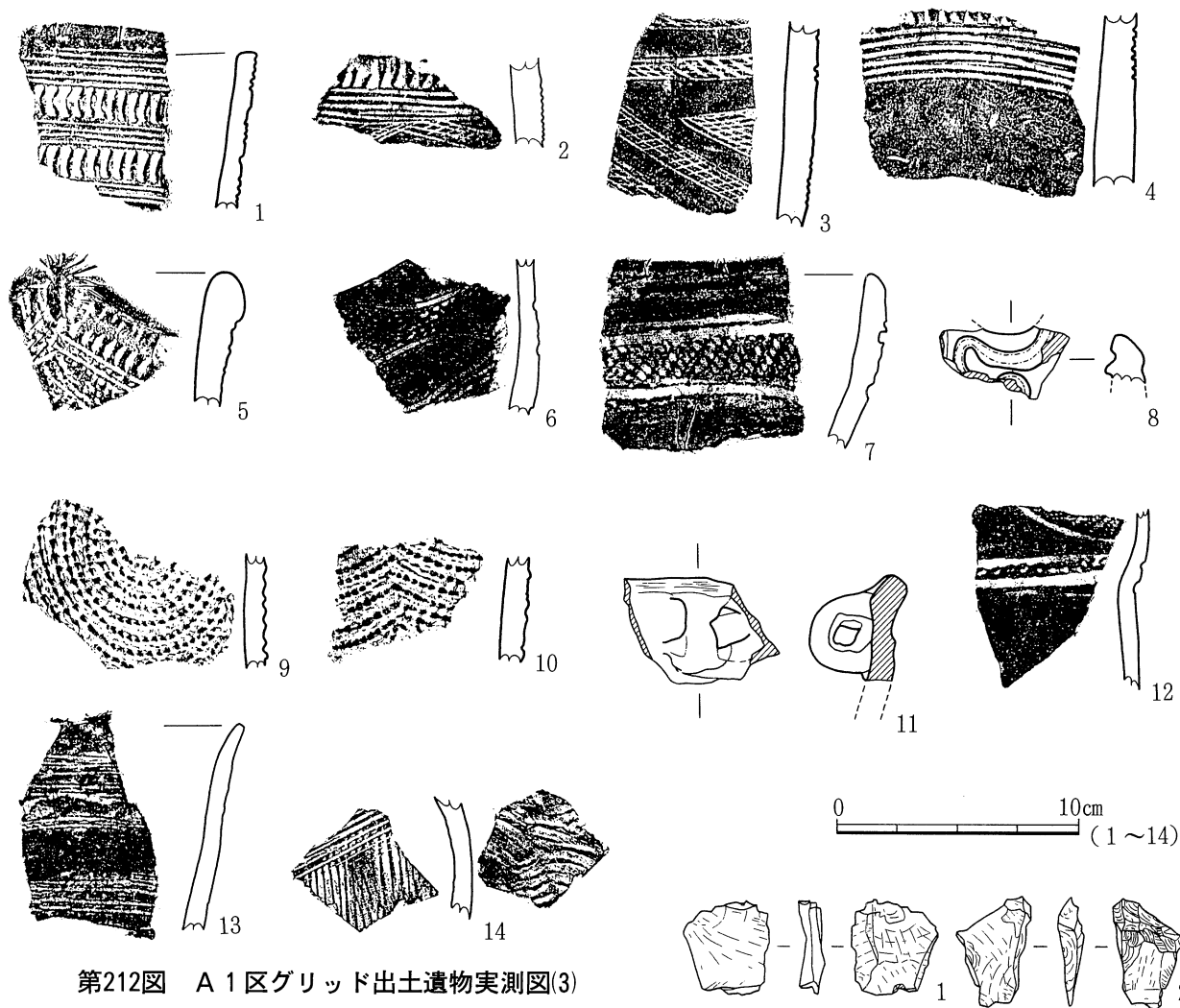
グリッド出土遺物は（第210図）1が須恵器甕の口縁部片で（O16-48出土）口径推定24.6cm色調は両面暗灰色、焼成は普通、胎土に小礫2mmを極少量含む。2は須恵器長頸壺の体上部片で（M18-56出土）屈曲して内傾する形をもつ。体部最大径推定15.4cm、色調は外面淡緑灰色と灰色、内面灰色である。焼成は普通胎土は緻密である。3も須恵器長頸壺で（Q11-03出土）体下部から底部付近の破片でハの字状に開く高台をもち、底部は高台より突出すると考えている。底径10.2cm、色調は外面暗灰色、内面灰褐色、焼成は普通で胎土に1mmくらいの小礫を少し含む。4も須恵器壺の底部片（P16-14出土）と考えられ、少しハの字状に開く高台をもち底部は若干突出する。底径13.7cm、色調は



第210図 A1区グリッド出土遺物実測図(1)



第211図 A 1区グリッド出土遺物実測図(2)



第13表 荻原野遺跡 出土石器表(1)

() は推定

番号	出土地点	種別	残存率	重量(g)	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	タイプ	備考	実測図番号
1	A 2区F 5	石斧	1/3	30.9	—	5.5	2.3	a	砂岩	第16図11
2	" F 3	"	完形	91.3	7.4	4.6	2.1	a	珪質頁岩	第16図12
3	" F 3	"	"	59.0	7.8	2.7	1.9	c	玄武岩	第16図13
4	" F 5	凹石	約1/2	205.2	—	6.6	3.5	b	石英斑岩	第16図14
5	" G 2	剥片		0.4	2.2	0.9	0.2		黒曜石	第16図15
6	A 4-2号炉穴群	石斧	一部欠損	67.1	7.7	3.3	2.1	b	砂岩	第27図17
7	A 4-14号土坑	凹石	"	152.5	6.1	5.6	4.2	c	輝石安山岩	第29図14
8	A 4区P 8	スクレーパー	完形	7.4	3.5	2.4	0.9		珪質頁岩	第36図22
9	A 4区	凹石	"	383	9.2	6.4	3.9	b	砂岩	第36図23
10	A 4区P 9	敲石	"	390	9.2	6.5	4.2	c	石英斑岩	第36図24
11	B 1区F 21	凹石	一部欠損	151.4	7.4	4.6	3.4	b	輝緑岩	第43図35
12	B 2区J 3	剥片		3.0	2.8	1.6	0.8		黒曜石	第48図4
13	B 2区	石鏃	一部欠損	1.4	(2.9)	1.9	0.4	b	玄武岩	第48図5
14	B 2区	石斧	完形	100.5	7.9	4.2	1.8	a	砂岩	第48図6
15	C 2区	石鏃	一部欠損	2.2	(2.3)	1.8	0.7	b	黒曜石	第62図3
16	C 1区PG 1-106	剥片		1.8	2.1	1.7	0.6		フリント	第70図1
17	" PG 1-129	"		0.9	1.7	1.2	0.6		フリント	第70図2
18	" PG 1-127	"		0.5	1.4	1.1	0.2		フリント	第70図3
19	" PG 1-124	"		1.7	2.2	1.2	0.6		フリント	第70図4
20	" PG 1-123	"		0.8	2.0	1.8	0.4		フリント	第70図5
21	" PG 1-104	"		0.9	2.8	1.5	0.3		フリント	第70図6
22	" PG 1-119	"		1.3	2.8	1.7	0.4		フリント	第70図7
23	" PG 1-111	"		0.8	2.2	1.3	0.4		フリント	第70図8
24	" PG 1-102	"		0.7	1.9	1.2	0.5		フリント	第70図9
25	" PG 1-105	"		1.1	2.0	1.5	0.5		フリント	第70図10
26	" PG 1-101	"		5.8	2.9	2.1	1.1		フリント	第70図11
27	" PG 1-112	"		4.0	2.8	2.2	0.8		フリント	第70図12
28	" PG 1-121	"		1.6	3.4	1.5	0.5		フリント	第70図13
29	" PG 1-108	"		2.8	4.4	1.9	0.7		フリント	第70図14
30	" PG 1-116	"		2.1	3.3	1.9	0.4		デイサイト	第70図15
31	" T-12?	"		2.9	3.2	1.8	0.8		黒曜石	第70図16
32	" PG 1-114	"		3.0	2.9	2.4	0.8		フリント	第70図17
33	" PG 1-113	"		3.9	3.2	1.9	0.9		フリント	第70図18
34	" PG 1-107	"		3.3	3.0	2.1	0.7		フリント	第70図19
35	" PG 1-109	"		7.9	3.3	2.8	0.9		フリント	第70図20
36	" PG 1-115	"		2.5	3.4	2.7	0.4		流紋岩	第70図21
37	" PG 1-128	"		8.3	5.1	2.3	1.3		フリント	第70図22
38	" PG 1-120	"		5.0	4.9	2.9	0.7		フリント	第70図23
39	" PG 1-118	"		16.9	5.0	2.9	1.7		フリント	第70図24
40	" PG 1-122	"		11.9	4.4	3.6	1.1		チャート(フリント)	第70図25
41	" PG 1-110	"		54.6	6.3	5.0	2.1		フリント	第70図26
42	" PG 1-606	"		0.7	1.8	1.5	0.5		珪質頁岩	第71図1
43	" PG 1-126	"		0.6	2.1	1.6	0.3		黒曜石	第71図2
44	" PG 5-502	"		2.8	3.3	1.7	0.6		フリント	第71図3
45	" PG 5-505	"		2.9	3.2	1.8	0.7		黒曜石	第71図4
46	" PG 5-507	石刃		6.4	5.1	1.4	1.0		チャート	第71図5
47	" PG 5-508	剥片		67.8	5.4	4.0	3.1		スズ付着、砂岩	第71図6
48	C 1-6号炉穴	石皿	完形	4.375	26.1	20.4	8.0		安山岩	第79図1
49	C 1-6号炉穴	磨石	"	624	12.1	10.5	4.1		安山岩	第79図2
50	C 1区T12	凹石	一部欠損	320	—	7.2	4.3	c	チャート	第104図22
51	C 1区T12	石鏃	完形	1.0	2.9	1.5	0.4	b	玄武岩	第105図1

第14表 荻原野遺跡 出土石器表(2)

() は推定

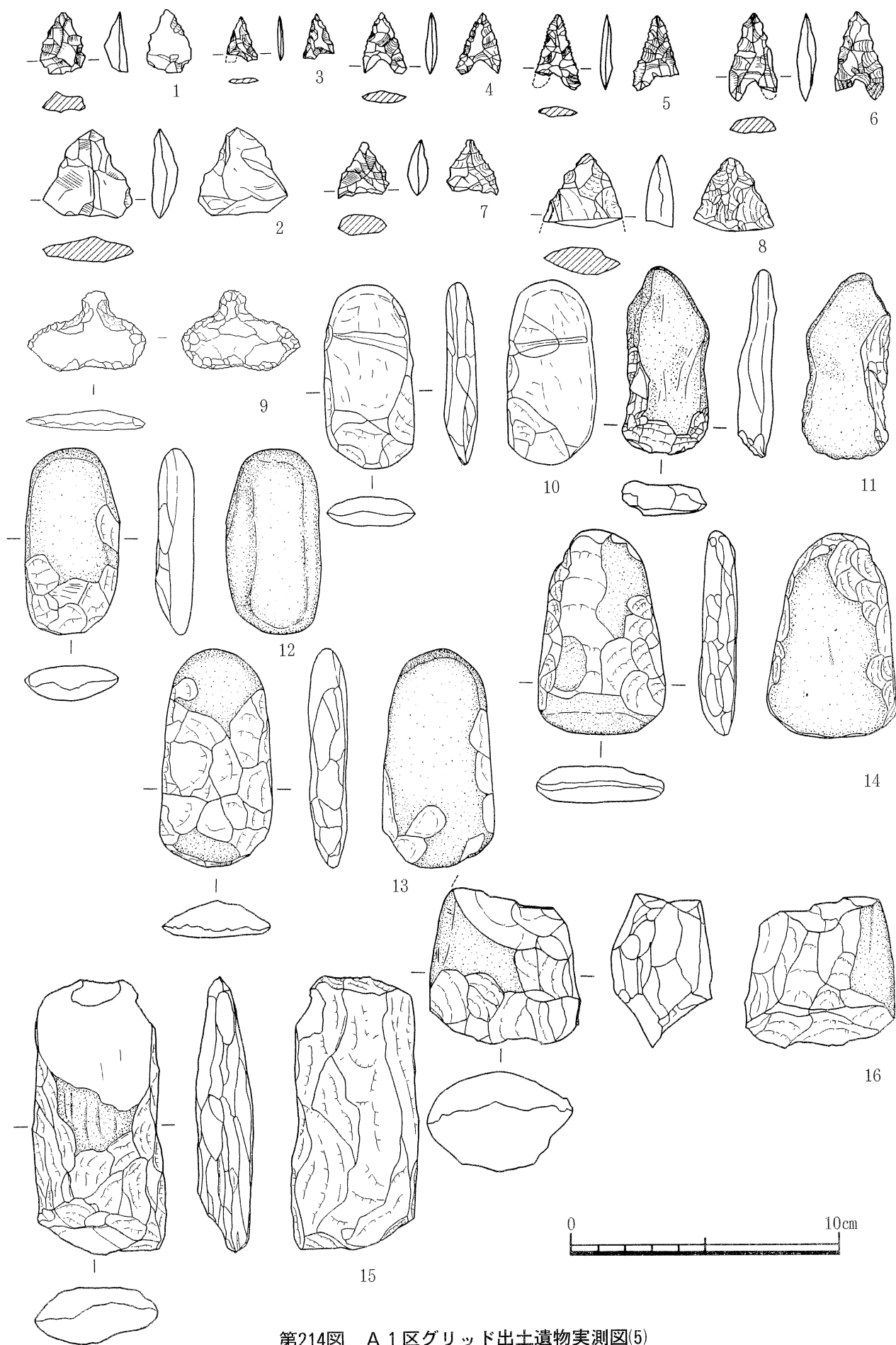
番号	出土地点	種別	残存率	重量(g)	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	タイプ	備考	実測図番号
52	" T13	"	"	1.9	2.9	1.8	0.7	b	黒曜石	第105図2
53	" U12	"	"	1.8	2.7	1.7	0.9	b	黒曜石	第105図3
54	" U14	"	"	1.6	2.5	1.6	0.55	a	玄武岩	第105図4
55	" T13	"	一部欠損	0.8	2.3	—	0.45	b	流紋岩	第105図5
56	" T12	"	"	1.3	2.4	—	0.6	a	チャート	第105図6
57	" "	"	半欠	0.9	—	1.6	0.55	a	玄武岩	第105図7
58	" "	剥片	完形	0.8	1.9	1.3	0.3		黒曜石	第105図8
59	" "	石核		58.3	5.0	3.95	2.8		チャート	第105図9
60	" "	石斧か	半欠	64.7	—	4.2	2.2		ホルンフェルス	第105図10
61	" F16	石核		45.6	7.0	5.7	2.7		黒曜石	第105図11
62	A1-13号炉穴	磨石	半欠	237.6	—	13.5	6.4		石英斑岩	第122図2
63	A1-1号集石	敲石	"	306	—	8.4	4.65	a	石英斑岩	第160図6
64	"	"	"	282.7	—	5.9	3.7	c	流紋岩	第160図7
65	A1-11号住居	浮子	完形	23.9	7.1	5.8	1.95		怪石	第162図17
66	A1-14号土坑	石斧	半欠	49.9	—	5.8	2.4	a	黒曜石ホルンフェルス	第163図7
67	A1-2号住居	磨石	"	194.5	—	8.0	4.6		砂岩	第163図45
68	A1-6号土坑	磨石	一部のみ	138.8	—	4.8	3.7		石英斑岩	第165図7
69	A1-30号土坑	石斧	一部欠	45.1	9.3	5.0	2.2	a	砂岩	第169図2
70	A1-43 "	"	完形	21.5	8.7	4.2	1.5	a	砂岩	第169図3
71	A1-20号住居	敲石	"	141.8	8.8	6.7	5.2	a	新期砂岩	第169図4
72	A1-46号土坑	石斧	"	163.9	13.8	6.4	3.9	a	凝灰岩	第169図5
73	A1-16号住居	"	"	81.6	10.8	7.8	2.9	a	石英斑岩	第169図6
74	A1-46号土坑	石鏃	半欠	1.1	—	4.2	1.2	b	黒曜石	第169図7
75	A1-70号土坑	"	完形	0.6	2.5	2.6	0.95	b	黒曜石	第169図8
76	A4-1号溝	砥石	(半欠)	69.5	6.8	3.0	2.7		流紋岩	第200図4
77	A4-1号溝	砥石	(完形)	524	21.7	4.9	4.1		流紋岩	第200図5
78	A1区K16	石鏃	完形	2.1	2.3	1.6	0.8	a	チャート	第214図1
79	A1区G16	"	一部欠損	0.3	1.6	(1.2)	0.3	a	黒曜石	第214図3
80	A1区J27	"	完形	1.0	2.4	1.7	0.5	b	黒曜石	第214図4
81	A1区Q12	"	"	6.7	3.3	3.3	1.0	b	流紋岩	第214図2
82	A1区—	"	1部欠損	1.1	2.9	(1.8)	0.5	b	黒曜石	第214図5
83	A1区S9	"	1部欠損	2.5	3.2	1.9	0.7	b	黒曜石	第214図6
84	A1区J27	"	完形	2.3	2.0	1.8	0.8	a	チャート	第214図7
85	A1区K25	"	"	8.0	5.5	5.25	1.1	a	チャート	第214図8
86	A1区Q12	スクレーパー	"	12.4	4.9	3.2	0.7		玄武岩	第214図9
87	A1区O11	石斧	"	36.4	6.9	3.3	1.2	a	砂岩	第214図10
88	A1区J12	"	"	35.8	6.9	3.2	1.35	a	ホルンフェルス	第214図11
89	A1区J27	"	"	50.9	6.9	3.5	1.45	a	砂岩	第214図12
90	A1区J13	"	"	63.4	8.1	4.15	1.45	a	デイサイト	第214図13
91	A1区J11	"	"	65.9	7.7	4.8	1.4	a	砂岩	第214図14
92	A1区M14	"	"	134.2	10.2	4.7	2.15		ホルンフェルス	第214図15
93	A1区M14	"	半欠	133.7	—	5.6	3.7		黒曜石ホルンフェルス	第214図16
94	A1区K13	"	完形	90.5	8.1	4.5	1.65	a	黒曜石ホルンフェルス	第215図1
95	A1区L26	"	"	99.0	8.6	3.95	2.05	b	砂岩	第215図2
96	A1区M14	"	"	273.8	9.4	5.6	3.25	a	砂岩	第215図3
97	A1区K12	"	"	116.8	8.05	3.9	2.45	b	砂岩	第215図4
98	A1区J11	"	"	181.1	10.0	5.4	2.7	a	ホルンフェルス	第215図5
99	A1区P11	"	一部欠損	77.5	7.4	3.7	1.95	b	石英斑岩	第215図6
100	A1区J12	"	完形	42.6	6.3	4.2	1.5	b	石英斑岩	第215図7
101	A1区I11	"	"	32.2	5.5	3.4	1.2	b	ホルンフェルス	第215図8
102	A1区U28	石斧	"	25.6	6.75	2.4	1.3	c	砂岩	第216図1

第15表 荻原野遺跡 出土石器表(3)

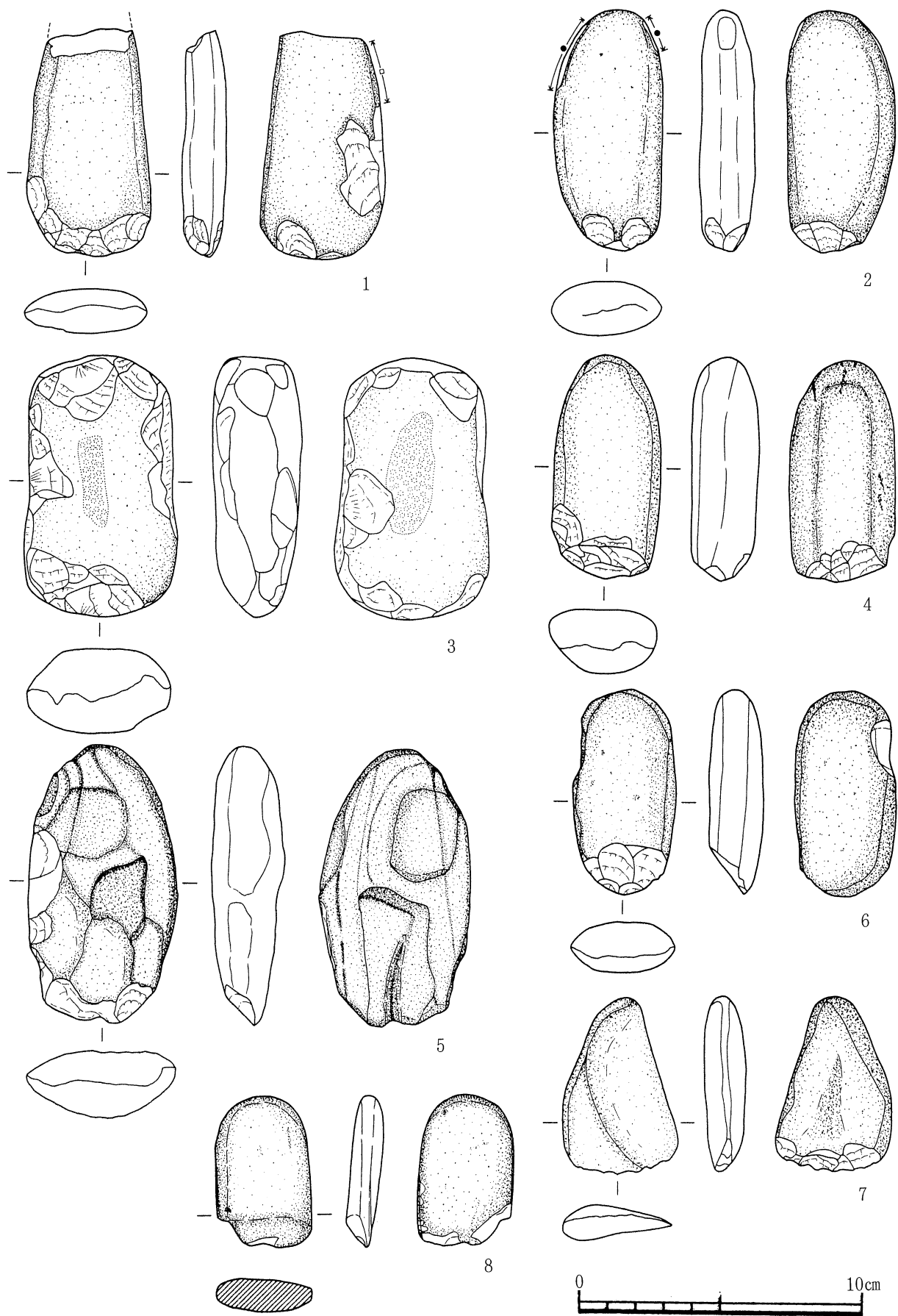
() は推定

番号	出土地点	種別	残存率	重量(g)	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	タイプ	備考	実測図番号
103	A 1 区N14	〃	半欠	32.7	—	4.0	1.9	c	凝灰岩	第216図 2
104	A 1 区O16	〃	一部欠	79.8	6.1	2.4	1.3	c	輝緑岩	第216図 3
105	A 1 区J13	敲石	完形	595	8.2	5.25	3.0	c	ヒン岩	第216図 4
106	A 1 区L18-79	砥石		69.6	5.9	4.2	1.6		流紋岩	第216図 5
107	A 1 区Q11	凹石	一部欠損	168.8	—	7.6	2.5	(a)	砂岩	第216図 6
108	A 1 区J13	〃	完形	302	8.25	6.4	4.0	c	砂岩	第216図 7
109	A 1 区K26	石皿	一部のみ	205.8	—	—	1.9		輝石安山岩	第216図 8
110	A 1 区M18	凹石	完形	265	8.2	6.45	4.0	a	輝石安山岩	第217図 1
111	A 1 区Q10	〃	〃	1,150	10.0	6.9	4.4	c	砂岩	第217図 2
112	A 1 区M24	石皿	一部のみ	925	—	—	5.3		石英斑岩	第217図 3
113	A 1 区M12	〃	〃	802	—	—	4.1		輝石安山岩	第217図 4
114	A 1 区(2)	石鏃	完形	0.7	2.2	1.05	0.5	a	チャート	第223図 1
115	A 1 区 2	〃	〃	1.6	2.8	1.6	0.6	(a)	黒曜石	第223図 2
116	A 1 区(10)	〃	〃	2.2	3.2	2.15	0.6	b	黒曜石	第223図 3
117	A 1 区	石斧	半欠	40.0	—	3.6	1.3	a	黒曜石	第223図 4
118	A 1 区(1)	〃	完形	56.9	7.0	4.2	1.4	(b)	ホルンフェルス	第223図 5
119	A 1 区(2)	〃	〃	15.4	5.7	2.4	0.8	b	黒曜石	第223図 6
120	A 1 区(1)	〃	〃	68.0	8.1	3.3	1.8	b	輝緑岩	第223図 7
121	A 1 区(24)	〃	一部欠損	165.4	—	4.1	2.3	b	砂岩	第223図 8
122	A 1 区18C	〃	完形	113.3	8.1	5.1	1.9	(b)	ホルンフェルス	第223図 9
123	A 1 区 2	〃	〃	75.7	10.2	5.3	1.5	a	黒曜石	第223図10
124	A 1 区(1)	〃	半欠	34.4	—	2.5	1.7	c	凝灰岩	第223図11
125	A 1 区(1)	〃	半欠	31.7	—	3.7	1.1	a	泥岩	第223図12
126	A 1 区(1)	砥石	一部のみ	69.8	—	4.4	2.2		流紋岩	第224図 1
127	A 1 区(1)B	〃	〃	47.8	—	4.8	1.8		流紋岩	第224図 2
128	A 1 区(1)	磨石	半欠	206.9	—	8.2	3.75		砂岩	第224図 3
129	A 1 区(1)	砥石	一部のみ	90.8	10.4	2.15	2.25		流紋岩	第224図 4
130	A 1 区 1 2 号方	石皿	〃	899	—	—	4.0		輝石安山岩	第224図 5
131	A 1 区(1)C	凹石	半欠	122.6	8.0	5.5	—	(a)	輝石安山岩	第224図 6
132	A 1 区	石皿	一部のみ	1,105	—	—	5.15		新期砂岩	第224図 7
133	A 1 区O17	剥片		2.6	2.5	2.3	0.7		流紋岩	第213図 1
134	A 1 区O17	剥片		3.1	3.3	1.9	0.7		玉髄	第213図 2
135	A 1 区O17	剥片		6.7	2.8	2.3	1.6		流紋岩	第213図 3
136	A 1 区O29	剥片		7.0	4.5	2.7	1.3		玉髄	第213図 4
137	A 1 区O17	剥片		6.7	4.7	1.8	1.3		流紋岩	第213図 5
138	A 1 区(1)	スクレーパー?		8.1	3.4	3.1	0.8		流紋岩	第213図 6
139	A 1 区O11	剥片		7.1	3.3	5.4	1.2		流紋岩	第213図 7
140	A 1 区O17	剥片		40.8	6.3	4.6	1.7		流紋岩	第213図 8
141	A 1 区O17	剥片		17.0	6.6	2.1	1.6		流紋岩	第213図 9
142	A 1 区J27			89.9	7.7	7.2	1.3		ホルンフェルス	第213図10
143	A 1 区	石鏃	一部欠	0.5	1.65	—	0.35	b	黒曜石	第222図 2

※石質鑑定は、パリノサーベイ株式会社の鑑定をいただいた。



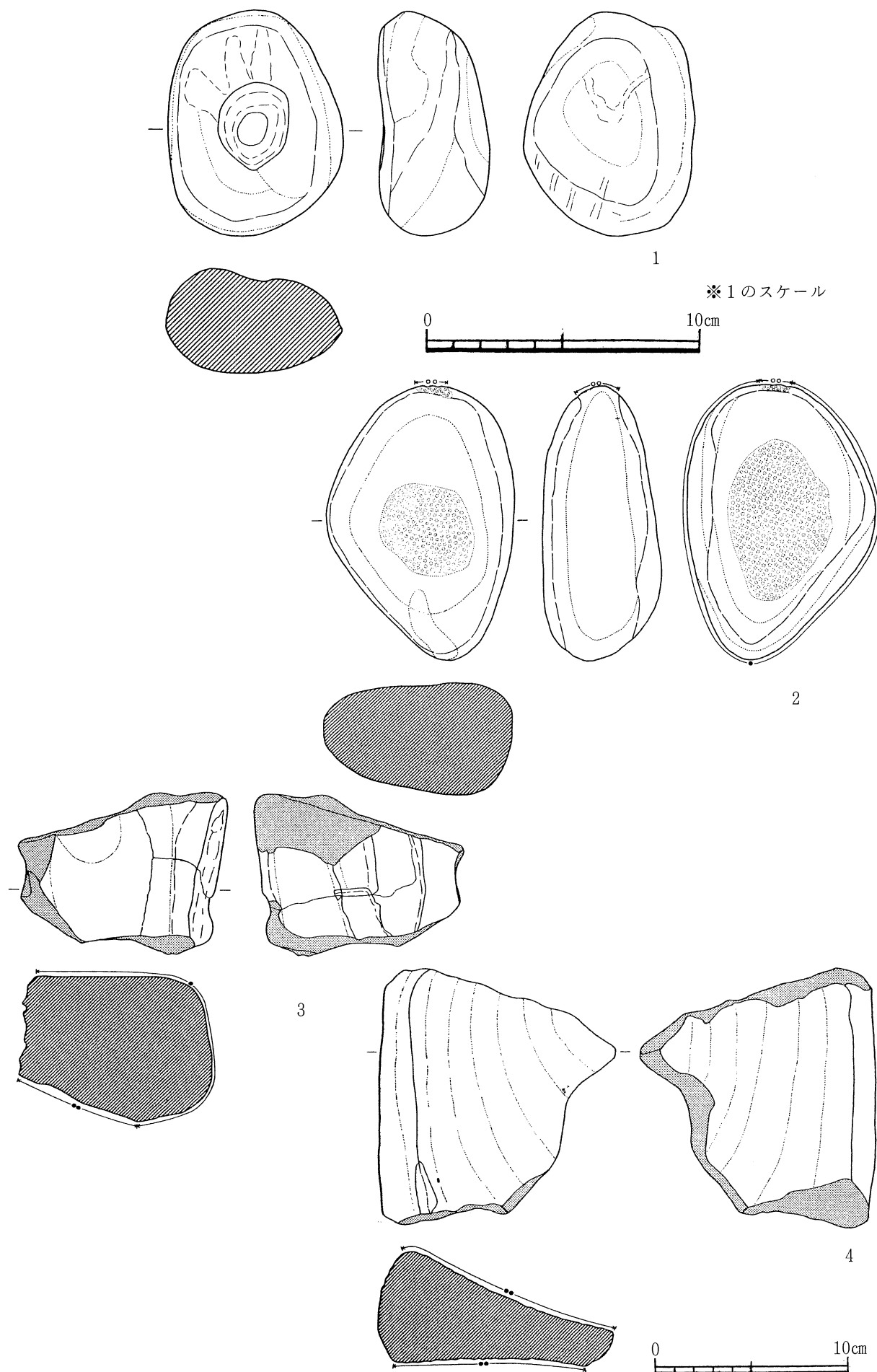
第214図 A 1区グリッド出土遺物実測図(5)



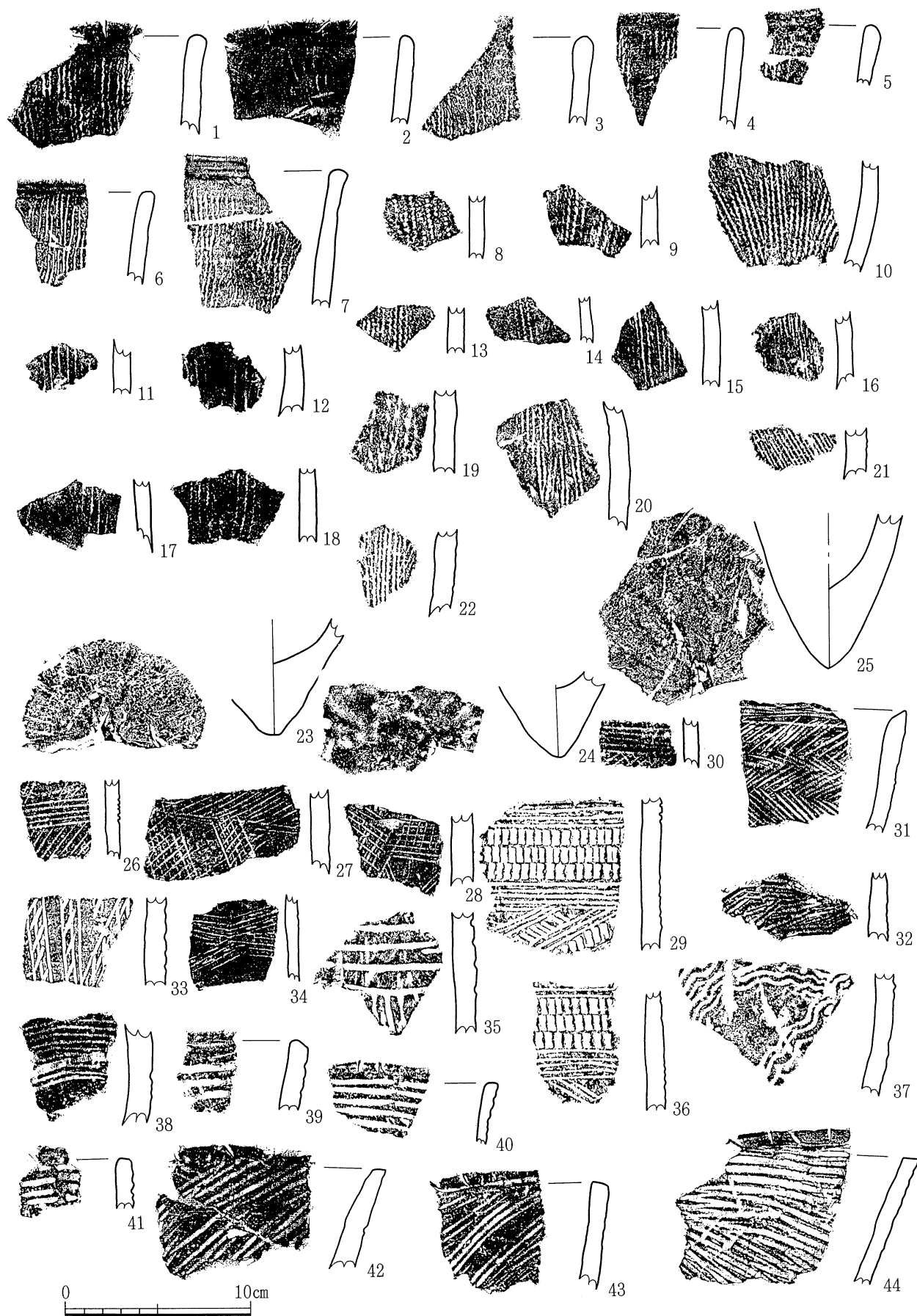
第215図 A 1区グリッド出土遺物実測図(6)



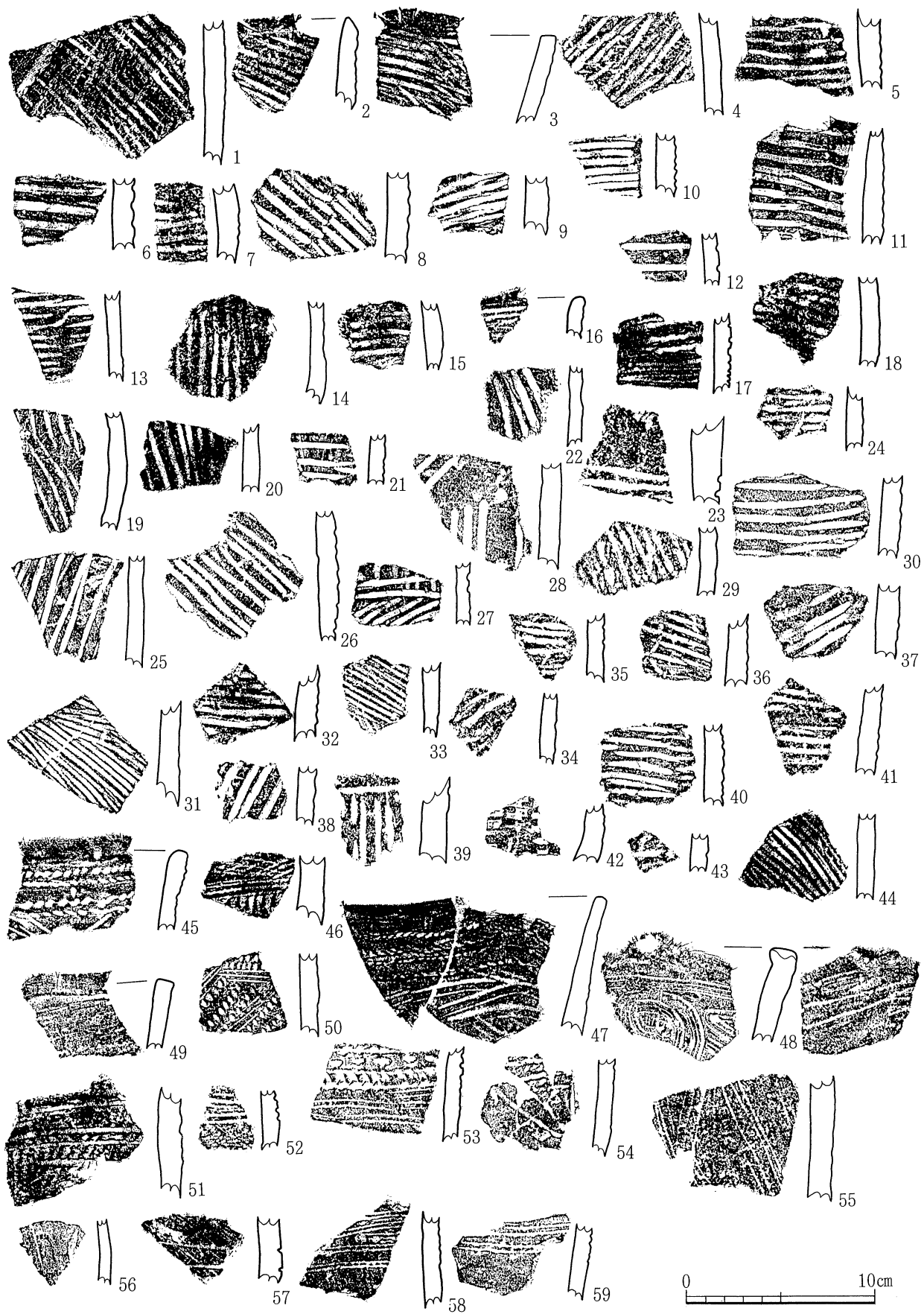
第216図 A 1 区グリッド出土遺物実測図(7)



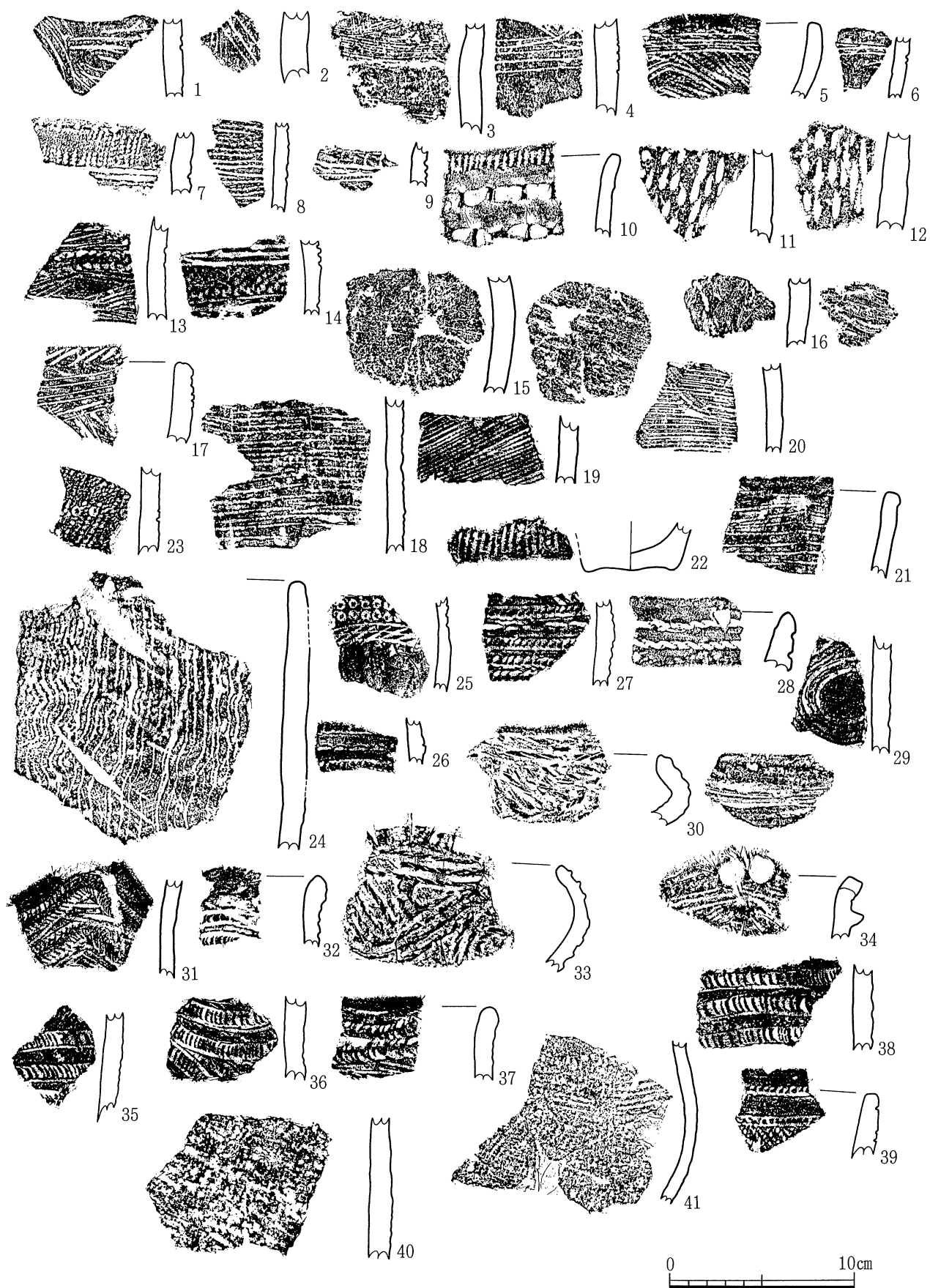
第217図 A 1 区グリッド出土遺物実測図(8)



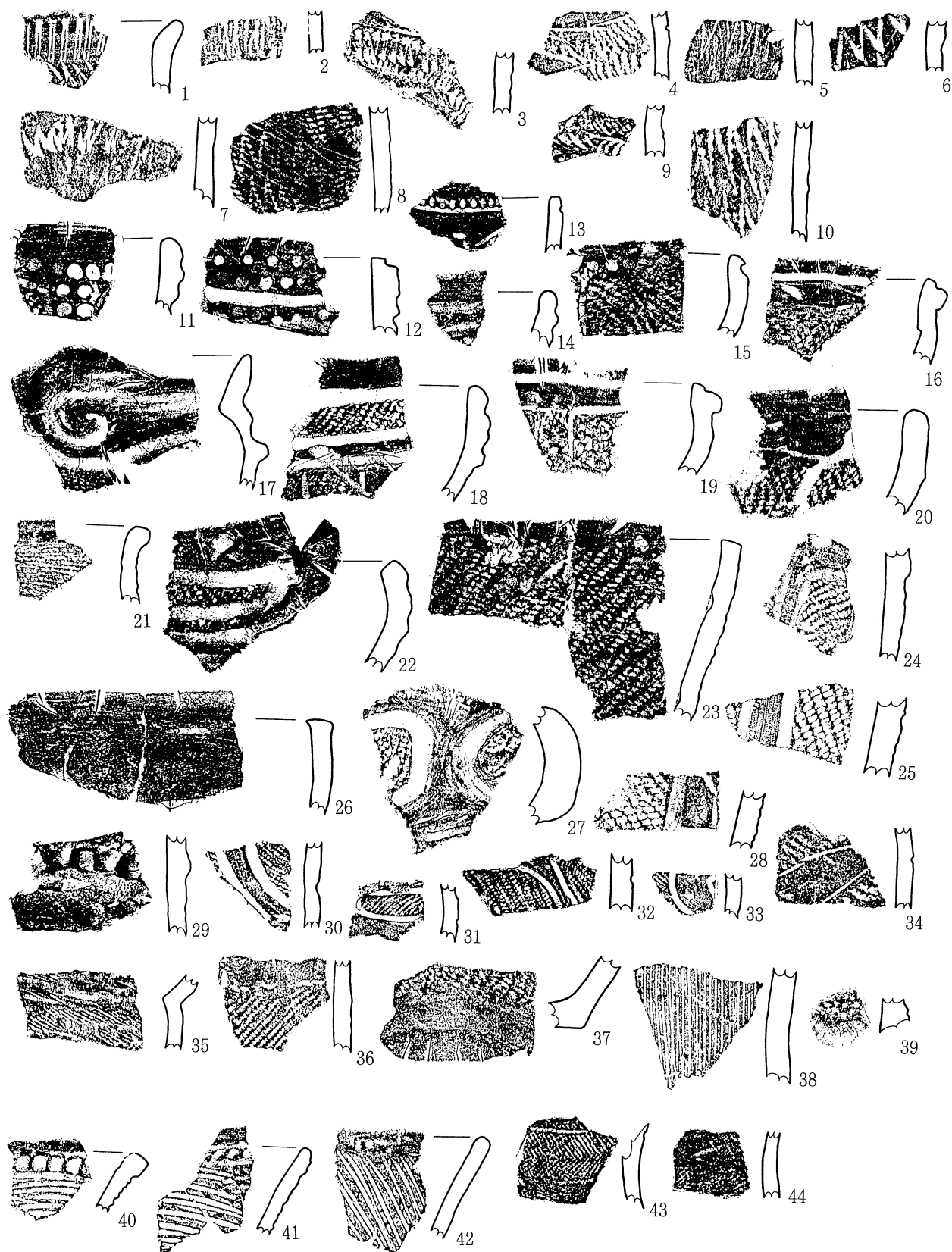
第218図 A 1区その他の出土遺物実測図(1)



第219図 A 1区その他の出土遺物実測図(2)

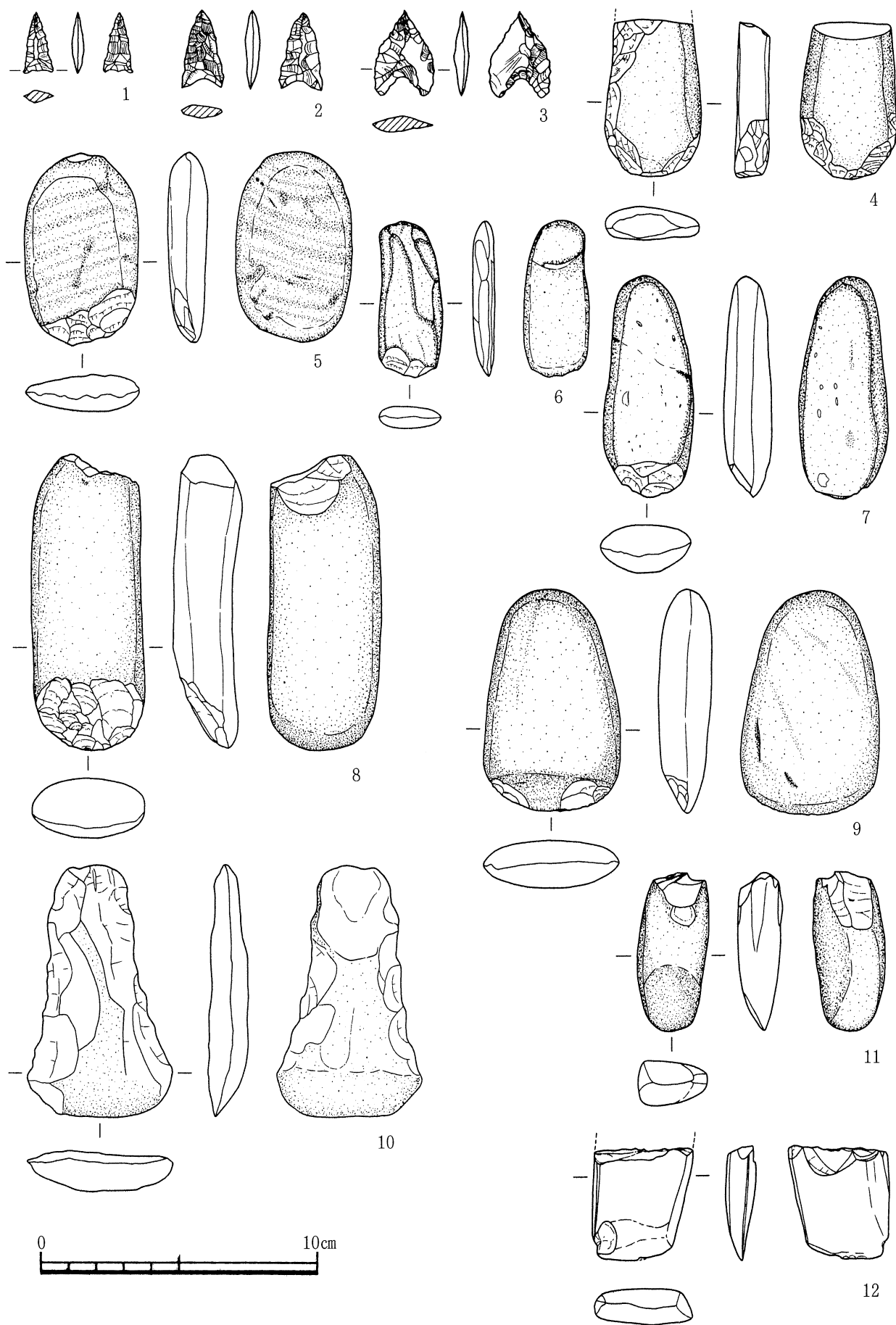


第220図 A 1区その他の出土遺物実測図(3)

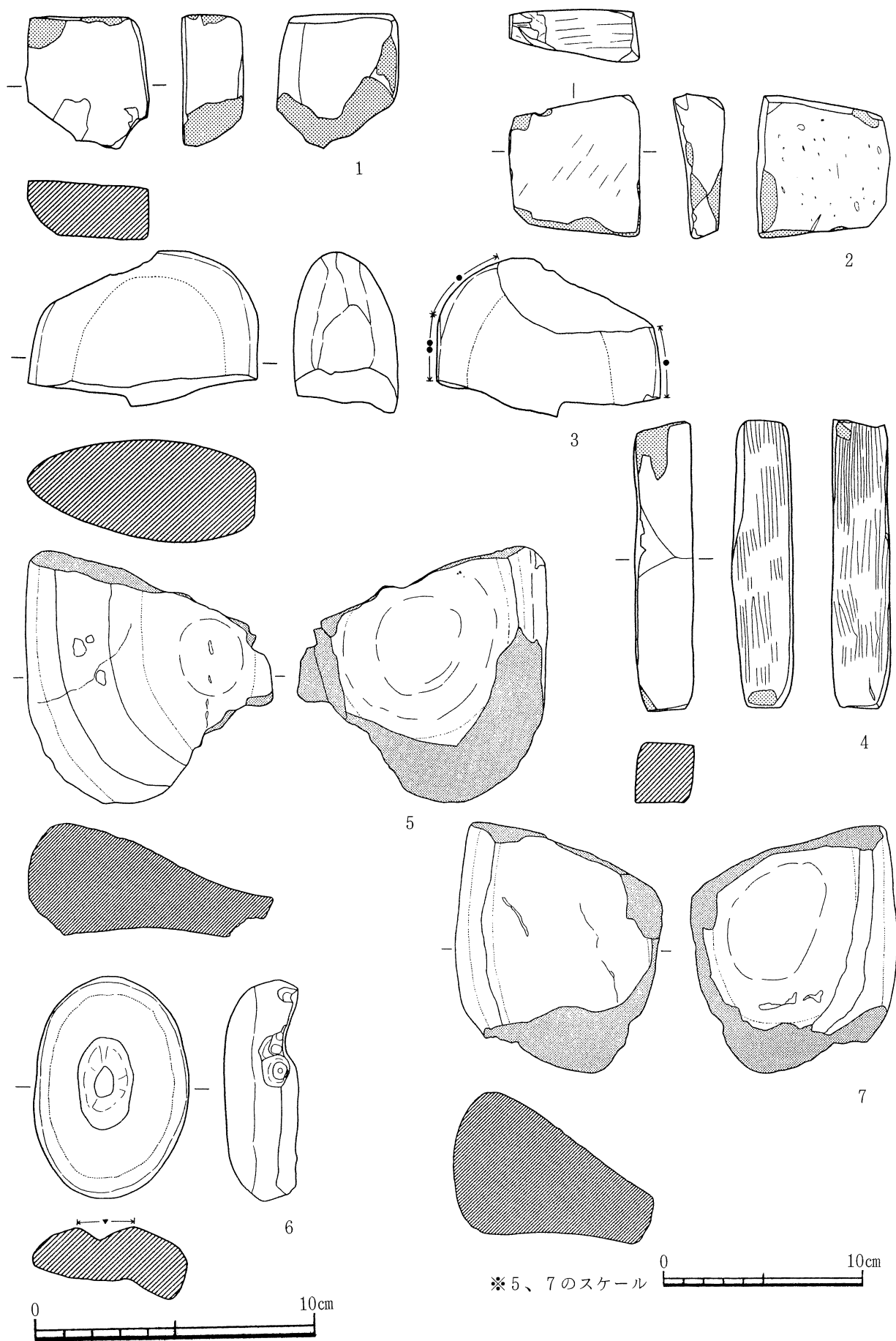


0 10cm

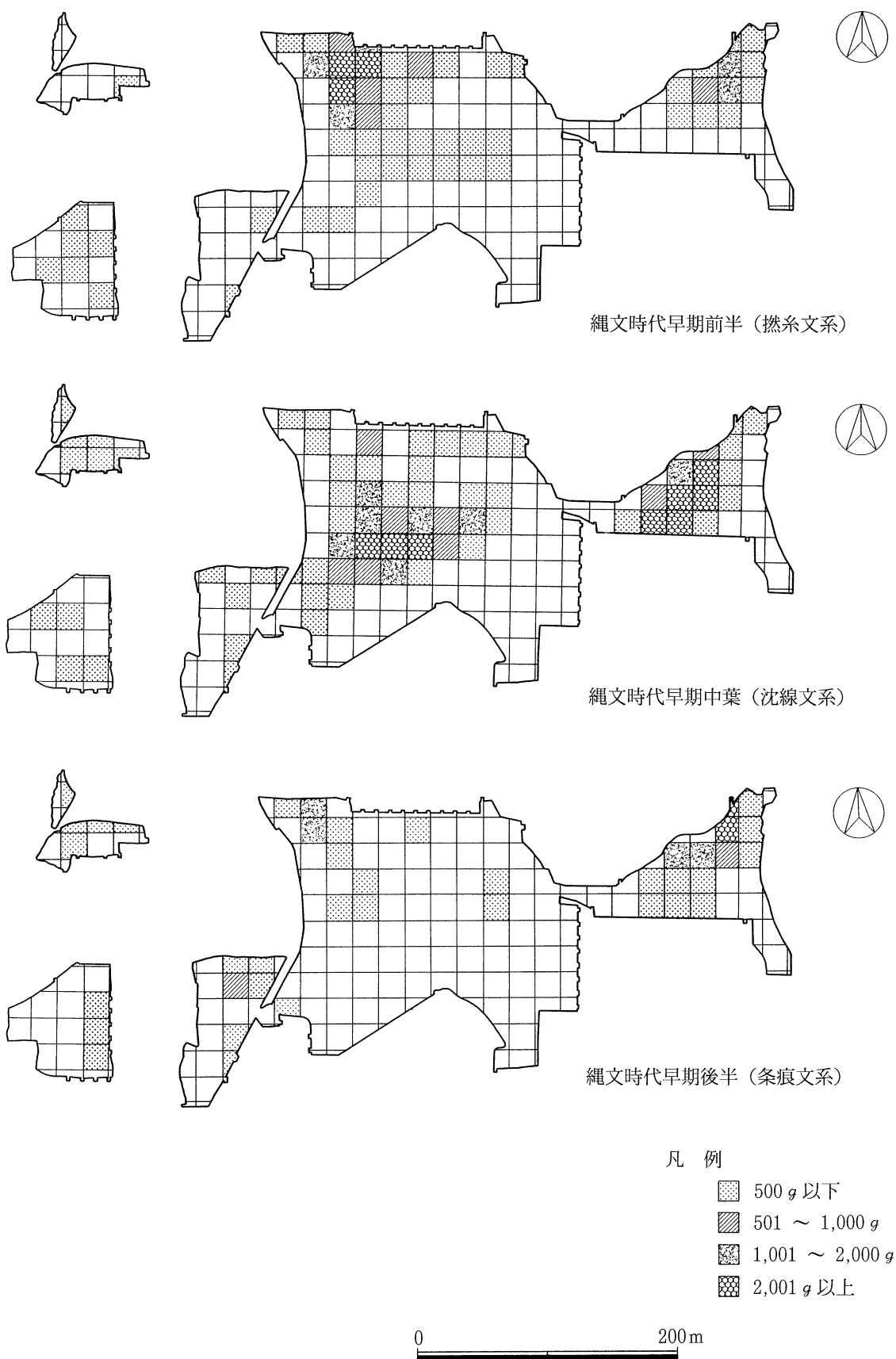
第221図 A 1 区その他の出土遺物実測図(4)



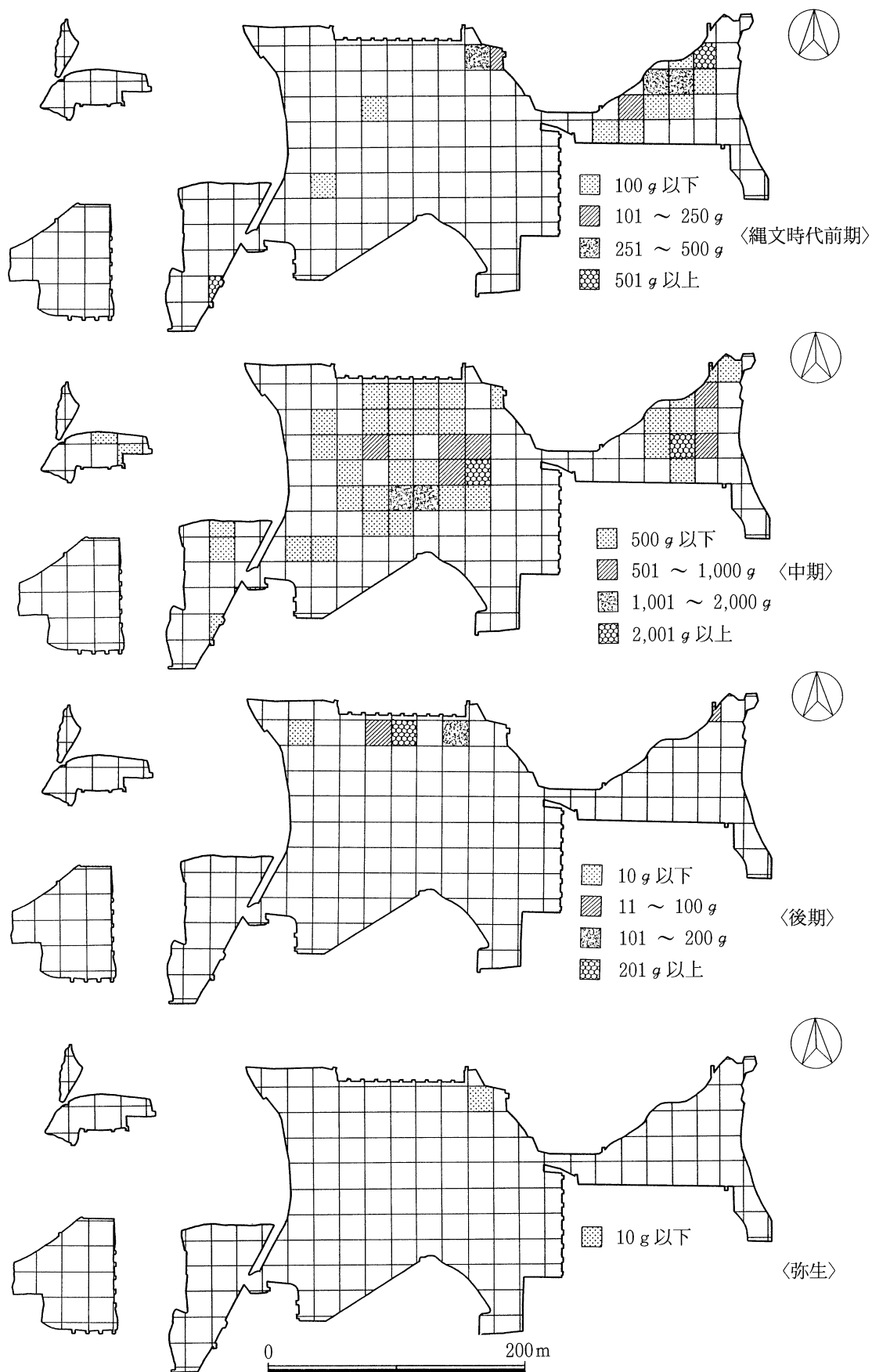
第223図 A 1区その他の出土遺物実測図(6)



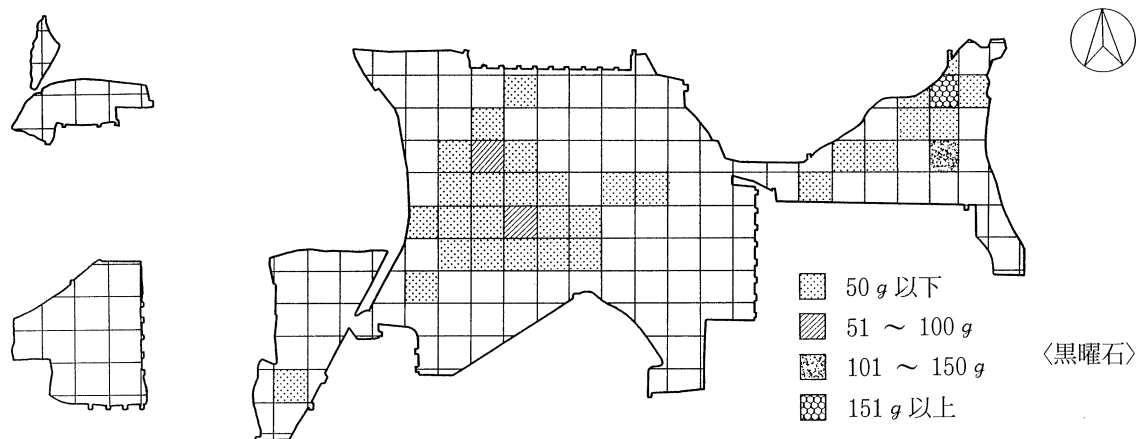
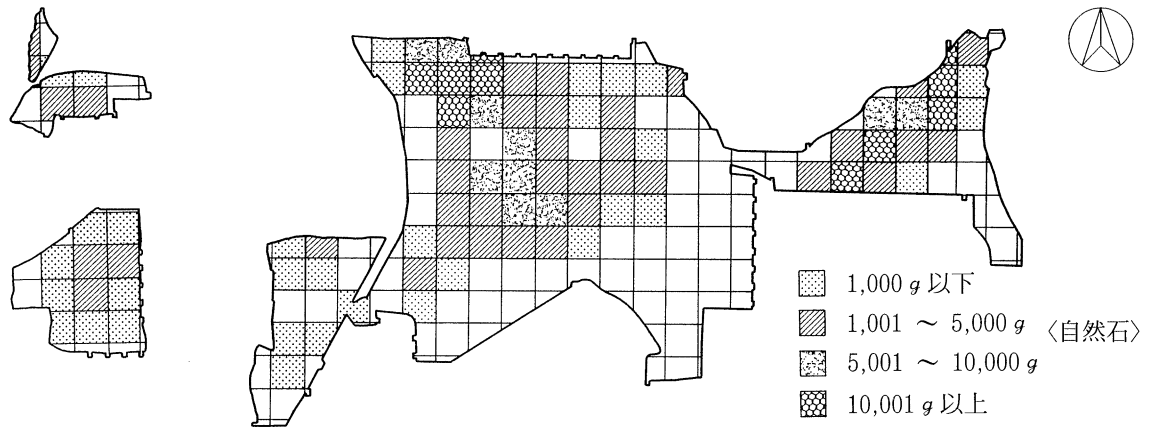
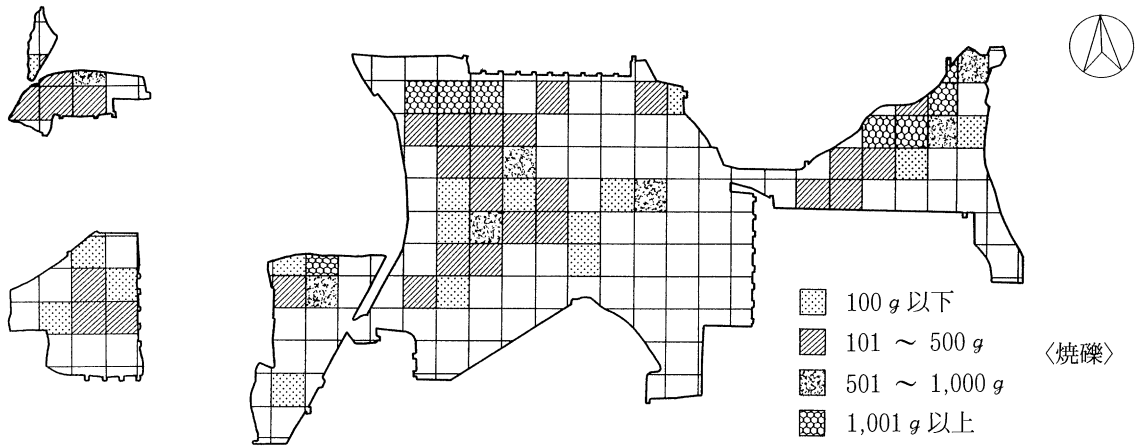
第224図 A 1 区その他の出土遺物実測図(7)



第225図 時期別土器片分布状況図(1)



第226図 時期別土器片分布状況図(2)



0 200m

第227図 焼礫、自然石、黒曜石分布状況図

る部分が認められる。ほとんどが時期の判明している遺構の分布状況と近似していることがわかる。

また、A 1 ～ 4 区と B 1 区から石器以外の焼礫、自然石、黒曜石などが508,405 g 出土している。そのうち焼礫は煤及びタールが付着するものもあるが20,373 g、自然石が487,193 g、黒曜石が839 g にそれぞれ分けられる。これらの分布状況は大枠ではあるが第227図に示した。3 種とも同様な分布状況を示し、A1区の北西から中央部と北東側、A4区北側など縄文時代の遺構の存在する地域に濃密な部分が認められる。

Ⅲ ま と め

ここでは今回の調査によって得られた成果を簡単ではあるがまとめてみたい。

荻原野遺跡は養老川下流域左岸に位置し、東の高坂方面から開析する谷と西の引田川の谷に挟まれた台地上に立地し、この台地も小谷が幾重にも入り込み複雑な地形を成しており遺跡は主にこの台地の残された平坦部や尾根上に広がっている。最も広い面積はA区で約48,000㎡有り、次にC区で約23,000㎡である^(註1)。このうちの大部分について今回本調査を実施した。

旧石器時代ではC1区とA1区で石刃や残核状フレイク、石屑チップなどの剥片がVI層のAT層より上面で地点分布(ユニット)の状態出土している。C1区は調査地区の南東側で台地端部より約70～80m中に入った地点である。トレンチによる調査であるが3ヶ所のトレンチ(1、5、6)から特に1トレンチより多く出土している。部分的な調査のため全体像は不明である。ここでは1ヶ所のユニットと考えておきたい。A1区では2地点検出され、いずれもトレンチ調査であるがA1-1号遺構は台地南側縁辺部、A1-2号遺構は東側縁辺部に立地する。当遺跡の南約2.5kmの南名山遺跡ではⅢ層(ソフトローム)から^(註2)剥片などやBBⅡ層下部(Ⅶ層)から自然礫2点と剥片1点が出土している。^(註3)同様の層位では養老川対岸やや奥の千草山遺跡でVI層上部からフレイクやチップ等が報告されている^(註4)。^(註5)また、対岸中流域の武士遺跡ではⅨ層からⅢ層までユニット57地点など2,800点の石器を検出しており、当地域の一大拠点であったことが伺える。

縄文時代早期前半では撚糸文系の土器群を伴う竪穴状遺構(本書では竪穴住居跡として解釈する)や土坑を検出している。最も古い遺構はB1-7号、8号土坑、A1-7号住居跡などで井草式や大丸式とみられる土器片を伴出する。稲荷台式はB1-12号土坑、A1-6号、9号住居跡、A1-1号集石遺構、A1-15号、43号、46号、79号土坑などである。竪穴住居跡の形体は丸みを帯びた正方形や長方形が多いが円形(A1-7号)もみられる。床面には炉跡や踏み固められた面などは明確に存在しないがピットは不規則な配置であるが認められる^(註6)。この時期の遺構は主にB1区とA1区の北西側と北東側一部に約220mの距離を置いて存在する。集落のパターンからみると台地上の縁辺近くに少数の単位で存在している形態である^(註7)。また関連すると思われる土坑も伴っている。稲荷台式期はいわゆる「竪穴住居の定着期」といわれ複数の住居跡がまとまって検出される^(註8)。当遺構群も大きく3地点に分かれ集落発生期の好資料を提供している。

早期中葉とみられる沈線文系土器群はB1-11号土坑、A1-2号、4号住居跡、A1-8号、24号、25号、30号、37号、82～84号土坑などから出土している。竪穴住居跡は方形、長方形、長円形でA1-4号は長軸5m以上の規模をもつ。遺構分布は特にA1区の西側中央部と北東側で、北東側は集落を形成している。沈線文系の住居跡では前述の千草山遺跡で竪穴状の遺構が検出され^(註9)、また上原台遺跡でも長円形(長径6.52m)の竪穴住居跡が存在する^(註10)。概してこの時期は住居跡が少ない傾向にある。^(註11)

早期後半～末葉の条痕文系土器群ではA4-2号、4号、5号、8号、14号、15号、C2-2号、A1-9～14号、17号などの土坑より出土(竪穴住居跡は検出されていない)。炉穴群は50群を数え(第16表)A4区5群、B1区11群、C1区13群、A1区21群で、分布状況としてはA1区の北西隅

第16表 荻原野遺跡検出炉穴群一覧表

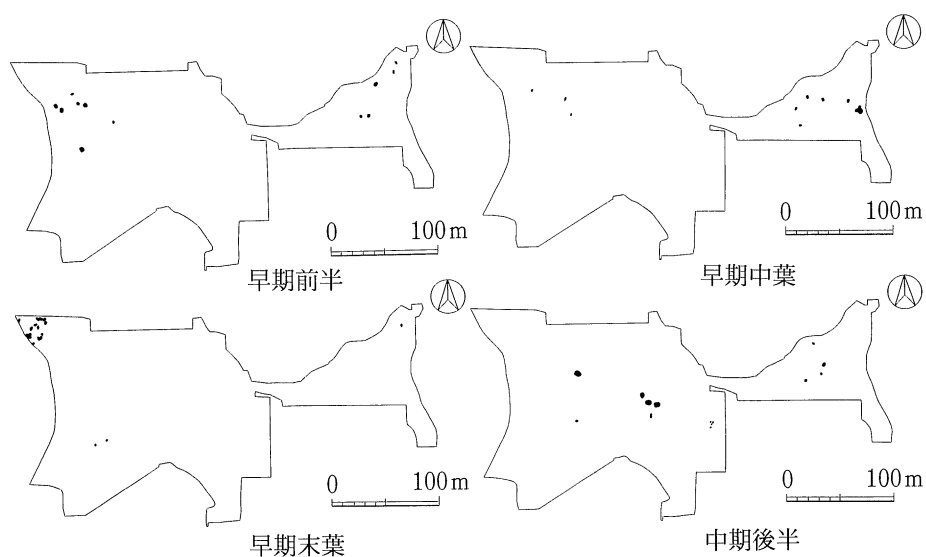
() は推定

番号	名称(群)	焼土(箇所)	推定基数	出土遺物の型式等	番号	名称(群)	焼土(箇所)	推定基数	出土遺物の型式等
1	A 4-1	7	4以上	野島式	26	C 1-10	1	1	茅山下層式
2	A 4-2	3	2以上	茅山上層式	27	C 1-11	2	2	
3	A 4-3	1	1	〃	28	C 1-12	1	1	
4	A 4-4	1	1	茅山式	29	C 1-13	2	2以上	
5	A 4-5	1	1		30	A 1-1	3	3	条痕文系
6	B 1-1	1	1		31	A 1-2	4	3以上	茅山上層
7	B 1-2	1	1		32	A 1-3	1	1	〃
8	B 1-3	2	2		33	A 1-4	1	1	野島式
9	B 1-4	1	1		34	A 1-5	3	3	
10	B 1-5	1	1		35	A 1-6	1	1	
11	B 1-6	1	1		36	A 1-7	1	2以上	
12	B 1-7	1	1		37	A 1-8	2	2	
13	B 1-8	1	1		38	A 1-9	1	1	
14	B 1-9	3	(3)	茅山式	39	A 1-10	1	2以上	
15	B 1-10	1	1	条痕文系	40	A 1-11	2	2	
16	B 1-11	1	1		41	A 1-12	3	2以上	
17	C 1-1	2	(2)		42	A 1-13	4	4	
18	C 1-2	1	1		43	A 1-14	1	1	
19	C 1-3	1	1		44	A 1-15	1	1	
20	C 1-4	1	1	茅山下層式	45	A 1-16	1	1	
21	C 1-5	2	2以上		46	A 1-17	1	1	
22	C 1-6	11	(9以上)	茅山下層式	47	A 1-18	6	(6)	
23	C 1-7	1	(1以上)		48	A 1-19	1	1	
24	C 1-8	1	(2以上)		49	A 1-20	2	2	
25	C 1-9	1	(1)		50	A 1-21	1	1	

第17表 荻原野遺跡検出陥穴表

() は推定

番号	名称	分類	出土遺物等	番号	名称	分類	出土遺物等	番号	名称	分類	出土遺物等
1	A 4-5	Ab	(茅山上層式)	12	B 3-4	Db 1		23	C 1-8	Db 1	
2	A 4-6	Ac		13	B 3-5	Db 1		24	C 1-9	Db 3	
3	A 4-7	Db 1		14	C 2-1	Db 1		25	C 1-10	Da 1	
4	A 4-8	Ac		15	C 2-2	Ac		26	C 1-11	Da 1	
5	A 4-13	Db 1		16	C 1-1	Db 1		27	C 1-12	Da 1	
6	B 1-2	B		17	C 1-2	Aa		28	A 1-7	Db 3	(加曾利E式)
7	B 1-5	B	(諸磯a式)	18	C 1-3	Db 1		29	A 1-13	Db 3	条痕文系
8	B 1-9	B		19	C 1-4	Db 3		30	A 1-15	Da 1	稲荷台式
9	B 1-10	B		20	C 1-5	Da 1		31	A 1-19	Ac	
10	B 1-11	B		21	C 1-6	Da 3		32	A 1-25	Aa	(三戸式)
11	B 1-12	Bb	稲荷台式	22	C 1-7	Da 1		33	A 1-43	Db 3	稲荷台式



第228図 A 1区時期別(4時期)遺構分布状況図

と北東隅及びA 4 区の北側、B 区、C 区南西隅に集中する。これらの地域は各々の小谷を望む台地縁辺部にあたる。また今回の調査区域外へ更に炉穴群が延びてゆく可能性が大である。たとえばA 1 区北西側からA 4 区北側付近の小谷最奥の縁辺部、C 1 区南西側一帯の小谷縁辺部である。炉穴は単独の例が28基有り全体の半分以上を占め、複数が重複していわゆるアメーバ状を呈する例は少なくA 4 - 1 号が焼土7ヶ所、C 1 - 6 号が11ヶ所、A 1 - 18号が6ヶ所程度である。土器型式は野島と茅山下層、上層の範疇と思われ特に茅山式が多数とみられる。周辺でのこの時期の遺構は堅穴住居跡が南西約800mの外迎山遺跡で丸みを帯びた台形状の例1軒（茅山式^(註12)）、西約3kmの片又木遺跡から楕円形とみられる例1軒（子母口式）^(註13)、上原台遺跡から長円形1軒（茅山式）^(註14)、対岸の国分寺台遺跡群中の諏訪台遺跡から長台形8軒^(註15)などで比較的5m以上の大型の堅穴が多い。炉穴群は市内でも数多くの遺跡で検出されており今後集成する必要を感じているが主な遺跡としては西約1.2kmに野島式期の炉穴群46群が検出された今富大道遺跡^(註16)、諏訪台遺跡では129地点（条痕文系）^(註17)、片又木遺跡では27群（子母口式）^(註18)、上原台遺跡では茅山式を中心として36群などが検出されている^(註19)。片又木遺跡の炉穴群は17基が住居跡を円形に囲む位置に構築され住居跡の付属施設であった可能性が考えられるという^(註20)。南関東では早期終末期は堅穴住居跡が前後の時期と比べて減少する。それに対して炉穴群が多数存在し対照的な様相を呈している^(註21)。当遺跡でも炉穴群を含め全域を調査していないが予想される同時期の堅穴は1～2軒であろう。早期末葉の土器は他に打越式、下吉井式などがみられる。

前期前半の遺構は検出されず前期後半から再び遺構が現われる。早期に比べて少なく、堅穴住居跡は検出されていないがA 4 - 1 号遺物集中地点、A 4 - 3 号土坑（いずれも諸磯a式）、A 1 - 22号（興津式と浮島式）53号（諸磯b式）、80号（前期後半）などである。遺構の分布範囲はA 4 区とA 1 区の西側及び北東側の北側台地縁辺部である。前期前半から後半にかけて特に花積下層式から関山式期は縄文海進のピークであり、諸磯b式以降海退が進んでゆく^(註22)。周辺の遺跡では関山式期の集落が上原台遺跡より6軒^(註23)、諏訪台遺跡では関山式期の環状集落が検出されている^(註24)。この時期は、気候の温暖化によって各地に多数の定住集落が形成されるといわれるが、当遺跡の周辺では前期の遺構遺物が極端に少なく活動領域を他の地域にもっていった可能性がある^(註25)。

中期前半も遺構は検出されず後半になると堅穴住居等の小集落が形成される。^(註26) 堅穴住居跡はA 3 - 1 号（加曽利EⅡ式）、B 1 - 1 号（EⅣ式）、A 1 - 3 号（加曽利E式）、5号（EⅢ式）、14号（EⅣ式）、15号、16号（EⅢ式）である。土坑はA 1 - 7 号（中期後半）、33号、35号（加曽利E式）、45号、50号（中期後半）、85号（加曽利E式）、またA 1 - 1 号埋甕遺構が加曽利E式の範疇とみられ、以上の遺構の分布範囲はA 3 区南側縁辺部、B 1 区南側縁辺部付近、A 1 区は中央部から西側にかけてと東側中央部でいずれも台地中央付近である。中期中葉以降の大規模集落はまた大貝塚の形成が開始される時期でもある。中期を含む市内の主な貝塚などのうち調査された例は草刈貝塚^(註27)（中期～後期、馬蹄形）、上小貝塚遺跡^(註28)（中期～後期、地点）、山倉貝塚^(註29)（中期～後期、馬蹄形）、烏堀込貝塚^(註30)（中期、地点）、小谷吹上貝塚^(註31)（中期、地点）であり、また武士遺跡では中期後半の住居跡約170軒を検出し群を抜く規模を誇っている。^(註32) さらに地形測量や地下レーダー探査を行った分区貝塚^(註33)（中期～後期、馬蹄形）や堂谷貝塚（中期）^(註34)、西約2kmの諸久蔵貝塚（中期～後期、馬蹄形）や南約2.5kmの養老川流域最奥部に位置する上高根貝塚（中期～後期、地点）など

も^(註36)大規模な貝塚である。これらに対し当遺跡は貧弱と言わざるを得ないが、荻原野遺跡を含めた周辺の空間的利用形態や集団間の交流などについては近くの諸久蔵貝塚や上高根貝塚を無しには語るができない。また14号からは中部北方系の曽利系の深鉢が出土している。

後期にいたるとC 1－1号（堀ノ内Ⅰ式）と遺物集中地点のA 1－1～12号（堀ノ内、加曽利B式）が相当する。また、この時期以降の縄文時代の遺物はみられない。

陥穴は第17表のとおり33基が認められている。陥穴の分類は上原台遺跡でも行ったが下鈴野遺跡での大村分類^(註36)を基本に本書ではさらに新しい形態を追加し分類した。

- A a 類 平面形体がほぼ長方形を呈する例。
- A b 類 底面に柱穴状のピットをもつ例（2本以上）。
- A c 類 “ （1本）。今回追加
- B(a)類 平面形態が楕円形を呈する例。
- B b 類 底面に柱穴状のピットをもつ例（1本）。今回追加
- C 類 平面形態がほぼ円形を呈する例。
- D a₁類 底面が幅狭の溝状を呈し、深さがほぼ一定の例。
- D a₂類 “ 、中央部が深くなる例。
- D a₃類 “ 、両端が袋状になる例。今回追加
- D b₁類 底面がやや幅広の溝状を呈し、深さがほぼ一定の例。
- D b₂類 “ 、中央部が深くなる例。
- D b₃類 “ 、両端が袋状になる例。
- D c₁類 底面が幅狭の溝状を呈し屈曲する例。
- D e₁類 底面がやや幅広の溝状を呈し屈曲する例。

検出した地区はA 4区5基、B 1区6基、B 3区2基、C 2区2基、C 1区12基、A 1区6基でありC 1区がやや多い。また地区によって特徴がありB 1区ではB類、C 1区はD類がほとんどで、陥穴の形体の違いは狩猟する獲物の違いなのか、仕掛けた人間の違いなのか、いずれにしても狩猟方法に差があるのかもしれない。

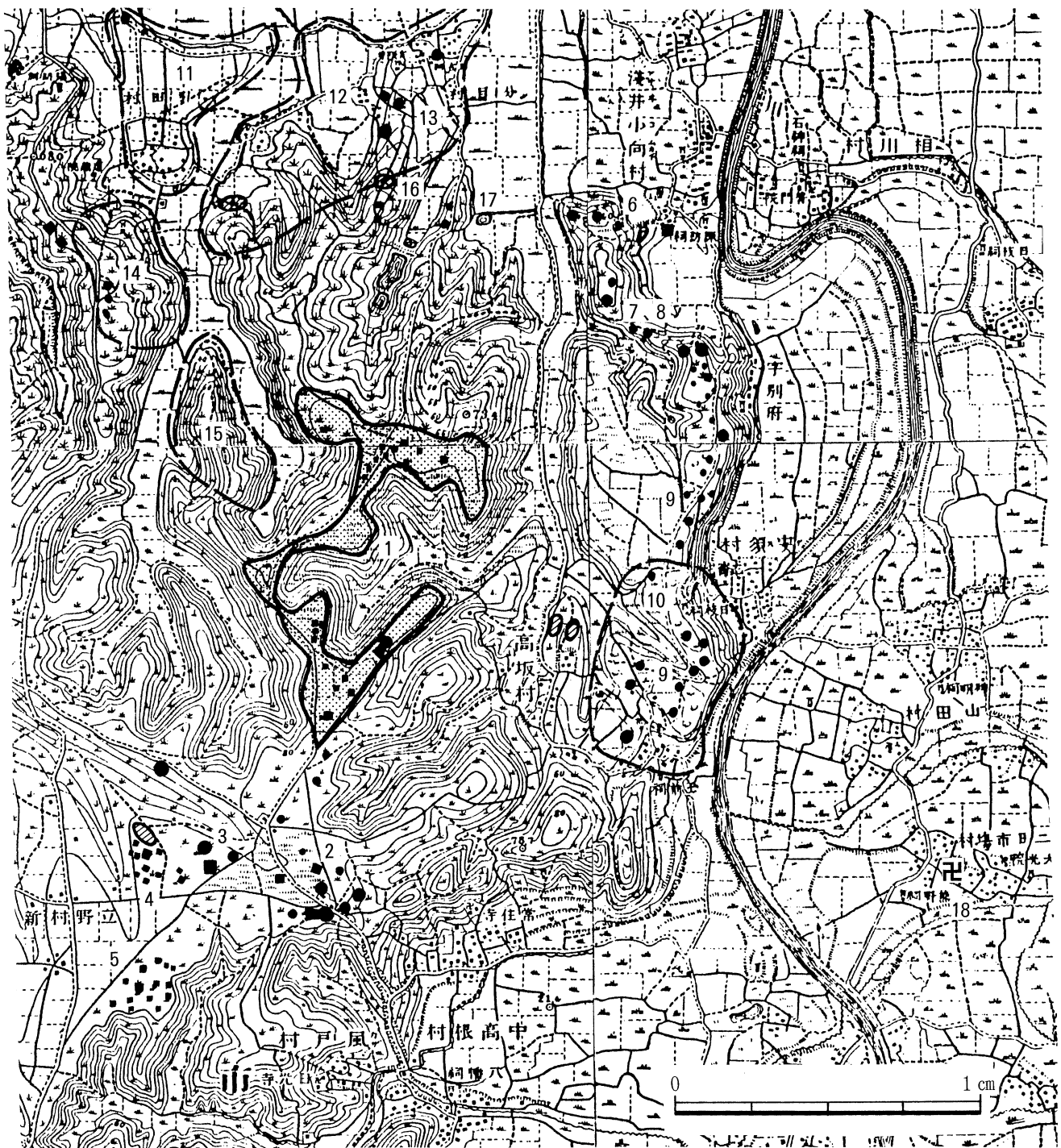
焼礫、自然石、黒曜石片（A 1－4区とB 1区）については第227図で分布状況を示した。227ページで説明したとおり集中する地域があり、3種とも同様に当然のことながら縄文時代の遺構の多い地域に濃密な分布がみられる。

石器は比較的量が少なく、旧石器を含め134点が出土した（第13～15表）。旧石器41点（石刃、スクレーパーを含む）、石鏃22点、スクレーパー3点、石斧38点、敲石8点、凹石7点、磨石3点、石皿5点、浮子1点、不明石器1点である。石鏃、石斧、敲石、凹石は上原台遺跡での忍澤氏の以下の分類を基に区分した。^(註37) 第13～15表のタイプはこれに基づく。

石鏃

- a 平基無茎鏃
- b 凹基無茎鏃

石斧（石材の自然形態を利用し、自然面を多く残した、いわゆる礫斧と呼ばれる石器が多く、次に分類した。）



第229図 周辺の主な古墳群と城郭跡 明治15～16年参謀本部陸軍部測量局作成を改変

- | | | |
|--------------------|-------------|-------------|
| 1. 荻原野遺跡 | 7. 安須1号墳 | 13. 分目古墳群 |
| 2. 中高根古墳群（金比羅台古墳群） | 8. 安須2号墳 | 14. 引田城郭跡 |
| 3. 太田法師古墳群 | 9. 安須古墳群 | 15. 万台城郭跡 |
| 4. 山見塚古墳群 | 10. 高坂城郭跡 | 16. 分目堂谷塚群 |
| 5. 外迎山遺跡 | 11. 神代城郭跡 | 17. 新生鰻谷古墳群 |
| 6. 釜神遺跡 | 12. 分目要害城郭跡 | 18. 二日市場廃寺跡 |

- a 長径に対し比較的幅が広く側縁にまで調整痕（剝離）がおよぶ例
- b 長径に対し幅がaより狭く側縁にまで調整痕がおよばない例（刃部のみ加工）
- c 刃部や側縁などを局部的に研磨した例

敲石（自然礫の一部に敲打痕が認められる例）

- a 円礫の周縁部に敲打痕の認められる例
- b 縦長の礫の一端に敲打痕の認められるスタンプ状の例

凹石（自然礫の中央部付近が敲打や摩耗の結果凹み状になる例をまとめた）

- a 片面に敲打による凹みの付く例
- b 両面に “ ”
- c 両面もしくは片面に摩耗による凹みの付く例

旧石器を除く石器類は93点出土し、種類は10種で、時期は早期前半から後期まで多期にわたるが、中心は分布状況と同様に遺構の多い時期に対応すると考えている。敲石・凹石・磨石・石皿などの石器は全体の約25%、石鏃・スクレーパーなどの剥片石器が約27%である。特に石斧が全体の約41%と多いことも特徴である。

簡単に縄文時代についてふれたが周辺には早創期の細隆起線文土器を出土する南原遺跡^{（註38）}や後期とみられる山見塚貝塚（遺跡）^{（註39）}、瓜ヶ岱貝塚や地点貝塚の分目貝塚、堀込貝塚など^{（註40）}が数キロメートルの範囲にあり荻原野遺跡とは少なからず関連が想定される。周辺の遺跡の調査が今後進めばよりいっそう当遺跡の位置づけが判明すると思われる。

荻原野遺跡は縄文時代晩期から古墳時代中期までは遺構が検出されていない。次に現われるのがC3-1号古墳（前方後円墳、長軸30.88m）である。当古墳は残存状況が悪く既にソフトロー面まで削平されていた。周囲に小谷が入るやせ尾根状の地形に立地しているとはいえ、イモ穴の多さなどかなり後世に削平されたことが伺える。したがって墳丘は残存せず主体部も出土遺物もまったく検出できなかった。古墳の時期については周溝の形態から考えざるを得ないがまったく不確定である。形体は前方部がやや幅広で短かく後円部はやや偏平な円形で各々の長軸が内側で前方部約9mに対して後円部が約8.5mと近い。また前方端部の幅は約18.5mで後円部長径は約19.30mとあまり差がない。墳形だけから時期的な位置づけをとらえることはやや危険であるが、一応6世紀後半頃と考えておきたい。当古墳の周辺には中高根古墳群^{（註41）}（全長約60mの前方後円墳1基を含む13基が確認されている）、太田法師古墳群4基（円墳3基、方墳1基）、山見塚古墳群（円墳1基、方墳9基）が存在する^{（註42）}。いずれもほとんどが未調査で時期の判断ができないが当古墳は位置的にはこれらの古墳群中（特に中高根古墳群）に含まれ最も北側に所在する古墳と思われる。

C1区に古墳時代後期の竪穴住居跡が10軒有り、1軒（C1-9号）を中心に他の9軒が径70～80mの円を描くように配置されている（第231図）。また周囲には2重の溝が並行して存在しこれら竪穴住居群を囲むかの様である。（C1-9号より約50m離れている。）溝間にはその溝を掘りあげた土による低い土塁が想定されている^{（註43）}。今回の調査はこの集落からみると東側半分ほどの区域のみと考えられ西側半分が未掘となる。また集落を囲る並行する溝は北西側の一部だけの検出とみられる。この想定からすると竪穴住居は倍の数が所在する可能性がある。また並行する溝は北側では小谷縁辺部まで延びていると思われる。東側では竪穴群から約70m先でも溝は検出されていない。また検出し

た竪穴住居跡はかなり保存状態が悪く出土遺物も少ないが判断される時期はC 1－2号、C 1－7号住居跡が7世紀中頃、C 1－4号溝が7世紀後半頃と考えられ、他の遺構も竪穴住居跡間の距離などからみて同様か前後する近い時期と考えられる。

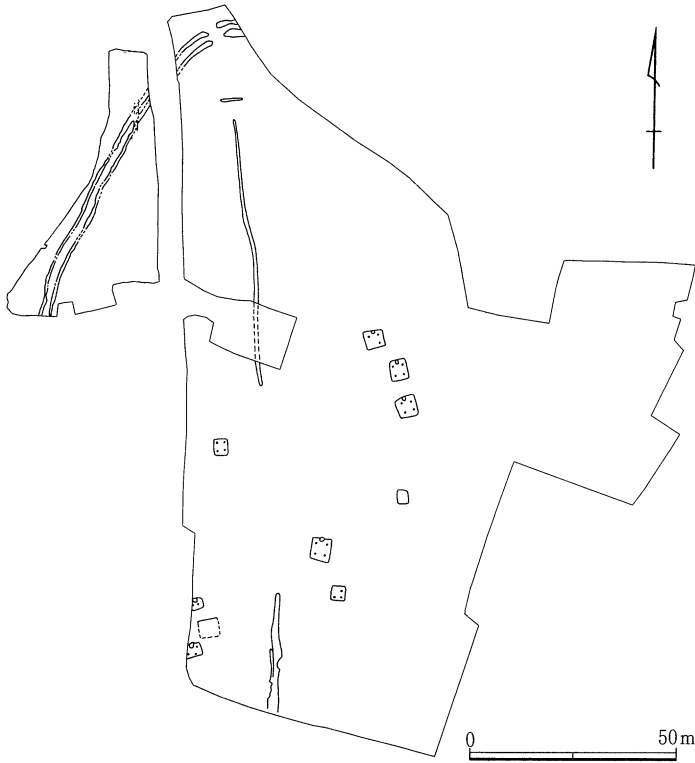
この集落が何を意味するのか。大村直氏は^(註44)「古墳時代では静岡県浜松市大平遺跡など数軒の住居群が溝や柵によって区画される例があり、そこには家地の萌芽をみることができる」として、関東地方でも古墳時代後期（6世紀前後）以降、集落を構成する単位集団に少ないながらも屋敷地（家地）のはじまりを認めている。当遺跡の集落は周囲の溝の形態などから判断しても同様の例と考えてさしつかえないと思っている。また、C 1－8号からは羽口が出土し、周辺や覆土から鉄滓が多く出土しており、鍛冶工房の可能性はある。

続く古墳時代末期から奈良平安時代ではいわゆる方形周溝状遺構を29基検出している（第18表）。本書では一括して「方形区画墓」名を採用した。長軸が10m以上の例は14例で（A 1－5号は推定）、最も大きい例はA 1－12号、次がC 1－5号、C 1－4号とつづく。主体部を検出した例はB 3－1号が周溝内の土坑、B 3－3号が長方形土坑2基（切り合う）、A 1－3号（木棺直葬）、A 1－4号（長方形土坑と木棺直葬）、A 1－8号（木棺直葬）、A 1－10号（方形土坑）A 1－12号（木棺直葬）、A 1－13号（木棺直葬）である。A 1－1号は周溝に炭化物が検出された。また周溝覆土に焼土粒が含まれる例がA 1－6号である。房総検出の「方形周溝状遺構」は調査例が増加しその変遷が少しずつ判明してきている。その大きな流れは地下式横穴墓、地下式改葬墓、再葬用小墓墳^(註45)と言われているが、古墳との関連、火葬の普及との関連、中世墓との関連など様々な問題の中で名称の統一と各地の墳墓群の詳細で具体的な変遷が成し得る段階に近づいていると思われる^(註46)。古墳時代終末期の古墳、横穴墓、地下式横穴墓、木棺直葬主体部、土壙墓、有天井土壙墓、火葬墓（石櫃、木櫃、蔵骨器）、地下式土壙など様々な墳墓形体について各遺跡別の変遷を考えることがそれらの問題の解決の糸口にもなろう。荻原野遺跡でも出土遺物が少なく検出状況も不良な例がある中でその変遷を考えてみたい。古墳からの影響として捉えれば規模の大きい例や木棺直葬主体部は古い段階といえる（古墳として捉える考え方もある）。また仰臥伸展葬が可能な土壙墓も同様である。次が火葬の普及から火葬墓、再葬墓となろう。その様な観点からすると最も古いと考えられる例はA地区ではA 1－12号であろうか。規模も大きく台地の中央付近に位置している。出土遺物からは8世紀第1～第2四半世紀が考えられる。A 1－4号も主体部の内容や規模、方向性から近い時期とみられる。次の時期が出土遺物からA 1－1号と考えられる。A 1－1号は周溝に炭化物が多く存在し火葬墓の存在した可能性がある。時期は8世紀第2四半世紀後半から中頃と考えられる。A 1－8号は8世紀第2四半世紀頃とみられ、A 1－12号に続く時期と考えている。A 1－13号も主体部が木棺直葬であり同じ時期か。それに続く例が方向性、規模、出土遺物からA 1－7号で8世紀中ば頃である。同様の時期がA 1－5号、次が規模からするとA 1－15号となる。A 4－1号は方向性からみるとA 1－12号グループとみられ出土遺物から8世紀の中頃と考えている。A 1－3号は規模は小型だが木棺直葬の主体部をもち出土遺物は須恵器長頸壺の口縁部片のみであるがこれも8世紀第2四半世紀頃とみる。それに続くのがA 1－2号の可能性はある。A 1－6号は10m以上の規模をもつが主体部は検出されず周溝覆土に焼土粒がみられることから火葬墓系で8世紀半ば前後と考えられる。その次がA 1－9号（鉄釘出土）の方向性が似る。この4基のグループはA 1－12号のグループとA 1－8号のグループとは方向

性からみると違うグループの可能性がある。これ以後は主体部が不明で規模が10m以下の例で火葬墓系と推測される。規模、方向性からA1-12号グループがA1-10号、16号、17号、11号の順で、A1-14号はA1-8号グループとみられる。配置から考えるとA1-12号グループとA1-3号グループに比べるとA1-8号グループは分散しており、A1-8号、7号とA1-13号、15号及びA1-14号の3地域に分かれる。またA3-1号はA1区とA4区から少し離れていて単独とみられるが規模などからみてA1-8号グループでも最も新しい時期ではないかと推測する。A区の変遷予想を図に表わすと次のようになる（第230図）。

8世紀第1四半世紀	A1-12グループ	A1-8号グループ	A1-3号グループ
	A1-12号（A1-4号）		
第2	A1-1号	A1-8号（A1-13号）	A1-3号
第3	A4-1号	A1-7号 A1-5号	（A1-6号）
		（A1-15号）	（A1-2号）
第4	A1-10号	（A1-14号）	
	（A1-16号）		（A1-9号）
9世紀第1	（A1-17号）	（A3-1号）	
	（A1-11号）		

第230図 A区検出の方形区画墓変遷予想図



第231図 C1区古墳時代後期の遺構配置図

第18表 萩原野遺跡検出の方形区画墓一覧表

単位：m，（ ）は推定

番号	名 称	形 体	規模、周溝外上端	主軸方向	主 体 部 など	周溝、出土遺物など	時 期
1	A 3 - 1	方形	7.98×7.66	N-10° - E			
2	A 4 - 1	〃	12.70×12.30	N-22° - W		土師器杯	8 C 中葉
3	B 3 - 1	台形	7.33×6.14	N-45° - E	周溝上に土坑	須恵器長頸壺の口縁部片、体部片、底部片（灰釉か）	9 C 第 1
4	B 3 - 2	方形	9.40×9.00	N-26° - W			
5	B 3 - 3	〃	12.42×12.26	N-11° - W	切り合う方形土坑 2 基	須恵器壺の底部片	8 C 第 4
6	B 3 - 4	〃	7.62×7.43	N-76° - E		須恵器長頸壺の体下部片	8 C 末～9 C 初
7	C 1 - 1	〃	7.64×（7.58）	N-25° - W			
8	C 1 - 2	（方形）	6.56×－	N-3° - E		西側は未掘	
9	C 1 - 3	方形	（8.24）×7.84	N-39° - W		検出状況不良	
10	C 1 - 4	（方形）	（10.40）×－	N-17° - W		南東側半分未掘	
11	C 1 - 5	（〃）	15.22×－	ほぼ真北		南側 2/3 程度未掘、（須恵器長頸壺の口縁部片）	8 C 中葉
12	C 1 - 6	平行四辺形	9.62×9.42	N-20° - W			
13	A 1 - 1	長方形	13.08×11.80	N-21° - W		周溝に炭化物。土師器鉢、須恵器長頸壺	8 C 中葉
14	A 1 - 2	方形	8.58×7.98	N-12° - W			
15	A 1 - 3	〃	10.80×10.30	N-12° - W	木棺直葬	須恵器長頸壺の口縁部片	8 C 第 2
16	A 1 - 4	〃	14.90×14.50	N-30° - W	長方形土坑、木棺直葬		
17	A 1 - 5	（方形）	－	N-5° - E		須恵器短頸壺の把手部分	8 C 中葉
18	A 1 - 6	方形	10.90×10.80	N-23° - W		周溝覆土に少量の焼土粒	
19	A 1 - 7	〃	12.98×12.31	N-2° - W		須恵器広口長頸壺の底部片 2 点	8 C 中葉
20	A 1 - 8	〃	13.60×13.28	N-8° - W	木棺直葬	須恵器長頸壺片 3 点、二重周溝	8 C 第 1～第 2
21	A 1 - 9	（方形）	－	N-10° - W		鉄釘 1 点	
22	A 1 - 10	方形	8.28×8.28	N-17° - W	方形土坑（焼土有）	袋状鉄斧 1 点	8 C 末
23	A 1 - 11	〃	6.15×5.60	N-17° - W			
24	A 1 - 12	〃	17.40×16.60	N-19° - W	木棺直葬	土師器杯片、須恵器広口長頸壺底部片、鉄釘 2 本、石	8 C 第 1～第 2
25	A 1 - 13	〃	11.64×11.50	N-5° - E	〃		
26	A 1 - 14	長方形	8.72×6.57	N-10° - E			
27	A 1 - 15	台形	12.48×12.02	N-4° - E			
28	A 1 - 16	長方形	－×8.30	N-22° - W			
29	A 1 - 17	（〃）	－	N-23° - W			

次に B 3 区の 4 基では B 3 - 3 号が 10m 以上で最も大きく第 2 号主体部は土坑墓である。伴出する遺物が無いので明確ではないが 8 世紀前半と考えておく。追葬とみられる第 1 主体部は再葬の木櫃が有った可能性が考えられ、出土した須恵器壺底部片から 8 世紀後半以降とみている。次が B 3 - 2 号、B 3 - 4 号、B 3 - 1 号と続く。B 3 - 4 号は須恵器長頸壺片から 8 世紀末～9 世紀初頭、B 3 - 1 号は出土した須恵器や灰釉陶器から 9 世紀初め頃と考えられる。

C 区では出土遺物がほとんどなく、規模と方向性から択えると最も大きく須恵器長頸壺片出土の C 1 - 5 号を最古として、C 1 - 4 号、C 1 - 6 号、C 1 - 3 号、C 1 - 2 号と続く、方向性からは C 1 - 5 号と 2 号、C 1 - 4 号と 6 号と 1 号、C 1 - 3 号の 3 グループが想定され、また C 1 区では古墳時代後期の集落が廃絶後墓域として使用されたことになる。

以上のように各地区により変遷の仮説を立てたが今後は他遺跡を含めた詳細な分析がなされなければ確実に詳細な変遷は択えられない。

また出土した須恵器の産地については B 3 区出土の灰釉陶器は猿投産の可能性があると（第 55 図 1）。その他についてはほとんどが湖西産と考えている。（註 47）

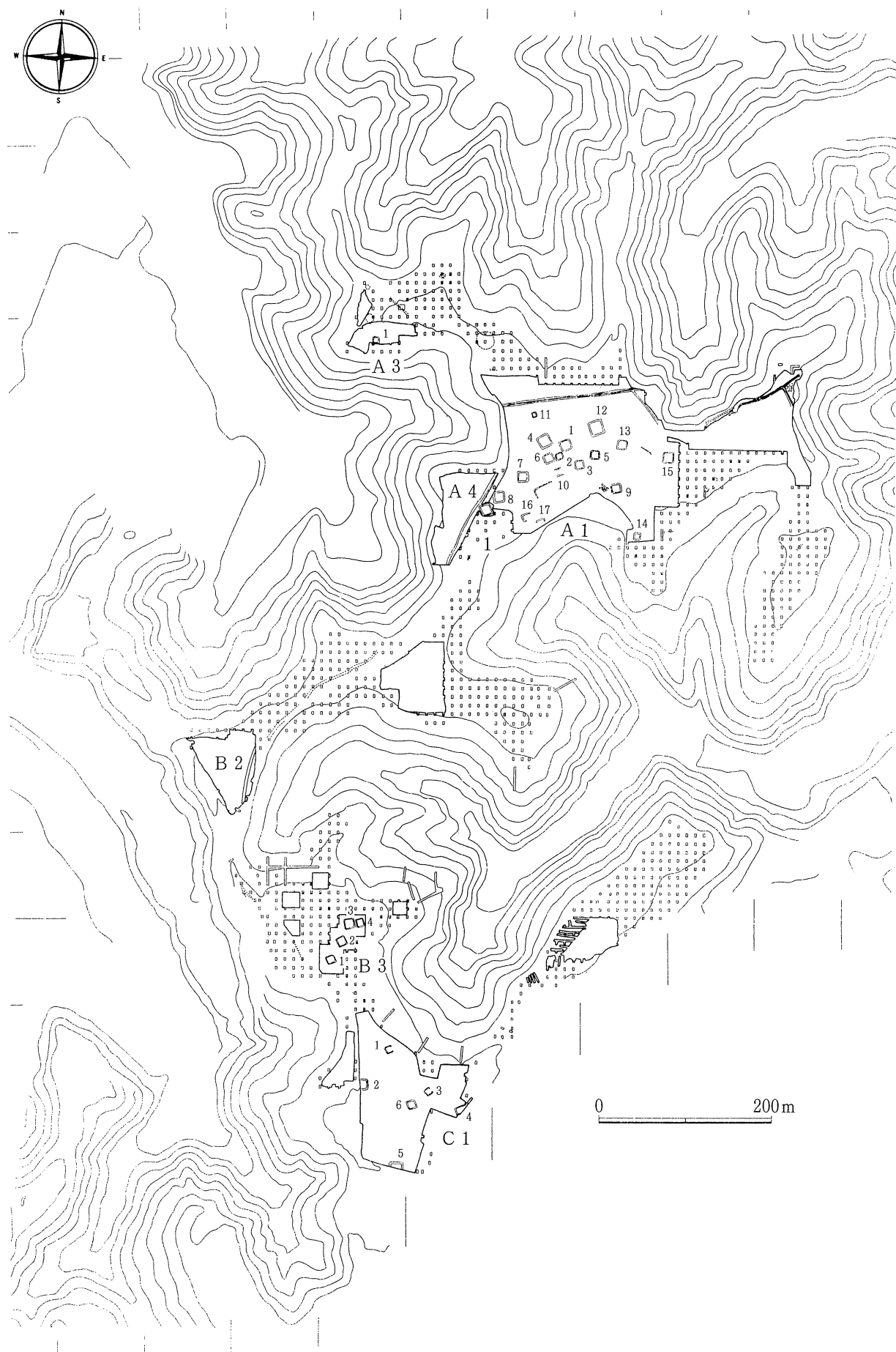
掘立柱建物跡はA 1区から3棟以上検出している。A 1-1号は総柱の建物で時期は出土遺物から8世紀第4四半世紀頃と考えている。A 1-2号は2×3間程度の側柱の建物が数棟考えられるが組み合わせが出来ない。時期は不明である。

溝状遺構はA 4-1号、A 1-1号～4号が古代と考えられ、出土遺物はA 1-1号から土師器杯片と須恵器長頸壺片がある。このうち土師器は8世紀前半で長頸壺は瓶形で時期は9世紀初頭頃と考えられる。また、B 2-1号道路状遺構も出土した土師器甕片より9世紀代の所産とみられる。

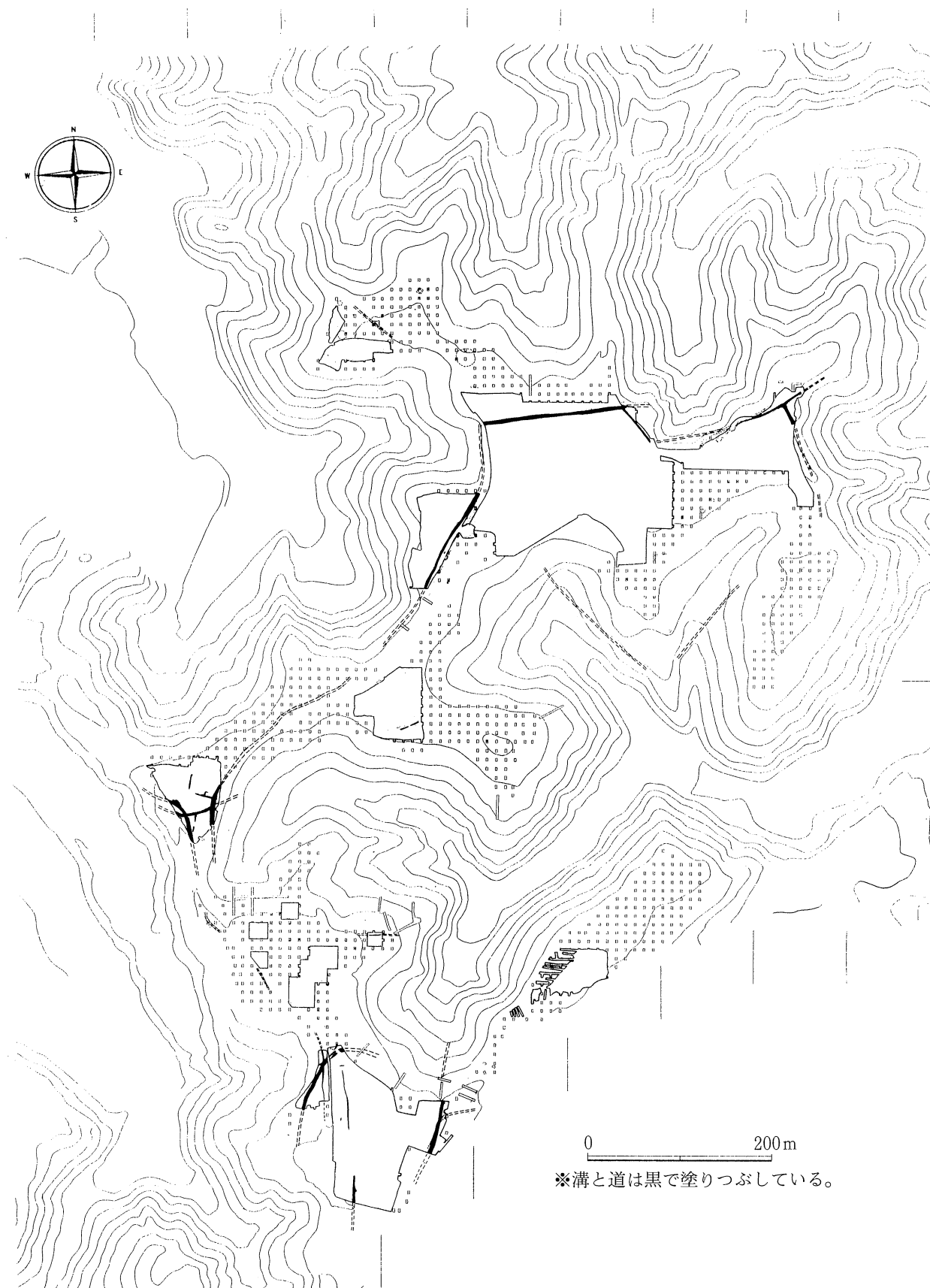
これらの掘立柱建物跡と溝状遺構及び道路状遺構はどのような性格であろうか。上原台遺跡や武士遺跡では「方形周溝状遺構」とともに瓦葺建物の存在が確認されている^(註48)。この建物は「仏教関係者の住まい」や「寺又は堂」として解釈されている。^(註49)墓域を管理又は墓域に対する仏教行事(儀式)を行なう人に関連する建物になるであろう^(註50)。当遺跡では瓦葺建物は無いが掘立柱の建物がそのような性格を示す可能性がある。また、未調査地区又は少し離れた場所に瓦葺建物があってその役割を果たしていたことも考えられる。溝についてはA 4とA 1区だけを囲んでいると想定出来、他の地区ではトレンチにも検出されていない。B 2-1号道路状遺構は北側延長方向がA 4-1号溝状遺構と接続するとみられA区の溝覆土にも道路として一時的に使用された硬質面がある。出土遺物からは溝状遺構が8世紀前半には存在し、9世紀代には一部が埋まりその上面を道路として使用されていたと想定できる。溝の築造時期と方形区画墓の築造開始時期が近いと同時となりA 4区とA 1区に限り溝によって区画されていたことになる。しかし外迎山遺跡や上原台遺跡、武士遺跡ではそのような溝はなく、また区画されているA 1区の東側には存在しない。さらに墓域をこれだけの溝で区画する必要があるか。現時点では結論が出せない。(近藤敏氏は古代牧の可能性を考えている。P 5の文献1)

中世の遺構は9条の溝状遺構と塚状遺構1基及び凹(窪)地状遺構2基である。それらの機能は不明であるが周辺一帯は中世と思われる切土部分などが散在するといわれているがいわゆる狭義の域郭とは性格が違ふとみられる^(註51)。しかし周辺には多くの中世城郭が近接するため少なくとも行動空間としての位置づけは重要であったと思われる。また付近は「鎌倉街道」が所在するとみられるが^(註53)C 1-9号が幅約2.8mで南北に走る。北側延長部は小谷に降りてゆく方向であり、土層観察から3時期の掘り返しと硬質面がみられる。出土遺物は特にない。今回の調査からは「鎌倉街道」という確証は得られていないが土層観察から中世の道路として一時期使用されていたことは間違いないと思われる。

近世以降では様々な溝(ほとんどが道路と耕作用の区画配水溝、第19表参照)のほかに出羽三山塚がある。塚の名称は本書ではA 1-1号塚状遺構としたが遺跡分布図では「一本松塚」と呼ばれている。もとより出羽三山信仰に基づき築造された塚^(註54)であるが江戸初期以降^(註55)市内にも1地区1基以上の三山塚が築造され今日も信仰が受け継がれている。A 1-1号塚状遺構(一本松塚)は糸久村の塚である。長軸24m、高さ3.6mを誇り市内でも規模が大きい部類に入るであろう。出土遺物は盛土内から12枚の銭とカワラケ1枚、盛土直下には土坑が掘られカワラケ50枚とその上に常滑壺が置かれ内部に古寛永などが6枚ずつ紙ひもや草ひもで綴じられ751枚が納められていた。^(註56)これは塚を築造する際に行われた供養祭の痕跡とみてよかろう。当時三山塚以外でも「供養塚」には寛永通寶などが埋納されている。^(註57)どのような祭祀が行なわれたかは本書ではふれないが古寛永のみの出土は常滑壺及びカワラケの年代から考えてみても17世紀中頃の築造として差しつかえないであろう。



第232図 荻原野遺跡奈良、平安時代の遺構



第233図 荻原野遺跡の溝状遺構（道路を含む）

第19表 荻原野遺跡検出溝状遺構一覧表

単位：m （ ）は推定

名 称	幅	深さ (最大)	備 考	名 称	幅	深 さ (最大)	備 考
A 4 - 1	1.70～3.80	1.10	古代。(区画溝か) 129m検出。A 1 - 1 号と接続する と思われる。	A 1 - 1	2.70～3.80	1.10	古代。区画溝と思われる。140m検 出。 A 4 - 1 号と接続するとみられる。
B 2 - 1	0.90～2.20		古代。21m検出、硬化面（3面）有 り（道路跡）。 土師器甕片出土。	A 1 - 2	1.40～2.20	0.70	古代。A 1 - 1 と接続。
B 2 - 2	0.90～4.10	0.26	中世か。	A 1 - 3	3.40(最大)	0.62	古代か。区画溝と思われる。長さ85 m
B 2 - 3	1.10～3.00	0.12	B 2 - 2 を切っている。近世以降と 思われる。 硬質面有り。	A 4 - 4	2.60 (〃)	0.78	〃 。A 1 - 3 号と接続。長さ23 m
B 3 - 1	0.50～1.20	0.40	近世以降、区画溝と思われる。				
C 2 - 1	0.25～0.75	0.26	古墳時代後期 2本が1.2～1.5mの間隔で並行に走 る。 C 1 - 1 ～ 4 号溝に接続する。	A 1 - 5	1.70(最大)	0.65	A 1 区の南西側、南側小谷縁辺部に 立地する。 「」型を呈する。中世の区画溝か。
C 2 - 2				A 1 - 6	0.60(最大)	0.58	A 1 区の中央付近。A 1 - 7 と近接。 長さ16m
C 2 - 3	0.20～0.60	0.20	硬質面あり、道路とみられる。 C 2 - 1、2、4 を切る。	A 1 - 7	0.65 (〃)	0.40	A 1 - 6 号の南6m。長円形の土坑 状。長さ3.6m
C 2 - 4	0.30～1.60	0.22	谷から上ってくる溝でC 2 - 1、2 を切る。	A 1 - 8	0.8(最大)	0.38	2.0～2.3mの間隔で南東～北西方向 に存在する道路跡か。
C 1 - 1	0.45～1.20	0.22	古墳時代後期 1.0～1.8mの間隔で並行する。	A 1 - 9			
C 1 - 2							
C 1 - 3							
C 1 - 4			土師器甕口縁部出土。	A 1 - 10	—	0.25	A 1 区の北東側でA 1 - 3 号と切り 合う。 複雑な形体。区画溝か。約30m確認。
C 1 - 5	0.72(最大)	0.28	土坑状で長円形。C 1 - 6 号に対 して直角方向である。 長さ4.85m	A 1 - 11	0.28(最大)	0.42	A 1 区の北東端、斜面縁辺部を南北 に走る。 A 1 - 3 号を切る。30m確認。道路 跡か
C 1 - 6	0.58 (〃)	0.13	硬質面がある。道路として使用。				
C 1 - 7	2.58 (〃)	0.30	道路として使用。				
C 1 - 8	3.10 (〃)	0.60	道路跡。C 1 - 9 を切る。				
C 1 - 9	2.80 (〃)	0.90	中世の道路跡か。最低3回の硬質面 有り。				

註釈解説

註1 面積は現状保存地区と開発予定外地区も含む。なお今回の調査面積の詳細は例言を参照されたい。

註2 市内の土層については近藤敏「市原市の先土器時代―地形・地質を中心として―」1987、市原市文化財センター研究紀要ⅠP1～25を参照した。

註3 半田堅三「市原市中高根南山遺跡」1995、(財)市原市文化財センター P7

註4 近藤敏「1. 先土器時代の遺構と遺物」『千草山遺跡・東千草山遺跡』1989、(財)市原市文化財センター P15・16

註5 加納実、田村隆「市原市武士遺跡1第1分冊」1996、(財)千葉県文化財センター

註6 この時期の堅穴は「隅円方形のプランを有し、明瞭な主柱穴配置をもたず、中央部には浅い方形の掘り込みをもつ」といわれる。

山本暉久「堅穴住居の形態」1993、委刊考古学第44号P18

註7 集落の占地条件を3タイプに分けられている。

①丘陵頂部直下に比較的等間隔で住居跡が散在する遺跡。②丘陵中腹の急峻な地区を故意に選択し、比較的狭少な集落のまとまりを示す遺跡。③広い台地の縁辺部で平坦な地区に住居跡が散在し、その周辺に広域な遺物の分布が認められる遺跡。当遺跡はこのうちの③にあてはまるとみられる。

註8 原田昌幸「撚糸文期の堅穴住居跡―資料の集成とその解題的研究―」1983、土曜考古第7号P84～87。註6と同じP18

註9 田中清美「2. 縄文時代の遺構と遺物」『千草山遺跡・東千草山遺跡』1989、(財)市原市文化財センター P17、18

註10 “ 「E-1号住居跡」『奉免上原台遺跡』1992、(財)市原市文化財センター P172、173

註11 註6と同じ。P18

註12 木對和紀「2遺構と遺物1住居跡」『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』1987、(財)市原市文化財センター P14、15、17

註13 寺島博「V検出された遺構と遺物」『片又木遺跡』1984、(財)市原市文化財センター P14、15

註14 田中清美「(2)堅穴住居跡」『奉免上原台遺跡』1992、(財)市原市文化財センター P113、118、119

註15 浅利幸一「5諏訪台古墳群」『市原市文化財センター年報昭和61年度』1988、P17～19

註16 米田耕之助「今富大道遺跡」1988、(財)市原市文化財センター

註17 註15と同じ

註18 註13と同じ P16～P41

註19 田中清美「奉免上原台遺跡」1992、(財)市原市文化財センター

註20 寺島博「IV小結」『片又木遺跡』1984、(財)市原市文化財センター P143

註21 註6と同じ P18

註22 註6と同じ P18

戸沢充則「3貝塚文化の形成と展開」『新版古代の日本⑧関東』1992 P53

註23 註19と同じ

註24 註15と同じ

註25 周辺の唐沢遺跡、山見塚遺跡、外迎山遺跡などでも少ない傾向にある。註12の文献

註26 中期中葉以降各地に大規模な集落が形成され始めるといわれる。

註6と同じP18

註27 加曾利E1～E3式の堅穴住居跡72軒

高橋康男「草刈遺跡」1985、(財)市原市文化財センター

高田博他「千原台ニュータウンⅢ草刈遺跡(B区)」1986、(財)千葉県文化財センター

註28 忍澤成視「市原市能満上小貝塚」1995、(財)市原市文化財センター

中期中葉の住居跡は3軒である。

註29 滝口宏他「市原市山倉貝塚調査報告(住居址・遺構編)」1968、千葉県教育委員会内山倉貝塚調査団

註30 高橋康男「烏掘込貝塚」『市原市文化財センター年報昭和60年度』1986、P22～25 加曾利E2～E3式の堅穴住居跡10軒、小堅穴2基を検出している。

註31 加曾利E式期住居跡11軒、小堅穴約150基など

田中清美「小田部小谷吹上遺跡調査概報」1978、小田部小谷吹上遺跡発掘調査団

註32 加納実「2調査結果の概要」『市原市武士遺跡1、第1分冊』1996、(財)千葉文化財センター P4

註33 忍澤成視「12. 能満分区貝塚」『市原市文化財センター年報平成元年度』1994 P37～39

註34 “ 「11. 山倉天王・堂谷貝塚」 “ P34～36

註35 市内の貝塚については次に集成されている。

忍澤成視「市原市内貝塚一覧」『市原市能満上小貝塚』1995、(財)市原市文化財センター P2～4

註36 大村直「(3)土壇」『下鈴野遺跡』1987、(財)市原市文化財センター P28～31

註37 忍澤成視「7. 上原台遺跡の石器・石製品」『奉免上原台遺跡』1992、(財)市原市文化財センター P258～260

- 242 —